現代日本文學全集
LIV

巖谷小波集

江見水蔭集

石橋思案集

菊池幽芳集

杉浦非水裝幀

改造社版

巖谷（右上）江見（右下）菊池（左下）三家の近影と石橋思案氏の遺影・筆蹟

# 「小波・水蔭・思案・幽芳集」目次

## 巖谷小波集



## 江見水蔭集



## 石橋思案集

## 菊池幽芳集

# 巖谷小波集

# 妹脊貝

## 讀者心得

第一條　此の小説は涙を以て主眼とす。不用涙あるものは泣いてみる可き事。

第二條　時代と場所、定めても定めんでも、時に變つたことはなし、愚頭々々云ふ可らざる事。

第三條　文體は例の言文一致で、少し何かがかぶれた所あれども、此作者ならでは斯うは書けず、得り顔に賞すべき事。

第四條　此の小説には、句讀無しで讀めるものに非ず。乃ち、。。三通りの句點を設けたり。一生懸命之に便る可き事。

第五條　此の小説には ―― ・・・・ 多く、＊＊＊＊や（　）も用ひて、大いに妙味を助けたる處あり。根岸のお爺さんの云ふことなんぞ、ゆめ〳〵ほんとにすべからざる事。

第六條　初紅葉。ア、夢！、今又妹脊貝の春の巻。いつも子供ばかり、チト鼻に付く樣なれども、此は作者が子供だからと、大眼に見て置く可き事。

右六ケ條腹を立てずに心得べき事。

月　日　　　　作者

讀者一同

## 春

長閑さは　稚遊び

日本橋から南の方へ二三里、同じ東京府の内ではあるが、馬車の喇叭、行商の賣聲も茲には耳珍らしく、十二時の號砲さへ、聾でなくても聞きもらす位な處。然し此頃は此の邊にも鐵道が敷かれ、向うの森蔭にヒューと云ふ聲、時ならぬ雷を地に轟かせて、物なれぬ藪鶯を驚かすのを、ハテ殺風景な世に成つたと、眉を顰める隱者もあるとやら。斯る片田舍に、此は又床しい一構。家の作りそれほど大きくない代りに、數寄を極めた普請。殊更庭などは、奇木珍石に金銀を惜まなかつただけ、廣い東京にてたんとない結構。それに場所が高臺であるから、廣々として誠に氣持がよい。

春は四月の下旬、舊暦ならば彌生と云うて、一年中での長閑な月。漸く眼をさましかけた若草の、青地を彩る蒲公英の黄色、蓮華の花、其の紅を奪ふ菫の紫、大和ぶりに形容すれば、さながらの錦の茵、雨に打たすのも惜い樣な芝原の眺め。それぱかりか此處の花壇には香自慢の薔薇の花、向うの岩蔭には色を競ふ杜鵑花。此等に心引かされてか、まだ散りもせぬ遲咲きの八重櫻。はては花を持たぬ柳までが、嬉しさうに笑を含んで、風に戯れて居る樣子、見るから心うつとりとして、世も我も忘れる長閑さ。

―水無雄さん、早く來ないとみんな散つてしまつてヨ
梢を離れた初音の一聲、ほどなく顯れたは十か十一にならうと思はれる少女。黒く軟かさうな髪を組みもせずに後へさげ、顔立ちは寧ろ圓顔で、色は白く、額から眼の縁へかけて薄桃色をぼかし、眼の黒目勝にハッチリとした工合、活潑な性質も想像される。紅くて締りのよい唇、物を云ふ時眞白な行儀のよい歯が、二三枚垣間見る處、その可愛らしさ、實に何とも云へない。衣服は銘仙の縞八丈、赤と白と紫と、染分けにした鹿子の帶をしめ、上には黄八丈の道行に、萌黄の絡紐の着いて居るのを着て、海老色の鼻緒の着いた駒下駄を穿いて居た

件の少女は、急ぎ足で芝原の處まで來たが、やがてふりかへつて、可愛らしい聲をはりあげ、
―水無雄さん、はやく入らつしやいヨー。アラよく咲いてること、蓮華が。
―さうかい、今鉛筆を忘れたもんだから……。
足を空にかけて來たのは、毛縁の着いた縞羅紗の洋服を着た、極上品な男の子。子供にしては肉がちと瘦過ぎて、色も白い方だから、何處やら病身さうに見えるが、然し眼元の涼しい處から、小さな口の樣子、何となく愛嬌があつて、兵子二歳の頭を惱ます價値は確かにある。以前の少女とくらべては、松飾り三ツ四ツも早く生れたと思はれるが、顔形に似た處もなくて、それに話す工合では、―――睦ましさうには見えるが、でも兄妹らしくもない。件の少年は程なく芝原の方へ來て、
―ヤ、綺麗だ、これは……、
トは云つたが、一向冷淡に見遁して、すぐ向うの築山へ登つて、此處彼處を見まはしはじめた。

此山から見れば、此の庭は大方一目。垣を越えて隣の茶畑、それに續いて今を盛りの菜の花、大根の花。その間の細徑を、小荷駄馬がノッノッ牽かれて行く。その向うには柘植か、思はれる生垣があつて、高い松の木が五六本。その間から萱ぶきの屋根と土藏の白壁が顔を出して居る。その左の端から遙かに見渡せるは品川の沖か、日に映じて水銀を流したやうな海、遠く行く程靄に成つて、安房上總の山々は、宙に浮いて雲と疑はれ、近くは沖を走る眞帆片帆、家の屋根より高く見えて、空を飛ぶ鷗かとばかり。その間には又悠然と、錨を下した軍艦四五艘、臺場の影から半身を現はして居るなんぞ、まるで芝居の書割見る樣な景色。それに空は朝からぬぐつた樣で雲の點は少しもなく、鳶も時を得顔に舞を奏でて、折々姿に似合はぬ聲を出しては、春の長閑さを助けると云ふ上天氣に、水無雄は眼も痒くなるのも忘れて、――詩人か畫師――さも天然の美術を理解し得るものの樣に悠然として餘念もなく、四邊の景色をながめて居たが、急に何を感じたか、其處の芝の上にドッカと尻餅をついて、――妙にぼんやりしはじめた。

「水無雄さん、何してるノ。
あまり靜かさに、不審を抱いて登つて來た少女は、水無雄の素振を見て、
「大變考へ込んでるのネー。まア御覽なさいナ、今日はよく品川沖が見えること。……これこそ郎君、畫に書くとよくてヨ。
―エ、だから今考へてるんだ、何處を畫かうと思つて……。
「虛。又お母さんのことを思ひ出したんでせう。
―なアに、そんな……。
―イヽエ。郎君は何時でも目黒へ來ると、此處へ登つちやア船を見て、……さうして……お母さんやお父さんの事を……思ひ出すんでせう……。此間も家のお母さんが左樣云つてて

よ、……そんなにいつまでも氣になさると毒だつて。＝

年に似氣ないませた注告。それよりも心中を見抜かれた慧眼に感服して、水無雄は今更極まりが悪いから、一言の返答も出さなかつたが、暫くして氣をかへ、

「さつだ、畫に畫くといゝなア。

「ほんとに郎君は畫が好きネー、そんなら此處でかいてらつしやいナ。妾は下で花を摘んで居るから……。畫けたら下りてらつしやいヨ。

畫の邪魔をするのも氣の毒と思つたか、少女はそろ／＼芝原の方へ下りて、精出して花を摘みはじめた。後で水無雄は、畫を畫くつもりで持つて來た洋紙の帳面をあけ、鉛筆を握つては見たが。何とやら氣が變に成つて、思ふやうに筆も動みないと見えて、宜い加減にして帳面をふせ、力無ささうに立上り。自分も花を摘みにト思つたか、二足三足築山の下り口まで來かゝつて、ふッと下の方を見おろしたが。――臥猪を見付けた獵師。――ニッコリ獨り默諾いて、そのまゝ引かへして、體をかゞめて忍びやかに、今度は裏の坂から下りて行つた。見付けたものは、ハテ何であらう。

遅れ咲を誇り顔な八重櫻、風のまに／＼桃色の雪を降らすその下の、芝少し厚く生えた處に、彼の少女は腰を据ゑて、今迄取つた蓮華や菫を膝の上にのせ、袂から木綿絲を出して、花束の製造に餘念もなかつたが。不圖水無雄の事が念頭に浮んだ故、何を仕て居ることかト、築山の方を見あげてみると、はや姿も影も……。これはト心元無げに彼地此地見廻せば、自分より五六間ばなれた處に、大きな松の樹がある、その松の根元の青石に腰をかけて、水無雄が何か頻りに書いて居る樣子。少女は何の氣なしに聲をかけて、

「アラ、そんな處へ來て書いてるノ。

「ニッ、ア、今……いゝ物寫してるんだ。

でも少女は心付かず、さまたげるのもト思つて、そのまゝ矢張り花いぢり、自分の仕事に精を凝らして居た。が、時々盗むやうにして水無雄の方をフッと見やる。見ると向うでも此方を盗むやうに。一度ならず二度も三度も、そして顔を見合はすと、向うでも妙にすぐ脇をむいてまぎらしながら、筆を動かして居る、――いや動かす眞似をして居る。その素振りの怪しさに、目敏い少女は忽ち「妙だナ」と感じたト見えて、

「いやヨ水無雄さん、人の顔なんぞ畫いちやア。

「ナニ、誰が人の顔なんぞ畫くもんか……。今その櫻を寫してるばかりさ、あんまり綺麗だから。

「だつて人の方をジロ／＼見るんだもの……。

「默つてちッとしといでヨ、動いちや いけない……。

「ソラもうわかつた。妾を畫いてるんだヨ。

ト云ひながら立ちあがつて、折角束にした草花を、其處へ捨てたまゝ駈寄つて來た。水無雄は周章てて、
「來ちやいけない〳〵。
「イヽエ、それぢやアそれ見せて頂だい。
「ナニ、見たつてわかりやしないヨ。
「イヽエ、わかつてヨ。見せて……。
「まだ出來上らないからいけないツてば……。
「イヽエ、いや、妾はいや……人の顔なんぞ……。
「譃だヨ、艶ちやんぢやないんだョー……。
「そんならア見せられないことは……無いぢやありませんか。
艶子は顔を眞赤にして爭ふ、爭ふ樣子がいかにも戲事らしくない。寧ろ眞劍の樣だから、水無雄も大きに持て餘して、之を慰める工夫に當惑したが、今なまじひ隱し立てをするよりト思つて、
「仕方が無い、ぢやア見せるヨ……けども艶ちやんの顔を畫いたんぢやない。只櫻の木の下に女の子が居る處を……、風が大變好かつたから。
「風がよくつてもいゝや。ドレお見せなさい。
「今見せるヨ。そんなにすると帳面がこはれるぢやないか。

云ひながら見せた帳面。見れば――櫻の幹に凭れて居る少女の圖。もとより少年の筆、活きて働くと云ふ程ではなくとも、兎に角一圖の畫として、見れば見られる圖。それを無情――而も我が姿繪を無情、――艶子は突然引裂いて捨てながら、
「いやな水無雄さんだ。
押し出したやうな聲、十分の恨を含んで、水無雄の方を睨んだ眼には、――はや濕む淚。何とした心ぞ。
丁度此時、其場へ來かゝつたのは、下女かと思はれる年增の女。此の體態を見るより、急ぎ足で傍へ寄つて來て、
「アラお孃樣、何をお怒り遊ばすんですネー。お喧嘩遊ばすもんぢやございませんヨ、水無雄樣も……、お世話をお焼かしなさすつちやいけませんネー。
「ナニ……喧嘩なんぞ仕やしないんだヨ……。
「だつてお泣かし遊ばしたぢやありませんか。……奧樣は可愛がつてお上げ遊ばすもんですヨ。ホヽヽヽヽ。
「アラ、膝がまた……。そんな事を云ふとお母さんに云付けるからいゝ。
「オヤお孃樣、飛んだ餘滴ですこと、……サアお仲直りにお座敷でお菓子でも召上れ。今勝がお茶を入れましたから。
嗚呼實に、罪も報いも知らない稚子の餘念なさ。誰も一度は此樣な事のあつたもの。年に譬へれば誠に春。麗らかな青空に、笹の葉も動かない程の東風。――たまさか一寸怒ることや泣くことがあつても。その悔しさ、その悲しさは、心底から起つたものでないから、氣まぐれな浮雲か通り雨、ほんの刹那の間ばかりだ。之を思ひ出しては、少しばかり殘つた後鬢の髮を撫でて、肩上げの昔時を羨むも人情か。

さても此の少年と少女、でも此篇の主人公、その素性を確かめねばなるまい。
水無雄の父は石山治と云つて、西國出の人で、當時陸軍の中佐を務めて居る。細君友子との間に出來たのは、總領の鯱麿、續いて此の水無雄。それも生れが水無月の幾日と云ふのから、乃ち水無雄と名付けたとやら。處が此の少年、父親が武官であるにも似ず、稚い時分から畫が好きで、おしやぶりを捨てての次は、はや母親に錦繪の所望。乳母の背中におぶさつて、最寄りの繪草紙屋へほとんど日參。是には乳母も

腕を痺れさしてもてあましたが、その代りチトむづかつた時、＝サ、坊様、この人物を御覽遊ばせ＝と云へば直ぐ泣止むので。大きに便利がつて。＝乳汁と錦繪が此のお子様には一番のおだまし道具＝ト、近所の乳母仲間への取沙汰から。＝片山さんの坊様は繪がお好き＝ト云ふ評判高くなつて。一寸他家へ遊びに行けば、必ず菓子の包みに錦繪を五六枚、御土産にもらつて嬉しさうに歸つて來る顏を見ては、母親もどれほど嬉しかつたらう。それから五歳六歳、小學校にも上るやうになり、自分の指が自分の自由になりはじめると、もう容赦は出來ず。三寸の筆に尺の白紙、覺束ない手つきで、見やう見まねに畫きはじめた人の顏や馬の走る姿。それと見えるほどに畫けるので、サア嬉しくつてたまらず。それからと云ふものは、隙さへあれば夜も晝も畫三昧。＝ほんとに坊様は御上手でいらつしやること、どうぞ私に一枚四君子でも＝ト、出入の道具屋がお世辭混りに云へば。＝左樣なら妾にも、宅の弟にやりますから＝ト、小間使も中働きも、寄つてたかつて、はや侍からは畫師あつかひ、當人も畫師氣取で、面白がつて頼めば、面白がつて畫いて居た。然しそれが爲め肝腎の學問が御留守に成つては、父親が度々用心に誡めれば、元より温順い性質、畏まつて直樣本をさらへる。その殊勝さにほだされて、——甘いは母親、＝勉強した御褒美に＝ト、買つて呉れる西洋繪具。繪も精出して＝ト云はぬばかり。これでは何方に付いてよいやら。猫を追うて木天蓼を燒くやうなもの。

然し此の水無雄、子供にしては少し妙な性質があつて、あまり朋友と交ることを好まず、餘程氣の合ふ者でなければ、打解けた交際はしなかつた。それとても口數をたんときくことを好む風ではなく、云はゞいくらか老人臭い處があつて、多人數の中に混るより、却つて只一人閑靜な處に居る方が、自身に取つて一番快樂さうに見えて居た。それ故學校の朋友仲間でも、チト活潑過ぎた頑白者からは、因循家だノ弱蟲だノと擯斥されて、折々攻撃を受けるが、決して相手にならず、體よく之を敬して遠ざけて居た。然し一寸見た處が大變温順過ぎるので、兩親も惡くすると病氣でも起しはしまいかと、取りこし苦勞に胸を痛めて居たが、其割に大した事もなく、はや十四の春を迎へた。丁度その年の一月、父の治は熊本鎭臺詰を命ぜられて、細君同道で任地に赴くことに成つた。其時も慾には水無雄を連れて行きたかつたが、それでは却つて同人の爲めによからぬト、嵐に生木のさかれるやうな心持をして水無雄を、日頃懇意にして居る糸邊豐作と云ふ人に預けて、乃ち一月の末つ方、横濱解纜の某丸で九州へ向け出發した。何故に此時、長男の驍麿は見えなかつたかト云ふに、同人は其一年前に、法學研究の爲め亞米利加へ留學して居るので。實に此折取り殘されたのは、今年十四に成る水無雄一人であつたから、親の不憫さは又一人であつたらう。

件の糸邊豐作と云ふ人は、石山が若い時分からの朋友で。今も親類よりは親しい間柄。明治の初年には、北海道から露西亞に渡り、それから米國へも渡航して。多年の見聞に文明諸國の商略を呑込み、日本へ歸つてからも、東京と横濱とに店をかまへ、貿易商の仲間入をして居たが。運強く段々と仕上げて、今では京濱間に名も知られ、商業立志編と云ふものが出來たなら、さしづめその肥滿した肖像と一所に、好材料となるべき紳士。此の豐作に一男一女がある。男はまだ初節句濟したばかりの嬰兒だが、娘は名を艶と云つて今年十一。父に似たか母に似たか、其名にそむ

かぬ艶々しさ。その上性質怜悧で寧ろ怜悧過ぎる程で、人にまけるのが大の嫌ひだから、小學校に上つてからも、席順で三番と下つたことはなく。たまさか傍輩が自分より上になると、悔しがつて〳〵、一日シク〳〵泣きくらし。それから必死に成つて勉强して、次の試驗に一番の席を取りかへすまでは、夜も寐ないと云ふ程。それのみか男の樣な氣性があつて、理道にはづれたことなら、男でも——教師でも、容赦なく談じ付けた。斯う云ふと、何だかいやに才發けた小娘に聞えるが、その風を見ると聞くとは大違で、蟻にも逃げる樣な、優しい、可愛らしい娘。それ程學問が出來ながら、少しも人を侮る樣な、高慢な振舞の無いのは、いかにも感心な處と、教師も常に褒めて居た。然し只一ツの瑾には、それだけ氣が勝つて居るので、身體の方があまり壯健と行かず、チトつめて勉强した後は、鼻血を出したり眼眩がしたりして、母親を周章てさしたことも度々。——子供の中から是、大きく成つてはさぞ……ト、兩親の心配の種。此には學問はあまりよろしくないト、醫者が注告。處が生憎當人は學問好、嬉しいやうな悲しいやうな事。

さて今度水無雄が、糸邊の家に預けられるやうに成つたに付いては、丁度よい遊び仲間が出來たから、艶子の爲めにもよからうと、想像したとはちがつて。艶子は相變らず机にばかり向つて居り、水無雄も例の無口な質の上、父母に別れた當座だから、何となく浮かないやうで。どうも二人ともあんまり親しまない樣子に。元來一種の下心を有して居る艶子の母は、これではよくないト大きに心配し、閑な時には二人を一所につれて物見遊山に出かけ。成る可く親むやう親むやうと、手を盡した甲斐あつて。そこは子供、時々は二人で睦ましさうに庭に出て遊んだり。又或る時は艶子が本の不審を尋ねるのを、水無雄が信切に教へてやる所などを見るので、母親も大きに喜び。それからは休日毎に、人を付けて目黑の別莊へ遊ばしにやる樣にした。その目黑の別莊とは、高臺で眺望も至極よい所であるから。子供ながらも美術心に富んで居る水無雄には、無二の樂境に覺え。艶子にも此上ない面白いことに思はれた故、二人とも一週間を待遠しがり。土曜日に雨でも降ると、二人よつて日和輪を仕て見るやら、テル〳〵坊主を拵へるやら、それは〳〵餘念もない。

斯う云ふ鹽梅で二三月の間には、まるで莫逆の間柄に成つてしまつた。すると妙なもので、艶子の鋭過ぎた性質は、水無雄の温順過ぎた處どうまく調合されて。活潑すぎた艶子も、段々女らしくなり。それと同時に水無雄も、男らしく活潑な處が出て來た。——實の處、最初の程は、水無雄の眼には、艶子がお轉婆に見え。艶子の眼には、水無雄が意氣地なしに見えて。お互ひに心の中で、眉を顰まして居たのだが。——一ツ池に飼ふ時は、鯉も金魚の尾を咬まず、金魚も鯉と麩を爭ふやうになるものか。

覺え惡い事ほど、覺え込んでは中々忘れない。それと同じ理窟で、水無雄と艶子は最初親しみ惡かつただけ、一旦親しんでは中々疎くならない。却つて親睦の度は增して來て。果は兄弟も及ばぬ程に成つた。それを見て居る親達は、次第に最愛しさが增して、=此程氣の合うて居るものなら……=ト、はや行末の胸算用。時々は二人を前に置いて、それとなしに嬉しがらせた。其の粹樣の親の情が、却つて二人の身の仇となつた。——それは六年後の事。

## 夏　あつきは　互ひの情

事もなく六年の星霜はたつた。此時は治も再び

東京住ひと成つて居り。長男の鐵麿は去年の暮目出度歸朝し。例の水無雄も糸邊の家の戸籍面を脱して、自宅の方へ引取られて居る。元來治は、水無雄の性質の温順なのを見て、これには醫者が適當であらうと、そのつもりで修業をさせて居たが、――飛んだ伯樂の鑑定違ひで、水無雄自らは醫者になることを更に好まず、天賦の畫才に富んで居るを幸ひ、之を益々鍛錬して、天晴れ名譽の畫工に成りたいと云ふ心願で、時々父に相談を仕掛けた處、父は殊の外不同意で、「畫工のやうな賤しいものには……」ト、頭から取りあげない。それを見兼ねて母の女子が、良人に向つて倅の辯護、「稚い時から好きな道の事、修業さしたらキツト立派な者になれませう」ト、云へばます／＼大不機嫌、「――貴様の知つた所でない、黙つて引込めト、細君までが兵卒あつかひ。武夫の意氣地はさて恐ろしいもの。此と云ふも日本には、まだ封建の餘臭が退かぬから、美術の價値も猫に小判。――難波の堀の如來樣、善光は居らぬか、善光は居らぬか。あれ程やかましく云はれても、水無雄にはウエ[illegible]で[illegible]いて居ることか、いつかな畫のことは思ひ切られず、誰を師と定めるではないが、自然自得した筆法で、閑な隙がな繪具いぢり。それが父親の癪にさはつてたまらず。遂には親の權柄づくで、紙も筆も取り上げ兼ねん勢に、當惑の頭は痛めながらも、畫を全く廢めようト云ふ念は、夢想にも起さない――堰かれる程水嵩は愈々増して行つた。

艶子も此年は鬼もト云ふ十七、まして二葉からその薫ばしさは見えた伽羅娘が、無念、何者に妬まれてか、幼少の折醫者に豫言された通り、此の夏の初めから、全く癇病患者の仲間入をしてしまつた。「學校へも暫く出ぬがよい」ト父の命、自分は悶かしくつてたまらぬけれど、命には替へられぬト。殘念ながら割愛して、書物との縁を切り。讀むものは新聞、書くものは手紙位が關の山、成るべく頭を痛めぬものがト、仕樣事なしの遊藝三昧。閑があれば母も膝を突き合はして、母は撥を操る、娘は爪を插む。傍目からは氣樂な樣で、氣樂な者には成ること出來ぬ病氣とよ。

近來流行る海水浴、房州の北條、勝山、相州の鎌倉から、大磯、小田原、熱海へかけて、行平のやうな雅人が、何の罪あつて配所の月、わざわざ海士の眞似を仕に行く。之も流行となれば面白い事。

糸邊豐作が發起で、此年は石山一家も諸共、鎌倉へ避暑かた／＼海水浴と云ふ事になり。糸邊石山の兩夫婦、倅に娘、下女まで連れて七月の中頃から、三橋の奥座敷を借り切つての下宿住居。朝と午後とに由井ヶ濱へ出て、潮に打たれるのが毎日の課業。あとは碁を打つたりトランプをしたり、暑い時には晝寢、冷い時には名所歩き、まことに氣樂な此の一月許。

日の色はきら／＼して、庭を眺めても眼の眩ふ、暑いさかりの午後二時頃。暑さを助ける蟬の聲には、身内の汗を吸取られる樣な心持。折々氣安めに見舞に來る潮風が、日除の帆木綿に波を打たして、讀捨てた新聞紙を、疊の上に漂はして居る。疊六枚敷かれる二階座敷の、北向きの窓を開けひろげ、その下の机にもたれて、水無雄は只一人、暇もなく團扇をつかひながら、餘念もなく書籍を眺めて居る。處へ、

「水無雄さん、暑いことネー」

此を案内にして縁側から靜かに這入つて來たのは、例の艶子、湯上りと見えて、濡れさうな洗髪を、簡略に束ねて一寸櫛をあしらひ、白地の薩摩絣の單物を素肌に着て、黒繻子と萌

黄博多の帶に、緋縮緬の帶揚を輕く〆めて。右の手に蘆柄の團扇を持ち、左の指さきで鬢の髪を耳の間へかきあげながら、柱の下へ座を占めた。その天眞のまゝを現はした湯上り姿、輕い玉と云はうか、温い璧と云はうか。清洒とした處は實に墨繪の觀音、胡粉や臙脂を借らないのが、一段と有難く拜まれる。

此の生菩薩の御來光、並々の衆生なら、アツトばかり面もあげられまいが。水無雄は一向に落付いたもの、讀みかけた書物を靜かにふせて體をひねり、艶子の方をむいて、ニツコリ笑ひながら、

「隨分たまらない、今日は格別ですヨ。

傍にあつた皮蒲團を出して、

「サお敷きなさい、其處は痛い、敷居の上で……

「有難う。御邪魔でしたネ。

「ナニ何うして、私も眠くつて弱つてたんです、……貴孃、今日は海は。

「エヽ、何うもいけないやうですから、二三日やめませうと思つて。

「ハア、やつぱり腦にはいけませんかネー、私達でも逆上せますから。

「逆上せていけないんですヨ、だから今御湯に這入つて、水で髪を洗つたら、ほんとに好い心持でしたヨ。

「皆さんまだですか。

「エヽ、下には誰も居ません。今お茶を入れようと思つても、火がまるで無いんですもの。

「ナニそれには及びませんが、……お艶さん、今日は氣分がよければ、ゆつくり話していらつしやい。……誰も居ないなら……。

「エヽ……實は一寸……妾も。

「何か用ですか。

「イヽエ……用でもないノ……。

モヂ／＼して居たが。氣をかへて、

「水無雄さん、……郎君御醫者になるのは、何うしても嫌なんですか

「嫌つて、……何うしても出來ませんもの。無理にしたつて又とても立派なものに成れやしませんからネー。それよりは自分に適してる事に從事した方が、私は得策だらうと思ふから。

「デモ、……あんまり強情お張りなさるとつまり損ですヨ。

「何故損でせう。

「だつて郎君、……まアこんな事はありますまいけども、もし郎君、御父樣がほんとにお腹をお立てなすつて、……まア郎君が、……御家に居られないやうにでも成つた時には……。

「さうです、それは私も心配して居るんですが。……然しよく考へて見ると、今枉げて醫學を勉強するのは、それこそ非常な損だらうト思ふんです。大きく云へば一身を誤ると云つてもよい位で……。成る程今私が強情を張るのは、不孝な樣ですけれども。……私だつて決して親に逆ひ度くはない。酔狂に強情はり度くない。つまり親の爲めを思ふからです、今自分に適した事を勉強したいと云ふのも。決して自分勝手ばかり云ふのではなく、之と云ふのも後日天晴れ名譽の美術家に成つて、親を喜ばしたいと思ふからです。嫌ながら勉強して、つまらない藪醫者になるより、立派な畫工に成つて名を海外までも知られた方が、親も喜ぶだらうと思ふんです。

「さうですとも、郎君のおつしやるのは尤もな事です。……ですけれども、……そんならそれで、郎君の思つてらつしやる事を十分御父樣におあかしなされば善ささうなもんぢやありませんか。

「それは云ひましたとも、然し いくら云つても、――そんな事云つちや惡いが、阿爺が餘

り頑固で…。

「さうですか、…それは困りますネー。…何うか御父様の御許可が出るやうにしたいものネー…。

「サア…。

彼是共に長嘆息。尺の苦勞を五寸づつ負ふ積もしさ。

(原木揖畫)

「けどもネー水無雄さん、成らうことなら御父様の御氣に逆はない様に…。

「さうです。然し私は今も云つた様な決心だから、今の間少しの不首尾は受けても、厭はんつもりです。

「サア、それは郎君、あんまり善くないと思ひますワ。第一御心配をかけるのが惡いことですもの。それよりは十分御心の解けるやうに、郎君から譯をお話しなすつて、…成るべく穩かに…。妾は女だからさう云ふんではないけども、…ほんとに郎君あんまり輕卒なことをしてはいけませんヨ。理窟は理窟、情實は又情實ですから。其處ン處をよく御考へなさらないと…、あとで後悔しても追付きませんから。

「有難う、實に、…御注告、有難い。

「いやですヨ、馬鹿にしちやア。

「イヽエ、冗談ぢやありません。私は眞面目です、眞面目に御禮を云ふんです。よく注意をして下すつた。——然しお艷さん、貴娘…妙なことを云ふやうですが、…私がもし醫者に成らずに、自分の望通り畫工に成つたら、…其時は貴娘何う思ひます。

「何うつて…。

「云ひ憎いナ、貴娘はまア…、醫者と畫工と何方が好きなんです。

「妾、…(暫く默つて)妾は醫者も畫工も好きません。

思ひ切つた返答に、水無雄は覺えず眼を丸くして、

「エッ、何故、それぢやア何が好き…。

「何つて…、妾は職業に好憎はありません。——心さへ良い人なら、醫者だつて畫工だつて。

水無雄はヂッと艷子の顏を見つめて居たが、

「私はその言葉は忘れません。貴娘も忘れちやいやですヨ。

その返答の不思議さ。極めて低く、そして極めて力強く、

「エー忘れません。

何故か、——叱ッと云ふ者のあつた樣に、——パッタリ無言。團扇ばかり頻りに働きはじめた。その間二三分…。漸くにして水無雄は、念の入つた嘆息を前供にして、

「ほんとに暑い。

それに無言の同意、艷子は袂からハンケチを出して額を拭ひながら、

「それはさうと水無雄さん、郎君何日頃お歸り

なさる積り。

「エ、‥まだわかりませんけれども、東京へ歸つたつてなほ暑いから、八月一杯居ませうョ。

「さう、‥‥妾はもう歸り度く成つて來た。

「何故急に歸り度くなつたんです。何か譯があるんですか。

「‥‥‥

「何うしたんでせう。

「‥‥‥

「可笑いぢやありませんか。

「ホ、、、（無理に出した苦笑ひ）水無雄さん。

「何。

「郎君の御兄樣ネー。

「ハア、兄が何うしました。

「可笑な方ネー。

「何うして。

此時ドヤ〳〵足音がして、皆歸つて來た樣子に。――梨下の冠正しもあへず、艷子は急いで下座敷へ下りて行つた、＝可笑な方＝の説明もしないで。取り殘された水無雄は、箸も取らずに膳を引かれた心地。

サア妙に成つた、水無雄の胸は妙に成つた。艷子の口から出て水無雄の耳へ轉げ込んだ、＝お兄樣は可笑な方＝ト云ふ一言、胸に痞へて中々腹に落ちない。が、その儘にも捨て置かれず。何うしても説明を下して見ない譯には行かない。そこで水無雄は、哲學者が宇宙の眞理を發見する樣な意氣組で、まづ〳〵お兄樣＝ト云ふ語と＝可笑な＝ト云ふ語を、別々に演繹し、學校で習つた論理學を、初めて爰に應用させて、色々と勘考したが、更に解らない。そこで今度は歸納法を試みようと、眼を閉ぢて憶ひ起す此の頃の出來事。――それョ、昨日の午後の出來事。

昨日の午後の事だ、皆揃つて海へ這入りに行つた。その時自分は、艷子の手を曳いて淺い處で潮に打たれて居たら、そこへ兄が來て、＝水無雄、彼處へ私の手拭が置いてあるから＝ト云つて、自分に取つて來いト命じた。自分は早速濱へ上り、向うの小屋へ行つて、衣服や帶の脫ぎ捨ててある間を、種々とさがしたが無かつたから、引返して行つて見ると。――其時だ、兄は艷子の、嫌がる艷子の左の手を握り、右の手を抱いて、＝舞踏を敎へてあげよう＝ト、波の中でダンスの眞似をして居た。自分は此方の方から、＝兄さん＝。呼んでも返辭をしない。稍〻近く寄つて、＝兄さん＝。聞えたが一寸此方を見返つたばかり。＝手拭はありませんョ＝。＝ナニ手拭‥‥、もういゝョ＝。自分が賴んで置きながら、はや忘れたやうな、極く冷淡な挨拶であつたが‥‥。

吾も可笑いと思つた事、是或は‥‥。

今まで角も出さなかつた疑念の鬼、於是そろそろ跋扈しはじめた。斯う成つて來ると、眼には疑念の網膜、耳には疑念の鼓膜。兄に就いて見る事聞く事皆可笑く感じられた。然し只可笑く感じたばかりではすまない。必ず之に伴つて一種不愉快な感情が起る。夫れ可笑いとは笑ふ事で、笑ひは人の喜びの破裂したもの。それが不愉快を伴ふとは、此已に可笑な事だ。

## 秋

寂しさは
君に別れて

譬へば一巢に生立ちぬる鳥の、彼は梅の花の清きに囀り、是は卯の花の曇れるに遊ぶト。支考

が筆のすさみも尤も。柳下惠の兄に盜跖と云ふ惡黨。兄弟だから似るとは限らず。張孝張禮の樣な者は、今時鐵の鞋ものだ。

水無瀬の兄の饒磨と云ふは、同じ腹から産まれながら、水無瀬とは打つて變つて、實に氣輕な……云はゞ當世の風流才子。然し此の風流には風雅と云ふ意味は微塵もない。醫者の不養生、法律家の不德義で。西洋に居た頃から、香水——臭い風聞もあつたとやら。よく跡を追うて來ないと、一所に行つて居た男が不審を置いて居る位だ。その代り世才には長けたもので、交際などのうまいこと。尻の輕いレディは、フハと乘せられる危險な人物。惡く云へば一個の輕薄郎であつた。然し親の眼には惡い處は見えないもので、饒磨が當時ある法學校の幹事を務め、法律社會に用ひの善いのに眩まされて、又とない賴もしいものに思ひ。此が云ふことは何事も尤もに聞えたも不思議。

引かへて水無瀬の方は、生來偏屈な質で。人の氣に逆ふと云ふ元氣も無い代り、之を迎へるなんぞト云ふ、氣の驗いたことはとても出來ない。其上此頃は自分の教育の事で、親の前にはチト不首尾な方だから、今迄公平に、——或は水無瀬の方へ傾いて居た親の慈愛は、今と成つては、次第に他の一方へ重くなつて、兄の方が日向になるにつけ、水無瀬は段々と日影の身。胸は不平の雲に閉され、怏々として面白くない。斯うなると、父母を始め、第二の父母の糸邊夫婦も、不憫がつて傍へ來ては呉れない。只賴もしいは鼈子ばかり。常に愛情の風を送つて、其不平の雲を拂つて呉れる。水無瀬は鼈子と相對する時のみ、實に靑天白日の思ひをなした。

八月の末つ方、水無瀬は鎌倉から歸つた。九月も過ぎて、時は秋立つ十月と成つた。此月の上旬から、陸軍醫學校の入學試驗があるので、豫てより父親の命、義理にせめられて出は出たものの、心此にあらざれば、試驗場へは居所の羊。餘の書生は顏色を變へて、答案に額を痛めて居る中に、水無瀬ばかりは、何うぞ落ちるやうにト念じて、何事も知らぬで通す。さりとは飛んだ阿古屋の裁判、水責火責の苛責を受けても、及第はしまいト思ひ定めては、岩永面の試驗官も、更に恨めしくもなかつた。

此の一念が通つたか、程經て試驗も見事首尾惡く濟みはしたが、濟まぬは家の親の手前。實は治む前以て、試驗官にも譯を話し、懇意な中とて校長の某にも賴み込んで、—どうぞ悴を何分にも=ト、不正な事だが之も子の可愛さ、特別の依怙を賴んで置いた。その甲斐もない不始末に、怒るまいことか腹を立てまいことか。=おのれ親の云ふ事を聞かず、故意と落第しよつたナ=ト、拳こそ頂かね、頭が破れるほどの衝突く、其日からは顏を見る度に稻光り、今にも雷が落ちかゝりさうな權幕に、水無瀬の胸は益々曇つて、はては無念の夕立に、人知れず袖をぬらしたこともあつた。

通常の人間なら、父に此程不興を被れば、何うがなして機嫌を取り直さうと、骨を折るのが當然。處が此の水無瀬には、それが出來ない因果な性分。それからと云ふものは、父には勿論、母にも兄にもあんまり物を云はず。家に居ながら家の人でないやうな塩梅。自分も面白くなく、他の者も快くないから、母親は女だけに心配して、何うか折合をつけようと、時々來ては慰めたり賺したりするけれども、例の偏屈な質で、時としては、——其氣でなくとも、——母をじらしたり、妙な感じを起さしたりするので。遂には母も我を折つて、——あれが氣の靜まるまで=ト、氣でも狂つた樣な扱ひ。却つて水無瀬の不平を助けた。

親は醫者に成れと云ふ、子は醫者にならぬと云

ふ。そこで遂にかゝる間違ひ。親は怒る、子は違拗る、まことに忌はしいことに成つた。然し一體から云へば、親に逆ふ子は不孝、無理は云うてもそこは親、從ふべきが子の道であるから、水無雄は成る可くなら親に逆ひ度くはない。何うともして父の心を安めようと、心の中では思つて居るが、何分今の處では、父の鋒先當る可らず。殊に自分も幾らか不滿を抱いて居り、――勿體ないが、父の仕方が聞えないト、思つて居る折だから、上部ばかり取繕つて、一先づ圓滑にすますことが出來ない。が、只一人むしやくしや思つて居るばかりでも果てしがないから、此上は誰か味方をこしらへて、まづ我根城を固めて置いて、それから再び戰端を開かうト。善い處に氣は付いたが、サアその味方には誰が善からうト、考へて見ると。――兄の鯱麿は賴みになりさうもなし、母は矢張り父の麾下、――遊説して甲斐がありさうなは、まづ糸邊夫婦であるが、それとても此頃では、昔の樣に可愛がつて呉れぬ鹽梅。今迄も此事について、二三度小言を云はれた位だから、到底駄目かも知れず。して見ると賴もしい味方は、――矢張り艶子一人。だが艶子は參謀官、帷幕の中で良計を敎へることは出來るが、共に進んで太刀討ちはならず……ト、から思ひ廻らしては、つまり我は單身單騎。不平の城に籠城して、時期をまつより他はないト、覺悟を極めてつまらなく送る月日、只慰めるものは……。

或日のこと、水無雄は例の通り屈託して居るところへ、這入つて來たは兄の鯱麿。常から面白くないと思ふ兄、向うでも面白くは思はないか、あまり話しに來たこともないのに、今日に限つて、……しかも機嫌よささうに、會釋もなく座をしめた。その顏を水無雄は、薄氣味惡さうに見ながら、挨拶もせず只居住ひをなほしたばかり。

「水無雄、何うだイ。

「エ、……。

曖昧な返答。

「御前糸邊へ行つたか、此頃に。

「イヽエ、もう十日ほど行きません。

「お艶さんが寢てるネー、知つてるか。

「へー、さうですか。

何事ぞ、意に介しないやうな挨拶。

「見舞に行つたらいゝぢやないか。

何事ぞ、水無雄の顏を覗きこんだ。その目には、――よく見れば、嘲弄が漂つて居る。水無雄は一向無頓着な風、……でも返答を待たれるやうな心持だから、義理に出した反問。

「さうですか、……あなた何日いらつしやいました。

「私は昨日行つたんだ。氷で頭なんぞ冷やして居たヨ。然し氣分は變りないやうだ、私は何にも話はしなかつたがナ……。

卷煙草の灰を拂ひながら、改まつて問掛けた。

「水無雄、御前一體どうするつもりだ、此からは。

「エヽ、……御父さんの御機嫌が直つたら、もう一度私の精神を申上げて……見ようと思ふんです

「それは駄目だネ。何遍云つたつて。……あゝ成つちや益々頑固になるばかりだから。

「さうでせうか、……そんなら仕方がありません、糸邊さんからでもよく話してもらつて……。

「ナアニ、糸邊だつて、……お父さんの云ふ通りに成つて。……一體斯う云ふ事の相談には冷淡な人物だから、云つたつて駄目サ。……それで……私も此間から御前のことぢやア種々心配して、お父さんにも二三度云つて見たが、……どうせ無駄だと思つたから、もう云はないが……。茲に私がお前なら斯う仕よ

うと思ふ手段があるんだけれども、……まアお前の決心をよく聞いて見んと……。一體御前は何う云ふ決心なんだ。……いくら壓制されても畫は遣り通すと云ふつもりか。

「エヽ、さうです。

「それがよい、……何でも腰が弱いことぢやいかん。それ程決心がありや、ナニ出來んことはない。……そんなら何うだ、私の云ふ事をやつて見んか……。

「どうするのです。

「やつて見るか……。

云ひながら、膝をすゝめ。障子の外へ氣を配り。聲を細くして、

「それはナア、お前が茲で暫く身を隱すのだ。いゝか……何處でもよい、御前のすきな處。箱根でも、鎌倉でも。あまり遠くなくつてよい。……其處へ暫時出奔するのだ。さうすれば家のお父さんやお母さんが必ず驚いて、そこは親だから、不斷はやかましく云つても、左樣云ふ場合になると心配しないことはない。非常に心配して、方々へ手を廻してさがす。その時御前は見付けられても、私は畫師になれないなら家へは歸りません、ト、つまりだゝをこねるのだ。さうすれば親だつて、子を一人捨てるか捨てないかの境だから、仕方なくお前の云ふ通り、畫師にでも何でもさせるだらう。此は德義上から論ずれば、元より宜しくない事だけれども、斯う云ふ場合に臨んでは、仕方がない、非常手段を行はなければ……。何うだイ之は、一ツやつて見んか。……私の口からこんな事を勸めるのは第一間違つて居るが、……然しお前が何時までも愚頭々々して居るのは、實につまらんから……、それでこんな事云ふんだ。

「さうですネー、……然しそれもあんまり……。

「ナニ、さうお前のやうに因循しとつちやア何も事は出來やせん……、かまふもんか。暫くの間何と云はれたつて……、私が取り繕つてやる。……お前がそれだけの決心があるなら、此位な英斷はやらなくちやア……。エ、どうだ……それとも他によい手段があれば……。

「他によい考は無いんですから……。然しそれには只ではいけませんネ。

「それは心配するな、少し位は私がどうともしてやる。……それぢやア愈々やつて見るか。

「……………

「どうだ、よすか。

「……やつて見ませう。

「やる、やるなら一日も早い方がよいから、今夜にも隙があつたら逃げろ。……それで路用は、……お前にやらうと思つて……。

懷中を探つて出した紙づつみ。

「サ、此處に三十圓ある、……此だけあれば一月や二月は隱れて居られよう。まア此の歲暮まで忍んだら大概形が付かう。その間又私が家の方でよく云うて置くから……。また足りんやうなら云つてよこせば、直ぐ送つてやる。それで處は何處にする。

「まア、鎌倉がよからうと思ひます。

「鎌倉、此間行つた三橋か。

「イヽエ、あの大悲院です、寺の方が却つて……賴んだら置いてくれませう。

「ウンそれはよからう。彼處の坊主は懇意にしたから。然し逃げて來たなどとは云はん方がよいぜ。そして成るべく初めは人に知れんやうに……。

痒い所に、手が屆き過ぎる位、親切な兄の勸告。水無瀨も此に氣が付かなかつたではないが、その費用の點に至つて、まさか不義理なことも出來ないから、今迄差扣へて居たが。その費用も出してやる、家の方も取繕つてやるトなつた

から、俄かに勢ひづいて來て。今まで可笑な方と思つた兄が、勿體ないほど有難くなつて來た。
斯うなると、何物か耳の側へ來て、早く〳〵＝トせき立てる樣に覺えて、はや尻は坐らない。
そこで兎に角今日の午後五時發の汽車で、鎌倉へ行く手筈に定めて、そろ〳〵荷拵へに取掛つた。それとても知れたもの、第一に繪具、繪筆、――これは傍をはなされぬもの。――平生好んで讀む本二三部。それに着物を二枚ばかり、目に立たぬやうに風呂敷包みにし。紙入の中には、兄からもらつた三十圓と、月にも花にも此は替へられぬ、――艶子の半身の寫眞を入れて、間接ながら肌につけ。それから机の抽斗、文庫の中などを吟味して、後で見られて惡い書類は、殘らず引裂いて火に燻べ。此で心殘る事さらになし。然し下手に出掛けて見付けられては恥の上塗＝ト、種々に工夫を凝らして、遂に一策を思ひつき。まづ風呂敷包みを持ち出して、門の脇の馬丁部屋に一寸置き。自分は後から何食はぬ顔で、＝一寸買物に行つて參ります。＝
覺悟はしても出陣となると、後髪を引かれるものとか。水無雄も、今家を出るとなると、妙に又氣が弱くなつて。恐い親、強面い親、それが何となくなつかしい樣で。あとでどんなに御腹立ちであらう＝ト思つては恐ろしく。＝どんなに御驚き遊ばすか＝ト思つては氣の毒になり。胸は變に痒くなつて、我知らず足が止まる樣であつたが。＝イヤこんな事では＝ト、自分で叱つて勇を鼓し、辛うじて門を出た。
その時がまだ三時。五時の汽車に乘るにはまだ二時間早い。それに何うして今頃から…。問ふにや及ぶ。
先刻は心に止めない振りで、聞き流した戀人の病氣。病氣は豫てより知つて居るが、寢るほどでは容易ならぬ事。せめての思ひ出、立つ前に一眼、見もし見せもしたい。そして彼の人ばかりには、事の仔細を打ちあけ、行先も委しく話して、尋ねてもらふことは出來ずとも、手紙は度々やりとりして、互ひに心だけは通じるやうにしたい。それには家を早く出て、新橋へ行きがけに、彼の人の家に立寄り、暫時なりとも逢うて行かうと云ふ下心。知れたことを…。
水無雄は馬丁部屋から、例の荷物を抱へ出して、出入の車屋へ＝ト思つたが。それでは足が着き安いからト、わざと辻待の車を雇つて、糸邊の家まで走らせ。荷物は車夫に預けて。自分だけ這入つて行つた。
懇意な間柄、案内もなく玄關から通つて、奥座敷へ行つて見ると、細君は居ない。艶子の部屋は…、此も主人は居らず。…はてな、はてな。
すると下女の某が見付けて、
「オヤ水無雄樣、よくいらつしやいまし。今日は生憎奥樣も御孃樣も御留守で…。
續いて驅けて來たは、俊作と云ふ艶子の弟。
「水無雄さん…、今日は僕御留守番だヨ。
「オヤさうかい…。
ト云つたが、サアわからない。細君は知らず、艶子は昨日寢て居たと云ふ人、それが今日外出しようとは…、夢にも思はなかつたから。水無雄は呆れ返つて。寢惚けたか、魅まれたか、茫然として爲す所を知らず。

* * * * * *

「お孃樣、今しがた石山さんの、若樣が…。
「エッ、アノ水無雄さんが。
「ヘエ、いらつしやいまして。
「惜しいことをしたネ、待つて頂けばよかつた

のに…。
「でも何だか大層お急ぎ遊ばして。
「何うなすつたんだらう…。もう少しのこと
だつたネー、…今日は留がノロ〳〵曳くも
んだから、ほんとに腹が立つて〳〵。
着物を着かへながら艶子はじれて居る。處へ
俊作が來て、
「姉ちゃん…お留守に水無雄さんがネ、來た
よ。
「さうかい。…お前またお話でも仕てもらつ
たかい。
「ナアニお話なんぞ聞くもんか。ぢッき歸つて
しまつたもの、…さうして姉ちやんのお部
屋で…何か書いてたヨ。
聞き捨てならぬその一言。然し相手は子供、も
しや何かの誤りではト、むきに成つて問糺す。
「ほんとかい…、妾の部屋で。
「アヽ、ほんとサ、机の上で。
もう確然。
＝何を書いて行つたんだらう＝。
ト、試驗の成績表、行つて見るまでが樂しみな
樣で、又氣がかり。急いで自分の部屋へ行つて、
机の上を見るとヤ、先刻にのせたまゝ、帳面が一
冊、此處をあけろと云はぬばかり鉛筆がはさん

である。そこをあけて見ると、大急ぎの走り書
き、二三度首をひねらなければ讀めない樣に、
羅馬字で十二三行。まづ讀下して見ると、
＝昨日は寢て居たと云ふことですが、今
日はもうよいと見えますネ。＝
＝アラ昨日妾は寢やしないのに、何の間違ひ
だらう＝。
＝私は都合があつて、今日から暫時身を
隱しますから、暫時逢へません。＝
＝アッ、逐々こんなことを…、あれほどに
言つて置くのに…＝。
＝それ故今日は一寸お別れに來たので
すが、お留守で非常に失望しました、悲
しかつた、殘念です。＝
＝悲しい、殘念。…もう一刻早かつたらば
ネー＝。
＝それで暫時待つて居ましたが、何分氣
が急ぐからもう行きます。隨分御大事に
なさい。私は常に貴孃の病氣を心に掛
けて居る、どうかすつかり直るやうにし
て下さい。＝
＝アヽ、有難う…よく案じて下さる＝。
＝私の隱れる處は、鎌倉長谷村の大悲
院です。どうか度々手紙を下さい、手紙

が一番慰めになります。然し誰にも云つ
てはいけません、隱して下さい。お名殘
惜いが急ぐから、左樣なら。＝
あとは英語で、
＝我が最愛する艶子孃！　汝に最も信
切なる
水無雄より＝
帳面をながめて暫時茫然之も爲す所を知らず。
處へ次の間から。
「姉ちゃん、御膳だョ。
飯も咽へ通らうか。

## 冬　寒きは身を切る凩

其翌日になると、石山の家では大騷ぎ。
＝水無雄が昨日から見えんゾ。
「用簞笥の抽斗に入れた、三十圓が見えない。
ト主人も細君も、下女馬丁までがお付合で騷い
で居る。
「あの三十圓も、水無雄が持出して逃げたに違
ひない。憎い奴め、直ぐ引捕へろ。
ト、主人が髭をそらしての嚴命。まづ一番の心
當り、糸邊の家へ人を走らして問合せると、ト或

る程昨日の四時頃、一寸御見えになりましたトばかり。その他の心當りを五六軒、出入の車夫まで雇うて探させたが、一向に見付からない。＝そんなら東京には居るまい。佐倉の叔父か、仙臺の從兄の處であらう。ソレ追駈けて＝ト、あせる治を押し鎭めて、鯱麿は靜かに説きはじめた。

「お父さん、さう御急きなさいますナ、水無雄の居る所は大概知れて居ります。仙臺や佐倉、中々そんな遠方ではありません。

「エッ、そんなら矢張り東京の內か。何處だ何處だ。

「さほど遠くもありますまいが、然し到底駄目でございます。

「何故か、何が駄目ぢや。

「サア……。

「オイ鯱、水無雄は何處に居るのか。知れてあるなら連れにやらう。

ト、母親までが半泣きに成つて、右と左から問掛けるのを、鯱麿は態と落付きはらつて、

「到底駄目です、彼奴は……慾じに連れて歸らん方がよろしい。どうせ又逃げてしまひませう。

「何故ぢやイ、それは。

「エヽ……彼奴は惡い女に欺されて居るんです。

＝ナニ女に欺された……水無雄が＝

此ばかりは思ひもよらぬ事、まさかト思つたが。二人は一層言葉忙しく、

「何ぢや、水無雄が女に欺されたト。馬鹿な奴だ。そしてそれは何處の女ぢや。

「何處かしれませんが、素性の善いものではないやうです。それに朋友の惡いのが出來たので……。

「フーン、何奴ぢや。家へはあんまり見えん樣だが。

「さうです、わざと家へは參りません。……それでなんでもその朋友におだてられて……、彼奴馬鹿ですから……、煽動に乘つて金なんぞ持出しよつたんです。

「不埒な、そして居るのは何處ぢやらう。

「大方その朋友の處に居りませう、何處かの下宿屋の隅にでも隱れて……。

「探したら解らんか。

「解らんこともありますまいが……。まアお待ちなさる方がよろしいです。その中に夢がさめれば向うから歸つて來ませう、何處も行きどころがありませんから……。どうも此間中から樣子が變だと思ひました、で、此間の試驗に落ちたのも全く故意ではないんですナ、その方に心が奪はれて居つたから落第しよつたんで……。

「チョッ、馬鹿な奴ぢやなア。

「ほんとにまアあきれた兒だネー、何う云ふ了簡だらう。

「エヽかまふな〳〵、あんな不孝者、歸つて來ても家に寄せ付けることならんゾ。

此は如何な事、馬を鹿と云はぬ許りな……。

こんなこととは知らぬが佛、水無雄は妨げもなく鎌倉へ着き、大悲院へ出向いて和尙に面會し、＝チト肺病の氣味で醫者に轉地療養を勸められた故、暫く方丈の片隅でも拜借願ひたい＝ト、賴み込んだ處、和尙も萬更知らぬ顏でもないから、異議なく受合うて、やがて水無雄は此寺のお客分と成つて、朝に晩に、鼻に線香の煙、耳には木魚の聲。

二日目の朝に成ると、艷子の許から手紙が來た。

＝オヽ待つて居た＝ト當人に逢つた心持で、急ぎ封を押し切つて見ると、さて細々とした手紙。——初めには此間留守であつた云ひ譯かたがた、まことに殘念でしたト、實に殘念さうに書いてあり。それから病氣の容體、大したこ

とはないから案じて下さるな。續いて水無雄が出奔の一條を論じて、なぜそんなに短氣をお起しなすつた、何故一度妾に相談して下さらぬと。諦めた樣な恨んだやうな書振り。その次ぎには、水無雄の心勞を思ひやつて、種々と慰めた、愛情の溢るゝ許りの文言。終りに、――注意到れり、――此から手紙を下さるなら、云々の所の云々の名にして下されば、斯る氣遣ひはないからと云ふ、指圖までしてあつた。その長さ、初から終まで殆ど一間足らず。＝よくまアこんな長いものを……あとでさぞ腦が痛み出したことであらう＝ト、思ひやつては嬉しいやら、痛はしいやら。そして自分の短氣を、今更のやうに後悔した。それから早速云ひ譯の返事、――氣安めの返事。向うから敎へられた通りの名にしてやると、甘く行つたと見えて、またそれの返事。片時も我慢ならぬ文の遣り取り、此が何よりの樂しみであつた。

水無雄が居なく成つてから、糸邊の家での取沙汰は何うであると云ふに。可哀さうにあまり善くは云はれて居ない。＝あの兒も稚い時分には、温順い可愛らしい兒だつたが、拗んだ僻屈人になつてしまつた。――あれは女に欺されて家出をした、あゝ云ふのが却つて女にはまり易い。――何處に隱れて居るか知れぬが、まだ夢がさめぬと見える。兎に角親に心配を掛けて不屆な奴だ＝ト、つまる處水無雄は不所存者、不孝者と云ふのが輿論の樣に成つた。その輿論を朝夕耳にする艶子の心苦しさ。それも黑い者を黑いと云ふのならまだしも、如何なる事の齟齬か、鷺を烏との裁判。艶子の腹にはさらさら落ちないから、折々言葉を盡して、辯駁を試みて居たが、それとても十分な證據がないから、矢張り先入主と成つて、中々採用にはならず。却つて妙に前廻りをされて、變に取られるから、いつも鶍の嘴に成つてしまふ。然し斯る評判の起るにも、何か元因が無くては叶ふまいト。鯱麿が讒言とは心付かず、――賢い樣でもそこは女、少しばかりの怨言を交ぜて、音信の序に問合せると。＝なる程そんな事も云はれるだらう、然し人の噂も七十五日、少しの間の不首尾は是非ない譯＝ト、一向心に掛けないやうだから、齒痒さは一入、只一人やきもき思うて居る。

此外にまだつらい事。此頃では鯱麿が、艶子の病氣見舞を名として、五日に揚げず遊びに來ては、＝お艶さん今日は如何です＝ト、信切らしく云はれるだけ、鬼に手を握られる心地、ゾッとするほど嫌でたまらず。無遠慮に強面さを現はしても、向うには通じないか、又しても又しても……。仕舞には艶子も肝癪を起して、＝失禮ですが御免を被ります＝ト、ツンと立つて自分の部屋へ這入り、襖を〆め切つたこともあつた。

玆に艶子に取つて、一大難事が起つて來た。それは他でもない、艶子を嫁にほしいと云ふ人が出來たので……。してその人は誰あらう、艶子が常から嫌がつて居る、例の鯱麿であつたとは……。

鯱麿も來年は二十七、早い者なら子供の二人もある年頃。殊に月給の百圓不足も取つて、立派に一本立となれる身。いつまでも獨身で親の脛も噛られまいト、人にも云はれ自分も左樣思ふ所から。今度愈々別に家を持つと云ふことになつた。就いては――豫ての執心、是非艶子を家内にト、父にも話し糸邊にも申し入れた處。いづれも此頃では卒魂鯱麿に惚れ込んで居る折柄、一議に及ばず得心はしたが。肝腎の

當人が得心せでは卜、或る夜豐作は細君と共に、艶子を呼び付けて諭したり賺したり。艶子はあまりの事に胸がつぶれて、否應の返答も出なかつた、それを恥かしいからト、早合點される悔しさ。＝大方異存はあるまいなう＝ト、のツぴきさせぬ談判に、默つて居ては一大事ト、＝實は、妾は、鯱麿さんは嫌でございます、何卒水無雄さんの方に　思ひ切つて云ひはなせば、母ははや顏色を變へて、

「オヤまア、此娘は……どうしたもんだろネー、あんな品行の惡い水無雄さんに……。成る程あの方も昔は善い兒であつたから、妾も可愛らしく思つて、實は　お前の……行末はお婿さんにと思つたが、それは大きな眼鏡違ひで、妾も今更後悔します。それに引きかへ鯱麿さんは、洋行までなすつて學問は出來る、品行はよし、その上あの通り優しい方だから……。それに鯱麿さんを嫌つて、水無雄さんがよいなんて……、御前の了簡が妾には解りません。

「さうでございませうが……妾には鯱麿さんは……。

「ナニ、それはいらぬ心配ぢや。どうして向うから欲しいと……。

一アラお父さん……。妾には鯱麿さんは、何うしても……嫁でございますと……申しますので。

「さうか、何うしても氣に入らん。何うしても水無雄が善いと云ふのぢやナ。

「ハイ……。

「そんならお前の勝手にしろ、……だ……が、艶……よく考へて見ろ。お前も五ッ六ッの子供ぢやなし、理窟の解らんと云ふ年でもなからう。一體女と云ふものは、人の妻と成つてその良人に一生をまかせんければならぬものぢや。――それ位の事は云はずとも知つて居ようが。……それだからその良人を擇むと云ふ事が一番大切ぢや。もし擇む事を誤つて、つまらん男に身をまかしたなら、實に一生の不幸ぢや。それで今お前は、何うあつても水無雄の方に行きたいと云ふけれども、水無雄は一體何う云ふ人物だと思ふ。……あんな女郎や藝妓に心を奪はれる樣な者に、一生身をまかして何が面白いぢやらう。私達まで苦勞が斷えんと云ふものぢや。……此位な事は解らんこともあるまい……。マ、然しこんなことは無理に勸めてもいかん。よく考へてからでないと判然とした答も出來まいから、まアよく獨りで考へて置くがよい。

一……ハイ、

眞綿で頸の父の說諭に、艶子はそれでもトは云ひ兼ねて、仕樣事なしにハイと返事はしたものの、元より此は考へるまでもない事。香水に鼻蓋して、肝油に舌鼓打つのも、その人の嗜好。傍から左右されぬは此の道ばかり。艶子は腰揚げの深い頃から、深く水無雄に馴染んで、互ひに君ならではト思ひ込んだ、一念年を積んで益々堅く、膠より濃やかな情交、誰が水をさしても離れたい氣は更に出ない。されば幾日考へたとて、＝そんなら鯱麿樣に＝ト、云出さう筈はないを。それ程には親は思はず、今に心も折れようと、片山へははや八分通り出來た挨拶。鯱麿は十二分の恭悅、＝ホネー、ムーンは熱海にして……＝。さりとは氣の早い。

此等の事で艶子は一方ならず氣を使つたのか、例の病氣はめツきり惡く成つて、今迄は一日置きに、此方から通うて居た醫者も、此頃では向うから、しかも每日の見舞。身は横に成つたぎり。枕元には藥壜に氷嚢。此が爲めに緣談の事は、暫時中止に成つたはよいが。傍には母と侍婢が交る〴〵、讀書きはなるべくさせぬがよろしいト、醫者の內諭で、罪もない硯箱

まで、御前遠く退けられたので、水無雄への手紙もかけない始末。向うから來た手紙まで、人に見られさうで危險でならない。そればかりか此頃は、鯱鷹が大心配で、毎日のやうに見舞に來る五月蠅さ。それやこれやで腦はヅキ〳〵、——醫者も藥も、陶犬瓦雞。

水無雄は鎌倉に身を忍ばして、無聊の中に送る一月あまり、今年も霜月の末となつた。元より此の鎌倉と云ふ處は、天然の勝地に富むばかりか、關東の奈良ともいはれて、美術の參考となるべき物も多く。其上此處へ來れば父は居ず、譏小言云ふ者もないので。水無雄の好きな畫學を研究するには、至極便宜な地であるから。家に居るより結句氣樂でよささうに思はれるけれど、そこが人情、傍に居た時は聞えぬ父樣と、お恨み申したこともあつたが。さて斯う離れて見ると、何となく心細くなつて、親が戀しくつてたまらない。が、其親には一方ならぬ心配をかけて、默つて家を飛出した位、今更おめおめと歸れもせず、孝行したい時親は居ないト、昔時から善く聞く語、心底から成る程と感じては、何うやら我が身の罪が恐ろしく成つて、遲蒔ながら後悔の芽を出した。遙に懷うて心を傷ましむるもの、只に是ばかりでなし。水無雄には艷子と云ふ意中の人があつて、此の人の事は更に腦裏を放逐することが出來ない。＝今頃は何うして居るか……病氣は何うであらう＝ト、例の寫眞を取り出しては、珠數を持たぬ男八重垣。その代り筆を持つて、その姿を繪に書くのが、苦勞の中の僅かの樂しみ。雨がショボ〳〵降つて鐘の音近く聞える日なぞは、家に居ながら袖に露、實に腸を絞られる樣に覺えた。

此を物に譬ふれば、今水無雄は畫學と云ふ情婦を連れて暫時深山の侘住居。手鍋下げたり絲車、賤の手業の苦勞はしても、誰憚らぬ睦ましさである。然し此では野合も同然、君子の潔しとする所でないから、どうがなして親の許可を受けたい、明日にも歸參のかなふやうにト、その事ばかり常に念じて居るのだ。處が親爺はその畫學を、賣女か茶屋女の樣に卑んで。そんな者は家に寄せ付けないト云ふ。水無雄は腐れ緣で思ひ切られぬ。その間を取りなす粹な兄はありながら、何としたか其後音沙汰なしだから、家の樣子が一向知れないで、實に氣掛りでならない。——氣掛りと云へば、まだ氣掛りでならぬ事。——まことの戀人なる艷子の方からも、……ほんにサッハリ音信が絕えた。もしや病氣でも惡くなつたかト、案じて問合せた手紙、——無殘梨の礫。＝これは不思議、もしや露顯でもしはせぬか……、そんなら追手が來さうなもの……＝ト、腕を組んでもさらに解らない。解らないとなると、ソロ〳〵頭をあげる疑と云ふ曲者。＝もしや……＝と云ふ念が起つたが、急いでそれを打ち消して、＝まさか……＝。初めの程は自分でも快くないと見えて、頻りに艷子を辯護して、吾が輕忽を遣り込めて見たが、あまり音信が無さすぎるので、辯護の反證が遂に立たず。何うやら忌はしい想像を、頭腦の中に畫き初めた。——思ひ切つて消しても、ツイ又畫く……

もし此の想像の畫が、果して眞を寫したものであつたらば何うであらう。水無雄は纖の拔けた捨小舟、遂に浮瀨はあるまい。親には捨てられ、朋友は無し。此の廣い世の中に、吾を愛してくれ、不憫がつて呉れ、吾を慰めてくれ、勵まして呉れ、實に吾が杖とも柱ともなつて呉れたは、只一人あの艷子であつたに、その艷子に今又捨てられて何としよう。一念爰に至る毎に、心緒は益々纏れ返つて、自

力では解くことならず。寝ても忌はしい夢ばかり。こんなことは無いと信じても、又起る妄念妄想。身、佛の傍に居ながら、心は煩悩の雲霧に覆はれて、色即是空と悟ること出來ず。相好圓滿の阿彌陀樣。その清ました顏が恨めしく思はれ。諸行無常を敎へる鐘、却つて斷腸の媒と成つた。

すると、或る朝主人の和尙は手に一枚の新聞を持ちながら、水無雄の部屋へやつて來て、

「石山さん、お目出たうございます。

誕生に悔みを云はれる樣な、水無雄はいぶかしげな顏で、

「ヘッ、何がです。

「先達てはお兄さんが。

「ヘー、兄が……どうしてお目出たいのです。

「まだ御存じありませんか、それははや……、

それぢや此を御覽なさい。

渡す新聞、昨日發刊の東京新聞。＝此處を＝ト指された處を讀んで見ると、

○學士結婚　東京法律學校幹事、米國法學士石山鯱麿君は此程糸邊豊作氏の令孃艷子(十七)と結婚の契約を結ばれ、不日芝紅葉館に於て、盛なる婚姻式を行はるゝ由。云々。

無殘、懸崖の上に立つて居るものを、突落した此の報知。

…………………………

「お艷さん、此間はお目出度う。もう此からは貴孃は私の姉さんですネ。姉さん……實に今までは色々失禮を申しました。どうか今迄のことは水に流して下さい……。それで私は……もはや此世に望があ＝ませんから……、兒ケ淵から身をなげて……死んで仕舞ひます。貴孃は幾久しく兄と一所に……。

枕元で物云ふは、確かに水無雄の聲。艷子は起き直つて見やると、――何うして此處に、――水無雄がションボリと坐つて居る。見れば顏は青ざめて、髮から衣服は夕立に逢つたやう、ビッショリ。

＝アラ水無雄さん、何うなすつたノ＝。

ト云はうとしても咽が引付いて云へないから、只偏ひ寄つて水無雄の手にすがらうとすると、

「アラお孃樣……、お手洗でございますか。

一エヽ驚いた、……お前かい。

「又お夢を御覽遊ばしましたネ。……サ、冷えるといけません、……よく召してお休みあそばせ……。

侍婢は甲斐々々しく、臥被を肩からかけてやるのを、艷子は音無しく着て又枕に就いたが、まだ轟く胸、臥被も震ふまでに……。

すると又枕邊に水無雄の聲で、＝此世に望はありませんから……貴孃は幾久しく……＝起き返つて見れば、――薄暗い行燈の小影に水無雄がションボリ。寄らうとすれば、侍婢が看病につかれて、舟を漕いで居るばかり。氣丈な艷子も、あまりの不思議さに、薄氣味惡くなつてたまらない。眼は妙に冴えて何うしても眠られず。只此の時に鋭くなるは、腦の働きばかり。

今のは確かに水無雄さん、何うしても夢らしくない、ほんとに來たに違ひ無い。……が……もし幽靈……。まさかそんなことは……、矢張り腦が惡い故か。……それにしてもいやな夢、――妾が鯱麿さんと婚姻した、……水無雄さんが兒ケ淵から。しかも二度まで同じ事……。アヽ此間あんな新聞が出たから、もし水無雄さんが見でもしたらト、案じて居るから此樣夢を。……それにしても死ぬなんて……、アヽ何か變な事でもありはしないか……。アヽそんな事がなければよいが……。此頃は手紙もあげられず、妾の心をお知らせ申す事が出來ないから、さぞ恨んでいらつ

しやるだらう、……その故か此頃はさつぱりお音信がない……。もしや其等のことで思ひ迫つて……、短氣な事をなさりはしまいか、……兎に角嫌な今夜の夢、……明日にも鎌倉へ尋ねて行つて……、それも出來ない、今の此身。……ア、何うしよう、……寧そ思ひ切つて、ナニ行かれぬこともあるまい……。然し傍には始終人が居て、逃げる隙もあるまいネ。――オヽさうだ、明日は御客樣がある日とやら、その混雜に取りまぎれて……、オヽさうぢや、オヽさうぢや　エヽ今夜の夜の長いこと、まだ明日にならぬかいナア……＝。

……………………

其翌日の夕方、鎌倉の大悲院では道上寺の活禪・

一大悲院とおつしやるは此方でございますか。

一ハイ、當寺でございます。

一ヽア、マア嬉しかつた一ア、此方に石山水無瀬樣とおつしやる方が下宿なすつて……。

一ハイいらつしやいましたがナ、後の方は昨日もう御立ちになりました。

一ヘエ、アノ昨日、それは何地の方へ……。

一ハイ、……是から西の方へ行くとおつしやりましたから、大方京か大坂へでもいらつしやいましたらう。

＝西の方へ＝、はや氣に掛る言葉。艶子の顔色は變つた。

最先からの樣子、合點行かずト見て居た和尚は、やがて言葉を和げて、

一一體貴孃は、何方でいらつしやるので。

「ハイ……妾は……アノ東京から……妹でございます。

「オヽ、左樣でいらつしやいますか。そんなら早速お願ひ申しませう、昨日石山さんが御立ちになる時此を後で東京へ送つてくれと、賴まれたものが御座いますが……丁度貴孃がいらしつたから、幸ひ御願ひ申しませう。

取り出して渡した書包み。郵便で送るやうにして、表は父への名あて。さてこそと封とくとく、中をあけて見れば。父上樣、母上樣、兄上樣ト書置が三通。それに短册が一枚、歌が一首。

色見えで移ろふ花に迷ひてし
　　胡蝶の夢の今覺めにけり

＝そんなら矢張り、エヽ遲かつた〳〵＝。

* * * * * * *

冬の日の氣の短さ、はや身を沈めてしまつた。取りのこされた五日許りの月、此も後追うて西へ西へと傾く影。名殘りの光を梢に止めても、樹の下は只眞闇。――木の葉をむしる木枯、樹は泣いて居る。岸をゆする荒波、岩は怒つて居る。兩側の小笹枯艸、これまでが風にいぢめられて右往左往。木の根捨石不作法に算を亂して、やゝもすれば足を取らうとする。此の危險い山路、此の凄い山路。――

日暮れては誰詣づる者もない、江の島の奥津宮の邊り。貝細工屋も店をしまつて山を下りたから、今は人の臭氣もしない。かゝる處へ、凄や、鐵輪の靈か、　若い女が只一人、見れば誰あらう艶子。束髪は何時振り解いたか、綠の黒髪青ざめた顔に亂れかゝり。下駄は何處で踏み切らしたか、足は素足のまゝ、……岩に破られた血痕も見える。――心も空、足も空。體もあらはに、帶は土を拂つて……。

暗にもそれと知つた路。社殿の左手から、螺狀の石段を下りること三十間ばかり。右の方に岩高く出て、形をかしげな磯馴松、海の上に突出して居る處へ、匍ひ登つてホッと息氣。松の根に取り着いたまゝ、暫時は頭も上げ得ず、胸を押さへて肩で息する。苦しさうな。

（原本插畫）

此處は名に負ふ兒ヶ淵。その昔白菊と云ふ稚兒が、思ひ迫つて身を投げた處――それも戀、これも戀。彼は念者に先つて死す。吾は戀人に取殘されて、跡追うて死ぬその悲しさ。――思ひ出せば此年の夏、父母に伴はれ、戀人も諸共に、此の山に登つて、此の淵にも遊んだが。あの面白かつた山が、今死出の山に成らうとは。あの景色の好かつた淵が、今奈落の淵に成らうとは……、吾も戀人も氣が付かうか。エヽ何の因果で此の最期、親には不孝夫には、不貞の者よと思はれた悔しさ……。エヽもう思ふまい思ふまい。――アヽあの岩、魚板と云はれるからは、吾もその上で居られるか。オヽ此の松、龍燈の名が實なら、吾が冥路を照らしてくれ。――彼の人の亡魂か、潮に映つて青く見える漁火。――吾が死を急がすか、雲を縫うて走る片破月。

艶子は漸くに立上つて、今死ぬ身にも女のたしなみ、取亂した衣紋をつくろひ、潮風に取られる裳を、かき合せて膝でおさへ。イザ飛込まうと思ひながらも、松の幹にすがり。戰へる足を踏みしめて、キッと見下せば。――蟠る岩、躍る波、はや眼は眩んで、

――水無雄さん、申譯は只今。――御父樣、御母樣、どうぞ許して下さいまし。南無……。

念ずる暇もなく、北風一陣。手は松の皮を握んだまゝ、足は土を……。無殘、波は今苛つて一打ち、岩を。散るは浪の花。

# すみれ日記

噫冷淡！ 谷君！ 君は余を賞めこもくれず、動もすれば呼んで冷淡といふ。成程余が心は冷淡であらう。余自らも亦それを認めぬではない。が、若し其の所謂冷淡が、此の五尺の體を護つて、或る危險より、未然に逃れしめたとすれば、なんと其の功力も、難有いものではあるまいか。余とても亦一個の人間である。只一も二もなく冷淡と云はれては、餘り快い心地はせぬものの、其の冷淡の功力の少なからぬを思へば、又私かに自ら慰めもする。

いでや其の冷淡の歴史を、いま日記から抜萃して、試みに君以外の人に語らう。それでも猶冷淡とのみ云はれるなら。……噫、余は眞實に冷淡な男である。

## 第一日（三月二十七日）

『谷野さん、御飯よ。』

日に幾度か、林檎色の頬を半分見せて、可愛らしい聲を掛けたのは、宿の主の娘で、今年十歳になる、メリーである。

余は其聲を聞くと同時に、讀みかけた本を机に伏せて、直ぐに行かうとするメリーを呼びとめ、

『メリーさん、一寸お待ちなさい。忘れて居た、好い物をあげませう。』

云ひながら衣袋の中から、今日學校の歸途に買つて來た、オステルン祭の贈物に用ゆる、鷄卵形の小さい香箱を出した。

それと見てメリーは、遠慮もなく驅込みながら、『マア難有う、綺麗だこと。』と云ふ中、はやわが手から受取つて、嬉しさうに裏表を眺めて、やがてかう尋ねた。

『此品貴郞、何處でお買ひなすつて？』

『今日學校の歸途に、フリーデル街で買ひました。』

皆まで聞かずメリーは、

『あゝ、それではロザの家で買つたのネ。……ロザ！ 貴郞もあの娘好き？』

余は其答をためらふ中、メリーは物ずきにわが顏を、ぢつと見込んで居たが、やがて又其箱を眺めて、

『ロザの賣つてくれた箱なら、妾尚の事大切にしようや。』と云つた。

余はそれに力を得て、『それは又何故？』と問ひ返すと、メリーはさも仔細らしく、

『さうねエ。貴郞は此處へいらしつてから、そんなに日が經たないから、まだ御存じないでせう。あの娘はほんとに親孝行なのよ……それでもほんとに可哀さうなのよ。』

『まア、さうなのですか、私はちつとも知りませんでした。今日初めて行つたんです。』

『さう、まだ十六ですけれども、ほんとに感心な娘なのよ。だからこれからは、紙やなんか、彼處で買つてやつて下さいな。』

『さうしませう……見かけは何だか少弱た店ですね。』

『だから可哀さうなんだワ。彼の娘の阿母さんは賤人だつたんですけども、もう死んぢまつて……阿父さんばかりなのよ。……その阿父さんがほんとに可厭な人なのよ。お酒が好きで、賭博が好きで……それで常時あの娘を酷い目に遭はすのよ。』とまで年の行かない者の癖で、急き込み調子に話し初めたが、又俄かに思ひ出したやうに、『オ、妾何うしよう、すつかり忘れて

しまつて。——さア食堂へ行きませう！』と、はやわが手を取つた。

あゝ可憐たるロザ！ 余が此のハルレへ來てから、汝を見たのは、實は今日が初度ではない。今日から七日ほど前の夕方、汝が店口の柱にもたれて、暮れ遲い春の空を、物思はしげに見上げて居た時であつた。然し其時は、只汝の、情を含んで而も邪氣の無い、寧ろ東洋人の嗜好に適ふ容貌に、端なくわが眼を惹かれて、爲めに散步の杖を停めたのみであつたが、今日は不圖思ひ付いて、メリーへの贈物を買つたのが、そもそも緣の緒となつて、初めて其聲を聞き、やがてメリーの物語に、其名も其の素性も、略知り得る事が出來たのである。

## 第二日 （四月二日）

名も知れ、素性も知れて見ると、譯もなく又懷かしい樣な氣がして、其後は、幾度となく胸の中に繰返されたロザに就てのメリーの話は、今日も亦講義が濟んで、敎場の窓に倚りかゝつて居る時、忽ち胸に浮んで來て、俄かにその顏が見度くなり、今日は歸途に寄つて見ようと、坐ろに其事を樂しみに思へば、さて正午迄の待遠さ！

やがて退校の鐘が鳴つた。余は逸早く講堂を出た、いつも途中まで一所に歸る 同級生の瑞西人も殘して。

少し迂廻路をしてフリーデル街へ出で、ロザの店へ行つて見ると、折よくロザは只一人、編物をしながら店に居た。

余はそれを一目見た時、はやくも怪しい胸騷を覺えた。

それを紛らす心で、わざと無造作に、『紙を吳れんか！』と聲をかけながら這入ると、ロザは直ぐに立つて來て、例の涼しい目に歡迎の意を表しながら、

『いらつしやい。紙ですか。』

さも輕い、鈴の樣なその聲！

『さう……紙！』

『手紙をお書きなさいますか。……それとも罫紙ですか。』と尋ねる間、始終わが顏を凝視めて居た。

余は見られるほど心がおくれて、『罫紙！』と答へたのも頗るおぼろげ、我耳にさへ定かに聞えなかつたが、それでも云つたのは確かに云つたと見えて、ロザは直ぐに向うの棚から、三種許りの罫紙を取り出し、それを前の臺の上に列べて、あれこれと余に見せた。

彼の軟かな體は、——肩から肩へ體溫の傳はるまで、ぴつたりとわが肩に着いて、其の服からほのめく香氣は、徐ろにわが鼻を弄んだ。

此時此場に立つて、余が目は爭で紙の良否を見分けよう！

只彼がよいと云ふまゝに、其中の一種を買つて、代を拂つて、其紙を手に持つて見ると、急に、又其場には居悪いやうな氣がして、直ぐに店を出たが、急足で五六間來た時、何氣なく後をふり返つて見ると、ロザは又わざわざ店口まで出て、其處の柱にもたれて、何の爲めか、——此方を見送つて居た。

## 第三日 （四月六日）

懷かしさは日增しに募る。此頃は學校の歸途に、御苦勞にも迂廻路をして、其店の前を通る事にした。

今日も丁度其前まで來ると、俄かに其店の中から、『高野さんノヽ！』と呼ぶ聲がする。

吃驚して立止まつて、其中を見込むと、これは例のメリーであつた。

メリーは奧から走つて出て、

『貴郞、今歸るの？』

『はい！』

『そんなら一所に行きませう。』

と云ひながら又引返して、ロザの傍に置いた本を取つて、其まゝ出ようとして、又ロザに呼び止められて、何か少し話をした後、『さよなら。』と云ひ棄てゝ驅けて來た。

『丁度好い處でしたネ。一所に行きませう。』と、連れ立つて歩き出したが、もしや又見送つてはゐまいかと、思ひながらふり返ると、果して傍の戸口にもたれて、ロザは此方を見送つて居た。

けれどもメリーはそれに氣が付かず、『ねエ谷さん！』と囁しかけたから、『何です？』と問ひ返すと、

『貴郎、此間紙をお買ひなすつて？』

『買ひましたよ。』

『さう……それから此頃は、毎日あの前をお通りなさるつてねエ。』

何の罪もない言葉も、余には或る隱事を摑かれでもしたやうに、ヒシとばかり胸にこたへて、此の五尺の[illegible]に、三尺に足らぬ少女の爲めに、おそろしく[illegible]られるやうに覺えた。

然し此點によつて見ると、彼も流石に、吾を通り一遍の[illegible]とは[illegible]さず、――少しは心に留めて居るらしい。

かう思ふと、俄かに胸がむづ痒くなつた。

## 第四日（四月七日）

朝の牛乳を飲んで居る處へ、日本からの郵便が屆いた。見れば見覺えのある筆蹟、これは谷からの書状である。

谷、名を三郎と云ふ。わが當年の同窓の學友の中で、最も親しく交つたのは、實に此の谷三郎である。二人は丁度同年であるが、知識に於ても經驗に於ても、比較的彼は余より富んで居た故、余は常に兄の如く思ひ、彼も亦余を眞身の弟も及ばぬ程愛してくれた。――彼のアインパール（一對）の渾名の下に、お揃ひの帽子を冠つて、ペンキ塗の校門を出入した、一雙の少年を記憶する者は、恐らく今も少なくはあるまい。

或時は直言を以て誡め、或時は温言を以て慰めた、彼が情に厚い特性は、余が日本を去つてより、殆んど六年の間、更に消長する氣色も見えず、初めに約束して置いた、月一回宛の消息を、怪我にも怠つた事はなかつた。――他の故人は去る者日々に疎しの譬喩にもれず、時經るほど無沙汰に成つて、此の一二年の間、全く吾を忘れて居るのに。

彼は余よりも一年前に、首尾好く學校を卒業したが、根が大の文學好きであつた故、韻文に小説に、學課以外の頭を痛めて、假初の彼の雅號は、はや其頃から世に聞えて居た。――彼が情に厚い特質、彼が感に深い天性。彼が遂に詩人たらんと試みたのも、蓋し無理ならぬ事だ。

余は又彼の祕密を知つて居る。彼には十年來、一個の戀人のある事を知つて居る。互ひに杖を曳いて、江東に花を探るの日、共に手を携へて、墨堤に翠を拾ふの時、彼は屢々其の意中を余に訴へた事がある。

余は又彼に反して、あまり事物に執着せぬ質でもあり、殊にはまだ年のゆかぬ其頃、戀愛の何たることも解せぬ位であつた故、更に其意を掛みかねて居たが、彼が心のあまりに切なのに動かされて、只何の理由もなく、後には一所に成つて、某孃を慕はしく思ふやうになつた。笑ふなよ此の雷同の戀を。余は只同情を表したのみである。

然し日本を發する時、將に別に臨んでは、實にかう云ふ約束をした。

――君が彼の孃を戀ふのは、至極道理である。僕

とても常に贊成する處であるが、然し、願く
は僕の歸朝する迄は、彼の嬢を迎へる事なく、
矢張り今の儘の獨身で居て呉れよ。かう云へば
とて、君が彼の花の如き人を携へて、横濱の
波止場に僕を迎へることの、如何許り樂しから
うかといふことも、決して僕は思はぬではない
が。縱令其の翌日、直ちにホネームーンの途に
上るとも、僕の歸朝の日だけは、相も變らぬ書
生風で、只獨り走り寄つて來て、僕の頸を抱
いてくれ給へ。』と搔口說くやうに云つた處、
彼は何と答へたか！『無論の事！　僕とても自
分の好む道を進むには、早くより妻を迎へる事
の、大不利益たる事を認めて居る。僕は三十歳
になる迄、盟つて獨身の生活をする。其代り君
にも、よく今迄に例のある、目の色髮の色の異
つた、怪しい動物の手を携へて、日本の波止場
に上るやうな、見苦しい事はあるまいネ。』『無
論の事！』

　これは實に、余が横濱を出發の前夜、船宿の
二階に別杯を酌んで、一夜眠らずに語り明した
時、堅く盟つた言葉である。

　さて其時も約束した通り、余は滿四年で歸朝
する心算であつた處、噫何たる不幸ぞ！　去年
の夏思ひ設けぬ大病を患つて、其爲めに秋は
受ける筈のドクトル試驗を取り外し、心ならず
も、遂に一年延ばす事に成つた。さて此の一年
の永さ！

　去年の春の書信には、晩くも十一月には此地
を立つゆゑ、日本に着くのは十二月の下旬。
それから共に手を組んで、二十五の厄年を越さ
うと、手紙で谷とも打合せて、そればかりを樂
しみにして居たのに！　譬喩にも云ふ鶍の嘴、
其の目算はガラリと外れ、失望と落膽とは、交
もわが胸を衝いて來て、腸も千々に絞られた
が、其折此事を、彼に知らせてやつた處、彼
は又余より〻落膽して、其爲めに計畫した事ど
もを、愚癡のやうにならべたてゝ、恨むが如く
訴ふるが如く、常よりも永い書を寄せた事があ
る。

　さなきだに心の沈み勝な當時の余、此書を見
た時のせつなさは如何に？　皆まで讀まぬに胸
閉がつて、其日から三日ほどは、食も思ふ樣に
は進まなかつた位。

　あゝそれにつけても、大切なは余が身の將
來。今年の夏は是非とも業を卒へて、天晴れ名
譽を荷うて、一日も早く歸らねばならね。

　思うて此處に至つて、余は覺えず、案を拍つ
て蹶起した。

此の刺擊の爲めに、彼の可憐なロザの姿は、
暫〻わが腦裏を追はれて居たが、それも實に
暫くの間。やがて學校へ出て、講義を聞いて、さ
て退校といふ頃には、例の通り又思ひ出されて、
足は遠慮もなく、フリーデル街へと進んだ。

　然し此日は、如何したものかロザは居らず、
其代りに一人の男が、短く縮れた髯を搔きな
がら、深く沈んだ氣味の惡い目を光らせて、さ
も約らなさうに店番をして居た。あれがメリー
の話に聞いた、酒飲みで、賭博好きで、そして
常にロザを苦しめる、厄介な阿父であるかと思
ふと、誠に不快な感が起つた。

## 第五日（四月九日）

　此の曉に妙な夢を見た。
場所は日本で、時代は六七年前。余は彼の谷
と一所に、何事をか話しながら、學校の教場を
出て、其儘表の方へ行かうとするとき、門番所
の敷居の上に、しよんぼり彳んで、此方を見て
居る少女がある。見れば、これは例のロザだ。
但し其の衣服は、あまり美しからぬ日本服で、
まづは小使の娘であるやうに覺えた。

　余は不思議に思ひながら、再び其方を見返る
と、ロザは何か訴へたさうな眼に、而もよく見

れば涙を浮べて、ぢつと余を見送つて居る樣子だ。いかにも棄て難く覺えたから、余は直ぐに引返して、何か言葉をかけようとすると、谷は余が手を取つて、『何處へ行くのか。』と引きとめた。其眼には、あの憐れな少女の姿が、少しも這入らぬかのやうに。

然し余も亦、常になくそれに抵抗して、強く振り放さうとする。彼は何も引戻さうとする。此の爭ひの中に夢は破れたが、覺めての後も、この他愛もない夢が、萬更根のない事のやうにも思はれず、これから又懷かしさが增して、はては夢ならぬ、眞の姿が見度くなつて……

うか〳〵と學課を濟まして、うか〳〵と路を急いで、丁度店の前まで來た。

見ればロザは只一人、例の椅子にもたれては居るが、何故かぢつと首を垂れて、其癖編物をして居るでもなく、何やら考へ込んで居る。

此體に余は、何となく心元無くなつて、今は言葉を交さずには居られず、其側へつか〳〵と進んで行つて、『今日は！』と聲をかけたのは、我ながら不思議な膽力であつた。

ロザは重たげに椅子をはなれて、『オヤ いらつしやいまし。』と挨拶はしたが、まだ顏は得あげない。

宵ごしの雨を含んで、まだ旭に逢はぬ百合の花を、面り見るやうなその風情。忽ち今朝の夢の思ひ出されて、今は込みあげる情を抑へかね、遂に其の横顏を覗きながら、

『ロザ！』――面と向つて其名を呼んだのは、實に今日が初めてである。

ロザはさも沈んだ調子で、

『何でございます？』聲もどうやら濕んで居る。

『何うかしたの？』

『いゝえ、どうも致しません。』

『隱したつて私は知つてる……阿父さんに何か云はれたんだらう。』

此の一言に、ロザは思はず顏を擡げて、涙を持つ目を見張りながら、余が顏をぢつと凝視つたが、やがて物に激したやうに、

『あゝ高野さん！』と彼も初めてわが名を呼んで、而もぢつと手を握つた。

其手はブル〳〵と顫へて、一種の電氣を傳へるほどに、余が總身は、胸の下から靴の中まで、一時に脈管を躍らせた。

初めの勇氣もこれに呑まれて、兎角の語を次ぎかねて居る時、奧の方から靴音聞えて、誰やら此方へ來る樣子に、余は振返つて見ると、例の髯の短い、目の光る、頗る無氣味な顏は、戶の間から半分顯れたが、余の居るに遠慮をしたものか、髯の底の脣を、物云ひたげに動かした許りで、其まゝまた隱れてしまつた。其時ロザはと見ると、成るべく其の恐ろしい眼に射られないやうに、これは顏を外向けて居た。

いかにも意味のありさうな此場の仕儀。余は好事にも其を尋ねようとしたが、生憎此時客が這入つて來たゆゑ、余はそのまゝ別を告げて、心ならずも表へ出た。あとはまるで夢心地……何時の間にやら宿へ歸つた。

歸つてからも、絕えず此事のみ思ひ出されて、夕方の食事に臨むまでは、書も開かず、筆も握らず。

やがて晩食を濟まして後、主人夫婦がメリーと一所に、いつもの卓子を取りまいて、世間話に時を移した。

主人と云ふのは以前組合教會の執事を務めた人で、病身の爲めに今は職を辭したが、何時々は會堂へ出て、一場の說教を試みる事もある、云はゞ頗る嚴格な紳士だ。

細君はこれに引きかへて、まことに氣輕な、話の面白い、而も至つて親切な、純然たる一個の世話女房である。

主人はやがて余に向つて、
『高野さん、貴郎は幾歳でしたねエ？』
『二十六になります。』
『二十六？　まだ若いネ。……だが若い中が一番大切ですぜ。』
と、何か誡めるやうに云ふと、細君は直ぐに引取つて、
『でも良人！　高野さんは感心な方ですよ。此前にお世話をした芳見さんには、ほんとに妾は困りましたよ、から申しては何ですが……』と更に余の方を向いて、『貴郎、お腹をお立てなさるなよ。妾共では、先の芳見さんで懲りてますから、實は貴郎も、最初はお斷り申さうと思つたのですけども、教頭さんの御保證ですから、渋々お請合申したんですよ。處がまア、思つたよりは善い方で、御勉强はなさるし、夜遊はなさらず、何かによく氣がついて、心質が優しくつて……ですからあのメリーが、陰でどんなに貴郎を賞めて居ませう。』と辯にまかせて賞め立てた。
余は面前から賞められて、寧ろ大きに痛み入つて、只顔を赤めるばかり、果敢々々しい答も出來なかつた。
此時例に取られた芳見と云ふのは、余がフライブルヒに居た頃から、良からぬ噂を聞いた事のある男で、日本人の面汚しと、留學生一同の憤懣の種。——其人は左る紳商の息子で、早くより此地へ來て居たが、頗る怠惰者で、其癖玉突やカルタは大の得意で、舞蹈とビールは更に得意で、遂にある銘酒屋の女と、イタリーへ駈落したとやら云ふ、——言語道斷の男であるのだ。
されば、これほどの男と比較されて、苟も此の高野弘、たとひ如何に賞められたとて、元よりあまり嬉しくはないが、何故か此時は、——只に嬉しく無いのみならず、別に怪しい苦惱を覺えて、譬へば夏の蒸暑い夜、ランプの側で書物をするやうに、汗は何時となく襯衣を浸した。——
そも〳〵これは何故であらう？

## 第六日　（四月十一日）

强を挫き弱を扶けると云ふ程ではなくとも、兎に角數奇を憐れむ心は、人間誰にもあるものだ。況して多年天涯の孤客となつて、世の鹽を多少味うた者には、取りわけその同情が深いかと思はれる。
されば、左なきだに彼が無邪氣な容貌に、まづはや心を動かされて居た余、かの一昨日の出來事で、豫て聞いて居たメリーの話の、全く僞ならぬを確めてからは、猶一層の愛憐を催して、今は片時も忘れ難く、殆んど物在つてわが心を摑む如く、余は只ロザを憶ふの他、何事をも顧みる暇はなかつた。
窓を押せば、風は何時か雲を拂つて、日は柔かに前の花壇を照らして居る。鬱金香、釣鐘艸、さては名もしれぬ艸花の他には、薄桃色の薔薇の花、五六輪ほど咲きそめて居るのをはやくも見つけた一匹の虻が、頻りに其の四邊を飛び廻つては、時々接吻を試みて居る。
元より眺望といふほどの眺望でもないが、只温かい春の風の、靜かに花の香を送りながら、輕くわが頰を吹く心地好さ。余は窓にもたれたまゝ、暫くは恍惚として居た。
ロザは何時の間にかわが前に現はれて、或時はにつと笑み、或時はさめ〴〵と泣く。——余は眠らずに夢を見て居るのだ。
突然何處からか聲がした。
『高野さん！』
これに初めて我に復つて、聲のした方を見ると、向うの接骨木の生垣の蔭から、メリーは忽ち走りよつて、
『高野さん、何を見てるの？』

余は其の前髪を撫でながら、
『あまり花が綺麗ですから。……貴孃は？』
『妾もお花を見に來たの。……貴郎、いらつしやいな、彼方にもつと咲いてますよ。』
『さうですか。……そんなら行つて見ませうか。』
余も無聊に苦しんで居た折から、其の勸誘にまかせて、廊下から廻つて庭へ出ると、メリーはすぐにわが手を取つて、生垣の側から欅の木の下を過ぎ、廣庭に咲いて居る花を見せた後、やがて捨石に腰をかけた。吾も亦。
メリーはその側の芝生に、ちらほらと咲いて居る、しをらしい小さな艸花をさして、
『貴郎、あれ御存じ？』
と聞いた。余はそれを見てにツと笑ひながら、わざと、
『知りませんよ、何といふ花です？』
『知らなきや敎へてあげませうか、勿忘艸（フェルギスマインニヒト）よ。』
『さうですか、面白い名ですネ。一寸見ると菫に似たやうですネ。』
『矢張り菫の類なのでせう。……よくツラ、本の表紙やカードに書いてありませう。』
云ふ中に手を伸ばして、其の一輪を取つて一寸嗅いで見て、
『ほんとに好い香氣だ。貴郎、嗅いで御覽なさい！』と渡した。
余はそれを受取つて、
『ほんとに好い花ですネ。』
と器械的に答へたが、余はメリーに聞かずとも、此の花の名も知れば、又其の用所も知つて居るゆゑ、其の香氣を嗅ぐと同時に、何となく床しい心地がした。
余は又思ひ出して、
『メリーさん、今日は御留守番ですか。』
『えゝ、阿父さんも阿母さんも、此頃に御婚禮があるので、御親類へ行つてしまひましたもの。』
『御婚禮？　まア御めで度いのですネ。御親類の方が御貰ひなさるんですか、それとも何處へかいらつしやるの？』
『妾の叔母さんなのよ。……御醫者様ン處へ行くの。でも妾はその叔母さん、あんまり好きぢやないワ。妾を可愛がつてくれませんもの。』
『さうですか。……それでは貴孃、誰が一番好きなんです？』
戲れに尋ねて見ると、メリーは別に躊躇もせず、
『妾の好きなのは……貴郎……貴郎とロザ！』
あツ！　又やられた。余はギョッとして、狼狽へて、何の言葉も出し得ずに居ると、メリーは却つて訝しさうに、又少しは氣遣はしさうに、余が顏をぢつと見あげた。
さては無心の言葉であつたかと、相手が小兒だけに、余もやつと安堵して、わざと落付顏にかう尋ねた。
『貴孃、そんなにロザが好きなの？』
するとメリーは力を入れて、
『えゝ好き、大好きよ。だつて善い女ですもの。妾ヤあんな女と一所に居たいワ。』
『ハヽヽ、大層好きなんですねエ。』
『アラ何がをかしいの？　それぢやア貴郎は嫌ひ？』
『あんまり好きでもありませんよ。』
『アラ貴郎こそ如何かしてるワ。あんな善い女を……嫌ひだなんて……ほんとに可笑しいワ。』
と、はては脣を曲めて、むきに成つて辯護を初めた。――今は余も面白く成つたゆゑ、わざと心にもない非難を試みて、其の可愛らしい口から、『いゝえ。』『さうぢやないワ。』などの聲の出るのを、音樂よりも樂しく聞いた。――思へば我ながら人の惡い話だ。

が更に考へて見れば、余よりも亦メリーの方が、却つて人が惡いのかもしれない。――又してもロザの話を初めて、賴みもせぬに種々と賞め立てて、只さへ動いて居るわが心を、倘も頻りに掻き亂さうとするものを。

今日は何となく面白く暮らした。

## 第七日（四月十三日）

昨日も今日もあの店の前を通つて、ロザの顔は見ながらも、何故か妙に氣がおくれて、言葉をかはす事が出來なかつた。

不圖谷の事を思ひ出して、今日は返事を書かねばならぬと、此間の手紙を出して、今一度讀んで見た。彼は相變らず余を待つこと切に、其の文中には、「何時は確に日本に歸るか。」汝が歸つたら云々。」など、幾度となく繰返されてある。

余は彼の心を十分に知り、又彼の失望をも十分察して居る丈け、それ丈け又彼を慰める言葉に窮した。――只意氣地にのみ打たれて、我知らず淚の催されて、果は鄕愁潮の如くだ。

殊に其の文言の中で、一種異樣の刺擊を與へたのは、實に左の數句であつた。

（今更汝に云はんも如何なれど、余は客年の冬、已に彼の孃を迎ふ可かりしなり。されど例の契約あれば、今は種々の事情を排して、遂に一年の延期をなせり。かく云へばとて、汝はこれを愚癡と見爲すなかれ、余は此を口實にして、一年にても永き間、此の氣樂なる書生的生活を、繼續せしめんと思へばのみ。）

余は此の數句を讀んで、さて何と返事を仕よう？

筆は持つても思ふやうに動かず、却つて何事をか慚愧するやうに、怪しい苦惱を心頭に覺えて、自づと身體の麻痺れるやうになつたから、遂に思ひ切つて筆を棄て、其儘ソーハに體を投げかけて、我知らず溜息を吐いた。

此の爲めか、何となく不愉快で、書を見ても身に染みないゆゑ、かう云ふ時こそ散歩がよからうと、まだ晩食には間のあるのを幸ひ、常はあまり手に取らない杖を、室の隅から探し出して、ぶら／＼と公園の方へ出かけた。

昨日今日はオステルン祭の故か、公園は常に倍した賑ひだ。流行の晴衣を誇り顔の小娘、學校の休暇を嬉しがる學生、さては社會を冷眼に見る老紳士、浮世を面白がる若夫婦など、三々五々隊をなして、右に左に行きかふさまは、流石に目を慰めもする。

余は噴水の邊から、植込の蔭へ來て、其處にある共同椅子に腰をかけ、四邊の景色をながめて居ると、やがて向うの木蔭から、一群の男女が現はれた。

男は何れも二十二三、山の窪んだ帽子に、上も下もだぶ／＼した背廣服、見るからが生意氣な書生仲間だ。又それにまじる女は、十五六から十八九、帽子の嗜好衣服の華美さ、小劇場の俳優でなくば、コヒー屋の給事女、何れ素性の貴からぬものと見えた。

此種の男が、此種の女と連れ立つて、此種の場所を徘徊するのは、此種の時節にあまり珍らしくもないが、余は偶然ともなく故意ともなく、其方にのみ眼を注いだ。

件の一群は噴水の側まで進んで行つたが、それを見物しながら、頻りに評をして居る中、一人の男が、一人の女の手を引きよせると、又一人の男が、其女を引戾す。女は又引かれるまゝに、右へも行けば左へも靡いて、妙に體をもつれさせながら、さも面白さうに笑つて居る。

只これ一場の戲樂、言はゞそれ迄の事であるが、余には此の戲樂が、何となく不愉快に覺え

て、今は見るに堪へられなくなつて、(それなら初めから見なければよいのに)、音無く共同椅子を離れて、其まゝ宿へと急いだ。——往きにも増して足の速さ。

今日は何となく約らなく暮らした。

## 第八日　(四月十七日)

十五日から學校も休暇と成つた。

二三日菫を見ないと、又何となく氣が鬱していけない。今日は菫を見に行かう。

此の休暇の間に、長い論文を書かなければならない。それにはちとペンが入るから、さうだ、それを買ひに行かう。

かう思つて宿を出たのは、丁度午後であつた。

ロザの店へ來て見ると、今日は生憎阿父も出て居た。然し今更後へも引かれないから、其まますつと這入つて、『ペンを!』と云つた。

ロザはペンの箱を出して、余が前へ出した。余はあれこれと選んで見たが、心が迷つて何れとも定めかね、且は、今一度此處へ來る口實にと思つて、やがてかう云つた。

『何れがいゝか解らないから、これを一種づつ貸してくれないか。試しにつかつて見るから。』

ロザは快く承諾して、

『宜しうございます、御持ち下さいまし。』

と、十五六種もあるペンを、一種づつ選りわけたが、そのまゝでは渡せぬゆゑ、『只今入れ物を。』と云ひながら隅の方へ行つて、棚の中から一個の紙箱を出して、その中へペンを入れて、丁寧に紐までかけて、『お待ち遠さま。』と余に渡した。

元より小さな紙箱、でも十五六本のペンに對しては、不釣合に大きいので、余は少し不審に思ふと、側に居た阿父もそれを見咎めて、

『ロザ! もつと小さな箱があるだらう。』

と云つたが、ロザは只、

『一寸見當りませんから。』

と輕く答へて、急いで余に渡した。

然し別に邪魔にもならないから、余はその儘受取つて、

『ナニそれで宜しい。何れ又。』

と言葉を殘して店を出た。——實は此時に、まだ他に話柄があるやうにもおぼえ、又氣の所爲かロザの方でも、何となく物を云ひ度さうに見えたが、何しろ今日は阿父が、余にも禁物な阿父が、側にがん張つて居たのに心おくれて、名殘り惜しくも別れてしまつた。

あまりの名殘り惜しさに、店を出てから二度まで ふり返つたが、今日は見送つて居なかつた。——これも阿父が居たからであらう。

不圖氣が付いて見ると、箱の中に音が無い。——高が十五六本のペン、たとひ紙に包まれて居るとも、割合に大きな箱の中に入れられて、動かないと云ふ筈はない、音がしないと云ふ理窟がない。と、から考へて見ると、何やら箱の中が心元なく覺えたが、然し途中で開ける事もならぬから、急いで宿へ歸つて、急いで紐を解いて、急いで中を見て——驚いた。——中には綺麗な花把が一つ!

これはと思つて手に取ると、同時に香氣は鼻を撲つた。——これは菫と勿忘艸とで、巧みにこしらへた花把である。噫菫と勿忘艸!——それも何の爲めであらう?

暫く之を見詰めて居たわが目は、やがて壁の方を向いて、何を見るともなく、只茫然としてしまつた。

人あつて傍から之を見たなら、恐らく石象の如くであつたらう。然し其胸は劇しく躍つて、鼓動は我と我が耳に聞えた。

あゝ是實に只事でない。

ロザは一體何と思つて居るのだらう。否、余

に對して如何なる感じを持つて居るのだらう？此の疑問に對して、余はもはや猶豫をしない、彼も恐らく余を慕ふのであらう。
と、猶豫もなく此の判斷を下して、ぞつとする程嬉しく思つて、さて又驚いて打ち消した。——富の籤に當つた人の、その夢ならぬを疑ふやうに。

此日は日の暮れるまで、夜の更けるまで、遂に夜の明けるまで、只此事のみ、百度千度繰返して、種々なる解釋を試みたが、只嬉しいとも恥かしいともつかず、苦しいやうな恐ろしいやうな、何とも云はれぬ感情にのみ滿たされて、之を判ずべき智の鏡は、鈍くも光を奪はれてしまつた。——云はゞ只煩悶する許り。果は頭が岑々と痛み出した。

## 第九日 （四月十八日）

今日はいよ〳〵決心した。——余は斷じて、今後再びかのロザを見まい。

さりとは餘り酷ではないか。實に此の半月餘り、朝に懷ひ夕に思ひ、夢に現に、心はそれにのみ奪はれて居た彼の少女、只の一日に斷念して、再び之を見まいと云ふ、そも何の罪科あつてか。——さりとは餘り酷ではないか。

恐らくかう云ふ人もあらう、然しこれには又相應な理由がある。昨日は精神が錯亂して居たが、今日は流石に心も靜穩であるから、その理由を陳べることも出來る。

そも〳〵余がロザを懷うたのは、其實メリーの不問語が、大いに與つて力のある處で、其爲めに起る一種の仁俠心から、彼の境遇を憐みもし、彼が爲人を愛しもしたのだ。尤も彼の容貌の、多少其前から心を動かしたことは、元より白狀せぬではないが、然しその力は薄弱なもので、只其の力のみならば、苟も此の高野弘、下らぬ苦勞に半月餘りの光陰を、ムザムザ費すやうな馬鹿は見ない。——あゝかう云ふと大層豪さうだ。

さればこそ其の初め、彼を憐にも懷かしくも思つたが、それは只わが意の動くがまゝに、暫く委せておいたのみで、此が爲めに敢て彼の愛を買ひ彼の歡を求めようなどとは、蓋し思ひもよらぬ處であつた。語を換へて云はうなら、余は只わが心を喜ばすが爲めにこそ、屢々訪れたれ、彼が我手を堅く握つて、感謝の涙を注ぎかけ、余に花把を贈つて、愛慕の意を表しようなどとは、元より微塵も豫期しては居なかつた。尤も彼の店口に立つて、懷かしげに見送つた可憐な姿には、少なからぬ喜悅を感じたけれど、此等は幼稚の戀の常として、大目に見て貰はねばならぬ。

處で今、——彼の意中を覗ふに由なく、只自家の情熱に驅られて、無邪氣な戀路を辿つて居た當時は知らず、——今少なくとも彼の意中の、同じ方面に向つて居ることを、確かに認め得た以上は、更に之に對して、共にすべきか共にせざるべきか、去就何れをとるべきか、——茲に前途の方針をば、定めねばならぬといふ必要が起る。

さて已に其の必要が起つて、其の方針を定めるといふ事になつて見ると、又更に一個の問題が起る。それは他でもない、——此世に於ける戀愛の價値！ 此からまづ研究せずばなるまい。

其處で試みに、自家の戀愛論を持出して見よう。——あゝ此論では、屢々谷と衝突した事があつた。

余は思ふ、——世の中に戀ほど下らないものがあらうか。或は之を情の粹と云ひ、或は之を詩の美と云ふ。成程情の粹であらう、詩の美でもあらう、然しそれは情の側、詩の側から見た觀念で、飜つて其の反對の側から見たなら

ば、實に是ほど下らないものはあるまい。――要するに戀愛と社會とは、語を換へれば、情と理、實に此の情と理とは、冷熱殆んど水火の差である。所詮兩立の出來ないものである。

例へば茲に一人の男がある。やがて一人の女と情を通じて、其戀の圓滿ならんを願つて居た。處が社會の制裁は、到底其戀の成就を許さない。然し其の戀愛の熱度も、所詮社會の制裁に服さない。其處で其の男は、遂に社會を棄てた。親を棄て女を棄て、國を棄て家を棄て、果は其身をも棄てて、全く戀愛の犧牲に成つたとする。其時彼の所謂詩人の輩は、之を情の美極、愛の純極として、大いに賞讃するであらう。然し社會は何といふか。――云ふ迄もなく此男を、無分別として罵るであらう。

更に例を反對に取らう。茲に一人の男があつて、多年一人の女と、餘念もなく戀愛に耽つて居た。無論此戀には微塵の詐僞もなく、半點の穢點もない。處が偶々社會の制裁の爲めに、此戀を繼續する事が出來なくなつた時に、男は情と理とを天秤に掛けて、理の方に重きを置き、遂に其女を棄てたとする。此時社會は、よく己に克つた、よく情を制したよ、定めてその男を稱揚するであらう。然し棄てられた女は何と云ふか。――云ふ迄もなく此男を、不人情として恨むであらう。

くどいやうだが、今一歩進んで、今度は例を目前に取らう。

余は元より彼のロザを愛して居る。彼も亦余を慕うて居る。其處で今假りに此の二人が、茲に情を通じたとする。其戀は如何にあらうか。若氣の過失と、或者は惜みもしよう。惡魔に魅入られたと、或者は罵りもしよう。さて又何が面白いのかと、或者は嘲りもしよう。しかしそれ等は皆局外者である。其局に當るロザと高野、彼と余との間には、無論此等の冷笑熱罵を顧みる餘裕の無い丈け、それ丈け戀は純粹のものと成るだらう。――然し乍ら、實に然し乍らである、此の意地の惡い社會は、決して此の純粹の戀を容れまい。人種が異つて居るとか、位置が違つて居るとか、世間の口がどうであるとか、一家の折合ひがかうであるとか、やれ滑つたの轉んだのと、形而下の面倒臭い故障が起つて、到底此の戀愛の圓滿を妨げ、其の快樂を傷けずには措くまい。さて其時に當つて、余は果して何れに就くであらう？ 無分別と云はれても、不人情となるを好むまいか。不人情と恨まれても、無分別と罵られるのを望むまいか。――これが差當つての問題である。五感もあれば七情も備へて居る。苟も互ひに愛慕の意中を明かして、已に情を通じた曉には、よしや多少の智力は有するとも、夫を以て次第に高まる熱情を、善く制し得ると否とは、蓋し覺束ない限である、況して戀愛には、靈妙不可思議な魔力があつて、目に見え手にも觸れぬ間に、何日か人間を導いて、黑闇々裡に陷れるものを。――噫、これを思へば、いよ〳〵以て覺束ない。

處で余は如何なる身であるか。――余には棄て難い故鄕がある、余には棄て難い兩親がある、余には棄て難い朋友がある、而も加ふるに目前には、又棄て難い大事がある、實に今の余たるものは、只うか〳〵と戀に浮れ、おめ〳〵と戀に溺れ得る樣な、そんな氣樂な身の上ではないのだ。

思うて此に至つて、忽ち芳見某の事を考へ出して、我知らず身を顫はせて、余は遂に決心した。――今後再び彼のロザを見まいと。

斷念の理由はまづかうである。

さてから斷念して見ると、眼前の雲霧は一時に晴れて、青天一白、富嶽の頂を望むの思ひがした。

此時余が心の底の、或る何處かの隅に、何かは知らず物あつて、余を尻目で睨むやうに覺えた。然し余も騎虎の勢、それを顧みる暇は無かつた。
余は俄かに、非常なえらい人物に成つたやうに覺えて、心が妙に勇み立つて、氣が不思議に進んだ。若し傍に人があつたなら、其人を矢鱈に打つたかもしれない。
兎に角に此の瞬間の余は、天の祐か神の後楯でも得たやうに、精神も頗る確かで、氣力も大きに強く、さア誰でも來いと、云ひたいやうな心地であつた。
其處で直ぐに筆を取つて、谷への返事を書き初めた。此間の澁滯に似ず、今日は面白い樣に筆が進んだ。一氣呵成、立處に五六枚書いた。其中に無論ロザの事もあつた。そしてそれを斷念した勇氣を、さも誇り顏にかき立てた。
よし、これでよしと、其儘封を仕かけたが、俄かに心付いて、獨り點頭いて、例の花把の中から、菫と勿忘艸を一輪づつ拔き取り、彼の感を一層深くするつもりで、手紙の中へ封じ込んだ。
此勢で論文を書いたら、嘸巧く行くであらうと、筆の序に着手して見たが、さて此は頭を使ふものだけに、中々手紙の樣にはゆかず、二度三度書き直す中には、何となく面倒に成つて來て、此の方は思ひ止まつた。
要するに今日は獨りで愉快がつて居た。然し其實は、少し狂人染みた點もあつた。

## 第十日　（四月二十日）

机の上を見ると、まだ此間の花把は、全く凋れ果てもせず、筆架の側に横はつて居る。手に取りあげて見ると、幽かに殘る其香は、恰も死に垂んとする者の、僅かに呼吸を通はすが如く、却つて人を動かさうとする。
流石に棄てかねて、手の中に弄んで居る中に、何者か耳の底で、私かに耳語きでもしたやうに、不圖胸に浮んだ事がある。――ロザは今頃何をして居るだらう？
すると不思議だ。俄かに胸頭が變になつて、裏からくすぐられるやうな氣がして、何とも彼とも云はれない心地がした。
若し余に初めから野心があつたならば、此時此事に臨んで、何の遠慮をしよう、何の苦勞をしよう。――が、幸か不幸か、余はわが性質として、到底芳見某の眞似は出來ない。
あゝ濟まない〱、ロザ、堪忍してくれ。――思はず胸の中で詫をした。が、考へて見ると、何の惡い事をして詫をするのか、我ながら頗る解らない話だ。
其中にロザの姿が、何となく目に這入つた樣な氣がした。何處でかロザの聲も聞えるやうだ。
もう溜らない。直ぐに飛び出して行き度くなつた。――あのフリーデル街！
叱！　此處だ、此處が卽ち大切な處だ。――辛うじて踏み留まつた。
ホッと息を吐いて、あゝ危險かつた、今少しで落ちる處と、まるで丸木橋でも渡るやうに、其心の忙しなさ！　但し體は椅子にもたれたまゝ、ゆつさりとも爲るのではない。
これと云ふのも、こんな物が殘つて居るからと、無殘にも例の花把を摑んで、一思ひに引きむしつて、机の下になげすてて、再び目にもかけないつもりであつたが、やがて心を紛らす爲めに、散歩と思ひ付いて立ち上つた時、其花を蹴らうとした靴は、周章てて除けて他を踏んだ。

## 第十一日　（四月二十二日）

駄目〱、矢張り駄目だ。思ひ出すまいとし

てもつい思ひ出す。――あゝロザは可憐な少女だ。今頃は何をして居るだらう？
　廢してくれゝば好いのに、又してもメリーが來て、『昨日も遊びに行つたらば。』などと、尋ねもしないロザの話をする。
　其話を聞く苦しさ。ちと卑しい譬喩だが、宗法で禁酒をして居る者の前で、燗酒の香氣をさせるやうなものだ。罪だ、罪だ、ほんとに罪だ。
　夕方細君は余に向つて、『貴郎は何を考へていらつしやるのです？』と尋ねた。
馬鹿な！　乃公も男だ。何時まで下らない事を考へるものか！
『何も考へては居ません。』と答へたが、
『それでも顏の色がお惡い。』と云はれた。
　忍ぶれど色に出にけり‥‥余はまだ戀に苦しめられて居るのか。

### 第十二日（四月二十四日）

　あゝ忘れたい〳〵。どうかして忘れる工夫はあるまいか。

### 第十三日（四月二十五日）

　論文はまだ一枚も書けやしない。ペンは包まれた儘だ。

### 第十四日（四月二十八日）

まてよ、待てよ、余は今日此頃、一體何を考へて居たのだらう。
日記を繰返して見ると、さも麗々しく、――『余は再びロザを見まい。』『ロザは今頃何をして居るか。』こんな事許り書いてある。
　ロザを見まい。見まいが如何した？
　ロザは何をして居る？　何をして居てもよいではないか。
　不圖から考へる樣になると、さア又解らなく成つて來た。
　ロザは何の爲めに、余が手を握つて涙を注いだか。ロザは何の爲めに、余に勿忘艸を贈つたか。――先に余は之を以て、彼が愛慕の證據とした。が、今考へて見れば、是がそも〳〵大早計かもしれない。
　人には相應の自惚がある。余が先の判斷は、畢竟此の自惚の作用かもしれない。
　外面如菩薩の諺もある。彼は顏に似合はぬ毒婦であつて、余を罠に掛ける心算であつたかもしれない。
　が、又更に思ひ直せば、矢張り先の判斷の通り、彼は眞實余を慕うて居たのかもしれない。
　噫しれない〳〵、實に知れないづくめだ。だが、しれると知れないとが、今や余に取つて何の關係もない。否、寧ろ知れないを知れないにしておく方が、なまじ知れるより優であらう。
　さうだ！　於是余は自ら盟ふ。――今後再びロザを見まい。のみならず、今後再びロザの名を、余が此の日記の中に書くまい。

# 新八犬傳（上）

## 發端　大狗張子

かし／＼、まづある處の山の中に、大きな古寺が御座いました。元より和尚さんもなんにも居ない、空屋同然の古寺の事ですから、庫裏も本堂も荒れ放題。柱わ跛を引いて居る樣に曲り、家根わ何か考えて居る樣に傾き、そして其上にあつた鬼瓦、何時か地上え落こちて、大欠伸をして居ると云う有樣、樹わ森々と茂り、草わ茫々と生えて、實に晝間でも可恐い位で御座いました。

處がまだ可恐い事にわ、この大きな古寺の中に、何か化物が住んで居ると見えて、毎晩その奧の方で、「ワウォー、ワウォーと云う呻吟聲が、丁度この寺の周圍、八里四方に響き渡ると云うのですから、近邊の者わ一同戰慄え上つて、日が暮れるともう其側を、通る者が無い位に成りました。

すると、或日の事で御座います。諸國行脚の旅僧が一人、この近所を通りかゝりましたが、足わ大分草臥れましたし、日も暮れかゝつて來ましたから、何處かで泊めてもらおうと思いましたが、生憎宿屋が御座いません。

で、如何しようかと思つて居りますと、彼方から百姓の子と見えて、一人スタ／＼やつて參りましたから、旅僧わ呼び止めて、

（僧）コレ／＼、何處かこの近所に、お寺があるなら知らせてくれんか。

と聞きますと、百姓の子わ立ち止つて、

（子）ある事わあるけれども、おつかなくツて行かれやしねエ。

と云いますから、旅僧わ不思議に思いまして、

（僧）ナニ、お寺わあるけども、おつかなくツて行かれんと云うのか。全體そりやア如何云う譯だ？

（子）だつて化物屋敷だもの、うつかり行くと喰われてしまうだ。

（僧）化物屋敷？　ハヽヽヽ、それわ却つて面白い。そうして全體そのお寺にやア、どんな化物が居るのだネ？

（子）どんな化物だか知らねエだが、なんでも晩に成ると、おつかねエ聲が聞えるだ。

（僧）ふウん。毎晩呻吟聲がするのだな。

（子）それでその呻吟聲が、八里も遠く聞えるだから、誰もおつかながつて、近所えも行く者わ無エだ。

（僧）そうか。そりや何しろ面白い。今夜わ其處え泊り込んで、その化物の正體を、一番私が見屆けてやろう。で、そのお寺わ何方の方だ？

こう云いますので、敵手の子わ、さも吃驚した樣に、旅僧の顏を見つめて居りましたが、頻りに路を聞かれますので、やがてそのお寺の方角を、委しく敎えてやりました。

さて旅僧わ、百姓の子に敎わりました通り、路を急いで參りますと、やがて大きた本堂の前え出ました、見ると、成る程空寺と見えて、誰も人の居る樣子わありませんから、『お頼もう』と云う世話も入らず、スッと本堂から上り込んで、段々奧え行つて見ますと、何しろ昔時わ、餘程立派なお寺であつたのですから、中わ大層廣う御座いますが、今わまるで廢屋で、いかにも化物が住んで居そうです。

けれども此方わ坊さんの事ですから、少しも

可恐いとわ思いません。平氣で方々見てまわつた揚句、一番奥の、一番靜かな處え行つて、其處にまづ荷物をおろし、

（僧）ヤレ〳〵草臥れた。ドリヤ、今夜わこゝでゆつくり寢もう。

と、行李を枕の代りにして、コロリと横に成りましたが、

（僧）まてよ。先刻の小兒の話ぢやア、日が暮れると呻吟聲がするそうだが、もうそろ〳〵聞えそうなものだ。

と、心待ちに待つて居る中に、何だか自分も草臥れて居りますから、ついウト〳〵寢込みますと、直ぐにグウ〳〵グウ〳〵と云う、雷の様な高鼾。これでわ却つて化物の方が、肝を潰してしまいそうです。

其中に、夜が段々更けて參りますと、誰とも知れず枕邊で、『和尚様々々々！』と、呼び起す者が御座いますから、旅僧わ目を覺して、

（僧）誰だ？　乃公を呼ぶのわ誰だ。

と、云いながら起き返つて見ますと、高さ五尺もあろうと云う、恐ろしく大きな狗張子が、ヌツと立つて居りますから、さてわ此奴が化物だなと、思いながらもわざと落付いて、

（僧）今乃公を起こしたのわ、貴様だつたのか。

と聞きますと、狗張子わチン〳〵をして、丁寧にお辭儀をしながら、

（狗）いかにも私で御座ります。

（僧）シテ、何か用があるのか。

（狗）少々お願が御座いまして、わざ〳〵お目を覺ましたので御座います。

（僧）何だ、乃公に願がある？　全體何う云う願だ？

（狗）他の事でも御座りません。元私わ、今から丁度十二年前の、大博覽會に出されました、大狗張子で御座ります。處が、御覽の通りの大きさで、持ち運びにも不便で御座いますから、誰一人買手も御座いませず、其中に閉場に成りましてから、出品主が引取りまして、元の國まで持つて歸ります途中、この山の中を通りかゝりました處、路わ惡く荷わ重く、又持つて歸りました處で、所詮この様な大狗張子の、賣れる事わあるまいと、無慈悲にも私を、この寺の前に置き去りにして、其儘歸つてしまいました。

それからと云うものわ、此身を野天に曝されて、雨に打たれ日に照らされ、風に吹かれ雲に捲かれて、十二年の歳月を、この山に送ります中、不圖天地の氣を受けて、懷姙の體に成りましたが、神通力わ得て居ても、眞の動物で無い悲しさにわ、月わ滿ちても産む事を知らず。その苦しさに毎夜毎晩、呻吟き立てて居ります許り。付きまして和尚様、何卒御慈悲にこの苦痛を、お助けなされて下さりませ！　これが御願で御座ります。

と、さも苦しそうに陳べ立てました。

旅僧わこの話を、ぢつと聞いて居りましたが、やがて膝をポンと打つて、

（僧）さてわ化物の正體わ、貴様の呻吟聲であつたのか。しかし、人間にもせよ畜生にもせよ、助けて取らすが坊主の役目、いかにもそれわ氣の毒ぢやから、私が助けて進ぜよう。とわ云うものの、元より自然の動物でわ無うて、人手に作り出された體、これに産をさせるにわ、氣の毒ながら又其方を、人手によつて破らにや成らぬが、それでも苦しう無いと云うのか。

（狗）それわ元より覺悟の前。胎兒さえ助かりますれば、私のこの張子の體わ、たとい何の様に破れましても、少しも恨わ御座りませぬ。

（僧）ナヽ、流石わ天地の氣を受けた、神通自在の大狗張子、天晴れそれわよい覺悟ぢや。思わぬ殺生も佛の方便、それでわ其方の願通

り、直ちに此場で破つてとらそう。
と、如意を持つて立ち上りますと、狗張子わさも嬉しそうに、その前え出で四足をそろえ、
（狗）南無阿彌陀佛！　キ々々々々々！
と、人間の通りに云いますを、旅僧わ如意を振りあげて、狗張子の背の處を、二打ち三打ち打ちますと、其勢に中央から、背わ兩方え破れました。
すると、不思議やその中から、金色の光がサツと出て、それと一所に、小さな狗張子が都合八個ワン〳〵と云う産聲と共に、八方え飛び出したと思いますと、其まゝ姿わ見えなく成つてしまいました。

## 第一回　競馬遊戯

父わ總理大臣侯爵、犬宮春元、母わ侯爵夫人雪子、其間に生まれたのが、犬宮初麿と云う少年で御座います。
初麿わ今年滿十二歳、則ち今から十三年前の、戌の年に生まれたのですが、丁度そのお宮詣の時に、まことに不思議な事が御座いました。
邸わ麹町の永田町ですから、産土神わ日枝神社、即ち山王様で御座いました。初麿わ見事な産衣に身體を包まれて、お梅と云う乳母に抱かれ、家扶、侍婢、馬丁などに、前後左右を護られて、日枝神社え參詣し、一代守護の御守札を頂いて、其歸途に、石壇下の玩弄品屋に寄つて、例の狗張子を買う事になりました。
乳母わ侍婢と一所に、まづ店え上り込んで、澤山出してある狗張子を、あれかこれかと、選り分けて居りますと、不思議にも初麿わ――、まだ眼もろく〳〵見えない、口わ元より利く事の出來ない、産まれたての初麿わ、急にムク〳〵と頭をもちあげて、星の様な眼を見開き、狗張子の澤山あるのを、一々見廻しましたが、やがて其中でも、一番大きな、そして一番古いのを見ると、紅葉の様な手をだして、それをちやんと指さしながら、
（初）これだ〳〵！
と云いました。
今までわまるで人形の様に、身動きもしなかつた初麿が、不意にこう云う事を云い出したのですから、乳母も侍婢も肝を潰して、その顔を見つめますと、初麿わまた聲をあげて、
（初）これだ〳〵、この狗張子だ！
と、繰り返して云いますので、乳母も不思議に思いながら、問い返す間も御座いません。
（乳）はい畏まりました、それでわこれに致しましよう。
と、若君の云う通り、その狗張子を買いますと、初麿わそれを見て、さも安心した様に、又スヤスヤと寐入つてしまいました。
乳母わ云うに及ばず、侍婢から家扶、馬丁、さてわ玩弄品屋の亭主、小僧に至るまで、産まれたての嬰兒が、口を立派に利いたと云う、この眼前の不思議に、一同顔を見合せて、
「何と云う坊ちやまだろう？」
と、舌を捲いて驚きましたが、只店頭に居た尨犬丈わ、さも合點が行つた様に、獨り尾を振り立てて、初麿の寢顔をば、餘念なく見あけて居りました。
やがて邸え歸りますと乳母わ直ぐにこの事を奥方に申上げましたから、奥方わ又殿様に、この話を致しました。
すると父の春元わ、これを聞いて、膝をポンと打ち、
（春）それわいかにも目出度い事だ。支那の老子と云う聖人わ、生れ落ちると直ぐに物を言い、また印度の釋迦わ、母の胎内を出るや否、天地を指さして立つたと云う。今自家の初麿わ、宮詣の日に言葉を發して、自分の望む狗張子を指したとわ、老子釋迦にも劣らぬ奴、

將來必ず豪い者に成つて、天下に名を轟かすであろう。

と、大層な喜悅で、又その狗張子も、

(春)此兒がわざ〱指をさして、欲しいと云うた位の物なら、定めし緣のあるものであろうから、此の兒の成人するまでわ、決して破壞れ損じない樣に、大切にして置くがよい。

と云うので、それからわ尚更大切にかけて、蝶よ花よと育てて居りました。

其中に初麿わ、まことに達者に成人しましたが、こゝにまた不思議な事にわ、その玩弄品にして居る狗張子も、年數を經るに從つて、段々大きく成りまして、而も初麿の云いなり次第に、立つたり坐つたり、臥たり起きたり、まるで眞個の犬の通りに、よく懷いて居りました。然し、他の人の前では、置けば置かれたまゝ、倒せば倒れたまゝ、──矢張り普通の狗張子でした。

すると又、この家の門番の息子に、犬門番平と云う、可愛らしい兒が居りましたが、丁度初麿と同年で、性質も至つて怜悧で御座いますから、殿樣のお意見で、若君のお相手に致しました。

初麿わ、丁度好い遊戯相手が出來ましたので、大喜悅で御座います。

(初)お前今日から僕のお友達に成るのかエ。ほんとによく來てくれたねエ。

と云いますと、番平も嬉しう御座いますから、

(番)はい。左樣で御座います。何卒仲好く遊ばして下さいまし!

(初)仲好くするとも。お前幾歲だ?

(番)はい。取つて十三で御座います。

(初)それぢやア僕と同年だ。矢張り戌の年だネ。

(番)左樣で御座います。

(初)それぢやアお前もこう云う物を持つてるか。

と、云いながら後の方を向いて、

(初)太郎々々々々!

と呼びますと、その聲に應じて、大きな狗張子が一個、後の屛風の陰から、ノソ〱歩き出して來ました。

見ると、その大きさから色合まで、自分の持つて居る狗張子と、少しも差異が御座いませんから、番平わ吃驚しながら、

(番)はい、持つて居ります。丁度それと同じ樣なのが、私許にも御座います。

(初)ナニ、あると、そして、そりや、何時買つたんだ?

(番)私の誕生の時で御座いました。阿父さんがわざ〱淺草までお參詣に行つて、雷門で買つて參つたので御座います。

(初)それでわ矢張り此通り動くか。

(番)はい。他の者でわいけませんが、私が玩弄にしますと、勝手に動きますので御座います。

(初)それわ面白い。まるで僕のとおんなじ樣だ。で、名前わ何と云う?

(番)はい……まだ名わつい付けませんでしたが!

(初)そうか。それぢやア僕のが太郎だから、お前のわ次郎にするといゝ。

(番)有難う御座います。それでわ次郎に致しまして、これから直ぐに持つて參りましよう

と、やがて自分の家え飛んで參りましたが、間も無く大きな狗張子を、

(番)次郎來い〱!

と云いながら、お庭の方え連れて參りました。

初麿わいよ〱喜んで

(初)ウン、まるで僕のとおんなじ樣だ。それぢやアこれから兩人で、一つ競走をして見ようぢやないか。

(番)それがよろしう御座いましよう。

と、これから初麿と番平わ、各自に狗張子に乘

りまして、

（初）さアいゝか、ちやんと並んで！

（番）一の二の三ツ！　ハイヨウ〳〵、ハイヨウ

ハイヨウ！

と、御殿の廊下を馬場のつもりで、競馬遊戯を初めましたが、兩方とも不思議な狗張子ですから、まるで馬の走る樣に、この廣い廊下中を、自由自在に驅けまわりました。

## 第二回　張子合戰

初麿と番平とわ、その身分こそ、大臣の子と門番の兒、主人と家臣の差別わあれ、その交際の好い事わ、まるで兄弟同樣に、いつも狗張子を持ち出して、面白そうに遊んで居りました。

すると、この大宮の邸に、不思議な事が起りました。

それわ他でも無い、此頃奥の土藏に盜人が這入つて、中に入れてある寶物をば、盜み出すと云う事で、而もそれが一晩でわ無く、二晩三晩と續きました。

尤もこの邸にわ、平常から盜人用心に、大きな洋犬が五六匹飼つてあつて、日が暮れると、この五六匹が各自に邸中を廻つて、少しでも怪しい者と見れば、直ぐにワン〳〵吠え立てますから、中々盜人なんぞわ這入れませんのに、この盜人ばかりわ、何處を如何して這入りますか、いつも巧く忍び込んで、寶物を持つて行きますから、邸中の者わ一同不思議がつて居りました。

若樣附從の番平わ、この事を聞きまして、『これわ如何も怪しからん事だ。あの大勢の洋犬に、平常から高價い牛肉を喰わせて、飼つて置くのわ何の爲めだ？　こう云う時の用心ぢや無いか。それにその用心の犬が、少しも用心に成らないで、一度ならず二度も三度も、平氣で盜人を忍び込ませるとわ、實に、何と云う馬鹿な事だろう？　全體同じ犬の年に生まれた、この番平の面汚しだ。よし、こう成りやアこの番平だつて、狗張子を持つて居るからわ、こう云う時に手柄を現わして、犬の名譽を恢復しなけりや成らない。』と、こう思いましたから、直ぐに其晩、健氣にもたつた一人、お土藏の陰に隱れながら、盜人の來るのを待つて居りますと、やがてその夜も眞夜中過ぎ、四邊がシン〳〵と靜まり返りますと、邸に飼つてある洋犬が、何だか頻りに吠え初めました。

『さてわ盜人が來たのだな』と、尙も息を殺して待つて居りますと、不思議にもその犬の聲が、まるで水を打つた樣に、パッタリ止まつてしまいました。

（番）オヤ、犬が默つたな。さてわ盜人奴、握飯でもやつたと見える。

と、口の中で獨語を云いながら、そつと覗いて見ますと、不思議！　いよ〳〵不思議！　彼方の捨石の上に、小さな狗張子が一個、行儀よく置いてあり、そしてその側にわ、今迄喧しく鳴いて居た犬が、みんな圓くなつて、さも心持好さそうに寐て居ります。

これを見ると番平わ、腕を組んで考えました。

『まてよ。彼處にあるのわ狗張子ぢや無いか。而も乃公達の持つてる狗張子だ。して見ると乃公より先に、乃公のか、若樣のか、太郎狗か次郎狗か、何方かの一個が此處え來て、盜人の番をして居るのだな。これわどうも感心な奴だ。まア、一つ呼んでやろう。』と、やがて番平わ、

（番）次郎〳〵！

と呼んで見ましたが、狗張子は默つて居ります。次郎で無ければ若樣の、

（番）太郎か、太郎〳〵！

と呼びましたが、まだ此方を向きませんから、つか〳〵と進んで行つて、

（番）オイ、太郎か次郎か。乃公は番平だよ。

と、云いながら、撫でようとしますと、こわ如何に、その狗張子わ、『ワンだ』とも何とも云わず、突然手を咬もうとしますから、番平は吃驚して、飛び退きながら、

(番)オヽ、さてわ此奴わ盜人方だな。よし、そんならば此方にもあるぞ。

と、直ぐに部屋え取つて返し、

(番)次郎來い〳〵！

と呼びますと、直ぐに眞個の次郎狗が、尾を振りながら飛んで來ました。

(番)オヽ、次郎か、よく來た〳〵。そして若樣の太郎狗わ如何した？

と、頭を撫でて聞いて居る中に、また太郎狗も來ましたから、

(番)オヽ、二匹とも揃つたか、それぢやア直ぐにお土藏え行つて、盜人狗を征伐しろ！

と、云うが速いか、二個の狗張子わ、直ぐにお土藏の方え飛んで行きました。

すると、其物音を聞きつけて、若樣の初磨も、急いで奥から出て來まして、

(初)番平々々！ 太郎は何處え行つた〳〵？

(番)オヽ、若樣で御座いますか。今盜人狗を見付けましたから、直ぐに二匹をけしかけました。

(初)そうか。そいつわ面白い、逃すな〳〵！

(番)よろしう御座います。

と、初磨わ用意のステッキ、番平わ手燭と心張棒を、兩方の手に持ちながら、

(初)ウーシ、ウシ、ウシ〳〵、太郎ウシ、次郎ウシ！

(番)ウーシ、ウシ、ウシ〳〵、次郎ウシ、太郎ウシ！

と、聲をかけながら、お土藏の方え飛んで行きました。

で、お土藏の處え來て見ますと、もう三個の狗張子わ、ウー〳〵、ワウ〳〵、ワン〳〵、オー〳〵と、恐ろしい聲を揚げながら、組んづほぐれつ、上に成り下に成り、咬合の最中ですから、初磨わステッキを振り立てて、

(初)太郎ウシ、次郎ウシ！ ウーシ、ウシウシ〳〵！

と、一生懸命にけしかけますと、番平わまた彼方の黑闇の中え、驀地に駈けて行つて、

(番)ヤッ、こん盜人！

と云いながら、誰だか捕えた樣子です。

## 第三回　犬瀨改心

(初)なに、盜人？

(番)へい、盜人です。

(初)捕えたか。

(番)捕えました。

云う中に初磨わ、手燭を翳しながらやつて來まして、

(初)逃がすな〳〵！ 逃がしちや不可ぞ！

(番)大丈夫、もう逃がしや致しません。

と云うのを見ますと、番平わ彼方の塀の根元え、小さな男を一人抑えつけて、ギウ〳〵云わせて居る處です。

(初)盜人わ其奴か。早く縛れ〳〵！

(番)畏まりました。

(初)さア、乃公も手傳つてやるぞ。

と、初磨も側え行つて、番平を助けながら、用意の芋繩で以て、その小男を縛りあげ、さて手燭を差しつけて、よく其顏を見ますと、これも矢張り十二三許りの、可愛らしい小僧ですから、初磨わ不思議に思い、

(初)盜人わ其方か。

と、問いかけますと、小僧わ神妙に御辭儀をしながら、

(小)へい、私で御座ります。

(初)それでわ此間中から、自家の土藏え忍び込んで、寶物を持ち出すのわ、悉皆其方の

仕業なのか。

(速)はい、左様で御座ります。まことに申譯が御座りません。

(初)ふむ……そうか。

と、初麿わまだ合點の行かない様子。

其中にまた番平わ、狗張子を一個小脇に抱え、後の二個を連れながら、二人の間え進み出まして、

(番)若様！ 御覽遊ばせ！ これが此奴の狗張子で御座います。

と、初麿の前に置きますと、初麿わその狗張子を、自分達のと較べて見て、いよ〳〵不審の晴れない顔色。

(初)これが此奴の狗張子だと？ まるで乃公達のと同じぢやないか。

(番)いかにも生寫しで御座います。そればかりで御座いません、この又狗張子にも、神通力があると見えまして、此奴を側に置いておきますと、何様に吠え立てる猛犬でも、直ぐにあれあの通り、正體も無く寐てしまうと云う、いかにも不思議な狗張子で御座います。

(初)ふゝむ。それわどうも奇妙だな。

と、少し考えましたが、何と思つたか番平に、盗人の繩を解かせてしまい

(初)コリャ小僧、其方わ一體何處の奴だ？ そうして何處からこの狗張子を持つて來て、何と思つて盗人に成つたか、それを委しく白狀しろ！

と、言葉も優しくして尋ねました。

すると盗人の小僧わ、急にハラ〳〵と涙を零して、暫くわ默つて居りましたが、よう〳〵の事で頭をあげ、

(速)はい……有難う御座います。こう捕えられました上わ、巡査さんに渡されるか、御邸で責檻されるか、何方にしてもこの身體わ、酷い目に遭わされる事と、覺悟を極めて居りましたのに、思いの外な若様の、御情深いそのお言葉、何と御禮を申しましようやら……

と又泣き出すのを慰めて、

(初)何もそう泣く事わ無い。それよりわ今聞いた事を、早く話して聞かすがいゝ。

と云う側から番平も、

(番)これ小僧！ 若様もあゝ仰有る事だから、早く白狀するがよかろう。御情深い方だから、決してお前の悪い様にわ成さらんよ。

と、頻りに問いかけますので、小僧わやつと氣を取り直し、

(速)それでわ申し上げましよう。私わ四谷の鮫ケ橋に居りまする、犬瀬鈍八と申す者の子で、速吉と申しますが、元より貧乏人の事で御座いますから、いくら玩器が欲しいと思いましても、阿父さんが買つてくれません。すると、或日の事で御座います。裏の塵塚え行つて見ますと、誰が持つて來て棄てましたか、小さな狗張子が一個、塵芥の中に落こちて居りました。見ると、まだ新しくつて、何處も破れて居りませんから、これわ好い物を拾つたと、其儘自家え持つて來まして、それを玩器にして居りますと、この又狗張子が、まことに不思議な狗張子で、まるで生きた犬の通り、駈け出したり、寢轉んだり、私の云う通りに動きますから、名も三太と付けまして、私の弟同様に、可愛がつて居りました。それがこの狗張子で御座います。

(初)成る程、よく似た話もあるものだ。で、それが又何と思つて、盗人なんぞ初めたのだ？

(速)はい……それわ……まことに申悪う御座いますが……

(初)何も遠慮わ入らないよ。でわ家が貧乏だから、それで盗人を初めたのか。

(速)いゝえ、それ許りでわ御座いません。一體この世の中に、何だつて金滿家と貧乏人と

が、あんなに別れて居るのだろう。金満家だつて人間なら、貧乏人でも人間、おんなじ人間でありながら、金のある奴わ、寢轉んで居てもお金が出來、貧乏してる者わ、いくら稼いでも甘い物が喰べられない。……これがどうも殘念で、腹が立つて溜りませんから、寧その事盗人に成つて、手ッ取り速く金満家の金を、貧乏人の方え廻してやろうと、こう思いましたから、それで盗人に成りまして、他人の物を取り初めましたが、それだつて、決して只の家えわ這入りません、成る丈けお金のある處、寶物のある家を選つて、其處の物を盗み出してわ、貧乏人に遣つて居りましたが、その盗人に這入ります時に、この狗張子を持つて參りますと、何樣な恐い犬の居る處でも、少しも吠えられる事わありません、樂に物が取れますから、それで此方え參りますにも、此度この狗張子をば、持つて參つたので御座ります。處が此方にも、矢張り同じ樣な狗張子が、而も二個まで御座いましたので、とうとう今夜わこの通り、貴君方に見付かりまして、まことにどうも、申譯が御座いません。しかし、もうこれからわ、決してこう云ふ悪い事わ、二度と再び致しませんから、何卒若樣！　私を、今日から御家臣に遊ばして下さいまし！　御願いで御座います。

と、手を突いて頻りに賴みました。初磨わ點頭いて、

(初)　過を改めて憚る勿れとわ、論語でも習つた事だが、お前がすつかり心を入れかえて、これから盗人をやめるならば、いかにも家臣にしてやろう。

と、云いますと番平も側から、

(番)　お前が御家臣に成つてくれゝば、私も今日から仲間が出來て、ほんとにこんな嬉しい事わ無い。

と、云いますので速吉も大喜悦、

(速)　それでわお聞き下さいますか。有難う御座います。

と、さも嬉しそうに御禮を云いまして、これでいよいよ犬瀬速吉わ、犬門番平と同じ樣に、初磨の家臣になりまして、其儘犬宮家の邸内に、置いて貰う事に成りました。

處が、元より盗人でもする位な、速吉の事ですから、その名前の通り、その敏捷い事と云つたら怜悧な猟犬も及ばない位で、何をさせても隙濡がありませんから、初磨にも大層氣に入り、それからわ毎日番平と三人で、仲好く遊んで居りますと、またこの狗張子も三個とも、この三人と同じ樣に、まことに睦まじくして居りました。

## 第四回　犬荊銃猟

て犬宮初磨わ、思掛けなく今度又、犬瀬速吉と云う、新しい狗張子仲間を得まして、大喜悦で御座います。以前から居る番平を合せて、都合三人とゆうもの、學校え行くにも、自家で遊ぶにも、少しも離れた事わ御座いません。

其中試驗休に成りましたから、自家で遊んで許り居ても、面白くないからと云うので、今度わ又三人して、目黒の別莊えと參りました。

この別莊とゆうのわ、丁度不動樣の後の方で、地面わ廣し、眺望わ好し、まことに好い處ですから、三人とも喜んで、此處に暫く泊り込み、又或時わ、各自の狗張子に乘つて、近所を散歩したりして、まことに樂しく遊んで居りました。

すると、或日の事で御座います。初磨、番平、速吉の三人わ、御庭の芝原え出て、三匹の狗張子に競走をさせたり、角力を取らせたりして、面白がつて居りますと、不意に後の森の中で、ズドーンと云う音がしました。

(初)　何だ、あれわ？

初麿わ聞咎めますと、

（番）鐵砲の樣で御座いますネ。

云う中に速吉わ、急いで彼方の築山え駈けあがつて、音のする方を見て居りましたが、やがて聲を揚げて、

（速）若樣々々！　早く來て御覽遊ばせ！　早く早く！

と云いますから、初麿わ番平と一所に、續いて登つて來ました。

（初）何だ〳〵？

（速）あッ、彼方を御覽なさいまし？　兎が逃げて參ります。

（初）なに、兎が？……おゝ、居る〳〵。

（番）ほんとに兎で御座いますねエ。ぢやア今のわ獵師ですネ。

（初）屹度そうだ。

云う中に速吉わ、何を見つけたか大きな聲で、

（速）やッ、こりやア妙だ？

（初）如何した？

（速）狗張子が追つかけて來ました。

（初）なに、狗張子が？　どれ〳〵……

（速）それ〳〵！

（初）おゝ狗張子だな。

（番）狗張子で御座います。

（初）何奴だ？　太郎か、次郎か、それとも三太か、よく見ろ〳〵？

（番）左樣で御座います……太郎が氣が強う御座いますから、大方太郎で御座いましよう。

（速）いゝえ、太郎でわ御座いません。

（初）ぢやア次郎か。次郎も隨分はしッこいぜ。

（番）いゝえ、次郎でも御座いません。次郎わ彼處に居りますもの。

（速）そう云や、三太もあれ〳〵、太郎と一所に彼處に居ります。

（初）ナニ、三匹共居るのか。それぢやアいよいよ他の奴だぞ。はやく行つて見ろ、行つて見ろ！

と、初麿わ先に立つて、築山を駈け下りまして、表の方え參りますと、番平も速吉も、續いて後から參ります。それを見て又、太郎も次郎も三太も、何だか譯も解らずに、急いで後から尾いて參りました。

やがて門を出ましたが、其中にわもう兎も狗張子も、何處えか飛んで行つてしまつて、更に行方が解りません。

（初）如何したろう？

（番）何でも彼方え行つた樣です。

（初）ぢやア其方を捜せ、さがせ！

と、三人わまた彼方の森の中を、彼方此方と捜しましたが、影も形も見えません。

（初）解らないかい？

（番）解りません。

（初）困つたなア。何でもそんなに遠くえ行く筈わ無いよ。

（速）でもあの勢で駈けた日にやア、餘程速う御座いますから、中々追付きや致しません。それよりは、もう少し待つとりますと、又鐵砲が鳴りましよう。そうしたら直ぐに行つて、獵師を捕えてやろうぢや御座いませんか。

（初）うむ、それがいゝ、さうしよう。

と、此處でまた三人わ、一まづ御庭え歸りまして、鐵砲の鳴るのを待つて居りますと、今度わ彼方の垣根の外で、ピュー〳〵と云う、口笛の聲が聞えます。

はやくも聞付けたのわ、矢張り速吉で、

（速）おやッ、誰だか口笛を吹いてます。

（初）ぢやア今の獵師だろう。行つて見ろ！

と、又三人で、彼方の生垣の處まで來て、其隙間から外を見ますと、――まだ十二三許りの獵師が一人、肩に鐵砲を擔いで居りますと、其前え大きな張子の狗が一匹、口に大きな兎を咬え

て、尾を振りながら來て居ります。
獵師わ狗の頭を撫でながら、
(銃) おゝ、四郎々々! 大出來々々々々!
と、褒めてやつて居る處です。
(番) 大層若い獵師ですネ。まだ小兒ぢや御座いませんか。
(初) そうだ、矢張り乃公達の仲間かも知れないよ。ソレ、あの狗張子だつて、まるで乃公達のと同樣ぢやないか。
(番) そうです。ちつとも差異わ御座いません。如何して彼が持つてるんでしよう。
(初) だからはやく行つて聞いて見ろ!
(番) へい。
番平わ直ぐに門から廻つて、表え來て獵師に向い、
(番) おい、君! 君わ獵師かい?
と、言葉を掛けますと、獵師わ驚いて、暫く番平を見て居りましたが、
(銃) そうです。
(番) 何と云う名だ?
(銃) 犬柄銃太郎と云うんです。
(番) 犬柄と、矢張り犬の字があるんだネ。それぢや直ぐに來たまえ!
(銃) 僕に御用ですか。
(番) 犬宮様の若樣が、會い度いつて仰有るから。
(銃) 何方です?
(番) 僕と一所に來たまえ!
と、番平わ銃太郎を連れて、別莊の門を這入りますと、四郎わ兎をくわえながら、その後から尾いて參りました。

## 第五回　門犬出獵

初麿と速吉わ、御庭で待つて居りますと、やがて番平わ、犬柄銃太郎を連れて、急いで歸つて參りました。
番平わ初麿の前え出て、
(番) はい、連れて參りました。今も名前を聞いて見ましたら、矢張り犬の字で、犬柄銃太郎と云う人です。
と、云いながら銃太郎に向つて、
(番) 犬柄君! この方が犬宮様の若樣です。またこの人わ、犬瀬速吉と云つて僕の同役です。
と、紹介せますと、銃太郎わ帽子を脫ぎ、鐵砲を側に置いて、
(銃) 左樣で御座いますか。私わ犬柄銃太郎と申します。獵師の兒で御座います。何卒御見知り置きを!
(初) 僕わ犬宮初麿。これから朋友に成りましよう。
續いて速吉も進み出て、
(速) 私わ犬瀬速吉、御懇意に願います。
と、茲で初對面の挨拶も濟みましたから、初麿わ又銃太郎を、築山の上の東屋え案內し、速吉に云いつけて、お茶やお菓子を運ばせ、いろいろと歡待しますので、銃太郎も嬉しがつて、御馳走を成つて居りましたが、見ると、山の下に、自分の持つて居る樣な、狗張子が三個も置いて御座いますから、初めて氣が付いて、
(銃) はてな、御邸にも矢張り狗張子が、以前から御座いましたので御座いますか。
と云つて尋ねますと、初麿わ點頭いて、
(初) そうさ。往昔からみんな持つてるのだ。
と、この三人の狗張子の由來を、それ〳〵話して聞かせました揚句、
(初) 處で君のその狗張子わ、如何して君が持つてるのだ?
と、尋ねました。
すると銃太郎わ膝を進ませて、
(初) 私の狗張子にも、亦不思議な事が御座います。一體私共の家わ、代々獵師で御座

いますから、例も獵犬を飼つて居りましたが、丁度私の阿父の代に、お白と云う牝犬が居りました。この犬わ、至つて怜悧な犬で、よく役に立ちますから、阿父も大層可愛がつて居りましたが、只困る事にわ、他に牡犬が居りませんので、兒を生ませる事が出來ません。で、只そればかり氣にかけて居りますと、不思議にも私の阿母が、この私を産みます時、その犬も急に産氣付きまして、苦しがつて居る樣ですから、はてな、今までお腹が大きかつた樣子も無いが、如何して産氣がついて居るのだろうと、みんな不思議に思つて居りますと、やがて一匹の子を産みまして、直ぐにそれを咬えながら、阿父の處え持つて參りましたが、よく見ますと、ほんとの犬の子と思いの外、大きな狗張子で御座いました。

(初)うむ、それぢやア君の狗張子わ、眞個の犬が産んだのだね。

(銃)そうです。まことに不思議な事だと思いましたが、丁度私が生まれまして、狗張子の要る處でしたから、そのまゝ私の玩器にして居りますと、この又狗張子が、矢張り眞個の犬の通りに、動いたり鳴いたりしますから、それからこの狗張子を、亦獵犬にも使いましたところ、親のお白にもまけない位で、毎度手柄を致しますので、其名も四郎と付けまして、大切にかけて育てて居るので御座います。

と、由來を話して聞かせますと、初麿も感心して、

(初)それはどうも不思議な狗張子だ。それにその名も四郎とわ、他の太郎、次郎、三太につゞいて、丁度好い名ぢやないか。處で君わ獵師だそうだが、全體獵と云う物わ、定めし面白いものだろうねエ。

と、聞きますと、銃太郎わ得意に成つて、

(銃)それわもう、世の中に獵位、面白い事わ無かろうと思います。何しろ野山をかけまわつて、生類を敵手にするのですから、隨分恐い事もある代りに、又面白い事も澤山御座います。貴君もちと御運動に、獵をやつて御覽遊ばせ! それわもう、戰をするより愉快ですぜ。

と、さも面白そうに云いますので、初麿を初め三人とも、吾知らず乘り出して、

(初)それわ實に愉快そうだ。

(番)ほんとに面白そうで御座いますネ。

(速)屹度それわ面白う御座いましよう。如何です若樣、この犬柄君に案内を頼んで、ちと御出掛け遊ばしてわ? 私も御伴致しとう御座います。

と、云いますと、元より活潑な初麿、直ぐにその氣に成りまして、

(初)そうだ。直ぐに出掛けよう。丁度自家に鐵砲もあつたから。速吉! お前急いで取つておいで!

(速)へい、畏まりました。

と、速吉わ直ぐに驅け出して、永田町の本宅から、鐵砲を三挺持つて參りますと、番平わまた近所え行つて、草鞋と脚袢を買つて來て、茲で支度も出來ましたから、――實に子供わ氣の早いもの、この銃太郎を先に立て、四匹の狗張子を引連れて、直ぐさま狩えと出かけました。

## 第六回　四匹紛失

四人の少年わ、四匹の狗張子を連れまして、いよ〳〵獵に出かけました。

(初)今度わ乃公が一番に兎を取るぞ。

(番)でわ私わ猿を撃つて見ましよう。

(速)犬門君が猿を撃つなら、僕わ一番鹿を撃つて見せよう。

(銃)はゝゝ、猿だの鹿だのてエものが、中々

素人に撃てるものですか。まア君達にわ、晝間の木菟が丁度いゝでしよう。
と、こんな事を云う中に、段々山の中え這入つて來ました。
其處で四人わ、各自に鐵砲え彈丸を籠めて、獲物を探して廻りましたが、生憎一羽の小鳥も居りません。
(初)オイ、犬瀬君如何したんだ？ なんにも居ない様ぢや無いか。
と、初麿わはやく一發放して見たいから、頻りに催促しますと、銃太郎も氣を揉んで、
(銃)まア少しお待ちなさい。今呼んであげますから。
と、笛をチュッ〳〵鳴らしたり、又四郎を森の中え追い込んだりして、頻りに探し立てましたが、如何しても出て來ません。
(銃)それもつと奥え行つて見ましよう。
と、又叢に立ちまして、袂を投け、裾を端折、叢を分け、谷を越えて、すつと奥え這入つて來ましたが、まだ獸の足跡も見えなければ、鳥の聲も聞えません。
が、狗張子許りわ、四匹とも鼻をヒコ付かせて、何か物を嗅ぎ付けた様子ですから、さては近所に獲物があるのだなと、銃太郎わ最一柄で、早くも氣が付きましたから、今度わ狗張子を四匹共放して、山中を方々探させて見ようと、傍の四郎を初め、太郎も次郎も三太も、みんな繩を解いてやりました。
すると、四匹の狗張子わ、さも嬉しそうに飛び上つて、一聲宛ワン〳〵ワン〳〵と、勇しく吠え立てるが早いか、直ぐに彼方の草叢の中え、驀地に駈け込みました。
これを見て四人の少年も、急に元氣付きまして、今に兎を追い出すか、雉子の巣を見付けて來るか……來たら一發に撃ち止めてやるぞ……だが……こんな山奥の事だから、若しか猪でも出たら如何しよう……なアに、猪だつて恐いもんか、直ぐに退治てくれるぞと、四人が四方に分れて、各自に鐵砲を構えながら、今か今かと待つて居りました。
處が、狗張子わ急に出て來ません。――五分經ち十分經ち、二十分……三十分と……待てど暮らせど、四匹の中が一匹も歸つて來ません。
さてわ何處かで迷兒に成つたんぢやないか。それにしても一匹か二匹わ、もう歸つて來そうなもんだと、暫らく待つて居りましたが、まるで鐵砲丸の様に、行つたきり歸つて來ません。
其中に構えた手わ、段々力が拔けて來て、鐵砲が持ち切れなく成りましたから、今度わ一同一つ所に集まり、草の上に胡坐をかいて、休みながら待つて見ましたが、まだ姿が見えません、こう成ると、そろ〳〵心配に成つて來ました。
で、初麿わ、頻りに首を傾けながら、
(初)どうもこれわ困るぢや無いか、こんな山奥え這入つて來て、小鳥一羽も取らないのに、大切な狗張子を紛失してしまつちやア、どうもほんとに困るぢや無いか。
と云いますと、銃太郎わさも氣の毒そうに、
(銃)此儘狗張子が歸りませんでわ、私がどうも申譯が御座いませんから、これから私が探して參りましよう。
と、已に立ち上ろうとする時、何時の間に登つたか、側にある大きな樹の上から、遠吉が聲を揚げて、
(遠)あゝ居た！ あんな處に居りました。

## 第七回 不時の大雪

遠吉の聲を聞くと、下の三人わ、みんな立ち上りまして、
(初)居たか〳〵？
(遠)居りました〳〵。
(一同)何處に〳〵？

(速) 彼方の谷川の處に！
(銃) 四匹とも居りますか？
(速) 一同一所に居ります。
と、上下で問答して居る中、速吉わやがて降りて來ましたが、
(速) さア此方え來て御覧なさい！　此處からなら見えましよう。
と、先に立つて、山の端の處え來まして、
(速) それ、この見當の、それ、谷川の側の、それ、洞穴の處に、四匹とも居りましよう。
と、指さす方を見ますと、成る程彼方の谷川の側に、大きな洞穴がありまして、その中に四匹とも、ちやんと畏まつて居りますが、尚よく見ますと、其奥に、誰だか人間が居る樣ですから、初麿わ、豫て用意をして來た、雙眼鏡の度を合せて、其の人間をよく見ますと、これわ一人の老婆さんで、而も頭から足の先まで、眞白に成つて居りますから、初麿わいよ〳〵不思議がつて、
(初) おい〳〵、變だぜ〳〵！　あの洞穴ン中に、眞白な老婆さんが居るぜ。さア、これでよく御覧！
と、雙眼鏡を番平に渡し、番平から速吉、速吉から銃太郎と、順々に見せますと、中にも銃太郎わ、頻りに首を傾けて、
(銃) これわどうも不思議です。こんな山ン中に、彼樣な老婆さんが、而もたつた一人で居るとわ、どうも不思議ぢやありませんか。殊によつたら人間でわ無い、これわ化物かも知れませんぜ。
(番) そうです。只の老婆さんが、こんな山奥に居る筈わ無いから、これわ屹度仙人ですぜ。
(速) なに、これわ山の神だろう。
と、云う中にも初麿わ、
(初) 何にしても失敬な奴だ。乃公達の狗張子を取上げるとわ……よし、是から彼處え出かけて行つて、あの老婆を取捕えて、狗を取返してやろうぢやないか。
(番) それが宜しう御座います。でわ直ぐにこれから行つて、あの老婆を退治てやりましよう。
(速) いや、それよりわ生捕にして、淺草の奥山の、見世物にしてやろうぢや無いか。
(三人) それがいゝ〳〵。
と、勇み立つて出懸けようとしますと、銃太郎わ留めまして、
(銃) いゝえ、少しお待ちなさい！　どうも先刻から見ますのに、あれほど神通自在の狗を、私共が使ふよりわ、もつと自由にして居りますから、これわよつぽどえらい奴です。事によつたら謀略で、うまく私共を釣りよせて、一同側え來た處を、取つて喰う氣かも知れませんから、これわうつかり行かれませんぜ。
(初) 成る程、そう云えばそれもそうだ。
(銃) ですからそれよりわ、こう云う時の飛道具、寧そ此處から鐵砲で狙撃にしてやりましよう。
と、云いますと、初麿は手を打つて、
(初) うん、そうだ〳〵。こう云う時に使わなけりやア、鐵砲持つて來た甲斐が無い。よし、それぢやア兎の代りに、あの老婆を撃ち取つて、かち〳〵山の狸ぢやア無いが、婆汁にしてやろう。
(番) 成る程、それわよい處え御氣が付きなさいました。それでわ此處から筒をそろえて、「撃てエおい」とやりましようか。
(銃) なに、たつた一人の老婆を撃つのに、四人掛りにわ及びません。もし過失つて狗張子でも、撃ち殺しちやア大變ですから、此處わ私と若樣と、二人でやれば大丈夫です。
(初) よし、それぢやア乃公と犬柄とで撃つから、お前達わ見物して居て、若し此方が撃ち

損じたら、直ぐに續いて放すがいゝ。

と、これから初磨わ銑太郎と一所に、鐵砲の筒口をそろえて、彼方の洞穴の中の、眞白な老婆さんを狙いすまして、一所にドン〳〵と放しました。

(初) どうだ、〆めたか?

云つて、彼方を見ましたが、まだ煙で見えません。

(銑) たしかに反應がありましたが……

と、倘透かして眺めましたが、まだ朦朧として見えません、

すると――、これ如何に!

俄かにゴーと云う、山おろしの風が吹いて來ますと、それと一所にチラ〳〵と、雪が降り出して參りました。

(番) やツ、これわ雪ですぜ。

(速) どうもこれわ、不思議な天氣だ。

と、云う中に、見る〳〵雪わ大雪に成り、眞綿をちぎつて投げる樣に、どん〳〵降り出して來まして、一寸先も見えませんから、四人わ互いに名を呼び合つて、一ッ所に固まりながら、「どうもこれわ驚いた、何と云う天氣だろう。」「これわ屹度あの老婆が、魔法を使つたにちがい無いぜ」「それならば猶の事、こんな處に居られない。」

と、急いで逃げようとしましたが、其中に大雪わ、もう〳〵三尺も四尺も積つて、一歩も前へ出られません。

可哀そうに四人とも、とう〳〵雪の中に埋まつてしまいました。

## 第八回　東西南北

殘にも、大雪の中に埋められた四人の犬士、寒いのと、せつないのとで、其儘氣絶してしまいました。

すると、あゝら不思議!

今まであれほど降つて居た雪が、一時にばつたり止んだと思うと、忽ち彼方の谷間から、眞白な光團が、段々此方え向つて來ましたが、やがて一側え來た處で、よくそれを見ますと、光團だと思つたのわ、眞白な雲に乘つた、一人の眞白な老婆さんで、其前にわ、太郎も次郎も、三太も四郎も、頭をそろえて附添い、また其後には、此の四匹と同じ樣な、而も四匹の狗張子が、まるで影の樣に、もうろうとして見えて居ります。

老婆さんわ丁度四犬士の埋まつて居る、其上まで來ますと、靜かに狗張子を見返つて、

(婆) これ、早う行つて助けてあげい!

と云いますと、狗張子わワンと答えて、直ぐに雪の上え飛んで下り、……太郎わ初磨、次郎わ番平、三太わ速吉、四郎わ銑太郎と、各自に自分達の主人をば、雪の中から掘り起しました。

が、まだ四人とも正體わ無く、齒を喰いしばり、手を握りつめ、而も其顏わ、まるで氷の樣に成つて居ります。

老婆さんわまた狗張子に、

(婆) 早う溫めて上げんか!

と云いますと、狗わワンと畏まつて、直ぐにその主人達を、各自の腹の下え入れたり、又息を吐き掛けたりして、頻りに介抱して居ります中、程無く四人共蘇生りました。

(初) オヽ太郎か?

(太) ワン!

(番) オヽ次郎か?

(次) ワン!

(速) ヤア、三太か?

(三) ワン!

(銑) ヤア、四郎か?

(四) ワン!

茲に主從が、漸く邂逅いましたので、初めて安心しましたが、見ると、先刻洞穴に居た、彼の例の眞白な老婆さんが、何時の間にか來て居ますから、さてわと又驚いて、「おのれツ老婆

奴！」と云いながら、四人共飛び起きて、一度に筒口を向けました。
すると老婆さんわ、ニッコリと笑いながら、
（婆）これ！ 皆さん少しお待ち！ 私は決して怪しい者でわ無い。實わこの狗張子の叔母、雪の精と云うものだが、お前方に云う事があつて、此頃の時候後れに、わざ〳〵降つて來ましたのだよ。
と、云う聲がいかにも優しく、其中にまた威光があつて、迂濶に手を出しかねますから、初麿わやがて鐵砲を棄てて、其前に兩手をつき、
（初）さてわ貴女わ雪の精でしたか。雪わ狗の叔母さんだとわ、平素から聞いて居ましたが、まさかこの山にいらつしやろうとわ、今までちつとも知りませんで、つい鐵砲を向けました。まことに申譯がありません。しかし、それならばそれで、尋常に名乘つて下さればよいのに、わざと洞穴に隠れて、狗ばかり取りあげてしまうとわ、全體如何云う譯なのです？
と、少し理窟を云いかけますと、雪の精わ點頭いて
（雪）流石わ犬宮の坊ちゃん、その御尋ねわ御道理ぢや。しかし、それわ他でも無い、お前方の膽力を、一寸試して見た許り。處が、案に少しも違わず、四人が四人揃いも揃つて、末頼もしい膽力腕前。その勢なら此後とも、天晴れ功勞が立てられますぞや。それに付いてお前方に、云う一聞かす事がある。――一體この狗張子わ、今四個だけ揃うて居るが、此の他にもまだ四個、併せて都合八匹に、それ〴〵一人の主人が在つて、それで犬士が都合八人、おッつけ揃う事がある。其時こそわお前方が、初めて眞實の力を得て、この日本の國の爲めに、前代未聞の大功勞を、立てる時節が來たと云うもの。まづそれまでは四人とも、殘餘る犬士と狗張子に、一日も早く邂逅う樣、隨分共に氣を付けて、骨を惜まず探すがよろしい。尤も其間にわ、まだ種々の苦勞もあり、悲い事やせつない事わ、幾度と無く來ようけれど、それ等わ丁度今の先、雪の中に埋められても、やがてまた蘇生つて、この青空を見ると同樣、僅かの間の辛抱ゆえ、けつしてそれ等の苦勞の爲めに、氣を落してわ成りませんぞ。――それだけ云えば用の無い者。私わこれでお暇ぢや。おさらば〳〵。
と、云う中に、もうその姿わ今までの、雪と一所に消えてしまつて、空わ元の青天井、日わよう〳〵傾いて、西の峯に掛りながら、明日も天氣だと云わぬ許りに、まだキラ〳〵と輝いて居ります。
夢の中に夢を見た樣な、この四人の犬士わ、此時初めて目が覺めた樣に暫くわ言葉も無く、顏を見合せて居りましたが、やがて初麿わ手を拍つて、
（初）いや、實に今日わ不思議な日で、全體兎を撃ちに來たのか、兎わ取れずに雪の精と云う、不思議な老婆さんに出會して、不思議な事を聞いたものだ。しかし、今の老婆さんの話で見ると、まだこの外に乃公等の樣な、不思議な狗張子を持つてる者が、四人居ると云う事だから、もう兎狩わ廢止にして、はやくその四人を、一同で探しに行こうぢや無いか。
と云いますと、番平も贊成して、
（番）そうして八人揃いさえすれば、日本國の爲めに成る、前代未聞の大功勞が、出來ると云うのわ何より愉快。でわ直ぐと出掛けましよう。
と、茲に相談が纏まりまして、やがて四人わ狗張子に乘つて、勇み立つて山を降りましたが、又速吉の云いますにわ、
（速）これから殘りの四人を、四人で探しに行くのわいゝが、しかしその四人が、一つ所に

居るのだか、又四所に分れて居るのか、それが少しも解らないぢやア、四人で揃つて行つたつて、何の役にも立たないから、それよりか今日からわ、四人がしばらく四方に分れて、一人が一人宛探す事にしたら、却つて早く解るぢやありませんか。

と、云う尾に付いて銃太郎も、

(銃) それわ犬瀬君の云う通り、丁度先刻もあの山で、兎を狩り立てた時の様に、四人が四方に手分をして、探しに行くのが上策です。

(初) うん、それわ其方がいゝ。だが、それで若し見付かつたら、何處で一同落合おう？

(番) それわ御邸がよいでわ御座いませんか。

(初) いゝや、自家でわ却つて五月蠅いから、それよりあの老婆さんに會つて、揃つた處を見せる樣に、先刻の山がいゝぢや無いか。

(番) いかにも、それがよろしう御座います。でわそう云う事にして、誰でも一番先に見つけて來たものが、何か合圖をする事に致しましよう。

(初) そうだ、その合圖にわ、よく昔時の戦争なぞにある、狼煙を揚げる事にしようぢやないか。

(番) 成る程、狼煙は遠くからよく見えますから、合圖にわ一番宜しう御座います。

(初) でわ可いか、そう極めたぞ。

(三人共) はい、宜しう御座います。

と、是から四人わ別れ〳〵、初麿わ太郎をつれて、東の方へと志し、番平わ次郎と西の方、速吉と三太が南の方で、銃太郎と四郎が北の方と、思い〳〵に出かけました

## 第九回　初麿勇戰

東の方えと向つて行つた、犬宮の初麿わ、可愛い狗張子の太郎を連れまして、東海道を急ぎます中、程無く來かゝつたのわ、駿河の國富士山の麓、あの天人が羽衣を忘れたと云う、三保の松原で御座います。

今迄わ阿父さんの官宅に居て、大勢の家臣や女中に、若様々々と立てられて、不自由と云う事わ、遂に知らなかつた初麿、常から氣に入りの、番平速吉にも別れまして、たつた一人で旅え出たのですから、流石に心細う御座いましたろう。

けれども、元より氣の勝つた若様ですから、決して厭に成つた顔もせず、何でもはやく新しい犬士を見付け出して、一番掛に狼煙を揚げて、一同を驚かしてやらなければ成らんと、其方に氣が張つて居りますから、御供の太郎を無二の友達にしまして、頻りと路程を急ぎました。

すると、丁度この三保の松原に、龍神の御祭が御座います。

龍神と云えば海の神様、則ち此邊の漁師達が、此頃の大漁の御禮に、そのお祭禮をするので、二三日前から職業を休み、一同揃いの半纏に花笠、又わ向鉢卷に揃いの浴衣で、山車を曳くやら、萬燈を振り立てるやら、チャンチキリン、チャンチキリン、ワッショイ、ワッショイ、と云う騒動、村中が沸く様な賑いです。

初麿は山王樣の氏子だけに、大のお祭禮好ですから、この聲を聞きますと、もう胸が躍り出す様になつて、面白くて〳〵耐りません。

(初) さア太郎、行つて見よう。山車が來た山車が來た。

と、浮かれ立つて駈けて行きましたが、何しろ黒山の様な人で、わい〳〵押し合つて居る處ですから、初麿の様な小兒には、少しも前が見えません。

で、困つて居りましたが、見ると、彼方の龍神の社の前に、大きな松の木が在りまして、而も其幹が、まるで龍の天昇する様に、曲りくねつて居りますから、登るには丁度よう御座います。

(初)しめた。此奴わいゝ處がある。太郎、お前わ其處で待つてろ！

と、狗張子を根の處に置いて、直ぐ其松の木につかまり、それから段々登つて行つて、上の方の枝に腰をかけ、それからずつと見おろしますと、丁度富士山が正面に成つて、其前を龍神の山車が、ゆられながら來る處わ、何とも云えない景色ですから、初麿わ大喜悦で、一生懸命に見て居りました。

其中に山車わ、段々近く成つて來ましたが、見ると其上で、頻りにヒョットコを躍つて居るのが、如何にも面白う御座いますので、とう／＼初麿わ浮かれ出して、

(初)テンテレック／＼、テレックツ、テンテレックテレック、テレックツ、テンドン／＼ドン、オッピリヒヤ……

と、口で囃子を初めました。

すると、それを聞き付けた下の若者、

(若)何だ／＼？　木の上で變な聲がするぜ！

と、云いながら上を見ますと、此邊にわ見慣れない、洋服を着た一人の小兒が、松の木の頂邊に登つて居りますから、直ぐに眼を剝いて、

(若)やい！　手前わ何だつて其樣な處に登つてやがるんだ。はやく降りねェと撲ちのめすぞ。

と、お祭禮で氣が立つて居りますから、一番怒鳴り付けました。

が、初麿わ囃子で夢中ですから、ちつとも耳に這入りません。平氣でまだ枝につかまつて、今度わ山車の人形の樣に、身體を動かして浮かれて居ります。

下でわ又若者、木の根元までやつて來て、

(若)やい、降りろッたら降りねェか。此餓鬼ア強情な奴だなア。

と云う中に、他の若者も見付け出して、

(二若)こん畜生、太ェ奴だ。

(三若)降りろやい、降りろやい！

(四若)己！　これでも降りねェか。

と、傍わ下から石を投りそうですから、初麿わ初めて氣が付いて、

(初)何だ？　此處に居ちやア惡いのか。

と聞きますと、下でわ口を揃えて、

(若者)惡いから降りろッてエんだ。さア、早く降りろ！　早く降りろ！

と、喧ましく云いますので、初麿も仕方無く、

(初)それぢやア降りてやろう。

と、云いながらそろ／＼下りかけました。

下でわ又若者、初麿の降りて來る間に、根の處に置いてあつた、狗張子を見つけまして、

(若)何だ、こんな物が置いてあるぜ。

(若二)あの餓鬼の玩具だろう。

(若三)ぢやア構わねエ、踏み潰してしまえ！

と、其中の一人が、足で蹴飛ばそうとしますと、こわ如何に！　玩具だと思つた狗張子が、突然「ワン」と云いながら、向脛にかぶり付きました。

若者わ驚いたの驚かないの、

(若三)あツ、痛エ、痛エ。此奴わほんとの犬だ。

(若二)なに、ほんとの犬だ？　ぢやア撲ち殺せ！　撲ち殺せ！

と、氣の速い奴等、各自に棒切を振りあげて、太郎を撲とうとしますから、初麿も腹を立て、

(初)おのれ！　失敬な奴等だ。

と、云うより早く、松の木からヒラリと飛び下り、有り合う松の枝を持つて、若者に打つてかかる。

(若　オヤ、此奴生意氣な！

と、若者も向つて來る。此處でとう／＼初麿わ、漁師の若者を敵手にして、大喧嘩を初めました。

# 新八犬傳（下）

## 第十回　新犬邂逅

方わ大勢の若者、此方わ初麿たった一人です。けれども此方にわ、神通自在の太郎とゆう、不思議な狗張子が付いて居りますから、中々負けわしません。

見る〳〵中に太郎の體わ、犢ほどの大さに成つて、ウーワウ〳〵、ワウオウ〳〵と、恐ろしい聲で呻りながら、前え飛び付き、後え蹴散らし、右え喰い付き、左え咬み付き、一生懸命に働きましたから、流石血氣の漁師共も横腹を蹴破られるやら、臀肉を喰切られるやら、散々な目に會わされて、一同血だらけに成りながら、とう〳〵追つ拂われてしまいました。

初麿わホッと一息を吐いて、衣服の塵などを拂いながら、不圖氣が付いて見ますと、何處え行つたか太郎が居ません。

さてわ今の漁師達をまだ追駈けて行つたのかと、暫く待つて居りましたが、中々歸つて來ませんから、少し心配初めまして、

(初)ヒュー〳〵、太郎來い〳〵。

と、口笛を吹いて呼びましたが、影も形も見えません。

(初)如何したんだろう。これわ困つたなア。

と、初麿も氣が氣でありませんから、今度わ自分から出かけて、御祭禮の雑沓の中を、彼地此地と探しましたが、如何しても解りません。

今までわ、杖とも柱とも、臣下とも友人ともして、頼みに頼み切つて居た、大切の〳〵太郎に、而も知らない土地え來て、はぐれてしまつた事ですから、流石の初麿も、心細く成りまして、今わ自分の事も忘れてしまい、やがて夕方に成つて、御腹もそろ〳〵空いて來ましたのに、まだ御飯を喰べず、眼をお皿の樣にして、頻りに探して廻りました。

其中に、日もとつぷり暮れてしまいました。けれどもまだ見付かりません。

さてわいよ〳〵あの太郎わ、あんまり敵の中え深入したので、却つて漁師達に捕つて、酷い目に遭つてるのでわないかと、こう思うと尙更氣が揉めて、居ても立つても居られませんから、急いで又漁師町え來て、軒に釣してある提灯の光で、一軒毎に覗いて廻りましたが、まるで聲すら聞えません。

仕方がありませんから、今度わ裏町を松原傳いに、濱邊の方え來て見ますと、今夜わ御祭禮の事ですから、町の方こそ賑やかですが、此邊わ人の影も見えず、只波の音ばかりで、其上にわ眞圓なお月樣が、徐かに照らしていらつしやいます。

(初)あゝお月樣！　貴君わ高い處にいらしつて、明るく光つていらつしやいますから、よく御解りで御座いましよう。太郎わ何處え參りましたか、何卒敎えて下さいまし！

と、頼んで見たが、うつかり物を云つたら、直ぐに雲が出て來やしないかと、お月樣わ澄ました顔で、何とも云つて下さらない。

すると、遙か彼方の方で、笛の聲が聞え出した。

はてな、祭禮の笛ともちがうようだと、耳を欹てて聞いて見ると、其聲が大濱に響いて、いかにも勇ましく聞えますので、初麿もつい釣込まれて、やがて其聲を目的に、段々近く行つて見ますと、丁度彼方の波打際を、一人の漁

師の兒が、笛を吹きながら歩いて行くと、その前になり後になり、一匹の狗張子が、さも其笛に聞惚れた様に、尾を振りながら付いて行きます。

(初)おウ、太郎だ〳〵！

思わず聲を出した初麿わ、直ぐに側え飛んで行つて、

(初)太郎！ 太郎！

と呼びましたが、狗張子わ聞えない風で、まだ此方を向きません。

(初)太郎と云つたら、太郎！

と、初麿わ急き込んで、いきなり其の頸首を捕えますと、今まで笛を吹いて居た兒わ、此時初めて立ち止まつて、

(舵)貴君、何をなさるんです？

と、靜かに咎めた。

咎められた初麿わ、少し勃然としましたから、

(初)乃公の犬だから連れてくんだ。

と云いますと、漁師の兒わ笑いながら、

(舵)坊ちやん、それわ違いましよう。これわ私の犬ですよ。

(初)なに違うもんか。これわ確かに乃公の犬だ。

(舵)そんなに仰有るのなら、確かな證據が御座いますか。

(初)あるとも、この犬わ太郎と云つて、この犬宮初麿が、先刻途中で喧嘩した時、はぐれた犬に違いない。

(舵)いゝえ、それわ違います。この犬わ五郎と云つて、この犬島舵五郎が、幼稚い時から祕藏の狗張子です。

(初)なに、五郎？

(五)ワン！

(舵)それ御覧なさい！ 貴君が先刻太郎と云つた時にわ、何とも返事をしなかつたのが、今五郎と仰有つたら、ワンと云つたぢやありませんか。これが確かな證據です。

と、こう云われて見ますと、成る程一言もありませんから、初麿も腕を組んで、考へ込んでしまいましたが、不圖雪の精に聞いた事を、思い出して膝をポンと打ち、

(初)うむ、それでわ君も八犬士の一人か。それで犬島と云うんだネ。これわ好い人に邂逅した。

と、俄かに元氣付いて喜びますと、舵五郎も嬉しそうに、

(舵)さてわ貴君が、先刻海神様の御地内で、若者と喧嘩をなすつて、すばらしい動作をなすつた、豪い坊ちやんで御座いますか。それでわ私も先刻から、御目に掛り度いと思つて居りました。して貴君の狗張子わ、それ切り解らないので御座いますか。

(初)そうだ。先刻から方々探してるんだが、如何しても解らない。

(舵)それわさぞ御困りで御座いましよう。

(初)事によつたら漁師達に、捕虜に成つて居やしないか、君わまだ知らないか？

(舵)私わまだ知りませんが、元より神通自在な狗張子、まさかそんな事わ御座いますまい。大方それわ何處えか行つて、御飯でも喰べて居るのでしよう。いまに屹度參りますから、まづそれまでわ、こゝで御話なすつていらつしやいまし！

(初)そうだ、太郎が居なく成つた代りに、君に此處で會う事が出來りや、これで僕の氣も濟むのだ。でわ暫く此邊で話をしながら待つて居よう。

(舵)それが宜しう御座います。しかし此處でわ、又他の奴等が來ると邪魔ですから、船の中でゆつくりと、御休息をなさいまし！

と、やがて濱邊え來て、其處にあつた一艘の船え、初麿と五郎を乗せて、自分わ艪を押しなが

ら、少し陸を離れました。

すると又、何を見付けたか五郎が、頻りに陸の方を向いて、

（五）ワン〳〵、ウオー……

と、吠えますから、鮀五郎わ櫓を止めて、

（鮀）何だ？　五郎！

と、云いながら振り返つて見ますと、今しも彼方の波の中を、一匹の狗張子が、頻りに泳いで來る様子です。

（鮀）ヤア、參りました〳〵。あれが貴君の太郎でしよう。

（初）なに、太郎が……？

云つて見ますと、成る程先刻はぐれた太郎が、波の中を泳いで來ます。

（初）おゝ、太郎、よく來た〳〵〳〵！

と、初麿わ大喜悦、船の中から兩手を出して、急いで太郎を抱きあげて、船の中え入れて見ますと、これわ如何に、太郎わ口をカツと開いて、立派な箱を吐き出しました。

## 第十一回　狗兒島圖

太郎の口から吐き出した箱、見ると立派な黒塗に、金で波の紋の蒔繪をした、[illegible]様な物ですから、初麿わ驚いて、

（初）全體これわ何だろう？

と、不思議がつて見て居りますと、鮀五郎も小首を傾けて、

（鮀）この御紋わ龍神様の御紋ですな。

（初）なに、龍神様の紋だ？

（鮀）解りました。太郎が今まで見えなかつたのわ、屹度この箱を取りに行つたのでしよう。何でも好いから其箱を、早く明けて御覧なさい。

と云いますので、太郎わ蓋を取つて見ますと、中から巻物が一本出ました。

（初）おやこんな物が出た。

（鮀）早く擴げて御覧なさい！

初麿わ又紐を解いて、その巻物を擴げて見ますと。これわまだ新しい地圖です。定めし何處の地圖だろうと、二人わ月光で見ましたが、元より世界の圖でも無ければ、日本の圖でも無く、ついに見た事も無い形をして居ります。

が、尚よく〳〵見ますと、これわ一つの島國で、形わまるで狗張子を横から見たとうり、側にわ丁度鈴の様な、小さな島も付いて居ります。

これを見ると鮀五郎わ、急に膝をポンと打つて、

（鮀）ウム、そうだ〳〵。これわ狗兒島の地圖ですよ。

（初）なに狗兒島だつて？

（鮀）そうです。――此の三保の浦から南の方を、一萬二千三百里行くと、大きな無人島があつて、狗張子に似て居る處から、狗兒島と云つて居る事わ、幼少い時から聞いて居りました。それで屹度此の地圖わ、其島の圖に相違ありません。

と云いますから、初麿も驚いて、

（初）おゝ、それでわ狗兒島と云う島が、南の方にあるのだネ。

（鮀）そうです。而も其國にわ、立派な山や立派な川が、この圖の通りにちやんとあつて、金も出れば銀も出、其他動物でも植物でも、何でも無い物わ無いと云う、世界一の好い處ですが、只一つ困る事にわ、其處にわ恐ろしい狂犬が居て、人を見ると喰い殺してしまうので、誰も其處え行く事が出來ず、只遠くから指を咬えて、見て來る許りだと云う事わ、よく伯父が話して居りました。

と云う中初麿わ、ぢつと腕を組んだまゝ、地圖

を見詰めて居りましたが、
(初)そう云う好い處があるのに、今まで放棄つて置くと云うのわ、どうも惜い話ぢや無いか。如何かして其國を、日本の領地に仕度いもんだネ。
(熊)それわもう私も、疾うから考へて居るんですが、何しろ私一人ぢやア、如何する事も出來ませんから、今まで默つて居りました。
(初)いや、それわ驚く事わ無い。お前わ一人だと云うけれども、この不思議な狗張子を持つてる、犬と云う苗字の付く者わ、この日本に八人居て、其八人が揃う時わ、取りも直さず日本の爲めに、大功名をする時だと、日外狗の叔母さんだと云う、雪の精に聞いた事がある。
と、玆で以前からの事歴を話しますと、初めて聞いた舵五郎も、大きに力を得まして、「そう云う事なら一日も早く、殘りの三人を探し出し、一番狗兒島え乘り出して、此の神通自在の狗張子で、狂犬どもを追拂い、狗兒島の中央に、朝日の旗を押立てましよう。」と、二人共勇み立つて、やがて其地圖を卷き納め、それを大切に懷中え入れて、倘狗兒島征伐の、二人の考案を話し合つて居りましたが、其中に夜も明け放れて、遙か東の海の端にわ、眞赤な朝日が登つて來まして、その八方を照らす後光わ、まるで大きな軍旗の樣です。

* * * * *

話頭わ變つて、玆に又犬柄銃太郎わ、他の者に別れましてから、例の四郎を連れまして、北え北へと參ります中、程なく來かゝりましたのわ、常陸の筑波山で御座います。
筑波山と云えば、駿河の富士に相對して、東京近所でも名代の山。こう云う山の奧にわ、よく豪い人の居るものだから、事に依つたら乃公達の仲間も、此の山に居るかも知れないと、段々山路を登つて參りました。
元より獵師の銃太郎、山路にわ馴れて居りますが、今朝から歩行き續けたので、大分御腹が空きましたから、一つ御辨當を遣おうと、路傍の森の中え這入つて、用意の竹皮包を取り出しました。
けれども、何か飲む物が無ければ、御辨當も甘く喰えませんから、又吸筒を出しましたが、一口飲もうとしました處、途々咽喉の乾く度に、ちよい〳〵飲んでしまいましたので、もう一滴もありません。
其處で仕方がありませんから、溪流の音を聞きつけて、其處え水を酌みに行き、これでよいと喜びながら、又元の森え來ますと、これわしたり、先刻其處え置いて行つた、鐵砲わちやんとありますが、竹皮包が見えません。
(銃)はてな、先刻確かに此處え出して置いたのに、紛失るとわ不思議だぞ。盜人の所爲なら、一所に鐵砲も持つて行きそうなものを、……食物許り取つて行くとわ、……よつぽど意地の汚い奴だ。
と、獨語を云つて居りました。
すると四郎わ急に木の上を見て、
(四)ワン〳〵ワン! ウオ……ワン〳〵ワン!
と、劇しく叱り付けますから、氣が付いて木の上を見ますと、大きな杉の股の處で、手長猿が二三匹、先刻の竹皮包を解いて、さも甘そうに喰べて居ります。
(銃)おのれ失敬な奴だ!
と例の鐵砲を取りあげて、只の一發に擊殺そうとしますと、手長猿わ吃驚して、キャッ〳〵〳〵と云いながら、長い手を合せましたが、拜む眞似をするかと思うと、又眞赤なお尻を向けて、ペタ〳〵叩いたりして居ります。

## 第十二回　手長猿橋

失敬極まる猿共の惡戯と、銃太郎わもう勘辨せず、唐突鐵砲の彈條を弾きました。處が、只カチッと云つた許りで、ズドンと云う音が出ませんから、はてなと鐶を入れかけて、今度こそわと引きましたが、又彈丸が出ませんから、變だと思つてよく見ますと、これわ如何に、何時の間にか機械が毀してあります。

さてわこれも猿の所爲かと、銃太郎わ切齒をしながら、木の上を睨めつけますと、其中に猿共わ、御辨當を悉皆食べてしまつて、空に成つた竹の皮を、見せびらかしてわ笑つて居りますから、もう銃太郎わ火の様になつて、

（銃）おのれ如何するか見やがれ！

と云うが早いか、突然木の幹え手をかけて、身體中の力をこめて、エッサ〳〵と振り立てました、

すると上の猿共も、此奴大變な事に成つたと、一生懸命にかじり付いて居ましたが、何しろ大力で搖振られるのですから、暴風の時より枝お離いて、流石の猿も我慢が出來ず、まるで柿實の振落される様に、バラ〳〵バラ〳〵落ちてしまいました。

下に待ちかまえて居た狗張子の四郎、元より大の仲悪の猿が、主人の辨當を横取したり、鐵砲までも毀すなどと、失敬極まる事をしたのですから、何で猶豫をしましよう、矢庭に飛びかかつて行つて、片端から喰い付きました。

猿わ元より犬に敵いません。けれども大勢の事ですから、負けない氣を出しまして、この一匹の四郎をば、中央に追取り圍んで、四方から引搔きにかゝりましたが、神通自在の狗張子にわ、まるで爪の痕もつきません。

其中に一匹倒れ、二匹弱り、三匹投げられ、四匹傷けられて、散々な目に遭わされましたから、もう耐らんと思いまして、一同地上え平蜘蛛の様に成つて、今度わ眞個に手を合せました。

（猿の一）降參々々！

（猿の二）この通り手を合せますから、

（猿の三）何卒御勘辨遊ばしまして、

（猿の四）命許りわ……

（猿一同）御助け〳〵！

と、頼みましたが、狗張子わ聽きません。

（狗）卑怯な奴だッ！

と云いながら、又踏み殺してしまおうとしますと、何思つたか銃太郎わ、今まで木の下に立つて、四郎の動作を見て居りましたが、此時すつと進みよつて、

（銃）いや、待て〳〵！

と、四郎を制し、更めて猿に向いまして、

（銃）こらやい、貴様等わ怪しからん奴だぞ。辨當を盗むやら、鐵砲を毀すやら、其上乃公達を馬鹿にするやら、散々悪い事をして置きながら、敵わなく成つて來ると、直ぐまた降參するなどとわ、卑怯千萬憎い奴だぞ。しかし、高の知れた山猿共、鏖殺にした處で、何の役にも立たんから、品によつたら許さん事もないが、其代りに、これからわ乃公の臣下に成つて、この狗張子と一所に、乃公様の御用を勤めるか如何だ？

銃太郎わ氣の廣い兒ですから、こう云つて聞きますと、猿共わさも嬉しそうに、額を地上に摺り付けながら、

（猿の一）それわ仰有るまでも御座いません。昔時桃太郎と云う大將が、鬼ヶ島征伐にいらつしいます時も、私共の先祖の猿わ、途中から御臣下に成りまして、戰爭の御供を致しましたが、其時も同じ御臣下の中に、一匹の犬殿がいらつしやいまして、初めわ猿と交情が惡く、喧嘩許り致して居りましたが、

遂にわ犬の仲好に成つて、それから鬼ケ島え押し渡り、雙方共に功名をして、めで度く凱旋したと云う事わ、定めし御存じで御座いましよう。

（猿の二） 其處で今私共も、こうして降參致しまするから、其處にいらつしやる狗張子殿にも、先刻からの失禮を御詫び申して、此後わ雙方交情夜く、旦那樣の御用を勤めまするで御座りましよう。

と、眞面目に成つて云いますと、銃太郎わ横手を拍ち、

（銃） これわ好い事を云う奴だ。犬と猿とわ昔時から、交情の惡い譬喩にも云うが、又一度交情が直れば、却つて雙方の力を併せて、一廉の功名を立てるものだ。よし、それでわ今日から臣下にして、乃公の供に連れて行くから、隨分忠義を盡すのだぞ。

と云い聞かせ、又四郎に向いまして、

（銃） 四郎！ この猿共わ、今日からお前の仲間だから、其心算で仲好くしろ！

と云いましたが、四郎わ只默つて聞いて居る許りで、碌に挨拶もしません。

只猿の方ばかり、

（猿の一） 何分よろしく御願い申します。

（猿の二） これからわ仲好くしましようねエ。

（猿の三） 先刻わどうも失禮しました。

（猿の四） しかし貴犬の御強いのにわ、實に恐入つてしまいました。

などと、頻りに御世辭を云つて居ります。

さて銃太郎わ、大勢の猿を臣下にしまして、何だか嬉しくてたまりません、これで一匹でも雉子を捕えれば、乃公わさしづめ桃太郎だと、勇み立ち勇みたつて、倚山奥えと參りましたが、やがて高い崖の上え出ました。

見おろすと、下わ目も廻る許りの深い谷で、彼方わ森々と茂つた山です。

けれども橋がありませんから、彼方え渡る事が出來ず、と云つて後え引返すわ、いかにも馬鹿氣た話だと、暫く立つて考えて居りました。

すると猿わ、忠義らしく前え出まして、

（猿の一） 旦那樣！ 此處を御渡りに成りますなら、私共が橋を拵えましようか。

と云いますから、銃太郎わ點頭いて、

（銃） そうだ、其處等の藤蔓でも取つて、早く橋を拵えてくれ！

と云いますと、

（猿の一） なに、藤蔓も何も要りません。こうすれば橋が出來るんです。

と、やがて殘らずの猿共が、順々に手と足を繼ぎまして、長い階梯の樣な形になり、そして一番先に居るのが、ヒョイと彼方え飛び越して岩の角えつかまりますと、成る程丁度橋の樣に成りました。

（猿の一） さア、旦那樣も四郎さんも、これを渡つていらつしやいまし！

と云いますから、「これわ妙だ、眞個の猿橋だ。」と、銃太郎わ面白がつて、四郎を先に渡らせ、自分わ其後から、鐵砲で調子を取りながら、猿の背中を踏みしめ〳〵、段々渡つて參りますと、やがて中央まで行つた時分、後の方に居た猿の一疋か、何かキャッと聲をかけると、それを合圖に中央の猿が、わざと手を放したから耐りません、見る〳〵中に銃太郎と四郎わ、底も知れない谷の中え、眞逆樣に落ちてしまいました。

## 第十三回　筑波の怪童

猿の計略にかゝつた銃太郎わ、可哀そうに底も知れ無い谷の中え、眞逆樣に落込みました。

けれども銃太郎わ、根が獵師の子で、幼少い時分から野山をかけ廻り、こう云う危險な目にわ、今までも會つた事がありますから、空を切つ

て落ちて行く間にも、ひらりと體を交して、やがて其底え來た時にわ、身體を眞直にして居りましたから、大した怪我もしませんで、只谷底の草の上に、どしんと尻餅を搗いた許りです。

が、何しろ高い處から落ちたのですから、暫くわ氣が遠く成つて、茫然として居りましたが、漸々の事で元氣付いて、初めて四邊を見廻しますと、此處わ深い谷の底で、草は茫々と生い茂り、兩方の懸崖わまるで斧で删つた樣に、登ろうと云つても手掛りわありません。又彼方の岩の陰を見ますと、幅が三間もあろうかと思われる、大きな瀧がドウ／＼と落ちて居ります。

銃太郎わやがて起きあがつて、

(銃) 猿奴、酷い目に會わしやがつた。しかしこんな谷底え落ちても、何處にも怪我をしなかつたのわ、よく／＼乃公の運の好いのだ。それわそうと、四郎は如何した？　彼奴も確かに一所に落ちた筈だが、何處え行つてしまやがつたか……若しや途中で岩にでもぶつかつて、其儘死んでしまやしないか。そうだとほんとに大變だが……

と、大きに心配しまして、彼方此方と探して見ましたが、まるで影も形も見えません。

(銃) これわどうもいよ／＼變だ。でわ矢張り落ちなかつたのかしら？　そんならそれで、早く見付けてやり度いが、何を云うにも此處わ谷底、上るにわ路も無し　こいつわどうも困つた事に成つたぞ。

と、頻りに考へて居ましたが、其中に咽喉が渇いて來ましたから、一つ水を呑もうと思つて、瀧の側まで來ますと、誰とも知らず、自分より先に、瀧を浴びて居る者があります。

銃太郎わそれを見て、「そうだ、乃公も序に浴びてやろう。」と、岩の上え衣服を脫ごうとしますと、突然瀧の中から、

(音) こら！　誰だ！

と、まるで銅鑼の樣な聲で叱りつけますから、銃太郎は吃驚しまして、

(銃) 誰だとわ……貴樣こそ誰だ？

此方からも威張りました。

すると、やがて其瀧壺から、ムク／＼と出て來たのわ、畫で見る金太郎の樣な、眞赤な顏をした子供が一人、團栗の樣な眼を剝いて、此方を睨めつけて居りますから、此奴わ不思議な奴だと思いながら、銃太郎も睨み返しますと、先方わ又岩の蔭から、大きな鉞をかつぎ出して、

(音) やい、貴樣わ何者だ？

(銃) 貴樣こそ何者だ？

(音) 全體何しに來やがつたんだ？

(銃) 貴樣こそ何をして居やがるんだ？

(音) 何だと此奴め！　乃公の眞似許りしやがるな。

云うが早いか其子供わ、大鉞を振りあげて、銃太郎に打つてかゝりますから、銃太郎も心得たりと、鐵砲の筒で受け止めますと、又取り直して切りつければ、此方わ受け流して又打ち込む。

(音) おのれ生意氣な！

(銃) 何を小癪な！

と、一上一下、虛々實々、火花を散らして闘いましたが、中々勝負が付きません。

其中に銃太郎わ、初めて氣が付いて見ますと、先方の子供の胸に掛けて居る、腹掛の中央に書いてあるのわ、大きな「犬」と云う字ですから、

『これわ不思議だぞ、事によつたらこの子供わ、矢張り犬士の仲間かも知れんぞ。道理で普通の子供とちがつて、餘程手強いと思つた。』と、こう氣が付いて見ますと、迂濶闘つて、怪我をさせてわつまらんと思いますから、やがて聲をかけました。

(銃) おい、待つた／＼！

(音) 待てとわ何だ！　弱蟲奴！

(銃) いや、貴様の名が聞き度いんだ、名乗れ名乗れ！
(音) そう云う貴様から名乗れ！
(銃) よし、それならば名乗つて聞かそう、吾こそ日本新八犬士の一人、犬柄銃太郎と云う者だ！
(音) それでわ乃公の名も聞かしてやろう。乃公わこの筑波山に住んで居る、犬瀧音丸と云う者だ。
(銃) なに、犬瀧音丸だと？ あの犬瀧‥‥
(音) おゝさ、この筑波山の犬瀧で、産湯をつかつた犬瀧音丸、足柄山の金太郎にも、腕白競ぢや敗を取らねえ、犬童子を知らないのか。
と、力身返つて名乗りました。

## 第十四回　名水奇特

大瀧音丸と云う名を聞くと、銃太郎わ其儘鐵砲を棄てて、
(銃) それぢやア少し待ちたまい！
(音) 何だ、待てとわ？
(銃 話があるから待ちたまい！
と、云つて側にある岩のうえ、自分から先づ腰をかけると、音丸も仕方無く、大鉞を小腋にかゝえて、其傍えどつかと胡坐をかき、
(音) 何だ話たア、ぐづ／＼せずに早く云わねエか。
と、云う顔をつく／＼見ながら、銃太郎わさも感心した體で、
(銃) 君も犬瀧と名乗るからにやア、犬士の仲間に違いない。
(音) 犬士の仲間たア何の事だ？
と、云うと、それを又聞き咎めて、
(銃) 君わこんな山奥に居るから、こう云う事わ知るまいが、全體僕達わ新八犬士と云つて今この日本中に、犬ッと云う苗字の付く兒が八人ある、其中の一人なんだ。で、君わ犬瀧音丸、僕わ犬柄銃太郎。ね、この通り、犬ッて云う字の付く者に、犬宮初麿、犬門番平、犬瀬速吉と、こう五人まで解つたが、まだ此の他に三人ある筈、この三人を見付け出して、八人がちやんと顔を揃えりやア、其時こそわ僕達が、この大日本帝國の爲めに、大功勞をする時なんだが、何と君もこれからわ、こんな山奥に引込んで居ないで、僕と一所に東京え來たまいな！
と、これから今までの事を、一通り話しますと、音丸わ俄かに莞爾付いて、
(音) うむ、面白エ／＼！ こいつわ馬鹿に面白エ！ ぢやア八人が揃いさえすりやア、大日本帝國の爲めに、大功勞が出來るんだな。乃公も功勞わ大好きで、何でも今に大きく成つたら、大仕事をしなけりや成らねエが、まアそれまでわ此の山に居て、よく身體を鍛えて置こうと、毎日この犬瀧を浴びに來て、八歳の年から十二まで、丁度五年に成るんだが、初めわ身が割けるかと思つたが、今ぢやア見なせエこの通り、背中の皮が石の様だぜ。
と、叩いて見せるとコツ／＼云います。
銃太郎わそれを聞いて、いよ／＼頼もしく思いましたが、やがて又思い出して、
(銃) それぢやア君も狗張子と云う、不思議な寶を持つてるだらう。
(音) うむ、持つてるとも／＼、生まれた時から狗張子と鉞わ、始終側を放した事ア無エんだが、乃公の瀧を浴びてる間わ、いつでも山え遊びに行つて、乃公の食物に成るものを、何か知らん取つて來るんだ。今に乾度兎か雉子でも、咬えて來るに違いない。
(銃) そりやアいよ／＼面白いな。實わ僕も持つてるんだが、今途中で猿に欺されて、この谷底え墜落る途端に、何處えか行つてしまつたから、先刻から心配してるんだ。

(音)なアにそんなら案じる事わ無い。今に乃公が歸つて來たら、そこいらを探さしてやろう。
と、こう云つて居る中に、音丸わまた瀧壺え行つて、水を少し酌んで來まして、
(音)おい、この水を飲んで見ねエか、實に甘い名水だぜ！
(銃)それわ有難い。先刻辨當を喰いはぐれたんで、空腹くつてたまらない處だ
と、云つて一口飲んで見ますと、何とも云えない味がして、頰桁も落ちそうですから、銃太郎わ感心して、
(銃)如何もこりやア不思議な水だ。こんな甘い水は初度だ。
と舌鼓を打つてガブ〱飲みますと、音丸わまた腕を見せて、
(音)この水の不思議な事わ、まだそれ許りぢやア無エんだよ。怪我をした時にこれで洗えば、直ぐに疼痛が止まつてしまうし、病氣の時にこれを飲めば、どんな大病でも直きに癒る。此間乃公が崖から落ちて、この腕を折つぺしよつたが、この瀧を浴びたもんだから、今ぢやアこの通り何とも無エ。美濃の養老が靈泉だの、富士の金明水が名水だツて、この筑波の犬瀧にやア敵うもんか。乃公なんぞわこの水許りで、この通り大きく成つたんだ
と、效能を聞いて見ますと、如何にも有難い水ですから、何か後日の役に立つだろうと、銃太郎わ持つて來た吸筒を出して、それえ一杯入れて置きました。
この時彼方の懸崖の上で、ワウオー〱と云う聲がしました。
兩人わ耳を引立てて、
(音)それ六が歸つて來たぞ。
(銃)而もたしかに二匹の聲だが……
と、云いながら見上げる處え、間も無く岨道を急ぎ足で、此方えやつて來ますのわ、先刻はぐれた四郎に、それとまるでお揃いのが一匹。——これこそ音丸の祕藏の飼犬、筑波の六と云う狗張子です。
(音)おゝ六か、待つて居た〱。
(銃)おゝ四郎か。よく來た〱。
云いながら傍え行つて見ますと、二匹とも其の背上え、一杯に猿の死骸を負つてますから、さては先刻の仇敵をば、二匹で討つて來てくれたのかと、銃太郎わその頭を撫でて、頻りに喜んで居りました。
さて玆で銃太郎わ、筑波山の怪童子、犬瀧音丸と云う新犬士を、探しあてた事ですから、此上わ一日も早く、豫て手筈の目黑え歸つて、他の犬士と名乘り合おうと、それ許りを樂しみに、今までの疲勞も忘れ、直ぐに音丸を連れまして、山を出る事に成りました。
其途中、又以前の懸崖の上え出ましたから、銃太郎わ音丸を見かえり、
(銃)此處々々。さつき猿奴に一杯やられたのわ、丁度此處だつた。馬鹿々々しい！
と云いますと、音丸わ笑い乍ら、
(音)こんな谷に橋が入るもんか。見なせエ、こうすりやア譯わ無い。
と、例の六の背中に乘つて、えイと一聲かけますと、一足飛に飛び越してしまいました。
これを見て銃太郎も負けない氣に成り、
(銃)どれ、それぢやア僕もやつて見よう。
と、四郎に跨がつて一鞭あげますと、成る程譯も無く飛び越せましたから、こゝで二人わ連れ立つて、狗張子の頭を並べながら、程無く筑波山を出て參りました。
話變つて速吉に番平、これが又西と南に、思い〱の路を急ぎまして、不思議な事から一時に、二個の犬士を見付け出し、四人一組に成りまして、めで度く目黑へ引揚の御話、それわ

次回の御樂しみ。

## 第十五回　八王子町

こに又犬瀬速吉わ、三太を連れて出かけましたが、自分わ南の方の番ですが、先刻見た處でわ、大將の犬宮初鷹が、東の番でありながら、東海道を南えと行つた樣子ですから、同じ方へ行つても仕方が無いと、わざと道をかえて、自分わ西の方を、甲州路えと急ぎました。

まづ初めわ多摩川の河原傳いに、段々上つて參りましたが、程なく出ましたのわ、八王子の町で御座います。

八王子と云う處わ、東京の近在でわ、隨分賑かな町で御座います。

殊にその町の名の八王子、その八が八犬士の八に緣があつて、而も八ツの王子とわ、如何にも緣起が好う御座いますから、速吉わまづ此處に足を停めて、新しい犬士を探す事にしました。

其處で毎日々々、例の三太を連れて、町中をあるいて居りましたが、或日の事で御座います。或町を通りかゝりますと、或家の勝手口で、「シッ〳〵、こん畜生！」と、おさんの叱る聲が聞えますから、速吉わ三太が叱られたのかと、立ち止まつて後を見ますと、三太わ其處に音無しくして居ますから、はてなと思つて居りますと、間も無く彼方の垣根の穴から、勢好く飛び出した者があります。

見ると、一匹の大きな斑猫で、大きな鯛を咬えながら、一目散に逃げて行きます。

これを見た狗張子の三太、何で默つて居りましよう、『おのれッ。』とも何とも云わず、一聲『ウーワッ』と叫びながら、直ぐに追つかけて參りました。

すると、猫も一生懸命、矢を射る樣に逃げて行きますから、三太もまるで競馬の樣に、宙を飛んで追つかけて、忽ちの中に二匹共、影も見えない位に成りました。

其間がまるで稻妻の樣に、瞬く間の事ですから、速吉も呆れて居りましたが、これも以前わ盜賊をした位な、敏捷い男の事ですから、直ぐに又其後から、飛ぶ樣に追つかけて行きました。

けれども先方わ二匹とも四本脚、此方わ二本脚の事ですから、どうしても中々追付きません。とう〳〵はぐれてしまいました。

で、仕方がありませんから、今度わ頻りに口笛を鳴らしましたが、これも聞えない樣子です。

(速) 此奴わ困つたぞ。今彼奴にはぐれちやア、折角此處まで來た甲斐が無いんだ。三太も好い加減にして置きやアいゝのに、あんまり長追をするもんだから、こんな事に成つちやつたんだ。チョッ、困つたなア。

と、獨語を云いながら、目的も無く町を步行き、そして會う人毎に、

(速) もし〳〵、只今此邊を、鯛を咬えた猫を追つかけて、大きな狗張子が駈けて行きやしませんか。

と尋ねましたが、

(人) 何だ、狗張子が猫を追掛けた。馬鹿な事を云いなさんな。狗張子を尋ねるなら、其邊の玩具屋え行くがいゝや。

と、誰も取り合つてくれません。

其中に或る四辻え來ますと、彼方から十歲許りの兒が三四人、何か話しながら來る樣子です。速吉わこれを見て、子供は正直なものだから、よし、これに聞いて見ようと、其側え出かけて行つて、

(速) おい〳〵、今此邊を、大きな狗張子が駈けてきやしなかつたか。お前達知つてるなら、いゝ兒だから敎えておくんな！

と、こう云つて聞きますと、子供達わ顔見合せて居ましたが、

(甲)ぢやア、安ちやん許のが逃げたんだろうか。

(乙)なアに、今し方居たぢやアないか。

(丙)居たとも〳〵、診ちやん許のも一所に居た。

と、話し合つて居るのが、他にも狗張子の居る様ですから、速くも聞き咎めた速吉、

(速)おい〳〵、その安ちやんだの診ちやんだのつて云うのわ、一體何處の兒だエ？

と聞きますと、子供の中でも一番口の達者なのが、少し前え出て、

(甲)ぢやア君わ、まだ安ちやんや診ちやんの事を知らない人だネ。

(速)うむ。知らないから教えとくんな！

其子供わ得意に成つて、

(甲)安ちやんてエなア織屋の坊ちやんで、眞實の名は犬町安藏てエんだ。

(速)なに犬町安藏？　あの犬町？

(甲)そうさ。せエから診ちやんてエなア、犬手さんてエお醫者様の兒で、犬手診一てエんだア。

(速)犬手診一か？

(甲)そうさ。で、な、兩人とも强いぜ。僕達の大將なんだ。處がネ君、兩人とも生まれた時から、大きな狗張子を持つてるんだ。

(速)なに、大きな狗張子？　うん〳〵、それから？

(甲)でネ、まるで眞實の犬の通りなんだ。强いぜ、君！　横町の赤だつて、通町の斑だつて、何だつて敵やしない。……でネ、安ちやんも、診ちやんも、大層可愛がつてるんだ。だから毎日々々、診ちやん許の御庭で、二匹で角力取らしてるんだ。……今も僕達ア見て來たんだ。面白いぜ〳〵。

と、話すのを聞きまして、速吉わ大喜悅、

(速)うん〳〵、有難う〳〵。ぢやアその犬手さんてエなア何處だイ？

(甲)其處の角を曲つて、二町許り行つてまた左へ行くと、直ぐだ。

(安)そうか。有難う〳〵！

と、今わ速吉、新犬士を探し當てた嬉しさ、三太の事わ後廻しにして、まづ子供の教えた通り、犬手と云う家え來ました。見ると、成る程立派な結構で、正面にわ、大きな玄關があり、それから左右にわ、高い板塀がズウつとあつて、庭も中々廣い様子です。すると其塀の中で、頻りに犬の吠える聲が聞え、それから又人の聲で、

(安)さア今度わ七の勝だぞ。

(診)なアに八だ〳〵。

(安)それよりやア次郎とやらせよう！

(診)ぢやア次郎と大七とだぞ。

(安)面白い〳〵！

と、云うのがよく聞えますから、速吉わ塀の側え行つて、丁度好い處に明いて居る、節穴から中を覗きますと、——成る程中央の芝の上で、二匹の狗張子が咬みあつて居り、その側にわ太つた兒が、腹掛一つに成つて行司をし、又彼方の樹の下にわ、飛白の着物に麥藁帽子をかぶつたのが、威張つて腰かけて居ましたが、また其側に控えて居るのわ、思いがけない朋輩の、犬門番平に相違ありませんから、速吉わ驚いて、

(速)あア、番平さんだ、犬門君だ！

と、思わず聲をかけました。

## 第十六回　四犬奇遇

けれども中でわ聞えない様子。三人共一生懸命に成つて、狗張子の角力を見て居りますから、速吉わまた聲をかけて、

(速)おい番平さん！　僕だよ、犬瀬だよ、速吉だよ。

と、續け樣に呼ぼうとする時、自分の體を引く者がありますから、誰かと思つて振りかえつて見ますと、先刻猫を追つかけて行つて、其儘迷兒に成つたと思つた、自分の狗張子の三太ですから、

(速)おゝ三太、よく歸つて來た。全體今まで何處え行つてた？

と、聞くのに、それにわ答えず、只頻りに裾を引きますから、引かれる儘に行つて見ますと、丁度高塀を廻つた處に、小さな木戸があつて、而も少し明いて居ますので、今度わ其處から首を突込んで、

(速)おい番平さん、おい〳〵！

と呼びますと、初めて氣が付いたと見えまして、番平は此方を振向いて、

(番)おゝ犬瀬君か、速吉さんか、不思議な處で會うぢやないか。

(速)先刻から呼んでたのに……

(番)そうか。ちつとも知らなかつた。まあ此方え這入りたまえ！

(速)いゝかい、這入つても？

と、云う時番平わ、他の二人に向いまして、

(番)此の人です、今お話をした犬瀬速吉と云ふのわ。矢張り犬宮樣のお邸に居る、八犬士の一人です。

と云いますと、腕白らしい腹掛一ツの兒わ、速吉の側えずつと來て、

(診)オヽ、君かい、犬瀬君てエのわ。僕ア犬手診一てエんだ。今犬門君に君の話を聞いて、早く會い度いと思つてたんだ。よく君、此處が解つたねエ。

と云いながら嬉しそうに手を取つて、奥の方え連れて來ますと、麥藁帽子の怜悧らしい兒わ、靜かに迎いに出て、帽子を脱ぎながら、

(安)君が犬瀬速吉さんですか。貴君の名わ先刻犬門さんから聞いてました。よく速く來て下さいました、さア、此方え來てお掛けなさい！

と、自分の今まで腰かけて居た　樹の下の席を讓りましたが、速吉わまだ遠慮して、

(速)はい、有難う。どうも、思い掛無く貴君方に會つて、實に私わ、こんな嬉しい事わありません。實わ貴君方の御名前も、今此處え來ます途中で、町の兒に聞きましたから、早くお目に掛り度いと思いました。ですが……この番平さんが、何うして此樣な處え來てるんだか、こればつかりわ不思議です。

と云いますと、番平わ直ぐ引取つて、

(番)うん。そりやア道理だ。君の不思議がるのも無理わ無い。それぢやア一つ話そうか。――僕ア西の方が受持だから、此間から此方え來てたが、何しろ毎日方々歩行いて、足わ草臥れる、腹わ減る、仕方が無しに先刻のこと、この次郎も草臥れた樣だから、森の中で寢て居ると、唐突にガサ〳〵ツて云う音がするから、急いで眼を明いて見ると、何處から逃げて來やがつたか、一匹の泥棒猫が、大きな鯛を咬えながら、此方え飛んで來るぢや無いか。

(速)猫が鯛を咬えて行つた？

と吾知らず乘り出した。

(番)此方わ丁度腹の減つてる處だろう。而も敵手は泥棒猫、只で盗んで來たもんだから、只で取つてもよかろうと、一寸君の眞似をして……

(速)おい〳〵、そんな事ア云わなくつてもいいぜ！

(番)アヽ、失敬々々！　怒つちや困るよ。

(速)まさか怒りやアしないから、早く後を話したまい！

(番)それから君、僕わ直ぐに飛び起きて、突然次郎をけしかけると、次郎わワッと云いながら、泥棒猫の頸ッ玉え、脈ッて云う程かぶり付き、一振り振つて振り倒すと、可哀そうにその猫奴、ニャンとも云わずに死んでしまつた。其處で僕わ出かけて行つて、其鯛を拾つて見ると、これわ何處かの御膳に付いてたと見えて、ちやんと鹽燒にしてあるから、こいつわ好い物が手に入つたと、半分わ褒美に次郎に遣り、殘餘の半分わ僕一人で、ムシャ〳〵喰つたが、その甘味い事!

(速)はゝア、甘い事をやつたネ。

(番)すると俄然驚いた。唐突後から怒鳴りつけて、「こん泥棒奴!」と云う聲がした。誰だと思つて振り返ると、恐い顔をした阿爺さんさ。阿爺さんわ眼を剝き出して、「やいこん泥棒奴! 何だつて人の家の肴を盜みやがつた。」と叱り付けられたから、「なに、ほんとの泥棒わあの猫です。僕わ只拾つた許りです。」と、云つたけれども追付かない。「なアに、そんな事云つたつて承知しねエ。」と、とう〳〵其人に引張られて、其家え連れてかれちやつたのさ。處が、行つて見ると其の家わ、この犬町君の家なんで、阿爺さんわ犬町さん許の番頭さんさ。で、僕わ臺所口で、暫く御目玉を喰つてると、中から丁度犬町さんが出て來て、段々譯を聞いて見ると、何も僕が惡いんぢや無し、それに第一僕の側にわ、この次郎が居るもんだから、却つて大層喜んで、君も好い物を持つてるねエ、その狗張子を持つてるなら、今日から僕の朋友に成りたまえつて、それでやつと堪忍してもらつて、直ぐにその犬町君と、この犬手さん許え一所に來たのさ。

と、殘らず話して聞かせますと、速吉わ横手を拍つて、

(速)それわほんとに不思議だつたネ。而もその鯛を盜んだ猫わ、丁度三太が追駈けて行つた奴だよ。

と、それから又速吉わ、先刻三太に別れてからの事を、こゝで委しく話しました。

すると又診一に安藏も、頻りに不思議がりまして、

(安)どうもほんとに面白い話だ。何しろ今まででわ、こう云う不思議な狗張子を持つてるのわ、僕達二人許りだと思つたのに、まだ六人もあるんだそうだが、その中の二人だと云う、犬門君や犬瀨君に、こうして一時に會う事の出來たのも、考えて見りやア、全く狗張子の紹介と云うもんだ。ねエ君、犬町君!

(安)そうとも、今日わ何と云う吉日だか、こうして四人落ち合うとわ、こんなめで度い事わ無い。

と、四人共大喜悅、頓て犬手の家の座敷え通つて、又いろ〳〵談話をし、こうして四人が揃つた以上わ、一日も早く目黑え行つて、他の四人に會おうと云うので、倘又打合せをして居ます中に、用意の御膳も出ましたから、茲で四人の犬士わ、仲好く御膳を喰べ、又四匹の狗張子にも、それ〳〵お肴をやりました。

## 第十七回　合圖狼煙

さて四人の新犬士わ、やがて御膳も濟ましましたから、氣の速い犬手診一、「善わ急げと云う事がある、直ぐその日黑え行つて他の犬士に會おう。」と云い出しましたが、「何しろもう晩だから、立つのわ明日の朝早くがいゝ。」と、落付いた安藏の云いますので、とう〳〵それに話が極まつて、其晩わ一同はやく寐る事にしました。

で、四人わ枕を列べて、はやく寐ようと思いましたが、何うしても寐られません、まるで

運動會の前の晩か、大晦日の夜の様に、明日が樂みで〳〵、眼わ段々冴えるばかり。

一同寐られないものですから、つい又談話が初まりました。中にも犬手診一わ、隣に寐て居る速吉に向いまして、

（診）ねエ犬瀬君、その犬宮さんの坊ちやんと云うのわ、屹度強い兒だろうねエ。

（速）そりやア強い事も強いが、第一、智慧があるから敵いませんや。何しろ私達と異つて、學問があるんですもの。

と、云いますと、後を番平が引取つて、

（番）そりやア智慧も智慧だが、私やアそれよりわあの方の、氣の強いのと、心の廣いのにわ、ほんとに感心してるんです。強い者にやア向つて行き、弱い者にわ慈悲をかけると云う、ほんとに豪い坊ちやんですぜ。

と、云うのを聞いて、今度わ安藏が口を出し、

（安）何しろ育成が育成だから、屹度大様な坊ちやんだろう。だが、自分わそう云う豪い家の兒だから、如何しても少しわ威張るだろうねエ。

と、皆まで云わせず、速吉わ手を振つて、

（速）どうして〳〵、そんな事があるもんですか。その證據にやア私見たいな、盜賊上りの貧乏人でも、又あの犬柄の銃ちやんの様な、獵人の兒にだつて、ちつとも隔阻を置かないで、朋友同様にして下さるもの。ほんとにあんな坊ちやんわ無い。

それと聞いて安藏も診一も、頻りに感心して居りましたが、安藏わ又、

（安）それから犬柄さんてエなア、ほんとの獵人の兒なんですか。

（番）そうです。ほんとの獵人の兒ですけど、中々しつかりした處があつて、まるで豪い人の兒の様です。それに我慢する事が強くつて、鐵砲わほんとに名人です。

（安）それわそうでしようねエ。其處で其の兩人も、矢張り新犬士を探しに出たんですね。

（番）そうです。ですから面白いんです。何様な新犬士が目付かつたか、それに會うのが樂しみです。

（速）屹度坊ちやんも犬柄さんも、矢張り犬町さんや犬手さんの様な、立派な人を見付けたに違いない。で、八人がちやんと揃つたら、ほんとに嬉しいでしようねエ。

暫く默つて居た診一わ、此時又頭を擡げて、

（診）で、八人が揃つたら、全體何をしようと云うのだ？

（番）何でも雪の精の云う通り、大日本の利益に成る、立派な功勳をしなけりやア成らないんです。

（診）大日本の利益に成る、立派な功勳とわ何だろう？

（番）それわまだ解りませんが、早く八犬士揃つた處で、よく相談しなけりやなりませんネ。

（診）それよりやア、八犬士が揃つたら、其處でもう一度山え行つて、雪の精に聞いたらいいだろう。

（番）そう、そうすれば解る事だ。

（診）なに、そんな事しないでも、日本の利益になる事つて云やア、一同早く軍人に成つて、國家の干城に成るのがいゝ。

（安）いゝや、軍人許り出來たつて仕方が無い。中にやア又商人に成つて、國を富ます事も考えなけりやア。

（番）そうですとも。軍人や商人許りでもいけないから、百姓に成つて御米を作つたり、又學者に成つて人間を怜悧にもしなければ、ほんとの國の利益とわ云えません。

（速）それわ犬門さんの云う通りだが、中にやア職人も肝腎だぜ。

(番)そうさ。君なんざア器用だから、その職人が丁度好い。ナニ、職人と云うとけちな樣だが、工學士だとか技師だとか云やア、職人でも立派なもんだ。

などとこんな事を話しあつて、思い／＼の事を饒舌つて居る中、とう／＼夜が明けてしまいました。

其處で四人わ、急いで飛び起きて、顔を洗つて、御膳を喰べて、各自に支度をして居りますと、又四匹の狗張子の方でも、今日こそいよいよ八匹の仲間が、みんな揃う事が出來ると思う故か、尾を振り立てたり、チン／＼したりして、何れも喜び勇んで居ります。

其中に支度も出來ましたから、さアいよ／＼出かけようと云うので、安藏わ大七、診一わ八郎、番平わ次郎、速吉わ三太と、それ／＼自分の狗張子を引張つて、目黒の山えと急ぎました。

又四匹の狗張子わ時々大きく成つて、馬の代りに主人を乗せたり、又邪魔に成る時わ、小さく成つて袂の中え這入つたりして、やがて目黒の山近く來ました。

すると遙か彼方の森の中から、黄色い烟がずつと昇つたと思うと、やがてズドーンと云う音が聞えますから、診一わ驚いて、

(診)何だ／＼?今のわ何だ?

と云いますと、先に行く速吉わ振り返つて、

(速)あれわ合圖の狼煙です。もう誰か歸つて居るのを、知らせる爲めの合圖です。

(診)そうか。それぢやアもつと急げ／＼!

## 第十八回　八犬出陣

急ぎに急いで、よう／＼山え登つて來た四人、見ると彼方の岩の上から、初麿わ銃太郎と一所に、此方を見おろして、頻りに手を動かしながら、おいで／＼をして居りますから、先に立つた番平わ、早くも聲をかけまして、

(番)坊ちやん、お早う御座いましたネ。オヽ、犬柄さんももう來てたのか。

と云うと銃太郎も、

(銃)丁度今着いた處で、坊ちやんが一番駈でした。

と、云う中に四人も、其處まで登りついて見ますと、後に方に見なれない兒が、一人わ船頭の樣な風をし、又一人わ眞赤に肥つて、まるで金太郎の樣なのが、兩人で立つて居りますから、速吉わ銃太郎に、

(速)おヽ、新犬士が見付かりましたネ。彼の人達わ何と云う人です?

と聞きますと、

(銃)うん。あの右の方が坊ちやんの連れていらしつた、三保の浦の犬島能五郎君、それから此方の肥つてるのが、筑波山の香丸と云つて、僕が犬瀧で見付けて來たんだ。又この狗張子わ、犬島君の方が五郎で、犬瀧さんのが六と云うんだ。

と、云いますから、速吉わ側え行つて、一々に挨拶し、それから又、自分達の連れて來た、犬町、犬手の二犬士を紹介せまして、茲でいよいよ八犬士が、殘らず揃つてしまいました。

其處で又番平わ、初麿に向いまして、

(番)斯う八人が揃つた上わ、あの姥さんの云つた通り、日本の爲めの大功勳を、一同で仕なけりやならないんですが、それにわ一體何樣な事すりやア可いんだか、どうも私達にや解りませんから、これからもう一度姥さんに會つて、この理由を聞こうぢやありませんか。

と云いますと、初麿わニツコリ笑つて、

(初)ナニ、聞かなくつても解つてるよ。

(番)えツ、聞かなくつても解つてますつて?

それぢやア坊ちやん御存じですか。

他の者も一所に成つて、思わず膝を揩り寄せました。

すると初麿わ、徐かに舵五郎を見返つて、

(初)君！　此間のを出したまえ！

と云いますと、舵五郎わ點頭いて、自分の懐中から、立派な箱を出して、恭々しく初麿に渡しますと、初麿わその中から、見事な卷物を取り出し、

(初)さア、諸君これを見給え！

と、云つてそれを開けました。

見ると、其の卷物にわ、今まで學校の地理の稽古でも、まだ見た事の無い島の圖が、立派に書いてありますから、殘りの六人わ、丁度一ダアスの目を見張つて、頻りに見詰めて居りましたが、此時初めて犬手診一、

(診)これわ不思議だ、この島わまるで狗張子の樣だぜ。

と云いますと、音丸も一所に成つて、

(音)ほんとに乃公の六見たいだ。而も此處に鈴まで付いてらア。全體これわ何てエ處です？

と云いますから、初麿わ座を進めて、

(初)これわ日本から南の方え、一萬二千三百里行くと在るんだ。で、その形が狗張子に似てるから、狗兒島と云うんだが、其處には金も出るし銀も出るし、其他動物でも植物でも、何でも無いものわ無いと云う、世界一の好い處なんだが、只昔からこの島にわ、狂犬が澤山棲んでるので、誰も其處え行く事が出來ないんだ。其處で今度わ僕達が、八人顏の揃つた處で、一番其處え押渡つて、その狂犬を退治して、首尾好く日本の領分にすれば、それこそほんとに大功勳だ。如何だい、こんな面白い事わあるまい。

と、由來を話して聞かせますと、六人わ手を拍つて喜んで、

(番)成る程それわ大功勳です。

(速)それぢやア直ぐに押掛けましよう。

(診)高の知れた狂犬なんぞ、

(音)この音丸が撚り潰してやるワ。

(銃)ナニこの銃太郎が鐵砲で、片端から撃ち殺してやります。

と、各自に勇み喜んで居りますと、安藏わ又不思議がつて、

(安)しかしこう云う好い地圖が、如何して坊ちやんの御手に入りました？

と聞きますから、今度わ舵五郎が引請けて、

(舵)それわこう云う譯なのです。一體全體この地圖わ、三保の浦の龍神樣の、寶物に成つて居ましたのを、犬宮さんの狗張子の、太郎が獨りで忍び込んで、巧く盜んで來たのです。

と、これから、三保の浦の祭禮の時に、初麿が漁師と喧嘩した事から、濱邊で自分が初麿に、初めて會つた話をば、委しく話して聞かせますと、安藏わ頻りに感心して、

(安)それわ實に不思議でしたねエ。して見るとこの地圖も、全くその龍神樣から、私達に授かつたも同然です。それでわいよ〳〵八人が、其狗兒島え押し渡つて、その國を乘取らなけりやア成りません。ですが、その間が一萬里の餘もあつちやア、中々急にわ行かれませんが、それわ如何したもんでしよう？

と云い出すと、番平わ引取つて、

(番)それわこの犬島君に頼んで、大きな船を拵えて貰いましよう。それに犬瀨さんも器用だから、一所に手傳つて拵えりやア、譯も無く出來るでしよう。

と、皆まで云わない中に、音丸わ笑い出し、

(音)ハヽヽ。そりやア犬門さんにも似合わない、馬鹿な事を云つたもんだ。

と云いますから、氣速な診一わ口を尖らかして、
（診）ナニ、馬鹿な事だつて？　船を拵えるのが何故馬鹿だ？
と、少し腹を立てました。
けれども音丸わ落付いて、
（音）そうさ。一同が各自に好い船を持つてるのに、それを使わないでからに、他に船を拵えようなんて、馬鹿な事を云うからおかしい。
（番）ナニ、各自に船を持つて居ると？　そりやア何様な船なんです？
（音）一同が持つてる狗張子さ。あんな重寶な者わ無い。乃公なんざア山に居て、舟も車も知らねエが、その代りにやアこの狗張子で、川も渡りやア谷も飛ぶんだ。こんな重寶な奴わありやしねエ。だから今度の狗兒島だつて、この狗張子に乘つてきア、一萬里や二萬里の海、一またぎに行つてしもうワ。それを何故使われエんだ。
と云いますと、初磨わ膝を拍つて、
（初）そうだ〳〵。此間も三保の浦で、海を泳いだ事があつた。神通自在のこの狗張子を、忘れて居たのわ馬鹿だつた、それぢやアそれに極めようが、一體何處から出かけよう、矢張り犬の字の付く様な、好い處が無いかしら？
と、今度わ發程所を考えますと、莊五郎わ思い出した様に、
（能）それにわ好い處があります。あの銚子の犬吠が崎！　彼處にわ燈臺もあつて、丁度岬に成つてますから、彼處から出るとよう御座んす。
（初）うん、それがいゝ〳〵。
と、茲にいよ〳〵極まりまして、八人わ直ぐ其場から、各自に狗張子に乘りまして、下總の國わ銚子口、犬吠が崎えと急ぎました。

## 大團圓　大狗子國

下總の國わ銚子口の、犬吠が崎の燈臺の下から、海え乘り出した八犬士の面々、各自に狗張子に乘りまして、眞先えわ日の丸の國旗に、犬に緣のある金の鈴の付いたのを押し立てて、山の様に打つて來る浪の上を、サッ〳〵と水煙を立てて、進んで行くその勇ましさ。何の事わ無い、あの支那征伐の大海戰の時に、わが帝國の聯合艦隊が、黄海を押し渡つて行く様です。

＊　＊　＊　＊　＊

元より神通自在の狗張子、一萬里許りと云うものわ、瞬く中に泳いで行きましたが、其中に遙か南の方に、雲か山かと思われる、黒いものが見えて來ました。
眞先に進んだ速吉わ、それを見ると手を揚げて、
（速）來た〳〵、狗兒島え來たぞ。
と、大きな聲で云いますから、他の七人も、みんな小手をかざしまして、彼方をキッと見渡しますと、成る程島らしいものが見えます。
其中に段々近く成つて來ましたが、何思つたか八匹の狗張子が、八匹共聲を揃えて、ワウォーワウォーと、恐ろしく吠え出しました。すると又島の方でも、同じ様にワウォー〳〵……
一體軍艦でも汽車でも、港や停車場に近く成りますと、もう今に着くと云う合圖に、ボーとか、ピュー〳〵とか、汽笛を吹いて知らせるものです。
ですからこの狗張子も、狗兒島に來た合圖に、一時に吠え出して、それが又島に響いて、谺の様に聞えるのかと思いましたが、それにしてわ吠え方が、例に無く劇しう御座いますから、どうもこれにわ理由があるだろうと、又目を見張つて島の方を見ますと、案の定その島の、丁度此方え出て居る岩の上に、眞黒に成つて動いて居るもの、――それわみんな狂犬です！

(初)やい、居るぞ〳〵。狂犬が居るぞ。
(番)ナニ、狂犬ですつて……オヽ〳〵、もう出て來ましたよ。
(初)さアみんな油斷しちやいけないぜ。
と、初暦が號令をかけますと、
(一同)よし、大丈夫! 今に殘らず退治てやります。
と、銃太郎が鐵砲を取り直せば、音丸わ鉄梃棒を振りあげ、其の他の犬士達も、思い〳〵に武器に手を掛けて、今にも島に着いたらば、一番に躍り込んで行つて、あの狂犬共を、片端から退治てくれようと、勢込んで進んで行きました。
間も無く狗張子わ、島の側まで泳ぎ着きましたが、見ると其邊わ一面に、屏風を立てた樣な岩崖に成つて、登ろうにも足場がありません。而もその岩崖の上から、何千匹か知れない狂犬が、銀の樣な眼を剝いて、火の樣な口を開いて、オー〳〵ッと吠えて居ります。
(初)全體何處から上るんだ? 何處か無いか、見ろ〳〵!
と、八犬士わ八方に目を配つて、頻りに足場を探しましたが、どうも好い所がありません。
此時又音丸わ、大きな聲を張りあげて、
(音)駄目だ〳〵、探したつて駄目だ。それよりやア一足飛びに、飛び上れ!
と、云う中にもう六の尻を、平手でビシリと打ちますと、其彈みに狗張子の六わ、音丸を背に負つた儘、浪を一蹴り蹴つたと思うと、屏風の樣な岩崖の下から、ヒラリと飛び上つてしまいました。
これを見ると、他の犬士も、それ後れるな、續け〳〵! と、各自に狗張子に鞭をくれて、ヒラリ〳〵ヒラリ〳〵と、譯も無くその岩崖の上え、飛び上つて來ましたから、上に居た狂犬共わ、「おのれッ。」とも何とも云わず、只ワウォーワウォーと、四方から飛びかゝり、八方から喰い掛つて、見る〳〵中に八犬士わ、數千匹の狂犬の中に、おッ取り巻かれてしまいました。
すると不思議です。今までわ八方に分れて居た、八匹の狗張子は、太郎、次郎、三太、四郎、五郎も六も、大七も八郎も、八匹とも一所に堅まつて、ワン〳〵ワン〳〵云いながら、クル〳〵クル〳〵廻つて居りましたが、其中に三聲高くワン〳〵〳〵と吠えるが否、八匹の狗張子わ、其儘一匹の大狗張子に成つて、雲の樣に群がつて來る、狂犬の中え飛び込んで、當るを幸い片端から、牙に掛けてわ咬み倒し、足に掛けてわ蹈み躙り、縱横無盡に働きましたから、流石の狂犬も見る〳〵中に、一匹も殘らず殺されてしまつて、瞬く中に眼の前にわ、狂犬の山を築いてしまいました。
これを見て居た八犬士わ、思はず手を拍つて、大狗張子の動作に、感心して居りましたが、やがて狂犬わ、殘らず死んでしまいましたから、其側えかけて行つて、
(初)オイ太郎!
(番)コレ次郎!
(速)ヤイ三太!
(銃)四郎々々!
(能)五郎や〳〵!
(音)六ヤイ〳〵!
(安)大七!
(診)八郎!
と、各自に自分の狗張子の名を云つて、八方から呼びかけましたが、大狗張子は何方えも寄つて來ず、只さも嬉しそうに尾を振りながら、初暦から順々に、八犬士の前で御辭儀をした揚句、キッと天を見上げまして、ウー……ワンと一聲吠えますと、それを合圖に天からわ、急に大雪が降つて來ましたが、大狗張子わこの雪の中を、悠々として天え昇つてしまいました。

この眼前の不思議にわ、流石の八犬士も、只呆れに呆れて、ぼんやり天を見上げて居りましたが、其中に狗張子の姿も、まるで見えなく成つて、雪も綺麗に霽つてしまいましたから、初めて夢の覺めた樣な心地で、互いに顏を見合せながら、

（診）全體これわ何の事だ？

と、まづ診一から云い出しますと、初磨は膝を拍つて、

（初）いや、それで解つた。此間も雪の精に聞いたら、一體僕達八犬士わ、狗兒島を乘取つて、大日本帝國の爲めに、大功勳を立てさえすれば、それで役目が濟んだ樣なものだ。それだからそれまでわ、あの狗張子が味方に成つて、僕等の事業を助けたんだが、もう此通り狂犬も退治て、狗兒島を乘取つてしまえば、狗張子の用わ無いから、それでまた姥さんの、雪の精が御迎いに來たんだろう。

と、云いますと、

（番）なるほど、これわそれに相違ありません。

と、番平も感心して居りましたが、安藏わ又膝を進ませて、

（安）今も皆さんの云う通り、この狗兒島を乘取つて、大功勳を立てさえすりやア、それで狗張子の御役目わ、まア濟んだと云うもんです。けれども私達の御役目わ、只乘取つたと云う許りで、それで濟んだとわ云えません。どうしてまだこれからわ、この島をよく治めて、そしてわが大日本の、御役に立つ樣にしなければ、ほんとの功勳とわ云えないでしよう。

と云いますと、初磨も點頭いて、

（初）うん。そうとも〳〵、ほんとに犬町君の云う通りだ。只取つた許りぢや仕樣がない。これからよくこの島を治めて、大日本の屬國にして、國の利益にしなけりやならない。それにわこれから八人が、各自に手配をして、この狗兒島の政治を執ろう。

（一同）そうです。でわ早く手配をしましよう。

（安）だが、その前に、まづ一通りこの島を、よく見て置こうぢやありませんか。

（初）そうだ。何しろ僕達わ今來た許りで、まだ樣子が解らないから、幸い此間の地圖もある、でわ之を持つて見物に出かけよう。

（一同）それがいゝ〳〵。

と、これから八犬士わ打揃つて、島中を見物に出かけました。

處が、豫て能五郎の談話に聞いた通り、山にわ立派な木が、森々と茂つて居り、野にわ見事な米が、一面に出來て居り、其他彼方にわ、桃だの林檎だの梨だの柿だの、好きな果物が鈴形に實つて居るかと思えば、此方にわ、馬でも牛でも鷄でも鳩でも、どんな獸類でも居ないものわ無く、又少し土地を掘ると、直ぐに金や銀や銅や鐵が、沸く樣に出て來ますし、又川を覗いて見ると、鯉でも鮒でも鮎でも鮭でも、手で掬える樣に居ると云う、それわ〳〵結構な島ですから、八犬士わ大喜悅、こう云う好い島が手に這入れば、日本わ直ぐ大富豪に成つて、英吉利露西亞にも負けない樣な、強い國に成つてしまうと、勇み立つて居りました。

すると彼方の山奧の方で、何と無くガヤ〳〵と、人の饒舌る樣な聲が聞えました。

はてな、この島にわ狂犬が居るので、人間わ住む事が出來ない筈だが、さてわまだ奧の方に、山賊でも棲んで居るのか、それとも亦妖怪かと、一同わ少しも油斷せず、尙奧の方え分け登つて見ますと、やがて彼方から人間が五六十人、ゾロ〳〵ゾロ〳〵やつて來ました。

見ると、山賊か妖怪と思いの外、これわまた畫本で見た、鬼界が島の俊寛の樣な、一同骨と

皮許りで、餓鬼同然の島人が、杖にすがつたり手を曳かれたりして、やつとの事で側え來ましたが、八犬士の貌を見ると、平地え兩手を突いて、

（島人一同）はゝア……

と、平伏してしまいました。

（初）全體貴樣達わ何者だ？

と、こう云つて初麿が聞きますと、先に出て居た島人わ、少し頭を擡げまして、

（島）へい〳〵、私共わこの狗兒島の人民で御座いますが、御存じの通り此島にわ、狂犬が澤山居りまして、私共の仲間の者を喰い盡そうと致しますから、それでも私共わ、山の奥に小さく成つて、此通り隱れて居たので御座います。處が丁度昨晩の事、私共の居ります處え、一匹の大犬が參りましたから、アレ、又狂犬が來たと、一同逃げ出そうと致しますと、其の犬わ尾を振つて、イヤお前さん達わ決して逃げるにわ及ばない。何を隱そう私わ、この狗兒島の島の神だが、今度大日本から、八犬士と云う豪い御方を、八人御連れ申して來て、今迄の狂犬を、殘らず退治てしまつたから、もう決して案じる事わない。それよりか一日も早く、八犬士の方に御目に掛つて、この狗兒島を昔時の樣な、好い島にして貰うがよいと、云うかと思うと、其儘消えて御しまいなさいました。其處で今日わ、その犬神樣の御告によつて、この通り一同が、打ち揃つて出ましたので御座います。何卒皆樣、私共を不憫と思召しますならば、この儘此島に御留まり下さいまして、島を御治め下さいまし。

と、こう云つて頼みましたので、初麿も喜びまして、此處でいよ〳〵八人が、それ〳〵手配をしまして、狗兒島を治める事にしました。

で、まづ此島を大狗子國と名付け、又東の方の、丁度眼に當る處に、狗眼府と云う都府を立てまして、其處にちやんと役所を立て、それから八人が相談の上、總理大臣にわ威光のある初麿が成り、犬町安藏わ、小年の割に分別があると云うので、是が内務大臣、犬門番平わ、幼少い時分から犬宮家に奉公して、算盤が達者な處から、是が大藏大臣、犬瀬速吉わ何かにつけて器用な質だから、是が遞信大臣、犬島舵五郎わ、船頭の兒ですから、直ぐに海軍大臣、又陸軍大臣には、力の強い犬瀧音丸、獵師の兒の犬柄銃太郎わ、農商務大臣に成り、それから又犬手診一わ、醫師の兒で學問があるから、文部大臣が丁度好いと、茲で役割が極まりまして、其日から島の政治を執りましたが、元より何れも怜悧な兒で、殊にわ此島の神だと云う、神通自在の狗張子が、今わ目にこそ見えませんが、蔭からよく守つて居りますので、島わます〳〵穩かに、國わいよ〳〵榮えました。

さて一年と經ち五年と經ち、やがて滿十年に成りました時、この八犬士わ、彼の大狗張子の動作を、永く島人の記念に殘す樣にと、狗眼府の中央に、大きな狗張子の記念碑を建て、その御祭を營みました處、其時わもう日本本國とも、交通が出來て居りましたので、眞個の總理大臣を初め、天皇陛下までが御臨幸に成つて、世界全國を驚かす程な、大した賑いで御座いましたとさ。めでたし〳〵。

# お伽太閤記

## 第一回

### 猿の迷兒と光物

今からおよそ八百年許り前の事だ。方外道わ晉木の國、根無部葉梨村と云う所に、話助と云う百姓が居た。女房のお伽と只二人で、細くも煙を立てて居たが、根が大の正直者、家こそ至つて貧乏なれ、夢にも曲つたことわせず、正直一圖に稼いで居るので、家内わ至つて穩かだが、何う云うものか子種が無く、話助わ取年の七々四十九、お伽も六々三十六に成るのに、まだ可愛いのが一人も出來ない。

夫婦わこれを苦に病んで、何うかして子供が欲しい、後嗣が出來したいと、朝夕神を念じて居たが、神々も意地が惡いのか、それともストヲイヤがかぶれたのか、とんと聞いて下さらぬと見えて、未だにその御利益を見せない。けれども[illegible]〳〵[illegible]を授まず、これも所謂因縁づくと、[illegible]させて諦められぬ。わ、二人の間に鎹の無い、心細さや便り無さ！兎角淋しい月日を送つて居た。

その中にまた一廻り、世わ來復の春となつた。

正月と云えば仕事をすてて、雜煮を祝うやら、屠蘇を酌むやら、世間わ樂しく賑う中に、話助わ貧乏百姓の悲しさ、元日だけこそ骨を休めたれ、二日からわもう鍬を肩げて、野良に働く甲斐々々しさ。お伽わまた留守仕事に、麥をつくやら、絲を繰るやら。するとその三日の事だ。話助わいつもの仕事をしまつて、夕方に只一人、村はづれの畷道を、我家えと急いで來ると、やがて、只ある並木の松の、梢の上に聲あつて、自分の名を呼ぶ者がある。

『話助さん、話助さん！』

「何だイ？」

と云いながら、立ち止まつて振りあおぐと、思いがけない猿が一匹、而も頭にわ金の烏帽子、身にわ魔子の袖無しを着けて、スル〳〵と幹を辷りおりたが、間も無く話助の前に立つた。

「何だ　お前わ猿ぢやないか。今呼んだのわお前なか？」

と不思議がつて聞けば、猿わ頭をうなづかせて、

「如何にも呼んだのわ私ですよ。」

「シテ何の用があるのだ？」

「用と云うのわ他でもありません。實わ私わ猿曳の太夫です。前の村で大に威されて、とうとう飼主とはぐれてしまい、やつと此所まで逃げて來たんですが、何しろ朝から食物にあり付かないんで、腹が減つて、腹が減つて、肝腎の舞わさておき、ろくにデングリ返しも打てない位です。付ては話助さん！貴君わ大の正直者で、また情深いと聞いて居ましたが、なんと私を此所からおぶつて、お家え連れて行つたらば、何でもいゝから甘しい物を、澤山食べさせて下さいな！」

『何の事かと思つたら、そんならほんのお安い御用だ。よし〳〵、それぢやア此所え來な！』

と、少しかゞんで背を向けると、元より猿わ心得て居るから、ヒラリとその肩に取りついた。

『よしか、しつかりつかまつて居なよ！』

「大丈夫ですとも……私アおぶさるのわ馴れてますから。」

「なるほどお前わ太夫さんだつたな。所でお前

わ何と云う名だネ？」
『太夫の時わ日の出太夫と云うんですが、ふだんわ日出吉、日出吉ッて呼ばれてます。」
『日出吉わ好い名だなア‥‥所でお前の飼主わ？』
『飼主の名わ知りません。いつも旦那々々ッて云つてますから。』
『イヤ、その旦那が今頃わ、さぞ探して居るだろう。』
『それわそうかも知れませんが、何しろあんまり好い旦那ぢゃ無いんで、私にばつかり働かして、自分わお酒ばかし飲んでるんですから、‥‥却つて見付からない方がいゝんです。』
『でも今まで世話に成つたんだから、そんな不實な事を云うもんぢゃない。』
『なアにお前さん、私のおかげでお酒も飲めれば、御飯も食べられたんですから、却つて私が世話をしてやつた様なもんです。』
『なるほどそう云ゃアその通りだナ。』
こんな話をして居る中に、話助わ日の出太夫をおぶつて、自分の家え歸つて來た。
家でわお伽が、先刻から御飯の支度をして、話助の歸りを待つて居たが、見るとまるで猿曳の様に、背に太夫を負つて居るから、その譯を聞いて見ると、今しがた途中の畷で、迷兒に成つて居る所を、可哀そうだから連れて來たと云う。お伽も元より情深い質で、
『それわほんとに善い事をしましたネ。どれどれ、可愛らしいお猿さんだこと！』
と、云いながら抱きおろせば、猿わお伽の前え來て、
『小母さん、何分よろしく御願申します。』
と、行儀よく辭儀をする。
『オヽ〳〵、よく出來ました、出來ました。ほんとにこれわ可愛い猿だ。』
『だから早くおまんまをやつてくれ！』
『やりますとも、やりますとも。こんなお客様があると知つたら、ころ柿でも取つておけばよかつた。』
と、これから二人わあつくこの猿をもてなして、其晩わ寝かしたが、夜が明けるともう猿わ、十年も前から飼われた様に、よく話助夫婦に懐けば、夫婦もまたこの猿を、まるで自分達の子の様に思つて、可愛がつて育てはじめた。それに眞の飼主わ、何うしたものかついに取り戻しに來ない。
その中に二月ほど經つた。ある日またお伽わ、山一つ越した隣村え、用事があつて出かけたが、ついそれが手間取つて、歸途わトップリ日が暮れてしまつた。
女一人で夜道を行くのわ、何しろ不用心だからと云うので、出先から一人の男がついて、暗い山路を送つて來たのわ、夜も今の九時頃であつたろう。
木わ森々と生い茂つて、晝でさえ暗い山路。而も夜わ眞の闇で、その物凄さわ一通りで無い。送りの男わ提灯を持つて、スタ〳〵先えやつて來たが、やがて峠道を一まわりまわつて、だらだら坂に掛ろうとすると、何思つたかキャッと云つて、提灯を其所え投り出すがはやいか、一目散に駈け出した。
不意の事だから驚いて、お伽わ其所に立止つたが、見ると彼方の森の中から、ピカリと怪しい光がさして居る。
『オヽ光物！』
と、思わず身の毛を立てたが、然し氣丈な女だから、今更逃げも隠れもしない。
瞳を定めてヂッと見ると、その光物わ動き出す。而もだん〳〵近くなる。
お伽も氣味惡く思わないでわ無いが、心に神を念じながら、此方からも少し進みよつて見ると、その光物から聲がして、

『お伽！ 抱いてくれ！ お伽！ 抱いてくれ！』
と云う。

光物が抱いてくれ？ 抱いたら總身焦げずにわ居まい、とわ思つたが此時わ、不思議にまた勇氣が出て、我にもあらず兩手をひろげると、その時はやく光物わ、矢を射る樣に飛び寄つて、ヒシとお伽の胸に取りついた。

が、その身わ焦げもせねば、また熱いとも感じない。

まぶしさに一時閉ぢた目を、再びあけてよく見ると、こわ如何に、自分の懐にわ、世にも可愛らしい男の子が、ぢつと抱かれて居るでわ無いか。

## 第二回

### 鐵丸誕生と日出吉の正體

むかし支那のある皇后わ、夏の暑さに堪えかねて、常に鐵の柱を抱えて居たら、遂に鐵の丸を産んだと云う。かの干將、莫耶と云う、名高い劍わこの鐵丸から出來たので、今だに殘つて居る話だが、それと趣わ違つて、葉栗村の土百姓、話助の女房お伽わ、ある夜不思議な光物に、森の中で抱き付かれたと思つたら、何時の間にかその光物が、玉の樣な男の子に成つて、自分の乳房に取付いて居る。

常の百姓の女なら、氣味惡さにその赤兒を、路傍に投げすてて逃げもしたろう。然し此方わ男まさりのお伽、殊にわ常から子供が一人、欲しい〳〵と思つて居た所だから、何でこれを仇にしよう！

『オヽ可愛い、この子わまア、何時何所から湧いたんだろう？……イヤ〳〵、これわ湧いたんでわ無い、平生信心する山王樣が、私達のお願を御聞きに成つて、お授け下すつたに相違無い。ヤレ有難い、辱ない！』

と、片手にわ子を抱きながら、片手で拜んでお禮を述べ、此上わ早く歸つて、夫にも喜ばせようと、そのまゝその子を懐中に入れて、お伽わ家えと急いで歸つた。

するともう門口にわ、倅の日出吉猿が出て居て、

『おかみさん、お歸んなさい！』

と、云いながら兩手をさげて、直ぐまた奥え入ると、今度わ話助の袂を引いて、それにも迎いに出ろと促す。

話助わお伽の歸りの遲いのを、先刻から案じて居た所だから、急いで門口まで出むかえながら、

『何を今頃までして居たんだ？』

『オヽ話助さん！ 不思議な事があつたんですよ、然しまア喜んでおくんなさい！』

と、云いながら懐中をあけて、件の赤兒を出そうとすると、こわ如何に？ たしかに先刻乳を飲ませて、たしかに今まで抱いて居た筈の子が、何時の間にか姿も見えない。

『オヤ變だ、何うしたろう？……途中で逃げたか、落したか？』

と、お伽わ眼を圓くして騒ぐが、話助にわ一向合點が行かず、

『何をお前まご〳〵してるんだ？』

『いゝえ、先刻森の中で、可愛い子を一人授かつたんです。しかもそれが光物で……』

『ナニ、光物？……光物なら消えたなア……當然だ……そんな他愛も無い事を云わないで、はやく此方え入つたがいゝぢや無いか。』

『でも、たしかに此所まで抱いて來たのに……』

と、まだ未練で探して居る。

『まだそんな事云つてるのか？ そりやア大方狐にでも、つままれたに相違無いぜ。……サアサア早く寢ろ〳〵！』

と、無理に手を取つて内に入れるので、仕方が

無しに入りわ入つたが、お伽わ如何にしても腑に落ちず、頻りに首を傾けながら、其夜わそのまゝ寝てしまつた。

所が丁度その夜から、身が重くなり初めて、次第々々に腹がふくれ、其から丁度十月目の、而も次の年の正月元日、初日出が東の山から、漸く登りかけた時、俄かに蟲がかぶつて來て、やがて産み落したのわ、世にも可愛い男の子であつた。

而もその男の子わ、いつぞや森の中で光物に會つて、それから自分の懐中に抱いた、あの赤兒に瓜二つと云うより、あれが又候出て來た様なので、お伽わ今更云うまでも無く、話助の喜悦一方ならず。

『ヤレ有難い、嬉しい！』

と、家の中を躍りまわる始末。

するとまた近所の者わ、その赤兒の産聲の、如何にも高々と響いたのに、驚いて家を出て見ると、この話助の家の棟から、金色の光がキラキラと射して、さながら日でも昇る様な景色に、皆只事でわあるまいと、光を爭つて見舞に來たが、中にわ玉の様な男の子が、今産まれた許りと聞いて、何れも顔を見合せ、

『この元日に男の子とわ、何と云うめで度い事ぢや。』

『しかもあの産聲の高さ、また家の棟の光物、こんな吉兆わ又とあるまい。』

と、口々に云い囃す。

さて産湯も無事に濟ますと、話助わすぐに衣服を着かえて、鎮守の日吉大明神え、お禮詣に出かけたが、その途々も考えれば、お伽が光物を抱いたと云う事も、全く譯のありそうな事。さてわいよ〳〵神様が、お授け下すつたに相違無いと、そこでこの男の子の名も、あの光物にちなんで、光丸とつける事にして、蝶よ花よと育てたほどに、光丸も至つて健かに、やがて七歳の春を迎えた。

その間も例の日出吉わ、まるで人間の小僧の通り、光丸の相手をしてわ、よく守をして居るので、光丸もまたこの日出吉を、無二の友達とよく懐いて、話助やお伽が野良仕事に、家を明ける事があつても、二人でわ無い一人と一匹わ、仲よく家で遊びくらして、少しも不自由な事わ無かつた。

殊にこの光丸わ、全體誰に似たのやら、生れ付いて利發な上に、力も強く、氣わ荒く、やゝもすれば表え出て、近所の子供等と遊ぶのに、軀こそ人より小さけれ、度胸自ら据わつて、物に動ぜず、事に怯おず、何時も他の子供を壓して、自ら餓鬼大将になり濟ます。

ある日の事で光丸わ、例の通り猿の日出吉を連れて、鎮守の森え遊びに出かけた。此所わ此村の腕白共が、戰事や鬼ごつこに、持つて來いと云う舞臺。今日も朝から村の子が、五六人打ちよつて、はや餘念なく遊んで居たが、光丸の姿を見ると、何思つたか目引き袖引き、何やらヒソ〳〵と耳語き合いながら、やがて何處えか隠れてしまつた。

おかしな事をする奴等だ、常ならば自分が出ると、皆前え來て頭をさげるのに、今日に限つて何故逃げるのかと、光丸わ不思議に思いながら、

『オイ〳〵、何も隠れなくつてもいゝぢや無いか。皆出て來てお遊びよ、お遊びよ！』

と、云えば云うほど村の子達わ、小さくなつて出て來ない。

するとついて來た日出吉わ、そつと光丸の袖を引いて、

『モシ〳〵、坊ちやん！　彼奴等にやアかまわずに、此方え行きましよう〳〵！』

と云いながら連れて行つたのわ、社の後の小高い山だ。

『何だイ、日出吉！　こんな所え來て何するんだイ？』

日出吉わ四邊を見まわして、やがて前え來て立つたと思うと、いつの間にかその姿わ、頭に烏帽子、身に狩衣、まるでお祭の時に出る、山車の上の猿の通りだ。

光丸わ驚いて、

『ヤ、お前わ…何時の間に？』

日出吉わ威儀を正し、

『す、その驚きわ道理だが、もはやお前も今年わ七歳、何時まで傅の要る事もあるまい。今日限りに日出吉わ、お前の許を離れるが、よしその身わ離れても、その一生の終るまで必ず加護して居る程に、我が無き後わ、玩具函の、あのくゝり猿を我と思つて、隨分大切にするがよい。おさらば〳〵光丸！

いよ〳〵光れや光丸！』

と、云つたかと思うと見る〳〵中に、口から金色の氣を吐いて、光丸にハッと吐きかけ、そのまゝ高く雲に乘つて、社殿の方えと飛んで行つた。

呆氣に取られた光丸わ、しばらく無言で社殿の方を、ヂッと睨んで立つて居た。

所えバラ〳〵と以前の子供等、

『さア遊ぼう！』

と、右左から寄つて來た。何故また先刻わ隱れて居て、今に成つて出て來たのだろう？

## 第三回

### 光丸の放逐と橋上の大鬼

先にわ何がけむたいのか、誰も寄り付かなかつたのに、急にまた側え來て、

『遊ぼう〳〵！』

と促すので、光丸わ其方を見かえりながら、

『皆、何をしてたんだ？　何だつて先刻わ隱れてたんだ？』

と聞くと、中の一人が答えるには、

『だつてあの日出吉猿が、今日わ何だか恐かなくつて、側え行く〳〵と食い付かれそうだから、みんな逃げて居たんだよ。よく光ちやんわ何ともなくつて、一所に歩いて居られたねエ。』

と云う。光丸わニッコリ笑つて、

『何が恐い事があるもんか。だがあの猿わ、只の猿ぢやア無かつたんだぜ。今お前達も見たろうが、山王樣のお使で、身體中から後光を出して、雲に乘つて飛んでつてしまつたア。』

と云つたが、

『ナニ、後光を出して飛んでつた？　ちつともあたい達わ知らないよ。ねエ、誰も見なかつたねエ。』

と、他の者わ一向に氣が付かなかつた樣子だ。

光丸わ一層不思議に思つたが、何しろこの身わ離れても、一生加護をしてくれると云うので、賴もしく思つたから、元氣わ日頃に十倍して、

『何でもいゝや。今日ッから日出吉わ居ないから、みんなおれのお友達だよ。さアいつもの戰爭をしよう。』

と、棒切をもつて先に立ち、皆を指揮して追いまわす樣子が、何でも自分が大將になつた樣な氣だ。

その氣に呑まれて他の者わ、大方その云いなり次第になるが、中にわ少し年長の、身丈の伸びて居る者わ、小さい光丸に威張られるのがいやさに、其云う事を聞くまいとすると、光丸わ目を怒らせて、

『何だ此奴！　生意氣な眞似すると承知しないぞ。』

と、棒切をもつてビシ〳〵食わす。

それを怒つて手向いをすれば、いきなり手を

引摑んで手を捩ぢあげたり、足搦かけて投げ倒したり、さん〴〵な目に會わせるので、皆わ皆震え上つて、仕方無しに云う事を聞く。

こんな風で光丸は、お傅の日當吉が居なくなつてから、却つて一層氣が荒くなつて、やゝともすると友達を、打つたり叩いたり、酷い目に會わすので、遂にわ近所の子供と云う子供は、毎日生傷の斷えた事なく、其親達わまたそれを怒つて、交る〴〵話助の所え、尻を持ち込んで來る騷ぎに、話助夫婦も今わ持て餘して、

『コレ光丸や！ お前もお友達と遊ぶなら、何故仲よく遊ばないんだ。あんなに他人樣のお子をつかまえて、怪我なんぞさせて濟むとお思いか。ちつと大人しくしてわ何うだな！』

と、云つてもなか〳〵聞けばこそ、

『なアに、ありやアみんなが弱いんだよ。何も酷い目に會わす氣ぢやないんだが、みんなが勝手に怪我をするんだよ。』

と、一向濟ました顏で居る。

近所の親達わ親達で、

『ほんとに困つた腕白小僧だ。だがあんな者と遊ばすから、自家の子が怪我をするんだから、いつそ誰も交際わせない樣にしよう。』

と、各自子供に云い含めて、光丸の顏が見えると、直ぐ家え隱れる樣にさせた。

すると光丸わ、その家の前に立つて、

『コリャ、大將樣のお通りだのに、何故お出迎しないんだ。はやく來てお供をしろ！ 來ないと踏み込んで叩つ殺すぞ。』

と威かす

その聲にまた驚いて、澁々ながら出て行くと、その子を家來の樣に連れて、また他の家えと押しかける。

こうして子供をかり集めて、直ぐにまた例の戰爭をして、强い者は强いで投げ倒し、弱い者わ弱いで踏み付けるから、決しても〳〵、泣いて歸らない子わ無いと云う始末。これにわ同じ村中の者わ、誰一人苦情を云わない者わ無い

それをまた話助夫婦わ、毎日聞かされる心苦しさ！ ほんとに厄介な子が出來たものだ。これを思うとあの光丸わ、山王樣の申し子所か、やつぱり森の中の魔物か何かで、假りに人の腹え宿つたんぢやあるまいか。そう云えば日出吉の、急に行方の知れなくなつたのも、魔物の正體を見屆けて、それで怖くて逃げたのかも知れない。何にしてもあんな者を、永く家に置いて居ては、後に何をされるか知れないから、今の中に追い出してしまおうと、夫婦わとうとう相談をして、ある日光丸に向い、

『お前もあれほど云つて聞かすのに、親の云う事を聞かないで、ます〳〵亂暴をする樣でわ、村の人達に對しても、家に置く譯にわ行かないから、可哀そうだが今日限り、何所えでも勝手に行つておくれ！』

と、云つた。所が光丸わ驚きもせず、

『そうですか。それぢやア私わ出て行きましよう。』

と、平氣で家を出てしまつた。

出たがさて行く所わ無い。行く所わ無いが、またそれを苦にもしない。光丸わ平氣で彼方此方あるいて、その日も漸く暮れかゝる頃、來かゝつたのわ大きな橋の袂だ。

見るとその袂に、菰が一枚落ちて居る。光丸わ進みよつて、

『ウン、こゝに好い物がある。先刻から歩いて草臥れた所だから、こゝで少し休んで行こうや。』

と、云いながら其所え腰をおろしたが、坐るともう立つのがいやになり、果わコロリと横になつて、其儘他愛も無く寢てしまつた。

その中に日わ全く暮れ、夜わ次第に更けて、四邊わ眞黑になつたが、光丸わまだ前後も知

らず、グウ／＼大鼾をかいて居ると、やがて西の彼方から、ズシン／＼と地響をさせて、此方え渡つて來る者がある。近づくまゝによく見ると、こわ如何に！ これわ雲突く許りの大鬼。手にわ大釣鐘の撞木の様な、太い鐵棒を杖につき、青や赤の小鬼共を、大勢後に引きつれながら、やがて光丸の枕元を、うつかり通り過ぎようとすると、[illegible]に目をさました光丸わ、いきなりこの鐵棒に手をかけ、

『ヤイ待て！』

と、聲をかけた。

## 第四回

鬼の[illegible]と[illegible]の足音

鬼わ鐵棒を取られて、思わず立止つて下を見ると、小さな人間の子供が居るから、何か[illegible]た[illegible]、[illegible]いないから、そのまゝ行き過ぎようとするのに、鐵棒が少しも動かない。

『オヤ！』

と[illegible]知らずまた振りむくと、子供わまだ鐵棒をはなさず、

『ヤイこの野郎！ [illegible]い心持で寝てる所を、よく起して通りやがつたナ。この[illegible]い橋の上を、此所ばかりが通路ぢやあるまい。馬鹿な奴か……』

と云いながら、相手の顔をすかして見たが、此時初めて氣がついたと見えて、

『ヤア、お前わ鬼だナ。』

と、云つたが別に驚きもしない。

鬼わ何か呟きながら、

『ウン、いかにもおれわ鬼だが、貴様わ人間の[illegible]の癖に、馬鹿に氣の強い奴だな。面白い！

ウン面白い！』

と、感心をして見て居る。所え子分の小鬼共も、ドヤ／＼側え寄つて來たが、

『親方！ 生意氣な小僧ぢやありませんか。いつそ頭から食つておやんなさい！』

と、中の一匹が云つたが、大鬼わ頭を振つて、

『イヤ／＼、おれの鐵棒をつかんだ力と云い、おれの顔を見て平氣な所を見ると、此奴ア只の人間の子ぢやない。いつそ此儘連れて行つて、鬼仲間に入れてやろう。』

と、云いながらまた光丸に向い、

『どうだ小僧！ お前わなか／＼えらそうな奴だが、なんとおれの子分になつて、これから鬼仲間に入らんか？』

『なんだと？ お前の子分の鬼仲間に成れ？ 失敬な事を云うな！ おれわ忝なくも、山王様の申子で、光丸と云うものだぞ。なんだお前わ鬼ぢやないか。鬼なら桃太郎に降参して、寶物をみんな取られた奴だろう。そんな意氣地の無い野郎わ、其方からおれの子分に成れ。おれを子分にしようなどゝわ、チャンチャラ可笑い、アハヽヽ、アハヽヽ……』

と、大聲あげて笑い出したから、小鬼共はまた腹を立て、

『此奴が／＼！ 子供だと思つて勘辨すりやア、つけ上つて勝手な熱を吹きやがる。さアもう覺悟しろ！』

と、二三匹よつて引つかもうとする時、光丸わその鬼共を、小さな手で拂つたと思うと、忽ち前後に投げ飛ばされて、角を折られるやら、牙を抜かれるやら、散々な目に合わされた。

『それ見ろ！ だから只の人間ぢや無いと云うんだ。何しろこんな所ぢや話も出來ないから、はやく窟え連れて行こう。――さア光丸[illegible]、悪い様にわしないから、まア私の家まで來なさい！』

と、今度わ大鬼もやさしく出たので、光丸も漸く得心し、

『よし、それぢやア一所に行つてやるが、決して子分なんぞにやア成らんぞ。』
『そりやアどうでもお前の勝手だ。』
と、それから大鬼は、光丸の手を取つて、其窟えと連れて行つた。
窟でわまた他の小鬼共が、
『今日わ親方が好事に、あんな小さな子供を取つて來た。あれぢやア骨まで親方に食われて、とてもお餘りわ頂けまいなア。』
などと蔭口を云つて居るが、大鬼わ光丸を食うどころか、却つてこれに馳走を出して、さも親切にもてなして居る。
光丸わその馳走を、遠慮もせずにムシャ〳〵食つたが、腹がはるとまた眠くなるので、眠氣ざましに大鬼に向い、
『どうだ、一番腕押をしようか！』
と、力競を挑みかけた。
大鬼わニッコリ笑つて、
『ウン、腕押、面白い！ だがこれでお前が負けたら、いやでもおれの子分だよ。』
と、云えば、光丸も興に入つて、
『その代りお前が負けたら、お前こそおれの家來だぞ。』
と、約束を堅く交して、雙方まづ座をかまえ、螺の主の様な大鬼の手と、楓の若葉の様な光丸の手わ、やがてしつかり組み合つた。
『よしか、押すぞ。』
『いゝとも、さア來い！』
ウーン〳〵、ニイ〳〵と、二人わ掛聲をして押合つたが、右え押され、左え押し返し、東え傾き、西にたおれして、容易に勝負が付きそうにも無い。
見物の小鬼共わ、たがいに顏を見合せて、
『どうだい、あの親方の拳固でやられちやア、甲を被つた人間の頭でも、粉微塵に成らうと云うのに……』
『あの力で押されても、ビクともしないばつかりか、却つて時々押し返して……』
『アレ〳〵アレ、親方が……』
『オウ〳〵、こりやアやられそうだぞ。』
と、皆舌を捲いて居る。
其中何思つたか、大鬼わ手をはなしながら、
『こりやア いつそ勝負無しにしよう。何しろお前わ恐ろしい力だ。』
と、云えば、
『お前もなか〳〵强いんだねエ。』
と、光丸も手を引いたが、別に疲れた様子も無い。
然し大鬼わ、先刻からあまり力を出して、餘程草臥れたものと見えて、そのまゝゴロリと横になり、さもガッかりした様な聲で、
『さア、今夜わもう遅いから、お前も其邊で寢るがいゝ。』
と、云う中に自分の方わ、もうグウ〳〵寢込んでしまう。
それを見て子分の小鬼達も、
『ぢやアみんな寢た〳〵！』
と、彼方でもゴロリ、此方でもゴロリ、行儀も作法も一切かまわず、大の字になつたり、トの字になつたり、くの字になつたり、への字になつたりして、思い〳〵に寢てしまつた。
あとに光丸わ、却つて一人起き上り、窟の中を見まわしながら、
『なんだこの態わ！ なんぼ鬼とわ云いながら、あんまりダラシが無さ過ぎるぢやないか。こんな奴を家來にしたつて、ろくな事わ出來やしない。いつそ今の中に出て行つてやろう。だが、只で出るのも面白くないから……そうだ、一番おどろかしてやろう。』
と、そつと大鬼の寢顏の側え行つて、釘の様なその鼻毛を、いきなり一本グイと引きぬき、吃驚して跳ね起きる間に、ツイと表え飛び出して、

一目算に逃げてしまつた。
が、不圖あたりを見ると、もう東の方が白ん
で、夜の明けるにわ間も無い。
　夜が明けたら町え行つて、何所か甘い所を見
つけて、兎に角此身を落付けなければ成らない
と、こんな事を考えながら、段々人里の方え來
ると、やがて後の方から、ポカ／＼と云う馬
の足音。誰か來る樣子だから、何の氣無しに振
り向く途端、スッと通りぬけて行つたのわ、薄
明りでもそれと見える、若い立派な騎馬武者だ
が、何故か家來も馬丁もつれず、只一騎で駈け
て行く。
　それを見ると光丸わ、ひとり何かうなづい
て、いきなり自分の草履をぬぎ、はだしのまゝ
宙を飛んで、その馬の後を追つかけた。

## 第五回

### 錦織左衞門と襤褸城

　草履片手に宙を飛んで、騎馬武者の後を追つ
かけた光丸わ、そのまた早いこと、はやい事！
さながら其の名の光物が、空を飛ぶかと思うば
かり、忽ちの中に追付いたが、敢て是を呼び止
めるでも無く、只後に成り、先に成り、その間
二間と離れないで、まるで馬丁でもある樣に、
始終一所に駈けて居る。
　馬上の武士わ、やがてそれに氣が付いて、
變な小僧だとわ思つたが、別に咎めもせずに居
た。
　其中に騎馬武者わ、只在る大きな門の前で、馬
をハタと止めたが、下りようとして獨語、
「しまつた！　先刻あまり急いだので、こりや
履物を忘れて來た。馬上の時わ是でも可い
が、まさか他人の家え上るに、土足のまゝで
わ行かれない。こりや困つた事をした。」
と眉を顰めると、此時逸早く光丸わ、ツとそ
の側え駈けよつて、先刻自分の脫いで持つて居
た、草履を揃えてその前え出した。
　武士わ見ると驚きながらも、
『オヽ、これわ有難う。』
と、其儘穿いたが、さて今度わ馬の始末に困つ
た。
　自分わこの邸に用があるが、馬を引いて座敷
にわ通れない。それも出る時急いだので、口取
の馬丁も連れて來なかつたから、今と成つてま
た當惑すると、光丸わそれと悟つて、
「お馬わ私がお預り致しましよう。」
と、甲斐々々しく前えまわつて、馬の轡をちや
んと取つたが、馴れた馬丁も及ばない位に、馬
わおとなしく其所に立つた。
『オヽ、それでわ大儀だが、暫時預つてくれ！
用が濟んだら直ぐ出て來るから。』
と、武士わよく／＼急ぐと見えて、其儘門內え
駈けて入り、玄關から奧え通つて、半時ばかり
出て來ない。
　その間光丸わ、ぢつと馬の口を取つて、門
の前に立つて居ると、通り掛りの者わ指をさし
て、
『どうだイ、あんな小僧が馬の口を取つてるぜ。
今にあの馬が暴れたら、直ぐに蹴飛ばされて
了うだろうに。』
と、惡口を云つて行くが、常なら短氣な光丸、
直ぐに拳骨を振りまわすのを、今日ばかりわ何
を思つたか、それらわ馬の耳に風、聞いても聞
かぬふりをして、少しも取り合わない。
　暫時すると武士わ、用を濟ましてまた出て來
た。
『オヽ、御苦勞々々！　よく逃がさずに居つ
てくれた。』
と、云いながらまたヒラリと乘つたが、徐に手
綱を捌きながら、
『時に小僧！』

と、優しく聲をかけた。
光丸わ武士を見上げながら、
『何で御座います？』
『お前わ體に似合わず、不思議によく間に合う奴だが、……一體何所の何者の伜だ？』
『私ですか……何所の誰の子でもありません。只天と地との間に、ヒョコリと涌いて出た人の子です。』
『面白い！　その返事が氣に入つた。それぢやア何うだ、今日から武士に成る氣わ無いか？』
『武士になら成つても可うござんす。だが何うしたら成れるんです？』
『それでわおれの家來になれ！』
『貴君の家來に……？』
と、何思つたか光丸わ、光る眼でヂッと馬上の人を見たが、
『……よし、成りましよう。だがお武士さん！　貴君も只の人ぢやありませんネ。』
『いかにもおれわ只の武士ぢや無い。この近國に隱れもない、錦織左衛門という大名だが、今に見ろ！　日本の天下わ、皆おれの物に成るのだ。』
と、云うと光丸わニヤリと笑つて、
『そうしたらその天下わ、また私が貰いましよう。』
『此奴、愉快な事を云う奴ぢや。面白い〳〵！　だが小僧！　お前にも名があるだろう。何と云う名だ？』
『私の名ですか？　光丸と云うのです。』
『光丸わえらい名だ。だが、家來にわ不似合だから、その光丸の一字だけ取つて、今日から光吉と呼ぶ事にしよう。其中立派な武士になつたら、また立派な名をつけてやるぞ。』
『それわ有難う御座います。』
『では付いて來い。』
『畏まりました。』
と、これから錦織左衛門わ、光丸の光吉を連れて、元來た道を引かえしたが、今度わ先刻とちがつて、少しも馬を駈けさせず、ポカリ〳〵と靜かに歩かせて、しきりに光吉と話をして行くと、やがて前方から、左衛門の家來の者が、漸く追付いて來て、
『殿樣！　もう御歸りで御座いますか。不意の御成りに御供も仕らず、まことに申し譯が御座いません。』
と、平蜘蛛の樣になつてあやまつた。
左衛門わ尻目にかけながら、
『イヤ、貴樣達の樣な者わ、付いて居つても何の役に立たん。その代りこれを見ろ！　今日わ良い家來を拾つて來たぞ！』
と、光吉を紹介せる。
家來わ見て驚いた。
『殿樣！　これわまだ小僧で御座いますな。かような者が御家來とわ？』
『この小僧が貴樣達の、十人、百人にも優るのぢや。』
『へエ……こんな半分にも三分一にも足らん奴が……』
と、家來わ一向腑に落ちない顏、光吉わ只ニヤリと笑う許りで、平氣で左衛門の後について行く。
やがて左衛門の城近く來た。前面の小高い山の上にわ、天守や、櫓や、塀が見えて居る。
左衛門わ光吉を見かえりながら、
『光吉！　あの城がおれの城ぢや。』
と、聊か誇り顏に云うと、光吉わ立止つてヂッと見たが、急に聲高く笑い出した。
『アハヽ、あんな所にいらつしやるんですか。ヤレ〳〵危險々々！　敵が一度でも攻めて來りやア、直ぐ落されてしまいます。こんな襤褸城わ打ち壞して、早く建て直さなけりやいけませんねエ。』

『コレこの小僧、何をぬかす。生意氣な事云うと只わ置かんぞ。』

と、刀の柄に手をかけた。が、光吉わ驚かず、

「でも然うだから仕方が無い。ねエ、殿様！』

と云うと、左衛門わ點頭いて、

『如何にも光吉の云う通りだ。この城でわ戰が出來ん。然しこれで今壞せば、急に後が建たんから、それでも當分辛抱して居るのだ。』

と、云うと光吉は進み出て、

「〱何と殿様！ そんなら私にお委せ下さい！ そうしたら一晩の中に、立派に建て直してあげますぜ。』

# 第六回

## 醍元結硬寶わ鬼女

左衛門わこの高言を取り上げまいど思いの外、眞顔に成つて光吉を見かえり、

「面白いその一言。然らば其方にわこの城を、一夜の中に建直すと申すか？』

『へイ、立派に建て直して御覽に入れます。』

と、言葉さえ立派に言い切る。

家來共わ笑を出して、

「此奴が、[illegible]途方もないことをぬかし居る。」

殿様！ 此わ狂人で御座いますな。』

と云うのを左衛門わ耳にもかけず、

「然らば光吉！ 其方にこの城を預けるから、今晩中に建直して、初奉公の手柄にして見ろ！』

「ハッ、畏まつて御座ります。」

と、主從わ飽くまでも眞面目だ。他の家來わ眉を顰めて、

「殿様も御酔狂な！ こんな狂人小僧を捕まえて、御冗談にも程がある。常から嚴しい殿様にも似ず、今日わ何だつてこの通り、馬鹿氣た事をなさるんだろう？」

と、片腹痛く思つて居るが、

『何を此奴等に解るものか。』

と、光吉わ更に氣にも掛けない。

其中に光吉わ、左衛門の館え入れられて、取りあえず一室を遣されたので、光吉わ其儘こゝに立て籠つたが、何と思つたか其後わ、更に左衛門の前にも出ねば、また朋輩にも顔を見せない。

變な奴だと思いながら、左衛門わその夕方、そつと襖の隙間から、部屋の中を覗いて見ると、光吉わ前に城の圖をひろげて、仔細らしく腕を組んで居るが、時々わ何か點頭いて、得意の笑を洩らす様子が、まるで何者か相手があつて、それと相談して居る様にも見える。

「何所まで不思議な奴か知れんが、兎に角今夜が試驗物だ。」

と、好奇心わ一層度を增して、只明日の朝が樂みでならない。が、その眞夜半頃、左衛門わ不圖目を覺まして見ると、しきりに物の音がする。

さてわ光吉奴、何か仕事を初め居つたナ。それにしても朝までに、何れ程の事が出來るものかと思いながら、そつと寢床をぬけて、窓から外を見ると、驚いた。

宵にわ星さえ見えなかつた空が、夜の明けたよりも明るく光つて、一時わ目も眩まんばかり。漸くにして瞳を凝らすと、何所から何うしてやつて來たか、何千匹とも數知れぬ小童が、手に手に作事の道具を持つて、櫓を組む者、石垣を築くもの、瓦を葺くもの、壁を塗るもの、何れも一心不亂に成つて、こゝを先途と働いて居る。

左衛門わ夢かと許り。一度わ我目を疑つたが、『さてわ光吉わ魔法使か、それならその城の[illegible]、一夜に建てるも易い事だ。こりや重寶な奴が來てくれたわイ。』と、思直して大きに喜び、夜の明けるのを待ちかねて居る。

やがて軒端の雀わ鳴き出し、森の鳥わ塒を離れて、夜わほの〲と明け放れると、今まで見

えた數千の猿わ、一時に何所えか姿を消して、殘るわ新築の天守の櫓、巍然として空に聳えて居る。
『さゝ、出來した。天晴れ〳〵！』
と、我知らず躍りあがれば、はや其前に平伏して、
『これにわ御意に適いましたか？』
と、光吉わもう扣えて居る。
左衞門わ嬉しまぎれに、その手を取つて引き起し、
『イヤ、光吉！　見事なものぢや。實に賴もしい其方の腕前。今日から其方を引拔いて、一方の侍大將に致すぞ。その褒美にわ具足、太刀、馬、皆予の物を取らすぞよ。』
と、殊の外の御機嫌に、光吉此上も無い面目を施し、まだ青二歲の身をもつて、忽ち錦織左衞門の、片腕と賴まれる樣になつた。初め小僧と侮つて、あの高言と冷笑つた、他の家來の面々も、この一夜の大手柄に、皆舌を捲き膽を消して、今わ誰一人光吉の前に、頭を上げ得るものさえ無い。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

玆にまた、この錦織の館の腰元に、桔梗と云う女があつた。これも新參者であるが、心の利いた性質で、讀書から算筆から、裁縫から、料理から、何一つ出來ぬと云う事も無い、稀代の才女である所から、左衞門にも殊の外氣に入り、一も桔梗二も桔梗と、お側去らずに立働いて居たが、光吉わその身の出世につれて、この桔梗とも親しくなつて、その擧動を見る中に、その鋭い目の光で、流石にはやくも見ぬいたのわ、この桔梗の只者ならず、實わ老女に姿を變えて、しばらく人間に近づき、油斷があつたら躍りかゝつて、餌食に取つて食おうと云う、恐ろしい鬼神であると云う事だ。
されば光吉わ、機會があつたら化の皮を引剝き、見事退治てくれようと、思いながら日一日と、仇に送つて居る中に、やがて主人の命令で、しばらく遠國え使者に行く事となつた。
光吉わ何らやら心掛りになるので、いつそ左衞門に云つて置こうかと、つい口まで出しかけたが、元より先方も魔性の曲者、なか〳〵尻尾を見せないので、それと證據を指す事もならず、其儘主人の命を受けて、旅路え立つてしまつたのだ。
所がその使の用向わ、同じ大名仲間の所え、大切の道具を借りに行くと云う事で、談判が思いの外手間取り、心ならずも三日四日と、時を移す事に成つたが、丁度その五日目の朝だ、錦織館から急の使が、
『御注進！　御注進！』
と、顏色を變えて飛び込んで來た。
『慌しい、何事だ？』
『御聞き下され、光吉樣！　た、大變が持上りました。』
『ナニ、大變？　オ、そうか？　さてわ桔梗が正體を現わしたナ。』
『よく御存じで御座ります。いかにもあの桔梗婆、只の婆と思いの外、世にも恐ろしい鬼婆で、大それた、あの殿樣を、一夜の中に食い殺し、生首もつてその儘、天昇致して御座ります。』
『ナニ殿樣の御寢首を……ムー、とう〳〵やり居つたか。殘念な事をした！』
『それと云うのも殿樣が、平生のお氣に入りに似合わず、よく〳〵御機嫌が惡かつたと見え、御給仕の仕樣が間違つたとやらで、お茶碗を取つて頰になげつけ、お箸で眉間を突かれたのが、桔梗の腹の蟲を怒らせ、其夜の中に正體を現わして、あの始末で御座ります。』
と仔細を語れば篤と聞いて、

『アヽ殘念な事であつたナ。』
と、しばらく腕を組んで居たが、何思つたかカッパと跳ね起き、
『殿様お逝去あるからわ、この御使もこれまでだ。それより早く追つかけて、鬼女を退治てくれねばならぬ。』
と、云うかと思うと光吉の、身體わはや座を舞い上つて、高く宙を飛んで行く。
あれよ〳〵と人々わ、只空を見て呆れる許り。
空にわ忽ち雷鳴、電光!!

## 第七回

### 墓前で授かる『天下』の名玉

鬼女の正體を現わした、腰元桔梗わ雲に乘つて、今しも天の一方え、喜び勇んで舞い上ろうとする。
所え同じく宙を飛んで、追いすがつて來た例の光吉。見ると桔梗の身の邊にわ、怪しい惡魔共群れ立つて、暗闇の雷を鳴らすもあれば、得意の電を光らすもあり、その凄まじさ、恐ろしさ、只の者にわ面も向けられない。
けれども光吉わ少しも怯まず、はやくも桔梗に躍りかゝつて、
『おのれ殿様の寢首を搔いた、憎い惡魔奴!思い知つたか!』
と、云いながら襟頭つかんで、エイとばかりに引き据える。
鬼女わそれを振り拂つて、また逃げようとする所を、光吉わはやくも刀を拔いて、横に拂つた一撃に、見事その首わ胴とはなれた。
すると居合せた惡鬼共わ、
『ソレ親方の仇を取れ!』
と、右左から飛びかゝつたが、元より山王の加護ある光吉、爪も牙も立てばこそ!睨めかえされた威光に恐れて、皆ちり〳〵に逃げてしまつた。
其間に光吉わ、倘宙に舞つて居る、桔梗の生首を打ち落して、其儘片手に提げながら、急いで錦織館に歸つて見ると、こゝでは大將左衞門を討たれて、舵を取られた船の様に、途方に暮れた家來の者共、横着な奴わ此隙に、主人の祕藏の寶を盜んで、何所かえ駈落するもあり、また氣の弱い者共わ、明日から誰に扶持を貰おうと、メソ〳〵泣いて居るのもある。
光吉わこれ等の者を、更に目に止めもせず、早速左衞門の墓所えとかけ付け、まづ取つて來た桔梗の首を、その前に供えて、丁寧に禮拜し、
『あゝ、左衞門様!さぞ御殘念で御座いましたろう。然しその仇わ、この通り討取つて參りましたから、何卒これで御無念を晴らし、御心安く御成佛遊ばしませ!』
と、云つて其靈を慰めると、その心が通じてか、不思議や墓石がグラ〳〵と動いて、何やら物も云い度げに見えた。
光吉わ點頭いて、
『さて亡き殿様にも、この御供物を御覽になつて、御嘉納遊ばして下さると見える。然し此鬼女の生首、このまゝ此所にも置かれまいから、御供えが濟んだらば、いつそ燒き棄てて灰にしてやろう!』
と、近所の枯木をよせあつめて、其場に火を焚き、これに桔梗の首を投げ込むと、執念深い生首わ、燒かれてまだ唸つて居たが、程無く灰になつたので、まづこれで安心と、あとを消して立たうとすると、こわ如何に!その灰の中から、白い光がさつと立つた。
光吉わはやくも目をつけ、
『やゝ、や、これわ不思議なものがあるぞ。』
と、まだ温味のある灰の中え、ぐつと手を入れて、それを摑んで出して見ると、思いがけないこの光物わ、明皓々とした玉であつた。

「オヽ、これわ珍らしい白玉！　何うしてまたこんな物が、この中から出たのか知らん？」
と、不審の首を傾けた。
すると彼方の石塔の下から、正しく錦織左衛門の聲で、
「その玉こそわおれの家に、日頃秘藏の白玉ぢや。桔梗がおれを殺した時、手ばやく寶藏から盗み出し、人に見咎められぬ様に、口に含んで逃げた所を、其方に會つて首を落され、その儘此所え首とともに、戻つて來た稀代の寶ぢや。」
「オヽ、それでわこの玉わ御家の重寶？」
「ウン、「天下の玉」と云うものぢやぞ。」
「天下の玉とわ？」
「よくその文字を見い！」
と、云う聲に點頭いて、光吉わ白玉を、尚よく檢めて見ると、成る程只の白玉とわちがつて、刻んだのか、書いたのか、其中央に一際白く、「天下」と云う文字が見える。
「オヽ殿様、御座りました。天下と云う字が御座りました。これわ然し何う云う譯で御座ります。」
「オヽ、その譯わ？　それわおれが云うよりも、其方が大切に持つて居れば、その玉の奇特に依て、自然と合點が行くであろう。」
と、云うのを聞くと流石は光吉、はやくも心に悟つたと見えて、さも嬉しそうに點頭きながら、
「それでわ、これわこの儘、私がお預り申してよろしう御座りますな？」
「いかにも其方に預けるから、屹度麁末に致すまいぞ。」
「畏まりまして御座ります。」
と、光吉わ推し戴いて、この玉を懐中に入れ、更にまた石塔に向つて、
「それでわ殿様！　私わもう參ります。」
「オヽ、よく參詣に來てくれた。嬉しいぞよ。」
と、又もや石わ動き出したが、やがてその靜まるのを見て、光吉わ靜かに立ちあがり、元の館えと歸つて來た。
するとその途中の事だ。――只ある並木の側を通ると、だしぬけに聲がして、
「ヤイ待て！　小二歳！」
「用がある。」
と、前後から立ち閉がる者がある。
光吉は立止つて、その者共をキッと見ると、これわ見上げる様な大鬼、何れも手に〳〵鐵棒を持つて、大地をズシ〳〵鳴らして居るが、此方わ一向驚かず、
「待てとわ何だ、何の用だ？」
「その懐中の玉を出せ！」
「ナニ、この天下の玉を出せと？」
「貴様の様な二歳奴に、勿體無い天下の名玉！　きり〳〵此方え出せばよし……」
「若しまた否ぢやとぬかすなら、可哀想だがこの棒で、貴様のどたまをお見舞申し……」
「その眼の玉から火の玉を出させて、」
「天下の玉わ捲き上げるぞ。」
「命が惜けりや神妙に、」
「さアその玉を出してしまえ！」
と、二匹の鬼わ聲をそろえて、まるで追剝を見る様に、光吉を嚇しつけて、例の玉を奪い取ろうとした。
光吉わカラ〳〵と笑つて、
殿様の敵桔梗を討つて、その御褒美に殿様から、今戴いた許りの此玉、むざ〳〵貴様等に渡して成ろうか。餘計な慾をかわかずと、さア其所退け、退き居ろう。」
と、軀に似合わぬ怪力に、二匹の鬼を推しのけて、ヅカ〳〵通り抜けようとする。
鬼も今わこれまでと、やり過して後から、振りかぶつた二本の鐵棒、今にも光吉の腦天めが

けて……

## 第八回
### 鬼の退散、天狗の推參

二匹の鬼わ鐵棒を振りあげて、光吉の後から、力にまかせて打ちおろした。

あわれ光吉わ、其一撃に微塵と成つて、影も形も留めまいかと思うと、こわ如何に其瞬間わ、何時かヒラリと飛鳥の如く、飛び退つて彼方の木の下。

此方の鬼共わ空を打つた、力の餘りで鐵棒の先を、大地え四五寸埋め込んだが、「エイ」とばかりにまた取り直して、再び打つて掛ろうとする。

所え何處からやつて來たか、總身金毛に包まれた、七匹の小猿共わ、手に〳〵[illegible]や槍を持つて、先に立つた鬼に向えば、つゞいて銀毛の小猿三匹、これわ大[illegible]刀劍をかぶりながら、後の鬼えと掛つて來た。

鬼共わ驚いて、[illegible]鐵棒をふりまわし〳〵、[illegible]わいゝを小猿を相手に、右え拂い、左え避ぎ立て、しばらく必死に戰う中、[illegible]思つたか光吉、[illegible]く[illegible]げながら、

『退けい〳〵！』と號令をかけた。

すると例の小猿共わ、一度に凱歌をあげたと思うと、其まゝ姿わかき消す如く、はや一匹も目に遮らない。

此間にこそと鬼共わ、また鐵棒をふりかぶり、

『おのれ小童！』

『覺悟をしろ！』

と、今度わ眞向から打つてかゝると、光吉わ更に驚かず、

『オヽ、見事取るなら取つて見ろ！』

と、わざと玉を見せびらかす。

『おのれ小癪な！』

『取つてくれるぞ。』

と、此度わ鐵棒取り直し、手を擴げて摑みかゝつた。

時その時！ 光吉の二つの眼から、金色の光が二筋、さながら雲を破る雷光！ サッと許りにほとばしつた。

するとまた此方の鬼わ、さながら彈丸に打たれた如く、アッと云うと二匹とも、將棋倒しに其場に倒れ、頭を抱えて悶きながら、

『アヽ恐ろしや！ 免せ！ 免せ！』

『降參々々！ あやまつた。』

と、果わ大地え兩手をついて、まるで平蜘蛛の様に成つてしまつた。

それを尻目に見やりながら、光吉わニヤリと笑つて、また玉を懷中え納め、悠々として立ち去るのに、鬼共わもう起きも上れず、只指を咬えて後から、羨ましそうに見送るばかり……

さて光吉わ、今日舊主の墓參をして、はからず天下の玉を得たのわ、いよ〳〵出世の前兆と、喜びながら館え歸つたが、元より大氣の男だけに、その嬉しさわ顔にも出さず、またその話も人にわ語らず、只その玉を大切にして、朝夕肌身を離さない。

すると、それから三日目の、而も夜が更けてからの事だ。

光吉わ不圖眼をさまして見ると、何者とも知れず雨戸の外に、ガヤ〳〵話し合う聲がする

『この夜半に何事ぢや？ これまた頑童共か、それとも此間の鬼の奴等、今度わ仲間を語らつて、また玉を取りに來たのかな？ 何にしても驚きわせんぞ。』

と、靜かに床から起きあがり、常の者なら押取刀で、戸の隙間から外の様子を、そつと覗いても見ようと云う所を、光吉わ無造作に、素手で縁側まで出ばつて行つて、雨戸をガラリと引き

あけた。
途端にバタ〳〵と音を立てて、何れも其場を逃げた樣子だが、生憎戶外わ眞の闇、何所に何者が居るのやら、流石の光吉にも解らない。
『コリャ〳〵、誰だ〳〵？ 用があるなら此方え入れ！ 何も隱れる事わ無いぞ。』
と、大聲あげて呼びかけると、
『オヽ、それでわ御免下さりませ！』
と、云いながら緣の下から、躍り上つて座についたのわ、人間でも無く、鬼でも無い、羽根の生えた、眼の鋭い、そうして鼻の高い奴だ。
光吉わ不思議に思いながら、
『コリャ、貴樣わ天狗だナ。』
『ヘイ、如何にも天狗で御座います。』
『シテ、何しに此所え來た？』
『天下の玉を拜見に出ました。』
『オヽ、そうか。それわ見せてやらん事も無い。だが先刻の話聲の樣子でわ、貴樣一人とも思われんが、他の者等わ何うしたのだ？』
『御許しさえ御座りますれば、皆此方え入つて參ります。』
『オヽ、何の遠慮が入ろう。皆此方え入るがよい。』
『でわ呼びますで御座りましょう。』
と、一人の天狗わ緣側に立つて、何か合圖の羽叩きをすると、彼方の木の枝、此方の石の上、或わ築山、燈籠の陰から、バタ〳〵バタ〳〵羽音をさせて、群がりよつた天狗共、其數凡そ十五六、光吉の前に居列ぶと、等しく頭を下げて辭儀をした。
光吉わ見て興に入り、
『さてわ貴樣等天狗共わ、天下の玉を見に來たと申すか？』
『いかにも左樣に御座ります。』
『オヽ、でわ見せて遣わすぞ。』
と、光吉の懷中から、しづかに出しかけた天下の名玉！

## 第九回

### 日出吉の再現、名玉の奇特

日月を欺き、萬象を照らす、天下の名玉の光の鋭さ、サッと許りに四邊を射ると、途端に並み居る天狗共わ、アッと一度に平伏したが、やゝあつて少し頭をあげた時、見るとその二つの眼わ、まぶしい光に明けかねて、皆半ばを閉ぢた許りか、その大切の鼻柱わ、等しく中途から折れて居た。
光吉わいよ〳〵笑坪に入り、
『なんと見事な名玉にわ、何れも肝が潰れたろう。』
と云えば、天狗の中でも年長と見えるが、恐る恐る進み出ながら、
『なるほどこれわ天晴れの名玉、豫て噂に聞いたにたがわず、見事な御寶で御座りまする。』
『シテ貴樣等わ、何と思つてその通り、大勢揃つて見に參つたのぢや？』
と聞けば、今度わ次の天狗が出て、
『さればで御座りまする。私共一同が、日頃鼻を高く致して居りまするも、實わその名玉を、我手に入れ度いばつかりに、常からその所在をば、其所か此所かと嗅ぎ立てますので、さてこそ斯樣に伸びたので御座ります。』
『なんだ、それで貴樣等のその鼻わ、この玉を嗅ぎ出そうとして、それでそんなに伸びたと云うのか。』
『左樣に御座ります。イヤ、その玉を望んで居りますのわ、私共許りでわ御座りません。同じ魔性の仲間で御座りまする、あの鬼共も玉の所在を、何うか致して聞き出そうと、始終耳を立てて居りますが、その一念が骨を拔

けて、あの通り耳の上に、角が生えたので御座ります。」

「なるほど、道理でこの玉を貰つて歸る時、途中に鬼奴が二匹居て、横奪しようとしたのだナ。」

「全くその爲めで御座ります。然しその鬼共も、その名玉の威光にわ、必ず角を折りましたで御座りましよう。」

「何にしても貴樣逹わ、よくこの玉の事を知つて居るが、全體この名玉にわ、何う云う奇特があるのだナ？」

「それをまだ御存じないので御座いますか……」

と、三番目の天狗わ乘り出し、

「それこそ其名にも呼ぶ通り、この玉が下に立つて、如何なる事も思いのまゝ、自由自在になると云う、不思議の奇特があるので御座ります。然し左樣な名玉わ、滅多な者にわ手に入らぬ筈、それがまた御手に入るとわ、何と云う果報な御方、貴方樣わ何時何所で、何う云う月日の下にお生れなさりましたか、さてさてお羨ましい事で御座ります。」

と、云う言葉に光吉わ、今更何か思い當つて、ニッコリと打笑みながら、

「おれわ何處で生れたか知らん。然し天地の間に生れて、初めのほどわ光物、それが母の膝に抱かれて、忽ちに人間に成つたのだ。」

「さてこそ／＼、只のお方とわ異うと存じました。そう云うお方なればこそ、この名玉も御手に入つたれ、——さも無い者が持つて居れば、却つてその玉の祟りによつて、非業の最期を遂げねば成りません。たとえば貴方樣の先の御主人、錦織左衛門殿の如きも、なまじこの玉をお持ちなされて、却つて桔梗と云う惡魔の爲めに、あゝした事にお成り遊ばしたので御座ります。」

「オヽ、そうだつたか。して見ると危險い玉だナ。」

「イヤ、その危險いも人にこそよれ、貴方樣の御手にあれば、それこそ正眞天下の玉、天下の事わ御意次第、こんなおめで度い事わ御座りません。コレ、兄弟、何れも御祝儀申上げようでわ無いか。」

と、一座を見かえると、他の天狗共も點頭き合い、やがて一度に羽叩きして、異口同音に、

「萬歳！　萬歳！　萬々歳！」

と、云うかと思うと天狗共わ、忽ち掻き消す如くに失せた。

さてわ夢か、それとも幻か、何にしても不思議な事と、あとに光吉わ玉を抱きながら、茫然として坐つて居ると、何時の間に入つて來たか、見覺のある小猿が一匹、眼の前え來て畏まつた。

光吉わキッと目をつけ、

「オヽ貴樣わ、日出吉で無いか？」

「ハイ、光吉樣、その後わ御無沙汰致しまして御座ります。また此度わ御目出度う存じます。」

「めで度いとわ、玉の事か？」

「天下自在のその名玉が、お手に入りました上からわ、今こそ再び日出吉が、貴方樣の御側え參つて、御用をつとめる時節が參りました。その御奉公の手初めに、御覽に入れるものが御座ります。サア此方え御出で下さい！」

と、はや起き上つて先に立つ。

光吉わまだ夢心地、その後について行くと、日出吉わ庭え下りたが、やがて光吉の手を取ると、見る／＼中に宙を飛んで、間も無く大きな岩の上に立つた。

見おろせばその下わ、波漫々たる大海原、小舟一つ浮いてわ居ない。

「日出吉！　此所わ全體何所だ？」

「此所わお國の端で御座ります。」

「國の端とわ世界の端か？」

『世界の端でわ御座りません。只貴方様の御國の
の端、世界わまだこの先に、いくらもあるの
で御座ります。』
『でわ、まだこの海の先にも國があるのか？』
『あるどころでわ御座りません、あれ〱、あ
の雲と水との間に、霞んで見えて居ります所
わ、即ちこの先にある妖仙國、妖しい仙人の
居ります、大きな國で御座ります。』
『オヽ、それでわ彼の國の天の下には、妖しい仙人
の住んで居る、國が霞んで居るのだナ。』
『その通りで御座ります。殊に彼の妖仙國わ、
もとわ貴方様のお生れに成つた、大日の國に
付き從つて、同じ日の出を仰いで居りました
が、中頃大日の光が薄らぎ、遠く届かぬ様に
なりましたを、妖仙共わ好い事にして、まぶ
しい日の出に背を向け、代りに月の光の下
で、勝手に國を拵つて居ります。なんと怪
しからん奴等でわ御座りませんか。』
『如何にも聞き捨てならん話だ。』
『然し今こそ貴方様わ、天下の名玉をお待ちに
なる、大日の國の光吉様、天下を自在に遊ば
すからわ、あの妖仙國も降参させ、同じ大日
の光の下に、その名玉の奇特のほどを、お
示し遊ばさねばなりますまい。』

『そうだ〱、大きにそうだ、まして昔しわ
彼の國も、此方の物だと聞くからわ、今さら
背を見せられて、默つて居る所で無い。然し
日出吉！ 見れば彼方わ海の先、只でわ渡つ
て行かれんなア。』
『御決心さえ付きますれば、渡るに何の御心配
がいりましょう。それこそ名玉の奇特によつ
て、何事も自由自在、まづあの玉をお出しに
なつて、試しに高くお捧げ下さい！』
と、云われて光吉も力づき、また懐中の名玉
を、推し戴いて高く捧げた。
すると不思議やその光が、さつと八方を照ら
したと思うと、見る〱中に雲の上にわ、日出
吉と同じ姿をした、小猿の群が幾千匹か、鬨を
作つて現われた。
それと同時に岩陰からわ、一度に羽音を鳴ら
しながら、現われ出でた天狗共、思い〱に武
器を取つて、我先にと躍り立ちながら、忽ち天
下の名玉の、光の下に集まつた。
光吉わ勇み立ち、
『オヽ、大儀々々！ 小猿共、天狗共、よツく
聞け！ 今度この光吉わ、天下の名玉の奇特
によつて、あの妖仙を征伐するぞ。貴様等も
供を致せ！』

と、皆まで云わぬその中に、小猿も天狗も口を
そろえて、
『オヽ、合點で御座ります。』

## 第十回
### 妖仙の狼狽、王子の生捕

さても妖仙國と云う所わ、只海一つ隔てて、
大日の國の西隣にある、隨分古い國であるが、
其所に住む妖仙共わ、いづれも氣が重く、心が
鈍く、立つて働くと云う事よりわ、臥て遊んで
居る方を、得意として居ると云う風だから、國
こそ可なり大きくわあれ、更に開ける進みもし
ない。
否、昔時わこれでも立派な國で、一時わ大日
の國の者が、種々の仙術を學びに出かけ、様々
の仕事を習つて、それを土産に歸つて來てわ、
留守居の者に教えた事もあつたが、後にわ却つ
て反對に、此方で手を引いてやり度い位に成つ
た。
尤も其頃わ此の國に、金鷄と云う名鳥が居
て、是が大日の光を見ると、聲高らかに歌つた
もので。その金鷄の聲を聞くと、國中の者が一
時に跳ね起き、齊しく業を勵んだればこそ、

合おう。
見る〳〵中に三人、五人、或わ十人、二十人と、此所に倒れ、彼所にへたばり、目も當てられぬ大敗北。
果わ逃げると、降參するとで、名におう妖仙國の濱手の城わ、見事日出吉の手に落ちて、金鷄鳥の紋つけた、妖仙國の旗印わ、忽ち裂いて引き棄てられ、代りに立つた大日の旗、その下に群がる者共、一度にどつと凱歌を揚げた。その勢の凄まじさにわ、山も爲めに頂を折り、川も爲めに底を覆し、艸木もやがて其前に、何れも倒れ臥すべく見えた。
すると又この事が、はやくも王城えと聞えたから、妖仙王わ大きに驚き、
『所詮今の勢でわ、私等が此所に逆立しても、大日の軍勢にわ敵うまいから、いつそ早く明け渡して、仲直りをしてしまつた方が、後が樂でよいでわ無いか。』
と、云えば、大臣わまた頭を振つて、
『イヤ〳〵、それはあまりの意氣地の無い事。假にも妖仙國の王樣ともある方が、敵に一筋の矢さえ放さず、此まゝ御殿を明け渡すのわ、金鷄鳥の手前もあり、旁々出來る事でわ御座りません。それよりわ王樣にわ、王子諸共大面國え、しばらく立ち退き遊ばしませ！　後にわ私共が居りますから、決して御心配にわ及びません。高の知れた猿の日出吉、私が手捕にしてくれます。』
と、高言を吐いて諫めながら、尙も軍議を凝して居る。
所えはやくも寄手の日出吉、勝に乘つて寄せ來る樣子に、妖仙軍も心得て、同じく十分に身を堅めながら、ドッと許りに躍り出で、小猿の勢と渡り合う。
暫時の間わ入り亂れて、互いに勝負を爭つて居たが、其の中に妖仙勢わ、次第にまた征め立てられて、討たれる者數多く、はてわ此の王城も、はや風前の燈明の如く、危く見えたその折から、王わ王子と諸共に、裏手の門からそつとぬけ出で、大面國えと逃げようとする。
これを見た例の日出吉、何でムザ〳〵敵を逃がそう、逸早く飛んで來て、矢庭に王子の襟頭を摑むと、其まゝ宙え吊りあげた。

## 第十一回

### 大面の加勢・天狗の菌狩

妖仙王子わ王と共に大面國え逃げようとしたが、足弱の身の悲さわ、忽ち日出吉に捕えられ、空中高く摑み上げられて、ヒイ〳〵と云う泣聲あげ、
『アレエ、助けて〳〵！』
と、呼んだが叫んだが妖仙王わ、元より命あつての物種、九死の境に陷つてわ、なか〳〵わが子の事など思えず、
『オ、、和子や！　捕えられたか？　捕えられたわ不憫ぢやが、今わとても助ける事わ出來ん。これから行つて大面殿に、加勢を頼んで來る迄わ、不憫ながら人質に、敵の陣屋に殘つて居てくれ！　追付け味方が强くなつたら、屹度取り返しに來てやるぞ。』
と、勝手な事を云いながら、雲を霞と逃げて行く。それにつゞいて家來の妖仙も、尻尾をまいて一算走り……。
日出吉わ雲の上から、この體を見て冷笑い、
『さりとわ妖仙の弱蟲奴等！　現在大切な王子を取られて、それを取り返す勇氣も無い、親としてわ子を忘れ、家來としてわ主を忘れ、いたづら盛りのこの子をば、此所に置去りにして逃げるとわ、何たる意氣地の無い奴等だ。』
と、云えば王子わ悔しがり、
『ア、、情無い阿父樣！　家來共も覺えて居

れ！　此まゝおれが敵の手で、命を取られる事があつても、敵わ恨まぬ、それよりも、恨めしいわお父さま、憎いわあの家來共！……そう云う心で居ればこそ、大日の國から征められて、あつたら國を取られるのだ。口惜しい、殘念だ。」

と、切歯をして泣き伏した。

それを見ると父日出吉わ、急に不憫の心が増し、

「これ妖仙の王子殿！　その哭きわ道理だが、少し思う仔細があるから、貴君の命わ取りわせぬ、安心して居るがよい！」

と、いたわつてもまだ頭を振り、

『イヤ〳〵、助けて欲しい事わ無い。この儘此所で討死する。殺してくれ……！』

と、悶えながら身を摺り寄せる。

日出吉わいよ〳〵感心して、

「イヤ、天晴れのその覺悟！　そう云う立派な氣性の者が、他に一人でもあるならば、妖仙國もこれほどに、もろく我手にわ破られまいに……その見上げた覺悟を見てわ、いよ〳〵殺す事わ成らぬ。サ、サ、心安く一所に來なさい！」

「いゝや行かぬ、こゝわ動かぬ。何うしても此所で死ぬのぢや。』

と、だゝけて更に動かない。

面倒なりと日出吉わ、手ばやく王子を引つかかえて、しつかり背に負つてしまい、

「それほど討死したければ、よい所で殺してやる。何と云うにも此所わ途中、さア神妙に來るのだぞよ。」

と、はや其所を引揚げたが、其途中でも王子に向い、

「先刻から見る所、骨組と云い、度胸と云い、大日の國の子供の中にも、滅多に見られぬ程なのわ、他の妖仙の弱蟲に比べて、月と泥龜とより思われぬが、それでも貴君わ妖仙國の、まことの妖仙の胤なのか？』

聞くと王子わ、無念の涙を呑みながら、

『そのお尋ねわ道理だが、これにわ理由のある事ぢや。全體この妖仙國でわ、私一人に限らない、子供の内わこの通り、皆氣が強く度胸が好いが、大きくなると何う云うものか、皆骨がねけ、筋がゆるんで、あの通り弱蟲に成つてしまう。それと云うのも妖仙にわ、惡い菌が生えて居るので、その菌を國の者が、皆喜んで食べる中に、何時か元氣が無くなるのぢや。」

「それわまた不思議な話……してその菌わ何んと云う？』

『なまけ茸と云うもので、妖仙國にわ野にも山にも、至る所に生えて居る。たとい大日の國の者が、強いえらいと威張つても、この菌を食うならば、やつぱり同じ弱蟲に、屹度成つてしまいますぞよ。』

「それわ好い事云うてくれた。それでわこの事味方の者に、よく云いつけて用心させよう。」

と、こんな話をして居る中に、はや日出吉わ王子を背にして、今攻取つた王城をば、其儘陣屋にして乘込んだが、元より殺すつもりでわ無いから、王子わ直ぐに一室え入れて、警護に小猿を四五匹付け、只逃げ出さぬ様にして、大切に生捕にして置いた。

尤も此時日出吉わ、味方の小猿を呼び集め、

「この妖仙と云う國にわ、不思議な毒の菌があつて、それを食うと如何なる勇士も、忽ち弱くなつてしまう故、たとい如何に腹が減つても、菌と見たら手をつけるな！　茸の類わ口に入れるな！」

と、堅く云い渡したのである。

話變つて妖仙王わ、わが子の生捕にされるのを、つい鼻の先に見ながら、一目算に其所を逃げ

て、大面國え逃げ込んだが、折から國王大面の魔王わ、何か表が騒がしいと、立つて物見に出ようとする所え、息せき切つた妖仙王、
「コ、コ、これ大面殿、タ、タ、大變だ、助けて助けて！』
「あわたゞしい、何事ぢや？』
『大日の國から征めて來た。』
「ナニ大日の國の奴等が、お前の國えせめて來たと？　それが何うした大變なのだ。何故一息に吹き飛ばしてやらん？』
『何うして〳〵、吹き飛ばすどころか、あべこべに蹴ちらされて、皆さん〳〵な目に會つた。はやく頼む、加勢を〳〵！』
「アハヽヽ、又しても泣面見せる、意氣地の無い妖仙殿ぢやな。然しその樣子でわ、大日の奴等も馬鹿にわ成らんな。よし、それならば心得た、直ぐに加勢に向つてやろう。實わあんまり仕事が無いので、少し退屈して居た所だ。』
と、云いながら大欠伸、ウーンとさし上げた兩の手で、そのまゝ左右をさし招くと、オーと答えて彼方此方から、進み出た大面の惡鬼共、…
「大王、何御用で御座りまする？』
「妖仙國に加勢して、大日の勢を追拂うのぢや、直ぐに出陣の用意をせい！』
『ハッ、心得ました。』
と、云う間に起る怪しの黑雲、魔王の前におし蔓ると、魔王わ幾千の惡鬼と共に、その黑雲に打ち乘つて、妖仙國えと群がりよせた。
とわまだ知らぬ大日勢の、別手に向つた天狗共わ、もろくも倒した妖仙共の、しばらく跡さえ見えぬのに、少し油斷をしたと見えて、此所の廣野、彼所の山間に、假の陣屋を構えたが、見ると其邊にわ、如何にも見事な菌が生えて居る。
先刻からの戰爭に、大分空腹く成つて居た所だ。つい取つて一個を食べると、そのまた味の甘いこと。それと聞いて又一人……二人三人、五人十人、はてわ何れも爭つて、その菌を食ひ初めた。

## 第十二回

### 妖仙の降參、光吉の天昇

毒とわ知らぬ天狗勢わ、只空腹さに手當り次第、有り合う菌を取つて食つたが、暫くするとこわ如何に、全身一時に痲れ渡つて、手足わ萎み、目わ晦み、脣さえも硬ばつて、例の肝腎の鼻柱わ、もろくもヘシ〳〵折れてしまうに、これわ不思議と訝る所え、一旦逃げた妖仙軍わ、大面王の援兵を得て、忽ち元氣を盛り返し、ドッと許りに逆襲して來た。
それと見て天狗勢わ、
「何を小癪な！』
と云いながら、渡り合おうとして見たが、五體の自由を失つて、さながら案山子か木偶同樣、今わ何の役にも立たない。
見る〳〵中に大天狗小天狗、何れも大面の惡魔の爲めに、薙ぎ立てられ、踏み蹂られ、目も當てられぬ大敗北となつた。すると例の日出吉わ、後陣にあつてこの體を見るより、
「これ容易ならぬ事だぞ。さてわあの天狗共、仔細を知らずに菌を食つて、その毒氣に中てられたと見える。よしそれならば此方にも、法があるぞ。』
と罵りながら、小猿共に云いつけて、まづ野山に生え蔓る、例のなまけ茸を片端から、ザクリザクリと刈り拂わせ、その刈り取つた菌の笠を、礫にかえてバラ〳〵と、群がる敵え投げかけた。
するとふしぎやその笠の、中から黃色い粉が、さながら火藥の破裂した樣に、サッと頭から浴

びせ掛る。その毒氣に打たれつゝ、勝ち誇つた大面の鬼共、角を折られ、牙を挫かれ、彼所にバタリ、此處にバタリ、バタリ〳〵と投げ倒されて、再び起きも上り得ない。

これに又力を得て、天狗共も立ち直れば、小猿の群もそれと共に、力を合せ氣を揃えて、大面軍と妖仙勢とを、只の一匹も殘さんぞと、揉みに揉んで押し寄せた。

互いに叫ぶ鬨の聲わ、天に轟き、地に鳴つて、その凄ましさわ帝釋天が、魔軍征伐のその昔も、かくや思う許りである。

その中に大面王わ、少しおくれて此場え來たが、見れば味方の惡鬼共わ、小猿の軍に攻め惱まされ、また妖仙の兵士等も、天狗共に擊ち破られて、云い甲斐無くも逃げ出す樣子に、カッと許りに腹を立て、

『おのれ猪子才な猿蟲共、いで大面の手並を見せて、猿も天狗も一揉みに、揉み潰してくれるぞ。』

と、手勢をはげまし、眞先に、目に餘る大魔劍を、風車の樣に揮り立てながら、勢するどく進んで來た。

それを見ると大天狗共わ、スワよき敵ぞ逃がすなと、五六人一群になり、ワッと許りに走りよつて、右左から奪つてかゝつたが、何を云うにも先わ大面、風を起して振る劍の、煽りを喰つてわ流石の天狗も、羽根を挫かれ、鼻を捻ちられ、ヨロリ〳〵と足を浮かせて、より付く事さえ成らぬ樣子。

此時また日出吉わ、少し退つて雲の上から、勝負如何にと見て居たが、何さま大面王の魔力にわ、天狗も所詮及ばぬ樣子に、よし、今わ猶豫せぬぞと、ヒラリと體を躍らせて、雲からおりると、これ如何に、忽ち其身わ平生の、二倍餘りの大猿となつて、大面王の前え躍り出で、

『ヤア〳〵、其所に現われた怪物わ、音に聞く大面王か？ かく云う我わ大日國の、光吉將軍の一の大將、山王權現の御身内の、猿の日出吉と云う者なり。相手に取つて不足わあるまい。イザ尋常に勝負しろ！』

と、大太刀眞向に振りかぶつて、二つに成れと切つて掛ると、敵もさる者體をかわして、

『オヽ、日出吉猿とわ汝の事か。桃太郎の供をして、鬼が島でわ手柄するとも、大面王わ汝等の、手に合う樣な者でわ無いぞ。蟹をだました惡猿の、臼に打たれた最期の程を、今こそ其身に知らせてくれん。』

と、罵りながら渡り合う。

魔王に魔力の秘法あれば、猿に神通の祕術あり。互いに負けじ劣らじと、一心不亂に鬪う有樣、玉を爭う深淵の龍か、肉を取り合う荒原の獅子か、敵も味方もその凄ましさに、片唾を呑み、汗を握つて、只呆氣に取られて居る。

かゝる所に妖仙王わ、先に大面國え逃げ込み、その助太刀を賴み得て、初めて安堵をして見ると、今度わまたわが子の事が、急に案じられてならず。元より猿わ恐ろしいが、只子の愛に引かされて、ソッ〳〵此所まで來て見ると、大面王わ日出吉を相手に、此處を先途と勝負の最中。

妖仙王わ我を忘れて、

『オヽ、其所に居るその猿たちわ、王子を奪つて逃げた奴ぢや、憎い仇ぢや、仕留めて下さい！』

と、聲をそえると大面王より、日出吉わまづ聞きつけて、

『さてわ妖仙王も其所に居るか。居るなら云つて聞かしてやる。汝の樣な弱蟲の、親に似合わぬ王子の男々しさ、末賴もしく思つた故、命わ取らず生かした儘、陣屋にしかと預かつてあるぞ。』

と、闘いながらも話して聞かせた。
すると何思つたか、妖仙王わ走りよつて、いきなり大面王に向い、
『コレ待つた！　待つて下さい！』
と、立ち閉がる。
『エイ、邪魔な、其所退いた！　怪我するぞ怪我するぞ。』
『イヤ、怪我わしても厭わん、どうぞ待つて下さい！』
と臆病者に似もやらず、刃の間に割つて入る。
　これに流石の大面玉も、劍を控えて身を引くと、同じく日出吉も太刀を潛めて、二歩ばかり身を除けた。
　妖仙王わその中央に、身を伏してまづ日出吉に向い、
『これわ〳〵日出吉殿！　思いがけない今の言葉に、我が子の無事な様子も知れて、この様な喜びわ御座りません。付きましてわ妖仙王、今こそ先非を後悔致し、改めて大日國に、降參致します程に、何卒その王子奴わ、私にお返し下さいませんか！』
と、云つてからまた大面王に向い、
「今お聞きの通り、私さえ降參致しますれば、貴君にわざ〳〵御出でを願つて、御苦勞かけるにも及ばぬ事で御座ります。只今までの御加勢の御恩わ、一生忘れわ致しませんが、もうその劍もお納め下すつて、日出吉殿ともお仲直りを、何卒お願い申します。』
と、云う。
　その眞情にわ大面王も、強いて戰をつゞけもならず、又日出吉も妖仙王さえ、降參させてしまう上わ、今度の征伐の趣意も立ち、自分の顏も立つ事と、同じく王の頼みを入れて、
『それでわ大面王！』
「日出吉殿！』
と、互いにニッコリ笑いながら、等しく刃を鞘に納め、改めて手を握つて、こゝに和睦をする事になつた。
　此時虚空に聲あつて、
『オヽ日出吉、出來したぞ。光吉も大滿足、今わ思い殘す事なし。さらば〳〵！』
と、云う言葉に、何れも上を見あげれば、光吉わ衣冠凜々しく、光の雲に打ち乘つて、はや天國えと昇つて行く。

# 年譜

去年（昭和五年）還暦を迎へた私は、明治三年の六月五日に、東京麹町平河町五丁目、俗に三軒家と云ふ所で生まれた。父は巖谷修、其頃は太政官の内史、後に貴族院議員、錦鶏間祗候、元は江州水口の藩醫を家業としたが、晩年は一六居士として、専ら書家で立つて居た。

當歳の時母を失ひ、五歳まで里親に預けられ、六歳から小學校に入れられたが、家では父や矢土錦山から、漢籍の素讀を敎へられた。

十歳から訓蒙學舍に獨逸語を學び、十一歳には鹽谷青山の家塾に入れられ、十三歳から醫學豫備校、次で獨逸學協會學校に獨逸文學を研究した。此間大學の豫備門に入つて、醫科に進む筈であつたが、其頃から醫師となるのを厭つて、入學試驗をうけながら、皆わざと落第をしてしまつた。

十六歳川田甕江博士の家塾に入り、十八歳には杉浦重剛氏の稱好塾に入り、此所で江見水蔭と相知つた。

是より先、十四五歳の頃からそろ〳〵文藝に親しみ、出でては演劇、講談、落語、入つては小說、戯曲、傳說に熱注して、『一珍可笑夢』『かち〳〵山後日譚』などの處女作を試み、また一面「讀賣新聞」に、短文の投書を送つて居た。漣山人とは其頃つけた雅號であるが、後に家姓の大江に因んで、漣を小波と書く樣にした。

十八歳、硯友社に加盟して、尾崎紅葉、石橋思案、川上眉山、丸岡九華等と相知り、江見水蔭、廣津柳浪等を迎へた。世に公にした處女作「初紅葉」は、「我樂多文庫」の創刊號から「五月鯉」の名で執筆したものである。

次で二十一歳頃、「新著百種」に『妹背貝』、二十二歳、「少年文學」の初卷『黄金丸』を著した。此の年長兄立太郎に死なれた。

二十三歳京都日出新聞社に聘せられて、專ら小說、漫錄、三面雜報を擔任し、在勤二年間、此頃から博文館の依賴に應じて、「幼年雜誌」に童話を寄稿する傍ら、「日本昔噺」「日本お伽噺」の執筆を初め、『世界お伽噺』『世界お伽文庫』『日本お伽文庫』など、殆んど月を逐うて發行して居た。

二十三歳、博文館の懇請に應じて其編輯局に入り、「少年世界」「少女世界」「幼年世界」「幼年畫報」等を主宰し、毎號必ず創作お伽噺を發表した。『新八犬傳』『お伽太閤記』も、其間の執筆に係るものである。

二十九歳、妻勇子を鄕里より迎へ、三年目に長男三一を得た。其誕生後十日、聘せられて伯林大學に赴き、東洋語學院の講師となり、日本語を敎授する傍ら、獨逸文學を研究すること二年、任滿ちて歸朝後、『洋行土産』『戀の綺葉書』を著した。

三十六歳、早稲田大學講師を囑託され、文學部に獨逸文學を受持つた。其の年尾崎紅葉に別れ、次で三十七歳父に別れた。

三十八歳、文部省圖書課囑託を命ぜられて、國定敎科書の編纂に與かる事二年餘、内閣交迭と共に、假名遣の方針が變つたので、自然其任を解かれてしまつた。

其頃文部省内に設けられた、文藝委員及び通俗敎育調査委員に擧げられたが、これも豫算の都合で、其委員會は解散されてしまつた。

四十歳、渡米實業團の記錄係を託され、渡

澤、神田、兩男爵の一行に加はり、北米合衆國内各都市を歷訪すること九十日間。歸來『渡米實業團誌』を編み、また『新洋行土產』を著した。

四十三歲の時、明治天皇崩御、其前年の暮チブスに罹り、翌春平癒後、大いに健康の增進を感じた。

かくて博文館にある事二十餘年、大正七年以後は、退職して顧問となり、諸雜誌には依然として筆を執つた。

五十歲の時、お伽三十年記念を祝され、知友より故新海竹太郎氏作の、木彫立像を贈られた。

四十歲頃より、諸國巡講を初めたが、博文館退職後は、其機を得る事多く、約二十年間に、內地各府縣は云ふに及ばず、朝鮮、滿洲、臺灣、樺太、進んでは布哇諸島へも渡つて、多數の少國民等に口演を試むるに至つた。

また此爲に大正五年、特に青山の皇子御殿に召されて、當時の東宮殿下(現陛下)秩父、高松兩殿下の御前で、童話二席を口演するの榮を得た。

昭和二年、感ずる所あつて、『金色夜叉眞相』を著し、間も無く絕版にしてしまつたが、其頃から全く博文館と離れて、爾來浪人となつてしまつた。

尤も文部省臨時國語調査會には、當初から委員を命ぜられて、漢字整理、國語假名遣の改訂に參加して居る。

俳句、狂句、狂詩等は、少年時代から好きであつた。所が大正十一年、內務省主催の兒童衛生博覽會に、ある人の書いた兒童敎養漫畫に、一々狂句で贊を入れておいたら、それが圖らずも皇后陛下(今の皇太后)のお目に留つて、特に淨書奉呈を命ぜられたが、その翌春には之に對して、有難い特製の御下賜品を拜受した。

五十六歲の時、同志久留島武彥氏等と與に、世界的童話大家、アンダアセンの爲に五十年祭を開催したら、翌年丁抹王國から、之に對してダンネブロウ二等乙章を贈られた。それも前の御下賜品と共に、全く意外の光榮であつた。

昭和三年から初めた、自家出版の『小波お伽全集』十二卷は、同五年の末を以て完成し、聊か還曆記念の印が出來た。

かくて本年(昭和六年)で六十二歲、まだ幸に頑健で、手も利けば、舌も廻る。而も當年文壇の最年少者が、今では元老(自分で云ふのもをかしいが)の仲間入をさせられてしまつたと思ふと、眞に今昔の感に耐へない。

（小波自記）

# 江見水蔭集

日乾干の海月
怒濤の名残すらふ

水蔭

# 女房殺し

## 一

逗子の濱邊に潮頭樓といふ海水浴舍がある。三崎へ通ふ街道を前にして居るが、眺望は、鎌倉の海を隔ちて江の島が浮いた樣に見え、足柄の山々を越して富士の山が手に取る如く望める。寔に好い景色だと誰も賞せぬ者はない。

此邊は總て東京や橫濱で紳士と言はれる人々が建てた別莊で限られて居る。別して今年に成つてからめき／＼殖えた。海水浴場としては大磯より好いと言ふ評判で、大分此夏は遊客が入込んだ。

潮頭樓も客で滿ちて居る。殆ど空房が無い。富んだ處で全盛を衒ふ贅客が尠からぬ。其中に、未だ這んなに人の來ぬ頃から泊つて居る一人の客がある。それは一番最初第一等の見晴しの好い室へ通された。其後他の客が段々加はるに從つて、次第々々に移され、逐らされ、今は一番惡い部屋に押籠められて居る。卽ち暗くて、風が通さなくつて、二階の梯子段の下で、右隣室が洋燈部屋で、左が蒲團の入場で、石油の香と、一種の汗臭い何んとも言はれぬ氣を、常に鼻にして居らねばならぬ。四疊半で、三方が壁で、但し其內の一方に腰掛窓があるが、若し夫れ其所を開くと臺所の流シの溜つて居る溝から、蠅が風より先きに飛んで來る。

これでも宿では餘程遠慮して居るので、番頭が揉手を仕ながら、御氣毒樣ですが他の家へ御移り云々を願はないだけが、まづ幸福と無理に思はなければならないのだ。

こんな部屋へ通されて何故怒らぬ。此所ばかりが宿屋ではない。避暑保養に來て斯くの如き部屋、此樣な虐待を受けるに於ては、避暑にも成らぬ、保養にも成らぬ、却つて苦熱と不養生とで健康を害する。こんな馬鹿な事は無い筈、好く我慢して居る事だと傍からは思はれる。

しかし、聽いて見ると此客人は、好んで、といふ譯でもないが、他の涼しい座敷に居るよりは此所がとの望みで、それは又斯ういふ事情――まさか此混雜の中だから、一人で一室占領とも行くまい。然らば相客をいづれ入れねば成るまいが、涼しくても相客は厭、暑い部屋でも一人が好いと言つたので、それで此所へ移されたのださうな。

其客人とは如何なる人か。女中達の噂では、何んだか譯の分らない不思議な男で、朝は早くから晩は遲くまで、駿河半紙の綴ぢたのに木筆で何か橫文字を書き續けて、少しも休むといふ事はなく、然うかと思ふと考へ込んで了つては、殆ど死人かと思はれる樣な事がある。時には兩手で頭を押へた儘、うウん――と言つて引ツくりかへり、唐人の寢語の樣な文句を呻つて居る。第一分らないのが避暑に來た人が綿入を着て汗をだく／＼流して居る。海水浴に來た人かと思ふと、一度も海へ這入つた事がない。更に最も不思議なのは、三度々々の食事の時で、給仕の女中が居ても一言も辭を掛けず、全くの沈默で米飯を食ふ。茶碗を出す時に『米飯』『茶』これぎり。それで米飯をよそつて居る間には、箸で膳の上へ連りに何か書いて居る。よそつて出しても受取る事を仕ないで、口の間でぶつぶつ言ひながら例の通り遣つて居る。

宿の主人はあまり不思議なので、最初の日に誌した宿帳を出して見た。それには『東京市芝

區櫻川町二番地田村方。靜岡縣士族。近藤堅吉。二十三歳。數理學校生徒。脚氣療養」としてあつた。

扨ては數學を勉強して居るのか。綿入を着るのは蚊の喰ふのを防ぐ爲めか。人が遊ぶ中にあやつて獨り眞面目なのは、脚氣ゆゑの轉地療養か。今時の若さに感心な人だと、初めの輕蔑は後の敬服と變つて、皆が氣を附けて上げる樣に、いつしか成つた。

## 二

過度に勉強なされては、病氣の爲めに好くありません。責て日に一度位は散歩でもなさいましと宿の主人も主婦も勸めた。年增の女中の一人も恐る／＼勸めた。自分の事を人に恩に着せる位な處で、やつと堅吉は日に一度の散歩をする事に成つた。濱邊づたひに行くと小高い山があつて、其麓に木蔭の茶屋といふ水茶屋がある。其所を目的に正午の飯後から出かけて、暑い盛りを其所で四時頃まで過して歸るといふ事に極めた。そして其間は矢張向うの茶屋の臺の上で勉強するのは少しも變らぬ。

斯う極めると極めた通りに規則正しく出かけて行く。重い足をひきずりながら、草履を倚重しとして、てくり／＼と出かけて行く。蝙蝠傘を片手に、片手には駿河半紙の綴ぢた帳面と木筆とを持つて。

木蔭の茶屋といふのは、こんもりと繁つた赤松の下で、寔に涼しく好い處だ。葭簀張に竹の柱で、臺が二ッ、椅子が三ツ、床几が一ッ。臺には古ぼけたカアペットの切が、椅子には破れかけたアンペラが、床几には穴の明いた赤毛布が、其におぼつかなく敷いてある。風で飛ばない樣に、お多福が頰冠をして居る火入や、木の根ッ子の煙草盆や、螺の殼なぞが上置に成つて居る。此邊の連中が讀んだ、涼しさや、とか、清水哉、とか、誌してある十七文字の聯が掛けてあつて、これの對句に是非並べたいのは、旅藝者の名前が書いてある軒提燈、ぶウら／＼と下つて居る。

店臺には駄菓子の箱と水菓子の籠とがある。茶釜の下には裏の松林の枯葉を絶えず焚べてある。此方のテーブルの上には、色々の罎が載せてあつて、其中の二三箇には木札が附けてある。湯出玉子が硝子の皿に盛つてある。眞中には山百合の花が插してある。若し人がコップを取つて或る洋酒を所望したら、香竄葡萄酒とビールの他は無い、といふで有らう。木札は其二種を區別してあるので、其他は空罎である事が此時判然するに違ひない。只此木蔭の茶屋で好い物は、山から引いた清水の噴水に冷してある藤澤桃と、十四ばかりの少女の美しいのと、これが此逗子での評判である。

堅吉は、少女の美しいのが此邊の輿論である事も、桃が冷えて居て如何にも美味といふ事も知らない。いつも來ては茶を飲んで、駄菓子を二ッ三ッ食つて、臺の上で代數や幾何、若しくは、算術を勉強して、四時にはきつちりと歸る。不時には茶屋の婆さんと僅に二口か三口は話すが、それも滅多に無い事、恰も海水浴に厭き、晝寐から起き、人々が此木蔭の茶屋へ遊びに來かゝる頃には、邪魔にでも追掛けられるかの如く、あわてて歸つて了ふ。

此所の婆さんは感心して、跡では少女に向ひ「ほんとに今時の若さには珍らしい方だ、隨分此逗子へも書生さんが見えるが、あんなに勉強する人はありは仕ない。あんな方は屹度行末出世なさるよ」と賞めたてる。けれども少女はいつも此言葉をして老婆の獨語に留めしめて、一向それには答へない。少女の內職として濱邊で拾集めた貝がらを、江の島から買ひに來るのを待ちつゝ、それを種類によつて分けて居る。

仕方がないから、婆さんも口の間で一ほんとに感心な方だ」をくりかへしながら、松葉を拾つて釜の下を焚付ける。後には吹竹を口に當てるので、其繰語も此所に終る。其内段々御客が來る。

三

殊に暑さ嚴しき日であつた。例の如く堅吉は來て、熱心に木筆を走らして居た。此方では婆さんも、餘程暑くつて體が倦怠かつたと見えて、店の臺の上に木枕を出して、團扇で額をかくして寢て了ひ、少女は何處へ行つたか姿は見えず、如何な勉强家の堅吉も、終にはうとうとと帳面の上に額を伏せて居眠つた。蟬が一層喧しく鳴いて、彼方此方の木にぶつかり廻つて居る。

はツと思つて、起直つた堅吉は、額でも洗つて來たら、少しは氣が引立つであらうと、臺を下りて彼の噴水の方へと歩んだ。

裏の小山つゞきの岩を切つた處に、荵が卷いてある寄竹が地に立つて居て、其口から龍が雲を吐く如く、水を五六尺の高さに吹いて居る。それが一落する四面には、眞白な貝ならが敷いてあつて、其末は綺麗な形に水を湛へて居る。桃の冷してあるのは此所で、流れない樣に籠に入れてあるので、中で瑠璃色と翡翠色とが亂合つて居る。

其岩の蔭に衣服を脫いで置いて、其岩の一箇滑かな上に、此方を背にして腰を掛けて居る少女。手拭を肩に掛けて其端を乳の上で結んで居る。髮を洗つたものと見えて、黑い、濃い、長いのが、白い乳の上に懸つて居る。噴水は風になびいて、さツさツさツと少女の上に落ちて來るので、赤い腰卷の上は瀧をなして居る。手には桃を持つて居る。恰も海女が龍宮で珠を取つて來たかの觀。

其所へ堅吉が行つたので、少女は吃驚したが、堅吉の方でも吃驚して、眞赤に成つて、極りがわるさに引つかへして了つた。少女はそれ程でもない、手に持つて居た桃を見られたのを寧ろ羞ぢたのか、急いでそれを籠の中へ入れて、其後ゆツたりと、髮を絞つて、體を拭いて、そして衣服を着た。

彼此する内婆さんも起きる、客も來る、堅吉はいそ〳〵と歸つて了つた。

此日は實に不思議な事で、堅吉は早くから寢て了つた。蚊帳の中でうん〳〵呻つて居たが、翌日は少し、早目に木蔭の茶屋へ行つた。此日は如何したのか少女は居ない。又如何したのか堅吉はいつもほど勉强仕ない。そして珍らしく、冷してある桃を取寄せて、小刀で皮を剝いて食べながら、婆さんと話した。入獄の人が外へ出た時に步き樣がよろめく如く、寡言の人が話しかけると、訥らぬまでも、どぎまぎする。婆さんは又此間中から聽かう〳〵と思つて居た事が有つたが、隙間が無いので躊躇して居たので、今日を幸ひと切込んだ。「貴郞の樣に御勉强なすつては、それこそえらい者にお成れなさいませう。全體何んにお成んなさるおつもりで……」と問うた。

『僕は理科大學の選科へ入つてね、天文學を專修したい』と答へた。大學は日本で一番えらい學校といふ事に知つて居ても、選科といふのは正統の順序を踏まぬといふ事は知らない老婆。天文學と言つては昔の軍師が心得て居る、あの天文の事と思つたから、婆さん、何かなしにひどく敬服して益々堅吉に重きをおく。「まア好い御息子さんを御持ちなさつて、御兩親は御幸福な事だ』と連りに賞めたてると、「いや、兩親があれば僕も嬉しいが」と堅吉は溜息を吐いた。『それでは、貴郞は、一人ぼツちで居らしツしやるか。やれ〳〵まア』と氣毒がつた。

直ぐと嫁に行く人には氣兼がなくつて好からうと考へ込んで、いよ〳〵益々堅吉が慕はしくなる。

『此所に居た女の子はお前の孫かね。兩親はあるかい』と堅吉は問うた。『はい、孫で御座いますが、其兩親が矢張御座いませんので、母は子供の間なくなりました。此春までは父が居ましたが、これが、から、呑太郎で、困りもので御座いましたが、矢張病氣で死去なりまして、只今ではまア如何やら斯うやら妾が世話を致して居りますが、もう此歳で御座いますから、手もとどきませず、早く嫁に遣るか婿を取るか致したら御座いますよ』

『いくつだね』と突然問出して、未だ答へぬ間續け樣に『名は何んといふかね』と次いだ。

『お柳と申しますよ、十四ですが……』と口籠つて、『如何もいけません』と言ひかけて、俄に萎れて、胸が詰つた樣な、然も苦し氣な息を吐いて、そして又『如何もいけません、から子供で御座いますが……』

これぎりで會話は止み、例の如く堅吉は木筆を手に取つた。

其翌日は昨日にかへて婆さんが居らず、お柳一人で店に居た。堅吉は身體を石の樣にして、毎時に倍して勉强して、加之お柳には一口も發しない。お柳は又ぼうツとして、うから〳〵と番をして居た。歸途に堅吉漸く一言『お婆さんは如何して』『お婆さんは心持が惡いと言つて寢つて居ます』『それではお前心細いだらう、兩親は無し、たよる婆さんが病氣では……』『いゝえ、そんなに重い病氣ではありません』と輕く答へた。それにも關はず堅吉は『僕にも兩親が無いんだぜ』と眞赤に成つて言つて、蝙蝠傘をさツと開いて、顏を隱して、重い足ながら早めて去つた。

## 四

今までの勉强家は此頃何んとなく怠けはじめた。怠けはじめて見れば、今まで見向きも仕なかつた、此逗子の夏、遊客の樣、それが能く分る。殊に兩親の無い、世を淋しく送る身には、同じ宿に泊つて居る他の家族の和合といふ事や、夫婦の親密といふ事が目に着く。おのれも早く一家を成したいといふ念は、むら〳〵と起る。一方には、目的の天文學をさめて、星界の面白味を知らうといふ念も起る。自分がもう理學士に成つて社會に天文家として名を知られ、一家を構へたかの空想も起る。其時に兩親あらば、如何に喜び給ふであらうかといふ事も考へられる。其兩親も兩親だが、同じく殘惜しいのは、許嫁であつた娘、それも死んで了つたといふ事も思出される。其許嫁を思出すに連れて、何處やらお柳が似て居る樣な、如何も似て居る樣な、といふ事も浮んで來て、彼を妻に仕たらばと斯ういふ早や戀の念が加はつて、勉强の凝結がそろ〳〵解けて、更に戀愛が固まり始めて、極端から極端へ走りやすく、數學の頭が零に成つて、戀の腦が無限大。彼は吾妻に成り得べきやの疑問點が、常に記されない事は無い。

天文家の玉子が人界に立戻つて見ると、暗い室は矢張厭で、暑苦しい部屋は矢張厭で、臭い喧しい狹い處に居るのは、全く好もしくなくなつた。

これでなくても、如何しても堅吉は此潮頭樓を去らねばならぬ事に成つた。それは新に此家に來つた客人がある、其客人を非常に堅吉は嫌つて居るので。其人は以前堅吉の父と同じ役所に勤めて居たが、堅吉の父は正直一圖の人、其男は長官に摩込むのが上手、いつでも說は合はなくつて、或日激論をした末、潔く父は辭職し、其男は後に遺つて居たが、段々出

世して今では某省の參事官と成つて居る。堅吉は父が常に其男の事を言つて居たのを、子供ながら耳にして居たので、それが頭にあるから、其男に顏を合はすのが、厭で〳〵ならぬ。これを以て早速轉宿とは決定したが、扨て何處へ移つたら好いものか、こんな事には不經驗だから、先づ木蔭の茶屋の婆さんに謀つた。但し、只室が暑くつて、暗くつて、如何も騷々しくつて、といふのを口實にした。婆さんは親切に引受けて、それなら妾の家へお入來なさい、何も別にお構ひ申しませんが、汚くはあつても、見晴しは好し、風通しは好し、いつぞや矢張書生さんが御逗留なさつた事がありました。晝間は妾達二人は此茶屋へ參りますから、誰も居ませんで何樣閑、妾も戸を締めて出るよりは用心が好う御座いますからとの事で、堅吉には願つてもない幸福、喜んで然う極めた。

極まると直ぐに荷物を婆さんの家に運んだ。堅吉の意には、恰も、地獄をさへ去らば滿足であつた亡者が、望外の極樂に引取られた時の樣で、いよ〳〵以て勉強は出來はせぬ。婆さんは丸で養子でも仕た氣で、これも頻りに喜んで居る。お柳は然程喜びも仕ない、かはりに又厭がりも仕ない。

恰度堅吉が移つた晩、二人も茶店から歸つて來て、行水をして、夕飯を食べて居る處へ、慌だしく潮頭樓の女中が來て『お美代婆さん、在宅かえ』と言つて閾を跨いだ。これは常に堅吉を偏屈だ〳〵と言つて嗤つて居た一人で、お鐵と言ふ渡者のあばずれ、何しに來たのか、堅吉の遺失品でも持つて來たのかと思ふと、然うではなくつて『おう、お柳ちやんも居るね、まア好かつた。妾は又居ないかと思つて心配したのだよ。それはいゝが、ちよいとお婆さん、急用だよ、耳を貸しておくんなさい、喜ばせる事があるんだよ、内所話なんだから』とわめく。『なんだねえ、誰も遠慮する樣な人は居やアしないのに、其處でお話しな』『でもさ、内所だから耳を借りたいんだアね』と無理に年寄を引張つて、やゝしばらく咳いた。お美代婆さんは頻りに首を振つて場に戻りながら『いえいえ、もう折角ですけれど、それは御免だ。あの時はあの時。私の手にお柳を引受けてからは、如何して〳〵そんな事が……全體親父が彼の通りの無慈悲で……いくらお金子をならべられても、好しんば先樣が東京でえらいお役人樣だツても、これは又別な事だから、もう〳〵御免御免、如何かよろしく其所のところを斷つて下さい』と言切つて、腹立し氣に茶漬をさら〳〵と掻込んだ。

『でもお前さん、そんな事を言つても仕やうがない、何んだツて當世でさアね、それも今度が初めてならですけれども、一度何があつたんですから』と女中は言つた。『それは死んだ親父が不心得で、これの知つた事ではありません。第一世の中にこんな無慈悲な事は又とあつた事ではない』『それはもう然うに違ひないが、其處が先方樣では大枚のお金子をお出しなさる處でさアね』『お鐵どん止してお呉れよ。奧にはお客もあるし、又柳の前でそんな事を』『だから初め耳を借りたんでさアね　それしきに貸す耳はありませんから』『おや〳〵大變な御立腹だね、けれども、それではお美代さん、お前さんの爲めに成りますまいよ。今の茶店を出すに就いても、家の旦那にお前願つた事があつたぢやアないか。それを急に催促されたら、まアさ、そんなに三圓や四圓のはしたをれ、催促なさる樣な家の旦那ではないが、もしもの時には大まごつきを仕なくツちやアならないよ。それよりは薄井樣のお座敷へお柳さんを……』『もう止してお呉れ、奧にはお客があるよ』『へん、其お客なら横文字癇癪と綽名のある人だらう』『失

[illegible]な事をお言ひでないよ」「まア何んでもいゝやね、それなら、それと、其事を内へ歸つて言ふばかしさ。おやかましう」と下駄音高く引つかへして去つた。

お柳は最前から御飯を食べるのを中止して、祖母とお鐵との對話を聽いて居たが、去つた時には又箸を取つて、さら／＼と食べ始めた。祖母は胸をつまらして、涙含んで、まばらの齒を咬〆めて、ぢツと、お柳の顏を見た。お柳は常にかはらず、そろりと箸を置いて「薄井樣が入らツしヤツたのですか」と聽いた。『さうだとさ』と祖母は答へた。

これを奥の一間の、海に向ふ緣側で、團扇をつかひながら、とび／＼に聽いて居た堅吉──何んだかちッとも分らないが、薄井といふのが耳に入つた、其薄井といふのは加之父の敵同然の名前である、其薄井が如何したといふのか、それが聽きたさにづか／＼と二人の傍まで進んで行つて「薄井といふのを知つて居るの」と聽いた、時に、お美代婆さんは眞青に色が變じて、急には答へなかつた。お柳は何か考へて居る樣で、堅吉の方へは目も配らなかつた。婆さんはやつとお茶を一口飲んで『なアに、只御ひいきになるばかしで御座います』

# 五

此一週間といふものは堅吉に取りては如何に樂しくあつたらう。何も爲ず、茶屋へ行つたり、家へ歸つたり、夜はお柳が貝殼選りの手つだひを恐る／＼仕て居る。綿入などは決して着ないで、髮も櫛り、髯も剃る。お美代婆さんは、これでも未だ堅吉の勉強家たるを信じて動かない。此頃は少し息拔きをして居らッしやるのだと言つて居る。それに堅吉は既にお柳に戀して居ても、ちッとも表面に出さないで、好しや貝よりの手傳ひをしても、其所に少しの興味が無いので、これを茶店に張りに來る書生達に比べて見ると大變な相違ではある。

*　　*　　*　　*　　*

老婆は未だ茶屋へ行かず、人は未だ海水に浴せぬ頃。霧が濱邊を封じて居る中を、寢間衣の儘で散歩して居る男がある。四十餘歳、髯あり、頭少しく兀げ、でツぷりと太り、左も／＼傲慢に歩いて居る。これを緣側から、ちらと見た堅吉の目には、其某省の參事官、薄井巖なる事を認めた。今日は朝から不愉快であると感じた。やがて其常に見さへすれば堅吉に不快感を與へる姿は、霧の中に沒して了つた。

不圖考へて見ると、今朝其方角の濱邊に、お柳は貝からを拾ひに行つて居る筈だ。如何いふものか、堅吉は、それが心配で成らない、如何しても家にぢッとして居られぬ。直ぐと草履を穿いて、出て、濱邊に向つた。彼の薄井の足跡は、汐が引いたばかりで未だ濡れて居る砂の上に大きく印されてある。小さなのは先きにお柳が歩いた跡か。此他には未だ誰も踏まぬと見える。堅吉も亦霧の中を分けて、おのれの足跡を遺しながら行く程に、其大小の足跡が、非常に亂合つて居る所があつて、夫れから先きは又並行に進んで、横手の方へ歩いて行つて居る。其先きは干いた砂の中に沒して、行方分らず。此時堅吉は身體中の血を絞取られた樣な心持になつた。しばらく茫然として直立した。それは霧がすツかり晴れて了つたのも知らずに居た。

不圖向うを見ると、引揚げられてある漁船の脇に屈んで居る娘がある。見定むればお柳だ。彼は餘念なく貝がらを拾うて居る。薄井の姿は霧と共に何處かへ消えて見えない。堅吉は我知らずお柳の傍へ行つて「お前は最先から此所に居たのか」と訊ねた。『はい、居ました』「それでは薄井といふ人に逢つたか」「はい、逢ひま

した』

此答を聴いて、堅吉は溜息を吐きながら、縁に倚りかゝつて、しばらくは無言。お柳は首を上げて『近藤さん、貴郎も拾つて頂戴』『それでは薄井も手傳つて拾つたのか』と思込んで言つた。『二ッ三ッ拾つて下さいましたが……』『お柳さん、お前は薄井といふ人を何んと思ふね』『東京で好いお役をお勤めなさる方ださうです……』『お前は薄井に連れられて東京へ行きたくはないか』『薄井さんとは厭ですが、東京へは行きたう御座います』『それでも僕とは』と思切つて言つた『ほゝゝ』と笑つて『連れて行つて下さいますなら、いつでも參ります』と言つた。

この言葉で漸く安心した堅吉は、一層勇氣を出して言つて了はうと、思ひは、思つたが、扨て言ひ動かないで、ためらつて、でも今言はなければ言ふ時は無いと、遠廻しの秘傳知らぬ身の、眞向から切込んで『お柳さん』『はい』『僕が東京へ連れて行くと言つたら、行きますか』『それは叔母さんが行けと言ひましたら』『祖母さんと一緒に僕が東京へ引取らうと言つたら、來るかね』と躍起として言つた。此時初めてお柳も眞面目に成つて、それは珍らしく眞赤に成つて『だつて……だつて……』と口籠つて、全く下を向いて仕まつて『だつて、妾は行かれやア仕ません』『何故行かれない』と激した。『何故でも……貴郎、知つて居ながら、妾をからかつては厭ですよ』『妾の事を知つて居ながら……』『何んだか僕は知らない』『うそですよ、知つて居て、それで貴郎は……』と言ひつゝ立上つて、そして莞爾と笑つたが、此所を去るでもない、語氣の強い程怒つたのでもない。

## 六

一日大嵐で海は荒れ、外へ出られぬ事があつた。雨戸をしめて今日は三人、一間に集つた時に、堅吉は言つた。『僕も大變お世話に成つたが、もう脚氣も好し、學校も始まつて居るから、東京へ歸らうと思ふ』これを聴いたお美代婆さんは、吃驚した顔で『それは寔に御名殘惜しい事で……しかし、御病氣が快く御成んなすツた上に、學校が始まつて居ますのなら、無理にお留め申す事も出來ませんが……』と何んだか言惡さうにして居る。堅吉も何んだか言ひたい事があるやうにして居る。流石は年寄で到頭お美代婆さんは切出した。『かうやつて貴郎が妾の家に御逗留なさつたのも、何かの因縁で御座いませうが、此上は如何かいつまでも御懇意に願ひたいもので……』『それは僕も望む處だ。實は僕は自分の家の樣に思つて居る、失敬ばかり仕ました』『妾も親類の息子が來て居る樣に思つて居ましたが……如何かまアいつまでも御懇意に願ひたいもので』と同じ樣な事を繰返して言つて居るが、未だ此他に言ひたい事が、如何もあるらしく、奥歯の奥の其奥の方に何んだか嚙〆めて居て吐出さずに居る樣に見える。『本統にねえ、貴郎の樣な御方を……』と、やつと言出して『お若いのに珍らしい貴郎の樣なお方を、親類に持ちましたら』と誰の樣にいふ。最う大概なら讀めて居るのだが、其處が堅吉で、如何も切出して好いのやら、惡いのやら、解する事が出來ないで、まご〳〵して苦しむ。『若しねえ、貴郎の樣な方に、柳を差上げましたら、どんなに妾が嬉しいか知れません』と思切つて婆さんは言つて、間違つたら串戯に仕ようと、いつもにない高調子で笑出した。堅吉は眞面目で、加之青筋を出さぬばかりに一生懸命の色をあらはした。怒るのかと思つたら『若し僕が貰ふと言つたら如何します』と言つた。これで安心して、婆さんも眞面目に成つて『それは二ッ返辭で差上げますが、何んと申しても田舎娘で

迚も貴郎方のこと歎息する。「いや、僕だつて今は書生の身分だから、今が今とは行かんが、大學の選科へ入學して、卒業するまでには、未だ三四年あるから、其間に十分教育したらいゝが、それでは待つのがいやだらう」と益々堅くなつて此所を先途と言つた。『いえ〱それが本統で御座いますなら、四年は愚か、五年が十年待ちました處で、柳が二十四、好しや妾が七十に成りましても、お待ち申して居りまする」と乘地に成つて答へた。

「本統に呉れますか」とあらたまつた。あまりにあらたまつたので、お柳はじろ〱堅吉の顏を見て居る。否やがあつたもんぢやア御座いませんと、お美代は勇む。「本統に呉れますか」『此方から願つてもない事で‥‥』『それなら僕が出世するまで、しツかりとお婆さんにあづけておくよ』

もつと談判が手間取れる、いや談判を開くまでには至らずして止むであらうと思つて居た堅吉が望外の返辭を得たので、何んだか力拔けがして、これで大丈夫か知らんと後の事を案じて、ぴしり〱と駄目を押して『しツかりとあづけたよ』といふ言葉に力を入れ、力を入れ、入れらるだけの力を入れて繰りかへした。

## 七

扨ていよ〱堅吉は樂しかりし逗子を見捨て、東京へ歸らねばならぬ。手垢の附いた算術書や、クリスターの代數書、セウブネーの幾何學等を、鞄へ詰めて、逗子の勉強の記念なる駿河半紙の横帳、多くは潮頭樓で書散らしたのを、これもすツかり疊込んで、奇怪がられた綿入衣服すら鞄の中へ納めた。尙此他にはお美代が勸めてお柳から呉れた美しい樣々の貝殼である。それも綿入の中にくるんで、音のせぬやうに、碎れぬ樣に、さも〱大事に仕まつてある。これで一寸歩きぜえのある停車場まで、お美代婆さんとお柳とに送られて、いよいよ堅吉は出立した。其鞄は婆さんと娘とが代る代る持つて呉れた。堅吉は停車場で其なつかしきお柳の手に重かりし鞄を受取つて持つ時まで『しツかり預けたよ』といふ意味の言葉を、いろいろの言方で絕えずあらはして居た。停車場では流石に人が居るので言はなかつたが、尙其心配氣なる相は、其事をうるさくも表して居た。

切符を買ふ。汽車は横須賀の方から來る。人々は爭うて改札所を出る。堅吉は一番遲く出て、出ても振向いて二人を見ては、言ひたげにして居た。終にもう再び言葉を交す間もなく、汽車に乘込んだ。せはしく汽車は出發した。なつかしき海も濱邊も家も人も瞬く間に見えなくなつた。もう他の景色は堅吉の眼中に入來らぬ。恐ろしく考へ込んで了つた。お柳は許嫁の死んだ娘に似て居る、但しそれは外面だ。A若しBならばCはDなりと軌範定理の假定と終決では、如何しても幾何通りに確定が出來ぬ。さりながら、全くお柳が我を思ふの力を有して居らぬとも、我と婆さんとが相懷ふの和で打勝つ事が出來るだらう、なぞと、そんな事ばかり研究して、來がけには下等室の押合ふ中をも厭はずに、二次方程式をカルタニスの解法で遣つて、其運算の厄介なのを苦しんで居る内、程ケ谷の隧道へ這入つて吃驚したといふ熱心は、何處へやら行つて了つて、微分積分でも解し得られぬ『戀』の一字に迷つて居て、大船の乘かへを知らなかつた位。

東京へ歸つて、櫻川町の下宿屋に落付いても、三四日は此通りであつた。近藤さんは逗子へ行つて、脚氣は快くおなんなすツたかも知れませんが、他に病氣を持つて入らツしやりはせぬかと、女中などは言つて居た。

が、再び學校へ通ふ樣に成つては、又元の勉强家に復した。或は元に何倍したかの勉强家に成つた。机の上には美しい貝殼が置いてある。

越えて一年、首尾好く大學の選科へ這入れた。其休暇の中、堅吉は又逗子へ行くべく新橋から發した。脚氣の爲めではない、勉强の爲めでもない、前夜銀座の勸工場で買つた、かんざしと半襟とを持つて。但し年頃はこれ〳〵、其年頃に似合ふのは、どんな物がよいかと店番に尋ねた揚句の果である。

## 八

心配する程ではなかつた。お美代婆さんは、しツかりとお柳をあづかつて居た。加之お柳をして堅吉を慕はしめるべく馴らされてあつた。彼の金釵と半襟とを見た時には、別してお柳は喜んだ。

見晴しの好い一間で、三人鼎座に成つて、いろいろの物語。一年間の出來事を、彼語り、此語り、却々盡きなかつた。しかし其内に、堅吉は斯ういふ事を知つた。今年も亦彼の潮頭樓には、薄井巖が來て居る事。仔細あつて、木蔭の茶屋は出さぬ事、此二件である。何故水茶屋を出さぬかといふに、これは薄井に關係して居るので、今年も潮頭樓へ薄井が來るや否や、彼のあばずれのお鐵が來て、是非お柳を借りたいと言つた。それを斷つた結果は、潮頭樓から借りた金の催促と成つて、止むを得ず店を疊んだとの事である。實に彼の店を夏場張らなければ、一年中の生活がむつかしいと、酷く婆さんは苦心して居る處、堅吉の來たのは誠に幸ひなので。

如何したら此後が行れるかと言ふ問題に向つて、好い式を作らねばならぬ。けれども別に好い方法はない。唯只時期は少し早いが、一家二人を東京へ引取つて、自分も下宿を止めて、靜岡の親類が保管して居る、わづかばかりの財產——と言つても、いくらもない、家作が一二軒、それを賣つて貰つて、それと紡績會社から來る利子、それとで以て東京へおぼつかなくも一家を構へ、そして三年間理科大學の選科へ通つて、卒業したならば、何處かへ勤める。それから後は腕次第、勉强次第、それで一生埋木に成るか、大學者に成るか、此二ツだ。妻子の系累が出來ては、得て大學者に成りにくい、況んや書生中から一家をなしては、末がおぼつかないと思はぬでもないが、さりとて如何しても彼のお柳を見捨てる事が出來ないので、大學者に成らなくつてもよい、如何でも好い、彼と夫婦に成つて食つてさへ行かれゝば好いといふ極端まで考へ込んで、一方から薄井といふ惡魔に何んとなく、追掛けられるやうに思つて、急いで以て二人を引取る事に決定した。

これほど迄に、熱心に、堅吉はお柳を想つて居る。これをお美代婆さんに話した時に、その喜びさ加減といふものはなかつた。それに如何いふものか、其喜びの中に、悲しみを含んで居る。此疑問は初めて堅吉に解し得らるゝの時期は來つた。

『貴郎、本統にお柳を奥樣にして下さいますか。貴郎、本統で御座いますか』とお美代はあらたまつた。今更何故あらたまつたのか、堅吉は不思議な顏をして『お婆さん、それが如何したね、虚言も本統もないではないか』『えい、あまり嬉しう御座いますから……ですが、貴郎はお柳の身上を御承知の上で御座いますか……いや、それは御存じではありますまい。御存じないのを此方からも申さずに、話が纏りました後で、どうのかうのといふ事がありましては、誠に妾が申譯がありませんから、斯うなりましたら何もかも申しますが、それをお聽きなさいまし

た上で、如何かおいやなら御遠慮なく、お斷りなすツて下さいまし。決してお怨み申しは致しませぬ。お斷りなさるのが、これは御道理と思ひますから……』と言ひさして、はら〳〵と婆さんは泣いた。そして急いで涙を拭きながら『お柳、お前はあちらへおいで……』と言つた。けれどもお柳は去らない。再三再四言つた時に、お柳は立上つて行つた。次の間で手習を始めるべく机に向つて硯を取出した。正しく其手本は、此呑婆さんの注文に應じて、堅吉が贈つた帖だ。假名の手本だ。

お美代は殆ど顔を得上げないで『まことに妾の口から此樣な事を申すのは、申し惡い事で御座いますが、柳の父と申しまするのは、もう仕方の無い呑太郎で御座いましたが、柳の母が亡くなりましてからと申すものは、一層酒喰ひが增長致しまして、家も何も皆呑んで了ひましたが、揚句のはてには……飛んでもない事を……』と此所まで言つて咽んだ。

『お柳が十三の時で御座います、彼の潮頭樓へ手傳ひに遣つて居りますと、貴郎、あるお客が、可哀さうに、あれが目に留つたと見えまして、あられもない事を言出しまして、宿の主人から親父へ掛合ひまして、未だ十三の小娘を、無理に貴郎、おどかしまして肩揚を綻びさしたので御座います。親父は急に參拾圓といふ大金が這入つたので、大喜び、彼は何も知らないもんですから、到頭言ふなり次第に成りまして、一生汚れた身體に成つて了ひました。其時妾さへ居りましたら、そんな事は致させるのでは御座いませなんだが、如何も殘念でなりません』と手拭を額へ當てて咽び入つた。

堅吉は慄然とした。思はず立上らうとして、又坐つて、腕を組んで、一時に悲歎の息を吐いた。實に鋭利なる槍の穗先で、腦天から足の裏まで貫かれたかの如く感じて、少時は茫と成つて居た。其茫として居る中から『腹が立つ』『殘念だ』『悲しい』『情けない』『如何したら好からう』『仕樣はなからうか』なぞの念が、一皮々々生じて來て、判斷力を包む。其內で一番厚い皮が『情けない』といふ念である。次いでは『如何したら好からう』である。

實に情けない親父だ。如何も情けない親父だ。して〳〵此花の如く美しく、雪の如く淸い少女を誰が蕾の內に散らしたか、未だ積らざるに汚したか、惡むべき天下の罪人、大罪人、社會の大罪人、極重惡人、大々惡魔、未だ情を解せぬものを、神聖の戀愛でなく、一時の好奇心で、金子の力で、犯したとは、獸心、人面、獸心、寸斷に切りさいなんでもあきたらぬ。如何してもあきたらぬ。金力でバアヂニチーを破る、此位慘酷は他に決して無い。人あり、刀を持つて人を殺し、腹を割きて其腸を摑出し、眼をくじりて、其眼球をゑぐり出し、其頭を立割りて、腦味噌を出したりとせんか、それよりも、我は、金力を以て處女の操を破りたる者を、一層の上に慘酷の度を置くべしと、堅吉は思詰めた。餘所の話、知らぬ少女を、これ〳〵に仕たと聽いてさへ、此位に思ふべき堅吉、それがおのれの生命を犧牲に供してまでもと思込んで居るお柳の上に於て見る、苦しさ、つらさ、腹立しさ、味氣なさ、情けなさ、といふものは、實に非常で、其非常の結果として、此所に居たゝまれない樣になつて、不意と飛出した。しかせざれば堅吉は、確かに卒倒する場合であつたのだ。

夜だ。外は闇だ。潮頭樓の間每々々には燈火が綺麗に輝いて居る。海白く、空黑く、今にも夕立が來さうで、遠雷か、それとも潮聲か。ぴかり〳〵と電光は山の後で雲をつんざく。寒い程涼しい晩だ。堅吉にはそれが蒸暑く感じられて、身體の置所が無い樣になつて來た。海へ飛込まうかと思つた。何度となく海へ飛込まう

かと思つた。しかしながら斯う思ひながら、足はそれに向はず、いつか知らず小山の麓へ行つた。其所は木蔭の茶屋のあつた處、今は何もない。唯山から引いた噴水が、寛に木の葉でも詰つたのか、以前程の勢ひはなく、只ちよび〳〵と吹出して居る。以前は濡れて居た岩、今は噴水が達かぬので、晝間の日に焦けた餘熱が冷めぬ岩、これに彼のお柳が腰を掛けて桃を手にして居た事もあつたのだ。堅吉はこれにどッかと腰を掛けた時に、少しは落付いて物を考へる事が出來るやうになつた。

如何しよう、如何したら好からう、お柳を貰ふまいか、止して仕まはうか、お柳より他にお柳と寸分違はぬ女があれば好いが、無い。死んだ許嫁とお柳とがいくら好く似て居ても、どこか違つて居るだけそれだけお柳以外にお柳はない。お柳より他に眼中女がない。其お柳には如何にしても消滅しがたい汚點がある。知らねば格別、知つて貰つて如何であらう。口惜しい、其汚點は、決して消滅しないのである。何もそんな者を、好んで、急いで、女房にしなくつてもよい。といつて他にそれなら氣に入つたお柳同樣な女があるか。無い。決して、無い。それと思込んだら眼中他に女が無い。世界に唯一人の戀人であるのだから、有るべき道理がない。一生孤獨で暮すなら格別、妻とするなら彼のお柳が好い。彼の笑ふ處が好い。こせつかぬ處が好い。何を言つても怒らない處が好い。言葉の通りに從ふ處が好い。何がなしに好い。如何しても好い。今日まで缺點はなかつたが、初めて聞いて驚くべき缺點のある事を知つた、其缺點――先づこれを研究せねばならぬ、其上で我はどちらかに極めよう、斯う堅吉は考へた。

そして出來るだけ辯護すべき方面から、お柳の身上を研究した。自分では公平のつもりで。

お柳は未だ稚かつた。好しや身體は發育して居ても、實に通常の腦力は備へて居なかつた。親父が惡かつた。端の者も惡かつた。第一望を屬した者が惡かつた。お柳は何も知らぬ間に汚點を附けられたのである。不憫な者である。今は其おのれのきず物である事を知つて謹んで居る。老母は殊にそれを恥ぢて居る。何んとそれを娶るのは義俠ではないか。又我がそれほどまでに思うて居るのを彼が知つたら、此後を如何に彼が謹むであらうか。必らず前の汚點をつぐのふだけの事は爲るに相違ない。イヤそれは爲ずとも好し、再び他の汚點を印する事は決してあるまい‥‥此所まで考へて堅吉は、少時ためらつて、彼の數學の難問題を考へる時の樣に、兩手を持つて頭を抱へて、うん〳〵と呻つて居た。忽ち悟る處があつたか、岩から離れて立上つた。宛然其響きが傳はつて、然るかの如く、木の葉で出の惡くなつて居た噴水の口は、更に勢好く水を數尺の高さに吐始めた。

『いや、これは考へたのが我の過失だ。好しやどんな汚點がお柳にあらうとも、構はぬ。愛の極はそんな事で躊躇するのではない』と堅吉は口走つた。閃影瞬一時、今まで心づかなんだが、不意と飛出した堅吉の行方を心配して、お美代婆さんはお柳を此所まで從はしめた。お柳はだんまりで最前から此所に來て居た。今の光で堅吉は認めた。そして吃驚してたじ〳〵となつた。

『近藤さん、御迎ひに參りました』とお柳は言つた。堅吉は走寄つて、其兩手をしッかりと握つて屹と其顔を見詰めた時に、又もや一閃、ありありと其天使の如き優しい顔は照された。

『お柳さん、僕はもう極めた。お前を引取る事に極めた。何んにも言はずにお前を女房とするだけそれほど僕はお前を思つて居るんだから、其つもりでお前も來て呉れねばならぬ。そんな事もあるまいが、僕の家へ來てから萬一の事が

あつたなら、好いか、そんな事は決してあるまいが、僕は堪忍仕ないよ」と言つた。折悪しく電光は達しなかつたが、此時たしかにお柳の目には感謝の涙が溢れて居たらう。無言で只お柳は立つて居る。堅吉も兩手を握つた儘立つて居る。

此二人は恰も連理の樹の様に立つて居たが、噴水の飛沫の他にぽつり〳〵と落ち掛つた夕立の爲めに、二人はいつまでも此所に立つては居られぬ。余所が降つた土氣の香と、前ぶれの風とに送られて、家へ歸つた。間もなく恐るべき大雷雨は來つて、三人は一ちゞみに蚊帳の中へ入つて了つた。

## 九

牛込神樂坂の近傍は物價の安き處とて、軍人、官吏、書生など多く住む。近藤堅吉は、初めて一家を作す爲めに、此邊で貸家を尋ねた。新小川町に適當なのを見出して、櫻川町の下宿から、自分の荷物を運んだ。世帯道具は何んにもない。お美代婆さんとお柳と三人で出かけて、勸工場でぽつ〳〵と買ふ。隣家の家で米屋を聴いて、月拂ひの件を極めて居る間、酒屋の御用は、すかさず帳面を持つて來て、得意先きをこしらへるに拔目はない。魚は毘沙門前の魚屋に夕河岸が着きますからそれを買ひに行くと御恰好で御座いますと、井戸端で向うの女中の注意するのを聴いて來て、漁村を離れた不自由を二人共に今更感じる。お美代は兩三度東京へ來て知つて居るゆゑ、然程にまごつかぬが、お柳は何を見ても珍らしく、窓から一日外をながめて暮して居る。堅吉は此所から毎日大學へ通ふ。三年間切つて嵌めた學費やら、家の生活費やらで、それが經過すれば賣つた家の代はなくなり、紡績の僅かの利子ばかり當にする勘定。一々それは御手の物でちやんと計算が出來て居る故に、お柳をして十分に東京見物をさせ、又好む物を着せ味はせる餘裕はない。勿論、お美代もお柳もそれは承知であるので、後の出世を樂しんで居る。堅吉は何處までも書生で、短い袴、古い帽、少しも扮装に構つては居らぬ。友人も亦堅吉が便宜上一家を持つた、それは兩親がないゆゑ、傭婆さんをした、其婆さんは美しい娘を連れて居るといふ事を知つて居ても、其娘が後には堅吉の妻に成るといふ事は知らぬ。さればお柳は東京に居て東京を知らず、牛込に居て只神樂坂の縁日のみを知つて暮して居る。堅吉は自分の勉強の他に、お柳の教育をせねばならず、隨分忙がしい。習字をさしたり、讀書を教へたりすれど、如何もはか〳〵しく進まぬ。一層縫物でも稽古さしたらと、近所の教授所へ遣るに、これは如何やら斯うやら針が運ぶので、此方を重にして、他は時々にして居る。

お柳は如何も東京より逗子の方が好いやうに見える。次第々々に面白くなくなつた。けれども、末が樂しみだと思うて、口へも出さず、言はゞうから〳〵と日を暮して行く。婆さんは安心して暮して行く。堅吉は無上の快樂を以て暮して行く。變化が無いとて、恐らく此位變化の無い一家はない。極めて穩かに三年を過して、堅吉は理科大學の選科を卒業した。

此時あらためてお柳と堅吉は結婚の式を擧げた。お美代婆さんの喜びはたとへるに物がない程。堅吉の喜びはそれよりも何幾十倍である。お柳とても喜ばない事は無い、末の樂しみが來つた時と思つた故に。

それにつけても彼の汚點さへなくば、と浮んで來る堅吉の胸には、それをしも忍んで、我は汝を娶つたといふ――何も恩に着せるのではないが、それが説明したくてならぬ。説明せねば、否、説明しても十分お柳には其所のありがたみ

が分つて居まいと思はれてならぬので、時々其事を言ふ。夫婦と成つてからは益々言ふ。お柳はそれを聽くのを嫌つて、いつも逃げて了ふ。實に二人の仲の一點の雲は是だ。愛の度が高まれば高まるだけ、彼の事を悲しむの度が高くなる。其事をうるさく言はれる度に、お柳の方では其恥かしいといふのが段々と馴れて來て、然程に感じなくなるのは、扨ても止むを得ぬ結果か。此樣にして、一月立ち、二月過ぎるに、切つて嵌めた家の代は、全く盡きて、紡績の利子とても日清戰爭の影響で、少ない上に餘程少なく、望む口はなくて、浪々で居らねばならぬ。學術の研究どころではない、家内三人の口を糊す方法を講ぜねばならぬ。末、末、と、末に重きをおいて居たのに、此樣では困つた事と、婆さん少しく考へぬでもない。しかし、引目のあるお柳の身ゆゑ、これでも結構と思はねばならぬと、年寄だけ勘辨も着けるが、お柳は何となく面白くなくて、未だ東京見物さへせぬとつぶやく事もある。

堅吉の友人が勸めるには、數學に達して居るこそ幸ひ、陸軍參謀本部の傭員となつて、遼東半島の測量隊に加はり、彼地へ行つて來ては如何か。歸つて來るまでには、天文臺の方の口が出來ないでもなからうとの事。

堅吉は決心して、それに從つた。則ち最愛の妻と妻の祖母とに別れて、清國へ行く事になつた。一家を疊んで、歸るまでは、二人共逗子へ行き、田舍で生活して居る方が經濟といふので、然う極めた。幾度となくお美代に向つて『しツかりお柳をあづけましたよ』の言葉を繰りかへす事、彼の逗子の停車場で別れた四年前の時と同じであつた。別してお柳には『お前の汚れた身體を知つて居ながら、お前を嫁にした、それほど、我はお前を思つて居る』をつゞけて『もしも留守中に不都合があつたら、其時は決してゆるさぬ』を噛んで含める如く言つた。

此時は流石にお柳もしみ〲と嬉しく感じた。蒼蠅いとも思はず、道理に責められて、泣いて、其留守を堅固に暮すべく答へた。

## 十

昔の家は人手に渡つて居る。他の小家を借りて逗子の生活を續けた。お美代にお柳。昔馴染の人々に顏を合せるのが何んとなく極りが惡い位。殊にお柳は東京へ行つて居て、東京の話の出來ないのを恥辱と心得て、たま〲人から話しかけられると、いつも此返辭にためらつて居た。

玆に不幸なるはお美代で、堅吉から堅く託されたお柳を、見捨てて、名もなき老の病のためにぽツくりと逝つて了つた。

お柳の悲しみ、悲しみよりは驚き、如何して好いやら、うろ〲として居る。知合の人々は來て呉れても、それは手を貸して呉れるばかりで、入用の方の相談對手とては一人も無い。良人は戰地に在り、急の間には合はず。殆ど途方に暮れて居た。

突然遣つて來たのが彼のお鐵で、虛言か、眞實か、涙をこぼして、いろ〲口上を並べた末に、一段聲をひそめて、若しお金子が入るやうなら、妾の方で都合して上げようから、遠慮なしに言へとの甘言。此急な場合で、お柳は助け船の好惡を問ふの暇はない。迂濶と乘つた。直ぐと十圓間に合はされた。喜んで葬送を出して、これもお鐵さんのお蔭とお柳は酷く喜んだ。折も折、此節又彼の薄井巖が潮頭樓へ來て居る。お柳はそれを少しも知らぬ。お鐵は又それを少しも語らぬ。

初七日の晩、一人さびしく佛壇に向つて、御念佛を唱へるでもなく、唱へぬでもなく、物案じの絕間々々に、お線香を上げて居るお柳。行

末を考へれば、只何となく悲しくなつて、早く良人が歸つて來れば好いと、身の淋しさをかこちつ、又は祖母の存命中の事など懐出しつして居る處へ『御免なさい』と入來つたのは彼のお鐵だ。斯ういふ晩には、誰が來て吳れても嬉しいので、死なれた婆さんが嫉ふ程お柳はお鐵を厭がりはせぬ上に、困つた場合に十圓といふ金子を工夫して來て吳れた女の事ゆゑ、決してなほざりには取扱はぬ。

『時にお柳さん、此間はあんな場合であつたから、別に委しくは話さなかつたが、それ、お前さんに用立てたお金子の事さ、彼は少し仔細があるので、急に入るといふのでもないから、お前さん無理をして算段をするには及ばないよ。それを一寸言つておかうとは思つても、知つての通り此頃は忙がしいものだから、つい今日まで來なかつたのさ』『如何もお蔭で助かりました。いづれ家のが戰地から歸りましたら……』

『いゝえ歸つたからツて、歸らないからツて、そんな事は如何でもいゝやね。だが、お前さんが、彼の人を家のと呼ぶ樣に成つたとは、實に不思議だねえ。彼の人との最初からを知つてるのは妾だが――妾も考へて見ると、今の處に隨分永く足を留めて居るねえ。彼家の内の女中では、古狸だよ。おほゝゝゝ、けれども古いだけお客の中にも知つた方が出來て、お鐵〱とおほきに持てるのさ。知つた方といへば、彼のお柳さん、そら、あの、そら、お忘れぢやアあるまいね、あの薄井さんねえ』と切出した。

『薄井さん』とお柳は問返した。『あゝ薄井さんさ、彼の方もねえ、以前とは違つて大層勢ひが拔けてねえ、年の所爲とは言ひながら、もう〱昔の樣な元氣は無くなつたよ。何さ、何もそんなに極りを惡がらなくツてもいゝやな。妾だもの。今度も來て入らッしやるが、丸で人が違つたやうに成つておいでなさるよ。それで、此間もね、お前さんの話がまア出たとお思ひな。さうすると大きな溜息を吐いて、アヽ我は惡い事を仕た、飛んでもない事を仕た爲めに、彼の子は一生きず物で暮さす事かと思つたら、でもまア好いあんばいに、そんな好い處へかたづいたツて、大層喜んでおいでなさツたよ』と言ひ掛けて、ぢッとお柳の顏色を見入つた。『然うですか、薄井さんは入らッしやツて居ますか』と冷淡に答へた。一寸は儀式的に極りの惡い顏も見せたが、後には更に氣に留めない樣子。お鐵は重ねて『お前さんが此頃、此方へ戾つて居る事や、お婆さんのなくなつた事をお話し申したられ。さうかい、さぞ好い細君に成つて居るであらう、一度逢つて見たいものだなんて言つて居らッしやツたよ』と言つて、又同じく樣子を窺ふと、お柳は相變らず冷々淡々『然うですか』と輕く答へた。此石動くべきか、動かざるべきか、お鐵は判斷に苦しむ的擧動で、其てれかくしにお先煙草と出かけた。

其處に話は飛んだ處へ走つた。『妾もねえ、お婆さんは此通りだし、家のはいつ歸つて來るのやら分らないし、斯うやつて一人ぼッちに成つて、本統に心細くツて……』と相談柱に立てかけた。

失策つた、取逃しかけたと、大いに驚いた。お鐵はこれでは成らぬと話口を捕へて『ほんとに心細いだらうねえ、お前さんを一人にして逝つたお婆さんも邪見だが、全體旦那もあんまりだねえ……』と言つた。蓋し、これは、さぐりの針を一本打込んだのだ。

『本統ですよ、早く歸つて吳れゝばいゝんですが、困つて仕まひますよ』とこれは眞から困つたらしく言つた。お鐵は此所ぞと『全體お前さんは今の旦那を如何思つておいでだい』『如何つて、別に……』

正しくお柳は別に如何といふ深き考へはない

のである。善とも惡とも考へては居らぬ。唯良人だと思うて居るのである。如何つて別により、別に言ひ樣は無いのである。

もどかしがつてお鐵は眞向から切込んだ。

『如何だね、お柳さん、お前さんもお婆さんに別れて唯一人此所に居ても、何んだらうから、潮頭樓へ遊び半分、手傳ひに來たら好いだらうにねえ。それで以て旦那の歸るのを待つて居た方が、餘程好からうと妾は思ふよ』とこれから至極巧く理窟を合せて、如何してもそれが好い樣に說立てた。迂濶と乘る。締めたと喜んで益々說立てるお鐵の辯にくる〳〵とくるめられて、それぢやア何分と言ふ事になつた。

* * * * *

けれども流石に薄井の居る部屋へは行かなかつた。再三再四お鐵が勸めたけれど行かなかつた。後には手を引張つて連れて行かうとしたけれど行かなかつた。

* * * * *

十圓の出處は薄井からだといふ事をお鐵が明かした時に、お柳は閉いだ。此義理に責められて、止む事を得ず、薄井の部屋に行つた。

* * * * *

薄井が歸京する時に、停車場まで送つて行くべく、お柳はお鐵に引張られて行つた。

急に、東京見物に連れて行つて遣るといふので、無理無體にお鐵と薄井とに引張られて、汽車に載せられた。如何もお柳には、これを拒む事が出來なかつた。

## 十一

其留守に堅吉は歸つて來た。加之一度は東京へ着いた。けれども、お柳が薄井の屋敷に來て居ようとは、何んで知らう。急いで逗子へ來て見た。家は錠を下されて住む人無し。お美代婆さんは死んで黃泉の人、お柳は東京へ、誰と、何しに、其處は知れねど、行つて居る事は近所の人から聽いて知れた。不審で〳〵成らぬ。仕方なく引歸して東京へとも思つた。何んにしても解す可らざる事だ、何事でお柳は東京へ行つたらう、誰に誘はれて行つたのだらう、手紙を二三度出して歸りを知らしてあるのに、如何したのか。

遼東半島を彼方此方、幾多の困難を堪へ忍んで、測量の事業を終り、恙なく歸つて見れば此有樣、浦島が感に似て居る。

旅にやつれ、つかれ〳〵て、色も黑く、體は痩せた。其やつれ、其つかれ、それは片時も忘れぬ最愛の妻を見るの樂しみで癒すべく、歸つて來て見れば、老婆は死し、妻は居らぬ。

赫と上せて眼前の物を辨ぜぬ樣に成つた。好しや如何なる用向があつたにしろ、お柳が東京へ行つた事に就ては、一點のゆるす處が無い。見當り次第毆斃さねば腹が治まらぬ樣に成つた。

直ぐ東京へ引換して、心當りを搜さねばならぬ。自分がこれ程に苦勞をして歸つたのに、まア如何したのだなアと胸が張裂ける程癇癪を起して、又停車場へ立戻つた時は夢中であつた。切符を買つたのも、汽車に乘つたのも、全然覺えず。

大船の乘かへの時に、遇つた。それは向うから來た旅客の中に、お柳とお鐵とが——見る間にお鐵は姿を隱した。お柳は喜んで、急いで、此方へ駈けて來る、堅吉もづか〳〵と駈寄る、衝突した。突如お柳の胸倉を取つて捩らうとした。不圖人中といふ事に氣が着いた。捩れもせず、撲られない無念さを怒つた眼の恐ろしい光に加へて、ぐツと睨んだ。お柳は全く弱つて了つて、其弱切つた揚句が、如何なるものか、覺悟をした體だ。

此所では仕方がないと、乘移るべき汽車に二

人共乘らず。構外の茶屋へ行つて、二階の一間へ通つた。此間は無言であつた。

『如何したのだなア』と詰問の聲は顫へて居る。『寔に濟みません』と答の聲も顫へて居る。『如何したのだなア』『濟みません、妾が惡う御座いました』『如何したのだなア』と激して來た。『寔に濟みません』と言つて下を向いて了つた。其向いた處で、突如其髷を攫んで引倒しながら、五ツ六ツ撲つた。撲られながらも『濟みません濟みません』を口にして居た。

『如何したのだなア』と突放した時に又言つた。お柳は泣伏しながら『寔に濟みません』より他には言はない。それを言はないですら此位だ、其實を白狀したら殺されるだらう、殺されるのは立派に分つて居る、けれど、言はずにおけるものでない、言はさずには又置かれない、必らず問詰められるに相違ない、とは知れども、其問詰められるまで、如何も言ひたくない。惡かつた、惡かつた、皆自分が惡かつた、彼の汽車へ無理に載せられた時に、舌でも喰切つて何故死ななかつたらう。東京へ着いた時に、何故死ななかつたらう。薄井の屋敷へ入つた時に、何故死ななかつたらう。何故うか〳〵と東京を見物して來たらうか。まア如何してお鐵に引張り廻されたらうかと、今初めてお柳は目が覺めた。

『何んだな、これには屹度深い仔細があるのだらうな』と堅吉は言つた。終にお柳は覺悟を定めて幽かな聲で白狀した。『惡い事を致しました』

これを聽いた時の堅吉は、再びお柳の髮を攫んで、疊の面に摩付けたが、血の涙をはらはらと落して『好く聽け、お柳、我はお前を娶る時に何んと言つた。忘れたか、忘れたのか、これ忘れたのか。我はお前のきず物を承知で、それで女房に仕たぞ……もう其時に我の面は汚れて居るのだが、此上に未だ足らいで、今度の樣な、ちえツ、ちえツ、情けない事をして吳れたなア。我は何んの爲めに支那へ行つた。何んの爲めに風に吹きさらされ、雪の中に埋められて來た。皆お前を可愛いと思へばこそだぞ。これほどまでに我はお前を愛して居るのに、まア如何したら好いか。ちえツ、殘念だ、飛んだ事を仕たなア。我の愛が足らぬからかツ、我の愛が足らぬからか、情けないぢやアないか、情けないぢやアないか、天文學上何んの發見する處もなく、碌々として今日……測量隊と成つて支那へ行く、こんな意氣地の無い人間としたのは、誰だ、誰だ。意氣地を無くしたのは矢張我が惡いのとしても、あ、あんまり情けないお前の、今度の、お前の、今度の……』と男泣きに泣入つた。

殺されるよりは一層つらい此言葉。お柳はもう心が米顆ほどに縮んで了つた。身も共に縮んで消えて吳れぬかと祈つた。

如何して妾は這んなであらう、もう良人に殺されても仕方がないと自ら見捨てて、今更におぼえられる良人の眞の、眞の、眞情、これもまア何故早く知らなかつたか、妾は馬鹿だ、何一ツ取柄の無い馬鹿だ、早く殺されて此苦しみを救はれたいとまで思ひつめた。

堅吉は死人の如く、眞青に成つて、考へ込んで居た。お柳も其通り泣沈んで居た。

『仕方がない、もう仕方がない、これから此不愉快を忘れる爲めに、直ぐと箱根へ行かう。久しぶりでもあるし、旅のつかれもあるから』此語は一時間餘も過ぎた後、如何にも輕く出た堅吉の言葉。

意外も意外、大雷鳴かと思ひの他、優しい琴の音だ。思はず知らず、お柳は顏を上げて『それでは妾の罪をゆるして下さいましたの』『仕方がないから、もうゆるしたのだ。さア〳〵今

變の列車で箱根へ行かう」と言はれるだけ猶更面目なくて、お柳は頓に立ちも得せず、又も袖に溢れる、それは感謝の涙!!!

## 十二

汽車は來た。國府津までの切符を買つた堅吉お柳の二人は、これに乘つて大船を發した。まア好かつたとお柳は安心した。

國府津から鐵道馬車に乘つて、酒匂、小田原を過ぎ、湯本で降りた。福住に二三日逗留して、瀧の前や早雲寺などへ遊びにゆき、それから塔の澤にも二三日、宮の下、底倉、堂ケ島と、箱根の七湯は更なり、大地獄、小地獄、蘆の湖などへも遊び、旅のつかれと彼の不快の念とを勉めて忘れるべく仕て居た。一言も大船での事を口に出さぬのみか、つひに見た事のない堅吉が此頃の嬉し氣、お柳は益々心を落付けて、もう／＼これからは良人を大事に／＼仕ませうと心に期して居た。

此箱根の生活は二人の未だ曾て味つた事の無い極樂の境であつた。天人天女の逍遙であつた。

でも時々思出したやうにお柳は考へる。彼の大罪を本統にゆるして下さつたのであらうかと。

けれど、良人が餘念なくおのれを愛する處を見ると、全くゆるして下さつたに相違ないと安心する。其安心は又時々破れるが、破れた跡から繕うて行く。離縁されるものなら大船で。殺されるものなら彼時に。それがさうで無いのを見ると、全くあの罪はゆるされたのだ。

堅吉は眞に彼の大罪をゆるしたらうか。

箱根に一月の餘も居て、それから、小田原、大磯の海水浴を經て、江の島まで來た時には、戰地で貯へた金子が大方盡きた頃であつた。それは、お美代婆さんとお柳と三人、平和の生活を續けようと思つて溜めたのであつた。

其金子の盡きかゝつたのも、戰地に携へて行つた護身の短刀、それを鞄の荷物の底に隱して持つて居る事も、お柳は知らぬ。

江の島の龜の屋といふ宿屋に泊つた。それは寔に見晴しの好い家で、七里ケ濱、稻村ケ崎、鎌倉の入江、逗子も見える。もう逗子へ歸つたやうなものだ。逗子の夏は昔、今は江の島の夏である。

此所にも二人は三日ばかり逗留した。曾てお柳が拾集め、堅吉も手傳うて選分けて遣つた貝から其簪や細工物を賣る店が澤山にある。今昔の感に堪へぬ。

翌日は逗子へ一先づ歸るといふ晩、珍らしく堅吉は酒を呑んだ。鮑の水貝、黑鯛のあらひに米海苔のあしらひ、酌はお柳の優しき手。

酌を仕ながらお柳は、行末の事を二言三言問掛けた。それは極單純な問題で、逗子に永く居るか、東京へ行くか、それから如何して暮して行く、などであつた。

堅吉は醉つて居るのか何か、これには答へぬ。『まアいゝ／＼』と蒼蠅がつて、連りに酒をがぶがぶと飮んだ。軈て堅吉は立上つて、これから童ケ淵の方へ散歩に行かうといふ。月は好し、涼しくはあるしと、頻りに勸めた。お柳は如何いふものか、お止しなさい、と言つて、如何も行きともない風情、堅吉は無理に引張つて出た。

＊　＊　＊　＊

堅吉は眞にお柳の罪をゆるしたのか。然らず。大船に於て、もう腹の中で宣告を仕た。それは死刑。

今日まで手を下さぬのは、彼が遼東半島で苦勞に苦勞を重ねて居る間、一日片時も忘れはせぬ、それはお柳と箱根へ行つて、一月ばかり樂々と暮して、遠征の疲勞を休めようといふ理想、それを實行せんが爲めであつた。今日其實行の

終局に於て、いよ〳〵死刑を宣告仕ようと決心したのである。

月は好し、風は涼しい。二人は宿の同じ模樣の貸浴衣で出て行つた。堅吉はお柳に知らせず、短刀を持出した。お柳は、今自分は殺されに行くといふのを知らぬ。團扇を持ちてうからうからと歩いて行く。其後から堅吉は、血走つた眼をして歩いて行く。

堅吉はお柳が惡くつて〳〵成らぬ。それは世の常の惡さとも違つて、不憫さ可愛さが混じて居る惡さで、まア何故あんな事を仕て吳れたらうといふ感を含む事多しだ。死刑――それは憤怒の極ではない。矢張愛情の極である。犯した罪は一生不滅、これも無敎育の弊、彼は我が思ふ程の大罪とは思つて居らぬ。全く罪を犯しても、それを知らぬ如き極めて平氣な心で居る。我から責められて惡いと知る。詫びれば其罪は消えると思つて居る。至極無邪氣？否、無能力である。それと知つて娶つたのが此方の失策。何んの彼の生れた漁村では、這んな事は何んでもないのであらう。故に殺す程の事は無いのであるが、只離緣して仕まへば好いのであるが、如何も其離緣して、手放して、人手に彼を渡す、假令ば薄井の如き奴に渡す事が、如何も出來ぬのである。と言つて、罪を犯した彼を矢張妻にして置く事は出來ぬのである。彼が再び薄井に汚されたといふ事、それから來る痛苦は、迚も我をして此世に居るに堪へざらしむ。何故彼等の惡計に載せられて、うか〳〵と東京へ行つたらうか。齒痒い樣な。如何も〳〵齒痒い樣な、一口に言へば、唯情けない事をして吳れたお柳。殺しでもせねば腹が癒えぬ。それは憤怒ではない、不憫だからだ。我も死ぬ、彼を殺して死ぬ、心殘りは無い。それで初めて人間の安心が出來る。斯う考へながら――いや疾にもう考へて居たのを再び今繰返して歩んで行く。

中津宮の石段を上つて、それから外人の住んで居る屋敷の前を通つて、一遍上人成就水の石標のある處を過ぎて、山二ッから鐵の鳥居を過ぎる時には、堅吉の種々の感覺は最う失せて、唯只お柳をこれから殺しに行く、我も死にに行くといふ念より他には無い。

お柳は何も知らぬ。兩側の木の枝のこんもりと繁つて居て、貝細工店の今は一人も居らぬ處、月の光は飛々に敷石を照して居るのを踏んで行くので、お柳は心細くなつて、しツかりと堅吉の手を握つて、そして足下に氣を着けながら歩いて行く。

今は全く堅吉の足下は、しどろだ。上氣せて何事も辨じない。唯これからお柳を殺しに行くのだ、そして我も死ぬのだといふ事より他には知らない。幾度か石や木の根につまづき、倒れんとするを、いつもお柳に支へられて居る。丸でお柳に引かれて行くのだ。お柳は酒の所爲と思つて居る。

沖津宮を過ぎ、又石段を危くも踏んで、次第次第に降つて行く。夜は人の居らぬ茶店に入つて、お柳は休まうと勸めた。けれど堅吉は一語も發せぬ。ぐん〳〵と降りかける、お柳も仕方なく降りて行く。

童ケ淵、龍燈の松、三天の岩の上の石燈籠の處まで行つて、此所で初めて腰を休めた。

相模伊豆の山々は消えなんとして尙姿を留め、海の色はハッキリと明かである。月は浪に碎け、浪は岩に碎けて居る。風は天の星と海の篝火とを一緒に吹寄せ、離れて居る堅吉の袖とお柳の袖とを後の石燈籠に吹付けて居る。

『あゝ涼しい』とお柳は言つて、何んの心もなく海原を見渡して居る。堅吉は唯お柳を殺すのだ、おれも死ぬるのだ、と思つて居ても、思つて居るばかりで、今手を下すべき時であるとい

ふ事は考へて居らぬ。

一歩踏出した絶壁の下には、凄まじい音で浪が碎けて居る。益々耳がガン〳〵鳴出して、堅吉の思慮は全く無い。餘程しばらく此儘で此所に居たが、お柳は退屈して、恐る〳〵切出した。

『もう歸らうではありませんか、何んだか寒くなつて來ましたから』と。

言うたので、突と氣が着き、殺すも死ぬるも今だ——今だとあわてて短刀引拔いて、驚くお柳の乳の下を。お柳は一聲、風笛の鳴つた樣な悲叫を揚げて、堅吉の首にしッかりとかじり付いた。堅吉は突込んだ刀を深く〳〵倚力に委せて深く突込んだ。もうそれぎりでお柳はばッたりと岩の上に倒れた。堅吉も一緒に倒れて少時は起上らなかつた。

* * * * *

『我はお柳に何か言聽かせて、それから殺したか知らん、何も言はなかつたか知らん』起上つた堅吉は、斷うつぶやいた。そしてそれを考へ出す爲めに又少時沈んで居た。

浪も、風も、おとろへて來た。月も影暗く雲の中に隱れた。堅吉の胸中に氷の入つた如く涼しくなつて來た。お柳の死骸をつく〴〵見て『お前をこんなに殺すまで、愛の度が高まつて居たといふ事を一言、いふのを忘れたと思ふ。今我も後を追うて行く』と言つて未だ突立つて居た短刀を引拔いて、其血を其儘拭きもせぬ。我とわが喉を貫かうとした。

折から流星長く飛んで西方に消ゆ。

『おゝ、流星か‥‥彗星が地球と衝突すれば人類此時滅す。おそかれ、はやかれ、死は人の上に來るのだ』と放ちたるが、堅吉の最後の言。折重なつてお柳の上に血を流して死んだ。

（明治二十七年五月脫稿）

# 炭燒の煙

## 其一

高い山が重なり合つてゐる眞中に擂鉢の底のやうに成つてゐる平地がある。此處の又眞中を貫いてゐる川がある。白色の大石小石が之も亦重なり合つてゐる其間を藍の如き水が潛つて流れてゐる。其行方は何處だか、いづれは里へ出て、それから先きは海へ入るのであらうけれど、四面は山だ、それは〳〵高い〳〵大きな嶮しい山々で押包まれてゐるのだから、何處を通つて行つたら里へ出られるのであらうか、水の前途が案じられる。

此川の眞中に島がある。四面は白色の石。これは一端目に立つ眞黑な岩で成立つてゐる。此島の四面は枝も根も十分に張つてゐる老松で繞らされてゐる。其眞中には少からぬ櫻が生じてゐる。

斯かる山の中の川の中の島の中の松の中の櫻、これが春は花咲き秋は紅葉した時の奇觀といふものは實に繪にも未だ見ぬ、話にも未だ聽かぬ、文の上でも讀んだ事は無い。芳野嵐山を說く人に見せて遣りたいのは此所の花である。

であるのに、此天下の奇勝を今日が日まで誰訪ふものも嵐のみ來つては花を散らし葉を落すに留るとは、實に以て殘念。是全く人が知らぬ故であらう。人の知らぬは道が無いからであらう。人の通ふべき道が無いからであらう。

唯一人此所に男がある。時々此川を石から石に飛んで黑岩の島に來る事があるけれど、それは櫻の花を見る爲めではなく、其枝を折つては薪木を拵へ、其樹を切つては炭に燒くのだ。無慘にも早や七八本は切倒して了つた。

が、切倒したのは皆若木で、一抱二抱の大木は悉なく遺してある。それは炭に燒くのに適しないからであらう。

遺つてゐる櫻は今を盛りと咲いてゐる。里の花は大方に散つた頃、思出したやうに咲いてゐる、青松白石の間にありて此雪か雲かとばかり美しい花の下に、おのれが切倒した木の切株、それに腰を掛けてゐる彼の男は、散りかゝる花瓣を面桶の中の米飯と共に搔込んで喰つて了つて、冠せ蓋に汲んで來てある川の水を苔も殘さずに飲んで了つて、松葉を拾つて亂杭の齒をほぜくつてゐるより他には餘念もない。もう出た山蟻が膝の上を這つてゐるのも、何んといふ鳥か綺麗なのがつい目の前に來て囀つてゐるのも、向うの岩の上に犬が來て尾を振つてゐるのも、石から石を飛んで股引を脫がずに川を渡らうとしてゐる一人の男があるのも、全く知らずにゐる風情。

山蟻に酷く股を刺れて、吃驚して、飛上つた時に、鳥は、飛んで去り、飛んで來たのは犬で、其途端に一番間が開いてゐる石と石とを首尾好く飛んで來た一人の老爺と初めて顏を見合して、又吃驚して『作爺か』

『おう、眞次や、和主の小家へ行つて見たら留守番の權猿がゐるばかりで、何處へ行つたか皆目知れずさ。人間なら敎へても吳れようが、三本足らぬ奴の事だからキャッ〳〵と齒をむくばかりで如何も成らず。これでは山中尋ねざアなんめえと思つてゐると、此奴目がの』と言ひながら、淺黃木綿の綴れの股引の間を後から前へ潛つては出で潛つては出て巫山戲てゐる犬の頭を

取捕へて、額の毛を逆さに撫廻しながら『此奴がの、連りに此方へ向いて吠えてゐるもんだから、又兎でも目付けたかと思つて、決死掛けながら此方を見ると、此所の島に和主の姿が見えたぢや。これで無駄足をせずに肝腎な話が出來るといふものだ。おツと此の株に斯う腰を掛けて、イヤどツことな、何、それには及ばない、手拭を敷いたから痛くは無いわな』

『滅多に來なさらぬお前が、我に用あり氣に御座らツしやツたのは、何んだか心配で成んねえ、此間の竈では切口の揃へやうが惡かつた上に目塗の泥が薄かつたか、いつに無い出來そこなつた。此度あの牛房炭は燻るだらうが、言はれぬ先きから遁つておきやす』

『これさ眞次や、そんな用ではない。作左衛門がわざ〳〵來るには、並大抵の事ではないわえ』

『はツて、あれでも無くば他に何んであらう』

『これ〳〵いくら首を捻つて考へたツて、それが分つたら不思議だ。えい、直ぐと言つて聽かして安心さして遣るわ。實はな、眞次、山主のそれ藤原の旦那がの、自分の持つてゐる山の中にそんなに好い處があるか。少々道が惡くつても我慢をして、一度は見に行きたいものだと言はツしやると、それお花見といふと錦畫で見たやうに思つてゐなさるおかみ樣やお孃樣が、是非妾達も一處に行つて見たいと言出されたぢや。馬鹿を言はツしやい、如何に山國にそだつた女だと言つて、木山岩山の高い〳〵峠を越して、道もろくすツぽう無い處を、如何して如何して行かれるものかと、旦那も留める、我も止さうと仕たが、なに、これまでに蕨取や茸狩で隨分嶮岨な山へ登つた事もあるから、ちツとも構ひは致しましねえときつい乘氣とは不思議さね。けれども考へて見ると無理も無いので、此櫻谷から見れば野々村は都だが、本統の都から見れば矢張仕方の無い田舍で、あれ程の大盡の内のおかみ樣やお孃樣だもの、物見遊山の仕たいのは當然。でも行く處の無いのに困じはててゐなさつた折柄だから、如何して如何して留るこツちやアない。到頭家内中總殘らず、足弱は山駕、酒肴は馬に積んで、行かれる處まで行つて、其所からは御歩行と、斯う極つたからには善は急げ櫻は散らない間にといふので、それでわざ〳〵前觸に遣つて來たのだ』

『へえい、それは何處へ御花見に行かツしやるのだ』と眞次は眞面目に問うた。其眞面目な顏は全くの眞面目なのだが、それは串戲だと作左衛門が取つて、少しく興を損じた體裁で『何處ぢやアない、とぼけたツていけねえ、そんな事は止して、これ、お出では翌日だぜ。此邊をかたづけて、好くその掃除をしておかなきやアいけねえ。我も手傳はうから、さア〳〵早く〳〵』と急立つた。

全く眞次は眞面目な顏で『作爺さん、我は何んにも知らぬわな。全體何處へ花見に行かツしやるのだ』

『それでは和主は本統に知らずか、此奴は可笑い、何處に花見に行く程の櫻があるものか。此所の事だわな、此所の櫻だアな』

『へえい、此所がわざ〳〵來て見る程の、へえい、そんな好い所かねえ』と合點が行きかねる語氣で眞次は言つた。

### 其二

不承々々に眞次は立上つて、作左衛門に急立てられながら、其用意をする事と成つた。それは土を堀り石を築いて早速の竈を造る事と、石から石へと飛ぶ川の間に松の丸太杉の丸太を持つて來て間に合せの橋を架ける事とだ。

竈はなる程入用であらう。米飯を爨き、白湯

を沸かし、肴も煮るだらう、酒の燗も爲るであらう、これは分つた、が、何故飛んだら渡れる川の上に橋を架けねば成らぬであらうか、これが眞次には解し得られぬ點だ。

『作爺や、橋を架けるには及ぶまい、誰でも飛べるではないか、お前だッて飛んで來たぢやアないか、此犬だッてお前と一所に來たではないか』

『それは和主、野郎ばかりなら飛べもするが、おかみ樣やお孃樣には然うも行かねえ』『はて、飛べねえかの、厄介ぢやアねえか、そんな人達が何も此所へ來るには當らねえ譯だ』

『まア然う言つては困る…おう、それから、蔓すべりの坂の處だ。彼邊は萱だの芒だの、それから篠芽だのが去年枯れたまんまで繁つてゐるので、如何も通り惡いから、責てはおかみ樣の袖が引搔らない位に、刈るとも燒くとも仕て置いてくれろよ』

『おい…だが、如何も厄介な事だ』『まア然う言つては困る…それから彼の、花無し谷の中程だ。彼處に、上の崖が崩れたので一處に落ちて來た檜の大木だ。それが橫に倒れてゐるので、其下を潛る時にお孃樣の髷がこはれちやア成んねえから、彼も如何かして貰つて置かう。どッこい、厄介に違ひはないが、これもお互ひに使はれてゐる身分だから仕方がない。こぼしなさんな、其かはりにの、翌日はそれだけの骨折賃が出らアな。何んだ、そんな物は入らねえ、入らなきや我が貰つて遣らうよ。は丶丶丶』と獨笑つて獨しやべつて『どりや道が遠いから、暮れない間に歸ると仕ようよ。好いか、翌日だぜ、賴んだぜ、白犬よ、歸るんだ、えッ、歸るんだよ、眞次の辨當箱を嗅いで見たッて何があるもんか。それよりは雉子の二三羽でも啣へて來い、和主には骨を遣つて、肉は我が喰つて吳れるぞ。は丶丶』と又笑つて、又ぴよいと石を飛びかけたが『おッと、立派な橋が既う出來てゐらア』

眞次は作左衞門と白犬との行くを見送つて

『何んの事だ』

此語を留めて、眞次は本の無言に復した。それは既う話相敵が此櫻谷の平地には一人も居らぬからだ。厭々ながら眞次は此島を去るべく切倒した木を片付けて、斧と鋸とを腰に指して、辨當箱を斧の首に懸けて、筒袖の中に兩手を入れて、のそり〳〵と步出した。

蔓すべりの坂、花なしの谷、作爺が言ふ儘に仕て、其かはり言はれぬ處は其儘にして、我住む小家へと歸り着いた。

小家は、半分から上が眞黑な松林で半分から下は綺麗に兀げて居る山の、麓にある。前は彼の白石の川である。橫手には炭燒く竈が三ヶ所に別れてある。眞次が住んでゐる小家よりも、炭や薪木の物置の方が大きくて立派で廣い。

小家は松の木を其儘に荒繩や藤蔓で結んで、其上に杉の皮を無暗に載せて、四面は枯萱や枯芒を以て繕つてある。入口は一方で、風も光も此所から取るのだ。中は、盛上げたのか、切開いたのか、一段高く成つてゐる赤土の上に、三枚ばかり筵が敷いてあつて、それから、と言ひたいが、それ限りなのだ。何んにも無い、只圍爐裏の上に青竹を三本組合せて、それに鍋が釣つてある。鍋の蓋の上に五郎八茶碗が伏せてあつて、其上に竹箸が添へてある。こればかしだ。隅の方には筵屛風がある。此中には葛蒲團があるのであらう。

此所に住む者は實に眞次唯一人である。彼の他に猿が一頭ゐる。それは權と名を呼ぶ。眞次が人ならば、正しく權猿も人間であるのだ。眞次は權猿を動物とは思つて居らぬ。自分が召使つてゐる下僕のやうに思つてゐる。眞次が威張れるのは此猿に對してばかりだ。

眞次は今漸く小家に歸つた。權猿は嬉しがつて、縛られてゐる柱へ突如上つて見たり、逆さに成つて降りて見たり、其繋がれてゐる鎖のゆるす限り前へ出て、直立して、枇杷の實の樣な目の玉をぐり／＼させながら、怪し氣なる手つきで何か呉れろと振をしてゐる。

『えい、それ處ではない、眞次は忙がしいのだ』と言つて、炭の粉で眞黒に成つてゐる庭を一の竈の方へ歩んで、目塗の土の干きと外傍の冷とに注意して、それから、さぐり棒を取つて上の煙出の穴の處へ力一杯突込むと、白蛇の如き煙が昇天する如くに立上つた。

其處で又大いそぎで其穴を泥で塗つて了つて、同じく二の竈にさぐり棒を入れた。此所は煙が出ない。即ちそろ／＼と焚口の目塗を去り、其所から燒けてゐる堅炭を取出すべく始めた。眞次の手の皮は厚い手袋を嵌めてゐるのと同樣で、無造作にどし／＼と攫出す事が出來る。取出したのは一先づ庭へ並べる。俵に詰めるのは此後だ。

今日出る時に仕掛は既う仕てあつた。第三の竈に火を移した時に、日は餘所より早く山の端に入つた。夕霞か、それとも此竈の煙か、一面に近き山々を包んで了つた。

竈の方に十分火が廻つた時には、小家の圍爐裏にも薪木は燃された。それは夕飯を爨くのと、小家の中を照らすのと、兩用を兼ねてゐるのだ。

此時初めて眞次は權猿に優しい言葉を掛けた。『こら、權よ、翌日は又大變に忙がしいぞ。里から大勢厄介物が來るさうだから、今夜はゆツくり寢なければならねえ。夜半に又啼出して目を覺さして呉れるなよ。三の竈の目塗が濟んだら、最う直ぐと我は寢るから』

實に此夜は眞次が物思はざりし夜の最終であつた。例に隨つて夢も見ず、寔に心地快く曉まで眠つた。

## 其三

鷹に追はれてか數十羽の小鳥、雨降る如く眞次が小家の四邊に落來る羽音に目を覺して『あゝ寢た寢た、好く寢たわえ』と其儘のごろ寢の無造作は、其儘に飛んで起き、顏も洗はずに米飯を食つて、餘粒を權猿にも與へ、直ぐと二番目の竈を開いて、手も、足も、顏も、泥だらけ、炭だらけにしながら、物置から炭俵を出して、それに詰込み、口を括つては擔込み、此樣な事をして忙がしさうに働いてゐると、眞次がゐる時は自由の身の權猿も同じ樣に、空俵を擔いでは物置へ急々と運ぶ。折角眞次が出したものを、詰めもせぬのに擔いで行くので、酷く呵られて、又繋がれた。

斯うして晝頃に成つた時、眞次の背中をウンといふ程撲つた者がある。吃驚して振向いて見ると、それは作左衞門だ。これで思出した、今日は厄介物が來る筈だつたな。

『やい、眞次、何故來ねえだ。せめては木山の峠ぐれえまでは、御迎ひに來てゐても好いものを。既う何んだぜ、皆樣島へ來てゐなさるぜ』と、いふ聲の香は既う酒氣が滿ちてゐる。

眞次は默つて、目をぐり／＼させながら立つてゐた。

『さア旦那樣や皆樣に御挨拶に行かなきやア惡い。さア／＼我と一處に來な。行かなきやア惡い。手前の爲めには主人ではねえか』と無理に引立てられて、仕方なく、其炭に燻りたる顏、其泥に塗れたる手、其垢に光つてゐる衣服も改めず、何んだか天狗に攫はれて神隱しにでも成る樣な氣持で、眞次は尾いて行く。後には作左衞門の足が危いので、眞次の方が引立てて行く形と成つた。

黑岩の島が見える樣に成ると、其所で人が唄

つてゐる聲も聽え出した。丸木橋を渡るのがいよいよ危いので、心配をして、作左衞門を渡らせて、扨て櫻林の中に行つて見ると、醉つてゐるのは作左衞門ばかりでは無い、主人の藤原の旦那も、旦那の友達の村の衆も、連れて來た荷持實は傭人の誰彼も醉つてゐる。そして手拍子を打つては唄つてゐる。唄ふに連れては踊つてゐる。これ等は皆毛氈の上でだ。それを離れて向うの方では、女連が五六人で鬼ごッこを仕てゐる。赤い襦袢と赤い腰卷とは櫻の花の他に花を散らしてゐる。何んだ、花見に來たのではない、騷ぎに來たのだなと思うた。

其所で我は挨拶に來たのだ、から、それを濟ましたら直ぐ歸らうと眞次は思つた。けれどもそれは駄目で、突如彼はお燗番を命じられた。昨日自分が築いた竈に掛けてある鍋から、次ぎ次ぎと德利を引上げて持つて行かねばならぬ。好く飲む、好く醉ふ、いくら飲んでも同樣で、いくら醉うても亦同樣だ。いつまでお燗番をしてゐるのであらうか、眞次は甚だ迷惑した。此所に斯うして置かれるのは恰も權猿が柱に繫がれたと同じ感であらう。

鬼ごッこで夢中でゐた女連は、不圖此方を見た。そして眞次の顏に氣が付いた時に、くすくすと一人笑ひ出した。二人三人、後には皆笑ひ出した。眞次は彼等の何を笑ふのであるか、それを知らぬから、此方でもにこ〳〵と微笑で受けてゐた。あまりに女連の笑ふのが高いので、醉つてゐる男達も此方を見た。そして同じく笑ひ出した時に、山主の旦那はよろめきながら遣つて來て『こら、眞次、御苦勞だなう。和主も此方へ來て一杯遣らんかい。今日はお花見だ。思ふ樣醉つて吳れ』と言つた。眞次は無言で、只ぴよこ〳〵と頭ばかり下げてゐるので、益々笑聲は高く成つた。

よろめきながら又一人來た。それは作左衞門で、引取つて斯う答へた。『眞次は何んで御座いますよ、酒は飲みましねえ、煙草も吸ひましねえ』

『それでは大した辛抱人だの、今に藏が出來るだらう』と旦那は言つた。

『既う五ツ六ツ藏が有りまさア、だがそれは炭藏で、しかも旦那樣の御所有だア』と作左衞門は笑つた。

『今の若さに這んな山の中に一人でゐるさへ感心だのに、如何も酒も飲まず、煙草も吸はずとは、感心だ。皆よ、聽け、聽いて手本にしろよ。其上に眞黑に成つて年中炭燒をしてゐるとは、如何も感心だ、うむ、實に感心だ』と無上に賞める。これで少しは眞次も鼻が高く成ると、隨つて作左衞門の口が開きつゞける。『これも旦那樣、これの老父が仕付けで御座いますよ。死んだ多右衞門が旦那樣のお助けを受けた其御恩は、孫子の代までも忘れさせるもんぢやアねえと口癖の樣に言つてゐやしたが、それでで御座りやすよ。何しろ多右衞門が、煙草の火の吸殼から山林を三ツも燒拂つて、旦那樣に大ツかい御損を掛けたのも、格別お呵りもなさらねえで、矢張これ迄通り使つてお遣んなすツたんだもの、足もお宅へ向けては寐ねえ樣に仕てゐやした。朝起きるとお日樣の次ぎには旦那樣の方を拜んで居りやした。其伜でがさア、這んな山の中にゐても、だんまりで辛抱仕るのもこれア當然で御座りやすよ』と並べたてた。

『さうかの、いや如何も感心した、和主は辛抱人だ』と旦那殿は同じ事を繰返して言つて居る。其處へ橫から妻女が口を出して『酒も飲まず、煙草も吸はず、それで這んな山に住つてゐては、何がまア樂しみだえ』と問うた。

作左衞門は又話を取つて『眞次は何んでがすよ、自分が飲んだり食つたり仕るよりか、お猿に物を遣るのを喜びやすよ。それが樂しみで御

座りやすよ」と言つた。

最前から眞次は矢張無言で、にやり／＼と笑つてばかりゐる。少しづつでも笑つてゐなければ惡いものだと心得てゐるのでは有るまいか、と人をして思はしめる程。

＊　＊　＊　＊

其猿を連れて來いと言はれて、仕方なく眞次は權猿を引張つて來た。眞次が人馴れぬ如く權猿も人を見てうろ／＼する。それが面白いといふので、人々が大勢集つて來る。權猿は一生懸命眞次に縋り付いてゐる。でも人が食物を呉れる時には、急いで手を出して、周章てて頬張る。それが又面白いといふので、人が益々集つて、後には惡戯をする。頭を撲つ者、尻を捻る者、恐迫す者、ちよツかふ者、皆醉つてゐるから、しつこい。あまり執拗いので猿より眞次が腹を立てた。けれども口へ出して止せとは能く言はぬ。然うかといつて、此所を去る事も出來ぬ。百萬の敵に圍まれて大きに困つてゐる時に、唯一人の援兵があつた。

それは實に優しかつた「可哀さうだから堪忍しておやりよ、お猿だツて然う苛めては可哀さうではないか」と、それは如何も優しい聲で言つた。この唯一の味方は、實に藤原のお孃樣であつた。

## 其四

此山始まつて以來、此櫻谷に初めての賑やかなる花見連も、重箱を紐み、毛氈を卷き、それぞれに片付けて、日の暮れぬ間に歸り得るか、それはちと怪しいが、醉の醒めぬ間に家に着くのは慥かであらう。皆醉つて了つて荷持は空の輕さですら擔ぐに危い。殊に困つたのは、足弱の女連で、峠の上の山駕や馬が待つてゐる處まで行くのが、如何も出來さうも無い。殊にお孃樣は踏みなれぬ所爲か、足の裏に豆が出來た。痛くて歩けぬ。

この娘は、もつと好い處かと思つたらこんなつまらない處と、來た事を悔いてゐる。それよりも今一層つまらないのは眞次で、酒に醉つてゐないので、力が有りさうなので、加之人間が大丈夫らしいので、足の痛むお孃樣を背負つて、峠の上まで行く事に定められた。それは炭俵を擔いで上下してゐるから、力の上から言へば構はぬが、厄介な點から言へば一番厄介で、これには困つた。けれど主家の娘ではあるし、唯彼の猿に此人一人優しかりし其嬉しさもあるので、仕方なく引受けた。そして猿を家へ送り、物置から背負梯子を持つて來た。炭俵ぢやアあんめえしと直ぐこれは斥けられて、直接に背負ふ事と成つた。すると今度は、お孃樣から斥けられて、直接では汚いと言はれた。

其處で下婢に羽織を脱がせて、それを眞次が着て、それで負ふ事に成つた。言ふが儘に眞次が女羽織を着た處は、如何も丸で鳥羽繪であつた。

扨て斯くの如くして一行は出立した。人々の蹌々踉々、谷川を傳つて行くの危さに、冷汗が思はず出る。眞次は熱湯の樣な汗が出る。主家の娘を萬一落しでも仕たらと思ふと、實に心配だ。心配なだけ、又厄介で、這んなに困つた事は無い。何十貫の炭俵を背負つたよりは餘程重い。途中では捨てて了ひたく成つた。早くどし／＼歩いて、少しも早く峠の上へ行つて、駕になり、馬になり、引渡して了ひたいと思つた。其つもりでどし／＼歩く、歩きなれてゐる處だからどし／＼進む。後の連中は醉つてゐる上に道といふ道でない處を歩くのだから、不絶遲れ勝だ。けれども背の娘が心細いかして、然うなると、上で、皆の來るのを待合せよと命じられる。仕方がないから立留ると、立留ると度

に何んの花の香だか、寔に好い香が鼻の先を幽かに通る。責てもの息休めは是であつた。

花なし谷、蔓すべりの坂、漸くにして木山の峠の上まで行つた。そして姥捨山に姥を捨てる如くに背のお孃樣を下した。やれ〳〵これで厄介物を追拂つたと喜んだ眞次、汗を拭きながら、不圖、駕の中に早や乘移つてゐる娘の顏を見た。これが彼のお花見の連中にゐた人か。權猿に優しかつた人か。彼時は唯最うわく〳〵してゐたので、少しも氣が注かなんだが、これが藤原のお孃樣か、美しい者だと感じた。此美しい人を我は今まで背負つてゐたのだと思つて見ると、不思議な樣で、彼の重かつたのは此人か、彼の肌の暖まりも此人のか……とばかり思つて、何も格別の考へは無い。唯美しい娘だな、如何も美しい娘だな。

『いや如何も眞次、御苦勞だつたの』と少しは醉の醒めた旦那が言つた。未だ醉つてゐる連中も調子に乘つて『御苦勞々々〳〵』と言つた。山中御苦勞々々が鳴響いてゐる。

やがて駕に乘る者、馬に跨がる者、徒目の者、荷を擔げる者、皆一處に峠を下り始めた。眞次は只一人で元來し方へ降り始めた。日輪は今を夜と晝との境に分けて入らんとする。

七八歩降つた眞次は、如何思つたのか、又蹤けて、峠の上に歸つた。降り行く人々の姿は未だ見える。馬の尻鞍の鈴は勇ましく響いてゐる。それをいつまでも見送つた眞次、全く見えなくなつた後までも此所に立つてゐた。そして、少時して、彼は再び、權猿より他には友一人無き櫻谷の炭燒小家指して、とぼ〳〵と歸りかけた。

## 其五

此夜眞次の寢苦しかつた事は非常であつた。肩が痛くて、身體中がだるくつて、未だ背に娘を負つてゐる樣に思はれて成らなかつた。

明くれば又も淋しき櫻谷、向くともなく足が黑岩の島に進んだ。其所らの丸木橋も今日は誰踏む者もない。竈の前へ行つて見ても冷やかな灰があるばかりだ。

昨日は全く厄介物に相違なかつた花見の連中も、今と成つて考へて見ると、慕はしく成つて來る。又來れば好いと思ふ。殊に厄介物であつた娘が殊に慕はしくて成らぬ。此秋の紅葉した時に來るであらうか、來年の今頃まで待たなければ來ないであらうか、それとも山に懲りてもう來ないであらうか、それでは困ると考へた。そして決して此所の櫻は切らぬ事に極めた。

昨日毛氈の敷いてあつた處、其所へ行つて少時立つて見た。それから鬼ごッこをしてゐた邊、其所へ行つて又立つて見た。不意と目に入つたのは櫻の花が落ちてゐる、其花の中に少しく變つてゐるのがある。何心なく拾ひ上げて見ると、それは花簪であつた。此花のかんざしの香は嘗て昨日嗅いだ花の香と少しも變らぬ。

これを眞黑な手に持つて、そして莞爾と笑みながら小家へ歸つた。今日は炭の本木を切りには行かず、大急ぎで竈に火を掛けて、少々いつもよりは早目に目塗をした。

いつも愛する權猿には、少しも構はないで、筵屏風の端に突刺してある花簪を見て樂しんでゐる風情は、恰も小兒が枕元に玩弄物を置いて嬉しがつてゐるのと違はぬ。

翌日も亦彼の黑岩の櫻の下に行つた。落ちてゐるのは本物の櫻の花で、これは彼の如く香ひは無い。加之今日も亦木は切らぬ。竈の方も惰けてゐる。猿にも構はない。

此間からおぼえた身體のだるさは未だ治らぬのみならず、益々氣分が惡しくてならぬ。

竈は休む、木切りも休む、時々彼の島へは出

かけて行く、が、此頃では櫻も散盡して了つて、そろ〳〵葉が出た。櫻の實が熟した。雨ばかり降る時節と成つた。
　咲殘る櫻の花は唯彼の莚屏風にのみある。全く眞次は外へ出ぬやうに成つて了つて、是のみを命の綱としてゐた時に、此所にも嵐は權猿の爪で、或日少しの隙間に微盡と寸裂した。
　眞次が初めて怒つて、それは〳〵酷い目に權猿を打擲して、二三日は米飯も與へなかつた、と同時に、自分も實は米飯を食はなかつた。
　これでは成らぬと、米飯も食ひ、竈も焚き、木も切る樣に氣を取直したが、權猿への愛は昔の樣では無くなつた。
　我は如何して斯う怠惰けはじめたか。父樣の遺言もあるし、何んでも藤原の旦那の爲めにはどし〳〵稼がねば成らぬ身だのに、何故休んだらう、取りかへしの付かぬ事だ。未だ病氣の味を知らぬか、彼が風邪でもあつたか、其熱に浮かされて、今一度彼の花見の人達が來て下されば好い、今一度お孃樣を負うて見たい、などと考へたか、馬鹿な事だ。我は炭を燒いてゐれば好いのだ、年中山の中で暮してゐれば好いのだ、父樣が山火事を出して藤原の旦那に大ツかい損を掛けたのを、我が一番取りかへす程に稼がねば成らないと、斯う眞次は考へ直したのに關らず、花簪を寸裂した權猿に昔の通りの愛を投ぜぬとは何事ぞ。
　雨は晴れて滿山翠滴る樣に成つた。蟬が鳴く樣に成つた。河鹿が鳴く樣に成つた。物置に俵炭が大方一杯に充滿ちた。
　其所で一日、これを知らせるべく野々村さして眞次は出た。二三日すれば作左衛門が來るべきであるのだが、それを待たずに山の中を出た。
　手土産に山の芋を持つて行つた。野々村の藤原の旦那の家へ行つた。
　旦那もおかみ樣もお孃樣も皆出て來て、辛抱人が來た、山から辛抱人が出て來たと、大變な饗應で、それ茶を飲め、菓子を食へ、米飯は如何か。
　此春は寔に世話であつた、いや實に面白い事であつた。別して娘が世話に成つたの、相變らず煙草も吸はずか、酒も飲まずか、實に感心だ、如何も感心だ。實に如何も感心だ。これでは我の家の養子にしても好い、と旦那は戯れた。
　此時は赫と成つて、眞次は打向いて了つたから、娘が笑つたか、笑はなかつたか、如何したか、ちツとも知らないで、眞赤に成つて了つて、只難有い事だと思つた。
　此秋の紅葉も亦佳からう、それを觀に行くかも知れない、其節は又世話に成るよ、と旦那は言つた。是非來て下さいまし、道を好くして置きますから、と言つて、答へて、それで暇乞をした。
　去るに臨んで、冬着よとて、旦那の着古しの羽織一枚と、權猿に遣つて與れよとて、源平豆を貰つた。それを持つて又歸る山の中、如何も厭だ。山の中が厭なのでは無い、山の中ではお孃樣が見られぬから厭なのだ。

## 其六

　翌日から炭を運びに作左衛門をはじめ五六人が來た。五六日は往來して、里へ眞次が燒いた物を運んだ。そしてもう今日でお仕舞の日には、秋までの米鹽其他の食物を持つて來た。此方からは、紅葉には是非來て下されと言つた。此傳言の達せしや否やは兎もあれ、又もや一人此夏を此所に過す誠に氣の永い太古に似たる人の生活、これが頭に宿つてゐる一物の爲めに、今までの淋しさを打消し、何んとなく樂しき秋が待たれて、其事ばかり考へられて、喩へば浪

路遙けき海の上、幽かに島か山かを認めたかの如く、其所まで漕付けるのを樂しんで、夏の暑さも然程には感じなかつた。

川の端に出ては、此水の行末は彼の野々村を流れてゐるが、お孃樣も時には此所の水を飲みなさる事があるであらうか、などと考へ、炭を燒く煙が高く上る時には、これが先きから見えようか、我が焚いてゐるのだなとお孃樣が見なさるだらうか、とも考へる。我の燒いた炭の内の一個位は、冬に成るとお孃樣の手を暖める火と成るであらうか、などと空想をめぐらしてゐる。

其間に夏が立つて、花には遲い山の中、紅葉には早く、黑岩の櫻の葉が紅の樣に染つた。暇の時ぼつ〳〵と手を入れた木山までの道は、細々ながら出來た。前には彼の厄介物、今では樂しき藤原の人々が、來るのを何日かと待つばかりだ。

然るに又彼の作左衛門が五六人連れて來て、炭俵の運送を始めた。最後の日彼の米鹽は持つて來られた。作左衛門の話には、此秋は來られぬ、來春であらうとの事であつた。稍希望が離れた。海上の目標が遠く成つた。

此冬籠、雪中の炭燒、小家に唯一人の眞次の戀は、此の間に恐ろしく發達した。それは今一度來さへすれば好いと思つてゐた藤原の娘、それを自分の女房に仕たらといふ邊まで進ました。此小家に彼の美しい人が音無しくゐるであらうか。屹度厭だといふだらう。小家が厭なので、隨つて我をまで厭だと言ひはすまいか。

然うなれば彼の黑岩の島の櫻の眞中に家を建てて、其所に住む、我が稼ぐ。彼の人は内に靜として居れば好い、働かなくつても好い、神樣のやうに大事にしておく。此山の中に唯二人ぎりだから、誰も引さらつて行く者は無い、安心だ。しかし、此樣な山の中にゐるのは厭だと言ひは爲まいか。それが心配だ。彼の通り美しいのだもの、我ばかりが惚れるばかりでは有るまい。里の人も同じだから、里の人で我より男の好い人が惚れたら、其方へ靡くだらう、して見ると、我なんざア駄目だなア、と思ひ當る時には、眞次悲しさに泣く。

如何で駄目だ、我の樣な者には迚も彼の人を女房にする事は出來ない。けれども、女房に仕たつもりで考へる分には少しも差支は無い筈だ。責てはそれを樂しまう、此小家に嫁に來て居るつもりで我が稼いでも、誰も何んとも言ひはせぬ、と斯う又思ひ直して、空想に耽る。

これは毎日毎夜同じ事で、何をするにもそれが附纏つてゐた。

それは及ばぬ戀とあきらめて、時には悲しさに泣く事もあつたけれども、要するに此空想の爲めに大方は樂しかりし冬の山籠であつた。

## 其七

再び春來つて黑岩の櫻が咲いたけれど、誰も來る模樣は無い。二三日すれば散つて了ひさうだ。眞次は氣が氣で無い。

今日は如何にと、小家から出掛ける出合頭、遣つて來たのは白犬で、續いて來たのは作左衛門だ。見ると忽ち眞次の胸はどき〳〵ツと波を打つた。

『こら眞次、喜ぶ事があるぞ、和主を喜ばせようと思つての、わざ〳〵作左衛門が遣つて來たのだ。これから直ぐと何んだ、我と一處に來いよ、急いで支度しな。いや本統だ、本統に和主の喜ぶ事がある』と急立てた。

煙に卷かれた眞次は茫然としてゐると、手を取らぬばかりに又作左衛門が急立てて『早く仕ろよ、早く仕ろよ』

『何んだね、全體何處へ行くのだな』『野々村へさ、旦那の家へさ、えい、何をまご〳〵して

ゐるのだな』

『旦那の家へ何しに行くだ』『何んでも好いやな、我は性急だ』『でも何んだか分らぬわ』『分らぬ事があるものか、旦那の家で婿を取るのだ』『ひえッ』『分らねえなア、婿を取るのだよ』「誰が……」と問うた聲は非常に高かつた。作左衞門は吃驚したが、直ぐと斯う言つた。『誰でもない、和主をさ、和主の辛抱人を旦那が見込んでお孃樣の婿に仕るだ』

『馬鹿な、そ、そんな事があるものか、馬鹿な、そんな、こ、ことが、あ、あるもんか』

『何、無くても好い、來さへすれば分る事だ。さアそんな事は如何でも好い。我は和主を呼びに旦那から言はれて、わざ〳〵來たのだ。我は和主を連れて行きさへすれば役目は濟むのだ』

『作爺や、虚言ぢやアあんめえの』『虚言なら虚言に仕ておくがいゝや、行つて見れば分る事だから……』

『では行くがの……』と眞次は意外に狼狽して、小家へ入つたり出たり、まご〳〵して『作爺や、我を擔ぐんぢやアねえか』

『何、擔ぐものか、連れて行くばかりだ。旦那が是非眞次を連れて來いと、しッかり言付けなすッたのだ』

『蒼蠅い樣だか、本統か』

『本統だよ、蒼蠅いなア』

『それでは一寸待つてくれ』と、既う目の色は變つてゐる。夢だらう、屹度夢だらう、夢に違ひない、それが、つい、口に出て『夢に違ひない』

『如何した、夢を見た』と咎められて、『何、夢を見たやうな話だなア』『だから、それ、喜ばして遣ると言つたのだアな』

『本統なら實に嬉しいこんだ』と前の川で、手の泥を落し、顏の炭を洗つて、にこ〳〵として、垢染みた筒袖の上に旦那から貰つた羽織を引掛けて、作左衞門に構はず、ぐん〳〵と駈出して了つた。

何處を如何して通つたか知らない、藤原の家へ着いた時に、大勢人がゐるので氣が付いて、作左衞門より先きに白犬と一處に來た事も分つた。

夢でなければ無いと仕た處で、我を婿にするといふのは、虚言ではあるまいか、虚言だらう、屹度虚言だらう、虚言として置いて、本統だつたらそれこそ嬉しい、直ぐ山へ連れて歸つて了ふ。又負つて峠を越すのだ、と眞次は思つた。

『おう、眞次か、好く來たな、待つてゐた、さア此方へ遠慮なく通つた〳〵』と藤原の旦那に引上げられた廣間、其廣間には一杯人がゐて、本膳で酒が出てゐる。

眞次は面喰つて了つた。遙か下の方に坐つてゐると、其所ではいけないとて一番の正座へ通され、旦那は一同に向つて披露するには『これが、かね〳〵話してある櫻谷の辛抱人で、多右衞門の息子の眞次だ。如何も若いのに感心な男だから、今日は此正席に坐らせるのだ。如何か皆の衆も此眞次を見習つて、勢出して稼いで貰ひたいものだ』と言つて、今度は眞次に向ひ『此人達は皆家の小作や山の仕事をしてゐる者ばかりだ。さア〳〵遠慮なく飮むがいゝ、あゝ、眞次は下口だッけ、其代りに食べて呉れ』と言ふ。眞次は例の人馴れぬ悲しさに、これが少しも耳には入らぬ。

『既うこれで揃つたら、引合せを仕ようかの』と言つた旦那の聲、それから少時がや〳〵聽えてゐたが、それが鳴靜まつた時に、一間の唐紙を明けて、紋附の羽織袴で立派な若い男、次ぎには彼のお孃樣が、裾模樣の振袖で顏を赤めながら出て來た。

見ると忽ち眞次は數千仞の谷底へ突落された

様な感じが仕て、身體だけは未だ〳〵何處までも底の底まで落ちて行くのか知れない様な感じが仕て、其癖心だけは風船玉の様に雲の上へ昇つて行く様な心持がして、溜らなくなつて、人の膳の前も構はず、給仕の女中に突當つても構はず、飛出して、一生懸命駈出して、櫻谷指して息も次がず。

## 其八

小家の中へ飛込んで、其儘倒れて死んだ者も同然であつた。少時して起上つた時には、兩の目端が腫上つてゐた。

眞次は着てゐる羽織を脱いで、曾て權猿が櫻の花簪を裂いた様に、引裂いて了つた。

肝を潰した顔をして見てゐる權猿を捕へて、又もやはら〳〵と涙を落した眞次、非常に癇走つた聲で「こら、權よ、世の中に和主ばかりだ、我の友達は和主ばかりだ、それを變な事から迂々しく仕てゐたのは、全く我が惡かつた。謝る、堪忍して呉れ、よ、堪忍して呉れ、よ、我は和主と唯二人で、斯うして山の中にゐれば、それで最う極氣樂であつたものを、不圖した事から我の心が迷つての、それが爲めに飛んだ目に出會したよ。若し和主が口がきけたら、嘲笑ふだらなア、嘸ひやかすだらうなア、今と成つて見ると、我が顔を洗つたり手を洗つたりして、大喜びで出て行つた我の姿が、嘸間拔であつたらうなア。馬鹿な奴だとさげしむなよ。和主にまで捨てられちやア我は最う如何する事も出來ねえ。死ぬるにも死なれぬ、といふのは、我の老父が藤原の旦那へ損を掛けたのを、我が如何しても償はねえぢやア成んねえ、受けた恩だけアかへさなけれア成んねえだ。今我が首でも縊つて死ぬべいなら、誰が又此山の中で年中唯一人で炭を燒く者があらう。それを思ふと、我ア如何しても死なれねえだ』と言つて咽入つた。

それは最う、我を見たやうな者が、あんな美しいお孃様の婿に成らうなぞと駄目なこんだとは思はねえでもなかつたが、矢張迷つてゐた處へ魔がさしたのだ。我はこれまで通り心の中でお孃様を、女房にして、それで樂しんでゐれば、それで好かつたのだ、心の中のお孃様なら、他の男と夫婦には成らねえ、どんな事があつても我を見捨てねえで、我を見たやうな者でも見捨てねえで、我の言ふ通りに成つて、どんなにでも樂しく暮されるだ、うむ、我の自由だ。我が死ぬるまで お孃様も死にはせぬぢや、我が寐て了へばお孃様も寐、覺めれば覺める。我が死ねば其時にお孃様も死ぬのだ。斯う思つて我は一生を此山の中で暮さうと思ふが、こら、權猿、我はな、人から見ると不憫だらう。不幸福な者だと見えるだらうが、今言うた通りだからの、いくら山の中に一人ゐたからツて、決して不憫だと思ふ事は無いぞ。不幸福と思ふ事は無いぞ。なアに、我は氣樂だ、なアに、我は幸福だ。なアに、なアに……なアに……何んとも無いや、な、なんとも無いやア』

眞暗な中で猿を抱いて絶叫してゐる處へ、松明を付けて駈つて來たのは、例の作左衞門だ。

『如何も眞次や、我が惡かつた、堪忍して呉れ、何も搶ぐつもりで言つたのぢやアねえ、何んの氣なしに言つたので、まア如何しても惡かつた、堪忍して呉れよ。又お前此通り山を越して來たのだ、心配で成らねえから直ぐと後から來たのだアな。我が此通り謝るから、最一度出て來て呉れんか、然らせぬと如何も旦那に對して濟まねえから』

『厭だ』

『厭でもあらうが、其所を堪忍して呉れろと頼むだアよ』

『厭だ……』

『如何しても厭かの』

『厭だ、最う如何しても山からは出ねえ。我ア一生を此所で暮すのだ。お前が惡い譯でも何んでもねえ、我が出かけて行つたのが惡かつたのだから、……我と吾顏へ泥を塗つたのだ。目塗をしたのだ。煙は最う竈の外へ出さぬ。如何しても出さぬ。心配せずに引取つて下さい、我ア如何しても山は出ねえから、出ねえと言つたら最う如何しても出ねえ』と言切る時、權猿に飛掛らうとしてゐる白犬、それを見るや突如、首筋を捕へて、滅茶々々に撲つた。

＊　＊　＊　＊

黑岩の松の中の櫻は若木老木の用捨なく、それは炭に燒ける燒けぬの區別なく、一本も殘らず切倒されて了つた。そして其根まで掘りかへされて了つた。其所に築いてあつた竈は壞され、川に渡してあつた丸木橋は取去られ、花の頃の面影は全く無くなつて了つた。白石の間を滑る水の聲、老松の風に鳴るの聲、これのみは依然として聽く事を得るが、其後美しい音の小鳥の囀りは絶えて聽く事が出來なくなつた。

眞次は、手を泥に、顏を煤に、例の如く眞黑にして、炭燒の業を怠らぬ。

これより後幾春秋、尚更人の訪ふ者が稀になつた。唯彼の炭俵運搬の時のみは例の外だ。かゝる間に、彼の白犬さへも來ぬやうに成つた。其後は氣毒な事と後悔して、串戲一ッ言はぬやうに成つた作左衞門、彼は以前よりは足を繁く、彼岸の團子や手打蕎麥、何が出來た、彼が出來たと、月に一度は必らず尋ねて來居つたが、これさへ後には見えぬやうに成つた。白犬も作左も死んだのであらう。眞次が無二の友の權猿も、亦死んで了つた。

眞次の年は作左衞門が來なくなつた頃の齢にまで達した。炭の粉は顏を染めても、川の白石と頭の白髮、これを黑くは爲し得ない。皺だらけの手にさぐり棒を取つて、相變らず炭竈の煙を立ててゐる。知らず彼が空想に描いてゐる妻は何歲に成つたであらうか。矢張藤原の娘が花見に來た時の若さでゐるであらうか。

（明治二十八年十二月稿）

# 曲馬師

## 上

武藏野の太古から根に遺つて、今歳の秋も咲亂れて居る、萩、桔梗、尾花、女郎花。色さまざまの美しい花野の端は、森蔭黑き府中の驛。

これに向つて誰が踏馴らしたか、細路が幾條となく通じて居て、思ひ〳〵の心の樣を形にして現はして居るが、戀ケ窪の方から行くのに、一番近くツて然うしてやゝ廣い道筋を、今日は誰一人行きもせず來もせず、翼物憂げの秋の蝶をして、彼方より此方に移らしめる程の物驚かす足音もなかつたが、日輪が徐々と釣瓶落しの身支度に取掛つた頃、尾花の中から駒の鬣が現はれた。桔梗の間から人の袖が見えた。

駒は五頭、人は五人、皆乘らずして口を取つて居る。其鞍の上には不思議な積荷で、重籐の太弓、塗柄の薙刀、笹穗の槍に菊水刀の刀、いづれも鞘を拂つて冷めた氣の光、それを繩で束ねて能く斷れぬと見れば、いづれも銀紙張の木太刀竹光。其他には大太鼓、三味線箱、割竹で角を取つた澁紙張の葛籠、古いビラやら引幕やらの大包。最後の青馬には、鍋、釜、德利、石油入、番傘に下駄に陣笠に鐵扇に、女の生首、それは、しかし、張ボテである。これだけを搦めつけて、お負に一番上には米袋と一緒に大きな子供が結付けてある。これも土人形かと見ると、時々駄菓子の豆捻を口一杯に頰張つて、馬が枯草を噛む音と、チャンポンに響かすので、これは確かに生きて居るのが分つた。

眞先に進んで行く栗毛の駒の手綱を取つて居るのは、ひよツとこ面を顏に嵌めて上から槌で打着けた樣なので、額端と眉毛とを剃込んで居るだけ罪の深い男、年齡は三十一二であらう。

次ぎの葦毛の駒の口を取つて居るのは、顏色が少し青いやうだが、年齡の頃は二十二三で、薫國流の看板繪に有りさうな色男である。其次ぎの白馬の曳手は、體の小造りの、顏の丸形の、極めて愛嬌のある十七八の娘。馬でさへ時々袖を銜へて引きさうな頗るの美形である。

其後の鬼鹿毛とでも云ひさうな荒馬の口を、確乎と取つて、手綱一寸緩めず身構へて居るのは、赤ら顏の、デップリと肥太つて、笑つたなら口元に愛嬌が現はれるかも知れぬが、怒つたなら眼中に凄味の出さうな、四十男。歩くのに股が揩れるが、乘つたら馬が潰れさうで、村角力の大關でもあつたかの樣。此女房でもあらうか、瘠せて、丈が高くツて、色の黑い、三十六七の女。それが靑毛の口取であつて、最後の列に立つて居るが、氣性から云つたら一番先きに立つべき者で、先導のひよツとこ面の、ぐづぐづして居るのが不平でならぬか、時々口を出しては急がして居る。

この五人は、男も、女も、殆ど一樣の扮裝で、格別に日も強く射込まぬのに、各〻菅笠を眼深に冠つて、手拭で襟首から頰へ掛けて包んで、紺の絆袢同じ色の手甲、草鞋も素では穿いて居らぬ。笠の紐の赤いのと、白い腰卷とが眼に着かねば、どれが女郎花と、男郎花、唯紫の一本とがな思ふであらう。旅人にしては珍らしい一組。これは抑も、曲馬師小栗綱五郎の一座が、旅から旅を打つて廻つ

て、これから府中で一興行と、富士見坂を越して此所までは來たのだ。

道化役は小栗半作、立役は小栗繁三郎、女形は小栗照代、實惡は小栗綱五郎、先づそれだけで、囃子方は綱五郎の女房阿豐。時には息子の當年六歳になる虎松が、子役にもなる、銅鑼位は指圖次第で撲る。此他木戸番と馬丁とを兼ねる男二人、先き〳〵行つて小屋の支度に掛つて居る筈。行先き〳〵の土地は變つても、小屋掛の手順は同じであるので、頗る無造作に蓙張の一軒が出來た頃に、一座は悠々と乘り込むのである。

『未だかい、阿母、遠いなア、府中ッて遠いなア、坊、お尻痛いよ』

阿豐は下から呵りつけて、

『何んだねえ、曲馬師の息子が、馬に乘つてお尻が痛いやらぢやア、親父の後繼には成れねえよ』

手綱の先で馬の尻を打ちながら然う言つた。

虎松は默つて了つたが、馬は打たれたので早目に歩き出すと、長い面を前に立つて居る綱五郎の肩の處へ持つて行つて、無遠慮に荒い息を鼻から爲ると、綱五郎赤腹を立てて、

『何んだ青毛奴、手前許り急いだッて、先きが閊へて居るのだ、ゆる〳〵來さッし。』

阿豐は綱の先で又一ッ尻を打つて、

『先きが氣が利かないと尻までがいぢを組むよ。半作さん、如何したのだえ、少しは急いで鼻を切つと呉れよ。日一杯に府中へ着く氣ぢやア困るよ。途中で追剝が昔なら出たのだから……』

半作は平氣なもので、

『急いだッて、親方が彼の體だ、早く歩けないのを承知で突走つたら、肝腎の大將をおいてけ堀にして、雜兵の此方が府中不義の人間となるなざア妙でげえせんからな』

阿豐は毎度の洒落に食べ馴れて居るので、別に笑ひもせず。

『馬鹿をお云ひでないよ、いくら親方が股ズレが爲るからッて、這んなに遲くッちやア却つて歩き難いよ、好い加減な事を云つて、お前さんがグヅ〳〵して居るのは、少しでも遲く着いて、小屋の悉皆出來上つた頃を見計らつて居るのだね。未だだと手傳はされるのが厭さに……お止しお止し、お前さんは鼻を切るのを止して、繁さんを先きへ御遣りよ』

『其奴は妙で有りませんぜ。繁さんを先きへ立てて御覽なせえ、照代さんが直ぐ又後を尾ける。二人で仲好く話しながら行つた日には、幾條もある路だ、どれを曲るか知れやア仕ねえ。第一それに二人が餘り仲が好さ過ぎらア。ニチャツキながら行くのを後から見て行くのは、餘り買つて出る程の役廻りでもねえからな……』

『然う仲が好いッて、何もお前さんが燒く事も無いぢやアないか』

『何、私が燒く譯ぢやアごわせん、青毛と白とが仲が好いので、栗毛が默つて居ねえのですよ』

『そんなに心配なのかねえ。ぢやア斯うおしよ、仲の好い二人を後へ廻して、妾と親方とが先きへ立つて、其次ぎにお前さんだ』

『然うしたら二人は親方の歩くのより遲く爲つて、一番後まで殘つちやッて、今夜中に府中へ着くか如何だか分りませんぜ』

阿豐は餘りに熱心に半作が心配するので、少しは可笑しさを覺えて來て、

『厄介だねえ、如何したら好いのだらう』

『如何ッて矢張、私と親方との間に二人を挾んで、ズッと後からお前さんが眼張りながら來れば、それが一等ですよ』

『だッて二人の方ばッかり見て居ると、此方の足下が危いやね』

「なアに、二人だッて足下なんか見ちやア居ません。でも別に危くごわせんや。其代り轉ぶ時には二人一緒だ、はゝゝゝ」

豆捻を食ひ盡した虎松は馬上から聲を掛けて、

『やッ、繁ちやんと照ちやんと、可笑ちいや、顏、眞赤だア……昨夜、阿父が醉ッぱらッた樣だい、』

「巧い事を云ふなア、嬉しい〳〵、やい、鹿毛、後足で二人を蹴飛して遣れ。はゝゝゝ」

無上に嬉しがる半作、阿豐も小言を引込まして笑ふ。二人は益々はづかしがる。今までダンマリで居た座頭の綱五郎は、甚しく不機嫌で、

「本統に如何も仕方のねえ畜生だ。馬の方が餘程溫和しいや。半作が云はねえでも、俺ア後から睨んで見兼ねて居たのだ。いくら原中だからッて、遠慮てえものアあるもんだ。俺の鼻先で乳狂やアがッて……先きから手綱の緩み通しで、馬が素直だから横へ反れねえが、何度道草を食つたか知れねえぜ。とまア呵つた處で仕方がねえ、手前達を二人切にして、端に眼の無えやうな場合と云つたら、永年の間、一時もねえのだから、後には人前も我慢が仕切れず、ちよい〳〵チョッカイを出しかけやアがる。若い同士で仕樣がねえや、それほど濡幕が出してえのなら、野郎は口元のダラシの無い女客の懷へでも手を入れて、小遣取でも爲るが好し。又女子の方は目尻の下つた男の客の袖でも引いて、俺達に甘え汁を吸はせるが好いや。一座内でベタッキやアがると、蹄鐵を面へ打きつけて、轡を口へ押込んで、裸馬に縛付けて引廻すから然う思へ。いくら手前達が此方の眼を忍んで、巫山戯ようと仕たッて、俺が一寸見のがしても、此方に恐ろしい鵜の目鷹の目、油斷のねえのが控へて居るのだ」と云つて綱五郎は阿豐の顏へ尻目を掛けた。

「厭におつしやいますね。乙う可笑しな臺詞ぢやアないか。然う出て來るのなら、此方にも、思考はあるんですよ」と阿豐も決して負けるのでは無い。

「ねえ、照代、親方は乙な事を云ふねえ。お前だッて可笑しからうぢやアないか。鵜の目鷹の目で睨んで居るから、油斷がねえとのお聲だが、それアお前と繁さんの上に掛つてぢやアないよ。誰かがお前を捕へて、子飼からの恩を押賣にして、手籠同然の荒事を仕さうだから、妾はお前が不憫だと思つて、影になり日向になり、今日まで眼を放さないで居るのだよ。何も悋氣で燒くのぢやアないよ。それだもんだから、妾が邪魔で〳〵ならないのだよ。妾に邪魔を爲れて手が出せねえもんだから、今度は自分が鵜の目鷹の目、邪魔ばかり仕て居るから、チャンチャラ可笑しい……だが、安心おしよ。繁さんとお前とは、誰が目に見ても似合ひの夫婦だ。妾が承知だから構はないよ、誰の前だッて構はないよ。思ふ樣お巫山戯よ、構はないよ、なに構ふもんかね……」

猛り立つて阿豐が斯う云つたので、綱五郎は一層强く馬の口を引締めて、恐ろしい目で阿豐の方を睨んだが、それでも一言も云ひかへす事が出來ぬ。阿豐から引締めて口を取られても居るのか。

此體に阿豐は益々勝ちほこつて、

「繁さんに照代、妾が附いて居るから安心おしよ。府中へ乘込むのを樂しんでおいでよ。今夜早速祝言をさして上げるからさ」

虎松は馬上から口を出して、

『私も樂ちみ、府中、行くのは……』

半作は相變らず半道が本役で、

『虎坊、本統に樂ちみだぜ、お前今夜能く見て居な。はゝゝゝ』

## 下

　六所明神の地續き、森の中に曲馬の小屋。

　竹の柱の細いのに隣つて、杉の立木の三抱もあるのを圍ひ込み、四面を筵で仕切つて、天井を古幕で張詰めて、中には荒削りの松板、其上に莚を敷いて、赤毛布の穴だらけのを敷いて、一夜損料の薄蒲團を敷いて、其上に寢て居るは虎松である。其枕下には搔卷ともつかず褞袍ともつかず大縞のどんつくを着て、阿豐が煙草を吸つて居れば、其後に小さく成つて照代が居る。向うには大胡坐で綱五郎が、金絲繡の雲龍の襦襠のそれが既う土龍色をして居るのを着て、腕を組んで居ると、其横に打萎れて繁三郎が居る。風の來さうな方角に衣裳葛籠が積重ねてあつて、槍と弓と薙刀とを三本組合せて立てた上に、カンテラを點して、吹消されぬ用心に日の丸の軍扇が開きかけてある。

　同じ小屋の隅の方には、馬が鼻面を揃へて秣を食つて居る、、一人の男衆は寢藁を入れる工面をして忙かし氣に働き、一人の男衆は地面を掘つて其所に焚火をして、紫銅製の大藥罐で湯を沸かすに忝氣な身構へ。

　すべてツきに着いた二頭の馬と後から來た五頭の馬と、それだけが乘せて來た荷物は、何一ツ此所に用を爲さぬは無いので、水草を逐うて移轉する蒙古人種の一家族を、この曲馬師の一座に見ると云ふべしだ。

　今此所に其總べて持運ばれたる荷物の中に、青馬の荷鞍からブラ下つて居た德利が一個見出されぬ。それと又、一座の中で、道化役である彼の半作が姿を隱して居る。

　一人先きへ寢て居る虎松は、他よりは一番暖かであるべきだが、眠られぬまでに寒いと見えて、

「大ちやぶ小ちやぶだい。ちやむいなア。ポンポンも空いたい。半作早く、歸らねえかなア」

　阿豐は長煙管の丈と自分の手の丈との延びる限り延して、吸殼を座端れの地面の上にハタキ捨てて、

「如何したんだらうねえ、彼の人は。何を爲せても半間だよ」

　綱五郎は腕組を解いて、平手で顏を二三遍撫で廻して、

「嗚呼馬鹿々々しい。馬鹿に待たせやアがる。彼奴目、向うで引掛けて居やアがるんだぜ。一寸の我慢でも出來ねえ質だから……」

「いつもの五合だと、盃に何杯々々あると分量が既う知れて居て、多い少ないが直ぐ分ッちまふから、ずるい事も出來ないが、今日は一升分代價を持たして遣つたのだから、洋盃で一杯位はお毒味をして居るかも知れないよ」

「阿豐、大層今日は驕つたぢやアねえか、翌日の初日を祝つてか知らねえが、一升ぢやア俺は醉ッ了つて、翌日の藝が出來ねえかも知れねえぜ」

「なにさ、お前さんばかしに飮ませアしめえし」

「半作が飮んでも、二合か三合だ。お前は又願酒だし、他に飮手はありやア仕ねえが……」

「今夜は有るよ、妾も願酒は落ちて了つて、虎松が寒いと云つてるから此子にも飮ませようし、馬番小屋番にも飮ませようし、第一繁さんと照代とに、しッかり飮まして寢さしたいやね」

「照代は下口で、繁公は出世前だ。俺が許さねえ内は一口も遣らさねえのを承知で、今夜二人に飮ませるとは……はゝア、いよ〳〵持出したのだな。おい、阿豐、手前は照代と繁公とを、夫婦に爲る了簡なのだな」

「當然さ。然う仕なけれア可哀さうだアね。いつまでお前さんは邪魔をして居るのだよ。最う大概にして綺麗に添はして遣つたら如何だね」

阿豐は片膝を立てると同時に眼が屹と釣つて來た。綱五郎は腹に力を入れて口をグッと結んで構へた。照代と繁三郎とは二人の陰へと潛むやうに身を置いて、思ひ／＼の方角に眼は向いて居ても、耳は二人の聲を聽くに便りの好い方へと立てられた。

「今夜此所で、二人に祝言をさせるのにさ、何も不思議はなからうぢやアないかね。全體ならお前さんから先きに立つて、切出すのが地道ぢやアないか。それに何んだねえ、妾が一寸でも油斷しようものなら、照代の後ばッかり追廻して……」

「何んでえ、そんな事を、俺が……」

「今更仕ないなぞとお云ひでないよ。男らしくもない……二人は娘も同然、一人はお前さんの弟子ぢやアないか……洗ひ立てりア皆お前さんの恥辱だから、今夜は何も云はないで、好いかね、妾も亦何も云はないから、綺麗に祝言をさしてお遣りよ」

「何も俺が……如何も其、何も……と云ふ譯ぢやアねえけれど……」

綱五郎は大不平であるが、阿豐の見幕が恐ろしいので、強ひて不服も唱へられぬ。阿豐は又、綱五郎が、若し文句を並べたら、向臑へ喰ひ着いても、自分の意見を通さうと思つて居るので、其氣は自ら顏の上に現はれて居るのを、綱五郎は能く見拔いて居る。

『だ、だッて、今夜に限つた事もねえや。又それはいづれ後にして……」

「それがいけないよ、一時でも早く極めて遣るのが情けだよ。當人の氣に成つたら、どんなに早く一緒になりたがッて居るか知れやア仕ないよ。二人共無口の方だから、何んとも云ひは仕ないけれど、其位の事は察して遣らないと、本統に罪だよ」

『それにした處で、まさか野天で祝言でもねえや。莚小屋の中で三々九度……乞食ぢやアあるめえし」

「年中旅から旅の曲馬興行、莚の小屋の中でも行先き／＼が我家ぢやアないかね。虎松だッて野天で生れたのだよ。小屋内で祝言するのは愚かな事、斯うしてお互ひに諸國を巡つて、後には莚の上で死ぬる身上……それを承知でお前さんと妾とは夫婦に爲つたのだッけね。加之あらたまつて祝言なんて仕やアせず、人間が一生に一度の晴の式さへ行はないで、くされ合つた中だから、妾は、せめて、人には、どんな場所でも場合でも、婚禮だけは眞面目に爲したいのだよ。照代にだッて、繁さんにだッて、好しや小屋の中だからッて、三々九度だけは爲したいよ。若し祝言をしておかないと、盃事を仕ないやうな仲だから、それで亭主が氣が變つて、ちよい／＼浮氣を仕たがるのぢやアなからうかと、飛んだ方へ氣が迴つて、どんなでも好いから、仕ておきたかつたと、後から思はないとも限らないのだよ。妾なんざア本統に然う思ふ。何を苦しんで曲馬師の女房に成つたらうか。女をだますのが本職のやうなお前さんに、つい釣込まれて、一緒に成つて、暮して見ると、行先き／＼の女に引掛りたがッて、人を邪魔にばかり仕たがるのを、此方は一生懸命で、少しも油斷を仕ないばかりか、若し臭い事でもあつたら、直ぐ向うへ吐鳴つても行く、又お前さんに喰つても掛るので、頭體にも似ぬ臆病なお前さんの今日まで無事に通つて來たのだが、其代り手飼の方へ、そろ／＼チョッカイに掛りかけて……ま、何んて意地の汚い人なんだらう。妾が若い時にお前さんを思つて居たのは、今の樣なダラシの無い人ぢやアなかつたよ。馬乘も上手、曲藝も上手、義が堅くッて、親切で、他の女に見向もせぬ、立派な男のやうに見えたのが、まるで違ふのだから呆れ

て了ふよ』

『箆棒奴、看板通りの藝が出來るものか』

『看板通りの藝でなくッても、今夜は高砂でもお謠ひよ』

突然、小屋の外に聲があつて、

『ヤア、ぽん〳〵、ヤア――ツ、ぽん……ぽん……』

入來るは半作、片手に一升徳利、片手に干魚、これが婚禮の夜の御馳走である。

『主婦さん、本統に何んでげすか、繁さんと照代さんと、一緒にして了ふのですか』

『然うだよ、半作さん、お前又お燒きでないよ』

『燒かなくツちやア食へませんよ、干魚は……』

『干魚と婚禮と一緒にして耐るものか』

『だが主婦さん、いよ〳〵婚禮となると、私に面白い趣向がありやす』

『碌なこツちやアあるまいね』

『然うでごわせん、まア斯うです、照代さんに初菊の衣裳を着せて、繁さんに重次郎の裃を着せて、小道具の中に銚子盃もありますぜ』

『串戯ぢやアないよ、茶番じみた婚禮が出來るものかね』

『當世好いッきりか大當違ひ。何しろ婚禮の始まり〳〵ツ』

* * * * *

繪看板の八枚屏風、蓙まで敷へての三蒲團。照代と繁三郎とは、他の者と隔離した小屋の隅に寐るべく定められた。

此夜は虎松も眠らず、半作も眠らず、二人の馬番も眠らず、阿豊も眠らず、綱五郎も亦眠らず。而して七頭の馬も代り〳〵起きて嘶いた。

照代と繁三郎とは、晴れて語るべき場合が來りながら、唯の一語も交はす事なく、森の木の時々風にザワめけど、更に此方は音を立てぬ。天幕の破目から射し込む星の光が、月よりも日よりも明かに二人の上を照らしたとて、何んの影も其所には認められなかつた。

* * * * *

翌日は明神の祭事を宛込みての開場、曲馬芝居の藝題は最初が『一の谷』、熊谷と敦盛との組討の場である。平山は半作、敦盛は繁三郎、熊谷は綱五郎、玉織姫は照代、阿豊は簾内で太棹を取ると、虎松が母親の聰の指揮に連れてドンチャン〳〵遠寄を打込む。外では木戸番が聲張上げて、

『評判々々、今が熊谷敦盛馬上の立廻りぢや。入らツしやい〳〵お早く入らツしやい』

いざや組まむと兩方より、駒の頭を立直し、綱五郎の熊谷は栗毛の駒、黑皮縅の甲冑に身を堅めて、眼隈を取つた面で屹と睨んだ其眼光、一種異樣の怪光を放つた。繁三郎の敦盛は、白馬、緋縅の甲冑、金覆輪の布衣を着けて居たが、綱五郎の一睨みには、何故にか、電氣でも感じたかの樣に、ブル〳〵と戰慄した。其餘波は背の布衣にまで傳はつて、波立たせた。

見物は知らずに喝采した。

馬と馬とは相寄つた。人と人とは將に組まむとする間一髪。馬が蹴つたか、人が突いたか、但しは急に病でも發したか、繁三郎は眞逆樣に落馬した。鹿毛は其上を一足踏むと、鎧の絲は、バラ〳〵に切れて、繁三郎の口からは緋縅の色を奪ふ紅……阿豊は簾の内から飛んで出る。平山の半作、鬘無しで樂屋から駈けて來る。虎松は泣出す。見物は混亂する。玉織姫の照代は白無垢に緋の袴の儘で走つて來て突如繁三郎を抱起したが、其口から吐いた血の色と顏色の眞青なのとを見ると同時に、折重なつて泣伏して了つた。

綱五郎は一聲高く見物に向つて、

『誠に皆樣へ申譯が御座りませぬ。繁三郎儀、藝道未熟の爲、落馬致しまして此有樣。これ

皆當人修業の足らぬ處からで御座りまするで、私から御見物一同へ御詫仕ります。斯樣な次第で御座りまするで、殘念ながら今日は之限り：：：

打出しに連れて、押しつ押されつ出て行く見物は、多くは口々に繁三郎の未熟を罵つた。而して落馬は自業自得であると云ふ者が少なからぬ。

全く見物が小屋を去つて、跡には一座の者ばかり留つて、繁三郎を介抱し、照代を慰諭する、其中で、冷然たる綱五郎の、其顏を、最も強き眼の光を以て見入つたのは阿豐で、今にも飛掛つて武者振りつくかと見えた時に、繁三郎は活と眼を見開いて、勢好く起上らうとした。けれども甲斐なく又倒れた。それは再び馬に乘らうとしたのか、綱五郎に向つたのか、阿豐を留めようとしたのか、但し又照代に縋らうとしたのか、つひに其意を永久彼の口から語る事無しに、六所の森の下露と消えて了つた。阿豐は爲に聲を惜まず泣いた。照代は死するばかりに泣いた。道化役の半作まで泣出して、鎧の袖を濡らしたのに、熊谷次郎直實は蓮生坊と名乘つた例を破つて、たゞ綱五郎は栗毛の駒の鬣を撫でながら、

『修業の足りねえ青二歳に、女房を持たせるから此樣だ。自業自得だ、仕方がねえ、俺の知つた事ぢやアねえ、なア、栗毛、手前が踏殺したのぢやアねえ、彼奴がヘマで踏殺されたのだ：：：罪は手前に有るのぢやアねえ、乘手の俺にも、なア、栗毛、無えのは手前も知つて居ようが』

（明治三十四年一月脱稿）

# 窟の結婚

貝の採集を試みるべく島めぐりを始めて、荒波が奥深く打込む洞窟の前まで來た時、一人の老漁夫が其所の岩角に腰を掛けて、何者をか待つあるが如きを見出した。

『老爺、何を待つのか』と自分は問を發した。

『へゝゝ』と笑つてから、突如として唱ひ出した。

『來るか〳〵と濱へ出て見れば、濱の松風音ばかり』

曲終つて又『はゝゝ』と笑ひ返した。

『貝が此洞穴に居るかね』と重ねて問うて見た。

『はゝ、居るだ、澤山居るだ』

『這入つて取つても好いかね』

『貝を取るなア好えが、女房を取りなさんな』

『女房になる娘が此穴の中に居るのか』と問はずには居られなかつた。

『俺が若い時には居た』と彼は眞面目で答へた。

『今は』と問うた。

『時々氣にして來て見るが、もう居ないね』と答へた。

『老爺、其歳をして未だ探すのか』と冷かさずには居られなく成つた。

『はゝゝ、これア癖だ。若い時から續いた癖だ。今、探し當てた處で、持てるか、持てないか、それは分らねえ。唯昔からの癖で此所へ來るだア』と語り出した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

鮑の圍ひとして此所の洞窟を選んだのは、老爺の若い時であつた。時化の時には此所へ來て取出して、大分金子を儲けた海の庫であつた。

某日一人で來て、何心なく洞窟へ入つて見ると、暗い中に光り物が爲る。驚いて見ると辨天が出現した。一層驚いて見ると、濱一番の美女であつた。

人が溜めて置く鮑を盜み出すとは、承知出來ぬと怒つて出た。

全く知らなかつた。偶然に此所を見出したと言ひ解きに掛つた。

それが事實であらうけれど、わざと曲げて解かして、若し私の言ふが儘になるならば、ゆるしても遣らう、然うでなければ訴へ出ると脅迫した。

泣いて彼の女は詫びた。

肯かなかつた。

つひに洞窟の中で強て結婚の約を固めた。

女房にしてから、たび〳〵此洞窟に來る必用を認めた。曩には鮑が多く溜つて居たけれど、後には無い事が多くなつた。

しかし、家の寶珠の玉には餘程金銀貨が溜つて居る事を考へて居た。

割つて見たら鐚錢が出ただけであつた。

女房を割つて見たら腹の中から金銀貨が出るとでも思つたか、頭を打つた。

それ切り女房は居なく成つて了つて、いくら探しても出て來なかつた。

然うしてから洞窟には、鮑が又溜り出した。人の世話で女房を持つた。今度は又寶珠の玉が空になつた。

叩き破つて、叩出して、何度も繰り返して、扨て今日に成つて見ると、一番先きの寶珠の玉が一番惜しいのであつた。

若しや洞窟へ一番先きの女房が、又來はせぬかと時々の見廻り。未だしかし一度も來居ら

ぬ、と事も無氣に語つて呵々大笑した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

巻貝、二枚貝、いろ〳〵の貝。なる程、複雜なのばかりでは無い。採集して見ると極めて單純なのもあると、自分は大いに得る所あつて、島をめぐり終つた。

（明治三十九年一月發表）

# 半島の影

## 一

吐出されて來たのだ。東京といふ胃の腑には到底消化せぬ、我は正しく不消化物である。斯うした考へを持つて志摩家壽華は、佐原川口の棧橋に立つた。

時間表で見ると、汽車と汽船との連絡が甚だ悠遠しく、乘脫すと後を二三時間待たねばならぬので、價も極めずに俥に乘つた。汽車から降りた者の内では第一番に來て見ると、一體此所へ汽船が寄るのだらうかと、つい疑はざるを得ざる程、すべての狀態が落着き拂つて居て、空氣が少しも動かぬ樣だ。利根の水すら流れぬ樣だ。

ほッと一息吐かざるを得ぬ。自然に氣が緩和として來るが、未だそれでも不安の念が、チクチク胸の内側を刺して、これで好いのだらうか、既う出た後ではあるまいかと、家壽華は幾分か心懸りで、振向いて發着所の方を見ると、日當りの好い腰掛へ八九側の旅客が控へて居る、いづれも常陸行を待合せるらしい。それが又いつ迄でも平氣で待つて居るらしい。之を以て考へると、定時通りに汽船の來る事は滅多に無いらしい。

自分も其所に入つて休むのが當然であらうが、同じ時間を待つて居るのでも、彼等と共に悠長にしては居られぬ樣に感じて、こぼれ炭と石灰とで生地が隱されて居る棧橋の上を、行つたり來たりして、獨りで急遽しさうに動いて居たが、其間に、斯うして居ても、來る時でなければ來ぬのだ、東京で電車に飛乘る樣な氣を持つて居ては駄目だと覺り來つて、家壽華は遂に往生した。燐寸の大箱が荷揚してある、それに腰を掛けて待つて居ると、小春日の爽清に温暖く、外套もこれでは要らぬ位。帽子留の護謨絲が眞直に垂れて、釣師の欠伸が擲まりさうな。されば本流の船の帆は、だらりと唯垂下つて、何方へ舳が向いて居るのか分らず、船頭は大方午睡かと思ふの時、不圖耳に入る物音の、遠くの方に騷々しい。今初めて鳴り出したのでは有るまいが、餘りに四邊が靜かなので、其遠くのすらも聞え出したのだらう。家壽華は音の來る方を見て、思はず立上り、

「ヤッと來たな」と獨語を漏した。

中洲尻の方に汽船を見出したからである。發着所の方に眼を配ると、未だ落着き拂つて居る。汽車で見た顏の旅客が大分加はつて居る。大きな包を抱へて悠々と歩いて來たのが、乘脫す處か、矢張待合せる仲に合して居る。既う併し汽船は來るのだ。他人はいざ知らず自分だけは、斯うしては居られぬといふ氣を生じて、家壽華は又步行運動を開始した。

けれども汽船は一向に進んで來ぬ。煙突から吐出す煤煙は、眞直に立つばかりである。水を搔く車の音は、此所まで響いて聽えるのだが、前と同じ枯蘆のすれ／＼を脫しない。

何んだ、淺漯汽船か。

これで又題を得た。步行を棧橋の最端で留めて、水中から突と出て居る大杭と並んで家壽華は立ちながら、淺漯汽船と自分とを結合して考へ始めた。

進まざる事夥多しい。悶えれば悶える程進まない。泥を搔けば搔く程進まない。同じ仕事を何回となく繰返す。莫迦々々しいとも考へた。

又自分を浚渫車の間に挾まつた藻の花にも比べ、急激なる回轉に寸斷されて、今漸く水の上に捨てられたのだ、如何これから漂ふかなど。

厭アな氣がして來たので、家壽雄は又燐寸の箱の方へ戻つて見ると、其所は何時しか他人が占領して居る。曾て入院して居る間に自分の椅子を奪はれた事がある。苦き／＼經驗を又此所でも見た。

けれども此所のは餘り憎くない。二十一二であらう。丸髷の形が好いか惡いか家壽雄には分らぬが、髮に少しも曲の無い、鬢の張りが好い位は認められる。如何した婦人だらう。銘仙飛白の羽織に、赤縞の絲織を着て、綿繻珍の帶を締めて居る。決して調つた扮裝では無い。それが白の毛絲の半肩掛をして居る。顏の道具を一々分解すると、餘り秀れた處は無いが、色の白いのが德をして、一寸美しく見えるのが、舊式の大鞄を傍に置いて、自分の手には洋傘を持つて、其洋犬頭の柄に絹手巾を、蛇の樣に卷付けて居る。

さア何者だらう。又問題か出來た。丸髷だから、人の妻だらう。常陸へ行くのか。歸るのか。普通の田舍者とも見受けられぬ。東京ツ子が此方へ嫁に來て、幾分か野暮化したのか。田舍者か東京へ出て、土氣拔がしたのか。意氣と野暮と半々に見えるので、動かぬ處が當て難い。

それに一人旅である。之が疑問を高めるので、離緣されて實家へ歸らうとする途中か。親の大病で急ぐ途中か。良人が先きへ轉任して居る、後から其所へ行く處か。それとも佐原へ買物に出て來たのか。

『大層遲れますのね』と不意に婦人は語り掛けた。

家壽雄は此一語を聽いて、忽ち鍵を得た樣な氣がした。――得た樣な氣で、未だ祕密の戶が開けたといふでは無い。今に分るだらうと考へたので、

『いつも斯うなのですか』と問うて見た。

『どうも確的になりませんですよ』と彼の女は答へた。

初めての旅行者ではない。川蒸汽に乘馴れた人と考へられる。

『貴女も向地へお渡りですか』

『はア……』

『何方まで入らツしやる』

『さア何方まで參りませうか……』と笑ひながら答へたので、又分らなくなつた。

『や、串戲言つちや不可ですな』と家壽雄は、つい、固く成つて出たが、婦人は相變らず笑つて受けて、

『いえ、串戲では有りませんの。本統なのですよ』と答へながら、手巾で洋傘の柄を全く卷切つて、竟に洋犬を盲目にした。

世馴れた態度が讀める。如何も素人では無いらしい。今は堅氣か知らぬけれど、以前は潮來節を唄つたかも知れぬ。或は菖蒲踊に連なつたかも分らぬ。それが眞菰の中に殊勝らしい女といふので、土地の大盡にでも身請されたのか。斯う想像を逞しくして居る間に、いつしか家壽雄は妙な癖に陷つて、いつも遣るそれを繰返し始めた。

自分でも好い癖とは思つて居らぬ。愚劣だと考へて居るが、如何も時々出てならぬ。それは一寸擦れ違つたのでも、何處か一點氣に入つたと見ると、それを自分の妻にしたら如何だらうといふ、空想の結婚を行ふのである。

三十に近い年齡である。友人中には子供を二三人持つのが少くない。だのに自分は獨身で居る。初戀は破れて了つた。それを忘れる爲の墮落時代も通り過ぎた。境遇が戀愛を生命とするべく許さぬ樣に成つては、益々選り好みをし

て妻を迎へる身分でないと諦めて、最初に書いた理想の妻から、割引で我慢して、それを探した時代も有つたが、今ではそれも覺束ない。苦し紛れの無妻主義でもといふ折柄、益々發達して來るのは、空想の結婚。

　往來とか、電車とか、或は庭の中のを垣間見るとか、店に居るのを通りすがりに見るとか、甚しきは男優の扮した女の役を見るとか、然ういふ場合に於ても空想が浮ぶのが癖で、目的が令嬢であらうが、夫人であらうが、自分より餘りに年長であらうが、又年弱であらうが、そんな事は頓着しない。あの人を自分の妻にしたら如何だらう。あの人は自分に對して如何するだらう。あの人の性格は斯ういふ風であるまいか。然うすれば自分に對して如何いふ樣に待遇するであらうか。自分が斯うした時に、あの人は如何するであらうか。極めて細微の點まで想像して、それが如何にも實際らしく畫き出されるのを、此上もなく樂しむのである。隨分腦が疲勞するので、其瞬間に想像が達して來ると、あゝ、馬鹿らしいと思ひ直して、止して了ふ。

　家壽輩は此所で又新しく空想の獲物を捕へ得たので、此婦人と自分とが新婚旅行として、今から宮城縣へ渡つて行くとしたら、如何だらうと考へ始めて、不圖氣が着いて見ると、正面から婦人の顏を、穴の開く程凝視めて居た。婦人は別に怒りを惡がるでもなく、微笑を含みながら卷莨を出して、燻して居る。家壽輩は赤面して、其テレ隱しに、

「未だ來ないですかなア」

婦人は煙を口から輕く吹いて、

「既う參りませうよ。あの煙が然うでせう、津の宮からは、最う直ですわ……」

「あゝ、然うですか……」と云ひつゝ振向いて見ると、黑い煙が、なる程川下の方に見える。間もなくボッと白い蒸氣が立つたかと思ふと、直ぐと消えた。それから二三十秒もして、ボ――と漸く汽笛の音が傳はつて來た。

　初めて空氣が動搖し出した。發着所の待合室から、ぞろ／＼と人が出て來る。鳶口を持つた荷役の人が、納屋の中から二三人現はれて來る。棧橋は急に賑はつて、婦人と家壽輩との間は隔てられた。

## 二

　銚子を曉方に出て、利根本流を溯り、今、佐原に寄つた川蒸汽は、此所から横利根に入り、牛堀から、潮來から、鹿島の大船津。北浦に入つて、鉾田へ行く。直ぐと又引返して、其夜の十一時頃佐原へ歸る。明くる日銚子へ下つて一休息して、又曉方に溯る。同じ樣な事を繰返して居るのだ。

　此川蒸汽が棧橋へ横附になるまでには、なかなかの大騷ぎ。ゴースタンとゴーヘーと二三度掛け直す、甲板から竹棹を突張る、棧橋から纜索を引張る、摺木を下す、渡板を渡す、客が出ようとする、乘らうとする、荷の送り狀を出す、客の切符を受取る、それが皆怒鳴り合ふのである。下りる者も怒鳴る、乘る者も怒鳴る。船員も怒鳴る。運送屋も怒鳴る。汽船も勿論兩輪の舊式だが、乘組の舊式なのには、一層驚かれる。

　どれが一體船長なのだらう。いや、どれが一體船員なのだらう。思ひ／＼の古服で、其儘煙突の中へ飛込んで、煤の掃除をして來たやうに汚れて居るのが、帽子を冠つたのもあり、冠らぬのもあり、それが紺足袋に麻裏草履を穿いて、甲板の上で怒鳴り續ける。大抵年齡が四十五六、五十から六十と連なる老年者ばかり、此航路始まつて以來といふ顏觸だらう。

　赤銅色の顏、白銀色の髭、金色の禿頭、亞鉛色の頭髮、いづれも皆嚴疊造りで、海賊でも仕さうな面構へ。どれが船長でも通りさうだが、

どれも亦水夫で居るのかも知れぬ。此手合に能く汽船が動かされると怪しまざるを得ぬ位で、不安の念を生ぜぬでもない。

「靴のまんまで上られちや溜んねえよう。他の衆が其所へ坐るのに、ショーあんめえ」

どんな顔だつたか、聲は亀裂の入つた竹法螺の様であつた。乗船第一に家壽雄は叱られた。

後から押されながら靴を脱いで、それから提鞄を抱へて、外套の袖を縮めて、無論頭を下げて、並等船室から、機關室を通り抜けて、帳場格子のある事務室を通り過ぎて、漸く特等室に入るを得た。此所でも思ひ切つて立つと頭を打つのだ。

幸ひにして他に客は居らぬ。青絨氈の敷いてある中央に、大きな角火鉢が、火無しで一個置いてある。それ切りで、定員二十何名とある處を、家壽雄が獨占だ。

それは好いが、あの婦人は大鞄を抱へて居たが、如何したらう。自分でさへ彼の様であつたから、さぞ乗るのに困つたらう。機關室の處が通り難くて、此方へ來られずに居るのでは有るまいか。話し掛けた間だから、何んとかして遣れば好かつたと考へて居る處へ、縞目の不分明なまでに垢付きたる襯衣と腿引とを着たのみの、それで寒さうにも仕ない船僮が、座蒲團を一枚持つて來て、投げる様に其處へ敷いて呉れながら、

『お前さ！　何處上り？』と言葉を儉約する事甚しい。

『切符！』と言つて手を出す。

『潮來！』と此方からも吝にする。

『そら！』と投出して遣ると、それを持つてふいと行く。

汽船は未だ出ない。荷役が濟まぬのでかと思ふと、人足は既う棧橋で煙草にして居る。子供が下駄を發着所へ忘れたのを、婆様がよぼ／＼しながら取りに行つた。それも歸つて來たが、未だ出さぬ。如何したのかと窓から首を出して見ると、漁船を寄せて老爺が一個、手綱に石斑魚を二三尾入れたのを、兩手で高くさし上げて居る。ピン／＼網の中で跳ねるので、生腥い飛沫が此方に散る。甲板の上から、それを價切つて居る聲は、靴を咎めたのと同じ音調だ。

『もツと敗けろえい。午餐の菜だアよ、六貫も七貫も出せるけえ』

老爺は手綱の重みを振つて見せながら、

「ほーら、生がこんなに好えだアよ。目方なら七百五十目は缺けねえだ。六貫なら苦情ぶつがものあんめえ。常平丸が餘まりコギるてえと、他の石炭船が眞似え扱いておえねえだア。買はツせえよコギらねえで…』

『老爺、うまく言かしやアがる。それが七百五十目、何んであんべえ』

『え丶、懸けろなら懸けて見せべえだが、おらが日分量に狂ひが出た事ねえだからの』

『そんだら、はア、懸けて見せろえい。狂ひが出たら、爺様も、魚も、一處に晝飯の菜にするだぞ』

『面白え、さア見さツせえ』

天秤を出して最初は空籠から目方を取り掛つた。

此様子では、未だなか／＼出ないと、家壽雄は觀念して首を引込ました。

其所へ船僮が、それでも茶を持つて來て呉れた。茶盆の上に切符へ鋏を入れたのを載せて、返して呉れた。

『おい、此所は僕だけかい』と問うた。

『然うでさア』と答へながら行かうとする。

『鞄を持つた女の人は…此方ぢやアないのか』

『知らねえな、そんな人は…』

それ切りで、振向きもせず去つて了つた。

## 三

河の中央から國は二ッに分れて、此方は下總、向地は常陸。牛堀や潮來の高臺は、此邊から能く見える。今日は水蒸氣が立たぬので、別して手の達く程に近く見えて居るのだが、斯う時間を取つては如何もならぬ。一層の事、荷足船を仕切つて、十六島の間を行つた方が、早くも行かれる、風流でもあつたと、家壽華は後悔の念頻りだ

すべて斯ういふ破目に陥る運命なのだ。甲の新聞が廢刊して今にも潰れさうなので、いろいろ運動して漸く乙の社へ移つて見ると、急に內閣が變つて、御用が前の社へ轉じて了ふ。政事上の問題には關係せぬ身の、如何でも好い樣なもの丶、社の景氣の惡いので自然滅入つて居る間に、自分が何んの氣無しに書いた雜報が、株主の非常なる不利益とかで、大目玉を食ふ。憤然として辭職して、浪人生活に入つて、それから友人に身の振方を依頼すると、意外に早く進行して、二三日で確定するから、何處へも行かずに待つて居れとある。其處へ突然、依頼もせぬ友人から口が掛る。前約があるから後口を斷ると、前の方が、からりと毀れる。それではと後口へ出掛けると、昨日他の者が入つたと先方でも殘念がる。それから又運動して、香しく無い社ながら入つて見ると、其處は編輯局內が八天下で、互ひにアラの拾ひ合ひで、初版から終版まで喧嘩の絕間がない。頭が惡いと罵倒の的に中つて、自ら退くの已むを得ぬ始末——全く頭は惡いかも知れぬ。新聞記者生活には適さぬかも知れぬ。自分は利根川の中流だ。下總だらうか、常陸だらうか、新聞記者としては高過ぎるし、文學者としては低過ぎるのかも知れぬ。何方つかずが失敗の原因だらうと、唯一個のつれ〴〵から、家壽華は斯うも考へ始めた。

君に恰好適任だと思ふ、如何で遊んで居るのなら、一番調べて來て吳れぬかと、扇谷男爵からの依賴。それがどんな用向かと思ふと、行方半島に別莊地の選定といふ、甚だ下らない事なのである。

靈場に適した、景色も無論佳い、然うして地價の安い處を見出してといふ。それが自分の適任とは、心細からざるを得ない。併し、全く東京で遊んで居るよりは好いので、旅費を受取つて、此所までは來た。

國際問題を提げて、外國に使する人もあるのだ。それも併し、任務だ。賴まれては最後から米を搗きにも來る。これも均しく任務だ。如何なる任務にも忠實ならざる可らず、如何か好い場所を探し當てたいものだ。斯う家壽華が考へて居る間に、汽船は既に佐原を發して、知らぬ間に橫利根に入つて居た。

## 四

「好えだアよ。汽船は誰か遊んべえ。乘揚げてから出て行つて間に合ふだから。好えだアよ、まア、來うッたら來う。はアて、好えだアよ」と龜裂した竹法螺の聲が後で響く。振向いて見ると、眞先に目に入るのは、古服のズボンの裂目から褌の結目が出て居る大きな臀部だ。それに續いてチョッキの間から、木綿の腹卷がハミ出して居るのが分つた。

「並等の切符だからッて、あに構ふべえ。船長が承知だア、誰があんにこえもんけえ。好えだアよ。お千賀さア。はアて、來うてえに」と言ひつつ、次の室から無闇に引張る。白い腕が、じりじりと此方へ。

額にしてある船體檢査の證狀に、船長の名は記入してある。佐伯寬茂、五十三。

「そんなに引張ッちや、痛いわ」と手の主は言ひながら、別して狹い入口を、腰をいたはりな

がら入來つた。疑問の婦人の名は、お千賀であつた。

船長佐伯寛藏の顏は、猛烈に酒色を好む相を具備して居る。石斑魚を肴で一洋盞呷るには早過ぎるが、素面も、醉つても、同じと見えて、千賀の手を取つた儘、どツかと坐した。眼中に家壽雄を容れて居らぬ。

千賀なる婦人は、迷惑さうではあるが、それでも片頰に笑ひを浮べて居る。それで、一寸、家壽雄の方へ會釋をした。

「やい、お千賀さア。如何したッてえだ。お前本統に如何しただアよ。俺、心配でなんねえだア」と取つた手を左右に二三度振動かす、

千賀は危く轉びさうにして、片手で辛く支へながら、

『如何もしや仕ませんよ』

『今度ア何處え行くだア。場所に依つちやア、俺、承知なんねえぞ、承知をよ。あんでも、此常平丸が、直附になる家でねえと、遣んねえよう』

『船長さんの承知が無いと、可恐いから、何處へでも、好きな處へ行きますわ』

『うむ、然うけえ。本統けえ、だら、牛堀にさツせえ、牛堀によ』

『はア、牛堀に仕ませうよ』

『ふゝ、ふむ、甘え事言つて相變らず調子合せて。こーら、洲に載せべえたツて、のんねえよう。こーの女！「と平手で背中をぶッ喰はした。

痛かつたらうが、それでも千賀は笑顏で居る。傍で見る家壽雄の方が、少からず感情を害したのである。乘客の婦人に對して、船長たる者が何んといふ無禮だらう。又自分に對しても、禮を缺かぬとは言はせぬ。一番怒鳴り附けて遣らうかとも考へたが、肝腎の婦人の方が平氣なので、ちと其處まで遣り難ねて居る。

千賀なる婦人と船長とは、前から懇意なのであらう。それも普通の交際では有るまい。少くも千賀が、酒の相手をした間でなければならぬ。

大分疑問が判明して來た。千賀の前身は酌婦かも知れぬ。家壽雄は斯う考へて居る間に、船長はショブルの樣な大きな手を、千賀の袂の中へ突込んだ。然うして卷煙草を二三本攫み出した。餘り手荒にしたので、半分に折れたのもある。

『酷い人！　袖口が切れるぢやアありませんか』

『あゝに構ふべえ。袖口どこけえ、羽織でも衣服でも、皆んな破つてやんべえよ。俺に無斷で千歲屋を出やアがツて、こーの女！』

卷煙草を持つたので、今度は毆らぬ。火鉢を引寄せて、點けようとして、火の無いのに心づき、

『えゝ、この馬鹿船僮。火イ持つて來う、火イ。汽罐の火イ、殘らず持つて來てぶちまけろ」と、いゝおらぶ下から、赫と痰を其火鉢の中へ吐捨てると、灰が、ぱッと立つて、家壽雄の方へ散る。

此所で怒鳴らうとした家壽雄の見幕を、敏くも千賀は見て取つて、

『貴郎、本統に失禮よ。お客樣が居らッしやるのに』と代つて叱つた。

『ふはッ　ふはッ　ふはッ、お客樣ア見て見ねえ振して居さッしやらア。おらがやうな者と喧嘩アぶッたッて、手柄でもあんめえから。ふはッふはッふはッ』と笑ひながら、横向に家壽雄の方を見て、

『やアお客樣ア。かんべんして下せえ。これが船長の役德なんでがさア。月給は安し、碌な配當は哭れやアしめえし。利益は皆んな船主の懷中へ這入つて、それで此方等が一日休み取るにやア、二十五錢出して醫者に診斷を賴むんでがさア。ふはッふはッふはッ』

これでは家壽雄も怒れぬ。苦笑して居るより

他には無い。

## 五

其所へ船僮が菓子を賣りに來た。茶を先に出して置いて、後に菓子を買はせる。此傳どの船にも行はれる。

來て見ると婦人を引付けて、船長が居る。吃驚した顏をして船僮は立つて居たが、

「船長さんよ、皆んな探して居たぜ。ピイトロを誰もやんねえもんだから、秣ア積んだ傳馬をよ、もつとで今、ぶッ喰はせる處だッたアよ」と言つた。

「はアて、好えてや〱。われ、船長が此所に居るだアて、知らせるでねえぞ」と寛藏は意に介しない。

『だツて船長さんよ、皆んな心配してるだアよ。』

「えゝ、蒼蠅え野郎だア。われ、まア責任果えてから口を利けえ』

「あんだね」

「見ろ、われ、火鉢見ろ、火鉢をよ。火イねえだ、火イ。これおやアお客樣に相濟まねえぞ」

「うむ、一人だアから好えと思つての』

「そんだ法があんべえ　責任持て、責任をよう」

「船長さんよ。お前も責任持つたら好えに』

『野郎、生意氣扱くと、ぶッ挫くぞ』

「火さ持つて來るかね』

「持つて來う。汽罐の火イ皆んな搔ッ渫つて持つて來う』

船僮は氣焰に恐れて、菓子箱を置いて、火を取りに去つた。

「野郎、菓子置いてきやアがッた。食つてやんべえ。お千賀さア如何でえ』と菓子箱をぐッと引寄せると、鐵砲玉が鹽煎餅を彈いて、豆捻と胡麻捻が捻れながら片寄る。

「妾、澤山です」とお千賀は、見向も爲ず、燐寸を出して卷煙草に火を點ける。

『まア食はッせえ。おらが驕るだアよ、薄荷にしんべえか、鹽釜にしべえか』と箱の中を太い指で搔き廻す。

「いやですよ。駄菓子なんか」と煙を吐く。

「だら、鹽煎餅が好かッペえ。太けえのを半分宛食ふべえか。ふはッふはッふはッ』と笑つて居る處へ、十能で焚落しを船僮は持つて來て、火鉢の中へ入れながら、

『船長さんよ、本統に皆んな探してるだアよ。最う下りの十三號と摺れ違ひだアから」

「好えてや、好えてや、十三號が來たら構ふ事アねえ、胴腹へぶッ喰はして遣れや、胴腹へよう。おら、此所でお千賀さアの胴腹へ、出齒庖丁ぶッ喰はしてやんべえ處だア』

『ショーねえなア船長さんよ」

「ふはッふはッ、どうも、おらが居ねえと困ると見えるだア』と寛藏、聊か得意顏。

『然うですよ、早く行つておやんなさいよ。お前さんに限るんですからさ』と千賀は、船僮と顏を見合せて笑ひながら言ふ。

「どうも、おらが行かずば、ショーあんめえ。行つては來るだが、お千賀さア、逃げると、おら、承知なんねえぞ、承知……』

「逃げるにも船ですからね。川へ飛込むにも寒いわ』

「違えねえ、それア安心だ……安心だアが、お千賀さア、其所のお客樣ア美い男だア。鹽煎餅半分宛食ッちやいがねえよう』と言ひつゝ立上つた。然うして折れた卷煙草に火を點けながら、

一野郎、眼張つてろ。油斷すると其お客樣ア、摘み食ひ仕さうだかんな」

『あゝに、菓子はチャンと數へてあるだア』

「ふはッふはッ　野郎、何んにも知んねえなア。ふはッふはッふはッ」

## 六

怒吼したり、罵倒したり、禮儀作法悉く捨てて、傍若無人の擧動をして居りながら、それで何處となく愛嬌のある德な老爺だ。一時的の發憤は猛烈でも、持久的の意志は存外弱いかも知れぬ。少し許り狡滑い處が有つても、それが露はれると滑稽に成るといふ程度。元來は癡鈍が加味せられた正直。斯らいふ人が千葉縣人に多い。關東平野の野武士の血が、此邊にも遺つて居るとすれば、佐伯寬藏も確かに其一人だと、家壽雄は苦笑の間に觀察した。

船長も去り、船僮も去つた。後は千賀と家壽雄と二個になつた。

「面白い人ですねえ」と家壽雄は船長を評して言つた。

「仕やうが無いんですよ、醉漢で」と千賀は顏を顰めて見せる。

『いつもあんな調子ですか』

『年中醉つたやうな人ですよ』

「あれでも世は渡れるのですな」

『德ですわね』

簡短な人物評を試みて居る中に、汽笛を雙方から吹き合ひながら、十三號船と擂れ違つた。

あの船長、どんな顏をして甲板に居たらうか。家壽雄は寬藏に就ては考へるが、千賀に向つては深く想はなくなつた。

想像を入れる餘地が次第に減じるからである。前身が酌婦で、寬藏の樣なのでさへ、客となれば、惡い顏も出來ず、酒の相手を爲ねばならなかつた過去。普通の婦人なら顏を赤くすべき處でも、平氣で居る。卷煙草を遠慮なく燻して居る。品性が大體分つて見ると、此婦人を妻にしたらといふ、空想を以て樂しむには、最早や其器で無い。

初めて棧橋で見たのと、今此所で相對して居るのとは、別人の樣に考へられてならぬ。千賀からは何か語りさうにする。家壽雄は突と左方の窓から、顏を外に出して見ると、能く這んな狹い川で、蒸汽が擂れ違ひ得られたと驚く。岸とすれ〳〵に溯つて行くのである。時としては楊柳の枝に船の欄干は觸れさうに見える。蘆の穗一本手にあらば、洗場に立つ娘の肩を、輕く打てさうにも見えるのである。

土手の上を子供が五六個走つて、汽船の速力と競爭しながら、

「常平丸、通んねえで哭んな。常平丸、通んねえで哭んな」と口々に罵るのが能く聽える。此汽船の爲に、土地の神聖を瀆された事の有る樣に思はれる。島民の平和を破られた事の有る樣に考へられる。常平丸の煤煙から火事が出て、家でも燒いたか。泳いで居る子供を車輪に掛けて殺したか。何か失敗したらしく思はれてならぬ。あの船長では有り得べき事だから。

上手の向側に有る家は、屋の棟ばかりが見えて居る。三角塔かと疑はれる。鳥居の上だけ見えて居る處もある。川添の納屋に近づいては、緣の下を通るのかと驚く處もある　柳堤を離れると蘆洲。それが切れると入江。それから續く空田。水の藻の逆立つ狀、杭の影の亂るゝ態、いづれ家壽雄の目に珍らしからぬは無いが、これを又岸の人等は、逆樣に珍らしと見るか、鍋洗ふ手を留め、藁打つ手を留め、或は橋の上に立ち、或は筵の上に坐り、老も若きも此方を目送して居る。日に何回となく汽船は通るのだらうが、通る度に斯くして見て居るのであらう。

不意と枯蘆の間に、一個の婦人の立つのを見た。それが何んだか千賀の樣に思はれてならぬ。直ぐ後に居る千賀ではなく、棧橋で初めて見た時の千賀を想ひ浮べて、枯蘆の間の一婦人に當嵌めて考へたのであつた。一種の離魂病だ。愚劣な空想だと、いつもの癖を斥けるべ

く、他の方面に向つて眼を注ぐと、先手の方は川幅も次第に廣く、蛇籠が見える。漂砂が見える。黄金色の枯蘆を離れて、松黑き中洲が見える。水中の漁小屋。洲の寄に繋り船。

『牛堀！　牛堀！　牛堀上りの方ア支度して下さい』と船僮の聲。

## 七

牛堀の棧橋へ常平丸は着いた。例の、竹棹、麻索、捌木、踏板、甲板の上では麻裏草履が連りに活動して居る。

行方半島の此所が玄關口と云つても好いので。鉾田行、高濱行、土浦行、銚子行、佐原行、此所で皆切違ふのである。此繁榮な一軒で引受けて居る觀のあるのは、棧橋を前に控へて、川向きに店口を有する千歳屋だ。二階、三階、日當りが好く、如何にも居心の好ささうな旅店。家壽雄は船窓から見上げて、此所へ泊つて見たい樣な氣を生じた。

乘り降りの客は片付いたが、積荷が多いので又此所でも手間を取る。それを二階から見降して居る一人の女中。愛嬌のある肥滿の年增だ。

それが目敏く何者をか認めて、

『あらまア、お千賀さん』と聲を掛けた。

家壽雄は吃驚して、同じ列の窓を見たが、千賀の顏は出て居らぬ。室内を振向いて見ると、其所にも居らぬ。何時の間に彼方へ歸つたか。

『お貞さん、久濶……』と並等の方で千賀の聲がする。

『まアお千賀さん、いろ〳〵話があるんだよ。何處へ行くの？』と二階から覗き込む。

『何處へ行くか妾の事だもの』

『ちよいと〳〵、何處へ行くのでも好いわ。一寸お降りな。いろ〳〵話が有るんだからさ』

此話聲を聞付けて、下の店口からも一個小造りの女中が出て、

『まアお千賀さん、逢ひたかツたわ』

二階のは下のに傳令して、

『好いからお松チャン、お千賀さんを引張揚げてお了ひよ。妾も今降りてくから……』

千賀の聲で、

『然うね……だけども……』

小造りの方は、棧橋の端まで走つて來て、

『考へるかものは無いわ。お上りツてばお上りな。話があるんだからさア』

『ぢやア然うしようかしら……』

『荷が有るならお出しよ。持つてくわ』

然う斯うして居る間に、肥滿のも下駄を片々宛突掛けて降りて來る。小造りのが手を延して大鞄を取る。肥滿のが洋傘を取る。千賀は駒下駄を先きへ棧橋へ投げて置いて、踏板を餘所にして輕く飛んだ。

『こーの女！』と龜裂の入つた竹法螺。

『おほヽヽヽ』と千賀も他の二人も聲を揃へて笑ひ出した。

『鉾田まで、乘つてかねえと、引ツぱたくぞ』と寛藏は、甲板の上から竹棹を棧橋へ突出した。

『厭ですよ、特等のお客樣は潮來上りだし。浪逆の海で一人ぼツちだと、おツかないからさ』と千賀は戯れる。

『おツかねえ柄けえ。ふはツ　ふはツ　ふはツ』と笑ひ出した。

千賀は駒下駄を穿いて、甲板から棧橋へ突出して居る竹棹の下を潛りながら、不意と家壽雄の方を見て、につこりして、會釋そこ〳〵千歳屋の店の方へ。

船長、ヤケに大きな聲で、

『ゴーヘー、だア、そーれ』

## 八

牛堀から潮來までは、いくらも無いので、間

もなく家壽雄は陸上の人となつた。此所に知人の栗生源郎といふのを訪問の筈である。栗生といふのは町立の女學校の教頭を勤務して居るので、土地の出生では無い。

住居は潮來町とのみ記憶して居るが、番地無くても分るだらう。併し今自宅へ行つた處で、居る筈は無い。學校へ出て居ようが、それも今頃は教授中だらうと考へて、家壽雄は角菱といふ旅館に入つた。中食も爲ねばならぬからだ。

二階の見晴しの好い室へ通されたが、先づ自分の來た事を通知して置く必要が有ると、使に名刺を持たして、いづれ授業時間後に伺ふからと學校へ遣つた。

食事が終つた處へ、使が歸つて來て、授業中でも好いから、直ぐに來て呉れといふのである。

學校は稻荷山の上にあるのだ。家壽雄は急な坂を喘ぎながら登切ると、其所へ栗生源郎は、木綿の紋附に白小倉の袴で出迎へて居る。痩せた、色の青い、髮を短く刈つた、山羊式の鬚がある、四十二三の人だ。

栗生の出迎へて居るのには格別驚かなかつたが、其後に女生徒が二十名許り、整然として列を作して居るのには、家壽雄面喰つた。

坂を登切るまでは、此列が目に入らぬからだ。不用意の處へ異性の人が大勢列んで居て、其視線が一樣に此方を射たのだもの、顏を赤くせずには居られない。

『やア、わざ／＼お出迎へでは恐入ります』と家壽雄は帽子を取つて禮をした

『ヤア珍客ですからな、當校へは未だ大新聞記者の參觀を受けた事が無いですからな』と栗生は握手を迫りながら言つた。

家壽雄は度切紛しながら握手をして、

『いや、僕は今……』と新聞社に無關係の事を辯じようとするを、栗生は押冠せる樣にして、女生徒の方に向ひ、

『皆さん、此お方が、有名なる大新聞の記者で、志摩家壽雄君でありますから、禮を……』と紹介した。

女生徒は一樣に禮をした。家壽雄は益々面喰ひながら、禮を返した。唯眼に何やら閃いたとばかり、中に美人が居たか如何か、分らなかつた。

『まア如何か講堂の方へ』と栗生は先に立つ。

『御教授中、御邪魔をして……』と家壽雄は恐縮する。

『いや、恰度今が倫理の時間でしたが、貴郎が見えたんで、これを幸ひに何か御演説を願はうとなア、然う思つて、實は急にお招きをしたので……』

『あッ……』と家壽雄は口走つた。

『好えですよ、何んでも好えですよ、一言何か云つて下されア皆滿足します』と栗生は小聲でいふ。

家壽雄には漸く讀めた。栗生は自身の箔を附ける爲に、此方を利用するのだな。斯うは直ぐと感附いたが、併し、今まで侮辱されつゞけて居た者が、少しでも尊敬せられて見ると、嬉しからぬでもない。形式でも得れば幾分の滿足をする。我ながら心猿しいとも亦考へた。

校舍は日本建で、町の倶樂部を流用したのである。二階もあるが、下の緣側で眺望は十分だ。北利根の流を越して、十六島。利根本流を行く白帆も見える。香取の龜甲山は殊に能く見える。入日の頃には富士も見えるさうだ。

家壽雄はそれに見惚れて居ると、栗生は急立てて、

『さア直ぐと講堂へ行つて下さい、皆待つて居るですから……』

已むを得ず家壽雄は講堂へ出た。女教師が三

人、女生徒は前の二十餘名――斯う多く婦人が揃つて居ては、迚も例の惡癖も萎縮して出ぬ。

## 九

別に何を演說して好いか、初めから考へて居べき筈が無いので、唯、潮來の風景の絕佳なのを賞讃し、それから栗生氏の人格の高い事を稱揚し、此二者の合した感化を受けたなら、必らず諸嬢は成功するであらうと、漠然たる事を言つて家壽雄は責を塞いだ。思切つたお世辭を風景と教頭と生徒にまで加へたのだ。

圖書室兼應接室へ入つて休憩した。女生徒が禮式通りを實行して、茶を持つて來た。一人離れたのを見るのだから、家壽雄には能く氣が分つた。これで以て他を推測すると、空想の結婚を行ふ、際前に成るのは有りさうもない、一括して何んだかコチ〳〵感じた。

栗生は非常に喜んで、生徒が大滿足であるといふ事を告げた。生徒よりは自分が大滿足なのであらう。

それから學校の組織に就て語り出した。校長には町の有力家が、ほんの名儀だけ成つて居るので、實權はすべて教頭たる自分に有るといふ事から、町の人の希望は裁縫を主として貰ひたいといふ事であるが、自分は然う思はぬ。此湖間の半島から世界的婦人を出すのが目的であるなど、大氣焰まで聽かされた。

「時に今回は、どういふ目的で來られたのか。夏の休息には最も妙ですが、其代り餘り休息し過ぎると、馬鹿になるかも知れませんぞ」と笑ひ落した。

家壽雄は、扇谷男爵の使命に就て語つた後、「何處か適當な場所は無いでせうか」と問ひ掛けると、栗生は大乘氣で、

「やア、それは既う潮來に限る。他の方を見て遣る必用は無い。まア此眺望を御覽なさい、無類ですな。靈場たツて、何方へ行つても好いですよ。潮來々々、それア最う此所に限るですよ。地面は學校續きでも好し、未だそれにいくらでも好い處が有りますから、これから御案内しても宜しい。扇谷男爵の別莊が出來るといふ事は、當町に取つても非常なる利益ですからな。まア併し、ゆツくり貴郎、仕て下さい。なんなら此所へ泊つても宜しい。然うして下さらんか、宿なんか無駄だから……」

『學校へ泊るといふ譯にも行かんでせう』

「いや、此宅は平常明いて居るので、此所が好えですよ。それに食事は、不味くはあるが、生徒が割烹の實習で拵へたのを遣つて下さい。え、それが好えですよ』と勸め立てる。

潮來では眺望第一の稻荷山、女學校の一室に宿泊して、女生徒の調味した料理を食べるのは洒落て居るが、其所まで自分は世話になる資格は無い。栗生が斯うも言つて呉れるのは、自分に對する好意からばかりではあるまい。扇谷男爵といふ、其聲が嬉しいからでもあるらしく、考へられて、家壽雄は如何も乘氣にならぬ。

『いや、難有う御在ますが、宿も既う取つてあるし、それに此方では、窮屈ですから』と辭退した。

『然うですか。ぢやア御隨意になさつて。いづれ晩方にお伺ひしようし、明日は先づ附近の勝地を御案内する事に致しませう』

「いや、それでは課業の方が御差支でせうから……」

「なアに、課業の方は如何でも好えですよ。他に教員が有りますで、私には、つまり校長代理ですから、大體の事さへ監督して居れば好えので……』と栗生は一向問題に爲ぬ。

地方では斯う暢氣に出來るのかと、家壽雄は之を一興と考へて、それでは後刻お光來をと、辭して應接室を出た。

女生徒等は、硝子窓越しに皆此方を覗いて見て居る。棚に入れた造花の様だ。何んとなくコチコチして居ると考へながら　家壽雄は此所を去つた。

## 一〇

宿に歸つて、湯に入つて、それから家壽雄は男爵宛の手紙を一本書いて居たので、落日の奇觀を見そこなつた。いづれ栗生が來るだらうと、食事を控へて待つて居ると、果して先生、袴を脱いで、兵子帶の汚れを露はしながら來た。

豫て命じて置いたので、女中は先生の顏を見ると直ぐ食卓を運んで、蛸の甘煮に同じく蛸の酢の物など、酒の肴として持つて來た。

「やア僕は酒をやらんのです、餘り……」と栗生は言つて、鬚を扱いた。

女中は、くすッと笑つた。

「まア併し」と家壽雄が言ふ。

「ぢやア、まア、盃だけ」と受けた。

「先生はイケる方だらうね」と家壽雄は女中に問うた。

女中は、くすッ、又笑つて、

『如何ですか』と答へた。

『どうも此所の女中はいかん。お客樣の前でクスクス笑ひなんかして、謹しまにや困る。主人に吩咐けるよ』と栗生は屹と睨んだ。

睨んだので又女中は笑ひ出して、

「先生、駄目ですよ。いくらお睨みなさつても、利きませんから」と樂屋落らしい事を答へた。

家壽雄は女中に指圖して、

「まアお酌して……僕にも注いで貰はう。全體栗生先生もいかんですな　學校で生徒を教育するつもりで、旅宿の女中に對しても、それア駄目でせうから」と戲れた。

「いや、學校でもやる。此所でもやるですがな、今夜は遠來のお客に對して、餘興を御覽に入れるです、催眠術を掛けるんですがな」と栗生は一口味つて言つた。

「催眠術？」と家壽雄は聞咎めた。

「駄目ですよ、先生のは一度も掛つた事が有りませんわ」と女中は笑ふ。

酒盃の動くに連れて、催眠術の話が大分出た。然うして餘りやらぬといふ先生存外に強い。いくら飲んでも赤くならぬ。次第々々に蒼白を加へて、眼尻が吊つて見えるのである。飲酒の質が好く無いなと家壽雄は感付いた。

元來栗生とは、深い交際の仲ではないので、新聞記事に就て、三四度社の應接で會つた位の間なのであるが、此方へ來てからの調子は非常に密接して、然うして斯う飲合つてからは、竹馬の友でもあるかの樣に成つて了つた。いや先方から然うして來るのである。

「君に是非聞いて貰つて、賞賛を博したい事があるので。それは僕の教育法なのだがね」と言葉遣ひまで違つて來た。

「まア教育法なんか、むつかしい問題は、いづれ、ゆつくり承はるとして……」

「いや、それがむつかしく無いので。なに、君、極めて平易なので、誰にでも出來るのだよ催眠術は……」

「催眠術の話ですか、教育法の話ですか」

「それが、その、催眠術を教育法に應用しようといふのでね」

「それア大變だ」

「いや、大變で無いんだ。すべて動物電氣の應用では、心理の働きを如何にでも支配する、それが本來、皆、愛から出て居るので、教師が生徒を愛するといふ、一つの觀念が生徒の方に悉く感應する。これが既に動物電氣から來るので、催眠術の一種に他ならんさ。これをして益々圓滿に發達せしめるには、正式の催眠術を

施すに限る。此術さへ施して置けば、生徒は皆、僕の意の如く教育が出來るですわい。斯くして理想の世界的婦人が、此行方半島から出現する譯で……』と大眞面目で説き出した。

當人は餘程進歩した説のつもりであらうが、甚しく世と隔絶した迂論であると、家壽雄は聞いて呆れた。

『ぢやア君は女生徒に催眠術を應けるのですか』と問うた。

『皆、非常に珍らしがるでね、既に此所の女中達にも應けたのさ。家族が此地へ來るまでは、僕、此所へ下宿して居たものだから、女中達とは皆懇意だが、如何も信念の無い者には困るので、其術の未だ十分に掛らん間に、笑ひ出して了ふので……』と慨然として答へた。

『女中ならば、まア好いが、女生徒に……父兄から苦情が出やせんですか』

『父兄、いや、それが實に難物でね。行方半島太古に似たりさ。教育の有る者と云つた處で、水戸の學風で頭腦を固めた舊思想ばかりだから、お話にならないさ』

『けれども、生中にハイカラがるよりは、其方がお頼母しいではないですか』

『いや、それがいかんのだ。志摩君！　君まで

が、そんな事言つて呉れては困る。君は僕に同情して呉れんぢやア困るぢやないか』と言ひつゝ、トンと卓上を握拳でたゝくと、甘煮の蛸の足が皿の中でぴんと跳ねる。盃中の酒は、ざぶりと溢れる。先生の酒癖を知る女中は、銚子を利用して巧みに此座を脱して了ふ。家壽雄は米飯が食ひたくなつた。

## 二

『潮來のばらいゝ〳〵松とて、船人の目じるしとすとか、たしかそんな文章で利根川圖誌に出て居た有名な松がねえ、志摩君！』と栗生の話頭は轉じて來た。教育催眠術の氣焔よりは松の方が好いと、家壽雄は耳を傾けて、

『潮來のばらいゝ〳〵松、名が佳いな』と受け答へた。

『それが志摩君、お話なんだ。いゝばら〳〵松と稱する老松が、形好く列を作して、稻荷山に有つた。遠くから望んで、如何にも此所の風致を添へて居つた。正に潮來の標的として見られて居たのだが、今は殆ど一本も無い。老人の歯は殘らず拔けた。何んで物を消化させるか、君、考へて見て呉れ給へ』と又論じ掛けるのである。全く這んな問題は面白くない。のみなら

ず、喧嘩でも吹掛けられる樣で、恐ろしくもある。栗生の顏の色は、益々青くなるばかり。家壽雄は厭々ながら、

『そのばらいゝ〳〵松を如何したのですか』

『潮來の金看板たるばらいゝ〳〵松を、町會の決議で殘らず伐取つて了つたのさ。えらい事をするぢやアないか。栗生源郎に松の精が乘移つて辯じずんばあらずだ。潮來の者は、實に情ない事をするよ。町費が不足だといふので、町有地の松を無惨に賣却する。歴史有るばらいゝ〳〵松を伐取つたといふ事は、取不直潮來町が貧乏であるといふ事を、廣告した譯なんである。潮來町に人物が居ないといふ事を發表した譯なんである。金錢は又得るの時がある、あれだけの松は既う得られんぢやアないか』と絶叫して、續いて痛飲を試みる

『それは確かに町民が良くないね』と家壽雄は言ひつゝ、酒を注いで遣つた。

『いやア君は同情者だ。難有い。僕に唯一の同情者だ。僕は君、實際、四面楚歌の聲で、非常に心細く思つて居るんだよ。家族を連れて、君、敵地に居る。心細いぜ。君、子供を四人置いて妻は去年死んだのさ。妻の妹が不具者なんだ。それと僕の母とで、一家七口だ。これで重

闇の中に居るんだぜ。察して呉れ給へ』と言つては又盃を銜む。

町立女學校の教頭で、一家七口、生計は苦しいだらうと、家壽雄は其方に同情すると、此人に何んとなく敬意が拂ひたくなる。下らない議論でも、冷かさずに聴いてやらずばならなくなる。

『ねえ、君、聴いて呉れ給へ。潮來町民で話せる者は一個もないよ。僕の教育法に非難を加へる者があるさうでね……』と話が又逆戻りらしい。

『しかし、催眠術だけは止したが好いでせう。いや、町民の知識が發達して居るか居らんか、僕は素より知らんけれど、然ういふ事といふ物は、誤解され易いのだから、そんな下らない事で町民と衝突するのは、愚ぢやアないですか』と家壽雄は栗生の爲に忠告を試みた。

『下らなかアない。愚ぢやアない。僕は信じて居る。信じて居る事で衝突して學校を止められゝば、本望だ。なアに、這んな處に戀々として居る必要は無い。實に此潮來、いや、總じて茨城縣下は、地方的感情の強い處でねえ君。我々他縣人に對してはそれア甚だ冷酷なんだよ。強烈なる壓迫を加へるんだぜ。別して此行方郡は、霞ケ浦と北浦との間に挾まつて居る半島であるので、割據的精神が甚しく強い。御承知の通り交通の便は非常に悪くツてねえ君。僅かに川蒸汽が着くばかりで、通信機關だッて十分に備はつて居やアせんさ。文明の風が此所だけ吹き殘しとるんだね。といふのが滅多に活社會の人の用が無い處で、現代と全く無交渉なんだからな。いや、往古はこれで日本の大公道、武尊東征の御道筋は行方半島であつたやうだが、今は袋地で旅客らしい旅客は一人も來ないんだからな。世と反する事夥多しい。進歩に伴はん事は非常だ。勢ひ郡民が割據的になり、異分子を嫌ひ、舊思想で固めて新知識を斥ける。その處である。』

滔々として行方半島論を始めたのである。

家壽雄は、ほと／＼弱り切つた。同情はして居ても、つい、冷かしたくもなつて、

『然う如何も土地の人氣が悪くッては、折角男爵が別荘を建てられても、お氣に入らんか知れんですなア』と言つた。

栗生は醉が急に覺めたかと思ふ程、屹となつて、

『それだ、志摩君、然ういふ事情だから、是非扇谷男爵の如き名望ある方に來て頂いて、刺戟を與へて貰はんけれアならん。感化を與へて頂戴せんけれアならんですわい。偏狹なる土地の人に世界的眼光を與へようと奮鬪して殆ど孤立して居る僕に取つて、男爵來と聴いちやア空谷の跫音たらざるを得ないです。志摩先生、それア是非此方へ願ひたいです』と言葉を改める。態度を正す。膝の上に整然と手を置かうとするが、瞳孔ばかり据つて、體は右に又左に幾度となく崩れ掛る。

『然うですな、其方面から考へると、輕々しく否定も出來んですな』と、氣安めの樣だが、家壽雄は然う云つた。

* * * * *

栗生はそれから散々管を卷いて居たが、十二になる女の子が迎へに來たので、それに連れられて、氣焔を吐き／＼去つて了つた。

家壽雄は疲勞したので、直ぐ寢床に入つたが、興奮して居るので、直ちには眠られぬ。

考へて見ると、何方にも理があるのだらう。地方的感情の強いのは、茨城縣下に限らぬ。友人から長野縣の話も聞いた。他の友人からも山口縣、鹿兒島縣、高知縣、各縣の話を聞いた。何處でも此地方的感情の強い爲に、いろ／＼非難の聲が高いのであるが、多く他縣人が接觸し

て居る間には、感情の稜々は磨滅して來る。そんな問題は自然に消亡すべきが原理である。けれども、交通の不便なる地では、それが遲いに相違ない。行方半島は別して此遺跡？ に富んで居るだらう。だが又地方的感情を離れても催眠術の教育法には反對せずには居られまい。何んだつて栗生は變な事を思立つたのだらう。狂的動作に富むといふ事は、或人から豫て聞いて居たが、それだな、困つたものだと家壽雄は、人の爲に苦勞を始めた。

浪人の自分を大新聞記者にしたり、男爵を擔がうとしたり、自個を活る爲に趣味の事をする人だとは思つたが、それも併し、一家七口で、生活難の中に立つて曲りなりにも主義を持し、思想の異なる人と闘ひつゝ進まうといふ場合である、已むを得ないかも知れぬと同情をも持つた。

それや、これや、行方半島の研究をして居る間に、今日の佐原の棧橋に心が飛び、それから又、夢で常平丸に乘り、牛堀で上つた千賀に來た頃に、風に載せて持つて來る、太鼓の音、三味の音、鉢巻女の唄ひつれる甲聲、濁みたる男の笑ひ聲。潮來の菖蒲踊とはあれか。あの女の中に、千賀の聲もある様に思はれ、男の中に、船長が在る様にも考へられる。一體遠いのか近いのかと、耳を澄して居る間に、バッタリと止んで了つた。

如何しても現代と隔絶して居る。本所七不思議の内に狸囃子といふがあつた。今珍らしくそれを聽いた樣な心持をして、家壽雄は言ふべからざるの寂寞を感じた。

二

明くる朝、早くから栗生は家壽雄の處へ來た。何んだか頭痛がする。如何で學校の方は休むのだから、今日は近傍の勝地を案内しようといふ。家壽雄は、それを斷つて、いづれ歸途に寄つて、悠然と見物しよう。兎も角も行方半島を一周せねば、任務を忠實に果したと云はれぬからと言つた。

栗生は、それを打消して、他を見たからとて、地形上、此潮來位好い處は無いのだから、無駄だがなアと繰返した。けれども、然うは行かぬとて、決意を家壽雄は示した。然らば途中まで送つて行かうとて、いくら辭退しても、肯かぬ。

それでは其邊まで送つて貰ふ事にして、共に旅店を出でたが、栗生が例の白小倉の袴を穿いて、素足に駒下駄、根ッ子の洋杖をコツ〱杖いて行くのを、町の人は皆變な顏をして見送るのである。從つて家壽雄も念入に注目されるので、極りを惡く感じずには居られぬ。栗生はそれを少しも構はず、傲然として大道を濶歩して見せる。わざとらしい面影が見えぬでもないが、反抗心の強い時には、是非もなからうと好意の解釋を與へて遣る。

家壽雄は地圖の上に鉛筆を加へて、巡行の豫定線を作つたが、それは潮來から牛堀に引返し、麻生に行き、それから北浦の津澄に横斷を試み、此所を中心として、附近を縱横に歩き、それから玉造に出で、今度は霞ケ浦沿岸を傳うて牛堀に歸る。——牛堀を二度も通る樣に如何して考へたらうか。それも便利には相違ないが、家壽雄は其所が非常に氣に入つたからにも由るのだ。

上戸といふ處で、先年古墳を發見した。見て行かぬかと栗生はすゝめたが、家壽雄は其方の趣味が無いので、止して、川添の街道を眞直に進んだ爲、意外に早く牛堀に入つた。最う此所で好いからとて、橋の上で栗生を歸さうとしたが、いや、序でだから麻生まで行かう。それに、郡役所に友人が居るから、一寸訪問して行

くとて、依然附いて來る。

此所までに、大概世間話は語り盡きた。之から話すには多少專門掛らねばならぬのだが、然うすると栗生から、又例の敎育催眠術を聽かされる譯で、下手をまごつくと往來で實驗の的に立たされるかも知れぬと、なるべく家壽雄は避けて居た。栗生の方からは何か彼か問題を出して來たが、それが皆世から遲れた材料ばかりで、古雜誌の文責在記者の、間違ひだらけの記事を間違つた儘好く記憶して居るので、人猿同祖の分り切つた進化論を、猿から人に成つたなど、得意らしく辯じて困らせられた。

家壽雄は空返辭で受けて居る間に、千賀の事を考へ出して居た。あれから如何したことか、あの牛堀の千歳屋の前を過ぎようとすると、彼の女が顏を出して居る。恰度晝飯時といふので、寄つて、彼の見晴しの好い川添の二階で、鯉の酢味噌に、鰻の蒲燒、茶碗に川蝦魚と蒲鉾か何か、柚の香が滅法高いとある。一杯やる。然ういふ運命になりは爲ぬかと、空想で獻立まで並べたのであつた。

だのに、未だ、晝餐は早い。加之、栗生が附いて來るのだ。既にこれだけ狂ひが出て居る。此樣子では千歳屋の前を、知らずに通り過ぎるのが落だとばかり、甚だ振はずに歩を運んだ。

## 三

麻生は行方郡の樞要地で、郡役所がある、裁判所がある。潮來を鼻とすれば、牛堀が口で、麻生は心臟部。此所には佐藤博士の別莊がある。舊城趾を霞ケ岡と名じて、其所に居るのだ。八國臺、天王崎、風景は好いだらうが、佐藤博士既に先鞭を附けて居るの地に、扇谷男爵が來られずとも濟む譯だと、何處をも別に見ず、大黑屋といふに入つて、中食して、其所で家壽雄は栗生とわかれた。

行方半島を橫斷するのに、極めて幸ひなのは、津澄へ歸る馬があるといふ。それを宿で周旋して貰つて、乘つた。

湖の光を後にして、松山に入る。馬は戰爭當時でも、徵發されずに濟んだらしい老馬で、蹄鐵無しの馬沓穿き。ぽツくり、ぽツくり、首を垂れて行く。手綱をだらりと曳いて先きに立つたのは、二十三四の青年で、手織縞の筒袖に、紺木綿の三尺を後で猫じやらしに結んで、尻からげの裾からはお飾が二三本下つて居る。ツギハギの淺黄の半股引、それで跣足。垢染の手拭を首に卷いて、帽子は持たぬ。

馬子を稼業といふでは無い。百姓が賴まれて荷出しに來たのだと、宿で聞いた。然うだらう。大きな聲では馬をも叱らぬ。最初に、『一先生樣ア石を調べにいぐんでねえけえ』と問うた限り、口一ツ利かぬ。

變化の無い松山の上り下り。人一個に會はぬ。家壽雄は退屈を極めたのである。現代に遲るゝ事遥かなりといふ考へを生ぜずには居られぬ。自動車が段々殖える時世に、駄馬の背に足を踏張り出して乘つて、ぽかり、ぽかり、と行く。手綱が緩んで中ほどが地を摺る。枯萱の葉先が引懸る。其儘二町でも三町でも引懸つて行つて、いよ〳〵振落されさうになつて、徐く殘り、散々曲藝をした後に、漸く緣が切れたかと思ふと、赤蜻蛉が直ぐと來て代つて、其跡へ止らうとして、得ず、馬の鼻面を掠めて急に橫へ反れて飛ぶ。向うの捨草鞋を吊上げは爲ぬかと心配して居ると、如何か斯うか避け得たが、馬糞の乾びたのは到頭跳ねた。馬主はそんな事は知らぬ。振向いても見ずに行く間、餘りに緩み過ぎるのを狙つて、馬は、ついと、脇を向いて、枯草をぱく〳〵やりかける。——這んな事でも眼を配つて、社會の大問題かの如く思考するにあらざれば、餘りに天下が無事過ぎる。

實に好いと家壽雄は考へた。激甚なる生存競爭に失敗を重ねた弱者には、斯ういふ處に來て腦を安めるに限る。これでは自分の疲勞せる精神も、復活するに相違あるまいと、何んとなく喜ばしさが籠上げても來た。

其間、砂利の多い新道は、村落に入つた。此所は靑沼である。それから又、雜木山に入り、池の端を過ぎ、多少の變化を見るに至つた。家の造り、人の姿、目に入る物皆珍らしく、餘り考へずに居られる樣に成つた時に、馬主は突然振向いて見て、

『先生樣、津澄の、誰がの家へいぐでやんす』と問ひ掛けた。

『武崎といふ家が有るかね』と家壽雄はいふ。

『武崎てえと、澤山あるでやすが、本家の方でやすか』

『何んでも文左衞門といふ人の家だが』

『あゝ、本家の事でやす。文左衞門さアのとけえいぐなら、矢張此れで好えでやす。最うはア、此所さア津澄でやすから・・・』

『と最う直きかね』

『未だそれでも十四五町はありやすツけ』

『津澄村は、却々廣いのだね』

『組合村でやすから、却々廣う御在まさア。中根と繁昌、それから山田、吉川と、斯う合したでさ・・・武崎さアの處は山田村でえす。わしが家は、繁昌村でえ、家の前を通つて坂さア落ちると近いでさ・・・』

『どちらでも好い樣に・・・大層早く着いたねえ』

『何時になりやすけえ』

『三時少し過ぎだよ』と時計を見て答へた。

## 一四

繁昌小學校の手前から街道を左に曲つて、それから高畑の間を脊髓骨の樣に通つて居る小徑に入ると、馬は自然に急ぐ樣になる。我家の近いのを知るからであらう。既にして岐路を右に、だら〳〵と降りる坂の中途、谷戸の入込んだのを前にして、ボサ垣の一構への其所へ來ると、馬主は手綱を、木槿の枝に一寸引懸けて、

『ちよツくら行つて來やすから・・・』と言ひながら、サの字門の中へ駈込んで了つた。

此所が馬主の家だなと注意して見ると、突當りの家の造りは、可成り大きい。其後の方へ未だ新築間も無い土藏も見える。左手の崖に沿うて肥料小屋と馬小屋とが並んで居る。此所の若主人としては、荷を積んで行き客を載せて歸るといふが相應せぬ。下男かも知れぬ。何んといふ家だらうかと家壽雄は門柱の表札を見ると、奈良場扇吉とある。

庭を見ると、霜にいためられた菊がある。それから鷄冠花が別の方に植列べてある。馬小屋の前に大きな柿の樹、葉が悉皆落ちて、實だけが鈴の樣に成つて居る。澁いのを其儘にして居るのだらう。既う熟し切つて、烏の啼聲にも落ちさうだ。此づく〳〵に夕日が射して、眞紅な色が透明つて、一々核子が數へられさう。

家壽雄が一心に柿の實を見て居る間に、馬は蠅を追ふ勢で、木槿に懸けた手綱を振落し、主人が家へ入つたのなら、俺も小屋へ引取らうといふ風で、のそ〳〵と歩き出した。門の冠木で家壽雄は帽子を拂はれさうになつた。

驚いて留めようとしたが、駄馬を馭するの術を知らぬ。鞍の前坪を攫んで、後方に反つて見たが、效能は無い。到頭門内に入つた。それは好いが、直ぐと又馬小屋に飛込みさうなので、家壽雄は弱つて居ると、漸く其所へ馬主が來た。

吃驚して手綱を取つたが、格別馬を叱るでも無い。客に詫びる事もしない。『さア行きやんしよ』と言つて先きに立つので、又門を潛らせられた。

「兄さん、これ、持つてがねえけ」と後から、優しい女の聲で呼留めた。何か忘れ物を持つて追掛けて來たのだらう。家壽雄は振向いて見たかつた。物を何か見たいのではない。持つて來た人を見たいのだが、門を出ると坂路、馬は首を前に垂れて、後足の方が高くなつて居るので、鞍の上は頗る危く、首を切つて附替へるに非ずんば不可能だ。

「あに、好えだよ。持つてがねえ」と言つて歩き出した。

それ切で坂を降りて了つた。其所には枯蘆の折れが蓋をして居る小池がある。其端を廻ると、空田の間の畔路に入る。家壽雄は例の癖が出て、空想の結婚に入る。

兄さんと呼掛ける位だから、妹――兄弟で奉公して居るのは例が少ない。如何しても此青年が扇吉といふ主人でなければならぬ。此扇吉の妹だから、これを女にして考へると、餘り美人ではあるまい。

けれども、もし自分に配したとなれば、頗る柔順だらう――柔順過ぎて滅多に口を利かぬだらう。時の流行に就て當てこする樣な事は決していふまい。米櫃が空に成つても訴へ出る樣な事は滅多に仕まい。これは自分の樣な者には適當の婦人かも知れぬと考へた。

まるで顏を見ないのだ。聲だけ聽いたのであるから、空想を入れる器が非常に廣い、と同時に想像した娘の顏がぐら〳〵する。鞍の上の危さと同じ程だ。扇吉の顏に島田髷を附けて考へて見たり、千賀の顏を若くして考へて見たり、つい、馬面に考へられたり、頰が熟柿に思はれたりする間に、津澄川の畔へ出た。

此所から見ると、山田村の臺地が屛風を立てた樣に向うを限つて居る。其中程に、夕日が其所ばかりに光を集めた樣に輝いて楓樹が見える。其右寄に藏の白壁が大小二戸前目立つ。それから瓦屋根の大きな住居。あれが武崎だらうといふ氣がして問うて見た。

『あれが行先の武崎かね』

『なアに、あれでごあんせん。あの山の入込んだ間でさア』と青年は答へた。

斯う想像が脱れては此青年の名も怪しいと考へて、

「君は、扇吉といふのかね」と問うて見た。

青年は吃驚して振回つて見て、

「然うでさ……」と答へた。

當らぬ事ばかりでも無いと家壽雄は獨笑した。

今度は空想が先に飛んで、武崎の家にも娘が有る樣に思はれてならぬ。背後の結婚は、聲だけ聽いた人を捕へたので有つたが、面前のは、未だ聲も無い。第一、娘が有るか無いかそれさへ分らぬのだ。それと又空想の結婚は、全く愚劣だと、打消さうとするが、如何もいけぬ。矢張、楓樹、白壁、それが武崎の家の樣に思はれて、其所に色の白い娘が高島田で、振袖を着て立つて居る樣に思はれて、自分が其所へ武者修行か何かで逗留して居る間に、戀が成立つとやらに昔の草雙紙の筋らしい事まで考へて居る間に、小田の掛藁が垣を造る間に入り、それから藪端に添うて行き、山の折曲つた處に突當ると、家組は大きいが如何にも古い、唯しかし門構へだけは立派な家が目に入つた。

「此所でやすから……」と言つて、扇吉は立留つた。

## 一五

馬から家壽雄は後向に飛んだ。外套の袖が颯と開いて、靴の音が意外に強く地面に響いた。四邊に居た家鷄は、溝を飛び越す、空田へ逃げ込む。門の處に寢て居た犬は吼えも得せず、これも逃げ腰で尾を垂れて居る、

鞍に結付けた籠など扇吉に解いて貰つて居ると、後に四十五六の農夫が一個、案山子に着せても惜しく無い樣な扮裝で、萬鍬を擔いで泥足の儘で突立つた。赤ら顏の、目の圓い、髭深い、罷り間違つたら承知せぬといふ面構へ。

それと見て扇吉は丁寧に頭を下げて、

『これアお邪魔すツけ』と言つた。

其農夫は、輕く頷いた儘で、何とも言はず、ついと門の中へ入つたが、其處で立留つて、不安な目で此方を見下して居る。

『あれは何家の人かい』と家壽華は聲を低くして問うた。

『あれでさ、文左衛門さアは……』と獨り勝に扇吉は答へた

當らぬものだと家壽華は驚いた。村會議員をして居て、なかなか村の有力家だと聽いて居たので、想像では、最少し風采の有る人に描いて居た

扇吉には、麻生で定めた通りの賃錢とそれから酒錢を一緒に與へて遣つた。喜んでそれを受けて、直ぐと今度は自分が横乘をして上から手綱を操りつゝ、引返して去つた。家壽華は門の處まで見送つて行くと、文左衛門は怪訝な顏をして、此方を見詰めて居る。

『此方は武嶋さんですね』と家壽華が問ふと、文左衛門は唯一言、

『然うでやす』と答へて、依然として動かぬ。胡亂な者は門內一歩も入れじといふ風が見える。

『私は東京から來たんですが』と言ひつゝ紹介狀をポッケットに探つた。

『へえ――ン』と尻上りの答へをした。

『玉木君の紹介で來た者ですが……』と言ひつつ紹介狀を出した。

『へえ――ン』と答へて、それを受取つて、萬鍬を擔いだ儘、むつかしい顏をして、封を切つたが、悠々と讀み了つて、初めて微笑を洩して、

『好うお出でやんした。さア、ま……』と言つた儘、母屋の方へ行く。家壽華も後から蹤いて行くと、

『少時如何か……』と言つて、蜜柑の樹の傍に立たして置いて、勝手口へ姿を消すと同時に、大聲で家中に大號令を發した。靜かなので、悉くそれが家壽華の耳に入る。

奧の間の雨戸を開けろ、縁側を片付けろ、それ床の間に掛物を懸けろ、客火鉢を出せの、茶道具を出せの、續發である。

これに應じて働く者は、何人だか、主人の大聲と反して、一言も發せずに遣るので、家壽華には分らぬ。

主人は裏の方へ廻つて、釣瓶で水を汲んで、手足を洗ひながら、未だ何んか彼の指圖を發して居る。如何なる場合にも泰然として居るといふ顏を最初に見せただけに、今の此の物々しさが家壽華には滑稽染みて考へられる。

暫うして主人が、足を洗つて、衣を改めて、平常は締切つて有つた座敷を開き終るまでには、日は既に落ちて、前田に晩煙が滿渡つた。

其間に家壽華は蜜柑の數を算して、一本に能く這んなに成るものだと驚くのであつた。

## 一六

武嶋の總本家といふのだから、依然大農風であらうと思つたのか、これでは馬を引いた扇吉の家よりも下ると、奧の間に通された家壽華は、見廻しながら考へた。

障子が各所に於て破れて居るので、縁側に積織臺やら絲取車やらが置かれたのが、能く見える。座敷の一部を屏風で劃した中には、何があるか、其處は暗いので分らぬ。床の間には鹿の角の刀架が、何も懸けずに置いてある。掛軸は何者かの山水、心に留めて見る氣にならなかつた。

『えゝ、好く早や這んな處へ、入らツしやツて下せえまして、何んにも早や、御饗應が出來ねえでやすが。如何か、ま、御ゆッくりと願ひてえで……』と衣服を改めて出て來た主人は、念入の挨拶。門の處でとは別人の樣だ。

「今回は飛んだ御厄介です……何分宜しく御願ひ申します」と家壽雄からも挨拶。

「へえ――」と言つて又頭を下げたが、自分で持つて來た煎茶器で仔細らしく茶を入れて、續いて蓋物の中から匙に一杯、砂糖を杓つて、

『さア如何か』と茶托を載せて出して、

「さア如何かお手を……」と勸めるのである。

『はい……』と言つて家壽雄はもぢ〳〵して居ると、盆ゝ向うからは匙を突出して、

『さア如何かお手を……』

仕方が無いから手を出して受けたが、點心に砂糖は恐縮せざるを得ない。地藏手をして膝の上に持耐へて居る。

『えゝ、玉木先生には、いろ〳〵御厄介に成つたでえすが。其御友人で先生樣のやうな方がお出で下せえまして、寔に早や名譽で……』と先方でも恐縮して居る。玉木が自分の事を吹いたのだらうと思ふと、家壽雄は何んだか氣愧しくなつた。

『えゝ、それで、扇谷男爵樣の御別莊地を御探しになるさうでやすが……實に難有い事で、是非、手前、御世話致しますで、如何かはア、それは、當山田村に願ひたいもんで、お氣に入りやした地所だら、はア、わしがどんな事したからツて、御恰好にお世話するでやす」と文左衛門は頗る熱心に申入れた。

これで候補地が二ケ所となつた。潮來と山田との競爭だ。

其間、室内は一息毎に暗くなつて來る。家壽雄の掌中の砂糖のみが白く見えて居る。其處へ誰やら入來つた。女とは知れたが、如何いふのだか、好く分らぬ。洋燈を持つて來たのだらう。細長い箱を座の中央に置き、袂から燐寸を出して、摺つた。

洋燈の紙蓋とすれ〳〵に廂髪が目に入つたので、家壽雄は吃驚した。

火を點け了つてから、其廂髪は文左衛門の下手へ坐つて、

『入らッしやいまし』と丁寧に禮をした。

『えゝ、手前の娘で、時と云ひやすで、如何か先生樣、御逗留中は扱き遣つて下せえまし』と文左衛門は家壽雄に引合した。

『あッ然うですか、東京へでも入らッしやツて居たのですか」と家壽雄は片手を膝の上に保存した儘で、辭儀を返した。

『いゝや、兄の方は唯今東京へ參つてやすが、これは潮來の女學校へ此間まで行つて居やして……』と文左衛門は答へた。

「潮來……それでは栗生さんを無論御存じでせうね」と家壽雄は言つた。

『はア……』と答へた時子は、何んだか冷笑を漏した樣であつたが、洋燈の光を避けても居たし、又視線を直接に向けなかつたので、分らなかつた。

斯うして文左衛門は、娘の紹介は仕たけれど、妻に就ては一言も語らぬ。死んだのかと疑つたが、然うでもない。勝手の支度をして居るのは其人らしい。他に傭人が居るのだが、それで客の方へ出て來ないのは、男尊女卑の極端の例が、此邊には未だ遺つて居るのかと思はれる。

彼是一時間ばかりして、時子が膳部を運んで來た。お椀にお平は蓋を取らねば分らぬ。猪口附に菊の花漬。皿盛に、黒いどろ〳〵した物が掛けてあるが、箸を附けて見ねば何か分らぬ。つい此方ばかり見て居たので、時子の顏立を未だ能く見定めるを得なかつたが、潮來の女學校

といふ概念から生み出して、何んとなくコチコチした樣な女に思はれてならぬ。眼の前に無い人は却つて明瞭に思ひ浮べられるが、標的が其所に居ると、如何も見極め得ないのである。初心の時期は通り越して居て、それで斯うなのは、矢張病癖の內かも知れぬと、家壽華は時々思ひもする。

「さア如何か一ツ」と文左衛門の手で日露戰捷記念の國旗附の盃を瀨戶物の盃臺に載せて出された。酒も好いが、砂糖の始末をせねばならぬので、已むを得ず家壽華は、掌中のを口に入れた。それで漸く盃を受けると、時子が酌をして呉れる。一口飲んで見ると、猛烈なる地酒だ。それが舌に殘つて居る砂糖と衝突して、胸を惡く感じずには居られぬ。

黑いどろ／＼した物を箸で取つて、口直しにもと頰張ると、鰻の大切の竹の皮程のを味噌で煮たのだ。これはと辟易したが、好意に對してそんな事は出來ぬ。鵜呑にした。お平の蓋を取ると、葱の青葉に燒豆腐と鱧、先づ其汁を吸ふ事にした。

## 一七

文左衛門は見た處大酒家らしいが、少し飮むと、さなきだに赤い顏が益々赤く輝いて來て、賓頭盧を塗直した樣に見えるのである。昨夜栗生の蒼い酒に苦しめられた家壽華は、如何か今夜は早く切上げたいと考へて居た。けれども文左衛門は大層話好きで、扇谷男爵を首題にして語り續ける。次ぎから次ぎと多く新事實を語るならば、未だ聽かれるけれど、一ツ事を二三度繰返して漸く次ぎに轉じ、又それを二三度繰返す間に、前へ戾る。弱らざるを得ない。

文左衛門は、扇谷男爵が議會開設以前に活動した、其時代の事を知つて居るのみ。其以後の事は知らぬのだ。其以前の、政界の大立者であつた儘で、今日にも尊敬するので。其以後の男爵が、現時如何なる程度に於て社會から見られて居るか、全然頓着しないのだ。

つい、家壽華が口をすべらして、爵位門閥の必らずしも今日では貴重すべきで無い事を言つた時に、文左衛門の態度は屹と鯱子張つて、

「然うでねえでやす、如何しても此家柄が第一でやす、家柄が、はア、惡くツちやア、誰も、はア、相手に仕ねえでやすから……」と理窟にも成らぬ事を理窟にして言立てた

家壽華は、之に對して眞面目に論辯する程若輩では無い。直ちに前說を撤回して、差支ないと考へて居ると、文左衛門は時子の方を顧みて、

『既にこれにでも、諸方から緣談が掛るでやすが、どうも手前共に相當の家柄がねえでやすから、皆んな、斷つてるでえす。はア、いくら金子が有つても、新百姓や何んかぢやアしやうねえでやんすから……」と言つた。

家壽華は初めて覺つた。なる程、地方では、祖先を誇り、家柄を自慢するの風が盛んであるな。斯う氣が着いたので、透さず問ひを發した。

「いや、御當家は非常に古い……何んでも系圖の正しい舊家であると、玉木君から聞きましたが……」

文左衛門忽ち相貌を柔げて、

『はア、古い事ア古いでやす。ちやんと系圖にも、それから書類にも有りやすツけが。常陸大掾平國香から續いてるでやすから……」と得意氣に語つた。

「何んでも然ういふやうに聽いて居ましたが、今の世には珍らしいですな」と切つて附けた樣な拙い事を家壽華が言つたが、それを何處までも嬉しく聽いて、

「それに、刀だの、守本尊だの、古い物が皆んな保存して有りやすでえ、縣廳から役人でも

此土地へ來られると、皆んな見に來られるでやす。名刺貰つときやすッけが、中には位の有る人も多いでやす。實に名譽でやす。先生樣の名刺も頂戴致して置きたいで、皆んな、後の世になると寶物でやんすから……」と言つた。

現代と離れる事遙かなりといふ感が、此所でも強く家壽雄の頭腦を刺した。

＊　＊　＊　＊

話が切れて、食事が濟んで、それから家壽雄は奥の間に一個寢た。……眼が覺めて見ると、枕下の行燈は消えて、眞暗だ、何家に寢て居るのか一寸考へ出せなかつた。大分眠つた樣だから、夜明ではないかと、探見電燈で時計を照して見ると、恰度一時半だ。

用を便じる爲に外套を羽織つて、電燈筒を提げた儘、宵に敎へられたる如く縁側へ出て、それから雨戸を開くと、外は宛如晝の樣、月夜なのだ。これでは電燈は要らぬのであつた

其所へ廻してある下駄を突掛けて、下へ降りると、ごそ〳〵と音して縁の下から、犬が一頭這出した。然うして身ぶるひを一ッして、何處かへ去つて了つた。

霜が早や落ちたかと思ふ程廣庭は眞白に見えて居る。其一部に眞黑く蜜柑の樹が立つて居て、枝が投網を打つた樣に押冠さつて居るので、何處からか影だか分明しない。

物置の一部で用を辨じて出ようとすると、軒並びの小屋の内で、ごそ〳〵音がする。何んだらうと透して見たが、月の光は此所に射さぬ。邪魔であつた電燈を用に立てて、環を附けると、ぱッと圓い光が發して、照し出したのは――馬だ。

寢藁の中に腹這ひながら、馬は馬の夢でも見て居るらしい。喰殘しの豆に鼠が集つて、それでごそ〳〵音がしたのかも知れぬ。

外套は羽織つて居ても、寒いので、早く家に入らうとして、喉の渇したのに心づき、未だ青いけれど、蜜柑を一ッ貰はうかと、其樹の影の黑い中に入るに、其所に何時來たのか、一個隱れる樣にして立つて居る。

電燈で、ぱッと遣つた。

吃驚した顏で、眩しさうに。それは時子であつた。

寢間衣は筒袖で裾短かである。赤い細帶で、くびれる樣に胴を締めて居るので、腰から下が茫漠として見える。それが袷らしい、さも寒さうだ。

「あッ貴女ですか」と家壽雄は言つた

「はい……」と答へた時子の顏には、微笑が含まれて居る樣に見えた。此時は既う電燈は消して居た。

時子は雨戸が開く音を聞くと、直ぐと後から出て來たのかも知れぬ。何しろ寒さうだ。コチコチして居る樣だ。自分は體が固くなる氣がしたので、家壽雄は蜜柑をさへ千切らずに、驅込んだ。

＊　＊　＊　＊

それから如何しても眠られない。眼が冴えて了つて、神經が昂ぶるばかり。時子がこそ〳〵と歸つて縁側傳ひに次の間に入つたのも知つて居る。犬が縁の下に歸つたのも知つて居る。

二時、それから三時。其間の靜かな事、電車汽車の軋り其他、殆ど夜通し物音を絶たぬ東京の事を考へると、大變な相違である。此所には何んの聲も無いのである。懷中時計の針の音が意外に高く枕下で響くのでも分る。腦を休めるには全く好い。此所が人間の本統に生活すべき處かも知れぬ。斯うした處に生活して居る人の思想が、正しいのかも知れぬ。此聲の無い里に、世から遲れるの進まないのと、そんな事が有るものかとまで考へられて來た。

いや、併し、語り切るには早い。未だ自分は

活動せねばならぬ。休息してから更に復活せねばならぬ。社會から吐出されることは餘りに早いと考へた。

## 一八

明くる日、晴れては居るけれど、風が強く、何んとなく騷々しい。昨夜までの平和が破れた樣な氣がして、飛んで行く雲の形は、敗兵の姿の樣にも見える。

[illegible]の[illegible]から[illegible]の端へ掛けて、今朝は知らぬ顏が六七個、いづれも文左衛門を中心として、二ツか三ツ上下の年配で、髭の有るのも見える。これに昔當家の親類及び友人で、村會議員或は學校の教員なども混じて居る。如何したのかと聞く〳〵、皆見廻りの供をするといふ事である。家壽雄は恐縮した。多數の人に、時間を費さして、足勞を掛けてはと辭退したけれど、なに皆名譽に思つてるんです、然うして是非とも男爵の別莊地を、當村に選定して頂きたいものですからと、文左衛門は得意である。

[illegible]方を見た上でなければならぬ、山田村の中に選むのではない、行程の内で探すのだから、[illegible]しても、文左衛門は、[illegible]で何んとかいふは[illegible]なかつたからとて、此所程好え處はねえでやすからと、先きへ極めて掛るので、これから如何なる事かと家壽雄は、薄氣味が惡くなつた。

「さア行きやんしよ」と文左衛門が先に立つて門を出た。主人此日の扮裝は、明治二十年の博覽會見物に出た時に買つたらしい山高帽を頂いて、同じ時代の鳶合羽を着て居る。後に續く連中も、大概類型である。其後から又子供が五六個、今日は日曜と見えて矢張附いて來る。

奇なる行列！と家壽雄は可笑くなつて來た。

門を出て間もなく岐路に當ると、一同で揃つて立留つた。然うして議論が二派に分れた。

南無佛ヶ池の方を先きにしたが好い。いや、大樹神社の方へ直ぐ行つたが順序だといふ。それが甲論乙駁である。道陸神の前で今朝は村會が開けたのだ。

此所は最も風當りの強い處で、時々議論が吹飛されて了ふ。其最中に一個が煙草を吸はうとして、燐寸を探したが、無かつた。誰か持つて居らぬか。おう俺が持つて居たッけと探して見て、無い。それなら俺が持つ居ると、他の一個が出す。其間、議論は中止だ。人垣を造つて風を防いで、燐寸を擦つて煙草を喫かしながら、又議論だ。風は相變らず強く、議論と烟と一所に吹飛ばして了ふ。

これを家壽雄は、少し離れて見て居て、遙かなり、と心に叫ばずには居られなかつた。此所に來て此人達と列んで立つて見ると、自分は決して劣敗者ではない。斯ういふ感じを生ぜずには居られなかつた。

漸く議は決して、南無佛ヶ池の方を先きにした。途中、畑を耕して居る者や、家で爐に當つて居る者が、何事かと皆驚いて見送る。中には問ふ者がある。文左衛門は得意で説明する。問はぬ者にも時として説明する。はア然うけえ、俺もお供しべえと、鍬を捨てて附いて來る者もある。行列は益々人を加へるのである。

やがて南無佛ヶ池といふのに着いた。なる程、鴨や雁は降りさうな池で、獵場には適當かも知れぬが、別莊地としては、眺望が絶無で、餘りに山の間過ぎる。家壽雄は首を傾けた。

それから今度は、大樹神社の臺地に行つて見たが、如何も思はしくない。

鶴ヶ岸の坂上に廻つて見ると、此所は實に眺望が佳い。正面には北浦を隔てて、鹿島半島と相對し、右手には大谷戸を越して[illegible]田、[illegible]倉の臺地と相接して居る。ただ、此所に、眺望を

主として建築すると、是非とも座敷を北向にせねばならぬ。夏は好いか知れぬが、冬は迚も耐るまいと考へて、家壽雄は又首を傾けた。
　それから又、其所此所と、諸方を引張り回されたが、何所も氣に入らぬ。けれども露骨にそれを宣告するには、家壽雄に於て勇氣に缺けて居る。と云つて、氣休を巧みに言うて置く程、狡智にも長けて居らぬので、極めて不要領に第一日を終つた。
　行列は、ぞろ〳〵と皆武崎の家に入つて、外の風の寒さを、爐の端に忘れるべく寄つた。家壽雄も亦、此所の中に入ると、間もなく、酒が出る。先生樣を中心にして種々の質問が出る。社會の裡面、政界の秘密など談つて聽かせると、非常に喜んで聽いて居る。先生樣は何んでも知つて居る者として、人造肥料の製法などに就ても質問が出て弱つた。
　後には、扇子や短册など持つて來て、何か一筆と所望されるのに、家壽雄は全く閉口して、卑怯だが醉つた振をして、奥の間に逃げ込み、寢轉んで居ると、爐の端では又村會？を開いて「運動」とか「買收」とかいふ言葉をさへ、ちよいちよい洩して居る。
『お床を敷きませう』と言ひながら、洋燈の下に坐つたのは、時子である。今日は目に立つ程白粉が濃い。
『あツお床ですか…然うですな。それには餘り早いやうですな。昨夜途中で眼が覺めた位ですから』と家壽雄は答へた。
『這んな處ですから、さぞお寢心がお惡いでせう』と時子は言ふ。
『いや、實に靜かで、結構ですな』と家壽雄は眞底から言つたのであるが、時子には、靜かで結構な理由が解しられぬ。寂しくて厭だと平常考へて居るから、
『如何致しまして、東京の方が入らツしやツては……』
『貴女東京へは……』
『未だ參つた事が御在ませんの』と打萎れた。東京を知らぬのを恥辱とするものの如くある。
『潮來には、どの位お在でしたの』と東京を避けて問うた。
『彼方に親類が有りますので、一年ばかし行つて居りました』
『ぢやア大分、栗生さんから、催眠術を掛けられましたね』
『はア……』
『眠りますか』
『いゝえ』と言つて輕蔑笑ひをした。
『栗生君はどういふ懸方をするのか知ら……』
『斯う矢張手を握つて、それから眼と眼と見詰めるのですわ。妾も方法は教はりましたけれど……』
『試みて見ましたか』
『おほゝゝゝ、妾は本統に上手ですよ』と時子は戯れ言ふ。
『ぢやア今夜、眠られんでしたら、懸けて頂かうか』と家壽雄も戯れに釣られて言つた。
『はア、何時でも懸けて上げますわ』と言つて、にツと笑つた。
　斯う言はれると、昨夜の寒さを思出して、身が固くなつて、何んだかコチ〳〵して居るといふ、漠然たる感を生じて、串戯ぢやアないと口を噤んだ。

## 一九

　候補地は山田と定めても、使命を果すには兎も角、各所を見て置かねばならぬからとて、明くる日は、山田以北の地に向つて家壽雄は探檢に出た。他村を見る爲に感情を害したのでも有るまいが、今日は行列無しだ。一個だ。此方が、どの位氣樂だか知れぬのだ。

風は無い代りに、今日は曇つて居る。寒いのは同じだ。成田、三和、穴瀬、高田、串挽と過ぎたが、何處も大概同じ様な景色で、これはと思ふ處を見出し得ず。鉾田へ出て、それから汽船に乗つて、北浦を山田まで歸つた。

その汽船が、彼の常平丸なので、他の乗組は大概見覺えの顔だが、如何したのか船長が見えなかつた。二十五錢の診斷書を出して、牛堀で千賀を相手に酒を飲み、叫び通しにおいらんで居る様に思はれてならなかつた。

武崎の家へ歸らうとして、三井旅館といふ三階建の前まで來ると、文左衛門初め行列の一連が殘らず居て、今夕は、山田の有志が、先生様を招待して、懇親の宴を催し、一席の演説を願ひたいといふ事で、強ひて此所に引留められた。

潮來の女學校よりは遣り好いだらう、東京なら此方から御馳走しても聽いては呉れぬ、何も經驗だと考へて、其招待に應じ、『霞ケ浦と北浦との比較』といふ、毒にも薬にもならぬ事を論じて、つまり霞ケ浦も好いが、北浦も好いと云つた様な事を説いた。幸ひにして喝采を博した。

何分大勢から酒盃を献されたので、家壽雄も醉つた。然うして十二時頃、人々に送られて、武崎の家へ歸つて見ると、時子の白粉は昨日よりも濃く、煤に染つた室内には、端立つて見えた。然うして家壽雄が寢ると蒲團の裾を叩いて呉れる、枕の下に座蒲團を敷いて呉れる。隙が有つたら催眠術でも掛けさうであつた。

明くる日は、山田以南を見廻るべく家壽雄は立出でた。

今日は降るかと思ひの他、からりと晴れて、好い心持だ。武崎の門を出ると、捕虜を脱した様に思はれてならぬ。向ふ所は知らず〳〵馬で來た路。自然に扇吉の家の前。

眞先に目に入るのは柿の實だ。

扇吉の馬で乗廻さうかと考へて、門の中に入ると、庭では今、稲扱の最中である。鯱の下腮見たやうな臺がある。それへ稲穂を束ねては食はせる。穂はばら〳〵と前へ落ちる。莖は後へ投げられる、それを塵だらけになつて遣つて居るのは扇吉だ。

後から稲村が歩き出して來る。見ると何者か稲束を抱へて置きに來たのだ。塵が立つかと見ると、稲束は下に、人は手で胸下を拂ふ。白地の手拭の姉様冠が直ぐと眼に入つた。妹だらう。頬が熟柿の様だらうと見て吃驚した。似て居ると言つたら偶然に過ぎる。似て居る様に家壽雄には思はれるのである。並べて見たら違つて居るだらうが、顔の輪郭は千賀と同式で、目鼻立は此方のが、ずツと美しい。

剥げては居るが盲目縞の筒袖に、同じ色の手甲、紫メリンスの幅細の帶を、貝の口に結んで、瀧縞の前懸の、紐だけが赤い。

扇吉が忙しければ、妹に馬を引いて貰はうかと、家壽雄は既う空想の端緒を開いた。

『やア先生様。過日は難有う御在ました』と扇吉は稲扱を止めて挨拶した。

『如何だらうか。今日又馬に乗して貰へんだらうか』と家壽雄は言つた。

『然うでやすね、馬を今日、他へ貸しやんしたでえ』と氣毒さうに扇吉は答へた。

妹の方ばかり見て居たので、なる程馬小屋に居ないのを氣が着かなかつた。

『や、それは困つたな。ぢやア如何だらう、案内だけでもして貰へんだらうか』

『然うでやすな』と妹と顔を見合せて、考へ始めた。

忙しいのだらう。けれどもそれだけの報酬は爲るのだからと家壽雄は考へて居る。

妹と兄とは顔を見合せたばかりで、解決を

附け離れて居る。其處へ又、大きな稻村が歩いて來た。それが地に倒れると、勇健なる老女が立現つた。

二言三言それに向つて扇吉がいふと、

『おう、行つて來さッせえ。あゝに、跡は好えだアよ』と機嫌よく、更に家壽雄に向つて辭儀をして、

『先生樣、先日は御過分に難有う御在ましたアよ』

扇吉が支度する間、軒から乾大根が簾の如く垂下がつて居る、日當りの處へ唐辛が乾し列べてある、其緣側の一部に腰を掛けて待つて居たが、家壽雄の眼は、障子の破れから、直ぐ傍に置いてある机の上に注いだ。其所には成功雜誌が一部乘つて居る。其重鎭に、斧の樣な石の綺麗なのが乘つて居る。

侮るべからざる者。あんな無口だが、多少は敎育があるのだな。妹にも有るだらうと直ぐ考へた。

## 二〇

扇吉の先導で紫川から吉川の臺地を傳ひ、字を古屋臺と稱する處に足を留めた家壽雄は、思はず知らず、

『此所！　此所！』と口走つた。

此所からは北浦の入江を、南に向つて、竪に見渡されるのである。鹿島半島と行方半島と、小感情の衝突から、右と左とに分れた。けれども、機會さへあれば和睦しようとして居る。此方からは天掛の鼻が手を出して居る。向うからは武井の崎が手を延して居る。其先では津賀と内宿とが握手を仕掛けて居る、最少しといふ風に見えて、然うも行かずに居る。其岬角の松の黑き、其間の水の青き、處々に浮く魞引の帆の白き、いづれとして趣きを添へざるは無いが、此入江の秋の特徴としては、枯葦の日光に輝き、黄金の色の兩岸に連なるのである。それも時々、雲の行來に連れ〳〵、錆びの光りつする處に、神々しさが見られるのである。

『此所は、それに、面白い獵が出來まさア』と扇吉は語り出した。

『やアそれは總てお誂向だな』と枯草の上に腰を下して、家壽雄は聽く。

『鴨が何んでさア、此方の水から彼方さア越す時に、此臺の上さア、すれ〳〵に飛ぶでやすから、それを待伏せて、手網持つて、捕るでさア。それに、此直ぐ下の池が有りやんしよ。あれへ鴨が、びッし來やすッけ』と扇吉は説明した。

『好し、此所が第一の候補地だ。地價とか其他の事も調べて貰はなけれアならないが……えゝと、何んとか言つたね、字を……』

『古屋臺てえますッけ。何んでも城跡ださうで、此所で戰爭したんだ言ひますッけ』

『すると、古戰場でもあるんだな』

『昔は、戰爭ばかし仕たでやすね』と扇吉は言つて、つまらぬ事をしたものだと言ひたい顏。

『今でも知識の上では、絶えず戰爭しとるんだからな』と家壽雄は言つた

『然うでやすかねえ』と扇吉は答へたが、更に又語り出した。

『此邊は、何んでやす、今の日本人になんねえ時代に住んで居た、何んとか言ふ人種が居たッてえやすッけ。大學から、石、調べに來た先生樣が、然う言ひやした。其先生樣の話に、今の人間が住みたいと思ふ樣な處は、矢張昔の人も好えと思つて住んだッてね』

『それア然うだらうさ』

『好えと思つて住んで居ると、他の者も好えと思つて住みに來るでやすね、それで戰爭がぼッ始まる。敗けた方が去ぐだねえ』

『先づ然うだな』

『敗けた者が他に行つて、其所に先から居る人

と又戰爭するでやすね』

『順送りさ』

『今は、既うそんな事は有りやんせんなア』

『然うでもなからう。露骨に武器を取つての戰爭は仕なくッても、智力とか、財力とかで他邦人の侵略はまぬかれ得ぬ。併し、此侵略を受けるのは、一ッの刺撃だからな。刺撃されない民族は發達しない。平和の極度は滅亡の初期だ。此邊に居た太古の或る人種といふのも、平和の極、滅亡したのであらう。今の行方郡民も、餘りに平和が過ぎると、他からの侵略を受けんとも限らんね』と、つい家壽雄は議論めいた事を言つて見た。成功雜誌を机の上に認めたから、此位の事は分るだらうと考へてである。

『本統に先生樣、然うでやすな。いくら土地の出だ／＼と言つて威張つてえても、洗つて見ると未だ其先に居た人が有るんでやすからな。然うして安心して居ると、出生でも、此土地にはア居られなくなるでやすからな。家柄々々ッて、それはッかぶつて居る樣でやア、最う、ハア、駄目でやしよう』と憮然として扇吉は言つた。

然ういふ言葉が出ようとは思はなかつた。

家壽雄は不圖心づいて、

『[illegible]大[illegible]、[illegible]たさうだね』と問うて見た。

『然うだッてえますア』と平然として答へた。

『あれで身代は好いのだらうね』

『えゝ……大分、曲つたてえますが、如何でやすか』

## 二

古屋臺から篦田の方に向ふべく平福寺の横手の坂を二側は降りた。序でだから鴨の寄る池を見ようと、其方に廻つて行く途中に、空家が一軒、家壽雄は立留つた。

庭に萩が亂れ散つて倒れて居る。垣一面に朝顔の蔓が、枯れながら搦まつて居る。根株を積んで造つた假山の下に吹井戸が有つて、胴中の朽孔から斜に水が飛んで居る。それの突當る石燈籠の面が、其所だけ青く苔を生じて居る。

母屋、物置、廐々とはして居るが、屋根の茅葺が大分古く、土臺なども腐つて、根つぎを要しさうだ。我慢すればそれでも住めるのだが、南戸を釘付にして住捨ててある。

『如何したのだね、此家は……』と家壽雄は問うた。

『これ、わしの友達が家でやすが、田舎に居てミッてンねえからッて、東京へ行きましたッけ』と扇吉は答へた。

『何、そんな事が有るもんか。東京へ行つた方が餘程つまらないね』

『然うでやすかね』

『這んなに空家にして置いても仕やうがなからう。貸家にでもしたら如何かね』

『貸家？』と扇吉は驚いた顔をして居る。

『借手が無いのかね』と家壽雄も意外に驚いて言つた。

『有りやんせんなア』と扇吉は突放した樣に答へた。

これが行方半島の行方半島たる處だ。加之此家の主人が行方半島の平和に倦きて、東京へ飛出したといふのが興味の有る問題だ。

此所へ反對に、奮鬪に敗れた自分が、平和の空氣を吸ふべく、巣を替へに來たとしたら如何だらうか。

すべての希望を抛ち、唯此所に靜かなる生活を送ると極めて、それで扇吉の妹を妻にしたら如何だらうか。斯ういふ氣を家壽雄は生じて、先づ最初の問題に就て問うた。

『此家を、僕に貸して貰へんだらうか』

『譯ねえでやんしよ』

『貸すかね』

『貸しやすとも、喜んでそれア貸しやすで……』
次の問題として、其妹を嫁に呉れるかと問ふのであるが、喜んでそれを呉れると言ふか如何か。家壽雄はさすがに躊躇した。せめて名だけでも聽いて置かうと、
『お前の妹の名は、何んと言ふの？』と問うた。
『妹の名でやすか』と又扇吉は驚かされた。突然だから。
『然うだよ』
『お繁てえますッけ』
『好い名だねえ』
『然うでやすかね』
空家の前の問答はこれで了つた。

* * * *

それから、篭田、新宮、藏川、宇崎、根小屋、矢幡、大賀まで行き、其所から引還して、岡、小牧、板峰を過ぎて、繁昌まで戻つたら日が暮れて了つた。此所で扇吉と分れる事にした。無論、餘分の日當を與へたのである。扇吉は非常に喜んだ。
『今度來なせえますだら、わしがの家へ泊つて下せえまし。先生樣のやうな人に來て貰ふと爲になるでやすから……迚もはア、わし等は東京へ出て勉強するわけにいがねえでやすから、せめて東京の方に時々來て、教へて貰えてえでやす』と言つた。
『東京へ出る必要が何んであるものか。斯ういふ平和の境に生活して居るのは、人生幸福の極だからな』
『然うでもありやんせんで』
『あの空家へ僕は來たいと思ふよ』
『お入來なせえまし』
『お繁さんに宜しく……』
『はア』と扇吉は吃驚して答へた。家壽雄はそれ限既う何も言はず、歩き出した。七八間行つて振向いて見ると、薄暗い中に未だ立つて居る。幸福を祈ると念じながら、家壽雄は又歩き出した。然うして不圖前面の臺地を見ると、處々紅い火が見えて居る。未だ石器時代の住民が居る樣に思はれた。

## 三

武崎の家へ歸つて見ると、主人は居らぬ。今夜は寄合が有るのださうな。主婦は例に由つて、影の人で、時子がすべて世話をする。
風呂から出ると奥の間には、既う膳が出て居る。いゝ、わかさぎの煮付に、芋の煮ころがし、柚が掛けてある。お平には例の青葱に落し玉子が固くなる程に入れてある、鰻の味噌煮よりは結構だ。
時子は酌をしながら、
『今日は大變お歩きなさいましたのね。能く路をお迷ひなさいませんでしたね』と問うた。
『案内者が好かつたので……』と答へた。
『誰かお連れなさッて？』
『過日の縁故で、扇吉といふ人を頼みました』
『又新百姓をですか』と時子は眉を顰めて見せる。
新百姓といふ聲に侮辱を含んで居るのを、文左衞門の口からも聽いた。今又時子がそれを言つたので、家壽雄は其説明を得たく、
『新百姓とは、どういふのですか』と問うた。
『新百姓と申しますのは、生粹の土地の人では無いのです。餘所から渡つて來た人達なんですわ』と時子は語り出した。
『×××とは違ふのですね』
『×××とは違ひますのですが、代々此土地で百姓をして居ます者は、交際するのを嫌ひますのですよ』
『何故ですか』
『何故ッて、貴郎……素性が何んだか分らないんですもの……』

『變ですな、もつと具體的に話しては頂けませんか』

『左樣ですね。妾、話し方が下手ですけれど』と前置して所謂新百姓の說明を始めた。

それは、加賀、越後、越中などの人々が、其鄉國の大雪に、冬期に何事も出來ぬので、其間を各地に出稼ぎする。此方にも、男では加賀の小間物賣、越中の藥賣、越後の米搗。女では毒消し賣。年々多く入込んで來た中に、行方半島は、季候も好し、土地も好し、住みやすいといふ事を探り知つて、思ひ／＼に一族打連れ立ち、此方へ言はゞ殖民に來て、不毛の地を開墾し始めた。それが今の人達の五六代前からである。初めは、谷戸々々に掘立小屋を建てて居つたのが、次第々々に成功して、今では立派な家藏を持つのが少くない。それといふが、如何なる勞作をも辭せず、刻苦勤勉、儉約に儉約を重ねて、それで何處までも押通すので、或點は猶太人に似て居ると言ひ添へた。

『然ういふ譯ですから、本百姓は新百姓を嫌つて、結婚なんか、決して致しません。それから、村會議員なども、決して新百姓の中から出させない樣にして居ますの。どんな事が有つても、生意氣な口を利かせませんのですから……』時子は語り了つた。

それで殘らず判明した。これを先きに知つて居て、その後で、扇吉が古屋臺の述懷を聽けば好かつた。然うすれば能く分つたのだが、惜い事をしたと家壽雄は考へた。

『それア併し、つまらない事では有りませんか。煎じ詰めて見ると、貴女方の祖先だツて、殖民的に此地へ來たんでせうから……三四十代前といふ事と、三四代前といふ事と、然う私は違はないと思ふんですがな』と家壽雄は說破せずには、居られなくなつた。

『だツて貴郞、どうせ此方へ流れて來る位の人達ですから、家柄も何も無いのでせう。それと妾達の家柄とは、一處には如何したつてなりませんわ』と時子には全然家壽雄の言つた眞意が通じぬらしい。

『しかし、現代に於ては、未だそんな事が言つて居られるだけ、行方半島は平和なので、然うして貴女方が幸福なのです』と家壽雄は言つて盃を伏せた。此一刹那に栗生の絕叫が道理だといふ事を不圖思ひ出した。

## 二三

家壽雄は翌朝、山田を發して、玉造に出で、それから霞ケ浦に沿うて逆戻りを始めて、手賀から井上に入つて一泊し、五町田、橋門、島並、麻生を經て、牛堀に着き、最初の目的通り千歲屋に入つた。

世の中が明るく成つた樣な氣がした。思ひ通りに川添の二階の北寄の一室に入るを得た。此所の肘掛窓から霞ケ浦の方を見ると、實に好い。北利根と橫利根との落口に、島が挾まつて、松黑き中にお宮が見えて居る。其邊には風待の荷船が集合つて繫つて居て、苫の間から炊ぎの煙を立てて居る。其間に薄らと浮島の松から筑波の峰が見えるなど、川から此家を見て想像した眺望よりも、より以上に好いので、家壽雄は非常に喜んだ。

最初に此所へ案內したのは、小造りのたしかお松といふのであつたが、今度代つて茶盆を持つて來たのは、思ひ懸けもない、千賀であつた。

『おや』と千賀は一寸驚いて、可懷しさうに辭儀をして、

『唯今お歸りですか』と問ふのである。

『あゝ今歸ります』と言つて、千賀の姿を見ると、髮は銀杏返しに結つて、衣服は襟付の銘仙で居る。セル地の前掛をして、無論羽織は着て居らぬ。何んだか船で見た時よりは若くなつた

様だ。其代りあれから空想で描き出した千賀から見ると、美しさを増した様に思はれるのである。それにお繁が似て居ると思つたのは、空間の千賀の方が似て居るので、實際の千賀は然うでも無いと家壽葉は確め得た。

『あれから、どちらの方へ入らッしやッたの』と千賀は急須から茶を注いで呉れながら問うた。

『行方郡を大概歩いたのさ』

『まア大變でしたのね』

『酷い田舎へ入つてね、鰻の味噌煮なんて食べさせられたが、久しぶりで何か甘い物を賴むよ。此所へ來て見るとまるで東京へ歸つた樣な氣がするからね』

『まア、巧い事を仰有るよ。牛堀なんて這んな田舎を……』

『いや、これから山奥へ行つて御覽。未だ酷いんだから……全く此所まで來ると東京の樣な氣がするよ』

『あら、然うですか。妾は初めて此所へ來ました時には、もう〳〵酷い田舎と思ひましてね、それで東京が戀しくッて、戀しくッて、何度となく此所の二階から欄干に倚つては、向うを眺めて、泣いてばかり居たのですよ』

『東京……あゝ然うだらうね。お千賀さんは東京だらうと初めから睨んで居たよ』

『貴郎、最少しすると、恰度此正面に富士が見えるんですよ。それが晩方でないと能く見えませんの。お日樣のお入りになる時には、八筋川つあの森の上に見えるんですが、東京もあの方角だらうと考へては若う御在ますわね、しくしく泣いたのですよ。すると或時なんか、川を通る船頭さんが見付けて、潮來の土手が切れるから止せッて冷かしたのですよ 極りが惡う御在ましたわ』と言つて微笑を洩した

『今では、如何かね、矢張戀しいかね』と問うた。

『それア戀しう御在ますわ』

『時々見るかね』

『見ますけれど、泣きはしませんよ』

『如何だらうか』

『おほゝ、泣きませんよ』

『今度此方へ歸つてから、富士を見て？』

『つい忙しくッて見ないのですよ』

『あれからずッと此所に居る事になつたの』

『はア、妾、他へ行くつもりでしたが前の朋輩が、そら、貴郎も御覽でしたでせう、二階に居た、肥大つたのが、呼留めたもんですからね、此方も恰度手の足りない處でしたから、其儘ずる〳〵ベッタリですよ』

暫らく話して居る間に、下の方で千賀の名を頻りに呼ぶ。

『ぢやア旦那、何か見つくろひまして、直き持つて參りますよ』と言つて、千賀は立上つた。

『なるべく、甘い物をね』と家壽葉は言つた。

『はア好う御在ます』と答へながらも上草履を突掛けるが早いか、階子段をトン〳〵〳〵、馴れたもんだ。

# 二四

今夜の汽船で佐原へ渡ればとて、終列車の間に合ふのでもない。急がぬ旅の打留に、今夜は此所でゆッくり仕ようと家壽葉は考へた。潮來へ使を立てて栗生を呼寄せようかとも思つたが、又催眠術の大氣焰を吐かれても困る、それに第一の候補地を吉川の古屋臺と定めた後であるから、その事を語ると、いよ〳〵面倒にならうとて止した。

千賀は間もなく[illegible]に紅蜀葵をあしらつた酢の物と、川蝦魚の煮付と椀盛とを、膳に載せて、銚子を添へて持つて來た。

『唯今お後から、未だ何か持つて參ります……』と言つて、其所に置き、

『貴郎、食卓の方が宜しいでせう』と言ひなが

ら、一寸手控へて居る。
『其方が好いな、脊が突けて……』と家壽雄は言つた。
『然うでせう！』と心得顏で床の間から食卓を下して、其上に膳から物を一々運びながら、
『今夜旦那、お泊りですか』
『一晩厄介にならうと思ふがね』
『嬉しいのね、まアゆツくりして頂戴よ。東京のお方がお入らッしやると、可懷しいもんですからね』
『然うだらうか』
『本統ですよ』
『誰にでもソンな事いふのだな』
『然うかも知れませんね』と笑ひつゝお酌致しませうと銚子を取る。
此時家壽雄は胸算用で、旅費の殘りで、これから先きの入目まで拵へて、餘分に成るだけを紙に包んで千賀に遣つた。
『如何も濟みません』と千賀は丁寧に辭儀して、帶の間に入れた。其所へ家壽雄は盃をさして、
『まア一杯』
『はア頂きませう』と快く千賀は受けた。
すでに擦れ切つて居る。一歩間違ふと揩れ切つて了ふだらう。或は此儘で長く續いて、ぼツくり枯れ切つて了ふかも知れぬなど、家壽雄は考へた。
斯うして心持快く飲んで居る處へ、土浦行の汽船が着いたので、千賀は下へ行く、家壽雄は入日を見ながら、獨りで飲んで居る間に、小造りのが來て、風呂は如何と問ふ。是非入ると、宿の浴衣を重ねた褞袍に着替へて入りに行き、爽快した處で出て見ると、室には洋燈が點いて居る。座敷は整然と片付けられて、外套は懸けてある。衣服は疊んである。自分が置かうと思ふ處へ、時計も手巾も皆置いてある。
其所へ千賀が、銚子の好いのと、鴨鍋を載せた圓盆を持つて來た。
『さア、温かい物で、飲直しとなさいよ』と言ひつゝ火が赫々熾つて居る火鉢の上に、鍋を載せ掛つて居る處へ、小造りのが走つて來て、千賀の耳に何やらさゝやく。千賀は眉を顰めながら、
『仕樣が無いのね』と舌打までしたが、
『ぢやアお松チャン、お前さん此所をね、好くして上げて下さいよ。妾一寸行つて來るから』
『はい好ござんす』と代つて松チャンは坐り込んで、鍋の下を杉箸の先で積替へる。
『直き來ますからね、一寸御免なさいよ』と千賀は言ひながら、出掛けたが、障子の外から又聲をして、
『妾の大事なお客樣よ。大事にして下さいな』
とお世辭を置いて行く。
『それアもうね』と小造りは心得顏だ。
家壽雄は湯上りでもあるし、氣が落着いて飲んだので、好い心持に醉つた。

## 二五

それ切千賀は來ず、小造りのも行つて了つて、鍋は焦げつく、酒は既う飲む氣にならぬ。と云つて寢るにも早い、退屈千萬だ。
これならば栗生を招くのであつた。今からでは遲からうと、困つて居る處へ、廊下を傳つて按摩が來た。幸ひだと呼込むと、瘠せた老人だ。老耄して居りはせぬか、背中に捕つて居睡りでもされてはと、心配しながら褞袍だけ肌を脱いで、浴衣で肩を出すと、思つたよりは巧い。
『却々お前は名人だね』と家壽雄は讃めてやると、さア大變、圖に乘つた。
『旦那、今ぢやア本統に揉む人間は少うがす。今の若い奴等は、皆、出鱈目で、呼吸を知りませんから、駄目でさア。つまり此商賣は、ツボ／＼を知らなくツちやアいけませんや。ちやんと此

指の先が、ツボに嵌つて揉まなくツちやアね』
　家壽雄は散々これに中てられたので、少時沈默して居る處へ、草履の音高く千賀が來た。
『おや、お療治ですか。元ポウさん、御苦勞さま』と言ひながら、火鉢の前に坐つて、卷煙草を出しながら、苦しさうな息を吐く。大分醉つてる樣だ。
『今に下を揉むんだが、床を取つて置いて貰ひたいな』と家壽雄は言つた
『貴郎、それでお寢つて了つてはいけませんよ』と煙をぷーツと横に反らして吹く。
『だッて、然う酒は飲まれないから……』
『弱いんですねえ』
『僕は然う强くは無いんだ』
『ぢやア忘れない內に、のべて置きませう』と言ひつゝ、四邊を片付けて下へ降りた。間もなく小造りのが來て床をのべる。家壽雄はそれに移つて按摩をつゞけて居ると、千賀が又來た。新しい手拭を懷中から出して、
『貴郎のは濡れてませう。これでお頭を揉んでお貰ひなさい。元ポウさん、そら、此所に置きますよ』と蒲團の上を叩いて置く。
『やア濟みません』と按摩は禮をいふ。
『元ポウさん、今夜妾も療治を賴まうかしら、歸りがけに、まア、聲を掛けて見てお呉れな』
『へえ宜しう御在ます。久振でがすな』
『然うね』と言ひながら立上つて、
『衣統に旦那、寢ないで居らツしやいよ』と言ひつゝ、又階子を走り降りる。
『今夜は忙しいと見えるな』と家壽雄はいふ。
『いくら忙しくツても、お千賀さんが歸つて來たから、其所は巧く切つて廻しますさア。何しろ旦那、此まア常陸から下總で、何處へ行つたからツて、あの位氣のつく女中は、まアたんと有りませんや。私も若い時から、さん〳〵旅をして來ましたが、指折の內ですね』と元ポウは譽め立てる。
『然うかね』と家壽雄は言つた。
『第一、何んでさア、私の事でも、按摩呼はりを仕ませんや。療治々々といふでがせう。これが物を知らねえ女中で御覽なさい、按摩さんヤレ按摩さん、ねえ旦那、揉療治は皆官許ですからね』と腕の先にまで力を入れる。
『あツ』と家壽雄は聲を漏す。
『それにお頭をこれでなんて、切下しの手拭を、言はれない先に持つて來る。ねえ旦那、一寸出來ない藝でさア』
『無闇に譽めるぢやないか』
『全くでがさア、あゝいふ風ですから、直き身請になりまさア。これまでに最う五六遍も行きましたツけ』
『おう、それだ。此間內は、此家には居なかつたのだらう』
『三四日前に歸つて來ましたツけ。又好い客が附きませうよ』
『酌婦の身請てえと、餘程掛るのかい』
『それアピンからキリまで有りますが、なアに、總じて手輕なもんでさア』
『二三十圓も有れば好いのか』
『まアそんなもんで』
『身請されたら、其所で、チャンと細君で居たら好いだらうにねえ』
『それが旦那、妙なもので、自分の氣に入つた人が身請して呉れたら、それで好いでせうが、先づ、それア滅多に有りませんや。氣に入られねえから直ぐと又出て來る。氣樂は此方が氣樂だが、先きを考へると、いつまでも然うは仕て居られねえし、あれで內々は、コレはと思ふのを探しちやア居るんでせうが、扨て如何も思ふツボへは滅多に嵌らないもんでねえ』
　適材が適所に置かれるまでは、動搖限りなきものだなと考へると、それが自分の身の上にも

嵌り、それから栗生の境遇にも嵌り、然うして行方半島の現狀にも嵌められる樣に家壽雄は考へた。

　自分の背中が行方半島で、按摩の指先のツボに嵌るのが、當然の解釋を下すかの如くにも考へられて、此上の說明は不必要だと家壽雄は心に叫んだ。

＊　＊　＊　＊　＊

　按摩が歸つてから、とろ〳〵と家壽雄は寢たかと思ふと、下の方で大聲の叫び。

『こーら、女！　何處え逃げやアがつた。叩ッ殺さねえぢやア勘辨出來ねえだア。來う、呼んで來う』と總裂入の竹法螺。醉船長のらしい。

『逃げやしませんよ、今他のお座敷へ行つてるのですよ。直き來ますから、さア、お歸んなさいよう、表二階の方がいくら好いか知れませんよう』と肥大の女中がようの頤を押して留めて居る樣だ。

「何處の客だアえい。おらが行つて、其人ぶッ挫いて呉れるだアよ。えゝい、何處だアえゝい。案內しろ、案內なら しろ」と階子段を上りさうにして、尻餅でも搗いたか、大音響に續いて、女中達が、どッと笑ふ聲。

『えゝいッ、來う、呼んで來う。叩ッ殺してやるだアよ。酒持つて來う酒…持つて來うたらえいッ、酒いんねえから、お千賀持つて來うお千賀…』とおらび通す。

『まア』と女中は吃驚して叫ぶ。

『ふはッふはッふはッ』と怒吼が笑聲と變じた。手洗桶の捻を拔いたと見える。

　此時密と障子を開けて入來る者がある。見ると千賀で、何時の間に二階へ來たのか、家壽雄には知れなかつた。

『仕樣が無いんですよ。一寸隱して頂戴な』と言つて上草履を障子の內端に重ねながら、隱して、締めて、

『もし此所へ來たら叱つて頂戴な』と言ひつゝ洋燈の心を細くして、忍足で屛風の後へと隱れた。

　雨戶の外の北利根では、低く雁の鳴く樣に船の梶の軋り。

## 二六

　家壽雄は歸京した。又浚渫汽船の車に引懸つた樣な氣持がした。高輪の下宿に入ると、前と後とを汽車と電車とで攻められて、碌々夢も結ばれぬ。旅に出る前は斯うも感じなかつたのが、歸つてからは非常にそれが神經を突く。それにつけても行方半島の、茫乎とした景色を思はずには居られぬ。潮來の夜、山田の夜。牛堀の夜、各〻特徵は有るが、いづれも森閑としたものであつた。戀しくてならぬ。

　歸つて見ると、机の上には郵便と新聞とが、積んである。新聞は見る氣にならぬ。郵便は見ぬ譯に行かぬ。厭々ながら開いて見ると、病人の知らせ。死者の知らせ。借金の催促。依賴した事の拒絕。碌な事は無い。

　扇谷男爵を訪うて探檢の報告をすると、それは如何にも好い處だが、實は、印幡沼の某所に、適當の地のあるのを友人から知らせて來た。其方に取極めるからと、既う氣が變つて居た。

　其代り、一ッ依賴がある、急ぎは爲ぬが自分の傳記を纏めて置いて貰ひたいと、多くの材料と報酬の幾分かを渡された。

　扇谷男爵の別莊は、破談に成つても、自分の浪居を實行は出來る。吉川の空家を借りて、其處でゆる〳〵筆を執らうと、年末に迫つて又常陸行。

　吐出されて來た樣な氣は、相變らず佐原の棧橋で起つた。今度は併し船が銚子丸といふのであつた。客の中に千賀は勿論居らぬ。

牛堀へ餘程上らうかとも思つたが、千賀には餘りに接近し過ぎた。空想を入れる餘地が無さ過ぎる。それよりも早くお繁の顏が見たいと思つて、牛堀では窓から顏も出さず、北浦の吉川まで乘通した。

直ちに扇吉の家を訪れると、喜んで扇吉は出迎へた。然うして是非家に逗留して呉れといふ。

實は、いつかの空家が借りたくて來たのだがといふと、扇吉は、

『さア然うでやすかね』と一應は受けて置いて、

『あれは、東京さア行つた友達が、彼地も思はしくねえで、失敗して歸つて來やしたッけえ』と答へたので、家壽雄は、がッかりした。

それでも仕方がない、手土産を出して、

『此内の半襟は、お繁さんに上げて下さい』と言ふと、扇吉は又、

『はア然うでやすかね』と一應は受けて、

『あれは今、行戸へ行つてるでやすから、今度屆けてやりやすべえ』と言ふ。

『行戸？』家壽雄は思はず叫んだ。

『はア、客分で當分行つてまさア』

這んな事に成らうといふ空想は、家壽雄一度も浮べぬのであつた。

それから去つて山田へ行つたが、扇谷男爵の件が立消と聽いてから、武崎の家では、見る見る態度が變つて來た。時子などは別してコチコチするのである。

斯うなると既う此後が想像出來る。潮來へ行くと、栗生は免職になつて、夜逃同樣に去つて居らぬ。牛堀に行くと千賀は身請されて、これも居らぬ。按摩の自慢を聽かされるが落だ。斯う悉く家壽雄は悲觀したが、併し、然うでも無い、行つて見ると、千賀の方は未だ居るかも知れぬ。如何も理想の妻を得られる自分では無し、一時間でも、二時間でも、自分を慰めて呉れる者が有るとしたなら、其所に赴くのが今の境遇に於て適して居る。千歲屋に居たら、あの座敷に籠つて筆を執らう。居なかつたら一層の事、東京へ歸らう、斯う極めて、家壽雄は扇吉を說き、馬で牛堀まで送つて貰ふ事にした。

先度とは違つて、霜解路の惡さ。馬は何回となく轉ばうとした。北風は強く吹當てて其寒さ。

漸く千歲屋へ着いて見ると、矢張千賀は居らなかつた。入口に富士を見る勇氣もなく、今着いたばかりの汽船に飛乘つて見ると、船長の寬藏苦り切つた顏で、號笛の綱を取りながら、

『ゴースタンだア、そーれえ』と遣つて居る。

此所から佐原までは一時間なので、船室に入るにも及ばぬと、家壽雄は甲板の船尾の方に腰を掛けて居ると、安石炭の煤煙屑が、霰の如く降り掛る。

それでも其所に昵として居ると、船は後へ後へと進んで、行方半島も亦後へ〳〵と退く樣に見えて、距離は次第々々に遠ざかり行く。

い、ばら〳〵松を失つた潮來の稻荷山、先づ薄らぎ初め、牛堀の千歲屋の三階が八筋川の土手の枯草に隱れる頃には、言ふに言はれぬ寂しさを覺えて來る。泣いて見たい樣な氣を生じたが、なに、つまらん、そんな時代は過ぎて居ると打消して、未だ自分は適所を得ないのだ、動搖しなければならぬ、奮鬪しなければならぬと、外套の上に積る煤煙の屑を打拂つて、氣を取直しながら猶且つ見詰めて居ると、益々半島の影は茫乎として來て、甚しく遠くに見えるのである。

此茫乎とした半島の影は、恐らく自分の腦裡からは一生消滅し去るまいと樣に、家壽雄は強く強く感じたのであつた。

（明治四十一年十一月稿）

# 養鷄所の娘

僕の採集談も黴が生えて來た。石器時代に就ては語るまいである。極最近の出來事で頗る面白い話がある、それを聽いて呉れ給へ、と友人高畑が前置。

高畑は身を小說卷中に置いて、千狀萬態の事に手を出して、苦悶して、然うして大團圓を見るに到つて、初めて興味を覺えるといふ人なので、主觀で材料を造つて、客觀でそれを報告するのが好きな人であるから、いつも其物語が興が深いのである。

語り給へと余は云つた。しかし簡短にといふ事を添へた。で、無いと、冗辯の多いのが癖であるから。

僕は御承知の通り、東京近郊で以て、少し高臺で景色の好いといふ處には、握飯を包んだ竹の皮と燐寸の摺りからしとを捨てて置かぬ處無した、採集に出掛けて石斧や石鏃や土器の破片を拾つて、それから午飯を喫べる、一吹する。皆其景色の好い處を選ぶので、それが十年間の知己に爲つて居るから、若し地理でも編纂するなら大いに參考になるだらうと思ふ。

しかし、廻り合せで一月も足の向かぬ處があると、既う、がらりと光景の變つて居る事が少からぬ。

荏原郡に馬籠村といふのがある。其所などは驚いた。貝塚を取圍んで養鷄所が出來たには、ちと困つた。

けれども僕の事だから、垣の外に空しく指を銜へて立つといふのでは無い。平氣で門内に入つたのである。犬に吠えられたからハンの殘片を遣つて、機嫌を取つて、それから竹垣を廻つて、井戸の傍を通つて、新建の住居の入口まで行くと、爺樣が其所に突立つて居て、怪しい奴と思つてか、僕を睨んだでは無いか。

『何か用でがすか』と少時して老爺が僕に問うた。用は他でも無い、貝塚が掘らして貰ひたいのであるが、これまでの經驗で、此樣な老爺にコロボックルが通じた例が無いのだから『玉子を賣つて貰ひたいので』と心にも無い事を云つた。

『一百か二百か』と老爺は云つた。

『三個もあれば好いです』と僕は答へた。

『一家ぢやア小賣は仕ねえでがす』と老爺はすげなく云ひ放つた。

『然うだらうが實際東京では、新鮮な玉子は食べられないからな』

『病人にでも食はせなさるのか』と老爺は少し碎けて掛つた。

『なアに僕が此所で辨當の副食に仕ようといふので』と云ふと『ぢやア生みたてがあるで、上げるべえ』と裏の鷄小屋の方へ、てく〳〵行つた。

譽めたのが利いたのさね。

貝塚は鷄小屋の方にあるのだから、のこ〳〵僕は尾いて行つたさ。

無慘なるかな貝塚や、滅茶々々に崩されて了つて、今、唯三分やッと遺つて居るばかり。土器が澤山出たと見えて、繼ぎ合せたら完全な形になりさうなのが、ごろ〳〵して居る。

『實に好い玉子だねえ』貝塚の代りに鷄卵を譽めた。

『斯ういふ玉子は藥でがす』老爺頗る得意であつた。養鷄所の老爺を語るのでは無かつた。

其後一週間ばかりして、又其所へ行つて見た。如何も心が貝塚に殘つてならぬからで。

今度は井戸の傍に娘が居た。美人であつた。玉子に目鼻式とは違ふが。

『玉子を賣つて下さい』と僕が云ふと、娘は微笑して『妾には分らなくツてよ』と來た。

『二ツか三ツかで好いのですが』と押して云ふと、相變らず娘は笑つて居て『爺やが居ないもんですから……』

玉子は如何でも好いので、爺やが居ないとは天の惠であると、口まで出たコロボックルを嚥殺して『爺さんが居なければ私が鷄小屋から出してもよろしい』

『それぢや然うして下さいな。妾、一所に行きますから……』

これから養鷄所の娘に就て語らう。美人と先きに云つたね。

けれども色は白いと云ふ程では無い、淺黑いと云ふのであらうか。圓顏で、髮の濃い、眉毛の太い、眼は細かつた。年齡は十七八だらう。脊が心持低いのに、肉が能く附いて居るので、花顏柳腰的では無いのである。僕が好きだから美人と云ふので、君で有つたら御免蒙るといふかも知れぬ。

それが筒袖に白い胸當をして、束髮で、一口に看護婦風といふけれど、現代の女子は、あゝ有りたいと、いやこれは僕の理想なんだ。

それから鷄小屋へ行つて、鐵網の中へ入つて、箱の中から未だ暖かいのを三個出したけれども、玉子は第二第三、むしろ第十位で、第一は貝塚であるから、玉子をひねくり廻しながら、思切つて僕は『掘らして呉れませんか』と云つた。

娘は笑出して『何處を……』

然うだ。貝塚といふのを忘れたのだ。それから貝塚の由來から、コロボックル族が三千年前には此邊に住んで居た事、例に由つて例の如く、人類學者の受賣をして『是非如何か掘らして下さい』と歎願した。

娘は頗る早く趣味を解した。『好ござんす、掘つてもよござんす』と來た。

、さアこれから一生懸命、小萬鍬で掘つて〳〵見る〳〵深さ六尺ばかりの穴を掘下げたのである。

と、向うに、朱塗完全な土器が見えて居る。『出た〳〵』と思はず叫んだ處が、覗き込んで見て居た娘が『何が出て？』と問ふでは無いか。

僕は嬉しくツて耐らぬから『土器!!! 土器!!!』と叫ぶと『妾に見せて下さいな』と云つて娘は穴の中へ降りた。

僕の云ふ美人は肥滿して居る。穴は狹い。二人と成つては窮屈でならぬ。身勝手が惡いので、ぐるりと向き直る途端、世界全滅!!!

四方の貝殼と上の土とが、一時に落來つて、二人同穴に埋められた騷動で、土器は破れた、生みたての玉子まで破れて了つた。

* * * * *

それから時々、その養鷄所へ行くが、娘は見えずして老爺ばかり、のそ〳〵して居る。村の者に聞いて見ると、其養鷄所は、某顯官が老後の計を成す爲に、斯うして居るのだといふ噂。時として息子さんやお孃樣やが、東京から來て、老爺と一所に働いて居られる。や、其お孃樣は、或る宮樣の御殿に行かれたとか、これ又噂の噂。

先づ大體の話が這んな次第だが、彼の掘りかけて破れた土器が惜しい、裏紋も有つたやうだ。

――と高畑は、結局、既う語らぬと斷つて置いた石器時代の話を、巧みに言廻して余に聽かしたのである。

# 年　譜

**明治二年**

岡山市壹番町壹番屋敷に產れた。父は江見鋭馬（贈正五位）母は村上貞輔（贈從五位）四女友子。

**明治十四年**

この初夏の頃上京した。

**明治十五年**

この春栃木縣書記官片山重範先生の家に寄つて、栃木義塾に通學した。

**明治十六年**

歸京、共立學校に學んだ。

**明治十八年**

杉浦重剛先生の稱好塾に入り、此所より東京英語學校に通つた。

**明治二十年**

「日本文藝雜誌」に「賤のふせや」採錄。活字に成つた最初の物。これを博文館の「日本之女學」に轉載したのが緣と成つて、二十一年に引續き同誌に寄稿。稿料を初めて得た。小波の紹介で硯友社に入つた。

**明治二十二年**

創立の美術學校第一回の入學試驗に落ちて失望の餘り、全國漫遊の途に上り、近江、伊勢、志摩、紀伊、大和、伊賀、和泉、河內、その他を徒步旅行。「我樂多文庫」改め「文庫」に『旅畫師』を寄せた。

初秋の頃歸塾。

**明治二十三年**

硯友社の文士劇に出演（紅葉、思案、眉山、小波等と）又社中と共に新俳句を研究。

牛込北町に老母を故鄉より迎へて、一家を成した。これより文士生活に入り、新聞雜誌に寄稿した。

初めて脚本『佐々木盛綱』を書き「江戶紫」に載せた。

**明治二十五年**

文藝作品の他に探偵小說（創作及び通俗小說（今の大衆物）に筆を染めた。

中耳炎で永く東京病院に入つてゐた。

**明治二十七年**

江水社を創立して、文學雜誌「小櫻縅」を刊行し、詩的短篇に力を注いだ。田山花袋、太田玉茗等が之から文壇に出發した。

初めて冒險小說『海底の錨』を書いた。十月、初めて「中央新聞」記者と成つた。

**明治二十八年**

「中央」に連載した軍事短篇小說『電光石火』が當つた。（後、單行本『水雷艇』及『速射砲』）

**明治二十九年**

相州片瀨に轉住。文士の田園生活として問題にされた。此所にて妻を迎へた。

「中央」を去つて「讀賣新聞」に入つた。——三十年末に浪人となる。

**明治三十一年**

「神戸新聞」創刊につき、白河鯉洋等と神戸に行つた。社會部長として、文藝、演藝すべてを兼ねた。（文筆勞働の有らゆる方面に働いた）

**明治三十二年**

「神戸新聞」を退き、年末に博文館に入つて、來春創刊の週刊新聞「太平洋」の主筆と成つた。（品川に居住）

**明治三十三年**

この春、文士講演會に出席。（高田早苗博士、尾崎紅葉等發起）
小波洋行、留守中の主筆として「少年世界」を預かつた。同誌の爲に探検隊を組織して、日原鐘乳洞を探つた。
文士相撲を始めた。

**明治三十四年**

「少年世界」探検隊を組織して、戸隠山に登つた。

**明治三十五年**

博文館を退いた。
石器時代遺跡調査を始めた。

**明治三十六年**

川上音二郎の爲に『オセロ』を飜案したのが、二月、明治座に於て實演された。稿料千圓といふのが宣傳に使はれた。

**明治三十七年**

「二六新報」に入社。露探事件にて同社の苦境中に、社會部長と成つた。——三十八年「二六」を退いた。

**明治三十九年**

春、捕鯨視察の爲に朝鮮行。捕鯨船に乘つた。

**明治四十一年**

「探検世界」の主筆と成つた。四十二年には同誌の爲に、探検隊を編成して、雪中富士登山を決行した。

**明治四十四年**

六月、帝劇女優劇に脚本を提供。それより引つゞき脚本を寄せた。
大正、昭和に及んでは、略す。（昭和二年に『自己中心明治文壇史』出版。これが主なるもの）
著作數は二千を突破してゐるので、未だ著作年表作製を見ぬ。

# 石橋思案集

# 序

## 石橋思案君の事ども

石橋思案君を、私が初めて知つたのは、私が十八、君が二十一歳の頃であつた。僅か三つちがひであつたが、やつと肩揚のとれた許りの私が、已に綸羅紗の背廣を着て、當時は頗る珍らしかつた鼻眼鏡をかけ、鼻下には立派な髭をたくはへ、手にバイオリンのケースを提げて、九段坂を濶歩して居る君を、初めて友人に紹介された時は、只もう煙に捲かれざるを得なかつた。

尤もそれ以前、思案外史なる名は、一團々珍聞」や「讀賣新聞」の投書欄で、已に知つて居たのではあつたが、その文字の上から想像して居たのとは、全く桁を異にした、大のハイカラ紳士だつたのである。

蓋し當時の思案君は、同じ硯友社の創立者でありながら、尾崎紅葉、山田美妙などよりも、ずつと社會的にレフハインされ、まだ大學豫備門に籍をおきながら、一方金蘭會なるものをおこして、男女交際の機關にしたなぞ、さかんに活躍し得たのも、やはり宮内大臣秘書官と云ふ、立派な父を持つて居たおかげであらう。

その父君はなか〳〵嚴格な人であつたやうだが、それにもかゝはらず思案君は、其根岸の別莊を開放して、硯友社同人の芝居の稽古場にしたほど、かなり我儘を發揮して居たものだ。

その中に硯友社も發展して來て、紅葉、眉山、水蔭、柳浪及私なぞが、段々文壇へ躍り出す頃になると、どうしたものか君は、割に婆婆ッ氣を起さず、その弟子に大橋乙羽なぞを出しながら、自分はあまり創作には耽らなかつた。之を梁山泊に例へて見ると、丁度柴進と云つた樣な役廻に居た。

けれども世間は進んで行く、君の家庭の事情も變つてゆく、それやこれやで流石の君も、のんきに脂下つて許りも居られなくなつたのだらう。一面紅葉などの懇切な勸誘で、漸く祿を求める樣になつた。卽ち名古屋の「新愛知」とか、東京の「中央」、「讀賣」の諸新聞社に入つたり、遂には博文館の編輯局に迎へられ、長く「文藝倶樂部」の主幹になつたのである。尤もこの中で、博文館へ迎へるには、私が館主の旨をうけて、特に君に說いたのでもあつたが、所謂適材適所と云はうか、君はその部下に、岩田烏山、海賀變哲、森曉紅なんど云ふ面々を、相次いで助手として、頗る熱心に事に當つた。

一體君は、頗るのんきな磊落な質であつたが、それで居て職に忠なる事、責任を重んずる事は、局内でも群を拔いて居たと思ふ。したがつて、その熱心がほとばしつて、印刷部や營業部の者を、容赦無く叱り飛ばす事さへあつた。

また年の加減でもあつたらう。晩年は大分嚴格になつて、時には友人の不心得に對して、面を侵して强意見をする事もあつた。

從つてその服裝の如きも、あまり氣にしない樣になつて、折角の髭の手入もせず、時代おくれの物をまとうて、平氣で人中へも出た位。これが當年流行の尖端を爭ひ、いつも仕立おろしと見える洋服の、襟に薔薇の花なぞを插し、その持物のパイプやステッキにも、他の企及ばぬ新奇を漁つた、あのモダン紳士の後身かと思ふと、實に今昔の感を深からしめた。

尤も君は、靑年期に一度馬から落ちて、それから腦を痛めたとか云ふ事を聞いた。此祟りか、一生の間に、好きな筆硯をも棄てなければならなかつた時間の、度々繰り返されたのは、此の折角の才人に對して、眞に同情に耐へないのである。

昭和六年八月

巖谷小波記

# 乙女心

(原本表紙)

## 作者曰

一拙者事先月初豆州修善寺へ湯治に參り餘りつれ〲なるまゝせう事なしの筆耕三昧思ひいづるにまかせしよしなし事一二回書きつらね歸京後其儘打棄候は惜しい物と議も申は不致候へ共紙屑と同居爲致むも不敏の至と存じ暇を偸みてポツ〲書き續けどうやらかうやらめでたし〲までかたづけ申候へども半世の大著述抔と洒落にも御高察被下候はゞ至極難有迷惑の儀に御座候ホンのひまつぶしの樂書と思召御一讀被下候はゞ別段御腹も立ち不申儀かと自分勝手を申候

一外題を乙女心と相名け候は行々は一人前の娘にも相成候はんかと夫れのみ樂みに致し年頃にも相成候はゞ自然わるい蟲の附くものゆゑと別して大事にかけ箱入に致置候處圖らず紅葉山人の目に留りとう〲同人のかどはかしに遇ひ皆樣方にごけんいたし候段まことに心外の至り泣いつわめいつ口説き候へども紅葉いツかな聞入〱れず今はぜひなき乙女心の不敏さいぢらしさ申すも涙の種拙者胸中御推察被下度候

一かゝる反古同樣のものを新著百種など申す立派なる雜誌へ掲載致し候は錦に瓦を包むやうなものと御叱も可有之と存じ候へどもそれは皆紅葉の罪にて拙者は一向知らぬ事に御座候

一作者の痩腕にて乙女心を寫す抔とは慮外千萬大膽者とのお小言は豫て覺悟の上に候へども乙女心の一端を纔に書きつらね先づコンナ物かとこぢ附け候丈にてまことに御恥敷次第に御座候

一餘りの短篇にて嘸々御讀栄も無之候はんが紅葉山人の附錄も有之候間それにて御埋合被下度たゞ〲乙女心の一筋に御愛看御愛讀の程販本に替りて千祈萬願の至りに御座候

一拙者如何なるものゝ生れ替りにや惡口が持前にて毎々文庫紙上にて皆樣方の御名作を兎や角妄評仕り御迷惑相掛け候處扨自分が書いて見ると他人樣の事を惡く申候萬分一も相書け不申以後惡口は決して申す間敷と今更後悔致居候何卒日頃の復讐と被思召御腹藏なく御批判仰ぎ度いかなる惡評なりとも此期に及で惡びれ不申覺悟相極め居候殊勝さ何卒御憐察被下度願上候

明治二十二年六月吉日於某寺　思案外史謹識

## 見物曰

一此小説は「ナンダ」を主眼とす(ナンダは何乎なり疑問の詞)一讀してすこしも譯が分らずそこで作者に向つてナンダと尋ねる

處が主眼）
一時代を說き場所を時々定む日本小說に此類たんとあり如何なる味のものか。まづこんな物サ
一文章は紋切形の言文一致一向面白からずこれでも作者は大の天狗なり（天狗なら面赤いわけなり）
一世間在來の文とは全く一樣ならず何處か思案ならではかけぬ處ありそこで作者一見してうまいといふ讀者はちつともうまがらずわれうまきものを人は何故にうまからずといふや。若し御風邪かえ

思案外史再謹識

## 第一回

＝賤が伏屋も月がさす＝

此處は片山里の一軒家です。家の前は畔道其先に狹い細流を隔てて向うは廣々とした田圃ばかりで其廣さ……目も遙かで更に果てが見えぬ程です。路傍や細流の邊には女郎花や桔梗が鄙には珍らしい妾達のやさしい姿を見て下さいと歎願しないばかり時知顏に吹き亂れて居ます。

夜も餘程更けたと見えて四邊が只シーンとして時々聞えるのは風の銳い鎌が生ひ茂る森の頭を刈つて行く音に水車の微かな響が調子を合せて居ます。秋の名物といふ月も今宵は何が恥かしいのやら雲のベエールで深く玉の顏を掩ッて僅かにウットリとした薄弱い光を洩らして居る鹽梅。寔に哀れな物凄い光景――詩人抔は我勝ちに材料にしさうな趣味――實に造化の細工ほど巧妙な物はありますまい！

此田舍家の障子に影を留めた二人は頭の恰好で見ると女性に違ひありません。外に人の氣息もない樣子。どうしてコンナ淋しい片田舍に女子がタッタ二人で住居まうとは……塵の浮世を厭ッた尼法師の類？　頭の工合を見るとさうでもなし。ハテ何者？　聲音を聞いて見ると一方は五十を越したかと思はれる老女。一方は未だ十六七の乙女の樣です。最初障子の隙間を洩れ聞えたのは乙女の愛らしい聲で

「おッかさん。もう御寢なッたらよう御座いませう。大層今晩はお寒う御座いますから。又お風邪でも召すといけません。

極めて慇懃に物柔な言ひ振。此一言を聞いても常日頃此娘の此母に向ッての所置振が俤りませう。偖も賴母しの娘！　老母は躊躇せず直ぐと答へました。

「アイ。まだソンナに眠くないから……裾だけ繼いで……

繼物。年はモ早や五十の上を越して通常なら火桶へでも噛り附いて＝早く初孫の顏が見たい＝抔と云ふ處を夜中に此針仕事感心なものです。年若な世間の懶惰者は此話柄を聞いて慚死してもいゝので……老母は語をつゞけ

「お前こそ今日は洗張や洗濯物で嘸草臥れたらうから先へ寢たらよからう。

「アラ勿體ない……妾はまだチットモ眠くは御座いません。

淋しい時には兎角越方行末を思ひ出すものです。況して老年の身……コンナ淋しい處。老母も免れません。

「アヽお雪や。またコンナ事を云ふとおまいに笑はれるかも知れないが今頃は東京の浪次はどうして居るだらう？　屹度まだ机の前でランプをつけて勉強して居るに違ひないよ……どうか無事で居てくれゝばいゝが……

「アレ又おッかさんがアンナ取越苦勞をなすッて……先月の郵便にも身體は至ッて壯健で每日學校へ通ッて居ると書いて御座いましたからソンナにお案じなさる事はありません。屹

度無事で勉強して居らッしやいます！

「ダッテ東京は本年大變にコレラが流行ッたと云ふぢやアないか？

「アレおッかさん夫れは暑い時分の事ですよ。コンナに涼しくなッてコレラがあるものですか。

「サウカネ。カウ寒くなッてはコレラもなくなるだらうネ。

同じ事を幾度も芋環の繰言は老人の癖と見えます。

「どうか一日も早く浪次が立派になッてくれゝばいゝが夫ればッかりが待遠で……

「モウ今に直ぐで御座います。

一體此親子は何者でせう？ 老女の名は岸邊霜子といッて娘は今母が呼びかけた通り雪と云ひます。母はモはや四十何度の春秋を過ぎて今は我名を頭に戴いて居ます。夫といふは平右衛門といッて幕下八萬騎の一人。維新前は一寸其處等邊へ出掛けるにも供の十人も連れてあるいた身分でしたが。明治の後は四民平等。槍一筋の武士でも中々さう／＼力瘤ばかり張ッて居る譯には行きません。明治二三年頃から郡役所へ通勤の哀れな身の上。世が世なら……とは毎度此老夫婦の繰言でしたが。去年の暮平右衛門は老病の重き枕元に哀れや逆屏風をたてました後はコノ親子二人ぎり。

今も此親子が話す浪次と云ふのは。まだ平右衛門が時めく時分同役から貰ひ受けて行く／＼は娘に娶はす積の養子ですがコンナ草深い田舎では所詮思ふ様に學問が出來ません。幸ひ東京の神田に知人がありますから夫れへ賴んで八年前花の都へ留學に出立させました。四歳の時から貰ひ受けて十五の歳まで愛育したのですから親身の子も同然です。却ッて勝る樣です。此浪次を老の眼鏡杖柱と賴むも無理はありません。から母親に云はれるとお雪の心の鏡にもうつるのは浪次の面影ばかりです。口へこそ出しませんが。今頃はどうして居らッしやるだらう？ 壯健で居らッしやるかしらん？ 少しは家の事も想ひ出して居らッしやるかしらん？ アヽ何時だッたッけ……もう餘程になるが……お天氣のいゝ夏の日だッたッけ。あすこの田畝に蓮華草を取りに參ッた時に妾の方が餘計に取ッたもンだから怒ッて妾を置いてきぼりにしてかけだして歸ンなすッたッけ。サウ／＼アノ時妾はなきながら追ッかけて路で小石に躓いて轉んだ時に驅け戻ッていらッしやッて妾を抱き起して下すッて＝どッか怪我でもしやアしないか。又着物に泥をつけるとおかアさまに叱られるよ＝ト泥を拂ッて下すッた事もあッたッけ。其時妾はなんとなく嬉しくッて痛いのも忘れて仕舞ッて……泣くのも忘れて仕舞ッて……思はずニコ／＼笑ッた事があッたッけ……今でもアンナに親切でゐらッしやるか知らん？ 人は成長するに從ッて情が薄くなると云ふから今ではアノ時分から見ると餘程邪慳におなりになッたかも知れないよ……イヽエ……どうして一體の氣質が優しいからソンナ事はよもやありやアしまい……が……どうだか知れない……併し常時おッかさまの處へ來るお手紙の端にもお雪も無事で居るか？＝ト聞いてくださるから今でも以前の樣に屹度お優しいに違ひないよ……アヽ嬉しい……早く……一日も早く……一時も早くお目に懸りたい……アノ……お笑ひなる顔が見たいよ……アノお雪やとおッしやるお聲が聞きたいよトサアから考へて來ると實に際限はありません。妄想の八幡知らずに入る程人間の迷ふことはありますまい。思はず出口を失ひます。妄想ほど世の中に恐ろしいものはありません。天使も惡魔と見えるし。光明も闇黑になります。娘もから考へ込むとナントなく悲しく哀れになッて思はず俯向いて一雫ホロリと膝

の上へ落しました。未來の夫とかしづく男の事ですものその安否起居を此位に思ふのも少しも無理ではありません。老母は年も寄ッて居るし倘の事。兩人共暫し無言で首を垂れて考へ込んで居る處へ戸口に人音。同時に人聲

「ヘイ郵便引

ア、凄まじいのは開化の勢力！ 鋭いのは文明の利器！ 豆腐やへ何里といふ片田舍でも通信の便は自由です。投げこんでいッた郵便を娘は拾ひ取ッて行燈の下へ持ッて來て見るや否

「おッかさん。兄さんからお手紙……

嬉しさにハヤ聲が震へます。母も震はして

「ナニ浪次から……手紙……

跡は云へません。二三十秒經ッて漸く

「早く讀んでお聞かせ。

娘は氣がせいて封じ目を見てゐる閑がありません。狀袋の上の方を委細構はず引裂いて取り出す文をばら／＼と弘げ

「一筆飛呈仕候追々秋冷相增候處御母上樣益御機嫌能奉賀候次に私事も無事相暮し居り候ま丶乍憚御安心被下度候

こ丶でマヅ安心しました＝浪次は老實で居るかい＝ト思はず老母は口走りました……娘は平氣で倘先を讀み繼ぎます。

「陳ば私事先便申上置候通本年九月の卒業試驗相受け候處……

「サウお前の樣に早く讀んでは妾には解らないよ……

「ダッテ……これより遲くは讀めませんもの。

思はず老母の命令に逆ッた一言。心の感應は佛を鬼にします。娘は倘後を

「卒業試驗相受け候處首尾よく及第仕り學士の稱號相受け申候

此れを聞くと老母の目は早や涙です。嬉し泣！ ＝ナニ浪次が卒業……學士……＝言葉は更に口の外へ出ずに咽喉へ吸ひ込まれます。娘も嬉しいといふ感動の烈しさに先を讀みかねて居ます。老母は焦思ちまして

「サア……サ……先きを……早く……

娘はホット息を吐きながら

「卒業後は早速本鄕の病院へ通勤致し月給八十圓貰ひ受け居候乍憚御安心被下度就ては今迄の下宿住居も成りがたく本鄕邊へ相應なる家相求め候て御母上樣始め妹をも早速引取申度當時適當なる家搜索中に有之候間見當り次第御報知申上候ま丶其節は速かに御出京被遊度先は右不取敢御報知申上候餘は後便縷々可申述候艸々頓首

十月三日　　浪次拜

御母上樣 おんもとへ

倘々別紙爲替金十二圓の內十圓は聊か祝儀の印までにさし上申候間何がお好きの物を御買求め被下度此外金貳圓は豫々妹が望居候書籍の代として御渡し被下度願上候

ト讀み終ッて二人は夢中です。此手紙を兩方から引張りやッて。嬉し泣に泣き沈みました。此時の老母の心の嬉しさはマアどんなでせう？ 此時の娘の心の嬉しさはマアどんなでせう？ 盲龜の浮木……なか／＼。筆も言葉も及びません。

## 第二回

＝香に迷ふ梅が軒ばの匂ひ鳥＝

絃歌の聲の賑やかさ。隅田川の鱗族も躍るばかり。金龍山の鳥類までが羽ばたきをします。何の饗筵でせう？ 誰の宴會でせう？ これは隅田川の畔八百松の大廣間で大學醫學生の卒業の饗宴です。今迄孜々として勉學した功が

顯はれて此度學士の尊稱を得たといふ其喜は實に無上です。天へも昇るとは蓋しこんな處へ應用する語でせう？ お互に教場でヤレ。バチルレンを發見したの。コンマピルツが繁殖したのだとか隨分つらいでせう。そのらいつらい教場の腰掛を離れ金釦を外して一同胸襟をくつろげて螢雪の苦を物語る抔。ハタからでさへも誠に樂しさうに見えます。みんなの隱し藝やら十八番の茶番も早や終りを告げ。酒に弱い連中は無理じひの盃をきりぬけて土堤の櫻が筑波颪に遇ッた樣に。チラ〳〵歸ッて仕舞ッた跡は。アチラの隅やら。コチラの端に。五六人宛の酒吞童子が團集して女性の奴隷を相手に太平樂の卷物を擴げて居ます。中にもデブ〳〵肥ッた赤い唐蜀黍の樣な鬚を頰に生やした。學生中でもビスマークと渾名の附いた一人が所謂口角沫を飛して

「どうだい今日の茶番の中で吉川の富樫は・・・ゲ、ゲエープ・・アノ洋服扮裝で‖頭に戴くシャッポナ如何に‖トヅル〳〵ッと詰め寄ッた處抔は高島屋ソックリだ。ゲーップ。なか〳〵甘かッたぢやアないかッ。ゲ、ゲップ・・・

「オーヤー。併しアンナ肥ッた高島屋はないぜ。夫れよりアノ福富の辨慶の方がよかッたよ。全體彼奴にはアー云ふ役がガラにあるから叶はない。

「梅本の義經も今夜は一段男つ振が上ッた樣だッたよ。大分絃妓の中に彼奴に目を細くしてゐたやつがあッたとはすこし憤懣の至りだ。

「ナニモそんなに切齒扼腕する事もあるまい。併しどれも〳〵實にかん。。。。しん帳だなアッ。

「それでも洒落の部類かい。情けない。

「情け無いと云へば。今夜の御料理もアンマリ情けある方でもなかッたネ。アノ口取のキントン抔は頗る少量で殆んど三ゲレーンばかりしかなかッたッ。

「シッ・・・また山村の下卑藏が料理の品評を始めた。

「そりやアさうと余輩の今夕一番感心したのは川岸の梅の春を踊ッた一事サ。彼奴々常日頃頑固な事ばかし云ッてて今夜に限り蹶然立ッて藝者を相手に踊ッた手際には只驚歎の外はない。

「それだから人は其容貌を見て馬鹿にすべからずサ。

「また岩川の西洋諺草が始まッたぜ。

「時に余が大聲疾呼して怪訝に堪へないのは畠山の行方なり・・・ッ。

「なにもサウ心配するにも及ばないぢやアないか。

「ダッテ尻の長いので有名な畠山が今夜に限ッて倉皇狼狽歸途についたのは怪訝の外はある可からず。又秋の花見と洒落込むんぢやアないか？

ト皆々脣の堰を切ッて笑の洪水を汎らしました。此の騷が耳に入らぬか又うるさいと思ふのか此仲間に入らうとも思はず。部屋の隅に只一人ツクネンと座を占めた若者。少し顏の色を染めて俯向いた體。何樣酒はタント飲めぬ方と見えます。時々指の先で額を叩くのは頭痛の激しいのを防ぐと思はれました。此前を德利を片手に持ッて通り掛ッたお酌。年はまだ若う御座いますが。有繫氣が利きます。此若者が苦しむ體を見て其前へヅカ〳〵ッと來て据りました。

「貴郎どうか遊ばしましたの。お頭痛で御座いますか？

極めて愛らしい聲音で親切に問ひ掛けました。若者は苦しいのでロク〳〵返事も出來ません。

‖アヽ・・・‖とは僅かに洩らした返答です。

「お待ち遊ばせ。只今お水を持ッてまゐります

から。

ト立つて下へ行くと思ふと。ハヤ盆へコップに水を一杯入れて持ッて參りました。

―サアお水を一杯召し上れ。

口元へさしつけて呉れた水を一息に飲み干しました。昔から云ふ醉覺の水……これが水？　丸で甘露です。あまり見事なお手元。

―モウ一杯持ッて參りませう？

＝イヽエモウ澤山……まだ苦痛を聲に現はして居ます。女は懷中を探ッて一個の藥包を取り出しました。

「コレは醉覺にはよく利くお藥ですから召し上ッてごらん遊ばせ……よ……よ。

親切な介抱。なか〳〵年の若いにしては感心です。時に＝おしやく〳〵＝ト呼び立てられて心は此處へ殘して姿は立ッて脇の部屋へ消え失せました。若者は前の水ソレニ此藥の效驗か。さしも苦しかッた酒の醉もソロ〳〵覺めかゝッて漸く人心地が附いて參りました。ハテ誰が水を飲まして呉れたのだらう？　藥まで誰が？　これ等は一切夢中です。處へ早足で次の部屋から此若者の前へ現はれました女。

―貴郎モウご氣分は宜しう御座いますか？

＝ハヽア偖はコノ女が介抱してくれたのか＝ト此時初めて其女の顏を見ますと。年齡はまづサンゴばかりか玉の様に綺麗な子です。牡丹の花籠を染め出した幽禪の上着に赤地にこぼれ梅と折鶴を金絲で織出した西陣の帶をメめて。髮は前向でよくは分りませんが髮の毛の兩端が前から見えた處では。立兵庫に違ひありますまい。扮裝の綺麗な事五體から光を放ッて輝いてゐる様に見えます。顏はどちらかと云ふと寧ろ丸顏の方で決して肥えてはゐません。眉はきはだッて濃く鼻はまづ隆い方です。口元も無限の愛をくはへてゐますが愛の燒點は全く目元にあるのです。今思はず顏を見合せますとニコリと笑ひました。ソノ愛らしき……ソノ美しさ……無論說明の限りにあらずです。併しコノ愛らしさコノ美しさが此若者を感動させたばかりではありません。外に非常に此若者を感動せしめたのは＝どうも似るッてカウモ似るものか……アノ笑ふ口元……アノ目附……丸で生寫―かう思ふとムラ〳〵ッとハヤ想像の寄手が此若者の前後左右を犇と取り圍みました＝アヽ今頃はどうして居るだらう……月日の經つのは早いものだ。モウ五年になる……嘸大きくなッたらう……＝思はず指を折りました＝アヽモウ今年は十八だナ。どんな風になッたらう。早く見たいものだ。嘸日含ものになり澄してどんなに可笑しからう？……少しも早く家を見附け出して一刻も早く呼び迎へてやらう……サゾ待遠しがッて居るに違ひない……＝と神經の感動が激しく腦を責めました。其勢力が此若者の生氣を萎らしく思はず首筋を垂れさせました。以前の雛妓は又此若者が首を垂れましたから心配しまして

―貴郎まだいけませんか。

若者は矢庭に首を上げ＝ナアiニ……モウ……＝ト再び此女と顏を見合せましたが似て居る……生寫と云ふ感じはます〳〵深くなりまして＝アノ貴郎……＝ト云ふ鹽梅は――五年前國を出立する時村盡までお雪が送ッて來て呉れて別れ際に＝貴郎……早く立派になッて妾達を迎ひに來て下さい……＝ト泪を流して云ッたアノ時の貴郎。貴郎に寸分違はない＝トこんだは形ばかりでなく無形の音聲まで似て參りました＝どうして世間にかうも似た者があるだらうか？……＝ト考へますとアラ不思議……妙に此女がこひしく慕はしくなッて來ます。偖も不思議なは心理學で云ふ思想の連絡でせう？　サアからなるとナンダカ此お酌の名が聞きたくなる……ナンダカ此女の住所が知りたくなる……が……どうした

のか日頃の勇氣が急に尻込をして物の役に立ちません。これではならぬと思ひ返して漸く尋問の紐を解き始めました。

「どうも色々有りがたう。お蔭で助かッた。一時は死ぬかと思ッたよ。

「ホヽヽヽ。ソンナにお苦しかッたノ。モウご氣分は……

「ニヽお蔭でサッパリしました。

([illegible]插畫)

まだ名前を聞き出す勇氣は出ません。ハテサテ戀情の作用ほど不思議なものはありますまい。若者も決心しました。

「お前の名は？

妙に低い様な高い様な不揃な音調で問ひかけました。

「へ……妾の名前？……花形屋の小蝶と申します。

「アヽさうかい。大層優しい善い名前だネ……

「ホヽヽヽ。うれしがらせようと思ッて……お世辭にもさうおッしやッて下さるのは貴郎ばかりで御座います。

「お前の方がお世辭を云ッてゐる癖に……ソシテ處は何處だい？

「柳橋で……

*　*　*　*　*

あら！　俥に乘ッても小蝶が跡押をします。時々駈拔けて前面から矢庭に車の上へ飛び上ッて合乘をします――頰と頰――嘗めるのは肌寒い夜風です。家へ着いて階子段をトン／＼昇ると例の小蝶も續いて上ッて來ます。火鉢の脇へ据るとあら不思議！　向うへ小蝶が据ります。下宿の小女が鐵瓶に白湯を持ッて上ッて参ります。其顏が……其下女は小蝶です。ます／＼不思議……でたまりません。床を敷いて枕に附きランプを消すと忽ち闇黒世界……室が闇くなる程想像の光は明るくなります。四傍が暗くなる程想像の目は冴えて参ります。今夜ばかりは丸で猫になッた様です。目を閉ぢても心は眠りません。强ひて眠らうとすると生憎枕元にしよんぼり据ッて居る小蝶が搖り起します。眠らうとあせる程目が冴えて來ます。仕方なく目を開けると闇黒の中にアリ／＼小蝶の顏……牡丹の花籠……金絲の折鶴……耳のはたで誰か＝貴郎やア＝トいふ聲。

## 第三回

＝紙をたゝんで眉毛をかくし＝

世の中に親ほど尊くも亦有りがたいものはありますまい――燒野の雉子夜の鶴――子を思はない親はありますまい……其子が笑へば笑ひ。其子が泣けば泣きます。慈愛は人の親の化身です……子の五體は親の慈愛の產衣で包まれて居ます。夫れを稍ともすると不孝の子は裂きたがります。親が笑へば怒り親が泣けば笑ひます。コンナ不孝者の絶えないのは如何にも歎かはしう御座います。ナンデモ人は少しでも親を喜ばせ樂ませなければ……イヽエ安心させればいゝ

のです。岸邊の親子も東京の浪次が首尾よく大學を卒業し學士の榮稱を得たと云ふ報知があッた其晩は夜通し枕に附いても寐られません。寐ようとすると浪次の顏がチラ〳〵目先に現はれます。

「お雪や‥‥まだ寐ないのかい‥‥アヽどうも寐られない。ナンダカ夢なんぞを見て‥‥

とは老母が寐返りをしながら云ッた言葉です。

「おッかさまもさうで御座いますか‥‥妾もナンダカ今夜は寐つかれませんよ‥‥うとうとといたすと夢を見まして‥‥

「どんな夢をお見だい？

「アノー‥‥兄樣が立派な洋服を召して‥‥高い帽子をおかぶりなすッて‥‥鼻の下へ髭なんぞをおはやしになッて‥‥ホヽヽヽ。

「それから？

「歸ッていらしッて‥‥＝お雪や。大層大きくなッたネ＝ト お笑ひなさるンですもの‥‥妾やア恥かしくッて‥‥

「ホヽヽヽヽ。

「それからネ おッかさま‥‥可笑しいぢやア御座いませんか‥‥兄樣の跡から‥‥まだ若い‥‥うつくしい十八九の束髪の婦人が附いて參りますノ‥‥さも馴々しさうに兄樣の事を＝アナタ〳〵＝ト幾度もさう云ふンですもの‥‥兄樣もさも嬉しさうに＝此れは東京で貰ッた妻だ＝トおッかさまにさうおッしやるンですもの‥‥わたしは悔しくッて‥‥おッかさまは又お怒りになッて‥‥＝お前にはお雪といふレッキとした許嫁があるぢやアないか＝トお叱りになると‥‥マアお聞き遊ばせ‥‥悔しくッて‥‥兄樣のおッしやる事ッてば‥‥＝お雪の樣な田舍ッぺいで學問のない者は厭だ‥‥それより此妻の方が學問もあるし東京風だしどんなにいゝかしれやアしない‥‥もう〳〵田舍ッぺいはこり〳〵した＝トおッしやるンですもの‥‥妾はくやしくッてくやしくッて‥‥

「ホヽヽヽヽ。まアいやな‥‥又ソンナ邪推を廻して‥‥どうしてアレに限ッてソンナ不實な事をするものかネ‥‥安心おしよ‥‥

「妾も眞逆とは思ひますが‥‥長年別れて居るので御座いますからまたどう氣が變ッて‥‥

「ハヽヽヽ。妾の云ふ樣な事を云ッて居る‥‥さうやッて案じて居る内には浪次が迎ひに來るよ。

「早くお迎ひに來て下さるといゝんですが‥‥さうしておッかさまのお見なさッた夢は‥‥

「ヤッパリお前と同じ樣に浪次が若い女を連れて來てお前の云ッた樣な事を云ふんだよ。

「ホヽヽヽヽ。おッかさまだッてそれ御覽なさいな。

「アヽ早く浪次が來て呉れゝばいゝが‥‥

かく談し合ッて居る內に常時は長いと喞ッた秋の夜もホノ〳〵と明けて仕舞ひました。此朝は心祝と云ッて何時になく赤飯を炊いて浪次が豫々好きだといふので煮染まで造ッて床の間に影膳を据ゑお霜親子も山海の珍味よりおいしく喰べてから此田舍家の舞臺は浪次の噂談で持ち切ッて居ます。

「お雪や。まア浪次が迎ひに來る時はどんな風をして來ると思ふ。屹度黑羅紗か何か當世風の洋服を着て來るよ‥‥

「ナアニ‥‥兄樣は昔氣質でゐらッしやるから矢張仙臺平の袴に黑七子か何かの御紋附を召してゐらッしやるよ‥‥

「さうかネ‥‥嘸大きくなッたらう‥‥

「エヽ引 屹度お見上げ申すやうに大きくおなりなすッたに違ひありません。

「アヽ早く逢ひたい‥‥アヽ早く遇ひたいものだ‥‥

同じ事を幾度となく繰返しては互に問答をし

て居ます。母の心は小學校の生徒が算術の問題を解式して居る樣に早くあはせたいと願ッて居ます。此問題より お雪の胸の中は尙々繁雜です：：難題です：：：

「第一：：モウ：：兄樣とは云へないよ：：なんと申したらよからう：：もし貴郞：：ホヽヽ。そんなに急におかみさんらしく生意氣な事はとても妾には云へやアしない：：チョイト浪次さま：：ホヽヽ。尙々をかしいネ：：何とお呼び申したらよからう：：イッソお呼び申さない方がいゝよ：：けれど用があッた時もそれぢやア用が辨じやアしない：：マアどうしたらよからう？　それよりかご婚禮の時はマアどんなだらう？　どんなにきまりが惡からう？　屹度綿帽子とか云ふ物をかぶッてお杯をするんだよ：：ホヽヽホヽ。嘸きまりがわるからう：：ソンナきまりのわるい思をするのはいやだからご婚禮抔はしないやうにさうおッかさまに云はう：：だがご婚禮をしなければ何時までも兄樣とご夫婦になる事は出來ない：：出來なくッてもいゝ：：矢張今迄の樣に兄妹になッて居よう：：併し屹度おッかさまがご承知をなさらないよ：：是非婚禮をしろッて：：どうしたらよからう？　アヽきまりがわるい：：

明日にでも婚禮をする樣に取越苦勞：：此苦勞が結句お雪には樂みです：：苦勞が樂み：：如何にも妙です。併しお雪は求めて此樂しい苦勞を胸の中で製造して居ます。母親は尙の事最早や婚禮が今晩に迫ッた樣です。

「お雪や：：アノ浪次の紋附の羽織を出してごらん。

娘はテッキリ例の支度とは推しましたが。わざと素知らぬ振で問ひ掛けます。是れが乙女の性質中で先づ第一に數へ舉げられる無上の愛嬌です。

「おッかさま：：兄樣のお羽織を出してどうなさるの：：

母は正直です。此問を眞に受けて丁寧に解釋します。無量の愛味を含んだ笑顏で

「アノ羽織はご婚禮の時に使ふのだから。

「ご婚禮：：誰が：：？

娘はます〳〵母を馬鹿にします。：：が：：母はまだ悟りません。母は子に馬鹿にされて喜んで居ます。馬鹿にされて喜ぶ。ハテ此處が

"Love is Blind"

「誰がッて：：お前と浪次と：：

極めて遠かに――何氣なく答へました。

「エ：：

娘は思はず顏を赤めました。顏は正直です：：言語は虛誕が吐けても顏はさう行きません：：此處で言語も暫く途切れました。

「よく着物と合せて置かなくッては：：今日からアノ袷はよして羽織の方をお直し。

「ハイ：：

又嬉しさに：：夫の爲に戀衣を縫ふ嬉しさに聲は笑ひに埋もれて仕舞ひます：：此日から此家の空氣――此田舍家の空氣は二元素の外に喜悅といふ一種の元素合せて三元素からなりたちます――この茅屋の朽ちた軒端を幸福の日光が照します！

## 第四回

＝思ひあうたる首尾の松＝

物事の進化ほど恐ろしくも亦速かな物はありますまい！　昨日まで汗水流してシャツ一枚で漕いだ端艇の櫓。其手：：同じ其手が今は團扇を持ッて舟子に二挺櫓を漕がせて隅田川を遡りつゝある家根舟。內ぞ床しく思はれます：：時は秋の季で最早や納涼には遲い――まだ雪見には早い：：遊船の季候でもないのに：：ハテ隅田川より深い譯が：：とは蓋し作者が神經質の

臆断かも知れません。乗込は若い男と女二人宛……ハヽア偖は……

「其所を〆めてくれ。寒くッていけんから。

最初に聞えたのは正しく男の聲です。

「岸邊さんがあんまりご酒をおしひなさるもンだから大變によッぱらッちまッてサ……折角川風に吹かれようと思ッてゐるのに……

何所となく仇ッぽい女の聲です。

「ハヽヽヽ。醉はして聞きたい事があるッてンぢやアないか？

一大きにサ……

なかば笑ひです。女は手を振り上げて撃たうとしましたが。妙です纖手は輕く男の肩を撫でる樣に突きました。寧ろ觸れたと云ふ方が適當です――親が子の折檻――外からは痛い樣で其實操つたい位で……

「アレ憎らしい……石原さん。覺えて居らッしやい……

「姉さんがムキになッて怒ッてサ。ホヽヽヽ。

愛らしいまだ十六七の孃です。男は何も

「ソンナに怒ると例の一件を岸邊に話すからい、……

如何なる祕密重大の事件ですか。例の一件と聞くと女は震へを聲にまで心の恐怖を現はして

「石原さん……あやまりますからアノ事ばかりはどうか誰にも……岸邊さんにも云はずにおいて……

「ハヽヽヽ。あやまりますからが宜い……鬼の目に涙……マア可哀さうだから云はずに置かう……其代り何かお奢り……

「エヽ〳〵奢りますとも……何がよろしいノ？お薩？豌豆？

「アッ失敬な……あやまッて居ながら人を馬鹿にして。

「ホヽヽヽ。ハヽヽヽ。

「こりやア聞き事だッ……石原。全體其祕密とはどんな事件だイ……

「かう云ふ譯サ……

ト云ふトタン聲は端なく止まりました。軟弱い掌は石原の口へ蓋をしたと見えます。

「モ……モー云はないから其手を離してくれ。

一屹度ですか。話すと承知しませんよ。

「モー決して話さないから其……手を離してくれ……苦しくッて呼吸が出來やアしない。

「あやまりましたか。ごめんとおッしやい。

「こんだアあべこべにこッちから謝罪る樣になッた……ハヽヽヽ。大笑ひだッ。

譯もない事に笑ひ興ずるのが快樂の最中。たわいない事を喜ぶのが遊嬉の命。舟は漸く流を溯ッて意馬を繫がむ廐橋。鳥が啼く吾妻橋も過ぎて石の鳥居の見えるあたりまで來ました。日も漸く暮れ初めて今まで勝誇ッて居た日輪も山の端に軍勢を引上げ其代りに月が……優美の新月が徐ろに光を放ッて參りました。堤上を通る人も漸く絶え今迄淡青かッた筑波の山も段々黑ずんで參りました。月の光を受けてギラギラして光る河面へ際だッて見えるのは人造の白鷺――行列の帆走船です。風に帆を孕ませて飛び走る樣丸で翼を持ッて居る樣です。アー快絶……自然の美景に吸込まれさうです！舟の人も流石感じたと見えて

「どうだい……此景色のいゝこと……

「アッ奇絶妙。ト云ひたい樣だ……

「姉さん一寸ごらん……アンナに鷗が澤山浮いて居るのネ。

「浮いて鷗の一イ二ウ三。中々夫れ處ぢやきかないネ……ホヽヽヽ。

「あれでも洒落れる内がをかしいッ……

舟は程なく八百松（水神の、棧橋へ。

「ハイ當ります……

偖て此四人連。男は例の岸邊浪次と其朋友石原

敏三。此れも同じく今では醫學士の二字が名刺へ附く仲間です。女は花形屋小蝶と其姉唄妓おこんの兩人です。八百松の二階へ着いてからそもやそも如何なる魂膽がある事やら暫く？　印を附けて此處は黒幕を引いて置きます……

＊　＊　＊　＊　＊

時刻はモ早や午前二時を過ぎて居ます。本郷元町の通りを今駈けて來た一挺の輓車。車夫は矢庭に足を留め

「旦那……此邊でよろしいのですか？

此聲に驚かされ目を醒ました客は餘程酩酊の様に見えて呂律もまはりかねます。

「ア……其門に瓦斯の附いて居る處だ……戸を叩いてくれ……

「ヘイ。

車夫は梶棒を下して戸を叩き始めました。スルト内から

「どなた？　ご用が御座いますならどうか明朝になさツて……

寢惚けた聲で答へました。車上の客は焦思ちまして

「オイ岸邊だ。此處を開けてくれ……

「ハイ岸邊様ですか。一寸お待ち遊ばせ。只今すぐに……

開けた戸一枚。飛込む男。

「大層お遲く……餘程お待ち申しましたが所詮お歸りにはなるまいと存じまして只今しがた戸じまりを致して寢入りました處でした。

「ゲ……ゲエー……ッ。アヽいゝ心持だ。

「大層ご機嫌です事……お樂みですねェ……

勝手は知ッて居ますからズン／＼階子を上ッて行きます。

「只今お燈を持ッて參ります。

小女は雪灯を持ッて上ッて參りましたが机の上を指して

「其處にお國から電報が……

電報の聲は岸邊が總身に激しい「ショック」を與へました。

「ナ……ナニ電報が……

矢庭に封押し切り口の中で

「ハヽタイビョウスグカヘレ。

電報を握ッたまゝ立ち上ッて。思はず吐息と一處に押出す一言。

「た……大變……

## 第五回

＝逢ひたいが色見たいが病＝

「どうで御座いますおッかさま…今日はご氣分はチットはよろしう御座いますか。

「アヽ……

病苦に聲迄が細りました。今迄喜び勇んでた岸邊親子も四五日前から圖らずお霜が風邪の心地だと假初の病氣が今はまことになツて土地の醫者も二三日前迄は＝ナーニ夫程ご心配には……＝ト云ツて居たのが昨日の午後診察した時ソットお雪を小蔭に呼んで＝どうも思ツたよりご重症で…決してご油斷は出來ません…＝と云はれてからのお雪の心細さ……イクラお丈夫だと云ツてもモ早や四十の上だから若し今おッかさまにでもお別れ申したら明日から妾タッタ一人…コンナら淋しい片田舍に……どうする事も出來やアしない…若し萬一さうなツたらどうしよう？　こんな時にお兄様でも居て下さるといゝんだが…夫れもゐらツしやらないし。昨晩電報を出して置いたから今時分はモウご覽になつて嘸吃驚なすツたらう？すぐいらツしやツた處が七日はどうしてもかゝる…其内に若しヒョンナ事でもなければよいが…どうも今朝のご様子では七日は扨おき三日も難かしいト母親の顔をのぞき込んで思はず一雫…イエ／＼泣顔をお見せ申しては何々ご病人に惡い。ご病氣に障るト思ひ返して苦

しい笑顔を作ッて
「おッかさま……お粥でも召上りませんか……少し差上げませう？
「イヽエ……喰べたくないよ……
「ダッテ昨日から何にも召上りませんぢやアございませんか……
「東京へは……浪次の處へ電報を出して呉れたかい？
「ハイ昨晩源兵衛さんに賴んで電報を掛けて貰ひましたからモウ今時分は兄様がご覽になッつた時分で御座いますよ。
「ナント出してくれたい？
「ハイ……アノウご病氣だから直ぐに來て下さいッて。
「サウかい……嘸浪次が吃驚したらうねエ……どうか早く浪次が來て呉れゝばいゝが……どうか浪次が來る迄生きて居たいものだ……一目浪次に遇ッて死にたい。
病の癌か。咳に言語を遮られてサモ苦しさうに泪を流しながらの喞言……道理です。五年越待ち草臥れた浪次が成業の吉報に接してからは毎日東京の空ばかり眺め毎夜浪次の事ばかりを夢に見て迎ひ狀が來るか〳〵と樂しみに待ッて居る内フト此病氣……シカモ重症……自分も最早や所詮全快は覺束ないと斷念めた此病氣。その無念さ口惜さ……胸も張り裂くばかり。娘は何の事……シカシ母の病氣に障るかと懸念して心で泣いても顏には笑ッて
「ホヽヽ。又ソンナ詰らない事をおッしやるよ……モウ直ぐ兄様がいらッしやいます。かうやッて待ッて居らッしやる内にはご病氣が直ります……からもうソンナ緣起の惡い事は云つて下さいますナ。
「お前はさう云ッておくれだけれど所詮妾の病氣は全快しやアしないから浪次が來たら妾が遇ひたがッて居たとヨークさう云ッておくれ……ソリやアサウとアノご紋附はモウすッかり出來上ッて仕舞ッたネ？
「ハイ。
「袴は何時出來上ると云ッたい？
「明後日は是非出來上りますッて……
「それでみんな揃ッて仕舞ッたネ。
病苦を忘れて婚禮の着物の心配。しらぬ他人が聞いてさへ嬉し涙を催されます。況してお雪の身になッたら……此程迄に思ッて下さるのに……一目でもいゝから目出度いご婚禮をお目に掛けたい……おッかさまのお枕元でご婚禮がしたい……早くご安心なさるお顏が見たい……是等は皆空の願望になりはしまいかト常時は何とも思はなかッた遠寺の鐘も今日に限ッて妙に無常を感じさせます。屋根へきて鳴く烏の聲も此頃はなんだか氣掛りに聞えます。母が枕に降る時雨！　娘の袖を沾す村雨！　みんな悲哀の溶解物です。

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

「全體ご病氣とはどんなご病氣だらう？　なんしろアンナ簡單な電報ではよく解らないが大病と云ッて電報をよこす位だからお重症には違ひない。ナンシロご老體ではあるし私が着く迄持てばいゝが……常時がお壯健だけに病氣も強く當るから倚々心配だ。ア、私が着く迄どうか生きて居て下さればいゝが……なんだか氣の故か汽船までが今日に限ッて非常に遲いやうだ。
罪もない無心な汽船までが根に思はれます……全體機關師が何故モット速力を增さないのか。コンナにぐづ〳〵して居て動くのか——引きずッてるのか……果ては愚癡になります。
「アヽコンナ事と知ッたら早く住家を見附けてお呼び申せばよかッた。嘸お雪が心配して居るだらう。タッタ一人で……モシもしもの事があッたら親類は無し。お雪一人でどうする

事も出來やアしまい…無心配して居るだらう…東京の事ならいゝ醫者もあるし。いゝ藥もあるが。アンナ邊鄙な處では…アヽカウ云ふ事なら早くお呼び申せばよかッた…小蝶なンぞに…詰らない女に心を奪はれて家も探さずウカ〳〵して居て…若しこれぎりお目に掛られなかッたらどうしよう？重々不孝な事をした…有繫は良心の利劍が前非の腸に閃きますと。水で溺れるより…火で燒かれるよりつらう御座います。居ても立ッても居られません。―アヽ濟まない…重々濟まない事をした…堂々たる男子たるものがアンナ賤しい女風情に溺れて…が…又考へて見ると小蝶も憎くない…決して憎むべき者ではない…アンナ賤しい…牛馬に等しい稼業はして居るが心まで腐ッては居らん。たしかに見拔いた…よくおれを愛してくれて…よくおれを慰めてくれて…惡く云ふ處か…賞めて遣ッてもいゝ位…トまたもや未練に引かされます。浪次が胸の中は考への絲が右往左往に亂れて…中々チャアト嘆く力はない。あせる程なほ〳〵亂れては、浦邊に浪む海面、沖にちりしく漁舟。總て此美景も浪次の眼球に映じません。浪次の其身は甲板に在りながら心は思案の海底を旅行しつつあります！

## 第六回

＝田面にうつる人影に＝

此世の中で何が悲しいと云ッて親に死別れる程悲しいものはありますまい。夫れも外に親類でもあればまだしも。親一人子一人の中で其親に死別れた時の其子の心程世の中に悲しいものはありますまい。その心細さはマアどんなでせう？岸邊霜子の病氣は醫藥も及び難いお雪の勢一杯の看護も更に其功を奏さずに果敢なくアノ世の人となりましたが。臨終の際にお雪を枕元に呼んでよく夫浪次に仕へる筋道を涙を片手。愛を片手に懇篤に說き示した跡で＝別に思ひ置くことはないが。たゞ一目遇ひたいと云ふ事をくれ〴〵も浪次が來たら話してくれろ＝ト云ひつゞけに空しく呼吸は絕えて仕舞ひました。娘お雪が悲歎は今更の樣で暫くは溢れ出る涙で身體も流れて仕舞ひさうです。今迄――日頃戀慕ッて片時も胸の內を離れなかッた浪次が首尾よく卒業して學士――其名譽ある學士と結婚する喜悅の火焰は今母に別れた悲哀の涙で果敢なく消されました。天命とは云へまだ四十二歲――僅にと副詞を置いて云ッてさへ人間は五十年。夫れにはまだ八年も間があるのに果敢なくアノ世…考へれば考へるほど娘の腸は寸斷です。併しさう〳〵歎いたとてアノ世へ行ッた母親の手向にはなりません。泣けば泣く程佛も未練で淨土へも行かれない譯ト考へ直して涙を拭くと生憎ハンケチは絞るばかりの涙…それを見るとまた涙の瀧は頰を傳はッて落ちて來ます。責めてモ一度…タッタ一度これが見納め…お死顏を…見る目はまた露です。果ては母の死骸へ取附いて一時雨。晴れ間がありませんのを近隣といッても十町から離れて居る村の人達が親切にいたはり慰めて岸邊の家から小一里も隔ッた西念寺といふお寺へ形の如く野邊送を濟しました。

＊　＊　＊　＊　＊

幾個となくたち並んで居る石塔を青い苔が巧みに古代模樣を色どッて居ます。破れ果てむしりちらしたやうな藪垣に沿ッて石塔を覗いて居る卒塔婆はモハヤ老耄れたか足のふみ度もなく右往左往に倒れかゝッてゐます。何時枝を離れたとも分らない落葉はふり積ッて野犬の夜の床を敷いてゐます。かゝる荒れ果てた中に一際目立

つ――墓標もまだ生々しい――新佛。白張の提灯もまだ風に裂かれません。其前に跪まづいて合掌して居る女。亂れかゝッた後れ毛を掻き上げようとも思はず。半面を僅に覗いた處でも何か物思にやつれ果てた可憐の少女。何を思ひ出したのか。一寸顏を上げ墓標を見ては泣き。口の内で何やら云ッては泣き。合掌しては泣く。此愛らしい女は泣くより外に仕事の無い樣に：：更に果てしがありません。暫く經ッて泪の顏を上げました。

「アヽ：：もう〳〵泣くまい〳〵：：イクラ泣いたッておッか樣が歸ッていらッしやる譯でもなし：：こんなに妾が泣いてはおッか樣もご未練が殘ッて。おいでなさる處へいらッしやる事が出來ない樣なものだ：：アヽもう泣くまい泣くまい：：

何か獨言を云ッて思はず顏を上げ墓標を見ると生憎泪の洪水が目縁の堰を突破ります。

「アヽ：：泣くまいと思ひ切ッても：：どうも泣かずには居られない：：今頃はおッか樣はどうしてゐらッしやるだらう？ 屹度モウ：：淋しがッて居らッしやるに違ひないよ：：それにしても殘念なのは：：一目：：タッタ一目：：兄樣にお逢ひなさらなかッたのが：：臨終の際まで妾を枕元へお呼びなすッて：：＝浪次にあひたい：：一目浪次に遇ひたい遇ひたい＝ト云ひ續けに云ッてゐらッしやッてとう〳〵お死去になッた：：噫：：アノ世へいらしッても兄樣の事を思ッて口惜しがッて居らッしやるにち：：ちがひない：：アア：：

あとは歔欷です。

「おッか樣：：兄樣がいらしッたらおッかさまがおッしやッた事を屹度：：兄樣にさう申上げますからご安心なすッて下さい：：よ：：よ：：どうぞ兄樣の事はモウ思ひ殘さずに冥土とやらへ早くいらしッて下さい：：

ト墓標を丸で生きた人の樣に話しかけては泣き泣いては何かくど〳〵云ッて居ましたが：：急に思ひ附いたかして

「アヽ：：あんまり遲くなるといけない：：

ト云ひながら自分の脇に置いた手桶に插してあッた樒を取ッて同じほどに二ッに分け墓標の兩側に建ててある竹筒の中へさして。墓標の前にある茶碗の水を取り替へ。小さい可愛い手を合せてモウ一度墓標を丁寧に禮拜して片手に手桶を持ッて立上りながら

「オヤ：：大層遲くなッた：：早く：：暮れない内に歸らう：：

やがて女は手桶を井戸の傍へおいて門――もし門といへるならば――を出ました。一町ばかり畔道を過ぎて森の中へ來蒐りますと。此處は晝でも暗いほど木が茂ッて居ます。まして此處へ來た時分はモハヤ誰彼時。烏も歸去來の歌を連節に歌ひながら塒へ歸れば。百姓は鍬を肩に載せて畔道のむかうをさむしさうに茅ぶきの屋根をはるか目あてに歸ります。實に哀を催すやうな有樣。女は氣味惡く口の中で佛を念じながら歩行いて來ると何處とも知れず大喝一聲：：金切聲が矢庭に此女の胸板を打貫きました。

「オイ：：岸邊の娘ッ子：：イヤお雪さん：：

此れを聞いたお雪の心の驚愕は實に非常です。足も地に着かない程です。人一人通らないコノ道：：不意に呼びかけた金切聲：：呼掛けたのは果して誰でせう？ 如何なる人物でせう？ 善？ 惡？ 頗る考ふべきものです！

## 第七回

＝笠がよう似た菅笠が＝

「何方樣かは存じませんが：：危い處をお蔭樣で：：何ともお禮の申し樣も御座いません。

ふるへ聲で辛くもいひ放ちました。傍に介抱して居るのは旅の者と見えますが。身形や容貌は黄昏時ですからよくは見えませんが親切に娘をいたはツて居ます。

「ど…どツかお怪我は御座いませんか…どうも實に危い處でした…モ一足遲いと…實に憎い奴です…開明の世の中でも地方にはまだアンナ奴が徘徊すると見える…夫れはさうと…どツかお怪我はありませんでしたか。

（原本插畫）

かういひながら娘の着物の泥を拂ツて遣ります。娘は地獄で佛――嬉しさに言葉も口籠ります…

「エ…何處も怪我は御座いません…お蔭樣で…

ト云ッたぎり又俯向きました。

「全體…マアどうした譯です？

此問題には娘も答辯を與へない譯には行きません。亂れた髪の毛をチョイト搔き上げながら徐々解式を與へます。

「實はから申す譯で御座います…

＝ハア…＝ト男は思はず耳を峙てました。

「今日其處の西念寺と申すお寺へ墓參に參ツて此處を通りますと突然傍の森の中から妾を呼止める者があるンで御座ります…

＝ヘエー…成程。こりやア嘸…驚いたでせう…＝とは同情をあらはした男の挨拶です。

「妾も驚きまして振り返ツて見ますとそれが雲突く樣な男なんで…ツカ〳〵ツと妾の傍へ來てサモ馴れ〳〵敷く話しかけますから…妾も吃驚しながらこは〳〵其男の顏を見ますと村でも評判の惡者アブ熊と云ふごろつきで御座いますからなほ吃驚…女と蔑ツて色々無理難題を云ツて仕舞には手籠に仕兼ねない勢ですから妾も一生懸命で抵抗ひましたが女の悲しさは…既に危い處へ貴君が丁度お出で下さいましたものですから…惡者も逃げて仕舞ひました…若し貴君がおいで下さらないものならば妾は…

「ヘーイさうでしたか。そりや何よりも結構な事でした…あなたは今日お墓參の歸路…

「ヘイ…

何だか氣にでも懸るのか頻りに打案じて居ましたが尙言葉を續いで…

「夫りやアさうとお宅は何處です…まだ餘程あるのですか？

「ヘエー…もう半里と少しばかり…

「そりやアまだ隨分ありますネ…私も實は旅の者でチト此邊に探す家があるのですが暫く來なかツたものですからチットも樣子が分らなくツて困ツて居るのです…又アンナ惡者にでも遇ふといけませんからそれぢやア其家を探しながら其邊まで送ツて上げませう…

娘は喜びました。願ツてもない男の親切。

「有りがたうぞんじます…どうかまことに恐

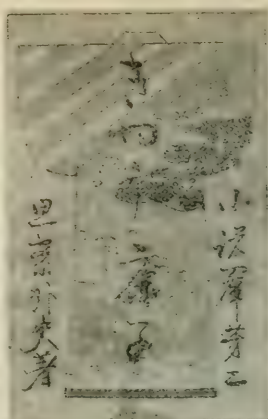
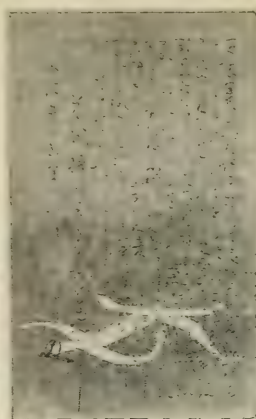
入りますがどうぞ願ひます・・・此邊にお探しなさるお家が御座いますなら妾も共々探してお上げ申しませう・・・
―さうして下さると僕も・・・（ト云ツたが急に氣が附いたのか）私も大きに都合がよろしい・・・サア・・・それぢやア一處に參りませう。
打連立ツて森の下・・・露まだ宵ですから濡れさうで濡れません！　道々話しながら行きます。
「貴女がサッキご墓參とおッしやいましたが全體誰方がお死去なすッたのです？
―ヘイ・・・アノ母が・・・
娘はハヤ泪に聲を曇らせました。男は聞くと不審の眉をひそめまして
「ソーシテ何時お死去遊ばしたのです？
「ヘイ一週間ばかり前に・・・
トいひ切らないに袖を顏へあてました。
―ヘエー・・・それはどうもご愁傷お察し申します。
ト男も何を思出したのか急に悲しくなッたか・・・萎れ返ッて道は更らにはかどりません。
「ご親類は・・・・・
「・・・親一人子一人の中で御座いますからなほさら・・・
ト涙を飲み込み吐息を突いて
―・・・尤も一人兄が御座いますが・・・アノウ東京の方へ參ツて居りまして・・・
トこれを聞くと以前の男は急に思ひ當ツた事でもあるのか娘の顏を闇がりながらヂット覗き込んで＝・・・デモ・・・あんまり違ツて居る樣だ・・・＝ト口の中で囁きました。餘りに男が自分を覗き込みますから娘も不審で堪りません。
―さうして貴君は何とおッしやるお方をお尋ねなさいます？
「エー・・・岸邊霜と申す・・・
此れを聞いた娘の驚き譬ふるに物もありません。矢庭に男にしがみ附いて
―そンなら・・・貴君はお兄樣でしたか・・・
「エーッお雪か・・・
これは／＼とばかり果ては兩人とも涙です。――暫しは手に手。顏と顏――言葉は更らに兩人の胸を離れません。母に別れて夫に遇ツたお雪の思！　妻に遇ツて母に分れた浪次の心！
此跡は書かずとも御推もじ――やがて東京の女流で岸邊醫學士の令夫人雪子と呼ばれます――何はともあれ只めでたし／＼で此編を終ツて置きませう。

# 京鹿子

(原本表紙)

(原本紅葉山人の序文)

## 其一——不思議なは心の辻占

暦を後へ繰ッて見ると、私が十九の年——

私の學校が、一ッ橋にあッた頃。同縣人の學友達と鄕友會と云ふ學術研究の會合を組織して居ました。例會はいつも外神田の福田屋か、組橋の玉川亭で、會費は僅に十錢で、月に壹回づつ通常會を開いて居ましたが、此年の暮は赤坂の八百勘で忘年會を開きました。八百勘と云へば山の手でも指折の割烹鋪。此貧乏な會にしては、不相應に奮發したのです。

午後五時開會と云ふので、六時頃には、會員が二十名ばかりも集まりました。皆貧窮措大の悲しさは、年の暮と云ふのに、單衣と袷を重ね着にしたのもあり、會員の過半數は羽織を着て居ませんでした。併し大概は袴——袴と云ッても小倉、小倉でない處が、仙臺の二字は、穿きなくして僅に平の字の名殘を留めた哀れな袴で、羽織と云ッても、三代恩顧とでも云ひさうな見苦しいのばかりで。まづ此樓へ來ても恥かしくない扮裝をして來たのは、二十名の中で僅に一二名のみでした。私は故鄕の母が手織だと云ッて、送ッて呉れた、二子の綿入を着て、下には鼠色のメリヤスばかり、羽織は着ませんでした——一枚位は持ッても居ましたが、あまり見苦しかッたから、着用しませんでした。此綿入も脊筋に三寸餘の深手を負ッて、九死一生の小倉の袴を穿いて居ました。常日頃身裝には、更に頓着しなかッた私でも、此時ばかりはなんとなく恥かしい樣な心持がしましたから、今でもよく記憶して居ます、此時の扮裝ばかりは。

私は此忘年會の幹事でしたから、出來るだけ盡力して何かと周旋をして居ました。

其内に蠟燭も輝き、膳部も夫れ〳〵行渡ッて、ハヤ會員諸氏も微醉を帶びた頃。會員の一名——日頃人情博士と學友中でも評判な通人——が＝どうも、から云ふ酒席には、二三名位タボが居ないと、玻璃のコップに底がない樣なものだ＝ト兼好的に發議したら。ヒヤ、大ヒヤ、と大の字までつけて、賛成を表したものもありましたが。中には＝咄！　何等の怪事ぞ、社會の濱斥を蒙る、汚穢不潔なる女性の奴隸をして、此神聖なる集會を褻さしむるや＝などと、前の日曜日に敎會で傍聽した演說の復習をした宗敎家もありましたが。人情の赴く所は、是非もないと見えて、とう〳〵多數決で原案賛

成。程なく四五名の藝妓が、此席上へ現はれました。實に其時私は不思議に思ひました。何時の間にか、みんなも通人になッて、藝妓などを呼ぶ樣になッたと。私は又生れてから、此時初めて藝妓と云ふものを聘んだのですから、只まご〳〵して居るばかり。あんまりまごついて居たのを見て、氣の毒とでも思ッたのか、會員の一人が、

「花房君、マア君の席へ行ッて一杯やりたまへ。

ト呼び止められた時は、渡りに舟！ 私は自分の席——卽ち左の隅の末席に着きました。すると會員の一人が、

「花房君、どうも今日の君の周旋には、實に謝する處を知らずだッ、全く君の盡力で今日の忘年會も圓滑にいッた。

これに續いて諸方から樣々な賛辭。これを耳にした私の歡喜は實に非常でした。私は一體から云ふ周旋は不得手ですから、從ッて痒い處へ手が屆かなくッて、嘸みんなに不滿足を與へるだらう、と實は心痛した處へ、此反對の賛辭。思ひ掛けない挨拶。私も喜びまして、

「どうして、一體僕はから云ふ周旋は、諸君も知ッて居る通り、不得手だからさぞ諸君に不滿足を與へただらう、許したまひ。

ト謝罪りますと＝どうして〳〵＝ト云ふ聲が、四方から私の耳の鼓膜を激して、降る樣な猪口の雨。息も吐かれません。其中にお座附とか云ふ唱歌も濟んで、宴會もます〳〵佳境に進まうとする頃。會員の中では年長な、松井といふ男が、片手に猪口を持ちながら、自分の席を立ッて、私の前へ來て、其猪口を差出し、私の今日の周旋の勞を勦りながら、

「時に花房君。例の一條は其後どうなりました？ 御尊父から御通信がありましたか。

聞かれて、私の胸は遽に波打つて、暫くは返事も出來ませんでした。私は決心してから答へました。

「實は：：さッきから其事を諸君に話さうと思ッて居ましたが：：今朝國から電報が：：來まして：：

ト迄は云ひましたが、考へれば考へる程無念で思はず口籠ります、暫く無言で居ましたが、

「今朝親父がとう〳〵入獄したと云ふ報知がありました：：

ト震へ聲でやうやく云ひ切ッて、一拳虎を搏すべき元氣な私もはら〳〵と二三滴の熱涙を膝の上に落しました。此有樣を見てみんなも氣の毒に思ッて＝それは〳〵＝ト私を慰めてくれました。私も亦みんなの愉快を妨げては惡いと考へ附いて、面に笑を裝ッて、心で泣きました。其時の胸中の切なさは：：語れません！ 實に堪りませんでした。學校で擊劍でもする時は、人に負けるが嫌ひでしたから、相手に續け打にうたれても、メッタに＝まゐッた＝とは云はない程な強情ものの私も此時ばかりは鬼の目に泪を浮べました。私がこんな事を云ひ出してから、折角の宴席も、妙にしらけたのを見て昔取ッた杵柄の老妓が心配して、打叩く太鼓、囃立てる三味。今迄の愁歎も忽ち歡樂と姿を替へました。此跡は云はずと知れる杯盤狼藉、果ては甚句かッぽれ：：九時頃になッて、此宴會も漸く終を告げ、會員も追々退散しました。私は一人跡に殘ッて色々取り形づけて、此樓を出たのは、彼此十二時になんなんとした頃でした。

往還へ出ますと、有繫年の暮だけ、いつもよりは賑かでしたが、丸の內へ來かゝると、夜は更けて居ますし、だん〳〵寂しくなッて、人通りも途絶えて來ました。空を眺めると、二十日餘りの片割月が、其影さへ薄暗く、吹きすさむ膚寒い夜風、何となく物凄く、哀れになッて來ました。今まで宴會の喧噪にまぎれて姿を忍ば

して居た悲歎の曲者が、一時に現はれて、犇々と私の前後左右を取圍みました。

「アヽ。今頃はお母様はどうしていらッしやるだらう?。お父様が家にいらッしやらないから嘸困ッていらッしやるに違ひない。別段にコレと云ッて餘財のある身代でもないから、其の日暮にも困ッていらッしやるだらう。夫れはさうと、お父様が御入獄の時はお母様のお驚きはマアどんなであッたらう?

ト思はず吐息をついて、

「何はともあれ、少しも早くアノ飜譯物を例の書肆へ持ッて行ッて、其原稿料を國へ送らなければならん。

ト獨り言を云ひながら、悄々と本郷森川町の下宿屋へ着くと、恰度小女が表の戸をメめかかッて居た處でしたが、常時の樣に=只今=ト云ふのもなんだか物憫い樣で、ズン〱階子を上ッて、自分の部屋にランプを附け、其時まで被ッて居た帽子――帽子と云ふのも恥かしいほど、色の褪めた茶形の帽子を手に取ッて見ると、紙捻の樣な紙片が帽子の後に附いて居ました。數多い客の事だから間違はぬ樣に、割烹鋪の注意で號名の札紙を附けたのであらうと、何氣なく手に取ッて見ると驚きました、なんだかちッとも私には譯が分りません。次の樣な文句が、假名文字で書いてありました、

『またきッとですよ』

## 其二――氣に掛るは迎の輓車

光陰の經過つのは早いもので、前回に述べた八百勘で忘年會を開いた年から三年目――私が本郷の學校へ入ッた翌年の春の事でした。散りも初めず咲きも殘らぬ好時節、平生酒の嫌ひな者も櫻色に顏を染めて醉心地のする、一年三百六十有餘日中一番何事も手に附かない時節、その四月二十八日の夕暮、入相の鐘に散ッて行く花見客も、家路を急ぐ時分でした。貧書生の悲しさは、花が咲いたからと云ッて、それを肴に一酌を傾けると云ふ事も出來ず、只散步、運動と名を附けて衞生的の膝栗毛を花間に馳せるばかり、花さへ眺むれば夫れでいヽ、月さへ見れば夫れで濟むと云ふ譯には行かぬのが、なべての人情。酒なくば花も色なく、肴なくば月も光ない樣に思はれます。此處が所謂人情の弱點でせう?

私も上野や隅田の花盛の噂を聞いて、此度の日曜には行ッて見よう、此次の土曜には是非と思ッたが、學校の日課に迫はれて夫れも出來ず。ナアーニ勉强さへすれば、書生の本分は盡して居る。まだいくらも花を眺める時節はあると悟顏に觀念して、打棄てた書籍を又候讀み出し、一二枚も讀み終ッて、不圖字句の難所へ掛ると、讀足を止めて、傾けた顏は自然前を向く、前を向くと自然往來を見る、往來を見ると千鳥足の徵醉客が群がッて飛び廻る有樣を見る。アヽ…ト吐息を洩すのも度々でした。

此日は午後から學友が四五名訪れて來て、其處は下宿屋住居でも大したもの、肴の物に鯵の干物を大牢にして一酌催しました。醉が廻るに從ッて心持もよくなり、果ては學校の談柄。どうもアノ契約法の時間の多いには閉口する、夫れに…の點の鹹いには困る抔と打興じて、思はず時を過し、ハヤ黃昏に近い頃、下から下宿の小女が上ッて來て、

「アノウ、只今車夫さんが、こんなお手紙を。

差出した手紙を見ると、名宛は私の名前、表には月日と只伊藤の二字ばかり、其外は差出人の町名番地もありません、不思議に思ッて、なんに致せ宛名は私に違ひありませんから、開封して見ると、即刻此車に乘ッて來て下さい、御多忙の所を誠に御氣の毒ですが是非一寸來て下さい、ト書いてありました。私はます

ます不審でなりません。來てくれと云ッて、行く場所も書いて無し、それに差出人が只伊藤では誰だか更に分らない。勿論同窓の友人中に、伊藤といふ苗字の者が一人あるが、今日も學校で面會したし、車を持ッて呼びによこす程の、急用がありさうにも思へません。

暫く考へて居ましたが、車までよこして迎ひに來る位だから、用——急用があるに違ひない、先の人はどんな人だか知らないが、ハテ變だがマヽヨ行ッて見よう、ト思ッたが、現在學友が來て共々酒を酌み交して居るし、どうしたらよからう、行ッても見たいし、行くのもわるし……暫くは好い思案も浮びませんでしたが、不圖一策を考へ出し、

「どうも諸君誠に失敬だが、今伊藤といふ同縣人から手紙をよこして、是非僕に面會して少し賴みたい事があるから、ト車夫までよこして迎ひに來たから、諸君に對し甚だ失敬だが僕は一寸行ッてくるから、どうか諸君は飲んで居てくれ給へ、すぐ歸ッてくるから……僕の代理には弟を措いて行くから……

ぬからぬ顔で私はヤットから云ひました。すると學友の一人が、

「さうかい、僕もさッきから大變に御馳走になッて、大變節酌したから、もう歸らうと思ふ、夫れなら幸ひ其處等まで一緒に行かう」

これには私もハタと困りました。件の手紙の文句の中には内々お話し申したい事がある……ト書いてある。して見ると朋友と一處に行ッては都合が惡い。アヽどうしたらよからう……思ひ返して、

「マアいゝぢやアないか、何も僕が居なくなるからッて、さうみんな歸ッて仕舞はなくッても……、僕も今直ぐに歸ッてくるから、少し待ッて居てくれ給へ」

ト同じ樣な挨拶を繰り返して、直ぐ下宿屋から使をやッて、近所の同縣人の家に厄介になッて居る實弟を呼びにやりました。弟も幸ひ家に居て、直ぐ來たから、百方こしらへて、私は魚の網の目をくゞッた程、いそ〳〵下宿を出て、其時まで門前に待ッて居た車に飛び乘ると、車夫は一散に本郷の通へ出て、湯島の方へ駈け出した。

車の上に乘ッてから、私は今更の樣に氣が附いた、世の中にはどうも不思議な事があればあるものだ、丸で一面識もない者から手紙をよこす。そればかりでない、わざ〳〵車をよこして、内々お話し申したい事がある……から是非、どうも不思議だ、ト此時まで袂の中に押込めて置いた件の手紙を取出して、モ一度見ると、どうも手跡が……男らしい處もあるが、併、いたし、抔といふ文字は、どうしても女の手跡に違ひない、イヤ女子の手跡らしい、ます〳〵不審でならない、どうも女子から用があるッて呼び出される所以がない、それに内々お話し申したい事が……どうも……どう考へても不思議だと首傾けて居る内に、私の乘ッて居た車は韋駄天走に湯島切通の坂を下りて、仲町の方へ出た頃は、日も漸く暮れかゝッた。

見ると五六間先の飲食店らしい店先の暖簾の間から十八九の女が首を出して、人待顔に此方を眺めて居る樣子。私の乘ッて居た車が近くに從ッて、其女子の視線がだん〳〵私の顔に集ッて來た。別段女に知ッた人はないか……若しや鄕園の者で……知ッた人でも、考へたが、丸で一度も遇ッた事のないアカの他人、併し先方では私を知ッて居るかの樣に私の顔を熟視した。熱心に私の顔を熟視したから、其處は妙なもの、私も亦ソノ女子の顔を見詰めた。私が乘ッて居た車が、其女子を去ること一間ばかりの處へ來ると、ソノ女は矢庭に其店の中に駈け込んで、姿を暖簾の中に消して仕舞ッた。

アラ！　不思議と思ッて居る内に、どうです、ますます不思議ではありませんか、私の車は矢庭に其梶棒をその店前に止めた。私の心中の疑念は、なかなか車から飛び降りる勇氣を私に與へません。私は只茫然と躊躇の外はない。此店の處へ暖簾を掻き別けて現はれたのは、此店の主個とも思はれる、年頃四十許りの女房、

「オヤ、よくいらッしやいました、サアどうぞこちらへ、先刻からどんなにお待ち申しましたらう。」

馴れ馴れしく云はれて、私はますます荒膽を挫がれた。見ればこれも一面識の無い婦人。それが＝よくいらッしやいました……さツきからお待申して……ますます變で堪りません。譯りの不思議さに私も呑まれて、アッケに取られて、僅に其婦人の顏を見詰めて居るばかり……です。

「サア、どうぞ、マアこちらへ。」

云はれてどうして私が直ぐに入られませう？　疑惑は私をますます躊躇させます。婦人はもどかしがッて、無理に私の手を引ッぱる様にして、とうとう私を店の中へ引入れました。

店の内へ入ッて見ると、反射鏡のランプが我物顏に部屋の隅々に輝いて居ました。また私が下駄を脱いで其處に据らうともしない内に件の婦人は、

「サア、どうぞ、まづ、お二階へ、サア……」

云はれて、どうして私が直ぐ二階へ上られませう？　ポカンと階子の下に佇立んで居ると、私を押上げないばかりに、無理やりに二階へ追放ッた、私はまた──夢路を辿る心地──でコハゴハ二階へ上ッて見ると、（實は其時上ッたか上らなかッたか一切夢中でした）やうやう二階へ上ッて見ると六疊と四疊半の二座敷。六疊の奥座敷──勿論階子段から奥の方の──に只釣ランプが眞中に、ツクネンと燈ッて居るばかり、外に人の氣息もない様子、イヤ、實際人一人居ない空座敷、私は其處等見廻して、只茫然──。

## 其三──切なさは娘が胸の内

私は六疊の座敷に只一人、釣ランプの灯影と共にボンヤリして、どうする譯にも行きません。二階へ押上げられた時、チラリと店の様子を見、又此處へ來て此座敷に貼ッてある値段書杯を見ると、どうしても此店は何か飲食店に相違ありません。私は今迄此仲町通は上野の公園へ運動に行く行歸に始終通ッてよく知ッて居ますが、其くせ此店へは一遍も這入ッた事がありません、今日が始めてですから猶更家の勝手は知れず、只ひた呆れに呆れて居ました。其内には下から誰か上ッて來るだらう、誰か茶でも持ッて來てくれるだらう、ト考へ直してツクネンと待ッて居ましたが、なかなか人が上ッて來ません。ますます不審で堪りません。さうかうして居る内に、下座敷の方でする女の話聲が不圖私の耳の鼓膜に觸れました。

一マアお孃様、お喜びあそばせ……アノお方に違ひありませんの……』

跡は言葉が暫く途切れて分りませんでしたが、これ丈けの事は慥に私の耳に這入りました。シテ見ると其お孃様とも云はれるものが、下座敷に居ると見える、其お孃様が何事か私

に用事でもあるのか、ハテ不審な！　それとも無關係かも知れない？　又女子の聲音が囁きました。

「お孃樣ッ…ソンナお氣の弱い事で…

是を聞いて私はます〳〵不審の眉を顰めました。どうしても…シテ見ると其婦人が私に何か用があると見える、慥に。どうも不思議でならない、ソンナ…お孃樣…とも云はれるものに知己のある私でない…其内に階子段が私の胸と共に轟きだした。なんだか階子段の下で二人が爭ッて居る樣に思はれた。なんでも一人が一人を階子へ押上げようと頻に勸めて居ます。夫れを片方では厭がッて上らないとする。それを下から無理やりに上げようとして爭ッて居る樣子。暫くすると十八九の娘――束髮の娘が忽然と私の眼の前に現はれました。

私は又何者だらうかと其婦人の顏を見ようとした内に、其婦人は既に下を俯向いて仕舞ひました。此方から言葉を掛けるのもなんだが極がわるく…其内には其女の方から何か云ひ掛けるだらうと待ッて居ましたが、其婦人は更に言葉を發しません。私も仕樣がありませんから、先づ此方から言語を發する前に非常の勇氣を鼓舞して、畢生の勇氣を憤起して、下からキッと其婦人の顏を覗き込んで見ると、どうです、私の驚駭は益〻其量を増しました。其婦人の愛らしい眼球に泪の露を含んで居ました！　泪の滴が其膝を霑して居ました！　私はますます事の奇異なのに呆れ果てて、言葉を發しようとした勇氣も何處へやら失せて仕舞ッて、只――茫然！

暫く經ッて其婦人――まだ嘗て一度も會ッた事のない婦人――が、如何にも情に堪へないと云ふ有樣で、とう〳〵聲を放ッて泣き出しました。如何にも悲しさうに泣き伏しました。私もかうなると今は猶豫がなりません――片時も。矢庭に其婦人に向ッてかう云ひました。

「何誰か知りませんが…さう泣いてばかりいらしッては…薩張譯が分りません…マア仔細をお話しなさい。

此言葉を聞いて其婦人は初めて其顏を上げました。ランプの光線で其容貌を見ると、泪で洗はれた薄桃色の頰、それが玉の樣に光澤を持ッて居ます。鬢の邊に散らした艶々しい後れ毛、それが麻の樣に亂れて居ます。誠に一箇の佳人――見とれるばかりの美婦人――若しや心當が…ト考へたが更に見覺がありません。私も此時は全く此美婦人に見とれたに違ひありません。暫しはシゲ〳〵と其婦人の顏を見詰めて居ました。此の愛らしい――私には非常に愛らしい朱唇から左の聲が――妙な聲音が聞えました。

「貴郎、妾をお忘れ遊ばしましたの？

央は恨む樣に、央ば訴ふる樣に、云ッたぎり。

私は全く忘れたに違ひありません、どうしても其婦人に何處で會ッたか思ひ出す事が出來ません。彼の婦人は語を重ねました。

「お忘れ遊ばしたも御無理はありません、妾の風がスッカリ變ッて居りますから…。恰度三年前…赤坂で。

「赤坂で」の三字を聞いたトタン、私は思ひ出した――夢の覺めた樣。

「なる程…

思はず口走ッた。

「さうでしたネ。

繼けたのは僅に此語でした。三年前の暮、八百勘で開いた忘年會の有樣が、アリ〳〵と私の眼前に現はれました。成程アノ時分は、イキな島田の藝者風。今は女生徒造の束髮娘。私の見忘れたのも無理はない、ト暫し無言で考へて居ました、が、マアなにしろ、どんな用向だかまづ夫れから聞き出しました。

「何は兎も角、何か私に御用でもあるのですか。

彼の婦人は『ハイ』トロ走ッた跡は、紅の潮が愛らしい桃色の頰を濃くしたばかり。

「何か御用で……？

私は再三かく尋ねました、が、彼の婦人は——只『ハイ』との返事ばかり更に其譯を話しません。私ももどかしくッて堪りません。少し怒氣を含んで、思はず知らず、

「只『ハイ』との御返事ばかりでは一向譯が分りません、一體マア、どんな御用で？

彼の婦人は顏を俯向けて、聞えるといふより、ムシロ見えると云ひたい程な小さな聲で、

「實は……

アラ！　又口籠ります。

「實はがどうしたんです？

私もじれッたさに——少し怒り過ぎた位——ツンとしました、其處で彼の婦人も驚いたのか、思ひ切ッたと云ふ風で、

「實は……アノ時貴郎が……お鄕國から電報・お國でお父樣が入獄したとおッしやッて、思はず涙をおこぼし遊ばしました時、ア、妾もコンナ悲しい、つらい稼業をするのも、みんな……元をたゞせば、親の爲め、生みの母の爲め。貴郎のお心をお察し申しますと、實に……思はず妾まで泪がこぼれる樣で……それ程までに親御をお思ひ遊ばす御孝心なお方と……

跡は妙に言葉が弗と途絶えて仕舞ひました。

暫くたッて、

「アンナお方と……（サモ思ひ切ッたと云ふ風で）アンナお方と御一處になッたら、どんなに……可愛がッて下さるだらう……（溜息を一つ吐いて）さぞ嬉しからう……

始終を聞いて私も返事が出來ません。只アッケに取られて、其婦人の顏を下から、熱心に覗き込みました。彼の婦人は又熱心に話を續けました、

「妾の母親——父親は妾の小さい時分に沒りましたから——天にも地にもタッタ一人の親も、あれから間もなく病死いたしまして、母が居りません位なら、アンナ商賣を致しませんでも……妾一人位はどうでも……ト綺麗サッパリ足を洗ッて、それから妾の在所——横濱の太田村へ引ッ込んでからも、なんの因果か、貴郎の事がどうしても忘れられません……コンナ事を申し上げても、所詮眞實にはなさいますまいが、どうかもう一度貴郎にお目にかゝりたいばッかりに、假令廣い東京でもお尋ね申したら知れない事もあるまいト只それぱッかりを力に、都合……六度、只その爲め、貴郎に一目お目に掛りたいばッかりに、東京へ出て參りましたが、御緣のないのやら、どうしてもお目に掛る事が出來ません。何時も東京へ來る時は勇み勇んで參りますが、歸る時はスゴ〳〵として戻る氣力もありません。今度といふ今度、お目に掛られなかッたら、もう妾は此世に……生きて居る心はありません。

これを聞いて私も吃驚しました。彼の婦人は自分の脇に置いてあッた——今迄チッとも私に氣が附かなかッた——紫包を取出して其中から卷物の樣な物を出しながら、

「此通り妾は覺悟を極めて、妾の家に傳はる公債證書と地券、それに……

云ひさま懷中から紙入を出しました。

「此通り有金までスッカリ持ッて——若し今度お目に掛られなかッたら……これと一處に淵川へでも……

私の驚駭はます〳〵加はッて來るばかり。

「一體、マア、そりやア……

云ひつゝ思はず私は膝を進めた、彼の婦人も思はず膝を進めた。彼の婦人は其卷物を片手で持ツて私の前へ差出した。

「どれ、マア、お見せなさい……

受取らうと卷物の端――一つの端は彼の婦人の纖手に觸れて居る――其片端へ私の手を觸れた途端思はず其婦人と見合した顏ソシテ顏。彼の婦人は、何が恥かしいのやら、矢庭に其顏を私の膝の上――においた手――私の左の手の上に、ヒタと押しあてた。妙に私の手がヒーヤリしました、アラ！又泣いて居るんですもの。

「此れ程までに妾は貴郎を……思ツて居りますのに……

折角止みかゝツた泪の雨も又候大降りになりさうです。私は此時實に妙な、一種不可思議な、どうとも名狀の出來ない――まだ生れてから經驗した事のない感情に打たれました。

「さうして、マア、どうして私の居所が分りました？ 、

言葉も亂れましたが僅にから問ひ掛けました。彼の婦人はやうやく泪を留め、矢張顏は上げられないと見えます。

「よッぽど御緣が深いと見えて……實は今日……お名前だけは先年の忘年會の時伺ッて存じて居りますから、だん〳〵調べましたら、やうやうの事で、其お方は本郷の學校にいらッしやると云ふ事だけ分りましたから、今日實は……其門の前へ參りましたが、どうしても中へ這入れません、氣が咎める故か。今日ばかりではありません、是迄幾度となく學校の門前まで參りましたが何時でもお目に掛る事が出來ませんで、今日といふ今日は、假令一時間が二時間でも、誰か出ていらッしやるのを待ツて居てお尋ね申さうと思ッて、二三人連で學校の洋服を召したお方が出ていらッしやいましたが、どうも……花房……といふお方は……ト伺ふ譯には行きません。其内に時はたッて仕舞ひますし。どうしようかト思ッて途方に暮れて居る處へ、向うの方から只一人少しフトッタお方が出ていらッしやいましたから、思ひ切ッて其お方に、コレ〳〵のお方は……ト伺ひますと、まだ貴郎との御緣が盡き無いと見えて……其お方が＝ア、其人は＝トおッしやッた時の妾の嬉しさは未だに覺えて居ります程。其人は……私の同級で……今朝も教場で逢ッたばかり……何か其人に用でも……＝聞かれて妾の狹い胸は踊りだしました＝イ、エ、ナニ、別段……實は同國の者に頼まれまして、少しお目に掛ッてお話し申したい事が……＝これ丈けも、やッとの事で＝何處にいらッしやいます？ お處が分らないので誠に困ッて……＝あれは本郷森川町一番地のコレ〳〵云ふ下宿に居る……幸ひ私も歸路だから、序に其處まで一處に教へてやらう……＝ト親切におッしやいましたが、流石に妾も其お方と御一處に貴郎の處へ參る譯には行きませんから＝イ、エ……お居所さへ分れば……＝ト厚く禮を申して行かうとしましたが、嬉しさのあまり其お方に向ッて＝失禮でございますが、貴郎のお名前は＝伺ひますと＝私は伊藤……＝伊藤とは妾の名氏。實に御緣と申すものは妙なものです……夫れでサッキ上げたお手紙にも伊藤と書きましたのでございます……

此時『ホヽ』と愛らしい笑を洩らした。私もますます事の不思議に呆れて居ました。婦人は猶も談を繼けました。

「お處が分りましたから、三年越思ひに思ッた妾の苦心が屆いて、幸ひ此家は妾の乳母の處でしたから、其乳母に頼みましてお車を貴郎の處へ上げましたら、お忙しいのに直ぐ來て下さッて誠に……こんな嬉しい事はご

ざいません。

漸く顔を上げ、さも嬉しさうにニッコリ笑ひました。私は袂からハンケチを取出し、

「マア、其涙をおふきなさい……

## 其四——嬉しさは乙女が接待

私が彼の婦人に初めて遇ッたのは、忘れもしない四月の二十八日、夫れから二月ばかりは何の音信もありませんでしたが、六月の末に不圖私の處へ横濱から書留郵便が屆きました。差出人は仲藤□字。偖はと封を切ッて讀下すと、

まはらぬ水茎に一筆しめし上まゐらせ候。日増にお寒さきびしく相なり候ところ おんまへ様御かはりなう候はせられ 誠に目出度嬉しく存じ上まゐらせ候。私事も無事に暮し居り候まゝ 憚様ながら御あん心可被下候。偖とや先もじ図らず湯しまにておん目にかゝり候せつは いろ／＼御無理なる事を願ひ たらはぬわが身をお見捨なく御親切の段 だんだんにまでも忘れ申ましく くどうも／＼御禮申上まゐらせ候。おん別れのふし 一寸御話し申上おき候通り 私すまひも大かた おちつき申候まゝ何卒／＼學校の御つがふ宜敷候はゞ 一たび御運び下されたく 萬事はおんめもじの上にて申上べく 一時も早く御運び下され候様 願かけねんじ上まゐらせ候。右御案内まであら／＼芽でたくかしこ

けふ　　　　　　　　榮ゟ

花房様
　　御許へ

かへす／＼も御身御大切に願上候 偖又為替にて金子八圓御送り申上候まま其内壹圓は旅費になされたく 殘りは絽の紋附の羽織を一つ御求め御出のせつおめしなされたく 先もじ湯しまの歸り道一寸御許様へ上り候折 ひとへ羽織御持なき様御見受け申候まゝ 誠にぶしつけがましく候へども 何卒夫れにて一枚御求め下されたく 横濱すてんしよへ御着きなされ候はゞ すぐ車にて私方へ御越し下されたく 此のだん念の爲め申上おき候 此の外申上たき事は海山おはし候へども おめもじのふしにゆづり申置き候

何から何まで——婦人の厚意は又格別——私は實に一生の中に記憶し置くべき恩誼の一つに入れたい程でした。恰度其頃に卒業試驗の前で復習の爲めに少しの間休暇が得られましたから、早速下宿の女房に頼んで、絽を一反買ッて貰ッて直ぐ紋附けの紺屋にそれを染めさせ、國から送ッて來た學資の殘余で、博多の帯を一本求め、前から持ッて居た南部の單物——私には一張羅——其買ひたての博多の帯をメめ、出來立の羽織を着て、いそ／＼新橋の停車場へ俥車を飛ばせたのは、手紙が來てから恰度五日目の事でした。

偖横濱へ着いたのが二時少し過ぎ、教へられた通り直ぐ車へ飛び乘ッて——横濱在太田村へ向ひました。其時の私の嬉しさ……一體どんな處に居るんだらう……どんな馳走をするだらう……かう早く私が行くとは思ふまい。流石嬉しさに考へも亂れます。其内に四邊の景色が漸々田舎じみて來ました。細い道——漸く車が通れる位な——細道へ入ッて[illegible]町も行ッた處——低い柴垣の中程の枝折戸——粹な杉の燒板の戸扉が附いて居る——枝折戸の處へ來ると、車夫は梶棒を下しました。

「ヘエ、旦那こちらでございます。」

「オヤ、おまへ、よく知ッてるね。」

「ヘエ、わたくしやア此處の土地のもんですか

ら。
『さうかい』云ひきらぬ内に私の足はハヤ門内へ入りました。
「ごめんなさい。
「オヤ、貴方？
障子を明けた――彼の婦人、
「オヤ……よく、マア……
さも嬉しさうに私を見て、ニッコリ笑ッた笑顔――其笑顔、未だに私の記憶を去らない程……さも/\嬉しさうでした。暫しは兩人とも無言――此無言が實に千金を價するのです。暫くたッて、
「どうぞ、貴郎、マアこちらへ。
誘はれて通ッたのは六疊の小座敷――彼の婦人の居間と見えます。
「サア、どうぞこれへ。（革蒲團を出しながら）よく此おあついのに……よくこんなにお早く……
今更の樣に挨拶をして居ます。私も何だか妙に極が惡く、只「ハイ/\」と云ふばかりです。
「さぞまア、おあつうございましたらう」貴郎、（少し甘ッたれる樣な音調で）貴郎。其のお羽織を、マアお脱ぎあそばせな。
「さうでございますか。
我ながら改まッた口上。
「オホヽヽヽ、お羽織の御似合あそばすこと。
云はれて今更禮も云はれません。
「マア此處の障子でも明けたら少しは風が……
庭を見ると小さい『たゝき』の泉水、それに錦魚が心地よげに泳いで居ます、庭の向うは岡つゞき、燈籠の鹽梅、敷石の工合、範圍は狹いが中々凝ッた錆のある庭です。今迄ワク附く胸で別段氣にも留めずに居た部屋の装飾――右の方の床の間には誰やらか手紙を貼ッた掛地、竹細工の花生に、可愛らしい撫子が生ッて、其脇に錦の袋をかけた琴が立てかけてあります、南向の圓窓の下にある一脚の唐机、其上に物語類の書籍が四五冊、壁には處せきまで月琴や、胡琴や、提琴、横笛其外いろ/\の樂器……さては一絃琴まで壁の脇に横ッて居ます、何樣もとが……
私は思はずキョロ/\四邊を見廻したものだから、
「貴郎、これでも餘程、形づいて居る内でございますよ。
「さうですか。
「[illegible]です。見ると此部屋の隣は六疊の[illegible]、其脇に臺所。[illegible]に人の氣息の無い樣子、此家にタッタ彼の年若な[illegible]一人きり。私は又そろ/\呆れ出して來た處へ、彼の婦人は茶を持ッて來て、菓子をも進めました。
「どうか、まアお茶でも召しあがッて……
「ハイ」と會釋をして一口飲んで、
「さうして貴女、タッタお一人……？
「ハイ、（笑ひながら）妾タッタ一人で誠に淋しくッて仕樣がありません、（一つ息を吐いて）マアよくこんなむさい處へ……來て下さいましたネ、（急に氣を替へ[illegible]て）所詮いらッしゃッては下さるまいと思ひました。
「ソノ恨みが――[illegible]
「さうして貴女、食べる物は？
「お茶はみんな妾がこさいますが、ご飯はツイ此近所の老婆が來て毎日焚いて[illegible]ますよ、（一寸首を傾げ）何た貴郎に[illegible]たしませう？　[illegible]やッて遠方を來て下さッたのだから、[illegible]御馳走をしなければ[illegible]……
「イエ、あんまり御馳走なさると、喰過ぎます。
喰過ぎます、とは此處へ來てチト我ながらガサツの言ひ擬。併しかうやッて婦人と差向ひで滯りなく談話が出來るとは、先年某氏の忘年會の時から見ると、私も餘程社交學に熟練したと見えます。

（鏑木清方）

跡は四方山の世間話。其内には彼の娘が琴の師の想夫憐、私も鳥渡かじッた事のある尺八、吹き鳴らすと云ふも凄まじいが。夏の日もいと早く――兩人には何時――暮れかゝる處へ臺所で何やら人の足音。彼の婦人は琴の手を休めて「鳥渡」ト云ッて納戸の方へ行きましたが暫く經ッて、嗄れた老婆の聲で、

「オヤ、さうでございますねエ、先達からお話しの……オヤ、東京のお兄イさんが……オヤ……でございますか……嘸あなたお嬉しくッて……」

## 其五 ――焦思しさは義理の柵

彼の婦人が心を籠めた田舎料理も私には大牢の滋味と思はれました。夏の夜の明け易く、障子に鳥影のサスが兩三日は私も此處に逗留したく思ひ、又彼の婦人も、切に引止めましたが、其處が浮世の……とでも云ふのか、私は試驗の用意もありますから是非共翌日歸らなければなりません、引く袂を振り拂ッて、小說家に書かしたら、後髪引かれる思ひとでも云ひたい程、一方ならぬ馳走になッた、親切に接待してくれた禮を懇に述べて別れる時も、流石前に二足後に三足、果敢々々しく進む事が出來ないのを、心を鬼にして……玄關で帽子を彼の婦人の手から受取ッた時、

「こんどはこんな遠方からお呼び申しは致しません、モット御近所から……」

何氣なく云はれたのを別段氣にも止めず、出掛けましたが、彼の婦人は四五町も私を送ッて來てくれて、

「そんなら……モウ……妾は此處で御暇申します……ご機嫌よう……」

見れば婦人の明眸に時ならぬ露が漾ッて居ます。此れが遠方へ行くではなし、タッタ東京と横濱の間、それでさへかうですもの、實に私も彼の婦人が心のいとしさに未來永劫忘れては濟むまいと思ひました。それから又二月ばかりは何の音信もなく打過ぎました。

或る夕暮、下宿屋の小女が、一通の書狀を持ッて私の部屋へ來て、車夫さんが此れを、ト差出したのを見ると、裏書は矢張伊藤の二字、取る手遲しと開けて見ると、どうか此車に乘ッて直ぐ來てくれトと書いてありました。見れば見覺のある彼の婦人の手跡に違ひない、何は兎まれとソコ／＼に支度をして其車に乘ッて下宿を出ました。

私が乘ッた車は宛ら飛ぶ樣な勢で馳り出し、本郷の通へ出て僅の間に聖堂の脇を通ッて、萬世橋へ出た、ハテナと思ふ内に萬世橋を渡ッてハヤ大通へ出た、日本橋、京橋を渡ッて仕舞ひ、新橋間近く來た、ハテナ何處まで挽いて行くのだらうト思ひましたが尋ねもせずに乘ッて居る内新橋を渡ッて、大凡二町も行ッた處で、車は矢庭に右へ折れた。伊勢源の前を通ッて少し行ッた巷路の處で、やう／＼梶棒を下した、私は思はず「オヤ」ト云ッたも道理。此

家の前に――つひぞ見慣れぬ燈灯が下ッて居ます――見れば純然たる御神燈でした。
私は暫く呆れて、居る處へ、格子の内から十四五の可愛らしい娘が、
「オヤ、いらッしやいまし、サアどうぞ。
其内に彼の娘はチョロ〳〵と下へ降りて來て、格子をガラ〳〵と開けた。
「サア、どうぞ。
若しや……ト其娘の顏を覗いたが更に見覺がない婦人です、人違はいくらもある事、どうしても格子が跨げない。其内に彼の娘が私の手を持添へないばかり、『サア』と請じましたから、不審ながらタヽキの沓脱――根府川石の上――へ私の下駄を脱ぎました。
「サア、どうぞ、マアこちらへ。
餘儀なく一つ閾を跨いで座敷へ這入ッて見ると、長火鉢の向うへシャンと据ッて居る一個の藝者が、
「よく……
振り上げた顏見ると、どうです、彼の婦人、横濱で馳走をしてくれた婦人です、藝者風！ 暫くは言葉も出ません。
「どうして、そんな風に……？
夫れも五分も經過ッてからのこと。
「其お驚は御尤ですが、マアお聞きなすッて下さい、實は先達横濱でお目に掛ッた時、いろ〳〵貴郎から御話も伺ふし、お家の御様子も伺ひまして、こんな事を妾の口から申し上げては誠に禮儀を知らない奴だト思召すでせうが、段々お國のお困りの御様子も伺ひまして、どうかして貴郎の御兩親を此處にお呼び申したいが山々で、甚だ差出がましい様ですが、實は……（泪の薄衣に聲は包まれます）又候身を賣ッて、少し許り金子を調へましたから、どうぞ其金子で御兩親を此處へお呼びなすッて下さい。（泪ハラ〳〵）嘸……一應の御斷もせずに差出がましい、不屆な奴だト御立腹もございませうが、貴郎も御存じの通り兩親に早く別れ、外に親類とてもなく……誠に心細くッて、これから後は貴郎の御兩親を、妾の生の親とも思ッて、及ばずながら、責めて煮炊のお世話でもしたうございます、又こんな賤しい商賣をして、貴郎に愛想を盡かされるでせうが、（愚癡の繰言は女子の常です）これが初めてといふではなし――濡れぬ先こそ露をも厭へ――とも申しますし、女の悲しさには外にこれといッてお金の出來る術もありませんから、コンナ賤しい事をするのも、みんな貴郎へ盡す妾の寸志……
かう云はれた時の私の心の中、何で喜ばしくなからう。武士は己を知る者の爲めに死し、女は己を喜ぶ者の爲めに形づくる、其位の事は私も知ッて居ますし、實に此時は私も胸の中で兩手を合せた程。併し又よ、考へて見ると、私もモウ直ぐ學校を卒業するし、さうさへなれば、兩親位はどうともして養へようもの、夫れを今藝者風情に見ついで貰ッたト云はれては、實に世間の手前、これが何時まで知れずに居よう、若し學生仲間の耳にでも這入ッたら、『ヤレ花房は藝者に兩親を養はれた』ト云はれては……
「何故おまいこんな事なら私に一言さう言ッてくれなかッたの？
氣の毒さうに私はかう云ひました。
「ハイ、（力無さうに）妾もさう思はないのではありませんが、若し貴郎にさう申したら、屹度お止めなさるに違ひなからうト思ッて……
さう云はれゝば夫れも尤もの話。私も實に此時は兎からの返辭に窮しました。が、箇程までの志を、無下に斷るのも餘りと云へば……

さうかと云ッて、どうも藝者風情に助けられたト云はれては、大に私の名譽にも……併し何處までも彼の娘の私へ盡す心中立はト思ひ返して、

「どうも……今に始めぬ、お前の親切……實に忘れはしない……誠に嬉しい……

此處で彼の娘——今の藝者は顏を上げて、僞に泪を收めた笑ひ顏——私の目には——雨後の月、風になやむ芙蓉——なか〳〵夫れ處ではありませんでした。

「さう貴郎がおッしやッて下さると誠に……

（さも嬉しさうに笑ッた）

其内何時言附けたのやら、私の前に色々の杯盤が出て、睦ましい小酒盛を十一時頃までして別れた後も、私の目に殘ッたは——紫檀の長火鉢——格子の前の御神燈に記してあッた五文字——鈴本屋小榮。

## 其六——殘惜さは互の胸と胸

夫れから半月も經ッた頃。郷國の親父の處から手紙が來ました。其文言に。どうも近頃は郷里から出た書生の中に大分不品行の者がある、現に○○の如きは、餘り身持が惡いので、とう〳〵學校を放逐されたとの專ら評判。おまいに於ては、ソンナ事は萬々ありはしまいが、モウ卒業試驗も目の前に在り、試驗が濟み次第早速歸國する樣に、そしてアノ笠原のお榮もいゝ年頃だし、先方でも少しも早く婚禮を執り行ひたいと毎度家へ來ての話も無理ではなし、なんに致せ片時も早く一先歸國せよト細々認めてありました。何時か一度かう云ふ事になるとは既に覺悟の上でしたが、これ程急な事とは實は思はなかッたから私も非常に當惑の眉を顰めました。

私には至極親切な小榮——どう考へて見ても親切な小榮の處へ行ッて、かう〳〵した譯だとは話されない、私には郷里にお榮といふ許嫁があるとは今更どうも、どうしても云はれない、今迄の内に何時か一度さう云はう〳〵ト思はないではなかッたが、どうもアノ小榮の心に對しても、氣の毒で云ひ出し切れません、併しこれが何時まで云はずに居られよう、今更云ッても詮ない事だが、イッソ前方思ひ切ッてぶちまけて置けばよかッたに……ト悔むも女々しい譯、さうかといッて此儘無言では尚更濟むまい、實に弱ッた、此位弱ッた事はないト、暫しは其手紙を握ッたまゝ思案に暮れたが、只考へたばかりでチッとも埒が明きません、エヽ男らしくない、小榮はあアいッた風だからこれ〳〵とよく事情を話したら聽かない事もあるまい、やうやう思ひ切ッて下宿を出ましたが、どう云ふものか足が思ふ樣に烏森の方へ進みません。

「オヤ、いらッしやい。妾は又暫くいらッしやらないから、どうかなすッたかト思ひましたよ。あのウ、光チャン、（お前の名でせう）其お蒲團を取ッておあげ。

何時に替らぬ接待振。其喜ぶ顏が結句私にはつらいです。

「オヤ、大層おすましですネ、（私の顏を覗き込んで）オヤ、貴郎ふさいでいらッしやるのネ、どうかなすッたの？　どッかお加減でも惡いの？

親切に尋ねられるだけ、私の胸は針でも刺される樣です。

「ナニ、さう云ふ譯ではないが……

「さう、それで妾も安心しましたよ、妾は又あんまりふさいでいらッしやるから、どッかどうかあそばしたかト思ッて、（嬉しさうに）ホヽヽヽヽ。

笑はれる度、私の胸は騷ぎます。かう云ふハメになると、どうしても手紙の事を云ひ出す事が出來ません……只もぢ〳〵して居るばかり。

「マア、お茶でも召しあがれ、今何か御馳走を

致しますから：：

大きな湯呑に茶をついで長火鉢の端に載せて、火鉢の引出から卷煎餅を出して、一寸した菓子皿に袋のまゝ載せて勸めましたが、どうしてこんなものが私の腹へ入りませう？　私の首は次第に俯向くばかり、これではならぬト氣を取り直し、非常の英斷で、

「小榮、（佶と云ふ）此手紙を見てくれ。

鄕里の手紙を前へ投げ出した。

『オヤ』不審さうに『なに』ト其手紙を小榮が取り上げたトタン、私の胸は寸斷。

「オヤ、お國から、さう：：：

讀んで未だ央ならない內に、小榮は其手紙を額へ當てたまゝ先を讀む勇氣もナキ沈みました。

「：：妾もから云ふ事にならうとは前方から存じない譯ではありませんが、（僅に泪を收め）貴郞もモウ直ぐ學校をお卒業になるし、今から立派な御身分におなりなさるお方。なんしに妾が：：こんな賤しい汚れた身體の妾が貴郞の：：これから御出世なさる貴郞の奧樣にならうとは夢更思ひません：：

云はれて私は其答の案外なるに驚いて、思はず聲を放ッた、

「それはいゝ覺悟だ、さすが：：己の女房にならない、立派な御身分におなりなさるお方の奧樣にならうとは思はない、よく云ッた、よくさういッてくれた：：：

跡は兩人とも無言、只時々恨めしさうに泪にはらした目元で私をジロリ〳〵と見た小榮の顏附：：からは云ッたものゝ流石女子、口には立派に云ッても、其心の內は、實に哀れとも、いぢらしいとも。私もなんだか極が惡く、家に用のある振りをしてソコ〳〵に此の家を出て家路に歸ッた時の私の胸の中はマアどんなでありましたらう？

翌日小榮は朝早く私の下宿へ來ました。二階を上ッて私の部屋へ來ると其儘挨拶もせず、只泣いてばかり、百方私が慰めても更に泪を收めません。さも悲しさうに、恨めしさうに、泣いてばかり。可惜可愛らしい目縁までみゝず張にする程。

「貴郞もあんまりです、今更云ふのも愚癡ですけれど、昨日貴郞がお出の時、妾が貴郞の女房にはならないト申した時、貴郞が『よくいッた』よくいッてくれた』そのよくいッてくれたと仰しやッたお言葉を聞いた時は妾は假令命を取られてもモウ貴郞の妻にはなるまいと決心しました。只妾は今迄の御緣と呆らめますから、貴郞もどうぞ妾の事はふッつり思ひ切ッてそのお榮樣とやら云ふお方と御夫婦中をよくあそばして、御兩親樣へ御安心をおさせなさい：：：

云はれて私は兎かうの言葉も出ません。

夫れから件の小榮は幾時經ッても私の前へ据ッたぎり顏も上げず泣いてばかり、何一つ物も喰べずとう〳〵其夕暮まで泣き續けました。夕暮になッて小榮はサモ恨めしさうに私の顏を見詰めて居たが、それも仕舞には見詰める勇氣さへ失せたと見えて、スゴ〳〵私の下宿を出て行きましたから私も門口まで送ッて行ッたら、

「隨分御機嫌よう：：：

云ひながら恨の內の笑一つ。

＊　＊　＊　＊

其後は私も其小榮の處へ眞逆に行く譯に參りませんでしたから、未練の樣でしたが二三度手紙を烏森へ出しましたが、返事は——梨の礫、更に音沙汰がありません、が戻ッて來ない處を見ると、先方に屆いたには違ひはありません。三月ばかり經ッた頃、不圖私の處へ一封の手紙、開いて見ると紛もない小榮の手跡で、左の文言が：：

『……此度御同縣の人にて或軍艦のカピテンにかたづき申候へば御安心被下度候……』

## 老の繰言

一　此「京鹿子」は可成的平易き文字を使用致したき所存にて、近頃世間にて云ひ囃し候平民的文學とか云へるものにいたし、少しにても多く看官の御氣に入らせたく又一つには書肆をも喜ばせたく、中には隨分手數のかゝり候仇文句を使ひたき箇處も澤山有之候ひしが蟲を殺して堪へ候苦心の程何卒御賢察御度、何又御目まだるき處に御遠慮なく御忠告被下度、さすれば怪我にも再版の節は屹度訂正可仕、此段内々にて看官へ願上置候。

一　此「京鹿子」を御讀み被成候て何故外題を「京鹿子」と致したかとの御疑念も候はむが、作者の腹には別段「京鹿子」と名附候とて、實際に小間物屋の賣買を致したき意味にても何んにても無之、只々男女の中は「京鹿子」の様に美しくいたしたく、又看官が此本を御愛讀なされ候て、ア、此本は「京鹿子」の様だ、……如何にも美ちい綺麗だと只一言お褒め被下候はゞ、其御高恩は生々世々未來永劫決して忘れ申間敷候。

一　第一の插畫に、婦人を暖簾の前に立たせ候は、全く作者が畫工への注文違にて、何共申譯無之、早速取り替へ可申なれど、既に彫刻の上にて無下に取捨て候も何とやらん情け無き様に心得候あまり其儘差置き候まゝ此段何卒不惡御思召被下度候。

一　拙者も何か一つ自序なりと自跋なりと麗々しく書き出さん存意に有之候處、紅葉、眉山詞兄が金玉の序跋も有之候まゝ只此卷末に言ひ譯がましき老のよまひ言書き連ね御免を蒙り申候。

一　詞友紅葉兄此「京鹿子」が餘りに短篇なるを見兼ねて其著す所の「紅懷紙」を惠贈せられ候御厚意の程難有存候、何卒「京鹿子」同様御愛讀被下度奉願上候。

千里ふるこの年如月初つかた白芳亭の南窓に梅の綻ぶを賞でて　思案野叟誌

## 跋

朝には羅浮山の艶姿に誇れども、夕には埋干の皺を免がれず。倩顔の露消ゆるより先に色はうつろひぬ。世は秋風のあなめ／＼、薄生ひたる眼に百夜の露かけしと見るも哀れなり。さても二十年の榮華の夢さめて福原の鳥こそも幾人に曉を告ぐる。三代の將軍、九代の執權、鎌倉の月は松風に雲の去年寒し。いづれをいづれ、無常の成行を押除けて、あらはれ出たる尤物あり。思案外史が一粒撰の京鹿子は既に鴨河の水を流して、筆を三重五重染、模樣は人情の緻密にして色は得意の艷文なり。もとこれ千代見草を染料として、古今の色を知らず。天の機姫が絲織出して、地合にいたむと云ふ事なし。此作に盛衰の哀の字無く、此作に榮枯の情の字缺けたり。されば此作京洛行の水四海に溢れ、評判の華月世界を照かして、雷も太鼓を責挿ふべし。

二十三年梅見月　　　　詞友　眉山人

前世に深い譯あつて今生にかく舞立て後、春水の畫像に一寸お目にかゝッて、更に題して曰く、

さはた川浦つくばかり淺けれど
雪消に春の水まさるらん

# 年譜

慶應三年六月二日、横濱市辨天町に生る。石橋政方の長男。本名助三郎、初め雨香逸史と號し後專ら思案外史を用ふ。

石橋家は累代和蘭陀通事を勤め、八代助左衛門はシーボルトの通譯に任じ、十三代政方は英學に轉じ外國方に入り、時の英國公使アーネスト・サトーと共に英和、和英兩辭典を著し、三條實美公祕書に任じ、後、侍從たり。

明治七年、東京師範學校附屬小學校に入り、學習院に進み、進文學舍に學ぶ。坪内逍遙、高田早苗兩博士、大學生にして同學舍の教鞭を執れり。當時のこと「書生氣質」に詳し。

明治十七年、東京大學豫備門に入る。

明治十八年二月、尾崎紅葉等と硯友社を起し「我樂多文庫」を發刊す。都々逸に凝る。旅行日記「沖千鳥嶋物語」([illegible])はこの頃の作か、その題言(後年の筆)に、「此紀行はおのれが未だ思案外史と名のらず雨香逸史と呼び紅葉山人緣山治史と云ひける折江の嶋へ遊べる紀行文也おのれがそもそもかゝる文を綴れる最初の作にてありき、」云々とあり。本文第六頁以下には緣山の頭評及び添削の朱書あり。

明治二十年、第一高等中學を卒へ、帝國大學法科に入り、文科に轉じ、後、紅葉眉山等と中途退學す。この年、硯友社中と共に素人芝居「八才子」その他を演す。

明治二十二年六月、「乙女心」を「新著百種」に、翌二十三年二月、「京鹿子」を「小說群芳」に發表す。

明治二十四年十二月、吉雄永昌の長女浪子を娶る。

明治二十六年二月、いさみ新聞社に入る。八月同社瓦解。

明治二十七年八月、「滑稽小兒四十八癖」を博文館より出版。この年より翌二十八年に亙り『馬の脚』『娘淨瑠璃』『代脈』をそれぞれ「春夏秋冬」の第一、第三、第四編に發表す。

明治三十年八月、「中京新報」軟派主任として名古屋に赴き、翌三十一年九月末退社。

明治三十二年九月、「團々珍聞」主筆に任じ、編輯の傍ら戯文雜録を草す。

明治三十三年十二月、雜録集「筆と紙」を博文館より出版、中に「都々逸文學講義」あり。

明治三十四年四月、中央新聞社に入り三面主任、翌三十五年一月同社を辭し、三月、讀賣新聞社に入り軟派主任、十一月末退社。

明治三十五年十二月、博文館に入り「文藝倶樂部」を主宰し大正五年に及ぶ。その間、『嫁八人』(三十六年春の増刊)、『秋の空』(同年冬の増刊)、『生ける妻』(三十七年春の増刊)、『萬歳』(同年秋の増刊)、『素人芝居懷舊談』(三十八年春の増刊)、『我家の老僕』(三十九年夏の増刊)、『笑說蓄痛快』(四十年秋の増刊)、『一番面白かつた旅』(四十一年秋の増刊)、『連載物』本町誌」、その他數多の雜録を同誌に寄せ、傍ら毎號の都々逸を選し都々逸の淨化を企つ。

大正五年八月、博文館を辭し客員となる。

この年十二月二十六日、父政方歿す。

大正十年、妻浪子を失ふ。

大正十二年、片瀨の別莊にて大震災に遭ふ。

昭和二年一月二十八日朝五時、宿痾の糖尿病重りて遂に逝く、享年六十一。辭世に言ふ、「極樂か地獄か我は知らねどもなるべく來るなこんな所へ」。同月三十日、谷中天王寺の墓域に葬る。法名無盡院雨香文山居士。家に一男六女あり。

# 菊池幽芳集

# 燃ゆる花

## 一組の男女

上海を出て、今長崎に向つて居る郵船の一等船室は皆滿員だつたが、その中彼等一等船客の間に問題を提供して居る一組の青年男女があつた。二人は特別船室を占領して居て、船室内に過して居る事が多く、あまり外の船客と言葉も交へないのは、どうやら人目を避けて居るもののやうにも思はれるのだつた。二人の服装や持物から判斷すると、相當身分のある者に相違なく、男は二十八九で、貴公子らしい風采の、明るいフランクな表情を持つた、脊の高い、髭のない男で、シックリと身に着いた背廣のスタイルから、ネクタイ、それにさゝれたピン、カフス釦の好みまで、よくセレクトされて居り、どう踏んで見ても、上海仕立ての青年とは見えず、趣味のない態度から、物靜かな話振など、どこか英國あたりで教育された紳士を思はせるものがあつた。

[illegible]注意の焦點となつて居るのは、彼ではなくて彼女の方だつた。彼女は二十二三歳、ひよつと四位にはなつて居るかも知れない。いつの場合にも問題となる女は、服装とか、容貌とか、態度とかに異常の點があるものだが、それ等の點のいづれにも、彼女は人の注意を惹きつけずには措かない何ものかを持つて居た。第一に、彼女の容貌はやゝ暗いところはあるけれども、凄いほどの美しさを持つて居た。彼女の半斷髪にして、巧みにウエーブした洋装に、それこそ巴里の流行界から抜出して来たかのやうに、全く流行でもあれば優雅でもあつた。そしてその態度には社交界の貴婦人の場慣れきつた柔軟さと、コケテッシュなところがある一方、誇りを見せた高揚さと、不思議な氣位があつた。明るさと暗さが妙に錯綜して居て、ひどく冷たいところがあるかと思ふと、また折に觸れて燃ゆるやうな情熱を見せる眼光に、何ものをも魅し去る力があつた。その茶色の眼と、黒い、けれどもやゝ褐色がかつた髪の毛が、情熱の血の流れて居る伊太利か西班牙の女を思はせるやうなところがあるが、さりとて混血兒と見える風では決してなく、どこから見ても日本の女のタイプであつた。そのよく發育して釣合の取れた身體、見事に伸びた脚の美しさは、彼女の洋装を此上もなく似つかはしいものにした。

彼女は船客の男などを何とも思つて居る風ではないが、さりとて輕蔑して居るやうなところは微塵もない。社交にはよほど馴れて居るらしく、外國人とは自由に話をして居た。何か粗野なところがある一方に、また貴族的なところも多分にあつた。女優でもあるかと見える瞬間があるかと思ふと、次の瞬間にはすつかり貴婦人になり澄して居る。私は今明暗の兩面を持つた女だと云つたが、多くの場合には明るさが表はれて居て、隠れた暗さが折に觸れて閃くに過ぎない。

この二人が新夫婦らしい事は、船室の標示に明らかであるが、どうした身分の男女であるかは、船客の疑問の中心であつた。たゞ船客の誰にも明らかな點は、この二人が非常に愛し合つてゐるといふ事だ。人前で彼等の愛を、無遠慮に見せびらかすといふ事は避けて居るけれど、夫の方は西洋の新婚の女がその新夫に捧

けるであらう通りの愛の表示を、人に見られる事を、少しも意としない風があつた。つまり彼女は極めて自然にそれを取扱つて居るものと思はれるのであつた。

女はどうした素性のものだらう？　彼等は新婚旅行の途上のものなのだらうか？　二人は果して眞實の夫婦ものだらうか？　人を避けるやうなところがあつて、二人ともあまり甲板やサロンに姿を表はさないのはなぜだらう？——かうした點が、船の長崎へつくまで、船客の間の話題の中心だつた。

私は今こゝでこれ等の疑問の謎を解かなければならぬ、なぜなら船はもう二三時間で長崎へ着く筈であるから。

松尾信重——これが男の姓名である。彼は二十五で帝大の法科を出ると、二年間英國に留學した後、外交官生活が彼並びに彼の兩親の希望であつたので、書記生として北京の公使館に二年ほど勤めて居る中、極度の神經衰弱に陷つたので、職を辭し、保養のため氣任せの歐米漫遊の途に上つたのは、今から約一年ほど前だつた。

彼はいくらでも引出せる旅費に惠まれながら好きな歐羅巴に半年ほど氣樂な旅をつゞけて居る中に、すつかり健康を恢復する事が出來たので、漫遊期間は一年の豫定であつたが、この調子なら、もう歸つてもいゝと考へて居る中、ふと或女と熱烈な戀に落ちて了つたのである。そして彼は日本へ歸る考をすつかり忘れて了つたのだつた。それから半年後の今日、彼はとうとう戀しい女を得て、歸國の途につき、途中上海に寄道した上で、昨日此船に乘込んだのであつた。

彼の生立が平凡であるに引きかへ、女の方は數奇を極めて居た。惠美子がその名で、長崎の小商人の家に生れた彼女は、まだ小學校に通つて居る十歳の時、母を失ひ、一家の事情から父のため、或曲馬團に賣られ、いろ／＼の藝を仕込まれた擧句、一座の歐羅巴巡業に連出されたのである。この巡業團は成功しなかつたので、伊太利を興行して居る折、一座はとうとうミラノで解散して了ひ、座員等はそれ／＼辛くも日本へ送り返されたが、惠美子の父は彼女を賣渡した後間もなく流行病のため死亡して居るので、彼女は歸る家もない哀れな孤兒となつて居たのだ。ところが幸ひにもミラノに日本の骨董品を取扱つて成功して居る伊太利人があつて、惠美子が可愛らしくて、可哀想な身の上なのに同情し、自分達に子がないところから、慾得なしに彼女を引取つて世話をする事となつたのである。その時惠美子は十三になつて居たが、よく夫婦のものに懷き、可愛がられたので、全く今までの悲慘の境遇から救はれる事が出來たのだつた。彼女はこの伊太利人の手元で、立派に教育もされた上、音樂の天才である事が見出されて、音樂學校に入れて貰ひ、初めはピアノを志したが、聲樂の方に見込が多かつたので、その方に轉じ、學校を出る時には、コロラチュア・ソプラノの歌手として、第一番の成績だつたのである。

併し幸か不幸か、彼女のために第二の轉回期が來た。彼女が音樂學校を出ると間もなく、養家の伊太利人は妻に死なれ、同時に經濟上の蹉跌を招き、彼自身も脊髓の病氣にかゝつて、病院生活をするの止むなきに至つたのである。そのため惠美子を更に第一流の聲樂家につかせて、立派な歌手に仕立て見せると自慢して居た彼の希望も仇となり、惠美子は自活しなければならない境遇にさへなつた。これまでにそこゝの音樂會に出演して、かなりの評判を取つて居た惠美子は、斷然ステージの上に立つ考を極め、養父の同意を得た上、

或るマネージャーに一身を託して了つたのである。

彼女は養家の姓を取り、エミコ・マルチニの名で、日本娘を呼びものに、そこ〻を興行して廻つた。彼女の第一の呼びものは、日本娘に付きものゝマダム・バターフライであつた。トラビアタ、カルメン、ラクメー、ラ・ボエームなども彼女の呼びものだつた。伊太利の小唄や、民謡のやうなものも得意とした。聲量は豐富で變化と色彩に富んで居たが、技巧にはまだ至らぬ節が多かつたに拘はらず、南歐の美女にどこか共通して居るところのある彼女の美貌と、伊太利で育まれた日本娘であるといふハンヂキャップがあつて成功を彼女に齎した。彼女を今舞臺に立たせるのは惜しい、あと二三年みつしり修業させれば、歌劇女優として、大劇場のプリマ・ドンナの榮冠をかち得る事も難かしくはあるまいなどとさへ噂された。

丁度彼女が舞臺に立つてから六ケ月目、ナポリで興行して居る頃、伊太利漫遊中であつた信重が初めて彼女を見、そして一目で戀に落ちて了つたのである。それから羅馬に、フロレンスにヴェニスに、コモにトリノに到るところ彼女が興行した土地には、必らず信重の姿を見た。恵美子も信重を憎からず思つたけれども、容易に彼に許さなかつた　彼女には優しい一面があると共に、勝氣な男まさりの氣象があつて、それまでとても巧みに異性の誘惑に打克つて來て居たのだ。けれども信重の戀が眞劔で、深く根ざしたものであり、一時の氣紛れでない事を確かめたところから、とう／＼彼に許す氣になつて了つたのである。まだ最後のものを彼に與へはしなかつたけれども、信重はそれだけに滿足した。信重の目的は恵美子を己が終生の伴侶とする事にあつたのである。

が、自分に取つてはその目的を果す爲に大きな困難のある事を重信はよく知りぬいて居た。それは尋常の手段を取つて居ては、到底彼の兩親の承諾を求められないといふ事だつた。彼等の父松尾信高は中國筋の或舊藩主で、現在は貴族院に籍を置いて居るが、伯爵議員の間に重きをなし、嘗ては和蘭西班牙等の公使を勤めた經綸の持主である上、彼の母も同じ大名華族の出で、松尾伯爵家は同族中でも有數な家柄なり、また富豪として聞えて居るのである。さういふ家柄なので、家憲等といふものも隨分むづかしく、また家系の事も最も八釜しく云つて居り、殊に母が貴族以外の人間を人でないやうに思つて居る女なので、自分と恵美子との結婚を許してくれと、結婚前に求めたところで金輪際許してくれさうな筈はないと思ふのだつた。そこで彼が思ひついたのは伊太利で恵美子と結婚して了つて、厭應云はせず兩親に承認させて了ふ手段を取るといふ事だつた。自分は一人息子で、兩親の鍾愛を一身に集めて居り、これまで自分の云ふ事で、何一つ通らぬものもなかつた事を思ふと、母よりはずつと平民的な思想の分つた父は結局承認して呉れるだらう、父が承認すれば、母にしたところで仕舞には折れる外はなく、殊に母は嫁自慢をしたい方なので、恵美子のどこに不足のない姿を見さへすれば、家系の事などはあまり八釜しくせずに納得もしてくれるだらうと獨り合點し、それが重大の結果を導くものとも知らずに、その覺悟を固めて了つたのである。

併し恵美子を得心させるためには大分骨が折れたが、外國に育つた彼女は、大名華族の間の家憲とか、家系問題とかいふ事には、深くも思ひ至らず、結局信重を信頼し、結婚を承諾したのである　[illegible]生活をして居る養父も、この結婚に反對をしなかつたので、善は急げと、結婚式はミラノの教會堂で行はれたのだが、

立會人として式に列したものは、二三の伊太利人と二人の日本人とであつた。それは全く祕密結婚と云つてもいゝ性質のものであつたが、けれども伊太利の法律による正式の結婚であつた事にはいふ迄もなかつた。

　結婚を濟せると新夫婦はすぐ南佛の樂園リビエラの海岸に廻り、マントン、モナコ、ニース、カンヌなどに一ケ月ほどの樂しい夢のやうな蜜月の旅をつゞけた後、巴里に出で、そこに三ケ月滯在し、惠美子の四季の衣裳、持物などを整へた上、マルセーユから佛國郵船で立つたのであるが、新らしい妻を連れて歸る事は當分祕密なので、直接日本に歸る事の危險を避け、わざと上海で下船し、何の豫告なしに長崎通ひの郵船に乘込んだのであつた。

　長崎航路を擇んだのは、長崎で上陸すれば知人などに出逢ふ心配がないといふだけではなく、外にも理由があつた。それは惠美子の鄕里が長崎なので、彼女の憧憬の土地であるばかりでなく、自分を愛してくれた叔母がそこに居る筈だといふので、若し探しあてる事が出來れば逢つて行きたいといふ惠美子の希望から、都合では三四日長崎に滯在してから東京に立たうといふためなのであつた。

## 船室にて

　信重と惠美子があまり甲板に姿を見せないのは、なるべく人に接したくない爲でもあるが、戀人同士の二人きりで話し合ふ時間を、なるべく多くしたい爲でもあつた。今も二人は船室の中で語り合つて居る。

『ねえ、あなた、私、もう日本へ着くかと思ふと、何だか心配で、心配でたまらなくなりましたわ。今日まで五月近くの幸福が、あんまり大きかつたんですもの……。』と、惠美子は濃い眉をよせるのである。

『それは私だつて心配にならん事はないが、覺悟はちやんと出來てるんだから、いゝぢやアないか。どんな力だつて、私と惠美さんの間を引放す事は出來やしない。だから私を信じておいでよ。』

『それはあなたを信じますわ。あなたを信ずればこそ結婚までしたんですけども、併し御兩親はほんとに私を認めて下さるでせうか。』

『どんな事をしても認めさせる。心配はないよ。』と、信重は大してその問題を氣にして居ない風に見えた。

　彼は今までどんな無理でも兩親に許されて來て居るので、今度の事でも、多少の波瀾は免れないとしても、結局は聞屆けられるものと多寡を括つて居るのだ。

　惠美子もその言葉を信賴しきつては居るものの、何かしら本能的に心配になり出して來て居るのであつた。

『それはあなたが平民でいらつしやるなら、何にも心配はしませんわ。ですけれどもあなたと私とはあまりに身分が掛離れ過ぎて居るのですもの……。』

『身分などを問題にするのは時代錯誤だよ。華族と平民との結婚は、現在自由に行はれて居るぢやアないか。それは兩親は無論當惑しようさ、怒りもするだらうさ、若し二人が結婚前に承認を求めたとしたら、やれ家憲とか、親族關係とか、いろ〳〵の面倒な問題があつて、到底許してくれさうもない事は分つて居るんだが……それだからこそ拔差のならぬやうに、先手を打つて結婚をして了つたんだが、もう結婚をして了つたものは、泣いても笑つても認めて貰ふより仕方がないぢやアないか。兩親はどんなに怒るにしても、それは可愛い子の幸福になる事なんだし、結局泣く子には勝たれぬといふ事になつて了ふよ、身分とか素性とかいふ事

を除いては、松尾家の妻としてどこに非難の打ちどころのない恵美さんなんだもの、僕などは何のかんのと云つたところで、最後には恵美さんに惚れて了ふのが落なんだ。それに私は將來外交官で暮すんだから、外交官の妻として、全く理想通りの恵美さんなんぢやアないか。私は誰にだつて、これは己の妻だつて誇れるんだ。両親が怒つたり苦い顔をするのは、只一時の事なんだからね、その間恵美さんに一寸辛い思ひを忍んで居て貰へばいゝのさ。」

「それはあなたの獨りぎめよ。第一私はそんなに誇つて頂ける立派な女ぢやアないわ。……御両親にきつと私の素性を問題になさいますよ。」

「素性がどうのかうのと云つて、恵美さんは女の中のゼムのやうなものなんだからね、親達が一目見てくれさへすれば、それで何もかも解決されるんだ。恵美さんの身體が物をいふから心配はないよ。」

「私はあなたがその通りあんまり無造作に考へてらつしやるから心配なのよ。私、御両親が認めて下さらなかつたら、どうしませう。」

「私は生命を賭けても、恵美さんを離婚なんかしないよ。最後まで私の身體は恵美さんのものなんだ。」

僕は彼女を抱擁して、熱に熱い接吻を與へた。

彼女はにつこりして、

「私だつて最後まであなたのものよ。」

「それならその外の事は何も心配せずに、懐かしい日本が目の前に迎へてくれるんだ。あくまでわれ／＼の生をエンジョイしようぢやアないか。」

「えゝ。……私、どうしてあなたがこんなに戀しいでせう、決して私を捨てないでね……。」

「そんな私でない事は分つてるぢやアないか。」

「あなたに捨てられたら、生きては居ませんよ。その代りあなただつて……。」

「私は喜んで恵美さんの手に死なう。」

「きつと覺えていらつしい。」

信章を見つめた眼光に、彼女の魂が宿つたかと思はれるやうな、深く彼を包む眞摯な閃きのあつた事を、彼は長く忘れる事が出來なかつた。

彼は妻を柔らかな抱擁から離して、

「どれ、もう長崎が見えるだらう。甲板へ出て見ようぢやアないか。」

「えゝ、さうしませう。」

「長崎の土を踏むのは何年ぶりなのかね。」

「十三年ぶりですの。きつと變つてるでせう……でも懐かしいやうでもあり、恐ろしいやうでもあり、變ですわ。」

「恵美さんに取つて、たゞ懐かしいばかりの土地でない事は、私にも察しられる。併し悲しい思出や、恐ろしい思出のあるといふ事も、過去を振返つて見ると、やつぱり懐かしいと、ふ感情の中に包容されるものだよ。」

「それは懐かしいにはやつぱり懐かしいのよ。それにマダム・バタフライの故郷でせう。どこへ行つてもあれを憶はせられるので、何だか自分がお蝶さんのやうな氣持になり切つて了ふ事がよくありましたわ……何て可哀想な女でせう。私にもきつとお蝶さんの血が流れて居てよ。」と、彼女は感傷的に云つた。

「何を云つてるんだ。それは度々聞いて居る中に、そんな幻想が生れるのはありさうな事だけれども……お蝶さんはお蝶さん、恵美さんは恵美さん以外の何ものでもない。」

「でもお蝶さんの運命が、ひよつと自分の運命だつたら……。」

「下らない。そんなヒステリックな考を起すもんぢやアない。私は断じてピンカートンのやうな男ぢやアないからね。」

『それは分つてますわ。……だけどもピンカートンだつて、そんなに責める事は出來ないと思ひますわ。それがお蝶さんの運命なんですもの……。だつて私、お蝶さんのやうに弱い女ぢやアない事よ。』
『さうとも。惠美さんはどんな運命にだつて戰ふ强い女さ。……だから不吉な考はさらりと捨てて、機嫌よくあんたの長崎にお目にかゝらうぢやアないか。』
『えゝ、機嫌よく長崎の土を踏みませうね。機嫌よく……。』
二人は立上つて船室を出て、甲板へ上つて見ると、もう長崎の入口が、四月の晴やかな陽光を受けて、繪のやうに見えるので、多數の外國人始め人々は皆甲板へ出て、次第に近よる春の日本の玄關口を眺めて居た。

## 會見

昨日から帝國ホテルの一室を借受けて居るのは信重と惠美子の新夫婦であつた。二人は長崎で二日がかりで、やつと尋ねる惠美子の叔母を探しあてたのだつた。叔母は一度亭主に死に別れ、今では長崎在の植木屋の後妻となつて、その日の生活には差支なく過して行けるのであつた。思ひがけなく錦を飾つて歸つて來た姪の顏を見た彼女の喜びはいふまでもなかつた。
惠美子は一日叔母を宿へ呼んでつもる話を仕合つた上、土産物などを與へて別れると、その翌日長崎を立つたのである。東京へ着くと、人目を避けて取敢ず帝國ホテルへ落ちついたのであるが、信重は幸ひに誰にも認められずに、ホテルに入る事が出來たのだつた。
その朝惠美子はあつさりとお化粧を濟ませ、衣服も信重と共にあれかこれかと擇んだ上、なるべく淸楚で上品な身拵へをしたので、誰に見せても、華族の若夫人として恥かしくない上品な姿で、今朝は取分けノーブルなところが目立つて見えた。
惠美子の身支度が出來上つたところで、信重は卓上電話を取り、麹町の自分の邸へつながせたのである。それは大膽な計畫であつたが、父を呼出して單獨にこのホテルへ來て貰ふ事とし、その上で惠美子を父に逢はせ、厭應なしに承認させて了はうとする目的の爲だつた。彼は自分の母が十時までは部屋を離れずに、父にも逢はぬ習慣である事を知つて居るので、母に知らせずに父を呼出さうため、此時間を擇んだのである。
すぐ父は電話口に立つた。信重は簡單に途中寄途した上海から、豫告なしに歸つて來た事、或必要な事情のために、麹町へは歸らずに帝國ホテルに宿を取つた事、母には祕密に父に逢ひたい事、何事も父に逢つた上でなければ說明の出來かねる事、時を移さず父には來て貰ひたい事を父に通じた。父は非常に驚いた樣子で、電話で要點を聞かうとするのであつたが、電話では一切說明の出來かねる事を繰返し、すぐ來て貰ひたい事を懇請すると、父からはそれなら兎も角すぐ出かけると云ふ返事なので、電話を切つた。
『さア、親父が來るぞ。』と、卓上電話をさし置くと、信重は笑顏で妻に向直つた。
惠美子はすつかり緊張した顏色になつて、
『あなた、どこでお逢ひになつて？』
『この室へ通すのさ、惠美さんと一緒に父を迎へるのさ、退引させず承認させて了ふにはその方がいゝよ。』
『さうでせうか。隨分心配だわ。もしかお父樣が私をお認め下さらなかつた時は……？』
『何度その問を出すんだね。その時の覺悟は出來て居る筈ぢやアないか。併し父は豫て話してある通り、極めて平民的な上に二十年も歐羅巴

で生活して來て居るんだからね、レディーにはいつでも一目置いてかゝる父なんだ。そして父はいつでも美しい女の味方になる事を心得て居る。その上に私には目がないんだ。今迄私の無理を何でも通してくれたのだから、一生一度の無理を通してくれない筈はない。尤もね、私の邸では母の方が權力が上なんで、母さへ納得すれば、父はどうにでもなるんだが、今度の場合最初に母を味方にする事は、一寸骨が折れるからね、そこで骨の折れない父の方から說落さうといふ計略なのさ。』

『それぢやアお父樣がお認め下すつても、お母樣がお認め下さるとは極らないぢやアありませんの。』

『それはさうだけれども、父が承認してくれゝば、後は只時間の問題さ。母も結局は承認するに極つてる。』

『お母樣はそんなお難かしい方？』

『さうでもない。母だつて私を非常に愛して居るんだから、實は一か八かで、まづ母に逢つて見るのも一策だつたのさ。もういけないけれども、母なら一遍に物が極つて了つて、案ずるより產むが易いといふ結果にならぬとも限らなかつたんだ。』

『それはさうかも知れませんわ。私も何だかそんな氣がしてよ。私、あなたのお母樣ならきつとお優しいところのある方だと思ひますわ。』

『母は惠美さんを見れば、きつと心が折れると思ふけれども、やはり父に逢つた方が萬全であるやうな氣がする。……惠美さん、父の前であんまり固くならない方がいゝぜ。』

『固くなりさうですわ、そのつもりでは居ますけども……。私、色が青くはない？ 頰紅を刷いた方がよかないでせうか。』

『青い事はないよ。丁度いゝ位にお化粧が出來て居る。衣服だつてそれで完全だ。父はまづ吃驚して了ふに相違ない。お伽噺のお姬樣を連れて歸つた王子だと思ふだらうよ。』と笑つたが、併し信重とても甚しい不安を感じて居るのは、その笑ひが空虚に響いたのでも知れた。

兎角する中に電話の鈴が鳴つたので、二人はハッとしてまた緊張した。わけても惠美子は烈しい心臟の鼓動を感じた。

果して父が訪問して來たのであつた。信重はすぐに室へ案內して來るやうにと命じた。

ボーイに案內され、ノックの音と共に入つて來たのは信重の父、松尾信高である。六十五といふがまだ少しも衰への見えぬ立派な體格の、口髭こそ眞白であるが、頭の中禿のした半白の、よく信重に似た顏立で、如何にも大名華族らしい品位のある老紳士だつた。

わが子の身に何事かあつたに違ひないと、不安の顏色で入つて來た信高は、わが子と共に自分を迎へた洋裝の美しい女を認めると、それがあまりにも意外だつたので、呆氣に取られながら一步扉を入つたまゝ、釘付にされたやうにそこに立留つて、疑問と恐ろしい懸念の眸子を二人の上に濺いだ。

信重は隙さず父の前に進んで、

『お父さん、よくおいで下さいました。わざわざお呼び寄せ申しまして、何とも申譯がありませんが、實はさうするより外なかつたのです。御機嫌よいお姿を拜見して此上の喜びはございません。』

『併し……』と、父が言葉を失つたまゝ相變らず惠美子を凝視して居るので、

『お父さん、あなたの御不審を解くため、まづこの婦人を引合せさせて頂きます。それが私の第一の要件でもありますから。……歐羅巴から連れて歸つた妻の惠美子でございます。』

惠美子は美しい顏を心持染めて、丁寧に會

釋したが、つゝましやかに自らは名乘らなかつた。

信高は己が耳を疑ふほど驚いて、殆んど恐怖に近い表情を見せ、惠美子には會釋を返さず、たゞ説明を求めるやうに、だまつて二人を見比べた。

「どうぞお掛け下さい。その上で説明を申上げますから……。」と、信重は椅子を進めたが、父はなほそれに掛けようともせず、咎めるやうにわが子を見据ゑて居るだけだつた。

「お父さん、重ねて申上げますが、妻の惠美子でございます。あなたの御承認なしに結婚した事をどうか、お許し下さい。それは止むを得なかつたのです。どんな事をしてもお詫はいたしますが、どうか惠美子に何とか仰しやつて頂きます。」

信高は惡夢でも拂はうとするかのやうに額に手をやつて、

「信重、お前はどうかして居るな。正氣で云つて居るのではあるまい。」

「お父さん、私は今日ほど眞劍なことはありません。私の妻を認めて頂きたいのです。」

信高の額は怒に青ざめて、

「わしにはそれは正氣の沙汰とは思はれん。この婦人には氣の毒ぢやが、わしはお前の妻と認める事は出來ん！」

それは何の容赦もなく云はれたので、惠美子は思はずそこによろけようとしたのを、僅かに自ら支へる事が出來た。が、彼女の顏色は、血の氣がないまでに蒼ざめて了つたのである。

「お父さん、あなたはそんな慘酷な事を仰しやるのですか。惠美子の姿を御覽下さい。私はお父さんの口からそんな無慈悲なお言葉が出ようとは、全く豫期しませんでした。」

父は嚴肅に、

「慘酷なのはお前の方ぢや。……わしを苦しめるのは止してくれ。わしがどうしてこの婦人をお前の妻と認める事が出來る？」

「私共は立派に結婚式を擧げたのです。」

「どこでぢや。」

「伊太利のミランです。結婚證明書も持參して居ります。」

信高は絶望の身振をして、

「お前は第一お前の母がそれを承認すると思うて居るのか。」

「私はお父さんがわれ／＼に助力をして下さるものと信じて居りました。……お父さん、どうか少なくとも惠美子に優しいお言葉をおかけ下さる事は出來ないのですか。」

信高は惠美子の方を一瞥した。惠美子の身體が震へて居て、辛くもそこに立つて居る姿を見ると、彼は急がはしく椅子を引きよせて、言葉を優しく、

「あんた、これへかけるがよい。あんたには全く氣の毒ぢやが、致し方がないのでの……さア、おかけ……。」

「お父さん、あなたもおかけになつて下さい。」

父がやつと腰をおろしたので、信重も惠美子も椅子に着いた。重苦しい暗い空氣が室の中に充ち渡つた。

## 惠美子の身の上

父に心の折れるらしい樣子の見えない事は、信重にも意外だつた。併し初めから父がさうさう思ふ壺に入つて呉れようとも豫期して居なかつたので、それだけで信重は失望はしなかつた。殊に父が惠美子に對し、勞るやうな氣持の動きかけて居ると見えた事は、多少とも彼の意を強くした。

「お父さん、あなたが、私一人を唯一の頼りとして、歐羅巴からあなたに逢ひに來た惠美子を、そんなに無情にお取扱ひ下さらうとは、想

像し得ない事でした。』

父は澁面作りながら、

『わしは誰に對しても決して無情な取扱ひはせぬ。併しわが子の行爲に對し、父としては認め得る事と、認め得ない事とがある。話はそれから先へせねばならぬ。わが子の結婚といふ事は、一家の重大事ぢや。お前だけの單獨の事件ではない。當然親が相談の上極めるべき事で、お前一人で極める權利はない。殊に松尾家は出來星の華族どもとは違ふ。由緒のある名門で、祖先以來の家憲といふものもある。第一わが子の結婚に對しては敕許も受けなければならぬ。それ等の事はお前も承知の筈ぢや。わし等は結婚に對し、お前に押しつけがましい事をする考は、毛頭持つて居らぬから、お前が手續さへ踏んで來れば、十分考慮をするが、親に考慮の時間も與へず、勝手に結婚までして事後承諾を求めるとは、沙汰の限りぢや。その上の親の無情呼はりは筋道が違つて居る。お前の遣方は全然親を無視して居るのぢや。』

『その點は重々お詫をします。内地に居れば無論御相談の上に決する事柄ですが、外國にをつたため、その手續を取る事が出來なかつたのです。手紙の往復では要領を得ませんし、さりとて私一人歸つて來て、御相談を申上げたところで、惠美子を見て頂けないのでは、問題になりませんから、惠美子を同行するため、きつと御承認下さるに相違ないとの確信から、結婚を先にして了つたのです。』

『さうではあるまい。わしの察するところではこの結婚は内地では、迚もわし等の承認を得られぬ事を承知なので、外國に居つたを幸ひに、逆に境遇を利用したものぢやらう。』

すつかり云當てられたので、信重は眼を伏せたが、

『いゝえ、決して…そんな事はありません。そんな事を仰しやるのは、惠美子の人格をお疑ひになるからでせう。私は御兩親の名譽に拘はるやうな女を、決して妻にはいたしません。あなたが暫時でも惠美子を傍にお置きになつて御覽になれば、私が惠美子を擇んだ事の間違ひであるかどうかは、すぐお分りになります。』

『多分お前はその婦人の身の上について、またどうして結婚したか、わしに話すつもりで居る事と思ふ。念のためにそれだけは聞いて置く事にしよう。』

『それは勿論申上げなければなりません。併し豫めお願ひして置きたいのは、惠美子の族籍とか、家系とかいふ事に、偏見をお持ちにならないで頂きたくないといふ事です。惠美子は平民の娘です。私は門閥とか、家の系圖とかいふものと結婚する考は少しもありません。本人の人格といふものが、結婚の第一條件でなければならないと思ふのです。』

父の顏はいよ〳〵暗くなつたが、默つて續けるやう指圖した。

『惠美子は平民の娘である上に孤兒です。どこにも係累はありません。そして十三の時から二十四の今日まで、伊太利で教育されて來たのです。』

父の暗い顏に好奇心が動いて、

『ほゝう、親達は伊太利にでも居られたといふのか。』

『いゝえ、ある事情で、單獨に伊太利へ連れられて來たのです。』

『あなた、私に申上げさして下さいね。』と、惠美子は信重に求めた。

それは伯爵が初めて耳に留めた惠美子の聲だつたが、その聲に何とも云へぬ潤みと、銀のやうな美しい響があつたので、彼は一寸魅せられたやうに、惠美子を見た。

『併し……』と、信重はそれを制するやうに云

つた。

「いゝえ、私に何もかも申上げさして下さい。」と、伯爵に向つて、「私の親達は長崎で小商人をして居ましたその日暮しの貧乏人だつたのでございます。その生活難から私は十歳の時に――」

「惠美さん！」

「いゝえ、お父樣にお隱しになる事はいけません。正直に私の身の上を申上げさして下さい。私は十歳の時に曲馬團に賣渡されたのでございます。その曲馬團はやがて歐羅巴に巡業いたしましたが、伊太利で失敗しまして、とう〳〵解散する事になつたのでございます。私は幸ひにその時ミラノで日本の骨董品などを取扱つて居つた義俠心のあるマルチニといふ男に引取られまして、その娘分になつて教育されて來たのでございます。女學校を出てからは、音樂學校に入つて、昨年聲樂科を出たのでございますが、丁度そのころから養父のマルチニがいろ〳〵失敗を重ねました上、不治の病氣にまでなつて、只今では病院生活をいたして居るのでございます。それで私は養父の手許を離れて自活しなければならなくなつたところから、歌劇女優として立つことになりまして、半年ほど伊太利のそこゝを興行して居りますうち、信重さんとお近付になつた結果、こんな事になつて了つたのでございます。」

聲がチャーミングであるばかりでなく、態度も落ちついて話がはき〳〵して居た。が、信高はそれに魅せられてばかり居る譯に行かなかつた。現實の恐ろしさが彼を戰慄させるのである。

「曲馬團の娘！……歌劇女優！」と、彼は呻くのだつた。

信高の恐怖は、惠美子が曲馬團の娘であり、歌劇女優であつたといふ事實そのものよりも、權式が此上もなく高くて、家柄や門地の誇りが強く、そして自分の上に絕對の權力を持つて居る妻の賴子を思ひ浮べたからであつた。

『併しお父さん、惠美子が曲馬團に居つたにせよ、歌劇女優であつたにせよ、現在とは何の關係もない事です。その上惠美子の過去には何の汚れも持つて居ない、純潔の女だつたのです。どんな誘惑にも打克つて來て居た女です。そこに惠美子の貴さがあります。私はあなたに皮相の事實を捨てて、その奧に包まれて居るものを見て頂きたいのです。人間としての惠美子が完全な女であるなら、その他の事は問ふ必要がないぢやアありませんか。」

「さうはいかん、お前は母を忘れて居る！』

『お母さんだつて、惠美子を見れば、問題はないと思ひます。」

『お前は母を知らんのぢや！」

「いゝえ、知つて居ます。お母さんは私の一生の願ひを容れて下さらない筈はありません。それはたゞ時日の問題だと思ひます。」

「併し信重、お前はまづお前が自分一人の身體でない事を知らねばならぬ。お前の身體は松尾家に屬して居る。皇室の藩屛である華族の階級に屬して居る。その松尾家は由緖正しい名門で、代々卑しい血は入つて居らぬ。歷史的に一貫して淨い血統が流れて居るのぢや。松尾家の子孫の妻にはそれだけの條件を具へて居るものでなければならぬ。それが先決問題ぢや。……わしには何と云はうともお前の結婚を認める事は出來ん。」

「私はお父さんが、今日の世の中にそんな舊思想に支配されていらつしやらうとは考へて見る事が出來ません。今日松尾家のためにも、華族社會のためにも、最も必要なのは傳統とか家系とかいふ事ではなく、人格といふ事でなけれ

ばならないと思ふのです。私は先祖の前に惠美子を誇る事が出來ると考へて居るので、決して祖先を辱かしめる女ではありません。それにお父さん、あなたは伊太利の法律の下に、合法的に結婚して來た惠美子を私に捨てさせ、私を人道上の恐ろしい罪惡者として、それで上流階級の道德が維持されるとお考へになるのですか。松尾家の子孫にそんな罪惡を犯させて、それが松尾家の名譽のために、必要な手段だとお考へになるのですか。」

「それはすべてお前の責任ぢや。」

「さうです。ですから私は自分の責任を決して回避しません。私は如何なる場合にも、惠美子を捨てるやうな事はいたしません。」

一座は暫く白けて居たが、

「結婚はどちらから求めたのか。」

信高がちらと惠美子を見やつた眸子には咎めるやうな色があつた。

「勿論私からです。惠美子さんは最初私の信實を疑って、決して私に許してくれなかつたのです。それで惠美さんに完全の保證を與へるには結婚の外はなかつたのです。その點について、お父さんは決して誤解をなさってはいけません。惠美さんの方からは、少しでも誘惑がましい態度に出た事はなかつたのです。却つて私を避けようとするため、あらん限りの手段を盡して居たので、私はやつと最後に惠美さんの心をかち得たのです。此場合若しお咎めになるなら、それは私で、少しでも惠美子をお咎めになつてはいけません。」

惠美子はその後を受けて、

「併し私達はどんなに愛し合つて居りますでせう。私は心の底から良人を愛して居りますから、良人の望むどんな柔順な女にもなります。此上妻としての必要などんな修養でもいたす覺悟で居るのでございます。どうか私の幸福もでございますけれども、良人の幸福をお取上げにならないやうに、私からもお願ひ申上げます。」と、惠美子は媚を見せて懸命に云つた。

信高は惠美子の顔を見るに堪へないやうに、

「わしはあんたに同情します。決してあんたを惡いやうには取計らはんつもりで……」

「お父さんの御同情といふ事は、私達の結婚を認めて頂く以外には、何ものも有り得ない事を御承知願ひます。」

「わしには……併しそれだけは出來さうもない。」

信高は絶望の身振をして呟いた。

## 夫人の驚き

當惑と混亂そのもののやうな顔をして、麴町一番町の邸に歸つて來た信高は、書齋に入ると、そのまゝ安樂椅子に身を投げかけ、暫く思案をして居たが、やがて呼鈴を押して女中を呼ぶと、

「至急逢ひたい事件が出來たからと、奥にさう云うて來てくれ。」

女中が出て行つた後、伯爵は焦躁に堪へぬやうに、室の中を右往左往に歩き始めたが、女中が歸つて來て、

「奥樣は今朝、お頭痛がなさいましたので、まだお身仕舞を遊ばしませんが、至急の御用件と仰しやる事なら、お寢室までお越し下さいますやうにとの事でございます。」

女中の復命を聞くと、信高は室を出て、階上の妻の寢室をノックした上入つて行つた。そこは可なり手廣な洋風寢室で、豪奢な寢臺はアコーブに半ば隱されて居り、白熊の毛皮などが敷かれ、華やかなカーテンがかゝり、柔らかな光線の差込む下に置かれた美々しい化粧卓、華麗な彫飾りの椅子二三脚、丸卓子、大理石像、

すべて巴里好みの裝飾品、掛額など、全體が老婦人の寢室としては媚かしさに過ぎては居るが、惡趣味の點はなく、如何にも垢ぬけがして居り、富豪であり貴族である伯爵夫人の寢室と首肯かれるものであつた。

夫人賴子は緩やかな部屋着のまゝ鏡に向つて居たが、ノックの音と共に化粧卓を離れ、良人を迎へた。賴子は外交官夫人としての、二十年の海外生活中、美貌と叡智を以て聞えた女であるけれども、最早五十を四ツ五ツ越して居るので、殆んど寢起そのまゝと云つてもいゝ素顏のまゝの彼女を見ると、素枯れた花の、轉た哀れを留めて居ると云ふに過ぎぬほど、そこに人をチャームする何ものも殘つて居らず、髮にも白いものが雜り、額には幾筋かの小皺が刻まれ、目は落込んで眼緣が黑ずみ、鼻は瘦せて高く、兩頰には薄い雀斑や汚點が表はれ、全體の氣品はそれでも失はずに居るものの、昔の面影は求むべくもないのだ。いつまでも若くて美しいと今でも云はれて居る賴子ではあるが、素顏のまゝの彼女は、若いどころか、年より三ツ四ツも老けて見え、色も香もない老婦人と云つてよかつた。たゞ今も潤みのある眼に若々しさが見えるが、その眼の光はあまりに銳く、そして引締つた口元に意志の女である事を示して居て、全體には決して暖かな感じを與へる女ではなかつた。

彼女はにとりともせず、寧ろ良人を咎めるやうに、

『至急の用件と仰しやつて、何事でございますの。』

『信重が歸つて來たのぢやよ。今朝ほどわしに逢ひたいと云つて、帝國ホテルから電話をかけて來たのぢや。』

待焦れて居るわが子が歸つて來たと聞いて、賴子は驚きながらも、自分は何事にも驚かないといふ事を示すために、そんな樣子は見せず、取澄したまゝで、

『信重が歸つて來たのなら、どうして邸へ歸らずにホテルなどに居るのです。今朝と仰しやつて何時ごろの事でございます。』

あれほど愛して居るわが子が、何を置いてもまづ自分の懷へ歸つて來ずに、ホテルに歸つて來たといふ事が、夫人に取つてはこの上もない不滿の點であり、同時に怪訝の點であつた。

『電話は二時間ほど前にかゝつて來たので、わしは今逢つて歸つて來たところぢや。』

『あなたがお逢ひになつた？ わざ〳〵ホテルまでお出かけになつて？』と、蔑むやうに良人を見て、『なぜ信重をお呼びよせにならなかつたのです。よつぽどどうかしていらつしやいます。』

『さうぢや。わしも只事ではないと思つたのでわしから出かけて逢つて來たのぢや。』

良人のひどく困惑して居るらしい樣子を見ると、わが子の上に何事かあつたに違ひないと見て、流石に眉を顰めながら、

『私にはさつぱり譯がわかりません。信重がどうしたのですか、早く仰しやつて下さい。信重は一人でホテルに居るのでございませうね。』

『それが一人ではないのぢや。歐羅巴で結婚したといふ妻を連れて來て居るのぢや！』

物に驚かぬ筈の賴子夫人もあッと驚いて眼を睜つた。それは信じ得られない事だつた。暫く脣を痙攣的に震はして居たが、

『信重に限つてそんな事が……。私は信じられません。あの子があなたを僞つたのです。あなたはその女を御覽になりはしないでせう。』

『いや、二人に逢つて來たのぢや。』

賴子はもう信じない譯にはいかなかつた。目が險しくなり、額に靑い筋が走ると、せき込んで、

「歐羅巴のどこで、いつ、何者と結婚したといふのです。相手は外國人なのでございませう。」

外國人では面倒な問題が惹起されると思ふので、かう云ふ中にも彼女の顏は見る〳〵蒼ざめて行つた。

『いや、日本人ぢや。日本の女なのぢや。』

賴子夫人は初めてほつとして、

「日本の女ですつて？　どうしてまた日本の女であちらで結婚したのです。早く仰しやつて下さい。」

「伊太利のミランで結婚して來たのぢや。結婚するとリビエラ地方を廻つて、巴里に出た上歸つて來たので、結婚證明書も持つて居る……事實結婚して來たには何の疑ひもないのぢや！」

「どんな女なのです？」

「身分も何もない女ぢや。曲馬團に居た娘で……伊太利人に拾はれて教育された上、音樂學校を出て、歌劇女優をして居たのぢや……」

夫人は激しい嫌惡の表情と共に、怒りに震へて、

「曲馬團の娘！　歌劇女優！……まア、信重がどうしてそんなものに魅られたのでせう。あなた！　信重を救ふためには、一刻も猶豫しては居られません。」

「さうとも。そんな經歷の女を、松尾家の嫁とする事は出來ん。」

「あたりまへです！　外國人だつたら國際關係で面倒になるかも知れませんけれども、日本人なら何の遠慮もいりません。それであなたは何と云つてお歸りになつたのです。」

『承認する事は出來んと云つて、歸つて來たのぢや。併し信重は、わしがきつとお前に取りなしてくれるものと信じ切つて歸つて來た樣子で、そのためわしはどんな辛い思ひをして來た事かも知れぬ。殊に信重一人を賴りについて來た娘に對しては、何とも知れぬほど氣の毒ぢやつた。」

賴子夫人は目に角立てて、

「あなたは信重を誘惑した、そんなものにまで同情なさるのですか。」

「信重を誘惑したとわしには思へぬ。美しい娘ぢや。わしはあんなに美しい娘を知らぬ。その上氣立もよささうぢやでの。」

「あなたは美しい女を御覽になると、すぐそれですわ。ちとお嗜み遊ばせ。……いゝえ、信重が誘惑されたに極つて居ます。私は死んでも曲馬團の娘や、歌劇女優を松尾家に入れる事は出來ません！」

「その通りぢや。……併し素性さへそんなものでなければ、一通りの教育は受けて居るし、少しも擦れて居る樣子もなく、物腰もしとやかで、應對もはき〳〵して居るし、日本語が利きさうで、社交界にでも出せば、すぐ評判になる女らしいのぢや。」

「あなたといふ方は、もうそんな、お考になつて歸つていらつしつたのですか。飛んでもない事です。怜悧な女なれば、怜悧な女ほど猫を被つて居りませう。私は娘が美しければ美しいほどその娘を憎みます。どんな手段を取つても、その結婚を無效にして、娘を信重から引離さなければなりません。それには第一あなたがそのつもりになつて下さいませんければ――。」

「わしは素よりそのつもりぢや。……が、結婚は正當にして來て居るのぢやから、娘に對しては――。」

「娘の事を斟酌する必要は少しもございません。どうせ未來の伯爵夫人を夢みて、信重を誘惑した女です。正當に結婚したと仰しやつても、それは伊太利でゞございませう。伊太利の臣民であるならばその結婚をどうする事も出來ないかも知れません。日本人として日本に歸つて來た以上、日本の法律に從ふのが當然で、

その結婚を無效にする事は大して困難ではないと存じます。併しこの事であなたとお話しても駄目です。板垣を呼んで、その手段を取らせる事にいたしませう。どうぞすぐ板垣に電話をおかけになつて、午後一時に邸に來て貰ふやうにして下さい。ようございますか。』

「板垣に相談するより外に途はあるまい。ではすぐ電話をかける事にする。』と、信高は唯々として答へたが、彼の顏はます／＼暗くなるばかりだつた。

『私は身支度をしなければなりません。』

良人を追ひやつた上、賴子夫人は昂奮した面色で、朝の化粧に取りかゝつた。

『これはさう簡單には片づかんわい。信重にしても子供ぢやアないからな。第一あの娘が可哀想ぢや。』

口の中で呟きながら、妻の寢室を出ると、信高は電話室へ來て、板垣を呼出すのだつた。

## お默りなさい！

板垣定行は信高の舊藩臣で、現在松尾家の法律顧問であるが、法學博士として、辯護士として、一流の人物であり、六十年輩の頭も髭も半白の、がつしりした老人だつた。

午後一時、彼は信高の書齋に通されると、賴子夫人もそこに彼を待受けて居た。今はちやんと身仕舞を濟した夫人は、先刻寢室で見た寢起の夫人とは、殆んど見違へるばかりの女になつて居た。髮も綺麗に束ねられ、額の小皺も薄雀斑も目立たぬまでに隱れて、きちんとした和裝に粧ひを正した彼女は、どこから見ても氣高い伯爵夫人で、年もたしかに今朝よりは五ッ六ッも若く見えるのだつた。

定行は伯爵から、要點を聞取つた上で、

『それでは娘は長崎の生れでございますな。調べはすぐつきませう。いづれ手前もその婦人に逢ひますが、御前はお逢ひになつていらつしやつたのですな。風采、態度、物の云振と云つたやうなものは、上流婦人と認める價値のない女と、御覽になつたので……。』

『それが十分價値のある女なのぢやよ。』

賴子夫人が鋭く良人を見て、

『そんな事は只今の問題ではございません。板垣さん、さういふ詮議立は全く不必要な事です。卑しい生れで、曲馬團の娘だつたり、歌劇女優だつたりした素性のものを、結婚は代々由緒のある家柄とだけ取組んで來たこの松尾家に入れる事は、絕對に出來ない事なのでございます。それは娘がどんなに教育があつても、どんなに美しくてもでございます。』

賴子夫人の決意が梃でも動かぬ事は、その顏色に表はれて居た。九州のさる大藩主の家に生れ、良人の伯爵家よりも家柄のいゝといふ事で、良人より一段高く自分を標置して居る彼女が、伯爵家の唯一の相續人である信重に、卑賤な素性の、それも曲藝や舞臺で世を渡つて來た女を娶はせる事は、事實死んでも出來ないと思ふ事だつた。

老辯護士は夫人が一度決意したら、それは理に訴へても、情に訴へても、到底動く事ではないのを、多年の苦い經驗から承知して居た。

『それで板垣さん、わざ／＼お呼びしたのは、あなたにこの結婚を無效にする方法を取つて頂きたいためなのでございます。』と、夫人は命令的に云つた。

『それだけの事なら、奥樣、別段困難の事ではございません。第一日本の法律では或年齡に達するまで、子女の自由結婚を認めて居りません。若樣はお幾歲でございましたな、まだ滿三十歲にはおなりにならん筈で……。』

『まだ一年先の事でございます。』

『それならば若樣が勝手に御結婚になつても、

日本の法律では無效でございます。』
夫人はほつとして、
『假令外國で結婚してまゐりましても？』
『はい、外國からの屆出と、日本からの屆出と、雙方の屆出があつて、初めて合法的に效力を生ずるのでございます。その日本からの屆出には、是非ともあなた方の御承認が必要になつて居ります。』
『それで安心いたしました。結婚が無效といふ事になれば、私には考がございます。』
『併し奧樣、一ケ年後には若樣はその婦人と自由に御結婚になる事が出來ます 日本の婚姻法は勿論御存知でいらつしやるでせうから、若樣は今日あなた方の御承認のないのを、格別苦になさらないかも知れません。』
『さうぢや、一年後には信重の自由ぢや。』
『いゝえ、構ひません。』と、頼子は何か自信があるやうに、『今から一年間の中に必要な處置を取る事が出來ます。私はきつとその女を信重から引離して御覽に入れます。』
定行も信重も頼子夫人にどういふ成算があるのか知らなかつたが、夫人の意圖の確固不拔なものである事だけは、見ぬく事が出來た。
定行は信重に向つて、

『お話の樣子では若樣はよほどその婦人に打込んでおいでのやうですから、あなた方が御承認なさらぬといふ事は、差當り非常な打擊だと存じます。全くお可哀想で――』
『わしは娘が氣の毒ぢや。』
頼子は二人を睨めるやうにして叫んだ。
『私は信重を憐れみますけれども、娘には何の憐れみも持ちません！』
『併し奧樣、歐羅巴では正當に結婚をしておいでになつた若樣を、その婦人からお引離しになるといふ事は如何なものでございませうか。お引離しになるにしましても、一應娘を御覽になりました上の事に――』
『お默りなさい、板垣さん！』と、夫人は辛拖し切れぬやうに甲高い聲を立てて、『私はあなたからそんな御勸告を受けたいためにお呼びしたのではございません。祖先のため、私共の階級のため、松尾家のため、自分の正しいと信ずる事を行ふのに、なぜ躊躇しなければならないのでございます。あなた。』と、良人を呼びかけて、『あなたは此場合意志を強くお持ちにならなければいけません。意志の弱いといふ事は、一ツの罪惡です。私は何よりも意志の弱い男を輕蔑します。』

『わしは何も意志を弱くしては居らん。この結婚の承認されん事は、お前の考の通りぢや。』
『それなら何もかも私にお任せになればよろしいのです。私は一年の中にきつと信重を救ふ事にいたします。』
『それにしましたところで、この事は飽くまで愼重を要する事だと考へます。若樣の伊太利での結婚といふものが、どういふ手續の下に行はれたか、果して合法的であつたか、それ等の事についても、十分取調べて置く必要があるかと存じますが……。』
『それもあるの……。わしから伊太利の大使に調べて貰ふ事にしてもよい。』
『はい。それも結構でございますが、幸ひ參事官の山田は私の同窓でございますから、早速私から頼んで見る事にいたしませう。ひよつとするとその結婚も不完全なものであるかも知れないと思ふのでございます。』
『そんな事はどうぞあなた方の方でよろしきやうに。』と、夫人は云つた。

## 頼子夫人

松尾信重が松尾家の老執事に伴はれて、麹町の松尾邸に初めて姿を見せたのは、その日の

夕方であつた。老執事は伯爵夫人の命を受けて、帝國ホテルに信重を迎ひに來たのである。外國の旅から歸つて來た以上、當然一度はわが家に歸省しなければならない信重は、老執事の懇請を斥ける理由がなかつたばかりか、どうせ母に逢ふ必要はあるので、機會を失ひかけて居た彼には、いつそ渡りに舟と、快く執事に伴はれて、一先づわが家の閾を跨ぐ事としたのである。

母がまづ澁面でも作つて、彼を迎へるかと思つたには引きかへ、更に何事もなくて無事にわが懐に歸つて來た愛し子を迎ふるやうな態度と、笑顔で彼を待つて居たのだつた。信重はほつとしたやうな氣持で、母に歸朝の挨拶を述べた。

惠美子の事には何一ツ觸れずに、最初の對話は進行した。母は久しぶりで彼と晩餐を共にし彼の歸朝を祝はうといふのである。

食堂に隣つたリヴヰング・ルームで語り合つて居るのであるが、父がまだ姿を見せない事が、いくらか信重の氣になつた。

『お父さんはいらつしやるでせうね。』

『お父様は前からのお約束があつて、今夜は外す事が出來ないのださうです。一緒に食事の取れぬのが殘念だと仰しやつて、先刻お出ましになつたのですよ。』

信重は少し失望を感じた。父の居ないといふ事が、何か自分に不利益であるやうな氣がした。

『お父さんからお聞きになつたでせうね。』

信重は母から何も切出されずに居るのが、却つて壓迫を感ずるやうに心苦しいので、自分の方から切出した。

賴子夫人は眉一ツ動かさずに、

『聞きました。併し私はあなたが自分の過誤を知る日はすぐ來る事と信じて、安心して居るのです。』

『それは何を仰しやるのですか。さういふ日は永遠に來る事がありますまい、それが私の擇んだ妻に關する限り……。』

『あなたの結婚といふ話は、子供の飯事のやうなものだと、私は思つて居るのです。眞面目にあなたからその話を聞かうとは思つて居ません。』

『お母さん、私はいつまで子供ではありません。自分自身の行爲に對しては、飽くまで責任を持つ私です。たゞ御兩親の承認を求むる事の出來なかつた事情については、重々お詫をいたしますけれども……。』

賴子夫人はどこまでも、沈着いた調子で、

『私から見ればそれは結婚でも何でもありません。私達が認めなければそれまでのものですから、あなただつて仕方がないでせう。』

『併し私達は正當な結婚をしたのです。この結婚を破棄する權利は誰にもないといふ事を、御承知を願ひたいのです。』

『正當な結婚といふのは、日本の法律で認めた結婚でなければなりません。あなただつてそれは承知の上の事でせう。』

『日本では正當な結婚といふ事には、如何にも兩親の承認が必要です。併し私にはあなた方の御承認が必要でない日も、すぐ來る事をお忘れになつてはいけません。たゞ御兩親に楯つくといふやうな事になる事は、好みませんから、是非ともお母さんの御承認を得たいと心を苦しめて居る次第です。私はお母さんが妻の惠美子に逢つて下されば、そこに何等かの途が展開すると思ふのですが……。』

『いゝえ、逢ふ必要はありません。それはどんな聰明な、また美しい女であるにしても、あなたの擇んだやうな素性の女を、松尾家に入れる事は、絶對に出來ないのです。』

『お母さんは今日の時勢といふものを、考へて頂きたいのです。家柄や素性を八釜しくいふ事は時代錯誤ぢやアありませんか。家柄よりは人格です。この松尾家にしたところで、先祖は何だつたのです。土百姓から身を起したのでせう。本を洗へば貴族も平民もありません。それを考へて下さい。』

『あなたのやうに云へば、歴史といふものを無視する事になります。松尾家の貴い歴史が、あなたには何とも映らないのですか。松尾家の代々の人達は、わが家の歴史を誇りとして生きて來たのです。宮廷にも伺候の出來るこの貴い血統の松尾家に、曲馬團に居た娘や、女優などを入れる事が出來ますか。少し冷靜に考へて御覽なさい。』

『惠美子が曲馬團に居たのは、惠美子の罪ではありません。そこにはたゞ運命の冷酷さがあるだけで、一面から見れば、さういふ冷酷な運命に苛まれ、あらゆる辛酸を嘗めて、鍛錬されて來たといふ事は、決してその女を卑しくするものではありません。その上伊太利で立派な教育を受けた女です。女優といふと墮落し易[illegible]思なさるかも知れませんが、その墮落し易い流れの中で、珠のやうな純潔さを保つて來た女は、どれほど貴いかも知れません。私は妻を誰の前でも誇る事が出來ると考へて居るのです。それが松尾家の歴史に汚點を印するものと、どうして考へられるでせう。』

『私はあなたの意見に同意する事は出來ません。私達はこのごろ階級が混亂して、上流の血潮にいろ／＼の血が雜つて來ては、だん／＼汚されて行く事を嘆いて居るのです。われ／＼同族のためには、今日階級の純潔を保つといふ事が大事なので、それも成上りものは格別、祖先以來長い歴史と傳統を持つ松尾家としては、別してこの純潔の血統の流を擁護する事が、私共の祖先に對する義務でなければなりません。私はこの貴い松尾家の血統によつて、あらゆる平民を侮辱します。平民達と私達のやうに、幾代も幾代も洗練されて來た貴族の間には、人間の上に大きな隔りがあります。その松尾家に入るものとしては、正しい素性と高い家柄が何よりも必要です。たとひそれがどんな女であらうとも、素性の卑しいものを入れて、松尾家の血潮を汚す事は、私達にはどうしても忍べない事です。あれは曲馬團の娘だ、女優だと後指をさゝれるだけでも、それが松尾の家名に泥を塗るものでなくて何です。』

母が階級意識の強い女である事は、知らぬではなかつたが、その謬見を説破りさへすればどうにでもならうと多寡を括つて居たのを不覺だとも考へた。かうまで凝固まつた母の階級意識は、議論では迚もどうにもなりさうもないらしい。で惠美子さへ見てくれゝば、母を動かす事も或は出來るだらうとの、最初の考に、再び戻つて行く外なかつた。

『併しお母さんは惠美子を知らぬから、松尾家に入れる事の出來ない女のやうに仰しやるのです。私は兎も角お母さんが惠美子に逢つて頂く事をお願ひして見たいのです。』

『あなたの妻といふ女を見る必要がどこにあるでせう。それは見ても見なくても同じ事です。決して逢ひますまい。』

母が逢ふまいとするのは、逢へば弱くなる自分の心を恐れるからだとも、信重には考へられた。それならばやはり母に逢はせるに限るが、たゞそれには機會を待たなければならないと、彼は思案した。

『それなら強ひてお願ひはいたしますまい。併し私達は正當に結婚して來たものだといふ事と、私の名譽が——延いては松尾家の名譽が、それにかけられてあるといふ事を御考慮に入れ

て頂きます。』
『あなたの伊太利での結婚といふのも、ほんとに合法的のものであつたかどうか、それも實は調べて見る事になつて居るのです。』
『お調べになるのは御勝手で、その方が結構です。私達は神の前に、伊太利の法律の前に、精神的にも肉體的にも固く結びついたのです。この結婚は如何なる場合にも破棄する事は出來ません。もし御兩親が最後まで御承認がなければ、止むを得ませんから、私が滿三十歳になるまで待ちます。その上では日本の法律が正當に二人を結びつけてくれませう。』
『さうなれば仕方がありません。あなたが飽くまでも親達の意志に從はぬとなれば、松尾家もそれまでです。併しさうならない中にあなたがきつと迷ひを覺してくれるものと、私は信じて居ます。…この事では最早あなたとは云合ひますまい。きつとあなたに云渡して置きますが、もう一切惠美子とやらの事を、私の前で云出してはいけません。その問題は忘れて了つて、樂しく晩餐を取る事にしませう。』

### 不愉快な使者

信重と惠美子が愛の巣を鎌倉の海濱に構へたのは、それから數日の後だつた。家は小さな文化式住宅で、建築は粗末なものであつたけれども、靜かで淸らかな環境が惠美子を滿足させた。親切な家主の世話で、日用の器具なども一通りは整へる事が出來た。女中一人を置いた簡易生活で、二人はそれを住心地のいゝ住宅とするためにいろ〳〵の工夫をこらしたり何かする事に、當分飯事のやうな興味を感じて、何事も忘れて居た。
信重は元來樂天家で、今は兩親が反對して居ても、結局は認めてくれるだらう、またさう落ちつく外に途がないのだと、多寡を括つて居るのだつた。惠美子は信重ほどは樂觀して居ないけれども、良人が樂觀して居るものを、それに信頼を置かない譯にはいかなかつた。假にまた兩親が承認してくれなくても、良人が來年になれば日本の法律の下に、改めて合法的に結びつく事が出來るのだといふ事が、彼女に最後の安心を與へて居るのでもあつた。
或日信重の不在中に松尾家の顧問辯護士板垣定行が、突然惠美子を訪ねて來た。
定行は賴子夫人から、早く惠美子に逢つて見て、出來るならば一日も早く信重と手を切らせるやう、一萬や二萬の金を出しても差支ないからと云はれて居ながら、その使命が成功するものとは信じないところから、今日まで躊躇して居たのである。
『板垣さん、あなたの仰しやる通り、來年の七月に信重が滿三十歳になれば、信重の意志次第で、その女と日本でも結婚する事が出來るのです。その時は私達の力はもう信重に及ばないので、その事は女も承知して居るのでせう。併しあなたからもなほそれを云つてやれば、多分女の空想を滿足させる事が出來ると思ひます。決してそれに反對の意見を仰しやつてはいけません。それが差當つての手切話を容易にする事に役立つでせう。』
『併し奥樣の仰しやる通りの事が、來年事實にある場合があるとしても、それはこの板垣の責任ではございませんぞ。』
『それは承知して居ます　私には考があります。』
以上の注意が伯爵夫人からあつた上で、定行は全く氣が進まないながら、惠美子の許を訪れた次第であつた。
惠美子のすぐれて美しく、人を惹きつけずには措かない、明るく華やかな姿に接しても、定行は格別驚きはしなかつた。それは伯爵から

豫々聞及んで居たためであつたが、惠美子がただ美しいといふだけではなく、伯爵家の新夫人として、恥かしからぬ沈着と、品位にさへ富んで居た事は、寧ろ意外だつた。たゞ妖艶な肉感的の美人なのだらうと考へて居た事は間違つて居たのだ。

そしてその女に信重が打込む事は、當然過ぎるほど當然であるとも、彼は考へるのだつた。伯爵夫人にどんな成算があるのか知らぬが、來年の七月までに、信重がこの女から離れるやうな結果が生じようとは信ずる事が出來なかつた。またこの女にしても正當の理由がなくて、信重と潔く切つて了ふ事を承諾しさうには思はれなかつた。惠美子が決して人任せになつて居る弱いばかりの人形のやうな女でない事、その瞳子の輝き、引結んだ唇にも仄見える烈しい氣象の隱れて居る女である事、如何なる場合にも自分から運命を開拓して行く女である事なども、定行には想像された。

松尾伯爵家法律顧問と、インキで肩書を書添へた法學博士板垣定行の名刺が通ぜられた時から、惠美子はそれが不吉な訪問である事を豫感したのだつた。が、わるびれず、打解けた態度で、彼に面會した事はいふまでもなかつた。

伯爵夫人の内意を受けて尋ねて來たのだといふ事は、定行がそれを切出す前から、惠美子には分つて居た。併し初めて逢つた定行の態度には、人を見下すやうなところはなかつたし、また容易に感情を人に見せないらしい謹嚴老巧な老紳士とは見えながら、自分に惡感を持つて來た人でないと、一目で悟つた事が、惠美子の氣持を落ちつかせた。

まづ一通りの挨拶が終つた上で、

『伯爵夫人からの御用向と仰しやるのは、どういふ事なのでございませうか。』

惠美子の方から切出すと、

『私は決して愉快なお使ひにまゐつたものではありません。伯爵も伯爵夫人も、お氣の毒ですが、あなた方の結婚を御承認なさらぬのです。それで明らかにあなたにその意志をお傳へするやうにといふのが、伯爵夫人の御命令なので……。』

心持惠美子の顏色は變つた。

『御兩親の御意志は良人を通じて承知して居ります。わざ〳〵のお使ひには及ばないかと存じますが、もしかまたその上私の進退をお差圖なさらうとでも、仰しやるのでございませうか。』

『いゝえ、決してお差圖をするなど、そんな干渉がましいお使ひにまゐつたのではありません。』

迂濶な口は利けないと、定行は思ふのだつた。

『私は御兩親が御承認下さらない事を、ほんとに悲しみます。もし出來ます事ならば、忍べない事でも良人のために忍ばうと覺悟して居る私なのでございます。今は氣長く御兩親の御承認下さる日を、良人と共にお待ちする考なのでございますが、あなたはそれは無益だと仰しやるのでございませうか。』

定行は當座逃れの事は、この女の前では云へないと、當惑しながら、

『私も若しその日が來れば、これほどの喜びはないと、考へては居りますが、併し果してその日が來るかどうか、私には何ともお請合申上げかねます。』

『私共は最後の肚は極めて居るのでございます。日本の法律では、男が滿三十歲になれば、兩親の承認なしに、自由に結婚が出來るのださうでございますね。慥かにさうなのでございませうね。』

『たしかにその通りです。來年七月になれば、

信重さんは御自由に結婚届をお差出しになる事が出來ます。』

『それなら私共は來年まで待てばよいのでございます。良人はまた何も日本で生活せずとも、外國では正當な夫婦として立派に生活が出來るのだから、すぐ外國に引返す事にしてもいゝなどと申して居るんでございます。』

惠美子は兩親が承認しなければ、このまゝ外國に引返す肚さへも持つて居るのだといふ事を、伯爵夫人に知らして置く方がいゝと、咄嗟に考へたのだ。

『なるほど、それも不可能ではありますまい。』

『併し私共は御兩親に楯つくやうな事は、なるべくしたくございません。私共を認めていたゞいて、圓滿な結局を見たいと、ほんとに希望して居るのでございます。たゞ最後まで御兩親がお認め下さらない場合には、どちらかの方法を取る外ございません。そしてそれは私共の罪ではないと考へて居ります。』

『あなた方には深く御同情申上げます。それで私は御兩親の御承認が當分得られないものとして、この間に善處する何等かの方法を講じたいと考へて居るのです。あなたは多分信重さんが、社會的地位も名譽も失はず、そして豫ての御希望の外交官としての地位に、再びつかれる日をお待受けになつていらつしやる事かと存じます。併し、それともさういふ考はお捨てになつていらつしやるのでせうか。』

『はい、良人が外交官として生活したい希望を持つて居る事はよく承知して居ります。また私としましても一日も早く、良人がその地位を得ます事を望んで居るのでございます。併し外國で合法的に私と結婚して來たといふ事を、あなたは良人の社會的地位や名譽に關する事とお考へになつていらつしやるのでございませうか。』

『いゝえ、以ての外で……私、個人としてはさういふ風には決して考へて居りません。併し御兩親がそれをお認めにならなくて問題を起した場合、世間的に見てそこに疑惑が生ずる事は止むを得ません。あなたの爲にも面白くない噂がひろまることともなりませう。殊に信重さんが地位を得られる上には、伯爵、別して伯爵夫人の隱れた偉大な勢力を、お忘れになつてはいけません。巴里倫敦の大使館勤務には希望者が非常に多いやうで、容易にその地位は得られないらしいですが、伯爵御夫婦が進んでお骨折になれば、案外容易く信重さんの希望を達する事が出來ようと――これは私の臆測ですが、この點はあなたに何等かの暗示をお與へする事にならうかと思ひます。』

さう婉曲に云つて、定行は靜かに惠美子の顔色を伺つた。恐ろしい失望がだん〳〵惠美子の胸を蝕ばんで行くやうに見えた。併しそれを勉めて押しかくしながら、

『それでは私と一緒に居ります事が、良人の地位を得る上に、大きな不利益だと仰しやるのでございますね。御兩親は私が居つては良人を推薦する事を差控へると、かう仰しやるのでございますね。』

『露骨にさう仰しやる譯ではありません。あなたがおいでになるにしたところで、可愛いお一人子の事ですから、それは必らず御推薦もなさるでせう。併しいつの場合にも微妙な感情問題が意外な働きをするものだといふ事を、お忘れになつてはいけません。結局御兩親の御承諾がないのに、つい鼻の先に同棲していらつしやるといふ事は、あなた方に正しい理由があるにしたところで、信重さんのために、いろいろの不利益を招來する結果になる事は爭へません。……そこで私は甚だ露骨な意見を申上げると、あなたが當分信重さんとお別れにな

るといふ事、それがこの場合に處する賢い方法ではないかとも考へるのですが、併しこれはあなたと信重さんの結合に、何か不安なところがあるとするとお勸めは出來ません。一年後には信重さんは、どんな場合にも必らず、あなたの懷へ歸つて來るといふ信念があつて、初めて出來る事で、如何でせうか、あなたは信重さんを深くお信じになつていらつしやる事だとは存じますが……。』

　惠美子の顏はいよ〳〵蒼ざめたが、併し昂然として、

『私は良人に少しの不安も持ちません。よし一年が二年になりましても、良人は必らず私に歸つて參ります。たとひ社會がどんなに私共を壓迫しようとも、御兩親が最後まで御承認なさらなくとも、良人を私から、私を良人から引離す力はどこにもございません。』と、やゝ聲を震はせて云つた。

　定行は惠美子の信念と、その深い愛に動かされながら、心から憐れむやうに、

『私はあなた方の上に最後の祝福のある事を祈ります。併し、今こゝではあなたがお別れになるといふ事はどうでせうか。いつそ伊太利へお歸りになつて、信重さんが外交官として巴里なり倫敦なりへ御赴任になる日を待つといふ事に……失禮ながらそれまでの生活費、旅費といふやうなものを、一萬圓或はそれ以上伯爵夫人のお手元から差上げる御意志のやうですが……。』

　見る〳〵惠美子の美しい蒼ざめた顏は、怒りに震へて、許すまじき烈しい眼光を、定行の上に投げたと見ると、

『伯爵夫人は私への手切にそれだけのお金を渡さうと仰しやるのでございますね。私を日本から遠ざけて置いて、そして良人の意志を動かさうとするのでございませう。私はお金で身賣をする女とは違ひます。良人の手以外からは、誰方からも一文だつて頂きません。』

　定行は慌てたやうに、

『手切などとさういふ風にお取りになつてはいけません。云はゞそれは好意の贈物で……それも伯爵夫人が明らかにさう仰しやつた譯ではなく、私が忖度して申上げたのは失策でした。これは取消します。』

『伯爵夫人は永遠に私を良人から斥けようとなさるのです。それでなくて、私一人を外國へ立たせようとなさる筈はありません。どうぞきつぱりとお斷り下さいまし。私は最早良人からは決して離れません。私と一緒に居るため良人の社會的地位が失はれますなら、良人もそれに滿足してくれるだらうと存じます。あなたの御用向はそれだけでございませう。どうぞお歸り下さいまし。』

　定行は折角順調に進み出して居た對話が、こんな事にならうと豫期しなかつた。どうかして話を戻さなければならないと思ふので、

『いや、これはどうも失敗で……重々失言はお詫します。私は一面伯爵夫人のお使ひではありますが、一面またあなた方の同情者としてお尋ねした次第です。金の事は水に流して頂きます。伊太利にお歸りになつては と申上げたのは、これは伯爵夫人の御內意ではありません。私がこの席でふと思ひついたまでですが、私としては意味はなかつたのです。何も伊太利でなく、東京にお住ひになつたところで同じ事で、お別れになつたといふ事にさへなれば、必らずそこに有利な事情が生じませう。一ツそこの點を冷靜にお考へになつて頂きたいので、伯爵夫人にどういふ底意があるか、それは問題にしなくてもいゝと私は思ひます。あなた方が逆にこれを利用するといふ事も、一ツの方便で、要するにこれはあなた方が最後の決心さへ

確かなれば、一時お別れになる位何でもないぢやアないかと、たゞその事を申上げて見たかつたのです。併しこれに對しては決してお返事を頂かうの何のといふのではありません。重ねて申しますが、私はあなた方の不利益を計るために上つたのでは決してないのですから、その點はどうか誤解のないやうに……』

默つて聞いて居る中に、惠美子は次第に冷靜を取戻して來ると、自分の突然に見せたヒステリックな態度や言葉が、少し自棄的だつた事を、この自分達に同情してくれて居るらしい老紳士の前に恥づるやうになつた。

『御免遊ばせ、私一時にくわッとしたものですから、つい失禮を申上げました。』

『いや、それで私も安心しました。私はこの上多言はいたしません。私の申上げた事を、もし取りどころがあるとお考になれば、なほゆるゆる御再考を願ふ事として引退ります。』

『はい、良人の利益のために熟考して見る事にはいたしませう。ですけれども、もし良人と暫くでも別れなければならぬとすると……あゝそれは私に取つて、どんなに悲しい事でございませう。』

『いや、御同情申上げます。此上は蔭ながらあなた方の御利益を計る考で居ります。』

定行は惠美子から深い印象を受けて辭し去つたが、彼を送り出した惠美子の胸には、嘗て覺えぬ心淋しさと不安が深くも食入つて行くのであつた。

## 惠美子の思案

惠美子は今まで夢にも良人と別れて生活しようなどと考へた事はなかつたが、今眞面目にそれを考へて見なければならなくなつた事を感ずるのだつた。併し良人と暫くでも別れて見る氣には、今の彼女にはどうしてもなれないのだ。

憂鬱に良人の歸りを待つて居る中に、夕刻信重は東京から歸つて來た。

『どんなにか待つて居たらうね。早く歸つて來るつもりだつたが……おや、惠美さん、顏色が馬鹿にわるいぢやアないか。どうかしたのかえ。』

『えゝ……先刻お母樣のお使ひに板垣さんといふ方が見えたのよ。』

信重は眉をひそめて、

『なに、板垣が來た。板垣が何を云つて來たんだね。併し、惠美さん、板垣が何を云つて來たつて、そんな事を氣にするには及ばんよ。放つて置いたらいゝんだよ。』

『だけどもさういふ譯にはいきませんわ。』

『全體何を云つて來たのさ。板垣といふ男はれ、存外譯の分つてる親爺で、私達に同情してくれて居るんだが、板ばさみになつて困つて居るんだよ。母の使ひだと云つて、まさか無理解な事を云つて來た譯ぢやアあるまい。』

『えゝ、あの方は私達に不利益な事を考へる人ではなささうですわ。ですから私、考へさせられるのよ。』

さう云つて彼女は、今日の定行の訪問の趣意を語り聞かせた。

『ウム、そんな事だらうと思つた。實はさういふ意味の事は、私も垣板から聞かされたんだ。何もそんな事を考へる必要はないさ。放つて置くがいゝ。』と、信重は無造作に云つた。

『だけどもあの方の仰しやる事にも、一理はあるとお思ひにならない？』

『それぢやア惠美さんは、當分私と別れてもいいと思つて居るのかえ。』

『あら、さうぢやアないわよ。だから私心配してるんぢやアありませんか。私は日本には一人のお友達もないし、誰に相談する人もないんですもの、あなた一人が天にも地にも頼りなの

よ。一日でもあなたと別れて、生きて居られるかどうかと案じて居る位ですわ。」

「それ、御覽、それなら別れる必要はちつともないさ。私なんぞそんな事を考へても見ないよ。」

「ですけれどもあなたが御希望の大使館勤務の地位を得るためには、御兩親のお口添が何よりも有力だといふ事は、事實なんでせう。」

「それは兩親の口添は有力さ。そして消極的にはなほ有力だね、といふのは假に外の方面から運動して極つても、兩親が反對すると一遍に打壞されるといふ事さ。そんな事もなからうけども、有り得る事には違ひないんだ。」

「だから御覽なさい、考へて見る必要がありますわ。」

「併し惠美さんと一緒に居るため、兩心が口添をしてくれないといふなら、さうまでして外交官にならなくてもいゝよ。」

「だけどもあなたが倫敦か巴里の大使館詰になる事が出來たら、私は外國では立派にあなたの妻の待遇を受けることが出來てよ。この事も考へて御覽なさい。」

「それはそれに違ひないがね、そして一日も早くその日の來る事を望んで居るんだがね。」

「ですから一時お別れする事も一ツの方便ではあるのよ。そのために、御兩親があなたのためにこの運動をして下さるといふなら……。」

「別れる事は考へない事にしようぢやアないか。一緒に居たからと云つて、父が口添をしてくれないとは信じたくない。要するにそれは最後の手段だ。」

「えゝ、最後の手段よ。お別れしたつてあなたさへしつかりして下されば、私には心配はありませんわ。」

「いやだ、別れるのはいやだ。それは別れたつて心が變るやうな私ぢやアないが……死ぬまで惠美さんに忠實だと誓つてるんだからね。」

「その誓ひを忘れないでね。」

「忘れたら生命でも差出すよ。惠美さんだつてきつと私から離れないだらうね。」

「私、二度とあなた以外の良人は持ちませんわ。」

「いや、併し別れ話はほんとに止さう。なに、その中に母が折れるだらうと思ふ。」

「私、お母樣にお目にかゝつたらどうでせうかしら。」

「それは私も考へて居るのだが、併し今はいかん。それは時機を待つての上の事だよ。今にその時機も來るだらう。」

「さうでせうか。……ぢやア當分お目にかゝらないがいゝのね。」

惠美子はさう云つたけれども、數日の後無斷で伯爵夫人を訪問した事が、事件を收拾の餘地のない狀態に導く結果となつて了つた。

## 不思議の訪問客

午後三時。

松尾伯爵夫人頼子は時間を約束した一二の訪問先があつて、外出の用意をして了つたところだつた。ところが最初に尋ねる筈のその一軒から、俄かに差支が起つたからといふ斷りとお詫の電話がかゝつて來たので、頗る機嫌がわるく、次の訪問時間まで、約一時間の餘裕が出來たのを、どうして過さうかと、いら〳〵した氣持になつて居る時、上女中が入つて來た。

「奧樣、只今御婦人の方がいらしつて、お目にかゝりたいと仰しやるんでございますが……。」

頼子の眼には稻妻が走つて、

「お前はよくそんな取次が出來ますね。いつも云はれて居る事が分らないのですか。誰方がお見えになつたといふのです。初めての方なら名刺を頂くか、お名を伺ふかしたでせう。」

女中は躊躇しながら、
「はい、お名を伺ひましたが、仰しやいませんので……。』
夫人は聲を鋭くして、
「名を云はぬ方に私が逢ふと思つて居ますか。面會日でもない日に、名を云はぬ人が尋ねて來たと云つて、一々取次ぐものがありますか。」
『はい、さう申上げたのでございますが、大事な用件で是非お目にかゝりたいと、お頼みになるものでございますから……。』
「それは一面識もないものが、私に逢はうとする手です。そんなことを云つて來るものに、一々逢つて居たら際限がありません。どなたかの紹介で、面會日にお見えになれば、お逢ひいたしますと云つて、歸してお了ひなさい。』
『はい……。』と、女中はなほもぢ／＼しながら、退らうとしないで居るのだ。
『いろ／＼の人が、やれ寄附とか、やれ何々の會に名を貸してくれとか、そんな事を煩さく頼みに來るもののある事は、お前も承知でせう。』
『いゝえ、そんな方ではないやうに存じます。』
「それではどういふ人なのです。』
「綺麗な自動車でおいでになつて、その自動車を待たしていらつしやるのでございます。お若い、お立派な洋装の、それはほんとにお美しい、しとやかな方でいらつしやいます。」
夫人の好奇心が女中の言葉で動き出した事はその顔色でも讀まれた。
「それで名を仰しやらない?』
『はい、お目にかゝつてから、ぢき／＼詳しい事を申上げたいと、仰しやるのでございます。』
「このごろは賤しい職業婦人のやうなものでも、相當の洋装をして居る世の中ですよ。お前には、そんな方とは見えないと、おいひなのかい。』
『はい、そんな方では決してないやうにお見受けいたします。全くお立派な洋装で、綺麗なお聲の、ほんとにほれ／＼とするやうなお顔立の方でいらつしやいます。』
女中が最高の評價を拂ふ女は、全體どんな女なのだらうと、頼子は逢つて見る氣になつた。
『兎も角應接室へお通しなさい。そして今出がけで支度をして居るから、十分ほどお待ち下さい、長くはお目にかゝれないが暫くお逢ひするからと申上げて……。』
上女中はほつとしたやうに出て行つた。
頼子夫人は細卷のシガレットを取出して、それに火を點ずると口にくはへた。その指には大きなダイヤが光つて居る。靜かに紫の煙を吹いて居る中に、いら／＼した氣持がだん／＼その煙のやうに無くなつて行つた。その一時間をどうして過さうかとして居るところへ、さうした不思議の訪問客のあつた事も、結句氣紛れになつて幸ひだとさへ思つた。
その綺麗な訪問客は何ものなのだらう?
すぐに逢つていゝのを、十分も待たせようとするのは、輕々しく人に逢ふ事を、自分の估券に關すると思ふ彼女の習性のためだつた。シガレットをくゆらして居る中に、ふとあれからまだ一度も逢はない信重の事を心に浮べた。頼子は一粒種の信重を溺愛して居るにも拘はらず、今度の事ばかりは、わが子の意志を蹂躙して了つて、少しもそれを悔いようとはしない。否、それを悔いぬばかりか、信重の母親として、信重のために、また第一には松尾家のために、正しい事をしたと考へて居るのだつた。信重の失望、悲しみに、彼女は必らずしも同情を拂はぬのではない。たゞわが子に取つて、すべては一時の惡夢で、通り魔のやうなものであると考へ

て居るのだ。或時期を經過すれば、悲しみも失望も、すぐ忘れられるに違ひない、男の心といふものはさうしたものだと多寡を括つて居るのだ。但し彼女はわが子の悲しみ、失望には思ひ至つても、相手の女の悲しみ、失望を全然眼中に置いて居ない。それはどうなつてもいゝ平民の娘なのだ。女優風情の取るにも足らぬ女なのだ。彼女の誇りと虚榮心の前に、階級意識の前に、すべては無視され蹂躙され、それを少しも意としない彼女なのだつた。

意志の強い事を誇りとして居る彼女の一面には、血も涙もなかつた。

彼女がかうした決意を持つ底には、信重のために自分が擇んで秘めて居る意中の女のある事も見免す事は出來ぬ。それは無論同族の女で、姫の名に呼ばれ冊かれて居る令孃である。わが子の事を今思ひ浮べるについて、この令孃の姿を目前に浮べた事も當然である。

自分の計畫をどうして實現せしめるかについて、今思ひを廻らして居る彼女は、不思議に自分を待つて居る訪問客が、わが子の勝手に擇んだ女であり、愛人である惠美子であらうとは、夢想だもしなかつたのである。

若しそれが自分に激しい憎惡の念を起させて居る惠美子であると知つたら、決して應接室の閾を跨がせぬのに違ひなかつた。同時に惠美子が時機を待てと云はれた信重の言葉を用ゐず、無斷で賴子夫人を訪問した事も、彼女の何より重大の過失であつた。

賴子夫人は、二本目のシガレットをすつかりふかして了つたけれども、なほ席を立たうとせず、訪問客のある事などは忘れて居るかに見えたが、やがて思ひ出したやうにプラチナの變り型腕時計を見ると、十五分ほど過ぎて居るので、やをら立上ると、靜かに應接室に歩みを運んだ。

扉をあける氣配に、待ちくたびれて居た惠美子は立上つて、しとやかに夫人を見上げた。上女中の見た眼に間違ひがなく、惠美子のあまりけばけばしくない、上品な、落ちつきのある巴里好みの洋裝は、しつくりと身について、何とも云へぬスタイルなのに加へて、輝くばかりのその顏の美しさは、その瞬間にすつかり賴子夫人を魅して了つた。

賴子は美しい女が好きであつた。分けて若く美しい女にいつも心を惹かれる彼女は、春のやうな和やかな氣持を胸に湧かせるのだつた。美しい女の好きな母親に、惠美子を見せれば、一遍に母の心を柔らげる事が出來ると、口癖のやうに云つて居た信重の觀察は決して間違つては居なかつたのだ。が、併し……。

それは直接彼女に何の利害の關係もない場合に限られて居る事を、信重は知らなかつたのだ。

一目で女中のいふ通り、寄附勸誘や、無心を云ひに來た女でないと見て取ると、賴子はまづにこやかな笑顏を見せて、

「今支度をして居たものですから、ほんたうにお待たせいたしました。」と、機嫌よく言葉をかけた。

こんな打解けた調子が、名も通ぜぬ初對面の客に對して出る事は、稀有の例だつた。

惠美子はほつとしながら、ほがらかな笑顏を作つて、

「奧樣でいらつしやいますか。初めてお目にかかります。突然にお尋ね申上げまして、お出かけのところを飛んだお邪魔をいたします。」

これまた女中のいふ通り、何とそれは美しい聲を持つた音樂のやうな聲なのだらう！　美しい聲の持主に接する事も、賴子は取分け好きだつた。

「まア、どうぞおかけ遊ばして……」と、彼女

は愛想よく、十年の知己でもあるやうに、椅子をまで進めるのである。
が、恵美子は遠慮深く、立つたまゝ掛けようとはしなかつた。
『さア、あなた、御遠慮なさらずに、どうぞ…。』
自らまづ腰をおろして、恵美子の帽子の羽の先から靴の爪先までを、再び見返して、寸分の隙のないこの女の選擇に驚きながら、
『女中にはお名を仰しやらなかつたさうですがどなた樣で、どういふ御用向なのでございませう。』
『はい、あの…。』と、恵美子はちよつとためらつて、『私は…あの、信重さんと伊太利で結婚しました妻の恵美子でございます。』
それはまさしく青天の霹靂だつた。バネ仕掛ではじき上げられたやうに、頼子夫人は椅子から立上つた。見る〳〵その面は青ざめ、額には青筋が走つて、鋭く恵美子を見つめた顏には、今までの温容は瞬間に消え失せ、激しい怒りの色がそれに代つた。それは同時に見損ひをした自分自身に對する怒りでもあつた。
何もかも好きなものが手の掌を返すやうに裏表になつた。極端から極端に彼女の感情が走つた。



恵美子はハッと思ふと、身體がすくむやうになり、反射的に顏色が土のやうになつた。
頼子夫人は怒りに震へる聲で、
『信重には妻はありません！…それなら、私はあなたに逢ふ必要はなかつたのです。』
『お母樣、暫く私の申上げる事をお聞き下さいませ。』と、恵美子は懸命になつた。
『お母樣とは何です。そんな名で私を呼ぶ事は許しません！』
『それでは奥樣と申上げます。奥樣…私はこの恵美子を知つていたゞく事が、此際必要ではないかと存じて、お尋ねいたしたのでございます。』
『信重の妻でもないあなたを知る必要がどこにあります。今出がけの私には、時間が大切です。すぐお歸り下さい。呼鈴を鳴します。』
『暫く…暫くお待ち遊ばして…奥樣は先達板垣樣をお遣はしになりました。そのお返事を直接あなたに申上げたいと存じます。』
『さうですか。それならまた逢ひます。では簡單に要點だけを伺ひませう。』と、頼子夫人は鷹揚に云つて、再び腰を落すと、『それは多分お金を欲しいと仰しやるのでせう。お金なら差上げます。』
『飛んでもないお言葉でございます。お金などをいたゞかうとしてまゐつたものではございません。私は神の前で、伊太利の國法の前で、立派に信重さんと結婚した女でございます。そして二人の間には、此世の何ものも引離す事の出來ない羈絆が結ばれて居るのだと云ふ事を、奥樣に知つて頂きたいのでございます。』
頼子は激しい怒りと恥辱をさへ感じた。顏や姿に似合はぬ度胸のある女で、一筋縄では行きさうもないと、内心や〻狼狽しながら、併しどこまでも平然とした侮蔑的態度を取つて、
『伊太利の法律が、あなたをどう認めるにしろ——それも取調べさしてありますが——日本の臣民である以上は、日本の法律の支配を受けなければなりません。信重に妻のあるといふ事は、この私が認めないばかりでなく、日本の國法が認めないのです。』
恵美子は靜かに、
『さう仰しやるならば、私共は日本の法律が認めるまで待つ事も出來ます。それは程なく認めてくれるだらうと存じますから。併し…。』
頼子夫人は冷たく、

「それなら待つたら如何です。その夢であなたの空想が滿足されるなら……。」と、嘲けるやうに云つた。

「はい、どうしてもお認め下さらないならば、私共は止むを得ず、さうする外ございません。併しそんな事をせずに許して頂けるものならばと存じまして……。この事の爲に良人の惱みは見るに忍びない程でございますから……。」

「一概に反かうとする信重の惱みは當然です。併し信重はその惱みをあなたと一緒にすぐ忘れる事が出來ます。私はわが子の性質をよく知つて居ます。あれは驕……兒で、あの子の悲しみや惱みといふものは、假令どんなに烈しくとも、その時限りのもので、一時に逆せては了ひますけれども、すぐ忘れて了ふのです。一年先にあなたを忘れる位何でもない事なのです。」

「いゝえ、そんな事は決してございません。」と、惠美子はわれ知らず亢奮して、「あなたこそ信重さんを御存知ないのです。良人はそんな移り氣な、輕薄な人ではございません。私に對する愛でも、どんなに深刻なものでございませう。良人がお母樣でいらつしやるあなたを擇びますか、直に私を擇びますか、その最後の日はすぐまゐる事でございます。私は安心して良人を信ずる事が出來ます。」

伯爵夫人も同じやうに亢奮して、この美しい、悲劇のヒロインのやうに悽艶に見ゆる惠美子を凝視した。わが最愛の子は今慥かに自分を捨ててこの女の懷に入つてゐるのだ。一日で女中を魅したり、知らずに逢つた自分にさへ嘗て若い女に對して受取つた事のないほどの、素晴らしい印象を與へたこの女が、信重の心をしつかと摑んで居る事は容易に推測される。自分には尋常の手段でこの女からわが子を奪ひ返す力はないと思ふと、腹立しくも憎さが百倍になつた。

彼女は飽くまでも、愚弄するやうな調子をつづけて、

「あなたはさうして夢を見て居る中だけが幸福なのです。一年先にあなたは私の言葉に思ひ當る日のある事を、今から豫言して置きます……信重は兎に角として、信重に對するあなたの愛だつて、私は知つて居ます。あなたは信重をちつとも愛しては居ないのです。」

惠美子は色を變へて、咎めるやうに、

「どうしてそんな事を仰しやるのでございます。私といふものをちつとも御存知ないのに、どうして私の愛が深いか淺いか、お分りになるのでございませう。」

「それは分つて居ますとも。あなたは信重を愛して居るのではなくて、信重のやがて相續する筈の爵位を愛して居るのです。松尾家の財産を愛して居るのです。未來の伯爵夫人を夢みて居るといふ事は、あなたにはありさうな事です。よく歐羅巴や亞米利加の女優は、爵位のある男を狙ひ打にするものですよ。」

惠美子は今度は眞赤になつた。彼女の全身はこの大きな侮辱に堪へ切れずに、わな／＼と震へた。悔し涙さへ彼女の眼にはにじみ出るのだつた。若しそれが最愛の良人の母親でなかつたら、彼女の堪忍袋は破裂するに違ひなかつた。自分はこの驕慢な母親にくつてかゝるために來たのではないと僅かに思ひ返して、何事も良人のために忍ぶ氣になり、

「それはあんまりなお言葉でございます。私の以前の生活の一小部分、ステージに立つたといふ事から、そんな概念的な想像を遊ばすのかも知れませんが、飛んでもない邪推――お門違ひでございます。私はそんな女ではございません。私が信重さんと結婚した理由は、たゞ信重さんに對する深い愛以外に、不純な動機は何一ツございません。私には爵位もありませ

ん、財産もありません。私は自分の全き心と靈魂を良人の愛に捧げて居る女でございます。若し良人が伯爵家の人でなく、由緒も家柄もない平民の子であつたら、私にはどんなに仕合せであつたか知れません。』

『それは誰も人前ではいふ事です。ましてお芝居には馴れきつて居るあなたです。誰があなたの云分を信ずる事が出來ます。……それよりかいつそ心の底を仰しやつたらどうです。松尾家からはあなたに二三年贅澤に生活の出來るだけのお金を差上げます。それで伊太利へ歸られた方が、あなたの利益ではありませんか。』

惠美子は怨みの眼光を、鋭く頼子に向けて、

『私は假令死んでもあなたから一文のお金だつて頂きません！ 奥様、あなたは何といふ冷酷な方でいらつしやるでせう。あんまりです、あんまり殘酷です。……なぜそんなに私をお憎しみになるのでございます。』

頼子夫人はいよいよ嘲るやうに、空とぼけた調子で、

『あなたを憎む？……私はたしかにあなたを愛しては居ません。その通りにあなたを憎んでも居ないのです。愛しもしなければ憎みもしない、つまりあなたは私の眼には何ものでもないのです。ナッシングなのです！』

それは惠美子の堪へ切れぬ侮辱であつた。彼女は自分自身を支配する力が、今は殆んど盡きて了つた。彼女のかぼそい身體は最後の絶望と怒りに木の葉のやうに震ひ始めた。何か云はうとしても、それは口から出ずに、たゞ油汗だけが額から流れるだけで、化石のやうにそこに立つては居るけれども、それは氣を失はうとするのを、僅かに氣で支へて居るに過ぎなかつた。

斷末魔にも似た女の苦悶は、全く見るに忍びぬ光景だつた。頼子夫人の顔にいくらか憐れみの色が浮んだ。惠美子がそこに倒れさうな様子を見ると、物靜かに、

『あなた、おかけになつたらどうです。』

惠美子は從はなかつた。懸命の努力を以てなほそこに立つた雙方無言の中に數分が過ぎた。が、惠美子の神經はあまりに昂ぶつて、身體を支へる力はとうとう盡き果てた。倒れるやうに伯爵夫人の足下に、その身を投伏すと、さめざめと泣出して了つたのである。

## 復讎へ

頼子はあまり自分が云過ぎたと知つて、震へて居る惠美子の頸筋を、當惑さうに見下しながら、

『そんなところに泣いて居ては困ります。さア歸つて下さい。』と、言葉を穩やかに云つた。

多少なりとも柔らいで來た頼子の態度が、惠美子を勇氣づけたかどうかは知らぬが、惠美子はそのまゝ涙の顔を擧げると、

『奥様、伊太利には女は女同士といふ諺がございます。私がその諺をたよりにしてお尋ね申上げたのは間違ひでございませうか。私はモ一度自分の誇りを捨ててあなたにお訴へします。それもこれもみんな良人を愛すればこそでございます。奥様が誰よりも強い誇りの持主でいらつしやる事は私によく感じられます。身分の違ひこそあれ、私とても奥様に劣らぬ私としての誇りを持つて居ります。その私が一度も捨てた事のない誇りを捨てて、この通り奥様の足元にひれ伏してお訴へするのでございます。社會の各方面に、また家庭の上に偉大な勢力をお持ち遊ばす奥様に、わが子の信重さんと、つゞいて私の上に、深い同情を、深い憐れみを持つていたゞく事をお願ひいたしたいのでございます。奥様からのたゞ一言で、すべては解決されます。良人も私も初めて救はれ

るのでございます。私は良人を自分の生命よりも愛して居りますので、良人のためにこのお願ひをするのでございます。どうぞ私達の上に哀憐を……私達はどんなに幸福を感じ、どんなにあなたに感謝する事でございませう。若し私達が永久に生木を引裂かれるやうな事があるとすれば、良人も私もどんなに不幸の底に落込んで了ふ事となるかも知れないのでございます。奥樣……あなたが子のために無慈悲な殘酷なお母樣でいらつしやらない限り、私達の上に哀憐をお持ち下さいませ。そして私共二人の結婚を快くお認め下さいませ。お願ひでございます。」

それは哀れにも、この高慢な伯爵夫人の前に涙を呑んで人格の全部をかなぐり捨てた女の、聲涙共に下る悲痛な言葉であつた。賴子は呆氣に取られたやうに、その頰に涙が傳はる恵美子の顏を見つめたまゝ、口を噤んで居た。

恵美子は言葉を次いで、

「私は貧しい生立のものでございます。地位も身分もないものでございます けれども今日まで正しく生きてまゐりました。心に恥しい行爲は一度でもいたした事はございません。誰の前にも自分を恥ぢぬ私は、信重さんの妻として、立派に役目を果す覺悟と自信をもつて居ります。妻としての必要な修養は、身を粉にしていたす考でございます。私は奥樣のお望み遊ばす女に、自分自身を改めて行く事を少しも厭ひません。奥樣のためには鳩のやうな從順な娘にもなりませう。奥樣……身も心も傾けて信重さんの忠實な妻で居ようとする私をお憐れみ下さる事は出來ないのでございますか。」

彼女は全く血を吐く思ひで、自己の一切を賴子夫人の足下に投出したに拘はらず、如何にそれが酬いられようとするのであらうか。

この高慢な伯爵夫人は、たゞ冷やかに手もて制すると、次のやうに云放つた。

「あなたのいふ事は、どんなに憐れな言葉を重ねても、つまり私に取つて一切ナンセンスです。小說ならば人を動かすかも知れません。併しあなたのどんな祈りも私を動かす力はありません。この上多くいふ必要はないと思ひます。たゞ一言——最後の一言をお聞かせしませう。私はあなたを信重の妻と見るよりは、いつそ信重の死を擇びます。」

「えッ！」

恵美子の顏は再び土氣色になつた。

彼女は今こそハッキリと自分の敵を知つた。兩立する事の出來ない仇敵同士は、激しい火の出るやうな眼光で、互ひに見合つたまゝ、暫くは言葉もなかつた。恵美子は百の祈りも千の哀訴も當然無效である事を知つた。否、それは無效であるといふよりも、遙かにそれ以上であつた。まさしく自分を敵視して居るに相違ない伯爵夫人の胸には、女性としての憐れみも慈悲もなく、鐵のやうな冷酷さ、自分に對する侮蔑と憎惡とがあるばかりなのだ、彼女に哀を乞ふため、一切の誇りを捨て、靈魂をまで投出したのは、何といふみじめさだつたらう。而もそれはたゞナンセンスの一語で片づけられて了つたのだ。——あゝそれは實にぐさと彼女の心臟を貫くメスであつたのだ。

恵美子は僅かに立上ると共に、聲を震はして、

「私が懸命になつて、血の涙で申上げた事がナンセンスなのでございますか。私はあなたのやうに殘忍で、そして冷酷なお母樣を存じません。信重さんの死をお擇びになるほど、どうしてこの私が憎いのでございませう。——いゝえ、それは何と仰しやらうとも、私といふものを憎んでいらつしやる證據です。」

賴子夫人は澄し拂つて、

『私にはナンセンスだからナンセンスと申したのです。またあなたを憎んで居ない事は前にも申した通りです。若し強ひて私の憎んで居るものがあるといふなら、それはあなたでたくて、あなたの屬して居る階級なのです。併しそれも憎むと云つては語弊があります。それは憎むにも足りないものです。さうです、輕蔑と云ひませう。私は極力自分が輕蔑して居る階級のものの娘を、わが子の嫁にする事は斷じて出來ないのです。』

惠美子は呆氣に取られたやうに、伯爵夫人の顏を見つめた。それが眞實を語つて居るかどうかを疑ひながら、

『それでは私が貴族に生れなかつたからと仰しやるのでございますか。』

『その通りです。』

『なぜ平民がそんなに呪はしいものなのでございませう。それは時代錯誤ではございませんか。』

『あなたからそんな講釋は聞きません。平民は平民だけにその分を守ればいゝのです。』

『平民に生れたのは私の罪ではありません。そして貴族に生れなかつた事を後悔する氣には決してなれない私なのでございます。』

『私はわが子の嫁を、あなた方の階級の中から取る事を、死んでも許さないのです。……個人としてのあなたに私は何の憎惡も感じないばかりか、あなたの美しい姿はいつそ私を惹きつけます。その上あなたのやうに聰明な女なれば、いつでも喜んで私の祕書とするでせう。併し私の嫁には斷じて！……』

『併し信重さんは私を擇びました。』

『それは單にあなたの美しい顏に誘惑されただけです。私の血を享けた信重が、自分の過失を知る日は近く來るでせう。私は少しもそれを疑ひません。信重は小兒の時から、新らしい玩具にすぐ飽きる性質なのです。』

『そんな移り氣な人では決してございません。あなたはわが子の中傷までなすつて、それでお恥ぢにならないのですか。』

賴子は肩を聳かしながら、險しい眼色で相手を見つめた。

『事實をお話したのがどうして中傷なのです。若い男は誰しも美しい顏には誘惑されます。併し美しい顏ほど飽かれ易いものはありません。信重も若い男の數には漏れないのですから、その事實をさしていふのです。』

『妻に擇んだ女は違ひます。飽きたからと云つて、それを捨てて了ふ事が、上流社會の人の慣習だと仰しやるのですか。女を弄んで捨てさせる事は、あなた方の階級では何ともお思ひにならないのでございますか。御自分達の階級の女でない限り、平民の娘ならば、節操を蹂躙して、不幸の底に突落して了つても、それを罪惡とはお認めにならないのでございますか。』

惠美子の眼は輝き、誇りを取戾して打上つた彼女の許すまじき態度に、賴子夫人は何を生意氣なと思ひながらも、次第に壓迫を感じ出した事は事實だつた。が、多寡が女優上りの女風情にと、勉めて見くびつた態度に出て、

『だからあなたはその償を要求しようと仰しやるのでせう。その償なら十分に差上げようと申して居るのですよ。』

『またお金の事ですか。』と、激しながら、『あなた方はお金でどんな罪惡でも償へると考へていらつしやるのです。この世の中にお金で自由にならない何ものもないと思つていらつしやるのです。今にお金でどうにもならないもののある事にお氣づきになるでせう。何度でも申しますが、私は死んでもあなたからお金はいたゞきません。その代り信重さんとは決して別れませんから、それだけをきつぱり申上げて置き

ます。』

　見さげ果てて居る階級の女から、假令それが猫を噛む窮鼠のやうなものだと考へるにしても、こんな高壓的態度に出られる事は、誇りの強い頼子夫人の堪へ得るところではなかつた。それだけに憤怒は絶頂に達して居るのを、強ひて押しかくして、徹頭徹尾侮蔑的態度を續けながら、

『咽喉から手の出るほどに思ひながらの痩我慢はお止しなさい。差上げるものはいつでも差上げます。併し信重はきつとあなたの手から取返して見せます。あの子はやがて私の擇んで與へる妻に感謝する日が必らず來るでせうよ。』

『そんな事は信ぜられません。私は私達――女性の中に少しも心の持合せのない方を、血も涙もない、殘忍そのもののやうな方の存在を初めて知りました。あなたは恐ろしい方です。メフヰストのやうな方です。併し奥樣、私はあなたを恐れません。私はあなたと鬪ひます。この上はその手段を取る外ございません。神樣はきつと私の味方をして下さるでせう。そしてあなたの無慈悲を罰して下さるでせう。――いゝえ、神樣があなたを罰せずとも、私がきつとあなたを罰します。……あなたは私を足下に蹂躪なさいました。純眞な女性として忍ぶ事の出來ない侮辱をお與へになりました。この侮辱はきつとあなた御自身に返る日のある事を御承知下さい。今日私があなたにした通りに、あなたが私の足下に跪いて、そして私の憐れみをお求めになる日がどうして來ないと云へるでせう。その時こそ私の受けたあらゆる侮辱をあなたにお返しする日です。私はあなたのその高慢なお心を、こな〳〵に粉碎して見せます。さうです――それは復讐です。私の復讐はあなたの殘忍そのものよりも、もつと深刻なものである事を御記憶下さいませ。』

　それは怒れる女王の火を吐くやうな威嚇であつた。この美しい、蟲も殺さぬやうに見ゆる、弱々しい女に、どうしてかうした激しい情熱の火が迸るのかと驚きながら、頼子夫人は薄氣味わるくさへなつて、魅られるやうな視線を見苦しくも避けながら、勉めて平然とした態度を粧つて、

『あなたはどうやら氣が變になつたやうです。私は狂人の脅しなどにちつとも氣を止めては居ません。世に引かれものの小唄といふ事があります。勝手な夢を御覽になるのはあなたの自由です。さア、もうこの上あなたのやうなもののお相手をして居る事は出來ません。お歸りなさい。』

　彼女はさう云つて激しく呼鈴を鳴した。

　惠美子は昂然として、

『お言葉がなくとも歸ります。最早二度とはお目にかゝりますまい、あなたが私の足下に跪く日の來るまでは……。』

　傷けられた女王――と云ふよりは寧ろ勝誇つた女王のやうな態度で、彼女は今入つて來た女中には目もやらず、鷹揚に室を出て行つた。そして待たして置いた自動車の中に姿を隱すまでは、その女王のやうな態度を崩さなかつた。

## 愛の巣にて

　惠美子はどうして鎌倉の愛の巣まで、自分の身體を運んで來たかも、殆んど知らなかつた。それまで張りつめて居た心が、わが安住の地に辿りついたと思ふと、すつかり弛んで、帽子や外套をかなぐり捨て、二階の自分の居室へ駆上るなり、長椅子の上へ倒れかゝつて了つた。

　良人がまだ歸つて居なかつた事が、限りなく淋しかつた。

　彼女は長い間長椅子の上に泣いて居た。それは悲しみの涙といふよりは、無念の涙であ

つた。あらゆる侮辱の言葉を投げかけられ、この上もない侮蔑の眼で見下された事が、誇りのある若い女性の堪へられないところであつた。それも忍び難い屈從を忍び、自分の人格を頼子の足下に投げてまでかゝつたのに、それだつたのがなほいけなかつた。
　惠美子はどんなに自我を捨てて了つても、信重の母とは到底調和の餘地のない、お互ひに兩立する事の出來ない女である事を、ハッキリ知つたのだ。彼女には飽くまで頼子夫人と闘ふか、信重を捨てるか、どちらか二ツに一ツを擇ぶより外に途のない事が明らかにされた。無論信重を捨てる事は出來ない、意地でもそれは出來ない。前途にはたゞ戰闘があるばかりだ。そして勝利者は自分でなければならない。
　彼女は信重の信實を疑ふ事が出來なかつた。母親がどんな手段を用ゐたところで、良人の心が動くものとは信じられない。一年だけ辛抱すれば、日本の法律の下でも、公然夫婦の名乘が出來るのだ。たゞ一年の辛抱なのだ。その間に良人の心に、どうして變化が起り得よう。
　彼女は飽くまでも信重を信じようとした。がそこに何かしら、漠然とした不安のある事をどうする事の出來ない事も事實だつた。良人は、どんなに自分を愛し、自分に信實であるにしても、頼子は母親である。血を分けた生の母である。母子を繋ぐ目に見えぬ絲は、他人の手で絶つ事は出來ない。その上に良人は平民と違つた華族といふ特殊の階級に屬して居る。社會的地位もそれに附隨する。何か外國に比べて人の口が非常に煩さく、私的關係が小面倒に出來て居るらしい此國で、さういふいろ／＼の羈絆から良人を完全に解放する事が、果して出來るだらうか、と云つたやうな危懼の念が、芽を吹き出した事も爭へないのだ。
　良人を頼る外には、誰一人頼るものもない彼女は、烈しい孤獨の念に襲はれて、早く良人が歸つて吳れなければ、どうにもならないやうな氣持になつて居る時、階下に待焦れて居たその人の歸つて來たらしい氣配を聞取つた。女中との話聲はたしかに信重である。飛んで行つても良人を迎へたいと思ふ彼女でありながら、自分の身體は、彼女自らに拘はらず、鉛のやうに重かつた。
　長椅子に顔を伏せたまゝ、惠美子は梯子段を駈上る良人の跫音を聞いた。
　すぐ扉が開いて、
『惠美さん！　どうしたんだい？』
　彼女の顔は擧らない。
　こんな事は今まで一度もなかつた事なので、信重は心配さうに傍へより添ふと、
『どうかしたのかい、氣分でも惡いのかい。』
　優しい良人の聲を聞くと、惠美子はひとり手にこみ上げて來る啜り泣を、どうする事も出來なかつた。
『泣いてるぢやアないか。どうしたのさ。』
　顔を擧げようとしても、どうしても擧げる事が出來なかつた。高まるのは啜り泣の聲だけだつた。
　信重は彼女を抱起して、
『ほんとにどうしたんだね。女中の話ぢやア東京へ行つて來たといふんぢやアないか。東京のどこへ行つて來たんだね。』
　信重にはもしやといふ心配が急に持上つたのだ。
『私、悔しいんです。……あんまり、あんまりなんですもの。……だけどやつぱり私が惡かつたのですわ。堪忍してね、堪忍して頂戴ね。』
『何だか、ちつとも分らないぢやアないか。何が惡かつたのさ、何を堪忍してあげるのさ。』
『私、あなたのお言葉もきかずに、今日お母さんを訪問して來たんです。』と、おろ／＼聲で

云つた。

信重の顔色はサッと變つて、

『母を訪問した？…しまつた！…あゝさうだつたのか！』

彼は太い溜息を漏らした上、

『母が君を認めなかつたのだね。…母には逢つたのかね。母が逢つてくれなかつたのかね。』

『お目にかゝりましたわ。だから…だから、私…。』

『今母に逢ふのは全く機會が早いんだ。それで逢つちやアいけないと云つて置いたんだけれども、逢つて來たものは仕方がない。』

『だから堪忍してね。…でもあなた、機會が早くはなかつたんです。なぜと云へば、その機會は永遠に來る筈がないんですから…。』

『何故だつて？…そんな事は信じられない、また信じたくもないが…。』

『あなたはまだあなたのお母さんをよく御存知ないのです、少なくもそれが私に關する限り。…あなたはお母さんが私を御覧になれば、お心が傾けるに違ひないと、よく仰しやつていらつしやいました。最近まだ機會が早いからとは、仰しやいましたけれども、最初のお言葉に印象づけられたものですから、もしやと冒險的にお尋ねして見たんです。そしてその結果は！…絶望以外の何ものでもありませんでした。私にはあなたのお母さんといふ方が、今日といふ今日ハッキリ分りました。』

『母が惠美さんを見て何と云つたのだね。私は惠美さんを見て、好意をよせる事の出來ない母とは、どうしても信じられないんだが…。』

『それは多分私があなたの妻でなかつたら、好意を持つて下すつたでせう。現に私が自分の身の上を申上げなかつた間は、大變私を好遇して下すつたのです。それで私も何か幸先のいゝやうな幻覺を起して、身の上をお打明したのです。その瞬間にお母さんの態度はがらりと變つてお了ひになりました。』

『ウーム…。』と、呻いて、『そして母の言葉は？』

『それは殘酷そのものでした。女性としての慈悲も情もお母さんにはございません。どんなに私が申上げても、私はあなたをほんとに愛して居るのではなくて、あなたの未來の爵位と、松尾家の財産を愛して居るのだ、歐羅巴や亞米利加の女優が、財産と爵位のあるものを誘惑にかゝつて居る通りの事を、私がしたに過ぎないのだと仰しやるのです。』

信重も激昂しながら、

『母がそんなひどい事を…それは心にもない事を云つてるんだ、どんな女かといふ事は惠美さんに一度接しさへすれば分る筈なんだ。母は強ひて自分の良心に盲目で居ようとするんだ。惠美さんは無論よく辯明をしたらうね。』

『私の申上げる事などは何一ッ聞かうとはなさいません。お母さんはどんなに私を憎んでいらつしやるか分らないのです。賤民の子で、孤兒で、女曲馬師で、歌手であつた女は、お母さんの目には、人間の數ではないのです。きつと蟲けらか何かのやうに思つていらつしやるのでせう。その證據に私のやうなものは、御自分の眼にはナッシングだと仰しやるんです！』

『ナッシングだつて？ ウーム。』

『それはこの上もない侮辱だといふ事を、あなたもお感じになるでせう。ですけれども私はこらへましたわ。何を仰しやられても、あなたのお母さんなのですもの、そして私はこんなにあなたを愛して居るんですもの…。ですからこゝはどんなに忍んでも、お母さんの憐れみを乞はなければならないと考へましたから、お母さんの足下にひれ伏してお願ひ申しましたの、私は恥も誇りも忘れて泣きましたわ。泣い

てお願ひしましたわ。私はこの先どんな辛い修養でもして、お母さんのお眼鏡に叶ふやうな、立派な女になる覺悟でございますつて――身も心も傾けて、あなたの忠實な娘になり切る決心ですからつて――血の涙で申上げましたわ。』

『惠美さんがそれほどまでに云つてくれた？それでも母の心が動かなかつたといふのかい。』

『動かない位の事ではありませんわ。私が血の涙で申上げた事が、どんな言葉で酬いられたとお思ひになります。それはたゞナンセンスの一語だつたのです。私が身を投伏して申上げた事は、お母さんのお耳にはナンセンスなんですつて――。』

彼女は思ひ出しながらも、悲憤の涙に咽ぶのだつた。

『それはあんまりだ！ あんまりだ！ お母さんもあんまりだ。そんな母とは思はなかつた。』

信重も蒼白になつて、身を震はすのであつた。

『お母さんは只、お金で私をあなたから引離さうとなさるのです。そして最後に私にお云渡しになりました。私があなたの妻となるのを見るよりは、あなたが死んでくれた方がましですつて！』

『そんな事までも！……あゝ、そんな母ではない筈だが――。』

『私は溝鼠のやうに追出されて歸つてまゐりました。併し私だつて誇りのある女です。いくらあなたのお母さんでも、卑怯に默つて歸る事は出來ませんでした。私の最後の言葉として、血も涙もないあなたから受取つたこの侮辱は、きつとあなたに歸る日がございませう、私の復讐は今日以上である事を、御記憶下さいと申上げてまゐりましたわ。』

『なに、そんな事を云つたのかい。』と、妻の烈しく燃ゆる眸子を見て、ぞッとしながら、『だが復讐なんて、そんな事を考へる必要はないよ。私と惠美さんとは、決して離れないんだから、それが立派な復讐ぢやアないか。』

『えゝ……。』

『それとも惠美さんは何か――。』

『私、何もどういふ復讐をしようとも、またどうすれば復讐が出來るとも考へた譯ではありませんわ。ですけれども、あなた、私にはどうかすると、未來の事が夢のやうに暗示される事がありますのよ。私はお母さんと云合つてる中に、何だかお母さんが私のした通り、私の足下に跪いて、泣いて私に憐れみを求めていらつしやる光景を、ハッキリ思ひ浮べたのですわ。いゝえ、思ひ浮べたといふよりは、幻影のやうにそこに見えたのですわ。』

信重は何か肌寒い心地を覺えながら、

『私はそんな恐ろしい幻影が、事實になつて表はれようとは想像されない。だつて來年日本の法律の下に立派に結婚さへして了へば、惠美さんは、きつと母の今日の無禮を許してくれる筈だと思ふから……母だつて觀念して折れて來るに違ひないのだから……。』

『ですけれどもお母さんは來年になれば、あなたを私から完全に引離す事が出來ると、確信していらつしやるらしいのですよ。何がお母さんにさう確信させるのでせう。私、それが恐いのよ。』

『そんな事は斷じて出來ないぢやアないか。それは地球から月を離すといふ事だ。太陽から地球を奪ふといふ事だ。大自然にだつてそんな力はない。』

さう云つて信重は力強く惠美子を抱擁した。

『私、あなたを信じますわ。あなたは私の太陽ですわ。決して……決して私を棄てないでね……。』

『そんな事を云へば、私は惠美子さんを怨むよ。』
『どんなことがあつても?』
『さうだ、どんなことがあつても。』
『きつとよ。きつとよ。』
惠美子は物狂はしいまでに、强く良人を抱きしめた。
『併し母はあんまりだ。私はこれからすぐ母に逢つて、云ふだけのことを云はなければならない。』
『いゝえ、いらつしやらないで下さい。私の傍に居て下さい。もうすぐ暮れるぢやアありませんか。今夜は私の傍に居て下さい。』
『あゝ、惠美さんを放つたらかして行く事も出來ない。仕方がない……明日にしよう。』
『明日お母さんにお逢ひになる事も、考へて見ての事にして下さい。私、何の效果もないと思ひますわ。』
『たとひ效果はなくとも、惠美さんをそんなに待遇されて默つて居る事は出來ないからね。云ふだけの事は、母に云つて來なければ……。』
『あなた、お母さんが私を憎んでいらつしやるのは、私の素性が素性だからといふばかりでなく、外に隱れた理由があるのではないでせうか。』
『隱れた理由とは?』
『假令ば、あなたの奥さんにと、お母さんがお極めになつていらつしやる方でもあるんぢやアないでせうか。私、そんな氣がしますわ。それで極力私といふものを、あなたから引離さうとなさるんぢやア……。あなたにお心當りがない?』
『心當りなどはちつともないね。それは母にして見ると、内々擇んで居る女があつて、それを私に押しつけようとする肚で居ないとは云へない。併し勝手に子の妻を擇ぶ權利は、斷然母親にないんだからね。現在妻のある私を、どうしやうもないぢやないか、子供ぢやアあるまいし。』
『でも、私、何だか心配ですわ。お母さんは私の敵としては、ほんとに恐ろしい敵ですもの。この先あなたから私を引裂くため、どんな事をなさるか、あなたがほんとにしつかりして、このひとりぼつちの私を保護して下さらなければ……。』
『大丈夫だよ。松尾家の相續權なんか、放棄したつて何とも思はない私なんだ。この世の中に何も恐れるものなんか有りやアしない。安心しておいでよ。』
『えゝ……。そのお言葉を忘れないでね。』
信重は返事の代りに熱い接吻を與へた。

## 芙蓉子

翌日信重は母を責めるため、若くは母に愬へるため、麹町の邸を訪問したが、多く留守勝の母は、案じた通り今日も不在であつた。歸りは夜に入るだらうと告げられたので、父に逢はうとしたが、父も不在だつたため、止むなく鎌倉へ引返すより外なかつたのである。
彼はその日母と或女とが、自分に取つて頗る重大な密談に耽りつゝあつたらうとは、想像する事さへも出來なかつたのだ。
或女とは賴子夫人の無二の親友、山路子爵夫人壽子を指すのである。
惠美子の想像がそれに觸れた通り、果して賴子が信重のため擇んで居るのは、美貌と才藝の持主である壽子の愛孃、芙蓉子に外ならなかつた。無論それが賴子の擇んだ女だといふ以上、第一の條件として、人並すぐれて美しい娘でない筈はなかつた。
賴子夫人の父が九州の大名華族である事は前に記した通りである。一方壽子の良人山路子

爵は、頼子の父の領した舊藩の支藩に領主だつた人で、つまり分家の關係にあつた。然るにこの山路家はいつも財政難に祟られ、本家である頼子の父の家に、毎々その援助を仰いで居たほど、不如意の家計に惱まされ通しだつた。その不如意は一ツは山路家が華美好きであり、社交好きであるためもあつた。頼子は五ツ年下の壽子と、親しい友であるといふよりは、寧ろ妹の如く愛し、また姉のやうな專制權を壽子の上に持つて居たのは、父の家の關係ばかりでなく、個人的にも、松尾伯爵夫人として、屢〻經濟的援助を壽子に與へて居るためであつた。

美人の聞えの高い壽子夫人は、頼子夫人と共に社交界に輝く明星の一ツであつた。若し二人が全然他人關係にあつたとすれば、それはきつと白眼を剝合ふ敵手同士であつたに違ひないが、壽子が姉の如く頼子を立てて居り、その下風に立つて居るため、何の風波もなく、二人の關係はいつもほんとの姉妹のやうな温かさと圓滑さを保つて居たのである。のみならず、壽子は聰明であり、同時にまた策士——女で策士といふのも如何であるとすれば、假に陰謀家といふ言葉を用ゐてもいゝ。それほど強い意味ではないにしても、兎に角策のある女で、頼子夫人を社交的にヨリ多く輝かせるためにも、さまざまの手段を講じ、それが着々成功するところから、頼子の信頼を一身に集め、從つてまた財政的援助を、頼子から受ける機會も、ますます多きを加へつゝあるのであつた。

併し壽子夫人はまる三年前、東京の社交界を去つたまゝ今日に及んだので、彼女が再びその美しい姿を見せたのは、最近一週間の前に過ぎなかつた。壽子が三年前東京を去つたのは、當時白耳義大使に任用された良人と共に、そのころ女子學習院を出たばかりの愛孃芙蓉子を伴つて、ブラッセルに赴いたためであつた。

壽子が今度孃を連れて歸つて來たのは、たゞ一時の歸省で、一ケ月の後には再び白耳義に歸る豫定なのであるが、こゝに歸朝早々の壽子夫人に取つて耳寄の吉報の持上つた事は、今度佛蘭西駐在の日本大使が、近々米國に轉任する事となるため、その後任に山路子爵と、伊太利駐在のS大使とが、候補者として擬せられて居るとの報道であつた。その報道が傳はると共に、壽子夫人が是非とも良人を佛蘭西大使に推薦すべき影の運動に取りかゝつた事はいふまでもなく、一方頼子夫人がその援助のために最大の努力を試みつゝある事も、想像に難くあるまい。そしてそれには別に或大きな理由の加はつて居る事も、素よりだつた。

頼子が壽子の娘芙蓉子を、信重の妻として擇ぶ事としたまでには、二人の夫人の間に完全な了解のあつた事はいふまでもない。それは最初には壽子の希望であり、頼子の意志がそのために動いたやうな形を取つて居るが、併し頼子の意中にも、初めから芙蓉子があつたので、つまり信重と芙蓉子を結びつける考は、期せずして二人の女親達の肚にあつたと云つてよい。その上芙蓉子の胸に、信重に對する戀心の兆して居た事は、二人の母同士の話をまとめる上に好都合だつた。併しそれは昨日今日にあつた話ではなくて、芙蓉子が學習院を出たばかりの時だつた。併しその話に信重の父も、芙蓉子の父も與かつては居ない。たゞ二人の女だけの胸に祕められて居たに止まるので、素より信重もそれについて、何等知るところはなかつたのだ。

二人の母親達がこの話を表向にしようとして居る中、當時大學を出て間のなかつた信重は、俄かに支那公使館に行く話が纏まつて、慌しく支那へ出かけ、一方芙蓉子の父は同時ごろ白耳義大使として妻子を引連れ、赴任する事とな

つたので、話はそのまゝに寢せられて、今日に及んだ次第なのであつた。

親達の關係が關係なので、信重と芙蓉子は、幼いころから、互ひに相知る仲であつた。併し二人とも物心がついてからは、あまり度々逢つては居なかつた。大學生活の信重と、學習院生活の芙蓉子は、ほんの時たま顏を合はせる位で、信重は女學生姿の、そのころ運動のため、よく日焦けして居た快濶な芙蓉子を知つて居るだけであり、その後日本で顏を合はせる機會は全くなかつたので、女になつた芙蓉子を、信重は殆んど知らずに居たと云つてよかつた。併し二人とも幼い時から、互ひにいゝ感じを持合つて居たので、その後も絕えず顏を合はせて居たとしたら、信重の方でも或は芙蓉子と戀に落ちたかも知れないのだつた。

いや、殆んど戀に落ちかけた事があるといふ事實さへあるのだ。而もそれは最近の事で、但し日本ではなくて、白耳義であつた。昨年歐羅巴の漫遊中、信重はブラッセルで一週間過したのだつたが、この間大使館のお客となつて居たので、毎日芙蓉子と顏を合はしもすれば、一緒に芝居も見物し、大使館に行はれたレセプションには芙蓉子とダンスも共にしたのだつた。

そのブラッセル滯在は、彼に取つて懷かしい思出の一ツであるに拘はらず、彼が壽子夫人のために、切に滯在を引留められながらも、急遽振切つて、ブラッセルを去つたのは、そのころに瑞西で友人と逢ふ約束のあつたのと、何かしら芙蓉子に對して、戀愛を感じさうになつて來たため、なぜといふ理由もなしに、それを恐れて避けるためであつたのである。

信重が伊太利でわが惠美子を發見したのは、無論それより後であつた。そのころになると、芙蓉子の事などは、最早完全に忘れて居たので、要するに芙蓉子は彼に取つては、目の前を心地よく橫ぎり過ぎた銀幕の一影像たるに過ぎないのであつた。

が、もしそこに惠美子といふものが表はれなかつたとしたら、二人の母親たちの意圖のまゝに、信重と芙蓉子の緣談は、何の障害もなく進行したに違ひないのだ。賴子夫人に取つては、さう思つて見るだけでも、どれほど心外であるかは察せられ、惠美子を目の敵のやうに取扱つた心持も、容易に了解される。

どんな手段を取つても、あの子はきつとこの女から奪ひ返して見せる――それには惠美子を見送つた時の、賴子夫人の決意であつた。

この決意を實行すべく、そして何等かの對策を講ずべく、その智慧を借りに訪れたのが、壽子夫人の許なのである。

壽子は暫時の歸省なので、目黑にある里方の家に逗留して居るのである。今朝電話があつて、待受けて居たので、壽子が賴子を喜び迎へた事はいふまでもない。壽子夫人に取つては肝腎の良人の問題もあれば、娘の問題もあつて、なか〳〵呑氣にして居られぬ歸省なのであつた。

壽子は自ら出迎へて、賴子を日本座敷へ導き入れた。二人の最初の話題は、山路子爵の榮轉運動のそれだつた。賴子は既に外務大臣夫人の了解を得た事、良人の伯爵はまた外務大臣から、既に或程度の言質を得たまでに、極力運動して居る事などを話し、明日はまた總理大臣夫人を、二人で訪問する打合せなどをしたのであつた。

賴子がそんなにまでして、山路子爵の榮轉に力瘤を入れて居るのは、一ツにはそれが自分達のために好都合を齎すためである事いふまでもない。それは信重を佛蘭西大使館勤務にしようといふ下拵へのためで、壽子もそれを了

解して居るのである。信重を惠美子から引離して、佛國へやらうといふ事に、彼女等の計畫の基調があつた。いふまでもなく、賴子は信重と惠美子の一條を、壽子にだけは、打明けて居るのである。

榮轉運動の話の一わたり濟んだところへ、茶を入れて芙蓉子が挨拶に出て來た。

芙蓉子は二十三といふ年の割には大人びて見えるのは、體格のいゝためもあらう。五尺二三寸といふ日本の女にしては大分高い方で、太つて居る方ではないが、肉がしまつて健康にはちきれさうな血色をして居る。女子學習院時代には運動のチャンピォンだつたので、取分けランニングでは彼女に及ぶものはなかつた。テニスや水泳などでも、決して人には讓らなかつた。

競爭心の非常に強い女で、何でも人に勝たなければ承知が出來なかつた。遊戲でも運動でも、そこに競爭といふ事さへあれば、どんな競爭にも加はつた。クラスの成績もわるくなく、その上器量は若い時評判の美人だつたといふ母親に似て、母親の若い時には及ばないまでも、並すぐれた美人であり、學習院時代の評判は大したもので、男學生等に騷がれた、名實共に掛値なしの才媛であつたのである。

女學生時代にはちつともお化粧などをしなかつたのが、學校も出た上、外國の空氣も吸ひ、歐羅巴の小巴里として知らるゝブラッセルの社交界に花と歌はれて、すつかり磨きあげて來た彼女は、女學生時代とは見違へるばかり、現代の若い男の崇拜の的となるに相應しい輝かしい女になつて歸つて來たのである。

それは全く信重の配偶者として、未來の伯爵夫人として、十二分の資格と品位を備へた女だと云つて差支ない。美しい女の好きな賴子夫人が、芙蓉子をわが娘ほどに可愛がり出したに無理はなかつた。數年來自分の胸に大事に育んで來た計畫が、曲馬團の娘上りのやうな女のために、こな〳〵に粉碎されて了ふのかと思ふと、惠美子が憎くて憎くてたまらず、それだけにまた如何なる方法を講じても、惠美子をわが子から引離さなければ措かないと、心に誓ふのも、芙蓉子愛しさのためだつた。

賴子は今茶を入れて來た芙蓉子を融けるやうな眼で見ると、

『芙蓉さん、今日は日本服ね。それがまたどんなにあなたに似合ふでせう。』

芙蓉子はお召の衣裳に、華やかな色彩の帶を、胸高に結んで居たのである。髮はウェーブして低く後で束ねて居る。くつきりと色が白く、どちらかと云へば丸顔の、頭の方でこけて居るチャーミングな顔立で、現代式とも云へよう。鼻は一寸中低になつて居るが、決して惡い形といふのではなく、人に依つては却つて好まれる形である。眼に勝氣なところは見えるが、フランクな表情が、顔に浮んで見えるのは、少女の純な心がまだ失はれて居ないためで、奧の知れないやうに見える母親の顔立とは、甚だ違つた對照をなして居る。

芙蓉子は初々しく笑ふと、蕾のやうな口元に美しく並んだ小さな齒を見せて、

『いゝえ、私にはちつとも似合ひませんの。女學生時代から引きつゞき、洋裝ばかりで居たもんですから、どうしても巧く着こなせませんのよ。今朝もさん〴〵母にお小言を戴いたところでございますわ。』

『あなたはほんとにお小さい時から日本服がお嫌ひの方でしたね。でもこの節彼地では日本の服裝が禮讚されるんぢやアございませんの。振袖なども時に召す事があるでせう。』

『えゝ、レセプションの時などに時々……でも大抵は洋裝で通す事にして居りますの。その方がどんなに氣樂か知れませんから……。』

『あなた、その坐りやうは何なの？』
母にたしなめられると、美しく笑つて、
『おほゝゝ、小母様、歸つて來てからは、毎日母にお小言の云はれ通しでございますのよ。』
『それはお母様が無理ですわね。彼方の作法と、此方の作法とは、全く違ふのですもの。』
さう云ひながら頼子はしみ／″＼と芙蓉子の無邪氣な、可愛い姿を見守るのだつた。どんな若ものだつて、芙蓉子に不足の云ひどころはあるまいと考へながら、昨日不意に尋ねて來た、曲馬團の娘、を思ひ浮べた。お伽噺の女王のやうなその女の姿は、まざ／＼と目の前にある。それは芙蓉子がどんなに美しいと云つても、チャーミングだと云つても、惠美子にはやつぱり叶はない。如何に贔屓眼に見ようとしても、飛離れて美しくもあれば、全體としての驚くべき魅力を持つて居る惠美子を凌ぐほどの女は、まづ見渡したところ、どこにもあるものでないと思ふと、いよ／＼惠美子の輝くばかりの美しさが呪はれた。が、頼子は芙蓉子の持つ純眞さ、その處女性、完全な教育と修養、惠まれた環境、閨閥の光、そんなものの貴さは、到底女優上りの如何はしい女などの比べものにならないものだと、固いきめをして、自ら欺かうとするのであつた。
一しきり芙蓉子を中心とした談話のかはされた後、芙蓉子は二人の母親達の間に内談のある事を察して、席を辭し去つた。

## 密　談

頼子夫人は立去り行く芙蓉子の、すんなりした後姿を目送した上で、壽子夫人に向ひ、
『ほんとにいゝ恰好でいらつしやいます事、何だかあちらへいらつしつてから、お脊もお伸びになつたやうでございますね。』
『伸びたのでございませうね、たゞのつぽうで、ちつとも目端が利きませんから困るんですの。』
『そんな事はございませんわ、無邪氣ではいらつしやるけれども、ハキ／＼していらつしやいますわ。見るから朗らかな、そしてあんなにお美しくおなりですもの、さぞあちらでは大使令嬢の評判が高まつて居る事でございませうね。』
娘を賞められる事は、それが單なるお世辭であつても、親の身に取つて、決して嬉しく響かない筈はなかつた。
『そんな事はございませんわ。それは隨分あちらこちらから招待の雨が降りますけれども、日本と違つて、少しでも地位のある若い娘は、慣習でちやほやされるといふだけでございますわ。』
『やつぱりそれにはお美しくなければねえ。芙蓉子さんは社交だつてお嫁ひぢやアないでせうね。』
『幸ひと嫁ひな方ぢやアないもんですから、いい氣になつて、今ぢやアあちらの生活の方を喜んで居るやうでございます。』
『結構ですわ。外交官夫人にはお誂向でいらつしやいますわ。だからどんな事をしても私の方に頂かなければなりません。私が頂くと申したら、きつと頂きますから……。』
『でもいくら奥様でも、信重さんがあなたのお心のまゝにならない限り……。』
『いゝえ、信重はきつと私の自由にしてお目にかけます。それはあなたにも手傳つて頂かなければならない事ですけども……。』
『それはどんなお手傳ひでもいたしますが、何だか心配でございますわ。それはさうと例のお話の方は、どういふ事になつて居るんでございませうか。何かお耳新らしくお聞かせ下さる事でも……？』

『えゝ、ありますわ、實はその事もあつて、お尋ねしたのですが……その惠美子といふ女が、昨日全く意外に、私を尋ねて來たんでございますよ。』
『あら！』と、驚きながら『一人でございますの、それとも信重さんがお連れになつて？』
『それが一人ですのよ。信重がよこしたやうにも思はれませんし、勝手に一人で出て來たものらしうございますわ。』
『まア！』と、呆れたやうに、『隨分大膽でございますわね。どういふ考でお尋ねしたのでございませう。多分あなたに認めて頂きたいためだとは存じますが……。でも隨分大膽ですわ。どんな女でございました。美しい事は美しいのでせうね。』
『えゝ、それは美しい事は隨分美しいのです。そして全く蠱惑的な女ですから、男はいつもああいふ女に魅いられるのだと思ひますわ。』
壽子は多少の嫉妬を感じながら、嘲りの笑を浮べて、
『つまり外國の多くの女優に見るやうな妖婦型の女なのでございませうね。』
『えゝ〳〵、それはもう想像して居た通り――。』
と、賴子夫人はなるべく壽子にさう思ひこませる方が得策と考へて、『大變しをらしい初心な女に見せかけようとして居ますけれども、私の眼にはやつぱり女優としか見えませんわ。それは衣裳や何かは巴里好みの、なか〳〵凝つて居ましてね、お金もかけて居るらしく、その點では隨分シックな、エレギャントな女として通るでせうがね、その凝つた隙のない姿や美しさを見せて、私を惹きつけようとして來たに違ひありませんの。』
『まアね。』と壽子はいよ〳〵嫉妬を感じて、『それでどういふ事をあなたに申しましたのでございます。』
『つまりどんな女にでも化けて見せる事の出來る商賣柄、初心なしをらしい女に見せかけて、芝居を打ちに來たのですわ。云ひ廻しなどもなかなか上手に、二人の幸福のため、結婚を認めてくれと懇願するのですが、私が膠もなく刎ねつけたところから、仕舞には私の足元に身を投伏して泣いたりなぞしましてね。もしそれがお芝居だといふ事が見え透いて居なかつたら、きつと動かされたに違ひないほど仕草が巧妙なんですの。何しろ爵位と財産と二途をかけて、すつかり信重を丸めて了つて來て居るんですから、仕にくうございますわ。それは丸められて結婚までして來た信重も惡いには極つてますから、こちらの落度も認めて、望み通りのお金をやるから、伊太利へ歸るがよからうと說諭して見たんですけれども、お金などは死んでも受取らないと申しましてね、何しろ伊太利で結婚して來たといふ强味があるものですから、どうしても斷念するとは云ひませんし、私もほんとに手古摺つて了ひました。』
『まア、さうでございますか。併し奥樣の事ですから、いづれお手際よくお捌きになつたのではございませうが、結局どうしてお歸しになりましたの。』
『私がどうしても許さないと見ると、すつかり態度を變へて了つたのですわ、それなら飽くまでも私を敵にして鬪ふ、來年になれば日本の法律の下に、改めて信重と結婚して見せる、信重は自分のものだ、母親の手には決して歸らないと、それは隨分私を侮辱した言葉を用ゐましてね……。』
『まア！　憎らしい。よつぽどしたゝかものなのでございますね。それでどう遊ばしました。』
『私もつい相手になつて了つて、來年までにはきつと信重をお前の手から引離して見せる、最後の勝利者は私だと云つてやりますと、な

かなか負けては居ませんで、私を自分の足下に跪かせる日が、きつと來るから、覺えて居るがいゝなどと、そんな憎まれ口を申して引取つて行つたのですよ。』

『まア、さうでございますか。隨分な女でございます事ね。さうすると、奧樣、相手はなかなか手剛さうでございますわね。』

『私もあれほどの女とは思つて居ませんでした。』

『奧樣はすつかりその惠美子とやらを敵にしてお了ひなすつたのでございますね。』

さう云つて壽子は溜息を吐いたが、この嗟嘆の言葉の中には、何か咎めるやうな調子があると、賴子は見て取つたので、

『でも私としては、さうするより外なかつたのですもの。壽子さん、あなたはそれがいけなかつたと仰しやりはなさいますまいね。』

『それは多分一度も傷けられた事のない奧樣の誇りが、初めて傷けられたのですから、その女を敵になさいました事は御尤に存じますわ。ですけれども、奧樣はいつもに似合はず、あまり正直すぎはしなかつたかと存じますが・・・。』

『と仰しやると・・・？』

『その女が氣の弱い、素直な女でもあるなれば、それで結末がついて了ひますけれども、隨分一筋繩で行かぬ女とすると、その女を敵にして了ふ事は、考へものではございますまいか。』

『あなたはさうお考へになりますの。』

『お氣に障つたら御免遊ばせ。奧樣は十分お考があつて、なすつた事でせうから、私が批評がましい事を申上げたくはございませんが・・・。』

さう云ひさして賴子の顏色を窺ふと、賴子は別に感情を害された樣子もなく、

『壽子さん、實はね、私も後で云過ぎて了つたと考へついたものですから、その善後策といふやうなものを、御相談にあがつた譯なのですわ。あんな女の一人や二人、物の數とも思つて居はしませんけれども、肝腎の信重があの女の意志のまゝに動くのだと考へると、ぢッとしては居られないものですからね。』

『奧樣、それでございますよ。ですから私の考へますには、あの女を敵とせずに、どこまでも操つて、油斷をさせて置く方が、よくはないかと存じますが・・・。』

『まつたくさうでしたわね。でも今となつては・・・。』

『いゝえ、それはどうにでも取返しはつきませう。そこには信重さんといふ結構な仲媒者がございますから・・・。』

『それであなたのお考は？』

『さうでございますね。から遊ばしたら如何でせう。信重さんをお呼びになつて、行きがかりから、つい云過ぎて了つたけれども、その惠美子さんを敵にする考は少しもない、どうかして斷念させたい一心から、あゝも云つて見ただけだといふやうな意味の事を仰しやつて、また信重さんには、來年までによく反省をしてくれるやうにと、高壓的でなく、お賴みになるやうな態度で態と仰しやるのです。そして來年になつてよく〳〵反省した上でも、信重さんがどうしても意志を飜さないといふなら、その時は成行に任せるといふお心持を、よくお見せになるのです。さうすればすぐに惠美子さんとやらに通じて、今何もあせらずとも、大丈夫來年になれば、正式に結婚が出來て、兩親の自然承認といふ結果になるのだといふ安心が、信重さん達の間に出來るだらうと思ひますわ。』

『さうした方がいゝかも知れません。私はあんまり私といふものを見せ過ぎて了ひました。』

『私は主人の巴里榮轉が事實となつた日には、

信重さんの書記官運動は必らず成功すると存じます。その場合の事をお考へ遊ばせ。それにはどうしてもその女だけを日本に留めて置く事が必要でございます。無論信重さんには、單獨で巴里に赴任なさる事を、推薦の條件とはなさいますでせうが、信重さんの意志の如何に拘はらず、假に惠美子さんとやらが、後で單獨で巴里に出かける事を、どんな力でも止める事は出來なからうと存じますわ。それは外務省の方を何とかして、旅券の下附を後れさす事は出來るかも知れませんが、絶對に下附を妨げる事は、奧樣のお力でもお難かしさうでございますね。ですから惠美子さんとやらに、安心して日本に留まつて居るやう仕向ける事が、何より必要になつてまゐりませう。また信重さんに安心して日本をお立たせするにも、一年先には一緒になれるのだからといふ信念を、十分持つて頂くやうになさいませんければ…。』

『その通りに違ひありません。』

『信重さんお一人で巴里にいらつしやるとすれば、私共はどんな手段でも取る事が出來ます。またその場合には是非とも奧樣に巴里へお越しを願はなければなりません。暫く歐羅巴も御覽にならないやうでございますから、丁度漫遊にお出かけ遊ばすのに、いゝ頃合ではございませんか。旦那樣も比較的閑散の地位にいらつしやるやうですから、半年位のお暇はお取りになる事が出來るのでございませう。尤も奧樣もその思召でいらつしやる事とは推測いたしますけれども…。』

賴子夫人の顏は輝いて、

『よく仰しやつて下さいました。私も信重がもしあちらへまゐるやうになれば、それを機會に是非後から出かける考で居たのでございます。私共は大戰後の歐羅巴を知らない田舍ものなのですからね。それはどんな事をしてもまゐらずには居られませんわ。』

『それにはその惠美子さんを、どんな事をしても日本に留めて置かなければなりません。』

『私は多寡を括り過ぎたのがいけなかつたのです。惠美子の尋ねて來る事が、前から知れて居れば、よく考へて置いて話をして見ますものを、ほんとに飛んだ失策でした。』

『いゝえ、御安心遊ばせ。お二人を引離して置く事さへ出來れば、その中きつと信重さんの迷ひをお覺しする事が出來ます。』

『是非迷ひを覺してやらなければ、松尾家の破滅になります。主人はどうかすると惠美子に引入れられさうなので、この上はあなたが賴りなのですから…。』

『巴里ではきつとお引受けいたします。』

『それはさうと、信重と惠美子の事は、芙蓉子さんに仰しやりはいたしませんわね。いづれ知れずに濟まない事だとも思ひますけれども…。』

『私からは何も申しませんけれども、芙蓉子は悟つて居るやうでございますよ。詳しい事情は何にも知る筈はありませんが、信重さんが外國から連れて來た女優上りの女と同棲していらつしやるといふ噂を、どこからか聞いて來たらしいのでございます。』

『もう世間に知れて居りますかね。』と、溜息を吐いて、『そして芙蓉子さんはその噂をお聞きになつて、どんな考になつていらつしやるでせう。』

『却つてそれがいゝ刺戟にならないとも限らないのでございますよ。あの娘は競爭ならどんな事にも興味を持つ性分ですから…。』

『でもスポーツとは違ひますからね。』

『やはり或意味でのスポーツでございますわ。歐羅巴では若い人達の間に、戀愛はスポーツとして取扱はれて居ると云つてもいゝ位、戰爭以來戀愛觀念が著しく變つて居りますからね。

たゞ芙蓉子の場合、噂を聞いていくらか悲觀して居る事は事實でございます。それで信重さんを斷念する氣持と、その反對の氣持が鬪つて居るらしく見えるんでございます。幸ひにあの娘は、女學校の窓越しに夢を見て居た理想といふものが、現實の世界とどんなに掛離れて居るかといふ事を、よく承知して居りまして、男といふものはみんなさうしたものだと、考へるやうになつて來て居るらしいんでございます。それといふのも、大戰後御承知の通り、あちらでは男の數が非常に少なくなつたところから、風俗は全く頽廢して了つて、若い男で結婚前メートレスの一人位ないものはないといふ事實に、直面して居るのですから、男に對するイリウジョンをとうに無くして了つて居るのでございます。それで結婚前の男の行爲といふものは咎める事は出來ない、たゞ結婚後にその行爲をつゞける事だけは許されないと、さう云つた歐羅巴の女達の觀念を持つて居るやうに思はれます。あちらの社交界に立雜つて居るだけ、よく男といふものの半面も見抜き、結婚と云ふ事については、日本の娘さん達よりも、ずつと自由な考を持つて居るらしく見えるんでございます。それに今度の事は、考へやうによつては、自分のために撰ばれた男を、不意に横合から取られたといふ場合なのですから、芙蓉子がそれを取戻すため、主要な役割を勤めるといふ事に、興味を持たないとは、云へない事でございますからね。』

『是非ともあなたから、さういふ風に仕向けて頂きたうございますね。』

『はい、素よりそのつもりでございますけれども、たゞどこまでも芙蓉子の自由意志を傷けないやうにして、梶を取つて行かなければなりませんので、なか〳〵大役でございます。今時の娘は親の意志で動かさうとしても、決して親の傀儡にはなりませんでございますからね。』

『それはさうですともね。併し私はあなたの巧妙なお仕向けが、きつと成功するものと信じて居ります。』

『たゞ一ツ都合のよい事は、娘が信重さんをお慕ひ申して居るといふ事でございます。それに信重さんも決してあれをお嫌ひになつていらつしやるのではないやうですから、事が運びようございます。昨年信重さんがブラッセルへお越しになつた時など、大變好都合に進みかけて、私から思ひきつて切出せばお話が纏まりさうなところまで行つて居ながら、信重さんが突然白耳義をお立ちになつて了つたものですから、どうにも纏めやうがなくなつて了つたのでございます。あの時信重さんがどういふお考だつたのか、いまだに不思議でならないんでございます。その時はまだ惠美子さんとやらを御存知になつていらつしやらない筈なのですが……。それはさうと奥樣、あの伊太利での結婚の事については、まだ調べがおつきになりませんでせうね。あれがどこまでも合法的だといふ事になりますと、事が外國だけに面倒な場合が起るかと存じますが……。』

『まだ十分ついては居ませんが、餘程略式だつたやうで、それだけに却つて不合法だといふ理由が發見されさうなんでございます。その上幸ひな事にはカトリックでない小さなお寺だつたさうで、話はどうにでもなりさうですから、都合よく運ぶだらうと思ひますよ。』

『それならほんとに好都合でございますね。奥樣、それからいよ〳〵それが合法の結婚でないとなりました場合、信重さんにお知らせになる思召でいらつしやいますか。』

『初めはそのつもりでかゝつた事なのですけれども、今日の場合却つて祕密にして置く必要があるかと存じます。』

『さう遊ばす事が必要でございませう。いつでも使へる切札として、そつとしてお置き遊ばす方がね……。』
そこへ芙蓉子がまた新らしく紅茶を入れて來たので、二人は話を止めた。

## 母と子

賴子夫人の居室で語り合つて居るのは、信重と賴子夫人とである。
『だからあなたにあやまります。私はその場の成行で、後先の考へもなく、つい云過ぎて了つたのです。私は少しも惠美子を憎んで居はしません。却つて憐れまなければならぬ女だと思つて居ます。それを憎んで居るやうに取るのは、惠美子の誤解ですよ。』
『併しお母さんはたしかに惠美子を憎んでいらつしやるんです。私にはなぜお母さんがそれほどまで惠美子を憎まなければならないのか分りません。隨分ひどい事を仰しやつたやうですが……。』
『私は個人としての惠美子を少しも憎んでは居ません。何度云つても同じ事です。たゞ惠美子の素性や階級を認める事が出來ないだけです。憎んで居るのは惠美子でなくて、その階級なので、それを惠美子は混同して居るのです。だから私は惠美子にも云つてやつたので、自分の秘書にでもなるといふなら、喜んで使つてもやり、また十分面倒も見てやるけれども、わが子の嫁には斷然出來ないとね。……併しいろ／＼の點で、私、惠美子を誤解して居たのです。結局はお金のためにあなたを誘惑して居たのだらうと考へて、お金は望みのまゝやるつもりで居たのが間違ひだつた事を、昨日初めて知りました。それでからしてあなたにも謝るのです。』
信重がだん／＼母の言葉に惹きつけられて行く事は、母子の情として止むを得ぬ事だつた。
『それではお母さんは、少なくも惠美子が金錢のために私を誘惑したのではないといふ事をお認めになつたのですね。それだけでも惠美子を諒解して下すつたのです。この上は惠美子がどんなに美しい心を持つた女であるかといふ事を、諒解して頂かなければなりません。』
『併しそれは私には問題ではありません。惠美子にも云つた通り、私は惠美子のやうな素性の女、あの階級の女を、由緒の正しい、貴い傳統を持つた松尾家に入れる事は決して出來ないと思つて居るのです。その事をハッキリ惠美子の頭へ入れて斷念させるために、その點を高調して云つた事が、私を慈悲も情もない冷酷な女と、惠美子に思ひこませたに違ひありません。私は松尾家の正しい傳統を守立てるために、どんな冷たい女になる事も厭はないのです。』
さう強い事は云つて居るけれども、母の語氣には少しも烈しいところはなかつた。
『お母さん、私は松尾家を思ふ上において、決してお母さんには劣りませんよ。只意見が違ふだけです。松尾家に入る人は階級の問題ではなく人間の問題です。お母さんのお考は全く時代錯誤なんですからね。私はお母さんがその中にきつと自分の考に訂正される日のある事を期待して居ります。』
『それは私が生れ代らなければ……。』
『お母さんが生れ代る事は、決して不可能ではありませんよ。』
『その時には惠美子をあなたの妻に許してあげます。』と、母は淋しさうに笑つた。
母がひどく機嫌を損じて居るのでもないらしい事が、信重を勇氣づけた。強い事は云つても内心自分の非を認めて居るのだ、母を動かす事は時日の問題だ――さう彼は考へるのだ。
『惠美子の階級以外には、お母さんが許して下さらない理由はないのですか。』

『ありません。惠美子が私達の階級の女ならば、すぐ許してあげるのです。』

信重は今の時節に馬鹿々々しいと思つても仕方がなかつた。

『お母さんは私のために、別に擇んで居る女があるので、それで惠美子を許して下さらぬのではありませんか。』

『さういふものはありません。それは話を持込んで來るものはちよい／＼あります。併し私の氣に入つたものはないのです。』

『それは幸ひです。併し私は惠美子をお認めになつても、ならなくても、法定の年齡が來れば、斷然日本の法律の下で惠美子と結婚します。そのために萬一爵位や財產を失ふ場合が生じても、厭はない覺悟で居るのです。』

賴子夫人は悲しげな樣子を見せて、

『私は飽くまでもあなたに反省を求めます。その上では最早あなたを束縛する力は私にはありません。』

『私はたとひそれがお母さんの意志に反した結婚であつても、いつかお母さんがほんとに惠美子を愛して下さる日がある事を信じて居ります。』

賴子はたゞ頼りなささうに頭を振つたが、何とも云はなかつた。母の心が大分折れて來て居る事は明らかだと、信重は考へた。

二人の間に暫く沈默がつゞいた後、

『信重、あなたの歸つて來た事は、もう世間に知れて居るのです。歸つて來ながら、邸に歸つて居ないといふ事が、惡い噂の種になつて居るので、私はどれほど心を苦しめて居るか知れないのです。あなただけ邸に歸つて貰ふ事は出來ないのですか。この母が折入つての賴みです。』

『それは私としても歸りたいのは山々です。せめてお母さんが一年後には私達の結婚を公然認めると仰しやつて下されば、邸へも歸りませう。それ以外に御相談の途はありません。』

『私からは一年後に許すといふ事は云へません。』

『默契して下さる事も出來ないのですね。』

母は默つて頭だけを振つた。また沈默が二人の間に落ちて、暫くしてから、母が溜息の後に、

『あなたの事が社交界のスキャンダルになるといふ事は、私に全く堪へられない苦痛です。私は今ではあなたが日本へ歸つて來た事を怨んで居ます。』

『それなら私はいつでも外國へ行きます。』

『私もそれを考へて居るのです。いつそ外國へ行つて貰つた方が、いやな噂などに煩はされずに濟む譯ですからね。お父さんも外國に地位を作つてやつたらと仰しやつていらつしやるのです。』

『それは願うてもない事です。』

『併しそれには條件があります。惠美子を連れて行かぬといふ……。』

『それならば御免を被りませう。』

『でも考へて見る餘地はあるでせう。一年後にあなたが日本へ歸つて來る事は、あなたの自由です。一方に惠美子の自由を束縛する力もどこにもないのです。たゞあなたたちの德義に訴へる以外には……。』

母の言葉には言外に意味がありさうだつた。

『外國に地位を作つてやると仰しやるのは、何か見込があるのですか。』

『無い事はありません。今度佛蘭西大使のＫさんが、米國に轉任する筈なので、その後任候補者の一人に、白耳義の山路さんが擬せられておいでなのです。それで私達も是非山路さんを榮轉さしてあげたいと奔走中なのですが、多分成功するだらうと思ふのです。山路さんが佛蘭西の大使になれば、その運動に力を入れてあげた

私達がお觀みする以上、あなたを書記官に取つていたゞく事は、決して難かしい事ではないと思ひます。それは外務省の方も無論運動しなければならない事ではあるけれども・・・。』
　それを聞くと、豫て巴里が目的地であつた信重の眼は、われにもあらず輝いて、
『山路さんが巴里へ榮轉するんですか、それは非常に結構ですね。』
『だから私達が口を利いてあげれば、あなたを書記官にしてあげる事も出來るのです。私達がその運動をしてあげるかあげないかは、あなたの心一ツにある事ですから、よく考へて御覽なさいといふのです。』
『私が惠美子を日本へ置いて行く條件でなければ、運動はして下さらないと仰しやるのですね。』
『私は惠美子の名を出したくはありません。たゞあなたが單獨で巴里に立ち、單獨で巴里に住むといふ條件が、私達としては必要なのです。惠美子の事を問題にすれば事が面倒になります。强ひてその問題に觸れる必要がどこにあるのです。』
　母のいふ事は分つたやうで分らない謎の樣な性質を帶びて居た。

　巴里大使館勤務といふ事がひどく信重を誘惑した事は爭へない。巴里に行きさへすれば自分の行動は自由である。すぐに惠美子を巴里に呼びよせる事は遠慮するにしても、結局は呼びよせる事も自由であり、また惠美子が勝手に巴里に來て了へば、誰もどうする事も出來ない筈だ。巴里ならば誰に遠慮もなく、二人の幸福な生活が始められる。當分は別れるにしても、自分が巴里に住む事になればどれほど都合がいいかも知れない。これは忍べるだけ忍んで書記官運動をして貰つた方がいゝ、惠美子もそれを喜ぶだらう。・・・
『それならお母さん、私からも惠美子の問題に觸れずに、書記官の運動をして頂く事にしませう。無論只今の條件には異存はありません。』
『さうですか。それで私も滿足です。それならお父さんとも〱運動してあげる事にするが、それも山路さんの榮轉が極つてからです。尤も山路さんの榮轉運動が奏效しない場合にも、あなたの方の運動はしてあげます。それからあなたはまだ御存知あるまいが、此間から山路さんの奥さんが歸省しておいでなのです。』
『山路の奥さんが？』と、それは初耳だつた。
『亡くなつたお父さんの七回忌なので、墓參かた〱歸られたのです。あなたは去年御厄介になつて居るのだから、一度お禮にお尋ねしてあげなければいけません。』
『お尋ねいたしませう、今日の場合少し閾が高いですけれども・・・。奥さん一人でお歸りなのですか。』
『芙蓉子さんも一緒です。』と、賴子は極めてあつさりと無關心の態度で云つた。
『あ、芙蓉子さんも一緒ですか。』
　信重はさう聞くと、何だか芙蓉子と顏を合はしたくないので、子爵夫人訪問に氣がさした。
　賴子は何氣ないやうに、
『芙蓉子さんも大變美しくなつて、そしてほんとに朗らかな、屈託のない、誰にも愛されさうないゝ娘さんにおなりです事ね。あれなら家の嫁にしたつて恥かしくない人ですが、仕方がありません。どこかいゝところへお世話してあげたいと思つて居るのです。あなたのお友達にでもいゝ人はありませんかねえ。』
『それはない事もないでせう。芙蓉子さんの望手ならいくらでもありますよ。』
『私もあれこれと考へて居るのですが、やつぱり長し短しで、佛蘭西へお立ちまでに、せめて約束なりとと思つて探してあげて居るのです。

併し肝腎の芙蓉子さんが、まだ二三年は結婚しないと云つてなさるさうでね……。』

『早く見つけてあげるといゝですな。私も心がけて見ませう。』

『その中にお二人をお呼びして晩餐を差上げるお話をしてあるのですが、その折にはあなたにも來て貰ふ事にします。誰か若い男の方をお連れして來てもいゝのです。』

『さア、誰か有りますかなア……。』

『あなたは來てくれるでせう。』

『是非都合をつけませう。』

## 試演の夜

壽子の良人山路子爵の佛國大使榮轉は、いよいよ事實となつて新聞に發表された。それは松尾伯爵夫婦の運動が效を奏したのか否かは知らぬが、壽子夫人に取つて見れば、伯爵夫妻の運動がなければ、これほど容易に實現はしなかつたに違ひないと信じられるので、いよ〱頼子夫人に對する恩を感ずる結果となつたに不思議はない。また頼子夫人の方では、これで自分の計畫が一歩を進め、實行期に入つたものとして、此上もない滿足を感じた事、これまた云ふまでもない。

良人の榮轉が極つたについて、壽子も至急歐羅巴に歸らなければならなくなり、豫定を早めて日本を立去る事となつた。信重の書記官任用の事は、壽子が彼地へ行つた上、良人を動かし、東京と巴里と相呼應して運動する手筈に極めたので、その方は大して難かしい問題でなく實現されるものと信ぜられるのだつた。

かくて壽子は芙蓉子を伴ひ、程なく郵船の航路で佛蘭西へ立つたので、その見送人の中に信重のあつた事は寧ろ當然だつた。信重と芙蓉子は松尾邸の晩餐の席上と、母の勸めで信重が壽子方を訪問した際、逢つただけに過ぎなかつたので、何等二人の關係に、新らしい形勢の何一ツ發展する餘地はなかつた。たゞ信重の胸には芙蓉子に對して、妹に對するやうな好感が植ゑつけられたといふに過ぎなかつた。芙蓉子は勉めて淡泊な態度を取つて居たし、頼子も壽子も、まだ二人の間に立つて、何等の小細工を弄するやうな事はしなかつたのである。從つて信重は母や壽子が芙蓉子を自分と結びつけようとする隱謀を巡らして居ようとは、夢にも悟る事が出來なかつたのである。

さて母に對する信重の感情が次第に緩和されて行つた事は、別に怪しむまでもない事だつた。彼は考へるのだ——惠美子が母に逢つた事は、最惡の結果を持來したやうには見えたけれども、それは表面だけの事で、内面的には惠美子の勝利と云へぬ事もないのだ。母の心の中にはその誤つた理想と現實との間に烈しい闘爭があるのだ。鼻柱の強い、物に屈する事を恥辱と考へて居る母は、自分の間違つた主義のために、自分の良心を痲痺させ、壓服させようとして居るので、良心の聲が高まれば高まるほど、それを押へつけようとして、極度に自分を亢奮させて居るのだ。惠美子を見た時、たゞ階級と素性とを除いては、自分の理想そのまゝの女なので、どんな手段を取つても、この女を排斥しなければ、自分の主義が破産すると考へたに違ひない、だから惠美子のあらゆる美點に、強ひて盲目となるため、あらん限り輕侮の態度を取つて、惠美子に對したのだ。そこに自分等の當面しつゝある難關があるのだけれども、又母の大きな弱點もそこにあるのだから、これを巧みにリードして、形勢を逆轉する望みが、却つてあるとも云へる譯だ。現に母の心が折れて來て居る事は、自分に對する態度や言葉の端で知れる。母の抱いて居る主義が時代錯誤である

事を母は明らかに感じ出して居るのだ、けれどもわが子や惠美子の手前、今すぐ折れる事は、その誇りが許さない。そこでわが子の反省を求めるといふ、一種の逃避手段に出て來て居るのだ、今すぐ折れては體面に關するけれども、一年先なら止むを得ない、と、さうした氣持が動き出して居る事は、母の言葉の節々から歸納する事が出來る。惠美子や自分達はたしかに勝利の第一歩に踏込みつゝあるのだと云つてもよい。また今度母が自分を佛蘭西の大使館詰にしようとして眞劍に努力して居てくれるのも、單に母親としての心づかひといふだけではなく、その心を裁ちわつて見れば、自分達の居る膝元では、今更許す事も出來ないし、さりとてこの先勝手に結婚されては、世間體がいよ／＼面白くないが、外國ならば大目に見る事も出來るし、若いもの同士がそこで勝手な生活を營むとしても、世間體に影響する事もなくて濟む、當然避ける事の出來ない結果であるなら、自分達を外國へ追ひやる事が、親達の不名譽の程度を輕くする最上の手段だと、さういふ氣持も動いて居るに違ひないと推測するのだつた。

信重の心理がかうした推移を辿るであらう事は、賴子の思ふ壺だつたに違ひない。わが子を通じて、惠美子を欺く事も出來るであらう事を期待した賴子は、たしかに役者が一枚上だつた。事實惠美子の賴子に對する怨みの念も、信重を通じて次第に緩和されて行つた。良人の母である限り、もし折れて出るならば、いつまでも根に持つやうな考は、良人の爲に捨てなければならないと、惠美子は道理づけるのだつた。そして彼女は不安の中にも幸福の夢を辿る事が出來た。

二人には差當り幸福の日がつゞいた。二人の生活は、謂はゞ日蔭の生活であり、愛の隱れ家に過ぎなかつたから、なるべく世間との交渉を避けては居たが、それでも信重の親友の二三は時々この隱れ家を訪問し、惠美子とも親しく語り合ふやうになつた。惠美子は素より女の友達のある筈もなく、また作らうともせずに、たゞ未來の伯爵夫人としての修養に勉めて居るのだつた。それは家庭教師について、今まで外國に居て學ぶ機會のなかつた邦語の讀書と習字に沒頭し、傍ら家庭の主婦としての料理を研究する事などであつた。

が、さうかうする中、幸か不幸か、彼女の生活に一轉機を生む機會が生じた。それは伊太利で彼女が師事して居た、ミラノ音樂學校の聲樂科の教授であつたロジニ・コシモ氏が東京の音樂學校に聘せられて、來朝した事に端を發する。

惠美子はロジニの愛弟子であつたので、彼の來朝を知つた事は、思ひ設けぬ驚きであり、福音でもあつた。また彼にしても最初の訪問者として惠美子を見出した事に、大きな喜びを味つた事はいふまでもない。

ロジニ氏はテノールの歌手として、伊太利で有名で、最近聲が落ちたため、一時の盛名は失はれたが、それでもまだ押しも押されもせぬ立派な聲樂家であつた。年は四十五六で、獨身生活をつゞけて居るのだが、伊太利人の容貌に多く見かける栗色の髮と眼を持つた、日本人に似た顏立の、丈も日本人と餘り變らぬ、一見親しみ易い容貌の持主であるので、音樂學校の生徒等にも、初めから好感を持つて迎へられたのである。

自然惠美子と彼との間には、再び師弟の關係が新たにされた。彼女は毎週二回づつ通つて、教を受ける事となり、日本では殆んど失望して居た練習の機會の生じた事に、多大の滿足を感ずるのであつた。

すべてに理解のある信重が、それを喜んだ事

はいふまでもない。かくて惠美子が音樂のプロフェッサーと家庭教師とによつて日課を與へられ、今後單調の生活に襲はれる懸念もなく、修養に進はるゝ身の上となつた事は、喜ぶべき生活の變化と云はなければならなかつた。

その中ロジニ氏の最初の試演が帝國ホテルで行はれる事となつた。惠美子は師の懇望を否みかね、また彼女としても一度日本の聽衆に呼びかけても見たく、信重も喜んで同意を與へたところから、松尾夫人の名を遠慮し、伊太利で彼女が用ゐて居たマルチニ・エミ子の名で助演する事となつたのである。

さてその日は來た。聽衆は招待を受けたセレクトされた人達のことであつたが、此夜彼女はヴェルデの歌劇トラヴキアタの中で、最もパセチックなものとして著名な、第四場のヴキオレッタの詠唱を、伊太利語で見事に歌ひのけたのである。これは伊太利でも屢々手にかけた十八番もので、コロラチュア・ソプラノとしての彼女の技倆を、十二分に發揮する性質のものであつた。この夜の出來榮について、批評的に云へば、彼女の技巧にはなほ研究の餘地があり、[illegible]につて聲量の進步に期待される部分が、なほ多い事を思はせたとしても、殆んど驚嘆に値するほど綽々たる餘裕を見せ、よく場馴れて居て、それで誇張的な、衒奇的な表情が少しもなく、如何にも上品な、藝術的の詩味を多分に見せ、質量共に勝れた特長のある事を示して遺憾がなかつた。彼女自身のレコードとしても、最も樂々と歌へたもので、從つて舞臺一杯といふ感じを起させ、それがどんなに效果的であつたかは、滿堂の聽衆を、夢現的な恍惚境に醉はせて了つたのでも知れる。

全く此夜における彼女の出現は、それが豫期されなかつた事だけに、聽衆に取つての一大驚異で、アンコールまたアンコールがつゞき、二度までも小さな歌劇の一節や、伊太利民謠の二三をお添へものにしなければならなかつたほどの歡迎振は、師のロジニを凌ぐものがあつた。それは彼女の藝術の力による事は無論であるけれども、聽衆の熱狂をかくまで引上げたのは、彼女の美貌と、そのチャーミングなスタイルとにあつた事も爭へなかつた。

惠美子の成功を彼自身の成功の如く喜んだものに、信重と師のロジニがあつた。彼女が海鳴のやうな拍手を後にして、控室に引上げて來た時に、周圍を忘れて彼女を抱擁したのは信重だつた。彼の眼には感激の涙が溢れて居たが、それを見ると反射的に惠美子の眼も涙にうるんだ。續いて待ちかねたやうに彼女に固い握手を與へ、その手に接吻したのは師のロジニだつた。彼の優しい眼にも涙が光つて居た。惠美子が日本における最初の、そして一番大きな幸福を味つたのはこの夜であつた。

## 結婚無效の書類

自分達の生活を祕密にして居た信重に取つて、帝國ホテルの音樂會に、惠美子の出演を許した事は、全く大きな冒險であつた。併しその結果を豫期して居ない彼ではなかつた。今まで日蔭の生活を取つて居たのは、兩親の許可を得る目的のためで、親が認めてくれぬと知れた今日、自分達の關係を退引させぬものにして了ふには、いつそ世間に知らして了つた方がいゝといふやうな底意が、彼に働きかけたのである。

實際帝國ホテルの一夜は、今まで日蔭の生活者であつた惠美子を、一躍して人氣の焦點に上せて了つたのだ。それは當然の結果が來たのであり、信重の私かに豫期して居たところであつたけれども、併し翌日彼等の愛の巢を突止めた新聞記者や、婦人雜誌記者が、異常の好奇心を

もつて、訪問につめかけた事は、全く信重夫妻を面くらはせて了つた。こればかりは豫期して居なかつたので、二人は殆んど當惑そのものに直面させられたのだつた。併し彼等に逢はぬ譯には素より行かぬ、逢はなければどんな事を書立てられるかも知れないので、二人は相談の上、聲明書でも發表するやうな積りで、惠美子は伊太利で客死した日本人の遺兒であり、伊太利人マルチニ氏に養はれて居たため、その姓を名乘つてステージに立つたに過ぎない事、伊太利ではミラノ音樂學校に學び、その時からロジニ氏と師弟の關係のあつた事、信重とは伊太利で結婚して來たのだといふ事だけを、簡單に無造作に發表する事とし、女優として立つて居た事などは勿論、二人の間に大したローマンスがあるのでも何でもないやうにして、無論親達が二人を認めないため悶着中だといふやうな事は、噯にも出さない事とし、訪問者を撃退する事に打合せ、彼等に面會したのであつた。

美しいソプラノ歌手の、彗星の如き出現が、樂壇に異常な反響を與へた結果として、一時惠美子はゴシップ界の中心となつた形であつた。そして新聞記者や婦人雜誌記者の訪問が、二人を驚かしたやうに、第二の想像し得なかつた事實は、惠美子が一夜にしてファンを作つて了ひ、それ等の手紙が絶間なく舞込む事であつた。眞面目に彼女に交際を求めて來るものも少なくなかつた。その人達は樂壇に多少なりとも縁故のあるものであつたが、適當の紹介狀を持つて來るものまで追拂ふ事は出來なかつた。その中には知名の音樂家や作曲家などもあつた。

ロジニの許に通つて居る間にも、彼女の友は殖えて行つた。彼女はなるべく友を作る事を避けては居たけれども、信重がその點で惠美子の自由に任して置くために、いつも逃避ばかりはして居なかつた。外國の風習の中で育つて來た彼女は、異性の友を持つ事を、別に不謹愼な事とも考へては居なかつたのだ。

信重はこれ等の訪問者のために平穩な愛の生活を搔亂される事を迷惑とは感じながらも、惠美子に百パーセントの信頼を置いて居る彼は、そのために決して嫉妬や不安を感ずるやうな事はなかつた。その點において彼は極めて寛容であり、淡白であつたばかりか、寧ろそれを喜ばなければならないと思つた。それは妻がロジニと師弟の關係を新たにし、それを機縁にして、彼女の生活が華やかになつて行くといふ事は、いづれ自分の佛蘭西勤務が極つたとした場合、當分孤獨で殘して行かなければならない彼女が、そのため單調な生活から逃れる事の出來るであらう事は、祝福すべき事でなければならないと考へたからだ。かうした生活の轉機が來なかつたとしたら、安心して惠美子一人を淋しく殘して行く氣になれないに違ひないと思ふと、實際彼女の生活の變化に感謝していゝのだと、彼は考へるのだつた。

時は夢のやうに流れた。惠美子は斷りきれない樂壇には二三度立つ事を餘儀なくされた。その都度彼女は有名にされて行くのだつた。併し時候が盛夏に入つて居たのは幸ひで、社交界の人達は皆避暑に出かけて居るため、音樂の會合なども案外少なかつたからだ。

やがて秋口に入つた時、いよ／＼信重の佛蘭西勤務が極つた。彼は佛國大使館付三等書記官として任命されたのである。この任命までの間に、頼子夫人と壽子夫人との間に、策動の書面が屢々往復された事はいふまでもない。頼子は惠美子の名が有名になつて行く事や、ロジニの弟子となつて通ふ事や、多くのファンを作つて居る事や、異性の友に訪問される事や、あらゆる彼女の周圍に起る事を、手に取るやうに知

つて居た。そして惡意ある微笑が、絶えす彼女の口邊に上つて居た。――彼女は私かにそれを喜んで居たのである。

賴子が伊太利方面に託して置いた、信重の結婚を無效にする運動は、このごろに全く效を奏して居た。信重が只結婚の形式を具へるだけに急であつて、手續に手落のあつた事と、事柄が容易と迅速に運ぶところから、小さな新教の寺院を擇んだ事は、賴子等の乘ずるところであつた。すべてが加特力の壓迫の激しいところにあつて、その力を借りて、異教視せらるゝ新教寺院の結婚にケチをつける事は、可能性の多い事だつた。その無效を證明する法律的書類は、完全に作成されて、賴子の手に送附されて來たのである。それ等の書類が大事の切札として、賴子の手箱の底深く祕められた事はいふまでもない。信重達は何にも知らないのであつた。

賴子はまた自分達が信重の赴任した後、時機を見て巴里に出かける事は、信重に對して曖にも出さずに居た。そしていよ〳〵信重が巴里に立つといふ時に、仄めかすつもりで居るのであつた。

一方に信重が巴里に赴任する事は、惠美子に取つても望ましい事として、待設けられて居たので、信重と共に彼女がその喜びを分つた事は云ふまでもない。信重が日本を離れさへすれば、自分達の行動は誰に束縛される心配も、非難を受ける筈もないばかりか、歐羅巴では自分達の結婚が、立派に合法化されて居るのだから、誰憚らず、夫婦としての生活が營まれるのだ、たゞ信重と連立つて、巴里に行けぬ事だけは悲しい事實であるけれども、兩親に言質を與へてある以上、すぐ後を追つて行く譯にも行かぬが、それも半年の辛抱でいゝのだ。今から半年たてばそろ〳〵信重が自由の年齡にも近づくし、自分の方から、勝手に行つて了へば、信重としては申譯も立たう。そして外國の生活に入つて了へば、わざ〳〵日本へ歸つて行つて、日本の法律の下で、二重の結婚をする必要などは少しもない譯だ。日本に住めばこそ、それが必要だといふだけなのではないか。……さう考へる事によつて、良人の佛國行が待設けられ、そして彼女の心は輕くなるのであつた。

## スパイの女

信重は辭令が出ると共に、船室を豫約したが、三週間の後に出帆する郵船に、やつと席を取る事が出來た。それまでの間、彼は任意に外務省に出勤する傍ら、出發の用意に忙がしいので、ゆつくり愛の巢に落ちついて居る事も出來なかつた。さて出發もいよ〳〵三日の後に迫つたといふ日、彼は東京から歸つて來ると、樂しい晩餐を二人で取つた後、やゝ暗い顏つきをしながら語り出した。

『惠美さん、今日一番町へ寄つて來たのだが、少し厄介な話を聞かされて困つて居るんだ。』

惠美子は心配さうに、

『厄介なお話つて、どんな事ですの。』

『私が巴里へ落ちついたころを見計らつて、親達が出かけて來るといふのだよ。』

惠美子の美しい顏が曇り出した。

『巴里へですか。何しにいらつしやるんでせう。私が後から來られぬやうに、あなたを監視するためぢやないでせうか。』

「さア、まさかそんな事はあるまいがね、意味があるやうに取るのは、間違つて居ると思ふよ。父も母も大戰後の歐羅巴を丸で知らないので、前から一度行つて見たいとは云つて居た事なんだ。機會がなくつて居る中に、今度私が巴里づめとなつたので、これ幸ひと半年ばかり漫遊旁ゝ出かけるといふんでね、兎に角いづれにしても迷惑な話な事には變りはないが、と云つて

どうか止めて下さいとも云へなかつたからね、それは結構ですと云つて來たんだが、かうなると後で來られるよりは、いつそ自分と一緒に行つて貰つた方がいゝ位だつた。今更どうにもならんから仕方がないが……。』

惠美子は、それは一ツの石で二ツの鳥を打つので、漫遊も實際の目的ではあらうが、自分の渡歐を阻止する事も、目的の一ツに違ひあるまいと考へられるのだつた。そんな意地のわるい事を、いくら折れて來て居るとは云つても、やりかねない賴子である事を彼女はまだ信じて居た。賴子がまだ〳〵そんな生優しい言葉では云盡せない、自分に對する恐ろしい計畫を抱いて、所謂漫遊に出かけるものであらう事は、想像する事さへ出來なかつたのだ。

『それぢやア、私、御兩親がお歸りになるまで、どうする事も出來ませんわね。』と、苦い顔をした。

『併しあちらに、永住する譯ぢやアなし、半年間の辛抱だよ。』

『いつお立ちになるんでせう。』

『冬の季節に間に合はせると云つて居るんだから、一二ケ月の中には立つつもりで居るんだらうと思ふ。私は早く來て早く歸つて貰つた方がいゝから、船が出來次第すぐ來て下さいとは云つて來たんだが……。』

『わざとお延しになつて、丁度あなたが年齡に達するころまで、滯在なさるやうになさりやアしないでせうか。』

『氣を廻せば際限がない話だけれども、何とでも對策はあるさ。半年居ると云つたつて、巴里にばかり居る譯ぢやアないから、それまでにあんたが祕密に日本を立つて來ても、どこかに隱れて居て貰ふ事も出來るし、また私が自由の年齡に達すれば、親がついて居たところで、公然あんたを呼びよせる事も出來る。また親達がそのころまでも居るならば、親達は親達で放つて置き、私だけが日本へ歸つて來て、日本の法律の下に結婚するといふ事も一案で——それはあんたが萬一日本を立てない場合を想像しての事だが……。』

『あら、あなたもそんな事を考へていらつしつて?』と、彼女の顔色は幾分蒼くなつて、『私、何だかそれまでに日本を立てないやうな事情が、生じやしないかと、いふやうな氣がしてなりませんのよ。』

信重は笑つて、

『惠美さん、それはヒステリックな考だよ。惠美さんはどこに繫累があるんぢやアなし、そんな事情が生ずる筈はないぢやアないか。假にまたそんな場合があるとすれば、どんな障害でも排して、私は巴里から歸つて來るよ。』

『えゝ、その場合には是非さうして頂かなければなりませんわ。でもあなたは役目を持つていらつしやるから、勝手にお歸りになる事が出來なかないでせうか。』

『なに、大丈夫さ。年齡に達するのは七月だが、七月から八月へかけて、夏になれば外交官はもう用事がなくなつて、みんな避暑に出かけるのだよ。だから結婚のために休暇を取る位何でもないさ。』

『ほんとに大丈夫でせうねえ……。』

『私の歸つて來る事は大丈夫だが、——併しそんな事になると、それまでの七八ケ月の間、惠美さんを一人で日本へ殘して置くのが氣がかりでならないがね。親類と云つて、何かの時の役には立ちさうもない長崎の伯母さんがあるきりだし、外に誰一人信頼する人もないんだからね、この家に婆や一人と小女だけで、それでよく辛抱が出來るかねえ。』

『それはやつて行きますわ。婆やさんが何もかもやつてくれますから、家の事は心配ありませ

んわ。』
『それは婆やはずつと居てくれる筈にはなつて居るが、正直もので氣はいゝんだけれども、聾で不自由なのが缺點さ。あの小女と來たら、丸で山出しで、年もあんまりいかな過ぎるから、あれを出して、是非一人若い、氣の利いた小間使を見つけてあげたいと思つて居ながら、とうとう見つからなかつたが、仕方がないから、後で見つけて貰ふとしようよ。』
『えゝ、さうしますわ。でもひよつとしたら、お立ちまでに出來るかも知れませんのよ。今朝八百屋のお神さんが來て、いゝ女中があると云つての話に、何でも一度嫁入つて、小兒まであつたのが、ひどく虐待されたとかで、その小兒も死んで了つて、出されて來たところから、もう一生良人は持たないと云つて居る女ださうですが、氣が利いて正直ものだからといふ事なので、年は二十四五といふ事ですけれども、結婚するまでは東京のある華族の邸に小間使をして居た女で、行儀作法の心得もあるし、全く惜しいやうに思ふからといふものですから、兎に角連れて來て見るやうにと云つて置いたのですわ。午後連れて來ると云つて歸つて、とうとう來ないんですけれども、多分明日は連れて來るだらうと思ひますの。』
『年が少し行き過ぎてやしないかね。十八九のところがいゝと思ふのだが……。』
『えゝ、私も十八九の娘が使ひいゝとは思ひますけれども、逢つて見ての上の事にしませうよ。』
『逢つて感じのいゝ女だつたら、それもよからう。』
さう輕く云つて信重は話を轉じ、
『何にしてもロジニさんが日本へ來てくれたのは好都合だつたね。あんたはお蔭で失望して居た練習を出來るし、音樂會へも顏を出す機會が出來て、友達も見つかるし、あまり退屈せずに過せさうだから、私はその點は安心して、立てるといふものだよ。』
『えゝ、いろ〳〵修養の日課が出來ましたから、退屈はしなくて濟むでせうけれども、あなたがお留守になつて、どんなに淋しいかと思ふと、何だか悲しくなりますわ……』
『まア、せい〴〵陽氣に暮して貰ふ事だ。』
『でもお留守の間、私はなるべく靜かな生活を取りたいと思ひますわ。そのためにいろ〳〵の人に出入されるのはいやですから……。』
『それもさうだね、惠美さんが一人ぼつちになつたと知れば、それこそファンが無遠慮に押しかけて來るかも知れないからね。』と、彼は笑つた。
丁度そこへ婆やが顏を出して、八百屋の神さんが女中を連れて來たと告げた。
『まア、今ごろ連れて來て……。では兎も角逢つて來て見ますわ。』
惠美子はさう云捨てて、勝手元に出かけて見ると、日の中は亭主と小僧が留守になつたところから、手を離す事が出來ず、不都合と知りつつ夜分に連つて來たと云譯をしながら、八百屋の女房の連れて來た女といふのは、子まで産んで居るといふに、少し小ぶりなのでまだ娘々した、一寸見には二十二三の處女と見ゆる、目鼻立も整つた、服裝もきちんとして、なるほど華族の邸に小間使でもして居たらしい樣子の、そしてどこかしつかりもののらしい感じのする女だつた。
惠美子はこの女なら、置いて見てもよからうと思ふので、居間へ取つて返すと、
『ちよいとよささうよ、あなたも見て下さらない?』
『さうかね、あんたが氣に入つたら、それでいいぢやアないか。』

『でもあなたに鑑定して頂けばなほ確かだわ。こゝへ呼んで見せう。』
鈴を鳴して、新來の女を呼入れさせた。
それは信重が見ても惡い感じはしなかつた。たゞ優しいといふよりは強い方が勝つて居る女だと思つた。
『あんたの名は何といふの?』と、惠美子が尋ねた。
『とみと申します。何にも存じませんものでございますけれども、もしお置き下さいますなら、一生懸命御奉公申上げる考でございます。』
云ふ事はハキ〳〵して居て、言葉遣ひも上品だつた。
『東京の小間使をして居たといふのは?』
これは信重が尋ねたのである。
『番町の太田原さんのお邸でございました。でもお暇を頂きましたのは、三年ばかり前でございます。』
『それから結婚したのかい?』
『はい……ほんとにお恥かしい身の上でございます。』と、とみは初々しく俯いた。
『結婚した先といふのは?』
『保險の勸誘員だつたんでございます。私ほんとにもうこり〳〵いたしましてございます。』
とみはつゝましやかに答へて、淋しく笑つて見せた。
試驗は滿點だつた。この女は採用されることになつたが、このとみが賴子夫人のスパイであらうとは、二人とも感づく筈は素よりなかつた。

## 埠頭の哀別

佛國郵船ドーフキン號は、半時間の後に、マルセーユに向け、神戸港を出帆しようとして居る。
出港間際のサロンの一隅に、しめやかに語りながら、名殘を惜んで居るのは、信重と、許されぬ妻の惠美子である。
信重は今度の佛國赴任について、誰もが遠慮なく、愉快に打寬ぐ事が出來て、その上日本料理も食べられ、便利でもあれば自由でもある、アット・ホームの延長のやうな日本郵船を擇ばずに、自然窮屈でもあれば、不自由でもあるフレンチ・メールを擇んだのは、強ち佛蘭西に赴任するからといふ事と、船の中で佛蘭西語の練習も自然に出來るからといふだけの理由ではなかつた。あの日本郵船出發の際に、横濱なり神戸埠頭なりで見る日本人乘客の凄まじい見送人の混雜、身動きもならぬ甲板上の右往左往、テープの蜘蛛の網、萬歳の叫び、さうした激しい混亂のどよみを避けて、しんみりと別れを惜む事が出來るし、第一人目に立たずに濟むと考へたからだつた。
彼は昨夜東京驛を立つたので、父の伯爵、賴子夫人を初め、友人關係の人達は、みな彼を東京驛に送つたのである。惠美子は伯爵夫妻や、見送人に見られる事を避ける爲、横濱から乘込んで、一緒に神戸へ來たので、信重には松尾家の老執事のみが伴ひ、荷物萬端の世話に當つて居たのである。
信重がドーフキン號を擇んだのは全く選擇を過つては居なかつた。一等船客には日本人は彼以外には一人もなく、日本人乘客としては、二等船客の間に、二三人を見出すに過ぎなかつた。見送りの人も非常に少なく、重に外國人のみで、それも親しい間柄のものや、事務關係の人達ばかりで、日本郵船に見るやうな混雜は更になく、從つて信重と惠美子がサロンの一隅に陣取つて居ても、何等二人のテータテートを擾亂される懸念は、少しもなかつたのである。
『それでは御兩親のお立ちは、いつともまだ極らないんですのね。』と、惠美子はひどくそれを氣にした。

『極らないが、この二三ケ月中といふので、年内には是非出かけるつもりで居るらしい。なるべく早く來るやうにと、云つてはあるんだが……。』

『きつとなるべく遲くお出かけになるおつもりよ。ひよつとしたら年が代つて……。』

『そんな事はない。巴里のシーズンに是非間に合はせると云つてるんだから、冬の書入時を過す筈はないよ。親達が巴里に出かけるといふ事は、厄介な困つた問題には違ひないが、併し日本に殘つて居る惠美さんに取つては、却つて安心の材料になる譯だから、一面からは喜んでもいゝのだよ。假に母が惠美さんに對して、何か小細工でも弄しようとする氣なら、私の留守を利用すればいゝ譯だが、巴里に來て居ちやアそれが出來ないんだから、惠美さんは鬼のお留守に、呑氣な勝手な生活が出來ようといふものさ。』

『それはさうだわ。でもお立ちまでに二三ケ月あるとすれば、その間に何かなさりはしないでせうか。私、心配にならない事もありませんわ。』

『斷じてそんな事はないと思ふ。それほどまで卑怯な母ではない筈だから……。』

『お母さんはあなただけを監督すればいゝと考へていらつしやるのかしら……。』

『何度もいふ通り、もう母にはそんな考もなくなつて居るんだらうと、私には思へるんだ。だからそんな事は案じずに、呑氣に愉快に日を送つて居て貰ひたいね。』

『なるべく屈託のない生活をして、あなたのお便りをお待ちする事にしますわ。』

『ロジニさんのところへもせつせと通つて、音樂會へも時々は出るがよからう。いゝお友達ならそれも作るがいゝ。惠美さんが淋しい日を送つて居るだらうと思ふと、私にはそれが、一番堪へられない事なんだから……。』

『えゝ、……でもどんなに華やかな生活でも、あなたなしには淋しいに極つてますわ。私、一生懸命それを紛らす工夫だけはしますけれども……。お手紙だけはどんなにお忙がしくても下さいね。』

『それはいふまでもない事さ。あんたも手紙を書く事を忘れないでね。』

『私、日本文字がよく書けないから、心配ですけども、稽古と思つて書きますわ。』

『手紙は當分大使館氣付で送つてくれゝばいい。その中パンションのいゝのでも見つけたいと思つて居る。尤も頼んであるから、見つけてくれてあるかも知れないが……。』

『それまで大使館にいらつしやるんでせう。』

『私は初めからホテルなりパンションなりに入りたいと思つて居るんだが、山路大使が松尾家と親戚のやうな間柄で、去年ブラッセルへ行つた時も、山路さんで泊めて貰つて居た位なんだから、今度だつて少なくも四五日は厄介にならないと、却つて妙に取られるからね。尤もあちらへ着いた都合では、それもなるべく辭退して、一時ホテルへでも引取りたい積りでは居るんだが……。大使と親密な關係があつて、家族の一人に加へられて居るといふやうな事は、同僚の間に面白くない雰圍氣を作る事にもなるんだし、自分としてもさういふ關係で採用されたといふやうな事を思はせたくないからね。』

『そんな事もあるでせうね。……それに美しいお孃さんがいらつしやるんでしたわね。』と、惠美子は笑つた。

彼女は芙蓉子と自分が、この先どんな複雜な關係を持つかを、豫想だもしなかつたので、こんな事を云出しても、別に心に留める風はなかつた。

『だから猶更わるい。』と、惠美子以上に芙蓉子

の事を無關心に考へて居た信重も、他意なく笑つた。

『だけども、私、何だか氣がかりよ。』と、冗談のつもりで、『お孃さんがあなたに戀をなさるやうな事ないでせうね。』

『そんな馬鹿な事が……。第一私と惠美さんの事を知つてる筈だからね。』

『あら、知つてらして？』

『もう公然の祕密ぢやアないか。誰だつて知つてるよ。』

『さうでせうか。あなた、女のお友達は作つても、外に決して戀をなさらないでね。』と、彼女はやゝ感傷的に云つた。

『今度目に惠美さんの顏を見るまでは、私の心は惠美さんで一杯になつて居るだらうよ。冗談にもそんな事は云はないで貰はう。』

『濟みません。きつとそのお詞を忘れないでね。……あなたを離れて、私、生きては居ませんわ。』と、彼女はつい涙ぐむのである。

『おい、そんな不吉な言葉は禁物だよ。私達の前途には、何の不安もない筈ぢやアないか、お互ひにこんなに信じ合つてるものを……。』

『えゝ……でも、私、何かしら不安なものが、急に……あら、どうしたのでせう。こんなに動悸が打始めて……。』と、彼女は胸を押へた。心持顏色まで青くなつて居るのだ。

『それは氣のせゐだよ。どれ、まだ十分やそこらはあるだらう。船室で休息しよう。さうすると落ちつくだらうから……。』と、信重も氣になつて妻の腕を組むと、船室へ降りて行つた。

『私、何だか、これがずッとお別れになりやアしないかと……そんな氣が急に仕始めて來ましたわ。』と、彼女は囁くやうに云つた。

どうやら氣でも失つて彼の腕に倒れかゝりさうな氣がするので、信重はひどく心を傷めた。

船室には誰も居なかつたので、扉を閉めると彼はまづ強く妻を抱きしめて、接吻の雨を降らした。惠美子はやつと氣が落ちついたやうに、につこと美しく笑んだ。

『そんな筈はありませんわね、あなた。』

『そんな事があつて堪るもんか。そんないやな空想は神戸の海へさらりと、投げて了つてね、陽氣に私を見送つておくれ。ね……さア、暫くでも横になるかえ。』

抱へるやうにして、彼女を傍のソーファにおろした。

『いゝえ、もう大丈夫だわ……私、よつぽどどうかしたのよ。機嫌よく笑つてあなたをお見送りしますわ。』

『今別れたところで、半年先には巴里で惠美さんの顏が見られるんぢやアないか。親達が居ても居なくつても、その頃に日本を立つて來て貰へばいゝんだから……。また惠美さんの都合では、私が歸つて來てもいゝんだ……。何でもないぢやないか。』

『えゝ、何でもありませんわ。あなたに歸つて頂かなくても、私、きつとまゐりますわ。……お母さんがどんなに仰しやつても、決して私を見捨てないでね。』

『そんな事はもう云はない筈ぢやないか。大丈夫、大丈夫、大丈夫だよ。私はもう子供ぢやアないんだからね、完全に自分の主人公なんだからね。そして惠美さんは第一立派な私の妻なんぢやアないか。親を捨てようとも、決して惠美さんを見捨てはしない。』

『きつとよ、きつとよ。』と、彼女は兩の腕を良人の首に廻して、熱い接吻に魂を打込むのだつた。

途端に出帆を知らせる銅鑼の響。

『さア、それではこれがお別れだ。』

『まア、何て早く時間が立つでせう。』

再び取りついて接吻の雨、雨。

甲板では見送りの人達が別れの言葉を交して居る。ボン・ヴォイヤージュの聲がそこゝに聞える。こゝでもやはり賣子がテープを客に勸めて居た。信重が一ツ買取らうとすると、惠美子が遮つて、

『止めて頂戴……。それが切れた瞬間、私には迚も堪へられないと思はれますもの。』

やがて舷梯に導かれると、

「ではあなた、御機嫌よく……。」

「身體を大事に……吞氣に、愉快にね……。一度は長崎の伯母さんも尋ねるがいゝ。』

「えゝ、その中に訪ねてやりますわ。ではほんとに御機嫌よく、お大事にね……。』

人中なので、そゝくさとこの位の挨拶をかはしただけで、惠美子は梯子を降りて行く。

つゝましやかに甲板に控へて居た老執事も、信重に最後の挨拶を殘して、惠美子の後から降りて行つた。

日本の船のやうな事はなくても、船から陸へ陸から船へ、テープが投げられる。殊に二等室の方には日本人が居るので、それが盛んだつた。汽笛の音、スクリューの音、出帆間際の騷音が、一時あたりの空氣を擾亂した。

ボン・ヴォイヤージュ！ 左樣なら！ が信重と惠美子の間に交される。船が徐々に突堤を離れる時、互ひに取出したハンケチを振る二人の心々に、何とも知れぬ哀別の悲しさが漲るのだつた。

信重は船を見上げて居る惠美子の眼が、涙に光るのを見た。次第に距離が遠のいて、視野が斜めに出て行く船自體に遮られた瞬間、信重は惠美子がよろ〳〵とよろけて、老執事に支へられたかの如く感じた。それは見送りの人達が重なり合つて見えたので、ハッキリとは分らなかつたが、そんな氣がして掻きむしられるやうに思つた。が、それは彼の錯覺だつたかも知れないのだつた。彼はそのまゝ急ぎ船室に退いて、ソーファに身を投げかけると、額を蔽うた。涙が不覺にも彼の頰を傳はり落ちるのである。

けれども彼は男だつた。すぐ一時の亢奮がパッスすると、冷靜を恢復して、甲板に出て行つたが、しかし彼の心は重く、そして暗かつた。何だか自分達の前途に一抹の陰影が投げられたやうな氣がするのだつた。

## 巴里にて

颱風の季節を過ぎて居るので、海上は引きつづき平穩だつた。歐羅巴への初めての船旅であるならば、東洋から南洋へ、印度洋へ、紅海へ、スエズへ、絶えず目先の變つてゆくエキゾチックな景物に心を惹かれる習ひであるけれども、信重は英國留學の折と、去年の漫遊とで、既に印度洋を三たび通過して居るので、別にこの航路に興味を惹かれるほどの何ものもなかつた。たゞそれが佛國船であるために、今まで一度も知らなかつたサイゴンと、亞典灣のジブーチに寄航する事が、唯一の興味をそゝる位のものであるに過ぎない。けれどもそれだからと云つて、あながち彼に取つて、單調で、つまらぬ旅といふ譯ではなかつた。

惠美子との悲しい別れが、まだ生々しい思出であるとしても、半年先の事を考へると、心は自然に引立つて行つた。それに彼は生れが生れだけに、鷹揚な、華族的なボーッとしたところがあつて、神經的なところのない、生來の樂天家だつた。それだけに何度通つたところにせよ、この浮世離れのした、世間と全く隔離して過す事の出來る、吞氣な歐洲航路の船旅を、享樂する事の出來ぬ筈は素よりなかつた。

殊に彼はまた交際好きの方なので、船員や船の旅人達とはすぐ親しくなり、サイゴンを離れ

る頃には、もう船客の中でも人氣の中心となつて居た。運動は彼の得意とするところなので、甲板における船客のさま〴〵の遊戯は、彼なしには行はれないと云つてもよい位、彼は引張凧にされた。わけても婦人客の間に人氣があつた。

　船客は重に佛蘭西人で、それもサイゴンから多數乘込んだのだ。外には英吉利人、亞米利加人、伊太利人などがちらほら居るだけだつた。信重は英語を自由に話すやうに、佛語は操れなかつたけれども、それでも簡單な談話位には、大して不自由もなかつた。佛蘭西語の稽古のつもりで、船では勉めて佛蘭西人に接觸して居たのだ。

　どこまで行つても穩やかな、惠まれた航海だつた。彼は港につく毎に繪葉書を惠美子に送る事を忘れなかつた。時には長い手紙も書いた。軈てスエズも通過し、ポルトセイドから地中海へ出ると、我ドーフキン號は、同じ拉丁民族ながら、反の合はぬ伊太利の港へは、ナポリにもゼノアにも寄港せず、一路マルセーユへと急ぐのであつた。そして月餘に亙る長旅の後、信重は無事に我姿を、正午過のマルセーユの港に見出したのである。

　こゝで彼は船の到着を待受けて配達された、西比利亞經由で來た、妻の戀しい手紙を、初めて受取る事が出來た。彼の出發後五日を經て出したもので、それによると神戸の別れに、信重の姿が見えなくなつた時、一寸輕い腦貧血を起しかけたが、それはすぐパスして、無事に宿に落ちつき、老執事の介抱を受けて、その日の夜行で、事なく鎌倉に歸りついたが、すぐ氣力も元氣も恢復したので、次の日からは平日通りの生活を營んで居る、ロジニ氏初め友達が淋しさを慰めて吳れるため、訪ねて來るものが多いので、この分なら大へん淋しい思ひもせずに過せるだらうから、自分の事は少しも案ずるに及ばないとあるので、信重は初めて安心の胸を撫でおろす事が出來た

　マルセーユの土を踏むにつけて、彼は去年の冬を程近いリヴヰエラ地方ですごした樂しい新婚旅行の夢を思ひ起し、またこの春日本への歸途、こゝで時間の餘裕のあるため、惠美子と共に、巖窟王で有名な小島シャトー・ヂフを訪れた思出などに耽るのだつた。彼はその時のホテルに旅の紐を解いた事はいふまでもない。このホテルで數時間を過す中に、彼は惠美子にあてて長い手紙をも書き、そここゝへあてた繪葉書やら手紙やらも認めた。また巴里の大使館へあてては、安着の事と、今夜のマルセーユ發の時刻を知らせる電報をも出した。

　かくて彼は九時過の夜行に乘込んだので、巴里着は翌朝十時の豫定なのである。

　この里昂線の列車は、全く豫定通り翌朝十時少し前に巴里の堡壘を入り、定刻に里昂停車場に滑り入つた。

　今こそ巴里についたのだと思ふと、流石に信重の心は時めくのであつた。彼は四ケ月前山路子爵夫人と芙蓉子孃の出發を橫濱に見送つた時、子爵夫人が彼に向つて、自分達母子があなたを巴里の停車場に出迎へる日も遠くはあるまいと云ひ殘した言葉を思ひ出して、多分二人の中少なくも壽子だけは、出迎へて居てくれるだらうと豫期して居たのだ。

　出迎人で埋まる東京驛や、大阪驛のやうな混雜が、そこにないだけに、プラットホームに待受けて居る人達の間に、特色のある日本人を見出す事は、至つて無造作だつた。果してそこには壽子夫人ばかりでなく、芙蓉子孃までが、毛皮に包まれて彼を待受けて居たのである。

　二人の姿を認めた刹那、信重が感激と喜びを味つた事はいふまでもなかつた。遠く故國を離

れた異郷の空で、同胞に迎へられる事は、それ自體が世にも嬉しいものの一ツでなければならない。ましてそれが美しい異性であつて見れば、その上に感謝の念の湧くであらう事も、決して不思議ではあるまい。殊に壽子も芙蓉子も、亞米利加人や英吉利人のやうにのつぽでない佛蘭西の人達の間にまじつて、見すぼらしい感じは少しもないばかりか、二人ながらその整つた姿、そのシックな出立は、どんな佛蘭西の女にも負けない雅やかさと美しさを備へて居る事が、土地が外國だけに、信重に愛國的な誇りをさへ、その瞬間に感じさせたのである。

慌しい握手をかはした後、

『どうもお揃ひでお出迎ひ下すつて恐れ入ります。全く豫期しない喜びで、厚く御禮を申上げます。』

『あら、横濱でのお約束ではありませんの。その時の豫言が事實になつて、こんな嬉しい事はございませんわ。』と、壽子夫人はどこまでも如才がない。

『芙蓉子さんまで來て頂いて、ほんとに濟みません。それにこんなにお早く……。』

『どうせ暇なのですもの、そして私、寢坊ではございませんのよ。』と、芙蓉子も愛嬌よく、朗らかに笑顔を見せた。

『どんなにかお疲れでしたらう。お荷物は澤山ございますの。召使を連れて來ましたから、お荷物だけ纏めて、タキシでこれに送り屆けさせる事にいたしませう。』

『何から何までいろ〳〵お世話になります。』と引合はされた金釦の下僕にチェッキを渡した。そしてシュート・ケースだけを持つて、待たせてある子爵夫人の自動車の中に導かれた。

『私達は今日から冬支度の毛皮になりました。昨日までは珍らしく日和がつゞいて、割合にお暖かかつたのですが、今朝から急に寒じ出したのでございますよ。』と、自動車が走り出した時、壽子が説明した。

マルセーユでは外套なしで丁度よかつたのが、巴里近くなるにつれ、その必要が感じられて居たのだ。佛蘭西に特有な沿線の美しい森も、マルセーユ附近では、まだ青葉の勝つて居たものが、今朝起きて見ると、もう黄色に變つて居り、巴里へ入ると、街路樹のマロニエやプラタナスは、もうとうにその美しい大きな葉を震ひ落して居るのだつた。すべては初冬の印象で、空も巴里の冬空らしく陰鬱に、けれども或暖味を以て、どんよりと曇つて居た。

自動車はバスチーユの廣場をぬけて、サントノレ街をエトワールの方向にむけてのぼつて行く。巴里の朝は靜かで、なごやかで、まだ巷の雜音は起つて居ない。長い傳統に仕上げられた落ちつきのあり統一のある世にも美しき都會である事が、亂雜な建築と、バラックと、掘返された道路とが、ジャズを奏でて居る復興途中の東京を出で、殖民地風のごた〳〵した東洋の港々を辿つて、巴里の眞中に自分を見出した信重には、つく〴〵と感ぜられた。若し都會に人格といふものがあるならば、巴里こそ羨ましくも最も尊敬すべき、温味の豐かな人格の所有者でなければならない、自分が當分その懷に抱擁されて過す事は幸福であると考へるのだつた。空は冬曇りであるに拘はらず、彼の心は薔薇色に明るかつた。それはまた二人の美しい女が出迎へてくれた事にも關係すると見て、間違ひのない事だつた。

『巴里のお住居ももうお落ちつきになつたでせうね。』と、信重は壽子夫人に尋ねた。

『えゝ、彼是三月になりますから、すつかり落ちつきました。全く巴里は住心地のいゝところでございます。ブラッセルも小巴里と云はれるだけに、住心地のわるいところではございませ

んが、やつぱり舞臺が小さうございますわ。私達が斯らして巴里住居の出來るやうになりましたのも、みんなあなたの御兩親のお力だつたのですから、どんなに感謝しても足りないと申して居るんでございますよ。』
『そんな事は決してありません。それは當然の順序だつたでせうから……。それと違つて私こそ全くお骨折の結果なのですから、厚くお禮を申上げなければなりません。』
『私共はほんのお口添へをしたといふだけで、やつぱり御兩親のお力でございますわ。併し何にしても好都合で、主人もそれは喜んで居るんでございますよ。』
『折角拔擢して頂いても、どうもお役に立ちさうもありませんが、此上とも十分の御指導を願つて、一人前の外交官に仕上げていたゞきたいと存じます。歐羅巴は初めての舞臺で、全く田舍ものなのですから、社交の方も萬事奧さんのお引廻しを願はうと、蟲のいゝ事を考へて居る次第で……』
『それは萬事心得て居りますわ。芙蓉子もこれから仕込んでやらなければならないので、なかなか大役でございますわ。』
『いや、芙蓉子さんはもうすつかりパリジエヌになり切つていらつしやるが、私はアルゼリーかモザンビークから出て來た山出しですからね。』と笑ふと、二人も聲を合はして笑ひ崩れた。
『モザンビークはようございましたね。でもモザンビークの紳士は、すぐに巴里の流行兒になつてお了ひですわ。』
『無器用ものですけれども、まアお仕込み次第では……。』
『その代り私の云ひなりになさらなければいけませんのよ、こちらの言葉で「蠟の人」と申すやうに……』と、壽子は冗談のやうに笑つた。
『はゝア、ロム・ド・シール? 蠟で出來た人といふ譯ですか。指先でどんな形にもでつちられるといふ意味ですね。』と、信重は感心したやうに笑つて、『奧さんにでつちられるのなら、蠟の人間結構です。』
　彼は果して『蠟の人』にならなければ幸ひである。この言葉は生涯を通じて彼の頭に印象づけられて殘つたのである。
『丁度これからが社交の季節で、よいところへおいでになりました。口幅つたい事は申上げましたけれども、私もこちらは新米なのでございますからね、なかなか心配でございます。それに此娘を引廻さなければならないのですから……またこれが私のいふ事なんか、なかなかきゝませんでね、親の苦勞といふものは、絶えないものでございますわ。』
『それでは芙蓉子さんは「蠟の人」ではなくて、私とは反對ですね。』と、笑ふと、母子も賑やかに笑ひを合はした。
『芙蓉子さん、ブラッセルでは乘馬をお稽古でしたね。こちらでは?』と、信重が尋ねると、
『えゝ、もう卒業しましてよ。』と、美しい並びのよい齒を見せて、『こちらでは毎朝母樣とボアへまゐりますの。今朝はあなたをお迎ひしたので、まゐりませんでしたけれども……。』
『どうもそれはお氣の毒でした。乘馬にはボアのやうなところはどこにもなささうですね。もうお落ちになるやうな事はありませんか。』
『えゝ、それはもう……。』
　母が口を添へて、
『これはもう立派な女騎士になりました。何でもお轉婆事では人樣にひけを取りませんから……。』
『どうもお羨ましい事です。』
『あなたもお乘りなさいね。馬は三頭ありますから、そして父は滅多に出かけないのですか

ら…。』

『では時々拝借してお供をさして頂きませう。』

彼は支那の公使館勤務時代に稽古をしたので、人並には乗れるのである。美しいアマゾンと轡を並べて、木立で蔽ひかぶさつたボアのアレーを、枝とすれ／＼に駈けさせるシックな風俗を思ひ浮べて、彼はほゝゑまれた。

『それはさうと私の宿はお見つけ置き下すつたでせうか、いろ／＼御厄介な事ばかりお願ひして…。』

『私達にも巴里の勝手が、まだよく分らないものですから、みなさんにお頼みはしてあるんですが、…書記官の山田さんが去年結婚なさるまでにいらつしつたところが、よささうだと申して居るんです。エトワールに近いリュー・ド・ドームに居る子爵の未亡人ですが、子爵が親日家だつたとやらで、日本の方なら置いてあげてもいゝと、その山田さんをお置きになつたんださうでございます。まア併しそんなにお急ぎにならないで、當分は私共に…』

『それは結構ですが、私は二三日御厄介になつただけで、直ぐその子爵未亡人の家に移る事にいたしませう。あんまりあなた方の御親切を濫するといふ事は避けたいと思ひます。外の同僚達の思惑も考へて見なければなりませんから。…私はこの機會にお願ひして置きたい事は、御主人初めあなた方が、私に對して、他の同僚と分隔てのない同一のお取扱ひを願ひたいといふ事です。さういふ意味からも、私はなるべく表面御厄介にならずに、外の宿へ引移るといふ事が、結局私の利益だと存じます。』

『それはよいお考でございます。私共にしましても、あなたにだけはどんな事でもしてあげたいと存じますけれども、表面それは愼しまなければならない事でございませう。でも親戚關係があるといふ事は、外の人達にも知つて居ていたゞく方が、何かの場合に好都合だと存じます。あなたに對して特に依怙贔屓があるのではないといふ事を、みなさんが了解なさるでせうから…。』

かういふ話の間に、自動車は、エトワールから射出する、見事な十二大路の一ツであるアヴニウH…の大使館の前へ來て駐つた。

## 歡樂の都

信重は佛蘭西人がよく『一週間』の代りに使ふ『八日』の間、大使館のお客になつて居た。多少窮屈ではあつたけれども、決して居心地のわるい筈はなかつた。大使や夫人はわが子の如く待遇してくれるし、芙蓉子は兄の如く隔てもなく彼と交はるのだ。信重に取つても芙蓉子は妹の如く親しむ事が出來た。今こそ彼は安心して妹に對するやうな純愛を、彼女に濺ぐことが出來ると考へるのであつた。そこに大きな油斷の生れる事に、彼は少しも思ひ及ばぬらしい。

日本に殘して來た惠美子の戀しさは格別だつたが、併しこゝ數ケ月の辛抱だと思ふので、それまでにホーム・シックの起りさうな懸念はまづなかつた。惠美子が出て來るまでの間を、愉快に過す事の出來さうな確信が彼にはあつた。

館員も大戰後數十人に殖えて居るけれども、彼と机を並べて居る人達には、別に交際ひにくいやうな人はなささうだつた。仕事の上にも、甚だ愉快に働けさうに思はれる事が、彼を幸福にした。

この八日ほどの間に、三度ほど壽子夫人や芙蓉子と馬で、『ボア』で通るブーロンニュの大森林公園を乘廻した。紫ばんだ灰色に霞む朝霧の、幽かにこめて居る穩やかなボアの朝を、馬に白い息を吹かせて、乘廻す愉快さは、これも格別だつた。二度ほどは三人でフランセーズの

古典劇と、オペラの見物もした。
大使館にはコメヂ・フランセーズを初め、グラン・ドペラ、オペラ・コミック、オデオンなど國立の大劇場から、代り日每に大使夫妻と令孃にあてた招待券が屆けられるのだ。大使はあまり出かけないが、夫人と令孃は多くの場合、シックな常連に滿ちた華やかなロージュに、同じシックな姿を見せるのだつた。そしてこの東洋の美しい令孃は、いつもオペラ・グラスの焦點となる事を、夫人は誇りとするので、また信重と連立つた場合は、どんなに芙蓉子が巴里の眞中でさへ、崇拜の的となつて居るかを彼に見せる事が、壽子夫人の目的でもあつた。

また信重にしても、流行界を代表するシックな人々の口から『迚も可愛い』とか『的素だ』とかいふ芙蓉子に對する私語を耳にして、自分の持ちものでも見せびらかすやうな、肩身の廣い、得意の氣持の湧く事は、寧ろ自然であつた。彼はかくて芙蓉子をそこゝに伴ふ事によつて、他人からは決して得られぬ快感を味ひ得る事實を、日に〳〵體驗しつゝあるのであつた。

信重が大使館から移つた先は、壽子夫人から話のあつた、同僚の書記官山田が結婚前まで世話になつて居たといふ、リュー・ド・ドームの子爵未亡人の家だつた。

凱旋門や大使館に近く、ヴヰクトル・ユーゴー通りを一寸入つた閑靜な小路で、その三階建の家の佛蘭西でいふ第一階、卽ち二階全部數室を占めて、小綺麗に住つて居るので、これまた決して居心地のわるさうな家ではなかつた。

未亡人は六十近い、人のよささうな老女で、長男の海軍士官は結婚して、ツーロンに住んで居り、ソルボンヌに通つて居る末子の青年と、一度結婚して歸つて居ると云ふ二十七八の姉娘と三人暮しなのだ。

この姉娘は器用な人で、油繪を描いたり、革細工の手藝をしたりして、至極呑氣な生活をして居るらしい。みんな快濶な生粹の巴里ツ子達で、これ等の人々と起居を共にし、寢食を共にし、家族の一人として待遇されて居る事は、決して不愉快なものではなかつた。第一佛蘭西語の練習には、この上もなく好都合だつた。

パンとバタ、珈琲のいゝ事、食物のうまい事、巴里の家庭の特色にこの家でも味へた。朝の寢心地もこの上なくよかつた。いつも大道に車を据ゑて大聲で呼立てる野菜や何かの物賣りの聲に目を覺される。或時は哀調を帶びた角笛の音に呼起されて、窓際に立つて往來を見下すと、サンタ・クロースのやうな牧羊の爺さんが、數頭の牝羊と番犬を引率し、羊の乳と乾酪を賣つて居るのである。

近所の子供やお神さんが集まつて來て、羊や爺さんを取卷いて居る。爺さんは羊の乳を搾つてやつたり、乾酪を肩から下げた箱から出して賣つたりして居る。かうして田園詩をそのままに見るやうな、時代を超越した光景が、大都會の眞中で見られる事は、流石に佛蘭西ならではと點頭かれるところに、巴里の盡きぬ情趣があると思ふのだつた。巴里に居るといふ幸福感が、この朝ひた〳〵と彼の胸に浸みこんだ事はいふ迄もない。

巴里！——それは不思議な魅力を以て、彼に働きかけて居た。

或日の彼は友達に誘はれたのを機會に、同じく彼を訪問して來た日本の或るお役人の案內を賴み込んで、一緒に日本料理を食はせる日本人倶樂部で晩餐を取つた。そこで彼等は他の四五人のグループの席へ卷込まれて、食事後の無駄話に花を咲かせたのである。

今から五十何年前に大學を出ると、巴里に留學に來て、そのまゝ歸るのを忘れて了つたといふ、今では佛蘭西人を女房に持つて、セーヌの

左岸に骨董品の店を構へ、すつかりパリジアンになり切つて居る呑氣で氣焔家の老人島、巴里に七年ほど居て、これも一向日本に歸りたくないといふ、裕福な絹物貿易商の二男坊、もう四十に手が届きさうであるが、いまだに細君を持たずに、巴里氣分に陶醉して居るといふ、服裝から持ちものまで寸分隙のないシックな津田、プラース・ヴァンドムの大寶石店の工場に徒弟に住込んで居て、つい近くの贅澤品街リュー・ド・ラ・ペーの或帽子店に通ふ可愛いミヂネットと、如才なく同棲生活をして居るといふ青年S、文部省の留學生でソルボンヌに通つて居るK、競馬道樂でわざ〳〵ロンシャンの競馬を日本から見に來て、そのまゝ踏留まつて居るM、――さう云つた人達の、それは一團だつた。

沖も寄合ひさうもない、いろ〳〵の變り種が、たゞ巴里を享樂するといふ共通の心理だけを唯一の楔に寄合つて、そこにエキゾチックな雰圍氣を作つて居るのも、巴里なればこそだつた。倫敦にも伯林にも紐育にも、こんな氣紛れな寄合は見られない。

無駄話の話題の中心は、いつも女である。殊にそれが巴里であつて見れば……。

「島さん、あなたは四十年近くも巴里にいらつしやるんぢやア、その間に隨分巴里の女も變つて了つたでせうね。」

「それは變つたのなんのつて、あの戰爭で途方もない斷層が出來て了つたやうなもんでさ。今はこの斷層を勇敢に飛越えた若いものの世の中でね、飛越えようにも飛越えられず、いまだに斷層の前で、ぐづ〳〵してゐる私等のやうな老人には、巴里の女はもうさつぱり分りませんよ。」と、葉卷をふかしながら、島老人はにやにや笑つて居る。

「ジャズも戰爭の產物でせうね。」

「いや、あれは戰爭前に亞米利加を風靡して居たらしいね。巴里ではあれとタンゴは入れないと頑張つて居たが、その中に戰爭さ。ジャズが亞米利加の兵隊と一緒に、潮のやうに入つて來ちやア、一たまりもなしに巴里は落城でさ。傳統的のワルツがすつかりジャズに降服したやうな譯でね。いや、飛んでもないペストだ。ここにはジャズを神樣のやうに想つてゐるS君が居る。」と、例のミヂネットと同棲して居るといふS青年を顋でしやくつて見せた。

「だつてジャズは時代の精神を表現して居るんだから、仕方がありませんよ。あんなに世界を風靡したといふ音樂は、全く前代未聞でせう。偉大なる音樂ですね。」

「あれは音樂ぢやアないな。音樂といふものは人間の感情を美化するものだが、あれは人間をひつかき廻して野獸にするんだ。世の中がこんなになつたのは、戰爭のお蔭といふよりは、ジャズのお蔭なんだね。ジャズが颶風のやうにすべての傳統を破壞して、そしてフラッパーを作つたんだ。ジャズが藝術でない通りに、ジャズの生んだフラッパーは思想がからつぽで、官能だけが百パーセントに橫溢して居るぢやアないか。」

「それでいゝんですよ。さういふ女をわれ〳〵は禮讃するんですよ。」

「亞米利加のフラッパーと、佛蘭西の若い娘の行方は、ちよつと違ふやうですね。」と、大學生が口を插んだ。

「それは違ひますともさ。佛蘭西の女は、情操といふものを、今でもフンダンに持合はせて居る。そこが値打ですよ。バルザックぢやアないが、巴里の女は譃言家で、見え坊で、コケットで、その上どこか冷たいところもあるにはあるが、一度眞劍になつたら、それが戀愛であつても、外のものであつても、どこの國の女よりも、感情を立派に犧牲にします。それは全く

崇高と云つた感じさへも持たせますね。これはセーヌの右岸に住んで居る立派な貴婦人にも、モンマルトルの夜の「鶴」にも見られる、そこが巴里の女の、断然頭角を拔いて居る特色ですよ。これだけは傳統的に佛蘭西人の血にしみ込んで居るから、戰爭でも破壞されません。淫賣婦の中にだつて、今でも椿姫は居ますよ。』と、老人は氣焰を擧げて、溜飲を下げたやうな樣子をした。

『では椿姫を探しますかね。』と、誰かが笑つた。

『併し諸君。』と、老人はユーモラス的にまた續けて、『諸君も經驗されたであらう通り、巴里の女ほど歡樂の對象としていゝものはない。只諸君に忠告するが、巴里の女はたゞ可愛がつてやればいゝのです。批評は禁物です。憤慨する事も無論野暮です。ましてそれがわれ〳〵エトランジェーであつて見れば……。』

みなが手を叩いた。此時競馬狂のMを、誰か外の室から來て連れ出して行つた。

## スザンヌ

巴里人の趣味といふ話題から、話はまた戀愛に飛んで、

一戀愛といふものは巴里人の趣味ですね。どんな戀愛でも、他人の干渉すべきでない趣味の問題として片づけます。主人もマダムもめいめいの戀愛を享樂して居ます。今では娘さんもこの遊戯をやります。少なくも大戰前まで、娘さんだけこの自由を得られなかつたやうでしたがね。お蔭で人生が豐富になりましたよ。』と、皮肉らしい事を云つたのは、七年日本に歸る事を忘れて居るといふ津田だつた。

『リンゼーの書いたものを見ると、亞米利加でもさういふ夫婦が多くなつて居るやうですね。夫婦とも愛し合つて居ながら、お互ひに認め合つて、夫婦間以外の性關係を享樂する、そのため夫婦間の愛が一層加はる——さう云つた夫婦關係を、近代的の最も理解ある夫婦の例として述べて居ますが、佛蘭西には珍らしくない譯ですね。』と、ソルボンヌ通ひの大學生が云つた。

『ちつとも珍らしくありませんよ。貞操などといふものは、やがて趣味以外の何ものでもなくなるでせう。全體不義とか姦通とかいふ言葉が、そも〳〵間違ひの基ですよ。さうした行爲はたゞ過失であつて、罪惡ではないのです。お互ひの過失はお互ひが許し合ふ、或は默認する。それでいゝ事です。』

『どうも驚きましたなア。』と、憮然として眺めて口を開いたのは、四角い顏をして、思想もその通りに違ひない、信重が連れて來た日本の官吏だつた。

『併しソルボンヌの聽講などに通つて居る女の學生と話して見ると、みんなそんな考を持つて居るのは事實ですよ。舊道德に對してはすべて叛旗を飜さうとして居ます。そのために結婚を輕蔑したり、今までの女の美德とされたものを、何に限らず嘲笑するといふ風です。』と、大學生が說明した。

『その思想を實行に移して居るでせうか。』

『それは隨分あるやうですね。それを大した問題とはして居ませんから……。大抵男の「友達」は持つてるでせう。』

『フーム。』と、お役人はうなつて、『さうすると靑年の風紀などは、隨分ひどいでせうね。』

『それは皆何かやつて居ますよ。』と、島老人が口を入れて、『今に始まつた事ぢやアありませんがね。併し今はそれを公然とね……。どうかS君に聞いて下さい。』

『どうです、Sさん。』

『今の靑年で、メートレッスのないものなんぞ

一人だつてありませんね。それは許されて居るんです。』

『女はまさか許されては居まい。』

『まだそこまでは行つて居ないやうですがね。』

信重は一言も口を入れずに、默つて聞いて居るだけだつた。これ等の話にはすべて或程度の誇張があるにしても、一面の眞相には觸れて居ると思つた。そして芙蓉子などにしても、かうした社會的雰圍氣の中で、人となつて居るのだと思ふ事に興味があつた。

『要するに世紀末かね。』と、島老人は葉卷の灰を落して、『併しこれは何とか立直さなくちやアいかん。私は佛蘭西が眞先に眞面目になると思ふ。もう眞面目に歸つていゝところです。性的昂奮と歡樂――それだけが人生のすべてぢやアないからね、S君は別として……。』

『また僕が引合に出るんですか。』

皆が顏を合はして笑つた。その中にお役人がフォリ・ベルジエールに案内される筈になつて居る事を、信重に思ひ出させた。さうすると津田が私もお伴しようと、仲間に加はつたので、一行四人俱樂部を出ると、自動車をその性的昂奮と歡樂の取引所である、巴里隨一のミュージック・ホールへと走らせた。

舞臺は春正に酣で、百に近い殆んど全裸の美女が、絢爛たる舞臺裝飾の中に、華やかな照明の下に、行進し、分列し、さまざまのポーズを作つては、脚を思ふさま空高くあげて居る。まさに現代露出主義のクライマックスを、そこに見せて居るかのやうである。信重は四角い顏をした自分の連が、悲壯な面色で、恍惚と眺めて居る光景に、何とも知れぬユーモアを感じながら、微笑して居た。

一わたり見物を濟した上で、一同は見物席を離れてプロムナードを漫歩した。そこには眼の縁を隈取り、頰にルージュを塗つて、脣を血のやうに染めた、胸も露な夜のローブに包まれ、滿艦飾をした女が、無數に徘徊して居て、絶えず立寄つて來る機會を狙つて居る。花賣りの女が、胸にさす菫やカーネーションの小さな花束を、法外な値でお客に賣りつけて居る。

津田は巧みにこれ等の商品である女を捌いて居たが、さうかうする中、一人の取分け寶石の光眩い女優めいた二十七八の女が近づいて來て、彼に言葉をかけた。彼は意外らしく、けれども極めて親しい言葉を交し合つた。彼女は、こゝは自分の來るところではないが、尋ねる女がこのミュージック・ホールに來て居る筈なので、探しに來て見たがその女は居なくて、あなたが見つかつたのは幸ひだといふのだ。

そこで津田は彼女を、そこの卓に招じて、三鞭酒を拔いた。そしてローズといふ彼女を信重等に紹介した。この女はこの種類の女としては最上級に位する半貴女だつた。ローズは津田を通じて、今から自分の家へお茶を飲みに來ないかと招じた。

信重等は冒險的な興味を以て、この招待に應じた。フォリ・ベルジエールを出た自動車は、オペラの裏の方の見當の、オースマン通りを少し入つた、可なり綺麗な町へ來て止つた。彼女はそこの第二階全部數室を占領して居るのである。それは日本の公使館附武官などの借りて住んで居る家よりも、遙かに贅澤な調度と建築である事が、信重等を驚かした。

わけても、アルコーブに天蓋を垂れたダブルベッドは贅澤そのものだつた。小間使一人を使つて、室々は氣持よく綺麗に片づいて居る。大理石のスタチュエット、見事な掛額、優雅な裝飾品、それは趣味の室と云つてもよい。靈香が馥郁としてどの室にも薫つて居る。ローズは津田を亭主扱ひで、誰にも如才のない社交振を發揮する。彼女自身お茶を入れたり、フキス・シャ

ンペーンを振舞つたりした。この女は英語も達者で、信重とは上品な英語で話したりした。

津田と何か耳打して電話をかけた。誰か女の友を呼ぶらしい。電話をかけてから、彼女は自分が妹のやうに可愛がつて居る女が、今來るから逢つてやつてくれといふのだ。

『スザンヌといふのよ。まだやつと二十歳で、それはほんとに初心で可愛いんですの。あんなおとなしい子ッてありませんわ。まだ男の友達なんか一人だつてないんです。』

そのスザンヌが程なく表はれた。ローズの云つた事を、見かけた所では裏書して居るやうだつた。やゝ小柄の方で、たしか二十歳以上には見えない。全く可愛いといふ感じの栗色髪の女だつた。

服装やお化粧もあまりけば〳〵しくなく、良家の娘と云つた風で、まだ少しもあばずれては居ないらしい、この社會には珍らしいおとなしさうな女だつた。そしてどこか華奢なところが、信重に端なく椿姫を思はせた。島老人の言葉の思ひ出された事もいふまでもない。

彼女はそれでも人馴れては居た。あどけない甘えた物云振りがこの女には相應しかつた。津田が頻りにこの女をからかふので、一座には笑ひがみなぎつた。

ローズは冗談のやうにして、信重にスザンヌの友達になつて呉れぬかと、婉曲な云廻しの英語で云つた。信重も同じ英語で外交的にあしらつて居たが、このスザンヌには一寸心を惹かれた。どこか惠美子に似て居る面影があるとさへ思つた。

スザンヌも信重が氣に入つたやうだつた。そして是非また來てくれぬかと、懸命に求めるのだ。

『ね、ね、モ一度來て下さいね。あたし、あなたが來て下さらなかつたら、悲觀しちやふわよ。』

『來て下さるわよ。モシュー・ツダによく賴んで置いてあげるから……』と、ローズは慰め顔に云つた。

三人は津田を殘して綺麗に引上げたが、その時信重はスザンヌに握手して『左樣なら』の代りに『此次に』を云つて別れた。

## 戀愛競技

信重は大使館からリュー・ド・ドームに引移つたけれども、正午の食事は大使館で、家族達と一緒にする事に極められて居た。改まつてそれを拒む事も、彼としては出來なかつたのである。彼が緣つゞきの間柄であり、一家の恩人である松尾家の大事な預りものの一粒種であるといふ事が、さうした特別の待遇をも理由づけて、それが何も依怙の沙汰でない事を、他の館員達に思はせたのである。

信重と芙蓉子はかくて每日食事時に顏を合はせるばかりでなく、その後もボアに轡を並べる事もあれば、音樂會や芝居にも同行するので、從つて二人の間に親密の度の重なつて行く事に、何の不思議もなかつた。この通りに二人の交情が、次第に加はつて行くのを見て、心私かに滿足を感じて居るのは壽子夫人だつた。此上はいよ〳〵娘を納得させて、しかと肚を極めさせる事が必要だと、彼女は考へるのだつた。

で、或日壽子は娘を居室へ呼びよせると、次のやうな話から切出して行つた。

『今朝信重さんのお母樣から、長いお手紙が屆いたのです。』

『お立ちになる日が極りましたの。』

『十二月九日の船にお極めになつたさうですからね、船の中で新年をお迎へになつて、マルセーユへは一月二十日にお着きになるのですよ。それまでに家を一軒見つけて置いて欲しい

と仰しやるのです。尤もそれは前からそのお話なので、心がけては居るのですが、パッシーの方に心當りもありますから、その中出かけて見なければなりません。』

『信重さんも御一緒になるんでせうね。』

『さうですとも。私、一存でといふ譯にもいかないから、信重さんにもその家を見ていたゞいて極めます。』

「私も連れてつてね、母様、信重さんと二人で極めてあげますわ。』

『あゝ、さうしておくれね。二三日中に信重さんの御都合のいゝ時に……。二軒ほど云つて來てあるのです。』

『半年位はこちらにいらつしやるんでしたわね。』

『半年が一年になつても、別にお歸りを急ぐ譯はないのですから、なるべく長くお引留めする事にしませうよ。それにはあなたの力を借りなければならないけれども……。』

『あら、私の力なんて、そんなもの何の役にも立ちませんわ。』

『あなたでなければ、その力はないのです。』

『まア、どうしてでせう。』

『實はあなたを呼んだのはその事ですがね、奥樣のお手紙にもその事があるのです。』

『お手紙にその事が？　その事つてどんな事ですの。』

『あなたに信重さんを救つていたゞきたいと仰しやるのです。』

芙蓉子は流石に狼狽して、顔を赤くした。

『でもそんな事が私に……。だつて信重さんは結婚なすつたんぢやアありませんか。』

『それだからなのです。併しその結婚は無效になつたのださうです。』

『どうしてでせう。』

『奥樣のお手紙だけでは詳しい事は分らないけれども、その結婚が正式な合法的のものであるかどうかを、伊太利の方へお賴みになつて、十分にお調べになつて見たところが、全く不完全な、手落だらけのものと知れて、それが無效だといふ法律上の書類を、お手に入れる事が出來たと仰しやるのです。ですから信重さんは最早誰とでも結婚がお出來になるのです。』

『信重さんはそれを御存知になつたのでせうか。』

『いゝえ、何にも御存知がないのです。まだそれをお知らせする時機ではないと奥樣は仰しやるのです。』

芙蓉子はそこで一ツ深い溜息を吐いたが、彼女の心が俄かに緊張を感じ出した事は云ふまでもなかつた。

『信重さんはそれが無效であると知つても、大して苦になさらないかも知れないぢやアありませんか。有效でも無效でも、どの道御兩親が御承認なさらないとすれば……。』

『さうです。だからこの七月に法律上自由の年齡に達するのを待つて、改めて日本の法律の下に結婚する考でいらつしやるのです。それが大事の點なのです。』

芙蓉子が信重の結婚問題で、公然母と語り合ふのは今日が初めてであるが、信重と自分に對する母の謎の行動は、大方彼女には讀めて居たのだ。だから今この問題を突然母から出されても、それが不意打では決してなかつたのだ。

『でも信重さんとその女の方が、深く愛し合つていらつしやるなら、それまでのものぢやアありませんか。小母樣だつてどう遊ばす事も出來ないでせう。』

『さうですとも、奥樣にはもうその力がないから、松尾家の名譽のために、あなたに救つて頂きたいと仰しやるのです。』

表面沈着を見せて居ても、内面的に烈しい動

搖が、芙蓉子を支配した。信重は彼女に取つて、禁ぜられた木の實でもあれば、誘惑の木の實でもあつた。彼女がいよ〳〵覺悟を極めなければならない瞬間が、今來たのだ。考を纏めるために、少しでもその瞬間を引延ばさうと思案した。

「私がお救ひするなんて、どうしてそんな力が私にあるでせう。信重さんがその女の方を愛していらつしやれば、いらつしやるほど、それは出來ない事ですわ。そして私、第一その女の方をちつとも知らないのですもの…。』

『知らない方がいゝのです。』

『私などよりもずつと〳〵美しい方ぢやアありませんか。そして隨分氣の強い、しつかりした人なんでせう。お母樣は私をその方の敵になれと仰しやいますの。』と、きつとなつて母の眼を見つめた。

母も暫く娘の心を、讀むやうに、その顏を見つめて居たが、

『さうです、その通りです。』と、きつぱり云放つて、『あなたは迚も敵にはなれないと仰しやるの。』

娘の氣質を知つて居る壽子は、態とさういふ言葉をつかつたのだ。それはまさしく芙蓉子の敵愾心を刺戟したに違ひなかつた。芙蓉子は未知の惠美子に對しては、決していゝ感情は持つて居なかつた。この女に自分の戀人を取られたのだ――と、いつでもさういふ潛在意識があつた。

惠美子に何の罪もない事はよく知つて居る。逢つて見れば友達になれる女かも知れないとも思つて居た。既に惠美子のものになつた信重を、彼女から奪ふ事を、今まで考へて居なかつた事は無論である。が…。

母は言葉をついで云つた。

『その女は隨分したゝかものらしいのです。私は奧樣から伺つて居るだけだけれども、一度奧樣を訪ねて來て、奧樣の御承認の言葉がなかつたところから居直つて、これからは奧樣を敵にして鬪ふ、飽くまでも信重さんを自分のものにして見せる、そして奧樣を自分の足元に跪かして見せると、そんな凄い事を云つて引取つたさうです。それは奧樣の事だから負けてはいらつしやらなかつたらうけれども、そんな女なのですよ。』

『まア、そんな事がありましたの、隨分ですわね。…そんな人なのでせうか。』と、彼女の敵愾心が、再び刺戟を受けた。

「だからあなたは尻込みをするといふの、一筋繩では行かぬ女だから、あなたには太刀打が出來ないかも知れません。それならそれで奧樣にお斷りをして了へばいゝのですからね。』

芙蓉子が女學生時代に、さま〴〵の運動競技のチャンピオンで、競爭心において、人一倍勝つて居る女である事は前にも云つた通りである。彼女は戀愛に對して、まだ深刻な經驗はない。それがこの場合幸ひだつたとも云へる。從つて戀愛をスポーツ視する彼女の周圍の社交的雰圍氣が、彼女に影響を與へぬ道理はなかつた。この競技にあらん限りの努力を試みてもいゝ、相手が相手だけに是非勝つて見たい、――さうした慾望が、戀愛それ自體よりも、刹那に彼女を驅つた。

『母樣、私、やつて見ますわ。成功するかどうか分らないけれども…。』

決心して母を見上げた彼女の顏は、昂奮に蒼ざめて見えた。

壽子は極めて滿足らしい、會心の微笑を浮べて、

『さう。それでは奧樣もどんなにかお喜びでせう。あなたならきつと成功します。』

『ですけれども私一人の力ではとても…。』

『奥様は漫遊と仰しやるのは表面で、實はあなたを助けるために、巴里へいらつしやるのです。奥様はこの問題に全力を灑いでいらつしやるのです。私は出來るだけあなたに智慧を貸します。たゞ信重さんに對しては、大事にも大事を取らなければなりません。そしてあなたの感情を餘り深入りさせて了ふ事も禁物です。それだけはよく心得て置くやうにね。』

『えゝ……。』

『信重さんは今安心しきつて、あなたをたゞ妹のやうに愛して居るのです。あなたも當分決して信重さんの感情を裏切らないやうに……。』

『えゝ、承知して居ますわ。』

芙蓉子はさう答へて、深い溜息を吐いた。覺悟はして答へたものの、それは決して容易い仕事とは思はれないのだつた。

## 危險な遊戯

信重の兩親のための借家探しは、壽子夫人、芙蓉子、信重の三人で、數回試みられたが、やはり最初の話のパッシーにある家が一番よささうなので、それに極める事にした。トロカデロに近く、セーヌ河に臨んだ斜面に建てられた、雅致のある獨立した二階建で、自動車庫のついて居る事や、可なり贅澤な帝國式の家具、掛額、ピアノなども附屬して居て、そのまゝ入れる事が便利だつたからである。この家がいよ／＼極められたのは、丁度伯爵夫妻が日本を立つたとの電報を受取つた翌日であつた。

時は夢のやうに過ぎて行く。レヴェヨン、そして耶蘇降誕祭、そして新年、巴里の外觀には何の變化もなければ、歳末の慌しさも見られない。若し大使館に在留日本人の重なる人々を招く新年のレセプションがなければ、新年といふ事も忘れて過すであらうほどに、巴里の新年は淋しい。松尾伯爵夫妻はこの二十日に、マルセーユに着く筈なので、信重は出迎ひのため、前々日の汽車で旅立つた。

日本郵船は豫定の通りの時刻にマルセーユに入つた。信高と賴子夫人はわが子の出迎ひに、この上もない滿足の樣子に見えた。外國語を話せる中老人の執事と、賴子夫人のお氣に入りの上女中が、キモノ姿で隨行して來た。この女中は女學校を出た女なので、アドレスの横文字や單語位は讀めるのだつた。

稅關の面倒な手續を濟した上、一行は信重がこの前乘つた同じ汽車で、巴里に向つたので、翌朝十時に里昂驛に着いた事も同じである。大使夫妻と芙蓉子孃が出迎へて居た事はいふまでもない。

手荷物の處理のために、信重と執事が後に殘り、伯爵夫妻は大使夫妻に導かれて、改札口を出た。驛の廣場には伯爵夫妻のために、數ケ月間を契約されてある見事な自動車が待受けて居た。一同はこの自動車と大使の自動車とに分乘して、すぐパッシーの新邸に向つた。

パッシーの新邸は、數日前より綺麗に掃清められ、作りつけのやうな模範的の門番、腕利の料理人、氣の利いた女中が既に雇ひ入れられて居り、今日の晝の食事にはコルドン・ブルーのお手前を見せるだけの準備が整つて、一行の入邸を待構へて居たのである。

伯爵夫妻はこの新邸に一方ならず滿足した。そして大使夫妻の卒のない心遣ひを感謝するのであつた。一わたり邸内を見て廻り、やがてサロンで話の花を咲かして居るところへ、信重が執事を連れて歸つて來た。

主客打寛いでの食事は、全く巴里の美食家を滿足させるに足るほどのものだつた。伯爵夫妻は久しぶりで、純粹の巴里料理に舌鼓を打つた。巴里へ着くと驛には、もうちやんと自家用の自動車が待つて居り、初めての新邸に落

ちつけば、すぐ打寛いだ會食に、珍味を味ふ事が出來るといふやうな事は、全く思ひも設けぬ不意打で、その滿足が大きかつただけそれだけ、大使夫人の拔目のない用意に、どれほどのお世辭を雨ふらしても、足りない事を伯爵夫妻は感ずるのだつた。

兩親がパッシーに住む事になると共に、信重も一先づリュー・ド・ドームを引拂ひ、兩親と同居しなければならなくなつた事は、當然の成行と云つてもよからう。自分だけやはりパンションに居る方が氣樂でもあり、またその中惠美子を呼びよせるとすると、萬事に兩親と居るより、自由が利くと思つたのだが、差當り兩親との同棲を拒む口實がなかつたので、止むなくパッシーに引移つたのである。かくして賴子夫人の計畫は着々その歩を進めて行くのであつた。

賴子夫人は大使夫人から、その後の信重の消息、別して芙蓉子と彼との間が、どんなに有望に進展しつゝあるかを聞取つた時に、會心の微笑を漏らすのであつた。二人の世故に長けた老巧な女が、今後一緒になつて、二人の兒等を如何に巧妙に操縱して行くであらうかは、蓋し想像に難くはあるまい。恐らく信重と芙蓉子の二人が、手練の絲に操られる操人形と完全に化し去る日も、あまり遠い未來ではないであらう。

歡樂の都巴里の空氣ほど同化作用の高いものはない。こゝでは光と闇が錯綜し、清いものと醜いものが入亂れて居る。一面には氣高ささへも感じさせる巴里、一面には泥沼のやうな汚穢な巴里……が、澄んだ空氣はたゞ上層にだけ漂つてゐるので、誰もがいやでも直面するのは、その濁りきつた雰圍氣である。この下層の雰圍氣内では男も女も、夫も妻も、それ〲に享樂のプログラムを遂行するために生きて居るので、人間の目的はたゞ快樂の慾求にのみあるかの如く見える。それはわけても戰爭以來著しく目に立つ現象でもある。そして巴里へ來るあらゆるエトランジェーの官能は、阿片の常習者——それは戰後歐羅巴では女の間にさへも殖えた——のやうに痲痺されて了ふ。英吉利人が僞善の假面を脱ぐところも巴里である。亞米利加人が大びらに不身持の限りを盡すところも巴里である。巴里へ來る東洋人も、大なり小なり、それ等の數には漏れない。日本では嚴格で通つた人達も、巴里へ來ると一度は必らずその洗禮を受ける。そしてこゝではそれが食欲と同樣必然的のものとして、極めて自然の如く受取られる。旅の出來事だといふ事が、性に關して一切の辯解になる事は、巴里へ來るあらゆるエトランジェーに共通した心理である。旅だから許されるだらう、それは生理的の止み難い要求でもあり、さもなくば陷るであらう神經衰弱の唯一の豫防法でもある、等、等、かうした尤もでもあり、尤もでもない理由の下に、嚴肅な觀念が次第にルーズになつて、敢然とその頽廢した雰圍氣の中に、自個を守りきる事の出來るものが、果して幾人あるであらう。

假へば信重が、あの可憐なスザンヌと行きずりの友情を結んだとしても、彼が故郷へ殘した妻に不信であるとの非難を、眞向に浴せかけるものはこゝにはないであらう、ましてスザンヌの面影が、多少なりとも惠美子に似てゐるとすれば。

それはスザンヌの愛に惹かれたといふのではない。彼は事實芙蓉子から逃れるための避難所を、たま〲彼女に見出したに過ぎないと云つてもよかつた。

彼と芙蓉子との間には、單なる友情としてのみは見られない空氣の釀し出されて居る事を、彼は次第に感じ出したのである。彼は今まで自分には惠美子といふ最愛の妻があり、その愛は絶對のものである以上、自分の芙蓉子に與へる唯一のものは、妹に對する危險のない愛に過ぎないのだし、また芙蓉子から受取るものは、誰もが異性から享ける清い愉悅、若くは兄に對する愛、それ以外の何ものでも有り得ないと極めて居た。また芙蓉子とても自分に惠美子のある事を知つて居る筈であるから、聰明な彼女が兄に對する甘えた愛以外に深入して來る筈はないと安心しても居たのである。惠美子の來るまでの間、せめてこの純な清い友情を享樂する事を、なぜ差控へなければならない理由があらう。危險のない遊戲は許されなければならぬと、自ら道理づけて、彼は噴火山上に踊つて居たのである。

芙蓉子が極めて無邪氣に見える朗かな快濶さを持つて居る他の一面に、社交界の貴婦人らしい聰慧とウヰツトを持ち、且つ話題に富んで居る事が、彼女との交遊を極めて愉快なものにした事も事實である。さまざまの談話の機會に見出される彼女が、近代婦人の心理をよく攫んで居る頭のよさも、彼を驚かした程である。冷たい理性と叡智を以て、公然男性の放埓を振舞ふギャルソンヌの出現の問題についてさへも、彼女は極めて現代的の、少しも囚はれない批判を下して居るのである。それ等の談話を通じて信重は、彼女が舊道德に對し、多大の叛逆心を持つて居る事と、性の解放について、可なり突進んだ考を持つて居るのではないかと想像するのだつた。否、彼はさう信じて間違ひはあるまいとさへ推測するのだつた。が、正直な信重は芙蓉子が故意に彼に對してさういふ幻覺を起させようとして居るのだといふ事には、ちつとも氣がつかないのだつた。

美しい壽子夫人と芙蓉子は、社交界の寵兒である事は、既に說いたが、大使や大使夫人の紹介で、信重も社交界に出入するため、壽子や芙蓉子の姿を見せる華やかな夜會の席には、多くの場合信重の姿も見え、彼が芙蓉子のパートナーとして踊る機會がいよ〳〵頻繁になつて居た。それだけに危險はます〳〵加はつて居た譯だつた。目まぐるしい音樂の旋律、潑剌たる動き、過度に熱せられた蒸れた空氣、異性が放散する香氣、互ひに感ずるはずんだ呼吸、暖かな肉の感觸、そしてそこに釀し出される陶醉の心地は、單にそのまゝでは滿足の出來ない、本能的の慾望を刺戟せずには措かなかつた。それはさながら不可抗的の磁力で、ぐん〳〵惹きつけて行かれるかのやうに。若し人目がなかつたら、二人の脣と脣とは、狂熱的に接觸したであらうやうな場合が屢〻あつた。

彼は危險な遊戲を意識しながら、なほそれを享樂するやうな心理狀態に、だん〳〵移つて行つて居た。が、いつも惠美子の上を考へる事によつて、辛くも手綱はひきしめられるのだ。なアに大丈夫だ、戀ではない、遊戲だ、いつでもこの遊戲は止められる——さう考へるのだ。

彼は芙蓉子が自分と同じほどに、この遊戲の危險性を知りぬいて、して居る事を感じて居る。お互ひに自覺しながら遊戲をつゞける事に、危險性は緩和されると、彼は考へた。遊戲は危險なほど興味は深い。

併し、あまりにもその危險性が迫りつゝあることを感じ出した時に、彼はそれを避けるため殆んど何を顧慮する暇もなく、スザンヌに走つたのだ。スザンヌが一時は彼を救つたやうに見えた。が、結局それは彼の神經を鈍磨させる以外、何の護符にも役立たない、愚かしいもの

である事を、彼は程なく悟らなければならなかつた。

## 匿名の手紙

兩親が巴里へ來てから、芙蓉子との接觸の機會はいよ〳〵加はるばかりであつた。社交界においても、家庭においても。

芙蓉子はパッシーの新邸が、自分の家であるか、大使館が家であるか、分らない位の程度に、殆んど新邸に入りびたる事となつた。信重はどうにでもならばなれといふやうな捨鉢な氣分にさへなるやうな場合に、何度か襲はれるのだ。それはもう自分の罪ではないと思ふのだつた、少なくとも芙蓉子が自分に妻のある事を承知の上で、この遊戲を享樂して居る限りにおいて。

彼が激しい熱病のやうな誘惑から、兎も角も踏みこたへる事の出來るのは、一週間若くは十日目位に來る惠美子からの手紙のためだつた。惠美子に對する戀しさは、少しも變つては居ない、と彼は考へる。たゞやるせない惠美子の戀しさを忘れるために、芙蓉子との遊戲に耽つて居るのだ。惠美子の手紙によると、彼女も淋しさを紛らすために、さま〴〵の交友を作つて居るらしい。ロジニ氏もこのごろでは毎週一度づつ鎌倉へ通つて來てくれるし、多くの崇拜者が彼女の傍に引きよせられて訪ねて來るらしい。彼女は賑やかな生活を送つて居るのだ。丁度自分もその通りの事をして居るに過ぎない、と、彼は道理づけるのだつた。

彼は今惠美子の身邊に對しては、何の不安も感じて居ない。初め出發前、自分の出立後の留守を利用して、母が惠美子に對し、何等かの手段を取りはしないだらうかを、惠美子が氣にして居たので、彼自身も多少不安を感じてゐたのだつたが、惠美子の手紙によつて、それは杞憂で、何事もなかつた事が明白となり、そんな母ではないとの自信が裏書されたやうに、彼は朗らかな氣持になつて居たのである。

で、惠美子の身の上については安心しきつて居り、たとひ彼女がその周圍にどんなに多くの崇拜者を惹きつけて居ようとも、彼女に對して絕對の信頼を拂つて居る彼だつた。ところが或日信重は惠美子からの書面と同時に、他の一通の誰からとも分らぬ、日本からの手紙を受取つたのである。

惠美子の手紙には、この程帝國ホテルで聲樂の夕べの催しがあり、それに出演を餘儀なくされた事と、當夜は、やんごとなき貴賓の臨席さへあり、出來榮がよくて面目を施した事が書いてあつて、實はその出演のための練習にロジニ氏のところへ通ひつめたり、また來て貰つたり、何かに多忙だつたので、つい手紙を書く間がなかつたといふ暫く手紙の途絕えた辯解が記されてあるのであつた。

次の書面を開封して見ると、誰とも分らぬ女文字で、異樣の事が綴られてあるのだ。その手紙は次の通りである。

無躾な手紙を差上げます。

私は公會の席上であなた樣に一度お目もじした事がございますが、當分名を祕して置く事だけお許し願ひます。たゞあなた樣と惠美子樣の御幸福を祈る事において誰にも劣らぬものである事を御記憶下さいませ。私も惠美子樣のほんとの意味の崇拜者で、時々鎌倉のお宅には伺はせていたゞいて居ります。また惠美子樣のお噂も、始終私共音樂愛好者の間の話題に上るので、どういふ微細な事まで噂されて居るかといふ事もよく承

知して居ります。私はこんな事を申上げるのはほんとに厭な事ですし、たゞ傍觀して居ればいゝ事かも知れませんが、どんなに惠美子樣を愛し、惠美子樣のお名を惜んで居るかも知れない私として、たゞ傍觀して居るのは不忠實の極みであると考へましたので、思ひ切つて申上げるのでございます。それはロジニ樣と惠美子樣の間に、全く聞捨てにならない噂が立つて居る事でございます。私はそれが噂に過ぎないものである事を、少しも疑つては居りませんが、あまりにその噂が烈しく、今に問題として表面に現はれさうに思はれますので、この上もなく痛心して居る次第でございます。尤も西洋人の慣習を知らない日本人の間に、そんな噂の立つといふ事は、無理もないと思はれる節が、私の目で見てもないではございません。ロジニ樣はあなた樣がお立ちになつて後、あまりに頻々と惠美子樣をお尋ねになります。私共日本人の目から見れば、全く目に餘るやうな事も平氣でなさいます。そして惠美子樣もそれを許しておいでになります。併し惠美子樣に何もやましい事のないのは、私が申すまでもない事でございませう。たゞこんな噂が烈しく立つて居る以上、それが新聞に載るやうな日がないとどうして申せませう。私は惠美子樣をお救ひするのは今の中だと存じます。そしてそれはあなた樣以外には出來ない事なのでございます。それでこの書面を差上げましたので、私の目的はたゞお節介に世間の噂を申上げてお氣を惡くするといふのではございません。實はあなた樣にすぐ惠美子樣を巴里へお呼びよせになる事をお勸めしたいためなのでございます。あなた樣を熱愛していらつしやる惠美子樣が、喜んでそれに應じぬ理由がどうしてございませう。それが今日では惠美子樣の名譽をお救ひする唯一の途だと考へるのでございます。どうかあなた樣方お二人の幸福を切にお祈りして居る私の無躾な勸告をお容れ下さる事を切望いたします。それにつけても私は噂の内容を詳しくは申上げられない事を悲しみます。どうか私を信じて一刻も早くあなたの惠美子樣をお救ひ下さいませ。いづれ其中私から重ねて御通信を申上げる機會があるかも知れません。今日はこれで筆を止めます。

意外なこの手紙が、ひどく信重を昂奮させて了つた事は當然である。併しそれはこの手紙によつて惠美子を疑ひ出したといふのでは決してない。かういふ手紙を自分によせた匿名の女性に對して、制へ切れない怒りを感じたのである。彼はそれが根もない噂とは云つて居るけれども、噂の内容がもつとひどいもので、それが事實であるらしい事を仄めかして居ると取れる以上、斷じて中傷であると考へるのである。

併し此女は何のためにそんな中傷の手紙を書いたのだらう？　この手紙を書いたために、どんな利益があるといふのだらう？

彼は考へて見ても分らなかつた。その中次第に頭が冷靜になつて來ると、秩序立つた思索に入る事が出來た。

この手紙には二ツの場合を考へる事が出來る。それは何か爲にするところがある中傷の場合、この手紙にある通り、事實噂がひどいので、惠美子の上を氣遣ふあまり、好意の勸告を自分によせたと見る場合。

第一の場合を假定して、自分の感情を惠美子から引離して、利益を受けるものは、今日本には誰も居ない筈である。だからたゞ想像し得る事は、惠美子の崇拜者の間の無益な競爭から、ロジニを遠ざけようとする苦肉の策を弄して、匿名婦人を使用したと見る事だ。それは必らずしも有り得ない事ではないが、それにしては惠美子をすぐ巴里へ呼びよせさせようとする意味が分らない。從つて中傷とのみ見る事は、適切な判斷ではなささうにも思はれる。

第二の場合を假定して見ると、尤もな解釋が成立ちさうである。ロジニに關する噂のある事は事實かも知れない。すべてに大まかな目で見る歐羅巴と違ひ、他人の私事に立入つて、何でも問題をでツち上げなければ承知しない、小うるさい事にかけて、どこの國にも勝つて居る日本で、大陸の慣習をそのまゝ行つて居るに違ひないロジニと惠美子の間の誤解されるといふ事は有り得る事である。それは無論噂だけのものに相違ない。そんな噂なら勝手にさせて置けばいゝのだ、時がすぐ解決してくれるではないか。馬鹿々々しい。そんな事を疑ひ出したら、歐羅巴の社交界などでは、一日も過しては居られない。

が、併しロジニは、妻に對して少しフラートを仕過ぎると、彼は思ひ廻らすのだ。それは外人の慣習たとも云へるけれども、ロジニは事實妻を戀して居ると、これまで思はぬではなかつた。たゞ彼が妻を信じて安心しきつて居ただけだ。人妻に對する戀の遊戯を除いたら、歐羅巴の社交界に何が殘るだらう。さうした空氣の中で洗禮を受けて來て居るロジニであり、惠美子である。自分が居ないとすれば、ロジニは大膽にもなり得るであらうし、妻はそれを興味を以てあしらつて居るかも知れないのだ。併したゞそれだけでも、日本では噂の種となるに十分であらう。だから噂のあるといふ事は事實かも知れない。ロジニに賴りて居る妻としては、寄らず觸らぬ態度で受流して居るだらう。たゞ妻に間違ひのない事だけは、最後まで信賴し得る。

さうも考へる一方、信重は自分と芙蓉子の間に演ぜられて居る遊戯を思ひ出す。自分が妻を戀して居る中は絶對のものである、にも拘はらず、この遊戯に耽つて居る同じ心理が、惠美子にも働かないとどうして云へるだらう。それは芙蓉子を見ても知れる通り、從來男のみに許された遊戯を、女も今は自分達の權利として、實行に移して居る世の中ではないか。キャルソンヌの出現は佛蘭西のみの問題ではない。惠美子は日本の女でありながら、日本の女ではないのだ。大戰の洗禮を受けた歐洲婦人なのだ。長く只一人日本に殘して置くといふ事は、いけない事であるに違ひない、外人が決して妻を只一人殘して外國に行かぬ通りに。

信重はだん／＼不安になり出した。兎に角すぐに妻を巴里へ呼びよせる方が、兩爲であると考へるやうになつた。自分も間違ひがなくて濟むし、惠美子に取つても萬全の策だ。六月中に巴里へ來るやうにとは、二人の間に豫め打合はされてある事ではあるが、六月に來るも三月なり四月なりに來るも、五十歩百歩で、どうせ六月まで待つても兩親はまだ巴里に居るのだから結局は同じ事だ。兩親に隱して妻の隱れ家を作る事も、この巴里では大して困難な事ではない筈だ。――さう思ふと彼は一刻も早く惠美子を呼びよせる事に、なぜ氣がつかなかつたと悔まれる位だつた。

妻の旅券の事や何かの世話は、外務省の友人に、出發前內々賴んであつたので、すぐ手續をしてくれるに違ひなかつた。手紙は早い程いいと、彼はせき立てられるやうな慌しさで、

すぐ巴里へ來るやうにと、惠美子にあてゝ手紙を書いた。そして自身郵便局へ出かけて行き、書留にして送つたのである。

## 惠美子の姙娠

何かしらいら／＼しい日が過ぎた。彼が惠美子へ手紙を出してから數日の後、信重は惠美子の手紙を受取つた。それにはいつものやうな身邊の消息があり、相變らずロジ二氏の事があつて、信重の戀しい事も書いてあるが、巴里へ早く立ちたいといふやうな事は、一言も書いてないのだ。初めのころの手紙には早く行けるやうにと祈りの言葉が必らず記されてあるのに、最近のものには、それのない事が、彼の心をますます不安にした。

更に數日を過ぎた或夜、他出先から歸つて來て、自分の書齋へ入つて見ると、二三通の郵便物と共に、日本からの手紙が、一通デスクの上に置かれてあつた。彼はその手紙の封筒と筆蹟から、二週間前にすつかり彼の心を擾亂して了つた例の匿名婦人の手紙である事を感じた。彼は自分の敵とも味方とも分らぬこの手紙を、開封する事を躊躇したが、結局開けずに居られない誘惑に驅られて、すぐ手紙を破つて見た。

それには次の通りに認められてある。

私から二週間前に差上げた書面を、御受取下すつた事と存じます。あのやうな根據のない噂話などを申上げて、私も只今は後悔いたして居ります。それで今日はおわびかた／＼最後の書面を差上げる次第でございます。惠美子樣から最早お手紙があつて、御承知になつていらつしやる筈だと存じますが、惠美子樣は生憎と巴里へお立ちになる事がお出來にならないさうでございますね。なるほど只今姙娠四ケ月のお身體では、長い汽車旅は勿論、船旅もお出來にならない事は、御尤もでございます。そんな事はちつとも存じませんでしたので、あんな手紙を差上げて、餘計なお勸めをいたしました罪をお許し下さいませ。この上は内地で十分御靜養の上、玉のやうな赤ちやんを御分娩遊ばす日をお祈り申上げます。あなた樣も嘸お喜びの事でございませう。たゞそのため近く巴里に惠美子樣をお迎へ遊ばす事のお出來にならない點に御同情申上げます。この上は私から何た申上げる事がございませう。これを通信の最後といたします。

この手紙は晴天の霹靂の如く信重を打ちのめした。彼の頭は全くめちや／＼にひツ掻きまはされて了つた。手紙を信じて了つたといふのではさら／＼ない。信じはしないが烈しい混亂の種を蒔きつけられて了つたのだ。この手紙も中傷であらうか。無根の事實を誣ひたものであらうか。が、姙娠して居ないものを、姙娠したとどうして云へる？ すぐ後から剝げる譃を、云ふ事にも事を缺いて、姙娠などと誣ひる筈もない。姙娠といふ事はひよつと事實かも知れないのだ。が、もし事實なら、なぜ惠美子から云つて來ない？ 今までの手紙に、いや現に最近の手紙にさへ、それを匂はせるやうな文句は一ツもないのだ。姙娠したものを良人に隱す理由がどこにある？ 姙娠といふのは譃だ、斷じて譃だ！

それも姙娠といふだけなら兎に角、彼を戰慄させたのは四ケ月といふ文字だつた。六ケ月とか、或はせめて五ケ月といふなら、彼の心にこんな混亂を起させなかつたであらう。この手紙の日附から繰つて見て、彼が日本を立つてか

らやがて五ケ月になる。五月といふのでさへ、不安なものがあるのに、まして四月と云へば不義の子だといふ事を、裏書して居るやうなものだ。この手紙の眼目はその四月の二文字にあるに相違ない。何といふ恐ろしい手紙だ。

よし姙娠が事實であるとしても、四月といふ筈は斷然ない。姙娠も全く事實でないに違ひない。四ケ月位の姙娠は醫者でない限り、他人に分る筈もないものを、赤の他人の匿名婦人にどうして知れる？ それは有り得ない事だ。間違ひもなく中傷の手紙だ。こんな手紙をよこす位の女だから、今度目には辻褄を合はせるために、墮胎したとでも云つて來るかも知れない。こんな手紙に昂奮したのは何といふ馬鹿げた事だ。惠美子の姙娠は有り得ない。それは中傷の作り事なのだ。

信重はさう判斷する事によつて、心の平靜を恢復しようとした。が、それは駄目だつた。一度注射された毒は、全身の血管を循環せずには居ない。それが無根の事實であればあるやうに、無ければないやうに、ハッキリ確かめたい心持が、彼を物狂はしいまでにした。その後の數日は彼の生活は全く悲慘そのものだつた。それを家人に悟られまいとして、何でもないやうに振舞ふ彼の苦痛は、言語の外だつた。

懊惱の一週間が過ぎた。待設けて居た惠美子の手紙が屆いた。が、この手紙によつて安心を得たいと思ふ期待は無益に終つた。その手紙にはいつもの通り身邊の消息以外に何ものもなく、姙娠の事などは少しも書いてないのだ。自分の疑ひを解決したいと思つて居た彼に取つて、全く物足りないものだつたが、たゞそれによつて消極的の安心を味ふ事だけは出來た。この手紙にも何もないからは、姙娠の事はいよいよ事實無根なのだ、それに違ひないと、どうやら極めがついたらしく思はれる事、それだけだつた。それでも彼はほつとした。この上は決して姙娠であつてくれるな、あつてはならないと、彼は祈つた。

無論姙娠して居るとすれば、第一に自分に云つて來る筈なのに、今度の手紙にさへ何もないのだから、事實無根である事に間違ひはない。姙娠のために日本を立てないなどといふ事は、全く有り得ない事だ、すぐ日本を立てと云つてやつたあの手紙の返事さへ來れば、すべての疑惑は一掃されるのだ。無論惠美子は二ッ返事で立つと云つて來るに違ひない。

彼は一刻千秋の思ひで、妻の返事を待つた。すぐ返事を出しさへすれば、もう來る筈だと思ふのになか〳〵來ない事が、だん〳〵彼を焦立たせた。

その中にやつと惠美子の返事が屆いた。大使館から歸つて、自分の書齋へ入つて見ると、今日もデスクの上に置かれてあつたのである。急がしく開封する彼の手が震へて居るのでも異常に彼の感情の昂ぶつて居る事が察せられる。手紙は次の通り——

お手紙拜見いたしました。早速お返事を差上げる筈ですが、醫者に相談したり何かのため、四五日後れまして濟みません。私が一日も早くお傍へまゐりたいと願つて居る心の中は、御存知の通りでございます。五月末ごろに立つようとの最初のお打合せだつたので、どんなにその日を待設けて居た事でせう。それにお手紙には五月を待たず、すぐ立てとの事なので、私が飛立つほどの思ひになつた事はお察し下さるでせう。それだのに私は巴里へ立てなくなつたと申上げたら、どんなにかお驚きになる事でございませうね。私ほんとに當惑して居りますの。

それは只今姙娠中だからなんでございます。かね〴〵赤ン坊が欲しいと仰しやつていらつしつたあなたは、きつと喜んで下さる事とは存じますが、たゞ時期が惡いんでございますわ。私、ほんとにどうしたらいゝでせう。

あなたのお立ちになつた月には、ほんの少しばかり見るものは見たのですが、次の月から全く無くなりまして、何だか變だと思つて居ましたが、これまでもどうかすると、一月無かつたりする事があつたので、あまり氣にも止めずに居りましたの。ところがそれからはずつと無くなつて、この一ケ月ばかり前からは、何だか身體の調子が變なので、醫者に見て貰ふと、どうも姙娠らしいと申されたぢやアありませんか。その時申上げて置けばよかつたんですが、でもまだ不確かな事なんですし、いよ〳〵それと極れば佛蘭西に立てなくなりはしないかと、そんな不安も手傳つて、あなたに無益の御心配をかけてもと、ついお知らせせずに、延び〳〵になつて居たんでございますの。

それがいよ〳〵お手紙を頂く四五日前、また診察して頂くといよ〳〵姙娠だと云渡されましたので、すぐお手紙を差上げようと存じながら、生憎の時に姙娠したので、あなたが喜んで下さるよりも失望なさりはしないかなどと、いろ〳〵の取越苦勞に、手紙を書澁つて居るところへ、あのお手紙なんでございますわ。それで私の佛蘭西へ行きたい心が、また矢のやうになつたものですから、迚も歲には出られぬと聞かされては居ながら、なほ念のため外の醫者にも相談したり何かで手間取つたのですが、やつぱり長旅は絕對にいけないと云はれて了ひましたの。それも七月八月にもなれば却つて心配がなくなるが、現在旅立つ事は此上もない冒險だと申されたんでございます。私、ほんとに困つて了ひましたの。でもあなたがそれでも立てと仰しやれば立ちますけれども、どうしたらいゝんでございませうね。私はやつぱり夏休みに御迷惑でもあなたに歸つて頂けたらそれが何よりだと存じますが、お願ひですからさうして下さいませんか。兎に角お差圖を待つ事にいたしますわ。いろ〳〵申上げたい事もありますが、筆が廻りませんから、今日は取急ぎ、これだけを申上げます。私の健康はこのごろでは平生と少しも變りませんから、決してお案じ下さいますな。

恐れて居たものは遂に來たのだ。信重は土のやうに蒼ざめて、手紙をデスクの上に叩きつけた。

## モンモランシー

中傷の手紙によつて、先入主となつて居るところへ、惠美子から後ればせに姙娠の手紙が届いたため、信重の心はすつかりめちや〳〵にされて了つた。それが正當な自分の子であるかどうか、もう信じられなくなつた。別れてから五ケ月以上もたつて、初めて姙娠を報じて來るといふ事は、心に疚しい事があつたためではないか。姙娠の疑ひがあつたら、その時にまづ眞先に知らして來て、自分を喜ばせようとしなければならぬ筈ではないか。第一人の噂に上るほどロジニ氏と馴親しんで居るのが間違つてる。惠美子を絕對に信じて居たればこそ、目に餘るやうなこの伊太利人の行動も許して居たの

だ。が、とう／＼裏切られたのだ。惠美子の身體だけは日本人であつても、心はやつぱり伊太利人になり切つて居るのだ。――彼は一途にさう考へて了ふほど、舊の信重ではなくなつて居た。

煩悶と懊惱の日がつゞいた。彼はだん／＼自暴自棄に傾いて行つた。惠美子に限つてと考へる傍から、すぐそれを打消して行くのだ。すべては離れて居るもの同士の不幸である。二人が向つて話し合へば、何でもなく氷解する事も、遠く離れて居ては、一度疑ひが兆した限り、ますます疑惑の淵に深入するばかりである。詰問して見るには何も根據がないので、彼は四五日過ぎてから、妻にあて、佛蘭西へ來る事は斷念して、よく靜養するやうにと、たゞそれだけの簡單な返事を出した。

自暴自棄の生活はつゞいた。どうにでもならばなれと思ふのだつた。その原因を知つてか、知らずにか、芙蓉子は何かと彼の氣分を引立てようと勉めた。それは多くの場合に、誘惑的でさへもあつた。自分と芙蓉子との間が、この上はどんなに進展して行つても構ふものか、というふやうな捨鉢な氣分が、彼に濃厚になつて行つた。

彼はカジノ・ド・パリやフォリ・ベルジエールを友と共にあさり歩いた。スザンヌとも度々逢つた。が、一時的の興奮以外に、彼を愉快にする何ものも、かち得なかつた。或時は芙蓉子と狂熱的に踊つた。或時は向う見ずに、ボアの中を息のつゞく限り、馬で駈けさせたりした。

最終の破滅の日が、遂に來た。

或休日に彼は芙蓉子と共にモンモランシーまで遠乘をしたのである。その日は賴子壽子の母親同士は後から自動車で行き、森のレストランで落合ひ、晝食を取る筈に打合はしてあつたが、母親同士は都合が出來たといふ口實のもとに、子供達ばかりを馬で出したのである。モンモランシーの名は、佛蘭西では誰にも知られて居る固有名詞ではあるが、それはその土地の名よりも、寧ろその所領者であつたモンモランシー侯爵家の名によつて知られて居るので、十世紀ごろからこの舊家から出た歷史的人物の數は、十指を屈するも足りないほどである。佛蘭西の古い都は、それ自體に趣味があるが、わけてもモンモランシーは最も古い町だといふばかりでなく、その古城塞を繞る廣大な森林は最も有名で、こゝと相隣接する溫泉場や競馬場で知られて居るアンギャンからこのモンモランシーへかけ、夏は巴里からの避暑客の絶えぬ遊覽地なのだ。信重はモンモランシーの發音に、一種のアトラクシュンをさへ感じて居るので、一夕この遊覽地の話が出ると、一日がけで出かける相談が、容易に成立つたのであつた。

サン・ドニ、アンギョンを廻つて行つて、十哩前後なので、遠乘には云分のない場所だつた。二人はまづ轡を並べてクリシーを拔け、郊外のサン・ドニに出た。佛蘭西最初のゴチック建築で、有名な同じ名の大寺院を、芙蓉子は一度見舞つて居るので、信重を案內すると云ひ出し、二人は馬を降り、寺院の見物を始めた。內部の偉大な柱や、天井、美しいステンド・グラスなど、この寺院の特色がまづ人目を惹く。が、信重はそんなものを仔細に點檢する心の餘裕を持たなかつた。それは單に芙蓉子を滿足させるため、寺院の內部を見物して廻つたに過ぎなかつた。

サン・ドニを出て、一時間あまりの行程で、近代都市であると云つてよいアンギャン溫泉場へ來た。樹木と遊園地に圍まれて居る美しい湖水に臨んだ氣持のいゝ小都會だつた。前面に船型の露臺を持つたカジノ、これと相對した同じ性質のキャールサール娛樂場は、一面に巴里市

外の、シックな戀愛市場でもあつた。併しそんなところは横目に見ただけで、美しい湖水の周圍を一巡した上、湖畔のレストーランに入つた。時刻にはやゝ早かつたが、場所が氣に入つたので、そこで戀人らしい食事を取り、ゆつくり休息した上、目的地のモンモランシーに向つた。

こゝからモンモランシーまでは、殆んど町つづきと云つてもよい位だつた。靜かに馬を打たせて、この古い十世紀以來の町を見物しながら進んだ。町は爪先上りの高地になつて居り、坂を利用して立てられた區域が多く、歐羅巴のさういふ古い町の、伊太利にでも、西班牙にでも見られる、狹い彎曲した古典な街衢と建物が並んで居る光景は、近代建築とジャズに誘惑されて居る現代人に、柔らかな懷古趣味と、古鄕に歸つたやうな安易さとを與へずには置かなかつた。

こゝにはジャンジャック・ルーソーの住んで居た家が保存されてあり、市役所の建物の中には、ルーソー博物館があるので知られて居る。が、二人は別にそんなものを見ようともせず、この町までもを圍繞する大森林の中に、馬を乘入れたのである。

森の中には縱横に逍遙道路が通じて居る上、馬道もまた縱横に通じ、時には逍遙道路と交叉して居る。そして森の最高地點にモンモランシーの古城塞があるのだ。二人はまづ一直線にこの古城塞まで來て馬を駐め、そこのカフェーで暫く休息した上、この美しい森の中を心ゆくばかり乘廻して見ようと語り合ひ、カフェーを出ると、馬に一鞭あて、木々の枝で蔽はれて居る馬道を驅けさせたのである。

森の中で芙蓉子は馬鞍にはしやいで居た。運動のため顏は紅潮して、眼は美しく冴え、取りわけ信重を見る眸子は、ひどく蠱惑的だつた。それは兎もすれば信重の自制心を失はせようとする性質のものであつた。

どうする事も出來ない本能の衝動から逃れようとするかのやうに、信重は芙蓉子にかまはず、突然疾驅し始めた。芙蓉子もそれにつゞいてまつしぐらに走らせた。競馬のやうに暫くは馬首を並べて居たが、芙蓉子が更に一鞭あてて信重を追ひぬいた。その刹那である、馬が何かに躓いたらしく、芙蓉子の身體があつといふ叫び聲と共に、路傍に投出されて了つたのは。

信重は驚いて、馬を止めると、ひらりと飛下りて芙蓉子の傍に走せよつた。

芙蓉子は全く氣を失つて居る。

「芙蓉子さん！　芙蓉子さん！」と、抱起して呼ばはつたが、返事がない。

マロニエの根株で、脾腹の邊でも打たれたらしい。顏や腕には擦傷一ツ受けて居ないが、どこか打ちどころが惡いのではあるまいか、絕息して居るのが心配である。

彼はこんな時の應急處置については、何一ツ心得がなかつた。一時の絕息に相違ないと信じて居るものの、恐ろしく氣がかりである。搖ぶつて見ても、呼んで見ても少しも手ごたへがないのだ。森の奥ではあるし、まだ季節以外なので遊覽者の影さへ見えない。彼は全く途方に暮れて、芙蓉子の上半身を抱上げたまゝ、暫くは茫然として居た。

水でもあればと思ふけれども、高地のこのあたりには噴泉もなければ、無論谷水のある筈もない。馬を走らせれば、一走りで人を呼んで來られるが、假令暫時でも氣絕して居る芙蓉子一人をそのまゝにして、離れる事は素より出來ない。

まさかこのまゝ蘇生せぬやうなことはあるまい？　そんな恐怖にさへ襲はれながら、掌で呼吸を伺つて見ても、はつきりしないのだ。胸

に觸れて見ても、乘馬ジャケツの外からでは、やはり何も感じられない。で、彼は多少躊躇した後、思ひきつて胸の釦を外し、肌着の下から手を差入れて見た。肌はしつとりと汗ばんで居て、むれるやうな體温が感ぜられるばかりでなく、たしかに心臟の鼓動が掌を通じて傳はるのだ。

全く一時の絶息と信ずる事が出來ると、彼は初めてほつとした。が、それと同時に今度は彼自身の心臟が烈しく波打ち始めた。彼の手は觸れてはならないものに觸れて居るのだ。

急がしく彼は芙蓉子の胸から手を引いた。そして燃ゆるやうな眸子で、正體のない芙蓉子の顏をぢッと見つめた。彼女は無心の天使のやうに眼を閉ぢて居るのだ。何一ッ苦悶の表情がないばかりか、頰の赤味さへ失はれては居ない。蠱惑的な形のよい小さな赤い脣が、さながら何ものかを待構へて居るやうに見える。すべてを忘れた彼はいきなりその脣に接吻した。再び三度！

## 急轉直下

途端に彼女は眼を睜いた、その脣に幽かな微笑を漂はして。

信重は顏を赤くしたが、もう度胸は据つて居た。彼女は男の接吻を今もその脣に感じて居るに違ひない。その口元は更にそれを貪り望んで居るかのやうに見える。

『おゝ、芙蓉子さん、氣がつきましたか。』

「えゝ……私、氣絶して居たのですわね。」と、夢みるやうに小さな聲で囁いたが、身體はまだ海鼠のやうに、男の腕にぐつたりして居た。

「どんなにびつくりしたか知れませんよ。私があんなに走り出したのが惡かつたんです。どこも怪我はありませんか。どうです。』

『身體中が何だか打たれたやうよ。』

『脾腹を打たれはしませんか。』

腋に觸れて見て、

「いゝえ、大丈夫よ。何だかお臀の方が……。』

「股の邊でも打つたのでせう。立てますか。」

『立てると思ふわ。起して見て下さいね。』

信重が抱起して見ようとすると、

『あ！　いたい！」と、叫んで、信重の腕にたふれ込んだ。

信重は再び舊の位置に芙蓉子を抱へたまゝ、

『やつぱり股をやられたんですか。』

「えゝ、太股にかけて、それは迚も痛いのよ。かうして居ると、そんなでもありませんけども、迚も立てませんわ。骨が挫けたのぢやアないかしら……。』

『そんな事はないでせう。併し困りましたねえ、これが巴里のボアででもあれば、すぐお家へ、何ででも運べますけれども……全く困りましたね。早く醫者に應急手當をさせなきやアなりませんが、あなた、暫くこゝに待つてられますか、私は大急ぎに町へ出て自動車を見つけて來ますが……。その上で差當りホテルへお連れする事に……。』

『えゝ、さうして下さい、私、自動車の來るまで待つてますから……。』

「辛抱出來ますか。ぢやアそこに切株がありますから、それへかけさしてあげませう。』

「それよか、そこの木へよりかゝらせて頂いた方が樂らしいわ。』

信重は芙蓉子を抱へて、そつと半身をマロニエの大木の根本によりかゝらせた。その間大分痛むらしいのを、芙蓉子は齒をかみしめてこらへて居た。

「えゝ、これで大丈夫だわ。それぢやア私の馬を繋いどいて下さいね。』

二三十間の彼方にとまつて居る馬をひつぱつて來て、芙蓉子の傍に繋いだ上、

『では一走り走つて來ます。暫く我慢して居て下さい。』

彼は己が馬に一鞭當てると、モンモランシーの町を目がけて、森を一散に駈出した。そして二十分あまりすると、一輛の自動車を從へ、馬を急がせて歸つて來た。

『まア、濟みません。御苦勞様でしたわね。』と芙蓉子がにつこり笑んで信重を迎へた樣子は、大した怪我人とは見えなかつた。

『隨分待つたでせう。ホテルはアンギャンの方がいゝのがあつて、醫者もいゝのがあるさうです。いつそアンギャンに引返す事にしたらどうでせう。』

『ぢやアさうしませうよ。』

信重は運轉手の手をかりて、芙蓉子を車內に助け入れ、自動車を徐行させた上、信重自身は乘馬で、芙蓉子の馬の手綱を取つて歩ませ、自動車に引添つて、アンギャンに取つて返したのである。

落ちついた宿は湖畔の平和ホテルである。この遊覽都市における第一流のホテルなので、設備もサーヴィスも、他のどこのホテルに比べても遜色のない許か、一人々々を滿足させた。

自動車が宿につくと、芙蓉子は多くの給仕人によつて、ひどい怪我人でもあるかのやうな大がかりで、寢臺に運び込まれたのであつた。

二室つゞきの、可なり贅澤な寢室に、只二人殘ると、芙蓉子はまづ滿足らしい媚のある無言の笑を、寢臺の中から信重に送つた。

『痛みはひどいですか、自動車に搖られたり、かつぎ込まれたりして、どうです。』

『えゝ、そのためにひどくはありませんわ。でも觸るとそれは痛いのよ。やつぱり骨がどうかして居るやうよ。當分迚も歩けさうもありませんわ。……あなた、飛んだかゝり合せで、ほんとに御迷惑ね。』

『そんな他人がましい挨拶はよして下さい。追つけ醫者も來てくれるでせう。まさか骨が挫けては居ないでせうよ。……それはさうとお家へ電話をかけなければなりませんね。』

『あら、どうして？』

『どうしてつて、骨が碎けてるかも知れないといふ大怪我をなすつたんぢやアありませんか。』

『待つて下さい。それはかけなきやアならないかも知れませんが、お醫者に診て貰つてからの事よ。だつて母に無益の心配をかけたかありませんわ。』

『それもさうですね。では醫者の診察の結果を待つてからにしませう。』

その中に片眼鏡をかけて、顋に半白の羊鬚を生した、信用の置けさうな醫者が來た。醫者は無造作に觸診をして見た上、

『大したお怪我ではありませんね、幸ひに。強く腰部を打たれたといふだけです。多少皮下出血をして居るやうですが、塗擦劑を看護婦に塗らしてあげます。それで癒りませう。』と、至極簡單に片づけて了つた。

『さうでせうか。觸るとほんとに痛みがひどいんですの。もしか骨が挫けて居るやうな事はないでせうか。骨が挫けて居たらレントゲンをかけないと分らないでせうね。』と、芙蓉子は多少なりとも重く見て貰はうとして居た。

『骨には何の異狀もありません。それは觸診だけで完全に分ります。レントゲンの必要などは少しもありません。御安心なさい。併し大分強くお打ちになつて居るから、二十四時間ほどは、身體をお動かしにならない方がいゝでせう。』

芙蓉子はほッと滿足して、

『では自動車で巴里へ歸つてはいけませんわね。』

『止むを得ない場合の外は、明日までこゝで靜

養なさるがいゝでせう。』

『有難うございました。』

醫者が歸つて行くと、信重が近よつて、

『まア、大した怪我でなくて結構でしたね、やつと安心しました、私の責任ですからね。』

『えゝ、でもあなた、今夜歸れません事よ。』

『併し二三時間もたつて、もしか無理が出來るやうだつたら……。』

芙蓉子は咎めるやうに、ぢッと信重を見て、

『二十四時間ぢッとして居なけりやアならないと、醫者の差圖ぢやアありませんか。私、大事を取る事にしますわ。』

『それなら兎に角お家へ電話をかけなけりやアなりません。そしてお母さんに來て頂く事に……。』

芙蓉子は齒痒さうに、

『そんな病人ぢやアない事よ。あなたが居て下されば、母に來て貰ふ必要はちつともありませんわ、それともあなた、私の看護をして下さる事、そんなに御迷惑？』

『しかし兎も角お母さんのお許しを得なければ……。』

『それは私から電話はかけますわ。いくら怪我をしたからと云つて、無斷で泊る事は出來ませんからね……でも電話をかけるのは、モ少し後にしますわ。』

『それは御隨意に……。ではアンギャンで一夜を過すのですね。』

『堪忍して頂戴ね。私、どんなに嬉しいか知れないんですけども、あなたはきつと御迷惑ね。』

『ちつとも迷惑な事はありませんよ、それに今いふ通り私の責任なんですから……。私がどんな看護でもしてあげなければ、お母さんに申譯がありませんよ。併し大した看護の必要もまづなささうで、不幸中の幸ひです。……どうです、まだ痛みますか。もうさつぱり痛みがありさうには見えませんがね。』と、笑ふと、

『それはあなたがいらつしやるので、忘れて居るだけよ。やつぱりづき／＼してますわ。でもぢッとして居る分には大した事もないけども、觸つたり、動いたりすると……あ、いた！』

彼女は態と寢返りをしようとして、頓興な聲を出した。が、すぐ笑ひ出した。

『やつぱりいたいわよ。うつかり身動きすると、それは迚も痛むのよ。ほんたうよ。』

『だから動かずにいらつしやい。』

『でもあなたが大袈裟にして居るやうに取つていらつしやるから、それで動いて見たのよ。』

『何も大袈裟にして居るやうに取つては居ませんよ。どうしてまたそんな想像をなさるんです。』

『でもあなたのお顔にさうあるんですもの……』

『飛んでもない、私は心からあなたの苦痛に同情をして居るんです。』

『ではいつまでも傍に居て下さるわね。』

『傍に居てあげます。かうなつたら一晩中でも……。』

『まア、嬉しい！』

## アンギャンの一夜

程なく看護婦が來て、塗抹劑を塗つて行つてくれた。

それから一時間ばかりして、芙蓉子は自宅に電話をかけた。夕暮の色はその時もうとつぷりと湖上に迫つて居た。電話はすぐ通じて母が出た。

芙蓉子は寢臺に横たはつたまゝ、枕頭の小卓にある受話器を取上げて、母と對話を始める。

『母樣、私、アンギャンのホテル・ド・ラ・べーからかけてるんですがね、飛んだ災難が起りましたの。でもびつくりなさらないで下さいね。モ

ンモランシーの森の中でね、私の馬が躓いてひどく振落されて了ひましたの、生憎と木の根のところへ。……私、氣絶して居ましたのを、信重さんに呼生けられて、やつと氣がついたんですの。腰を強く打つただけで、外に怪我がないんですから、安心して下さいね。でもひどく痛んで、腰がちつとも立たなくなつたのよ。私、骨が碎けたのかと思つたんですけどもね。……えゝ、それは大丈夫ですの。……やつと信重さんが、自動車を見つけて來て下すつたので、それでこのホテルへ運びこまれましたのよ。早速醫者が來て見てくれたんですが、骨は何ともないと云ひますの。只腰のところに皮下出血をして居ましてね、とても動く事が出來ないんですの。で、醫者は塗劑を塗つてくれたり、いろ〳〵手當をしてくれたんですが、二十四時間はぢッとして居なきやアいけないつて、言渡されましたの。ですから、諦めて、今夜はこのホテルに泊る事にしましたわ。いゝでせう。お氣の毒ですけれども、信重さんがついて居て、親切にして下さいますから、ちつとも心配はありませんのよ。それとも母樣、來て下さる？……えゝ、それは母樣が來て下さらなくつても、ちつとも都合のわるい事はありませんの。綺麗ですつて？　そんなものして居ませんわ。たゞ腰が立てないだけ、ぢッと寢て居る分にはあまり痛みはないんです。それだけでぴち〳〵して居ますの。看護婦なんかの必要はありませんわ。尤も手當の時に看護婦が來てくれたんですけれども歸りましたわ。え？　そのお醫者ですか、それは巴里までも知られて居る有名な外科醫ですつて、だから診察にちつとも誤りはありませんわ。……母樣、安心して頂戴ね。でも母樣、來て下さる？どう？　え？　今夜キューリーさんの晩餐會？あゝ、さうでしたわね。それなら、それを斷つてまで、來て下さるには及びませんわ。……ほんとにもう大丈夫。……えゝ、さうして下さい。明日お迎ひに來て下されば結構です。松尾の小母樣には別にお電話しませんから、母樣から仰しやつて、信重さんに今夜泊つて頂く事にしたとお傳へして下さいね。そして決して御心配なさらないやうにつて……。えゝ、よござんす、今代りますから。……信重さん、母が、あなたを呼んで下さいつて……』と、仕澄し顏につこりしながら、受話器を信重に渡した。

信重は受話器にかゝつて、

『あゝ、奥さんですか。どうも飛んだ御災難で、みんな私の不注意から起つた事なんです。芙蓉子さんをお預かりして來ながら、全く申譯がありません。……いゝえ、飛んでもない。……全く私の責任なんですから、十分に御介抱はいたします。但し事實大したお怪我でもなかつたのが仕合せです。たゞ觸つたり身體を動かしたりなさると、隨分お痛みになるやうで、今夜だけ靜養なされば、明日は少しお歩きになる位の事は出來ようと思ひます。もし今夜奥さんに來て頂けると、大變に好都合なんですが。……いゝえ、私はちつとも構ひませんが、何だか心苦しい氣もいたしますから。……さうですか、なるほど。……いや、止むを得ません。では場合が場合ですから、今夜はお附添ひする事にいたします。どうか御心配なさらないやうに……。いづれ明朝電話はおかけいたします。その上あなたがお出で下さるお出で下さらんは兎に角、馬を連れに馭者だけをおよこし下さい。それだけをお願ひいたします。……いゝえ、恐縮して居るのは私の方なんです。いづれお目にかゝつた上お詫をいたします。ではほんとに御心配のないやうに、左樣なら！』

受話器を置くと、二人はそれ〳〵に意味のある眼を見合つた。

『母は來ませんのよ。たァれも……。』

「どうもお氣の毒樣で……。」
「あら、私、こんなに喜んでるのに……。」
芙蓉子の眼は言葉以上を語つてゐる。
「私だつてこんな機會でもなければ、あなたと一夜を過すなんて、思ひもよらぬ事ですからね。」
「ぢやア喜んで下さる？」
信重は默つて點頭いた。暫く甘い沈默のつゞいた後、
「あなた、私、あの時、どの位氣絶して居ましたかしら。」と、彼女はうつとりとした眼つきをした。
「さア十分位でしたかね、いや五分位かな、併し氣が氣でなかつたので、私には何しろ十分以上の氣がして居ましたよ。」
「その間あなたのお腕に無感覺で居たのですわね。でも正氣に返るのは、丁度夢から覺めた時のやうでしたわ。あなたが私を呼んでらつしやるのが、遠い／＼ところから、幽かに聞えて居ましたの、まるで夢の中にあつたやうに……。たしかに夢を見て居たのですわ。夢ではもつともつといろ／＼のものを見ましたわ。」と、謎のやうな眼で、ぢッと信重を見上げた。
「どんな夢を見ていらつしつたのです。」と、彼は惱ましげに云つた。
「私、どうして目を覺したか、知つてますのよ。でもそれは夢でしたかしら？」
「多分夢でしたらうよ。」
さう云ふ男の顏へ、芙蓉子は默つて微笑を投げかけて居たが、
「信重さん、眠らして頂戴ね。……何だか身體中がひどくだるいのよ。眠つたらきつと恢復しますわ。」
「さア、遠慮なくお眠りなさい。私がセルペールの役目をして居てあげます。」
「まア、いや！……えゝ、でも眠るわ。そしてまた夢を見ますわ、夢を見たいのよ。」
彼女は眼を閉ぢた。濃く長い睫毛、艶のよい豐かな頰、刻んだやうな鼻、幽かに開いて、何か求めるやうな可愛い脣——魅惑的なその脣……。
彼女は望通りの夢を見た。……一度轉げ出した山の石は、行きつくところまで行かなければ濟まない。
彼女は室の中の寢臺の上で食事を取つた。食慾には素より何の變りもない。すべてが健康そのものの狀態である。
信重は窓際に立つて、町の灯や、カジノのネオン・サインが反射して居る美しい湖上を眺めながら、寢臺の中の芙蓉子に聲をかけた。
「湖水にいろ／＼の色の火が映つて、迚も美しいですよ。あなたに見せてあげたいが……。」
「あら、さう……。私、見たいわよ。」彼女は半身を起したが、「あら、あなた、私、起きられさうよ。……起きて見るわ。」
「お止しなさい、モ少し大事を取らなければいけません。」
「でも痛みも取れてよ。今眠つたのと、塗劑のせゐだわ。脚が自由に動かされるんですもの……。あなた、憚り樣ですけども、私をおろして見て頂戴ね。」
「大丈夫ですか。」
さう云ひながら信重は芙蓉子を横抱きにしてそつと寢臺からおろし、肩につかまらせて床に立たして見た。
「えゝ、ほら、大丈夫よ。私、まア嬉しい！窓まで歩いて見るわ。」
「歩けますか。」
「歩けますわ。放して見て頂戴。」
信重の手を離れて、二足三足靜かに歩き出したが、
「あッ！」

彼女は再び信重の腕に抱へられた。

「それ、御覧なさい！」

併し、それは彼女のトリックであるに過ぎなかつた。

來るものは遂に來たのだ。――アンギャンの一夜――。

### 陷穽に落ちた彼

その翌朝芙蓉子は母親に電話をかけて、一夜の休養ですつかり恢復したから、最早迎ひに來るに及ばぬ、なほ半日こゝで靜養した上で、夕方までに汽車で歸ると、斷りを云つたのである。

その日一日は完全に二人の世界であつた。肉を溺らすやうな、甘い愛撫と抱擁の半日は過された。二人はアンギャンのホテルを立つまで狂熱的の歡樂に、その身を委ねきつて了つて居たのだ。

秘められた歡樂は、巴里へ歸つても當分二人の間につゞいた。それが成るやうになつたのだと、信重は强ひて一切を忘れて、ひたすら肉の奴隷となつて居た。彼は禁斷の木の實を貪り味ひながら、芙蓉子との結婚といふやうな事には、曾て少しも思ひを繞らした事はなかつた。

それは日本に妻を殘して來て居る彼として、當然の事ではあるが、併しこの問題が眞劍に論議されなければならない危機に當面した自分を見出すには間がなかつた。

或日彼は芙蓉子と共にボアに散步を取つた。木深い、人氣のないところを擇んで、腕を組合はせて逍遙しながら、時々接吻を偸んでは滿足の微笑を交して居た。二人は多く無言のまゝ、甘い快感を味つて居たが、とある風雅な、自然木を組合はした榻へ並んで腰をおろしたところで、またしても接吻の後に、芙蓉子が囁いたのである。

「あなた、私と結婚して下さるわね。」

『え？』と、信重はわが耳を信ぜぬやうに、芙蓉子を見つめた。

『あなた、お分りにならない？　私と結婚して下さるでせう、と申上げたのよ。』

彼は自分が芙蓉子との結婚を、ちつとも考へて居なかつたやうに、芙蓉子の方でも、自分との結婚を頭に置いて居ようなどとは、夢にも想像して居なかつたのである。彼はたゞ危い遊戯を、お互ひに享樂し合つて居るだけのつもりだつた。芙蓉子もそのつもりで居たであらう事は、口にこそ出さないものの、言葉の端々からでも、その態度からでも容易に推測が出來た、つまり二人はお互ひに了解の上で、遊戯をして居たに過ぎないのだといふ事を、信重は信じきつて居たのである。自分には惠美子といふ妻がある。芙蓉子もそれを知つて居るのだ。それを知つて居る以上、二人の戀は畢竟單なる遊戯に終らなければならない事を、彼女は了解して居る筈である。思想的に極めてモダーンで、因習などに少しも捕はれて居ないと見せて居た、またそれなればこそ自分もつい深入をして了つたところの彼女が、今になつてそんな話を持出す心持が分らなかつた。

彼は强ひて無造作な笑顔を作つて、

『芙蓉子さん、あなたは私に妻のある事を御存知の筈だ。』

『えゝ、あなたに一度奥さんのお有りになつた事は存じて居ますわ。』

『えッ、何ですつて？』と、信重は意外の言葉に驚いて、再び芙蓉子の顔を見つめた。

『あら、さうぢやアございませんの？　一度伊太利で結婚なすつたけれども、その結婚は無効で、もう取消されて了つたのだといふ事を伺ひましたわ。』

信重はいよ／＼驚きながら、

『誰にそんな事をお聞きになつたのです。』
『あなたのお母様に……。』
『母が！』と、信重は呻くやうに云つて、『私の結婚は無效で、既に取消されて居ると、母があなたにお話したのですか。』
『えゝ、確かにさう仰しやいました。だから、私、あなたは當然その事を御承知の上の事だとばかり思つて居ましたわ。』
芙蓉子が全く眞面目である事には、少しの疑ひもなかつた。芙蓉子はさう信じきつて居て、自分とあゝした行動を取つたものらしい事が、信重に分りかけて來た。
彼は一面極度の狼狽に襲はれると共に、母があんまりひどい事をすると憤慨せずには居られなかつた。彼には母が芙蓉子を欺いて居るものとしか、思へなかつたからである。
『併し芙蓉子さん、不幸にして。』と彼は嗄れた聲で、『事實はそんな事はありません。それは無效な結婚でもなければ、取消されても、居ないのです。現に私は妻を日本に殘して來て居ます。』
芙蓉子はぢッと信重の顏を讀むやうに見た。
『ぢやアあなたは御存知ないのかしら……。』と、彼女は呟くやうに云つて、『でもお母様は伊太利の方では、それが無效だつたといふ法律書類が立派に完成されて、取消の手續もとうに濟んで了つて居るのだと仰しやいましたが、まさか事實でない事を、お母様が私に仰しやる筈はありませんわ。』
『何です？ 法律の書類まで完成して、取消の手續が濟んで居ると、母が申したのですね。ウーム！』と、彼は呻きながら、首垂れて考へ込んだ。
母の方でいつの間にか、すつかり自分を出し拔いて、自分と惠美子との結婚を無效にする一切の手續を、伊太利で完了して居るかも知れないのだ。彼は結婚當時ひた急ぎに急いで、不完全の手續の下に、結婚といふ形式に兎に角漕ぎつけて來たまでで、それだけに萬一後からその不備を理由に、壞しにかゝるものがあれば、決して安全とは云へないものである事は、承知の上だつたが、そんな事を顧慮して居る暇もなかつたし、またそんな事が起り得ようとも考へては居なかつたのだ。だから若し母が伊太利の大使館方面に運動を託して、その結婚を無效にしようと思へば、決してそれは不可能の事ではないのだ。母がそれほどまでの事をしようとは、つひぞ今まで考へ及ばなかつたが、どうやら母は實際にその運動を試みて、それに成功したものらしく思はれる。さうすれば伊太利の法律の目から見ても、自分と惠美子とは赤の他人になつて了つて居るかも知れない！
何とも名状し難い混亂が彼の心に起つた。自分が惠美子と赤の他人になつて居るとすれば、それは自分に取つて、世界が轉換したほどの一大事實である。この驚くべき事實に當面して、自分はどう處置すればいゝのだ？
彼は惠美子を愛して居る。愛して居ればこそ、彼女のあらぬ噂が、彼を捨鉢の行動にまで驅つたのだ。惠美子と別れるといふやうな事は、芙蓉子を抱擁するその刹那においてさへ考へても見なかつたのだ。が、今はそれを考へて見なければならない。
惠美子が果して不貞な女とすれば、いつそこの機會に一思ひに別れて了ふ事も一策である。まして惠美子の代りに芙蓉子を得た今日——と彼の考がそこに來るのは、騎虎の勢ともいへよう。
彼の混亂した頭が、ちつとも統一されない中に、芙蓉子が追つかけるやうにつゞける。
『ねえ、あなた……だから私、あなたにお許ししたのよ。あなたが私と結婚して下さると信じ

たからこそですわ。でなくて、こんな事が出來ると、お考へになれて？』
『許して下さい、芙蓉子さん。』と、彼はたゞ呻くより外なかつた。
『何をお許ししますの？……私はミディネットや、巷の女ではございませんわ。信重さん、この國では……眞面目な佛蘭西の「お孃さん」に接吻なすつたといふ事は、たゞそれだけでどんな意味を持つか、あなた、御存知でいらつしやいますわね。』
彼は首肯くより外なかつた。彼の地位の重大さが、刻一刻と彼に分つて來るのであつた。
それは芙蓉子に云はれるまでもなく、良家の令孃に接吻を與へたといふ事は、結婚の申出をしたと同一に取扱はるべきものである事は、百も承知だつた。ましてそれ以上進んだとすれば云遁れる術は決してないのである。結婚する意志は少しもなかつたのだとは、無頼漢か、破廉恥漢でない以上、儀禮上決して口にさるべき言葉ではなかつた。まして芙蓉子は大使令孃であり、子爵令孃であり、日本の最上流に位する家庭の令孃である。たゞ弄んだで濟まない事に分りきつた話である。
芙蓉子から改まつて出られて、たゞ許して下さいの一語で、一切を帳消にする事の出來ない事は、餘りにも明白過ぎて居た。
そんな事はモダーンな男女間の思想と容れぬ傳統的の因習に過ぎないではないか、自分達の行爲は單にその因習を無視したまでではなかつたのか、とはこの場合どうしても彼に云へない事だつた。
芙蓉子の知ると知らぬとに拘はらず、彼は完全に陷穽の中に捕へられて了つたのである。どんなに藻掻いたところで、脱出す道のない事は、彼にハッキリ分つた。
『芙蓉子さん、私は自分の行爲の責任はきつと取ります、御安心下さい。』と、彼は悲痛な音を吐いた。
『それは私と結婚して下さるといふ事ね。』
彼は點頭いて、
『私と惠美子との結婚か、果して取消されてあるとすれば……。
芙蓉子はそれ以上追窮しようとはしなかつた。それだけの言質を得れば十分で、最早彼女の成功を信じて疑はなかつたからである。

## 蠟の人（オム・ド・シール）

ボアから歸つての信重は、非常に憂鬱になつた。良心の針がちく／＼と彼を苛み始めたのである。芙蓉子に言質を與へて了つた事は、最早取返しがつかない。さりとて彼は强ちそれを悔んでばかりは居なかつた。惠美子に對する不滿と疑惑で、反感が燃えて居たからである。
で、何よりも早く知りたいのは、芙蓉子の言葉の眞僞を母に質して確かめたい事であつた。彼はパッシーの家に歸るなり、母の在否を尋ねたが、午後から出かけたまゝまだ歸らず、行先が不明であるとの事に、いら／＼しながら母の歸りを待つより外なかつた。が、母が芙蓉子を僞つたものとはどうしても思へぬから、それを事實として考へて、間違ひがなささうな氣がした。
惠美子の代りに芙蓉子を得る事は、眞珠の代りにルビーを得るやうなものである。否、それがダイヤでないと誰が云へよう。その美しさや、身のこなしや、それ等の濃艶さの點において、芙蓉子は惠美子に及ばない。併しその修養、門地、品格の點において、惠美子はまた一籌を輸する。殊に外交官夫人としての芙蓉子は、いづれの點から見ても滋味がある。二人とも社交界に輝くであらう事に甲乙はないとしても、或は彗星の如く人を魅惑する點で、惠美子は芙蓉子を凌ぐかも知れないけれども、自分の前途

の爲に利益であり、將來の內助に期待の出來るのは、芙蓉子の方でなければならないと、彼は勝手に道理づけて見るのであつた。

が、彼に精神的の愛が若しあつたとすれば、それは芙蓉子でなく、惠美子に對してであつた。彼女に對して感じたやうな、强い、燃ゆるやうな愛を、彼が芙蓉子に對して感じて居ない事は事實である。惠美子に對する彼の愛は眞劍であつた。初めて惠美子を抱擁した時、彼の靈魂も肉も、一緖に震へて居た。芙蓉子に對しては、それは彼の考へて居た通りの遊戯であつた。無論遊戯であるから、遊び飽いたらそれはお互ひに止めるつもりで居た。彼は芙蓉子に關する限り、純然たるモダーンボーイであつたのだ。そんな事の出來ない事を知つたのは——蒔いたものの刈らなければならない事を知つたのは、二三時間の前に過ぎない。

彼は芙蓉子の術中に陷つたのだ、今更遊戯のつもりで居たと、そんな卑怯な云拔けの出來ないことを、芙蓉子はちやんと見ぬいて居たのだ。

惠美子に對する熱烈の愛は、今でも醒めては居ない、たゞ猛烈な反感に引きずられて居るだけだつた。彼は今惠美子を正しく見て居ない事はいふまでもない。彼がいつになつて正しく惠美子を見る事が出來るか、疑問である。惡魔の征矢が狙ひよるのは、こんな時でなければならない。

征矢は放たれたのだ。

急遽に事を決して了はなければならない事を知つて居る賴子夫人は、壽子夫人と共に、先から先へと計畫を廻らして居た。二人はアンギャンの一夜に、何事が起つたかを、既に知つて居たのである。

その上で芙蓉子も完全に二人の母親達の傀儡であつた、丁度信重が完全に『蠍の人』になり了せたやうに。

芙蓉子はボアから歸つて來ると、凱旋將軍のやうな意氣で、すぐ母親に自分の勝利を告げたのである。壽子夫人がどんなに滿足したかは、蛇足を加へる必要はあるまい。丁度そこへ訪問先から賴子夫人が立寄つたので、二人の母親同士は、額を集めて自分達の成功を喜び合つたのである。

賴子夫人の意圖は、その成否は兎も角、まづ芙蓉子を犧牲にするといふ事だつた。それが娼婦のやうな手段であつても、どうであつても、芙蓉子に信重と肉の關係を結ばせるといふ事であつた。一度二人の關係が成立ちさへすれば、後は高壓手段で、否應なしに信重を押へつける事は、自分の方寸にあると考へて居たのだ。

それが今は高壓手段を用ゐる必要がなく、芙蓉子が一切の役割を演じてくれたのである。もう大したいやな思ひもせずに、わが子に惠美子を捨てさせる事が出來る目鼻がついたのだ。この上はひた押しに芙蓉子との結婚にまで漕ぎつけて了へば、それで目的は完全に達せられるのだと思ふにつけて、自分が歐羅巴まで乘出して來た甲斐があると、會心の笑を漏らさずには居られなかつた。

不安な焦躁な氣持で、母の歸りを待ちかねて居る信重は、母が歸つたと聞くと、早速母の前に出かけて行つた。

わが子の蒼ざめた神經的な樣子と、焦躁しさうな眼付から、信重の語り出さうとするものの何であるかを、賴子はすぐ知つた。

『お母さん、私はあなたにお伺ひしたい事があります。お母さんが私と惠美子の結婚を無效になすつたといふのは、事實ですか。』

『さうです。』と、母は冷たく云つた。

『なぜ、私に仰しやつて下さらないのです。』と、せき込むと、

『あなたにはどうでもいゝ事だらうと思つたからです。』

『本人の私にどうでもいゝ事だらうと仰しやるのは？』

『あなたはどうせ恵美子と、日本で改めて結婚する考で居たのでせう。さうすれば伊太利の結婚は、無効でも有効でも關係のない事でせう。』

彼は呆氣に取られて、一寸母を見つめた。

「必要な書類も、あなたがそれに興味を持つなら見せてあげます。それは全く無效の結婚で、立派にもう取消の手續が済んで居ます。あなたにあてた無效の通知書も來て居ます。だからあなたは歐羅巴で誰とも結婚しては居ないのです。」

信重は一聲呻いて、椅子に埋もれて了つた。

『あなたはそれを憎む理由は少しもありません。却つて私はあなたの感謝を受けなければならないと思つて居るのです。……信重。』と、言葉を改めて、『恵美子は私の想像して居た通りの女なのです。伊太利でいろ／＼調べさせました。あなたと結婚するまで、やはり歐羅巴の女優たちがする通りの生活をして居たのです。あなたは盲目になつて居たのか、欺されて居たかなのです。』

信重にはそれは信ぜられなかつた。併し何とも答へなかつた。母はつゞけて、

『現在日本でも、あなたが立つてから、恵美子がどういふ生活をして居るとお思ひです？』

母がもしや知つて居るのかと、母の顔を讀むやうに見た。が、母はすぐそれを説明しようとせず、ぢッと自分を見て居るので、

『お母さんは何を知つていらつしやるのです。』

『私は何でも知つて居ます。場合によつては、私の嫁にしなければならない女ですもの、調べるだけの事は調べて居たのです。今姙娠して居る事までも知つて居ます。』

「えッ！　お母さんはそれまで――。」

最近に自分が知つたばかりの事を、母はもう知つて來て居るのだ！　妻の不行跡はそんなにまで公だつて居たのだらうか！

「それもあなたの子か、どうか分らないのです。多分あなたが立つてから姙つた子でせうよ。伊太利の音樂教師との關係を、誰も知らないものはないのですから。』

彼は赤くなり青くなつた。母の前に自分がこんな恥辱を感じた事はなかつた。母もそれを知つて居る限り、自分に來た匿名の手紙は、確かに事實を語つて居るのだ――と、一途に彼は考へた。人一倍母を信じて居る彼は、母が如何に憎んで居る女でも、事實を誣ひる事があらうとは、夢にも考へないのだ。

「私は恵美子がそんな女だと信ずる事は出來ません。』と、嗄れ聲で云つて、『併し信じても信じなくても、私と恵美子の運命を決する日が來ました。恵美子と私との結婚が、取消されてあるとすれば、何も申す事はありません。それが私と恵美子の運命だつたのです。その代り私は恥づべき卑怯ものになるのです。さうです、卑怯な男、不信な男、破廉恥漢――それがあなたの子なのです、恵美子を捨てても捨てなくても。』

「あなたに決して卑怯ものではありません、破廉恥漢などとは飛んでもない事です。それは相手による事で、あなたは今初めて私の子に歸つたのです。ほんとに目を明く事が出來たのです。松尾家とあなたの名譽が、それで初めて回復されるのです。』

『松尾家の名譽……一人の女を蹂躙し……犠牲にして……。』と、彼はきれ／＼に喘いだ。

「蹂躙されたのはどちらなのです？」

「あゝ、誰が知るでせう！」と、彼は絶望的に

頭を抱へた。
『世の中には犧牲にしてい丶女と、犧牲にする事の出來ない女があります。あなたはそれを御存知でせう。』
『たとへば――？』と、彼は苦々しげに母を見つめた。
『あなたはそれをちやんと知つておいでだつた。私はどんなに嬉しく思ふでせう。』
『お母さんが何を仰しやるのか、私には分りません。』
『さうですか。信重、私はたつた今山路さんにお立寄して來たのです。』
信重はや丶狼狽氣味に、
『それで？』
『芙蓉子さんが壽子さんに告白をなすつたばかりのところだつたのです。』
さてはと信重は溜息をついたが、母の顏を正視するに堪へぬやうに俯いた。彼はこの時ほど自分を卑怯ものだと感じた事はなかつた。
『この上は何も彼是いふ事はありません。あなたの行爲をジャスチファイする事は、あなたのつとめです。過去については何事も忘れて了ひませう。早速惠美子の處置をつけなければなりません。』
『お母さん、あなたはどうしてそんなに惠美子に冷酷なのです。』
『あなたは芙蓉子と約束をなすつた一方に、惠美子はそのま丶にしろと仰しやるのですか。』
『モ少し事情を調べる餘裕を與へていたゞきたいのです。』
『それは未練といふものです。この上事情を調べる必要がどこにあります。芙蓉子さんはどんな場合にも、犧牲にする事が出來ない人ですよ。』
彼は暫く俯いて居たが、觀念して、
『かうした成行になるのも、すべては私の怯懦と意志の薄弱さから來た結果です。自分を責める外、人を怨むところはありません。最早何にも申しますまい。潔く自分の運命を甘受します。併し惠美子は姙娠中です。惠美子の心臟に刃を當てるやうな事は、私には出來ません。』
『何事も私にお任せなさい。惠美子には鄭重にそれだけの事をしてやります。生れる子には何の難癖もつけず、立派に養育料を添へてやります。厄介拂ひをするやうな待遇はしないから、安心していらつしやい。』
『その條件でお母さんにお任せします。私は二度と惠美子の顏を見る事は出來ません。』と、彼は顏を蔽うた。
『あなたは惡い夢を見たといふだけです。すぐそれは忘れて了へるでせう。この上はお父さんとも相談して、あなたのほんとの結婚を急がなくてはなりません。』
信重は眼を閉ぢて、最早何も云はなかつた。
假令惠美子に何事があつたとしても、卑怯な片手落の審判の下に、自分が彼女に對し、許すべからざる罪惡を敢てしつ丶あるのだとの觀念が、ひしと彼の胸に食入るのだつた。

惠美子！

信重がこんなに良心の苛責を感じ出したのは、自分の運命が確實に決しられてからだつた。今までは惠美子の不貞を信じきつて居たものが何だかそれが根據のないものであるやうな氣が力強く仕出したのだ。一片の匿名の書面と母の言葉とだけで、それを信じて了つた事は、たしかに輕擧に失する事が考へられ出した。
母が調べたといふ事にもどれほどの信用が置けるか疑問だ、世間がどんな噂をして居たところで、それは畢竟噂であるに過ぎない。惠美子

が姙娠中の子は、やはり誰が何と云つても、自分の子に相違ないやうな氣が俄かにし出した。彼の心は物狂はしいまでに掻亂れた。日本に歸つて眞相を明らかにしたいと、彼はどんなに悶えたらう。けれども芙蓉子とあゝした關係を結んで、約束まで與へて了つた今日、それは出來ない事だつた。彼はどうにも拔差のならぬヂレンマに陷つて了つたのだ。すべては彼自身の自ら招いた事だつた。芙蓉子を怨むところも、母を怨むところもない。彼がそのまゝ日本に歸るといふ事は、芙蓉子と約束しながら芙蓉子を捨て、兩親を捨て、地位を捨て、名譽を捨て、自分の一切の存在價値を捨てるといふ事だつた。それも歸つて純眞潔白な惠美子を見出すならばまだいゝ、萬一恐れて居た通りの惠美子を見出すとしたら？…彼はやはり自分の運命を母達の手に任せて、萬全の策を取るより外はなかつたのだ。

信重の快々として居る樣子が、賴子や壽子達を焦慮させた。この上は一擧に結婚させて了ふ事に相談を纏めた上、二週間の後といふ事に信重を納得させ、大使令孃の晴れの結婚として、擧式の後極めて盛大な披露宴を行ふ事とし、佛蘭西大統領を初め、內閣員はいふまでもなく、各國駐剳の大使、その他の顯官、知名の人達、在留邦人の重なる人達に、招待狀が發せられた。

いよ／＼その日になると、式は極めて莊嚴にマドレーヌ寺院で行はれ、披露宴は大使館大廣間で行はれたのである。披露宴の後、新郎新婦は型の如く、西班牙へ蜜月の旅に上つたのであつた。

翌日の新聞紙はいづれもその結婚を報じ、晝報を主とする新聞紙は、爭うて新郎新婦の寫眞を大きく掲載した。

かくて惠美子は完全に捨てられたのである。

戀は男に取つて插話に過ぎないかも知れぬ。併し女に取つて、多くの場合それが生命である事は、こゝにも立證せられる。それはわが惠美子の場合である。

惠美子は信重を信じきつて居た。それは自分自身を信じて居たと同じだつた。彼女は信重を信じ、自分を信ずるが故に、何の拘束もなく、自由に自分の周圍と交際して居た。自分の生活を明るく樂しくして、悲しみなしに過して行くといふ事は、一面良人に忠實の途であると解釋して居た。

彼女の自由は決して濫用されては居なかつたけれども、彼女のこの自由な環境を濫用し利用しようとする男の友達は、決して少なくなかつた。問題の聲樂教師ロジエが惠美子にフラートをして居た事は事實である。同時に惠美子も決してロジエに惡い感じは持つて居なかつた。どんな場合にもいつも彼に好意を見せる彼女だつた。それが岡燒仲間の嫉視を招いて噂の種となつたのである。併しそれ以外の何ものでもなかつた事は事實である。

惠美子は男のフラートには馴れ切つて居た。さういふ男達を操縱して、決して深入をさせない惠美子だつた。それはロジエに對しても同じであつた。假令惠美子に男のフラートを享樂する氣分があつたとしても、それは惠美子を責める理由には決してならない筈であるが、併し惠美子の場合、それが惡かつたのである。中傷の進入する隙を與へて了つたからだ。

たゞそれが良人に裏切られるまでの、恐ろしい結果にならうとは、夢にも考へ及ばぬ事だつた。良人からの手紙がだん／＼遠のいて了ひ、姙娠を報じた時に、非常な冷淡な手紙を受取つた時に、初めて良人の上に何か變つた心理狀態の起つた事を知つた。それからの自分の手紙に對して、滿足な說明を得るやうな返事は、何

一ッ受取らなかつた。彼女は氣が氣ではなかつたが、信頼する人も周圍になければ、また巴里に一人の懇意な先もない彼女は、信重の樣子を探る手段は全くなかつたのだ。

何か恐ろしい豫感に、彼女は惱まされ始めた。彼女は無意識に信重が信ずるやうに賴子を信ずる事が出來なかつたので、賴子が信重と一緒に巴里に居るといふ事は、自分から信重を離間するためであるやうに思はれ、そのためにも、信重がこの七月に日本に歸つて來る事などは、不可能になるに違ひないと案じられ出して居たのである。信重から歸朝の事に觸れた手紙のない事も氣がかりの種だつた。

彼女は飛んででも巴里へ行つて見たいやうに逸るのだつたが、身重の身體でそれの出來ぬ事が、殘念でたまらなかつた。

彼女に相談相手の一人もない事が彼女の心細さを倍加した。自然彼女は親しみを持つロジニに、自分の惱みを打明けるやうになつたが、さうなるとロジニは却つてそれをいゝ機會が來たとは考へなかつた。彼も立派な伊太利紳士であるだけに、眞實の友として、眞劍に彼女のために、助力を吝まない俠氣を出すやうにさへなつて居た。一方に賴子夫人の間者である女中の富が、萬事に氣が利いて影日向なく自分に事へるやうに思はれるところから、惠美子は富にも何もかも打明けて、慰藉の友として居た。そして富に感謝の念さへ持つて居る、何にも知らぬ彼女であつた。

不安の日が流れる間にも、幸ひにして彼女の健康は少しも損はれなかつた。勝氣な惠美子は、どんな事があつても、自分は腹の子のため強い女にならなければならないと、覺悟をして居るのだ。やがて七月にならうとする彼女は、もう人の目にも目立つやうになつて居た。

最後の日が遂に來た。巴里における山路大使令孃結婚の電報が、簡單なものながら、巴里發聯合通信で、日本の各新聞紙上に掲載されたのである。その朝新聞のこの記事を眞先に發見した富は、ハッと胸を打たれ、この報道がどんな結果を惠美子に持來すであらうかを恐れずに居られなくなつた。こんな事にならうとまでは思はなかつた事が、早急に事實に表はれたのを見ると、彼女は自分が恐ろしい罪惡を犯した事に、何とも知れぬ責任を感じた。彼女は急いで新聞を隱して了つたが、惠美子にその新聞を見せなかつたところで、それが全く一時逃れに過ぎない事は分りきつて居た。

ロジニがジャパン・タイムスをポケットにねぢ込んで、顔色を變へて驅けつけて來たのはその日の午後だつた。

彼が、改めて惠美子に覺悟させた上、件の外字新聞を見せた時に、惠美子はそのまゝ卒倒して了つた。

## 三年の月日

滿三ケ年の月日が流れた。

信重の父伯爵松尾信高は、わが子の結婚を見てから、約一年半の後、腦溢血に冒され、不歸の客となつたので、信重は襲爵して、莫大な遺産の相續人となつた。

彼は既に一等書記官に昇進し、大いに前途を囑目されつゝ、なほ佛國大使館に勤務しつつある。舅である山路子爵は、半年前英國大使に轉じ、今は倫敦に移り住んで居る。

信重と芙蓉子は人に羨まれる程圓滿な家庭を作つて居るのだ。芙蓉子が母親に似た社交好きで、派出好みなところから、パッシーの家に手狹を感じ、信重の襲爵を機會として、同じパッシーに、ヨリ手廣な、ヨリ贅澤な家を見つけ、そこに移り住んで居るのである。

信重の母賴子未亡人は亡夫の一周忌を濟ます

と、この半年ほど前、わが子等の家庭を見舞ひ、憧憬の歐羅巴の空氣をも吸ふため、日本を後にして、再び巴里に來り、二三ヶ月信重方に起居して居たが、二人の平和な家庭の様子にすつかり安心し、今は山路子爵夫人の客として倫敦に滯在中で、その中再び巴里に引返して來る筈である。

信重が芙蓉子と共に、幸福な家庭を作つて居るといふのは、正に事實である。少なくもそれは一般に云ふところの惠まれた家庭であるに相違なかつた。

芙蓉子はいつでも彼を熱愛して居るし、その上彼女の美貌と穎智とは、彼女を交際社會の花とせずには措かなかつた。これまで佛蘭西の社交界に、彼の頼子夫人を凌いで「東方の寶玉」と呼ばれる人氣を博して居たのである。從つて彼女の「接客室」は、今日では斷然古參の大使夫人のそれを凌駕して居ると云つてよい。

彼女はまた誰にも受けがよかつた。人に負ける事が嫌ひで居ながら、人に高ぶるやうなところがなく、一面になほ少女のやうな無邪氣さをさへ失つて居なかつた。彼女は少し贅澤過ぎる點を除いては、外交官夫人として、全くお誂ひ向きの女だつた。かうした女を妻にして居る信重が、幸福であり得ない道理はなく、事實人々の羨望の中心となつて居る事に、何の不思議もなかつた。

が、信重の心は何一ツ不足のない今日でも、決して平和そのものではなかつた。一人の女を蹂躙し、犠牲として自分達の幸福が築き上げられたのだ、許すべからざる不信と背德が、一人の女に對して行はれて居るのだ――さう思ふ事によつて、彼はいつでも憂鬱になる事を、どうする事も出來なかつた。

若し惠美子に果して噂通りの行爲があつて、不義の子を産けたものであるとしたら、却つて今彼の良心は救はれ、心の平和は得られたに違ひない。それは今日なほ解決されない疑問ではあるけれども、彼は時日の經過と共に、ますます惠美子の姦通を信ずる事が出來なくなつて來て居るのだ。それだけに自責の念は堪へ難いまで、彼を苦しめる。併し、今更どうする事も出來ない。この上はたゞ過去を忘れるに專念するより外はなかつた。

彼はかくして進んで事件の眞相を突きとめて見る勇氣もなく、弱い心に引きずられて、何もかも有耶無耶の中に葬つて了つて居たのだ。

初め芙蓉子と結婚の事が極まると、當時日本に飛ぶ飛行船の計畫が、航空界にセンセーションを起して居た際であつたが、頼子夫人は件の飛行船がいよ／＼飛ぶ事になると、板垣顧問辯護士にあてて、結婚が日本で發表された際、惠美子を訪問して、一切の處理に當るやう依頼の書面を託したので、同時に信重からも板垣に當てた書面に合はせて、惠美子への最後の手紙をも託したのであつた。

此等の書面は、例の信重芙蓉子結婚の電報が、日本の新聞紙に表はれる約一週間前に到着して居たので、惠美子が卒倒して正氣づいたその日の午後、板垣はこのいやな使命を果すべく、惠美子を訪問したのである。

板垣はこの訪問の劇的光景を屡々忘れる事が出來なかつた。その時惠美子が非常に冷靜で、しつかとして居り、少しも取亂した態度のなかつた事は、深く彼を感動させた。

まづ頼子夫人の書面と共に送付された伊太利における結婚無效の書類を見せられて、彼女が完全にカルタの塔の崩れた事を知つた驚愕と無念の如何に大きかつたかは云ふまでもない。同時に彼女はその書類の日附が、信重の日本出立前になつて居る事を發見して、それが信重に知らさずに、頼子夫人獨自の手によつてなされ

た巧妙の陰謀に基くものである事を察したのである。

信重が山路大使令孃と結婚するに至つた事は、全く彼が頼子夫人の傀儡となり終せたものに過ぎないであらう事も容易に推測されたのだ。が、しかし、それが信重を許す理由に少しもならない事はいふまでもない。

信重が彼女に當てた書面には、次の通りの意味の事が記されてあつたのだ。

『私の愛する惠美子よ、最後の手紙を書く。私はお前と顏を合はせる事の出來ぬ卑怯ものになつて了つた。すべては私の意志の弱さから來て居る。今更お前を責める氣にはならない。お前は何事も運命に服從し、綺麗に過去を忘れてくれ。生れる子の養育料は板垣を通じて、お前の望通りのものを支出したい。これはお前の當然の權利なのだ。母からの申出を枉げて承知してくれ。今もなほお前を熱愛して居る私を、こんなにしたのは、誰の罪なのだ。が、そんな愚癡はもう云ふまい。明らかに私の罪なのだ、それでいゝのだ。お前は私から自由にされて、必らずしもそれが不幸に終らない事を私は確信する。お前の自由を追ふがよい。これが私の最後の言葉だ。手紙はもう一切私に吳れるな。お前からの手紙が來ても、もう讀まない。それはお互ひに過去を忘れるための最良の方法なのだから。但しお互ひの處理しなければならない用件がもしもあれば、それは板垣を通ずる事にしてくれ。』

惠美子にはこの手紙の意味がよく吞みこめなかつた。少しも後暗い事のない自分が、何か責められて居るやうにも取れるのである。板垣に問糺して見ても、板垣は何の說明を與へる事も出來なかつた。彼には說明すべき何等の材料も與へられては居なかつたのである。

彼女は板垣との對話の間に、自分の身の上に關する何かの離間策が行はれたのではないか、との疑惑を抱くやうになつたに不思議はない。併し信重が既に巴里で公然結婚式を擧げて了つた今日、この絕對の事實をどう覆す事の出來るものでない事は、あまりにも明白だつた。

彼女は信重のために完全に裏切られたのである。同時にその裏面に重信を操縦して、自分を捨てさせたのは、疑ひもなく頼子夫人である事を確信するにつけて、頼子夫人への復讐の念は、いよ／＼烈々として燃え始めた。自分の生活費を支出するといふ頼子夫人の申出を拒絕した事はいふまでもない事だつた。

板垣は彼女に同情しながらも、さま／＼に宥めて、夫人の申出を受容れさせようとしたけれども、惠美子は頑としてそれを拒絕しつゞけた。

『私はあなたの好意ある御勸告には感謝します。併し私はたとひ餓死しようと、あの奥さんから來る一片のパンにも手を觸れようとはいたしません。良人は心から私を愛して居てくれたのです。今でも私を愛して居ないと、誰が云へるでせう。その良人を私から奪つて、他のものに與へたのはあの奥さんです。私は今は良人も許す事は出來ません。私が松尾家へ殘して行くものは、呪咀と憎惡の外の何ものでもありません。私は生きた屍となつて活きて行きます。さうです、これからの私は、たゞ復讐の目的のために生きるのです。』

惠美子の悲痛の叫び聲は、今でもなほ板垣の耳について居るのだ。

彼は彼女のさうした執念を改めさせようと努

力したけれども、何の甲斐もなかつた。たゞ板垣の次の言葉が、僅かに彼女を動かすに役立つただけだつた。

『あなたが復讐のためのみに生きるといふ事は間違つて居ます。あなたはまづお腹の子のために生きなければならない。それをよく考へて御覧なさい。』

どうしても松尾家から一文の助力も受けないと頑張つた彼女を、子供の養育料として信重の名義で、纏まつた金をやつと受取らせる事に板垣が成功したのは、この言葉一ッの爲だつた。

惠美子はその後全く生きた屍として活きたのであつた。彼女に若し復讐へ逸る心と、やがて生れる胎兒とがなかつたならば、この打撃に堪へず、恐らくは生きては居なかつたであらうほど、彼女の悲しみと惱みの深刻であつた事は、容易に推測せられる。

彼女は最早人々に顔を見られるのもいやだつたので、一週間後に鎌倉を引拂ひ、例の賴子夫人の間諜であるお氣に入りの女中富だけを連れて、身を隱すと同時に腹の子をも產落すべく、長崎在の伯母を賴つて淋しく出立したのである。

出發の間際まで何くれとなく親切に世話をしたのは例のロシニ氏であつた。彼は極力惠美子に訴訟を提起すべき事を勸告したのであつたけれども、それは松尾家に對して或程度の復讐は出來るにしても、自分はヨリ以上深刻な精神的の復讐を試みなければ、到底滿足出來なかつたので、その勸告を退けたのであつた。

長崎の隱れ家で月滿ちて產落したのは、父と母に似た、事實珠のやうな女の兒だつた。そして母子共健全に肥立つた。彼女は父親の名を取つて、愛兒に信子と命名した。私生兒として育てる事が、彼女に取つてこの上もなく口惜い事だつた。でも母親となつた事が、暫くは彼女の惱みを忘れさせた。

それほどにわが子は可愛かつた。彼女はどんなにこの幼きものに、深い愛着を持つた事だらう。それは彼女に無限の力と希望とを與へた事いふまでもなかつた。彼女は信子のためにも、眞に强く生きなければならなかつた。

裏切ものの女中富は、惠美子の出產まで、親切の限りを盡して附添つて居り、母子健全に肥立つたのを見屆けた上、暇を取つて歸つたが、間もなく不治の病に冒され、一ケ月床について死去したのである。

が、彼女はその死に先だつて、長い〳〵懺悔の手紙を惠美子に書殘したのである。

惠美子が生後三ケ月になるかならずの、可愛い信子を叔母の手に殘し、富の手紙を懷中深く祕めて、日本を去り、外國への旅に上つたのは、件の手紙を受取つて間もないほどの事だつた。

何のために？　いふまでもなくそれは、自分の生きて居る目的である復讐への道程に急ぐため。けれども、いづこへ？　いかなる道を取るため？……誰もそれを知るものはなかつた。

その後の彼女がどこにどうして居るか、信子は健全に生立つて居るか、それ等の消息を知るものとては、これまた一人も無かつたのである。

## 名歌手の出現

新たなる年が迎へられて、巴里の交際季節は今その絕頂に達しつゝある。

この季節の話題は近く倫敦から來る筈の、歌劇の名歌手エリナ夫人の噂で持切であると云つてよい。

新聞紙はみなもうエリナ夫人の噂を書始めて居るのだ。何事も地獄耳の交際社會の人々の語るところや、新聞紙の記事によると、彼女はこの秋突然世界のオペラ歌手の搖籃地である伊太

利ミラノのスキャラ座に表はれて、殆んど空前の大成功を收め、疾風の如く異常のセンセイションを捲起したのだ。
　彼女の評判が電光の如く全歐洲に傳はると、世界に名ある歌劇の劇場から、彼女の爭奪戰が開始せられた。
　ミラノを打上げるとウヰーンに、ウヰーンからベルリンに、いづれも舞臺の上で嵐の如き歡呼を受け、彼女の名聲はいやが上にも高まるばかりだつた。ベルリンから當然巴里に來る筈を、彼女は佛蘭西を飛越し、海の彼方の倫敦に今英吉利人を完全に征服しつゝあるのであつた。
　英國の皇帝皇后兩陛下は、彼女に謁見を賜はり、勳章を授けられた。ジョン・ブルはすつかり彼女の崇拜者になり切つて了つたのである。
　巴里人は當然先取權があると信じた彼女を、まづ英國に取られて了つた事に、輕い失望と不滿を感じて、國立劇場である『オペラ』の監理者に攻撃の矢を向けるものさへあつたが、巴里が後になつたといふ事は、監理者の手落ではなくて、エリナ夫人自身の希望である事が、一部の人々の間に知れ渡つて、何故に夫人が巴里を後廻しにしたかといふ事が、また論議の種を蒔いた。が、それは何人にも適當な解釋は出來なかつた。
　今やそのエリナ夫人が、巴里人の世界第一と信じ、また事實さうである巴里の『大歌劇場』に表はれるのである。
　不思議に誰もが、これほど有名になつたエリナ夫人が、何れの國籍に屬して居る女であるかを知らない。多くの人は伊太利人と信じ、或るものは西班牙人だと說き、或るものは日本人ではないかとさへ疑ひ、或るものは白皙人と東洋人との混血兒だと語るのだ。
　いづれにしてもその根據は薄弱で、たゞ彼女が殆んど赤色に近い茶褐色の髮を持つて居り、顏色も少しも東洋人らしい黃味を帶びて居ないところから、東洋人の血が雜つて居るなどとは飛んでもない想像だと、一笑に附するものが多いのだつた。
　その國籍が不明であると共に、どこからミラノに表はれたか、今までどうして居たのかといふ事も全然謎で、何かその容貌と共に神祕的な空氣が彼女を包んで居る事も、人々の好奇心をいやが上に煽つたに違ひない。
　が、彼女がこれほどまでにセンセイションを捲起したについては、まづ彼女の一般歐洲人と違つた型の、驚くべき美貌が、一氣に聽衆を魅惑して了ふ點を擧げなければならない。これが若し歐洲人型の美人であるならば、どんなに美しくても、美人に食傷して居ると云つてもよい交際社會の人々の血をこんなに湧立たせる筈はなかつた。
　彼女の美貌と共に抑揚に富んだ活殺自在の、透通るやうな高いコロラチュア・ソプラノの美聲が、一度彼女の咽喉から迸り出ると、滿堂を夢現の境に引入れずには置かない事も、當然彼女を水平線上に引上げた事いふまでもない。
　彼女の得意とするものは悲劇ものであつて、火のやうな情熱と、同時に靈魂の底から搖り出るやうな悲哀が、聽衆の心を深く摑んで放さないのであつた。
　最近芙蓉子の許へ、倫敦の母親から通信があつて、それにはエリナ夫人の評判と、三度ほど夫人を聞いた印象を記して居るのである。
　女でさへも惚々とする東洋的の親しみのある美貌と、女王のやうな氣品を持つた人柄が、誰でも彼女と知己になる事を誇らずには居られない女で、その中に巴里に行く筈であるから、お前も再々聞く事が出來るだらう、私も賴子さん

もヨーク公の招宴の折、エリナ夫人に紹介されたが、それは全く云分のない立派な女で、頼子さんもすつかり感心して、大のエリナ夫人崇拜者になつて了つた、云々とあるのだつた。

世間の評判に加へて、母親から、こんな手紙を受取つた事は、芙蓉子をエリナ夫人の見ぬ戀に憧れさせたと云つてもよかつた。彼女は良人と共にエリナ夫人の出現を待焦れるのであつた。

待たれた日は遂に來た。

エリナ夫人の巴里入が報ぜられ、引きつゞき最初の試演の夜に『オペラ』は、嘗て見ぬ熱狂せる招待客を以て埋められたのである。

佛蘭西大統領、同夫人を初め、內閣の人達、夫人令孃、各國大公使、同夫人、國會議員、大學教授、藝術家、批評家その他ありとある名士、貴婦人等は、悉く網羅されて居たと云つてよく、巴里の交際社會が今夜はすべてこの『オペラ』に集中されて了つた形だつた。

信重等夫妻もその數の中に漏れなかつたのである。

男は皆燕尾服に、女はローブ・デコルテの華やかさは、『オペラ』の大殿堂に嘗て見ぬほどの莊嚴の光景をさへ點出したのであつた。

選ばれた曲は、ベリニの悲劇『ノルマ』であつた。幕が息詰るやうな期待の中に上ると、エリナ夫人の出現を前に、水を打つたやうな靜けさが舞臺を支配したのも一瞬間、やがて純白の裝を凝らした彼女の姿が表はれると、片唾を呑む聽衆の心臟の音さへ聞えるかとばかり靜まり返つた殿堂に、忽ち嵐のやうな拍手の音が起つた。

彼女の神々しいばかり輝いて見ゆる、噂の通りの東洋的の美貌、火を點ぜられた情熱の眸子、この上もなく優美な姿勢、誠に女王と云つても加へやうのない氣品が滿堂を壓して、まづ聽衆を魅し去つたのである。つゞいて樂の音と共に歌ひ出された彼女の聲は、金鈴のやうに隅から隅まで殘る隈なく響き渡つて、震へるやうに心から心へと深くも食入るのであつた。すべての耳、すべての目は只一ツとなつて、この驚くべきプリマ・ドンナに惹きつけられて居るのだ。

最初の一瞬間から幕の下りる最後まで、聽衆は咳一ツせず、息をつめて聞惚れ見惚れて居るので、『オペラ』が近年嘗てこんな感激的の光景を見た事がなく、それは成功と云つて此上の成功はなかつた。

最初の幕が落ちた時に、ほつと溜息を吐き、寶石入のオペラ・グラスを初めて下に置いた芙蓉子は、感極まつたやうに良人を顧みると、

『まア、何て素破らしい成功でせう。』

が、彼女は良人の顏を見てハツと驚いた。信重の顏は物に襲はれたやうにおど〳〵して、興奮したやうに蒼ざめ、何か烈しい疑惑と恐怖に近いもの影が、その目に宿つて居るのである。

『あら、あなた、どうかなすつて？ 何だか變だわ、お顏色が變つて……。どうかなすつたのぢやアない？』

彼は懸命に虛心平氣を粧つて、妻に答へようとしたが、どうしても平生の調子が出ないのだ。

『な、なに、何でもない……。あんまり人いきれがして、空氣が溫か過ぎるから、そのせゐなんだ。』

『さう、それならいゝけれど……。私、何だか……。』

『ちつとも心配するには及ばない。もういゝんだよ。』

『あなた、エリナ夫人をどう御覽になつて？ ひよつとして、日本人ぢやアないでせうか。

たゞ髪の毛だけは、あんなに赤茶色ですけれども……。」

ぎよつとして彼は笑つた。いや、笑ふつもりだつた。が、その笑ひはかすれて非常に不自然なものに響いた。

「日本人だつて？　あはゝゝ、そんな事があるものかね。たしかに伊太利人に違ひないと私は思ふ。」

「さうでせうね、日本人ぢやアありませんわね。お母様達が倫敦で逢つていらつしやるんですから日本人ならすぐ日本人と分る筈ですわ。第一日本人であんな髪の赤い人ありませんもの……。あなた、こゝをお出にならない？　その方がきつとよくつてよ。」

「いや、こゝで暫くぢツとさしてくれ、五六分もすれば何でもなくなる。」

この場合妻に話しかけられる事が、彼には堪へられない迷惑だつた。

彼は椅子に埋れて眼を塞いだ。――何といふ驚くべき事だ。こんな事が有り得るだらうか。英吉利の皇帝皇后兩陛下から最近謁見を賜つた名譽の女、否、世界の如何なる偉大なる人でも、喜んで賓客として迎へるであらう彼女、歐洲の樂壇を席捲して、幾百萬のファンを作りつゝある彼女、女の中の最も美しく輝かしい彼女――それは嘗てわが抱擁と愛撫に活き、そして犬か猫のやうに捨てられた女なのではないか。あゝ、惠美子！　わが最愛の惠美子！

けれどもそれは果して惠美子であらうか。第一髪の赤茶色である事も違つて居る。少なくも髪だけは惠美子の方が美しかつた。年も惠美子より二ツ三ツは老けて居るやうに見える。が、四年前に別れたまゝの惠美子の姿が、自分の眼に殘つて居るので、當の惠美子は今丁度あの位に見えるかも知れない。

それにしてもたしかに老過ぎて居るやうに思ふ。が、素より舞臺の上で女の年の判斷は出來ぬ。丈も惠美子よりいくらか高いやうな氣もする。

併し惠美子も日本の女としては高い方で、あまり相違がないかも知れぬ。眼の隈取や、附黒子や、頬紅やのために、地の惠美子と違つた女とも見えるけれども、それにしてもあまりに類似が甚しい。他人が見れば氣づかぬかも知れぬが、自分にはほんとの惠美子を見違へる氣づかひはない。若し素顔の彼女を見れば、たとひ髪の毛は變つて居ても、一目に識別する事が出來るのだが、舞臺の上では見極めのつけやうがない。

たゞ惠美子にあれほどの聲量は無かつた。あんなに烈しい情熱もなかつた。調子の抑揚や技巧も、惠美子とは比較が出來ぬほどに優れて居る。併しそれは練習すれば恐らく達せられるであらう事で、その點で惠美子でないと否定する事は出來ない。殊に聲はまさしく惠美子を思ひ出させる同一のコロラチュア・ソプラノである事も、二人の異名同人を證明するものではないか……。

## 拒絶

信重は殆んど無我夢中で、どうして次の幕が開いたかも知らなかつた。

舞臺の上では何が演じられ、何が歌はれて居るか、それは目にも入らなければ、耳にも入らなかつた。宛ら夢遊病者のやうな狀態が彼を支配して居るのである。彼の肉體も靈魂もたゞふら〳〵と舞臺の上の女に拔取られて了つて居るかに見えた。

その時突然エリナ夫人の眼が、ロージュの中の彼に濺がれた。

二人の眼と眼が合つた。その瞬間彼女はよろめくやうに見えたが、すぐ彼女自身を恢復

すると、一しほ高まる狂熱の歌聲が、滿場を魅了して、最も敏感な聽衆にさへ、その蹉跌しかけた瞬間を氣づかせなかつた。

『エリナ夫人があなたを見たやうよ。』と、芙蓉子は良人に囁いた。

『馬鹿な、そんな事が……。』と、彼は囁き返したが、少なからず狼狽して居た。

幕間に、彼は口實を設けて妻を殘し、マネージャーに會見を求めた。マネージャーは非常に多忙に見えたが、信重の名刺の伯爵と記された肩書が、多分物を云つたのであらう、彼に立話の瞬間を與へてくれた。

『用件は外でもありません。エリナ夫人を特に紹介して頂きたいのです。私の舊友に違ひないと信じますから……。』

『伯爵閣下、折角の御希望ですが、その事ならお斷り申上げる外ありません。エリナ夫人には、如何なる人も一切紹介しないといふ約束を守つて居りますので……。現に山のやうな紹介希望者があるのですが……。』

『尤もです。併し私は普通の紹介希望者ではありません。エリナ夫人は私の青年時代に、最も親しくした昔馴染に相違ないと信じますから、夫人も私と知れば逢ふ事を希望されるに相違ありません。併しあなたもお約束を破る譯にはいきますまいから、それではたゞこの名刺をお屆け下さいませんか。夫人が私を知らないと云へば、人違ひですから、無論お逢ひする必要もないのです。どうぞこの名刺の取次だけを……。』

信重の樣子には異常の眞劍味さへ籠つて居たので、マネージャーは迷惑しながらも、拒絶しかね、名刺を預つて樂屋へ入つて行つたが、暫くして名刺を持つて出て來ると、氣の毒さうに信重にそれを返して、

『エリナ夫人は閣下を少しも御存知ないさうで全く人違ひだと申されます。第一夫人は一度もまだ日本を見舞はれた事がないので、日本の方とお近くした事はないとの事でございます。』

信重はひどく赤面しながら、

『いや、さうですか、それなら人違ひです。どうもお手數をかけて甚だ恐縮でした。なほ序に伺ひたいのですが、それでは夫人は何國人で居られるのでせう。』

『伊太利のコルシカ產れといふ事で……。少くも私共は左樣に了解して居ります。』

彼はすご〳〵とマネージャーの前を辭するより外なかつた。

あゝ、果して人違ひなのであらうか。やつぱり日本人の惠美子でなくて、コルシカ島生れの伊太利人、正眞正銘のエリナ夫人なのだらうか。

彼は恐ろしい疑問に當面して了つた。他人の空似といふ事はある。緣もゆかりもないものの瓜二ツといふまで似て居る例はないではない。エリナ夫人もたゞ惠美子に似て居るだけなのかも知れない。が、彼女の眼と彼の眼が合つた時、確かに彼を認めたに違ひない刹那の表情が、たしかに彼女を裏切つたやうにも、彼には思へるのである。

彼の名刺を見て、人違ひの一言の下に彼を拒絶した事も、彼を許すまいとする惠美子としては、この際寧ろ當然の態度ではあるまいか、と、彼は考へて見た。

さう思ふと彼は矢も楯もたまらなかつた。どうしてもエリナ夫人に逢ふ何等かの手段を廻らさなければならないと考へるのである。彼の心は物狂はしいまでに亂れ惱むのであつた。

彼はどうしてこの夜の演奏が終りを告げたかを知らない。素破らしい混亂の中に、彼は妻に手を取られて、自動車の中に入つた事を記憶して居るだけだ。

自動車の中で、芙蓉子は心配さうに、
「あなたはほんとにどうかしてらつしやるのよ。全く平常のあなたのやうぢやアないわ。お熱があるんぢやアない？　お手もこんなに熱つて居てよ。」
『ウム、熱が少しばかりあるやうに思ふ、ほんの少しばかり……。やつぱり逆上せたのらしい。頭が重い氣がする。併し、なに、大した事はないよ。現に劇場を出て、冷たい空氣に當つたので、もう大分いゝ。』
『あんまり人いきれがひどかつたから……。でもあなた、大した人氣ね。エリナ夫人をどうお思ひになつて？』
『大した人氣だね。……驚いて居るよ。』
『エリナ夫人が、やつぱりあなたをぢッと見たやうに、私は思ふわ。それとも私の空想かしら……。』
『馬鹿々々しい……。女つてものは飛んでもない空想をするものだな。』
『でも妙ね。私、どうもそんな氣がするんですもの。……あなた、そんな事はどうでも、私、あんな美しい人、見た事がありませんわ。そして何て魅惑のある顏立でせう。何だか日本人に近いので、私達は殊に親しみを感じられるのかも知れませんわ。母が女でも惚々すると云つて來たのは當然ですわ。私、あの方と知己になつて見たい。……ほら、母の手紙に、誰でもエリナ夫人と知己になる事を誇るだらうとありましたわね。それはその通りだと思ふわ。でも母達はエリナ夫人に逢つて居るのよ。ほんとに羨ましい。……そしてお母様もエリナ夫人の大の崇拜者の一人になつて了つたのですつてね。』
『あゝ、さうだつたかね。』と、信重は上の空で返事をしたが、母が崇拜者の一人だといふ一語が、ハッと彼を目覺めさした。
　母が壽子と共に數回エリナ夫人を聞き、現にその人に紹介されながら、なほ惠美子と悟る事が出來なかつたといふ事實は何を語るか。それは二人の母達がエリナ夫人を少しも日本人であらうと疑はぬ事の證明で、わけても目から鼻へぬける芙蓉子の母親が、彼女を外國人と信じきつて居るとすれば、やつぱりエリナ夫人は惠美子ではなくて、赤の他人の外國人なのではあるまいか、と、彼の考へはまたぐらつき出すのだ。
　が、併し、自分の眼にさへ疑惑が殘るものを、母が一度逢つた位で見破る事の出來なかつたのは、別に不思議はないではないか、とも考へられるので、いづれにしても、疑惑は深く彼の胸に食入るばかり、惠美子にどうやら相違なささうな信念は、寧ろだん〳〵強くなるばかりだつた。
　彼はその夜床に入つても、殆んど安眠する事が出來なかつた。
　もしエリナ夫人を惠美子とすれば、惠美子がどうしてあんな驚くべき成功の途を辿つたか、全く想像もつかなかつた。
　彼は別れた惠美子のその後については、強ひてそれを聞くまいとして、たゞ一意彼女を忘れる事に勉めて居たため、どういふ生活をして居るのか少しも知らず、ロジエとの關係の有無、その後ロジエがどういふ態度を取つて居るか、そんな事などはもうどうでもいゝ事にして居たのだ。まして日本と遠く離れて居るため、噂話もこゝへは屆かず、人にでも賴まぬ限りそれを知る方法もなかつた。
　尤も彼は父の死去の際本葬を營むため、一度日本に歸つて來たので、惠美子のその後について詳しく知らうとすれば、その機會はあつたが、何分その暇もなく、その中に歸任を急がなければならなかつたので、たゞ板垣を通じ、惠美子が女の兒を産落した事と、出産後子供を殘し

て日本を去つたといふ事を聞知つたに過ぎなかつた。板垣の話によつて見ても、ロジェとは事實何等の關係もなかつたらしいので、惠美子の忘記念はたしかに自分の子に相違ない事を感じ、ます／＼自責の念に驅られると共に、せめてその子を見て歸りたいとも考へたが、長崎まで尋ねて行く餘裕などは迚もなかつたので、そのまゝ巴里へ歸つて來たのであつた。

爾來杳として惠美子の消息を聞かなかつたので、たゞ惠美子が外國へ來たといふからは、多分伊太利であらう事は想像されながらも、自分の藝術を完成する大目的のため、伊太利に來たであらう事を、夢にも考へては見なかつたのだ。けれども彼女の目的はたゞそれだけであつたらうか。華やかな大成功を贏ち得た今日、彼女は潔く過去を忘れ、現在の境遇に滿足して居る女なのであらうか？

あゝ惠美子！　エリナ夫人！　二人は果して異名同人か、否か。――それにしても彼女は獨身なのであらうか。その名の示す如く、既に人妻となつて居るのであらうか。

『お蝶さん』

翌日信重は大使館に勤務したけれども、仕事は少しも手につかなかつた。エリナ夫人が惠美子であるかどうかを確める迄は、とても安心する途がなかつた。大使館の人達の世間話の合間に、昨夜のエリナ夫人の話が出たが、併し誰も夫人を日本人であらうと疑つて居る樣子がないので、彼は寧ろほつとした。倶樂部に行けば、何かの消息が分るかも知れないと考へて、妻の芙蓉子には電話で、今夜は約束があるので、晩餐には歸らないと知らした上、倶樂部へ出かけて行つた。彼がこゝで倶樂部といふのは、重に社交界の若い佛蘭西の人達が組織して居る或貴族的な倶樂部なのである。

倶樂部の會員達は、大抵皆昨夜の試演に列席した人達なので、當然エリナ夫人の噂で、花を咲かして居た。併し不思議に誰もがほんとの事を知らないので、話して居る事は皆まち／＼だつた。

コルシカ生れの伊太利人だと信じて居るものもあれば、波斯人と希臘人の混血兒だと說くものがあつたり、日本人の血が混つて居るらしいと疑ふものもあつた。白色露西亞のプリンスと東洋人の間に生れた女だと、事實らしく說くものもある一方に、伊太利と云つて居るが、實は土耳其人でハレムの女なのだと眞面目に說くものさへあつた。たゞ彼女がこゝ二三年伊太利に居た女だといふ事だけは、皆が無條件で受入れたに過ぎなかつた。

彼女に良人があるか、それとも獨身の女かといふ事が問題になつた。それは信重の最も知らんと欲するところでもあつた。少なくも彼女の現在は獨身であると保證するものがあつて、それは事實として受取られた。

人の妻であつたか、どうかといふ事も論議されたが、人々は彼女が不思議に寶石を一ッも指につけて居ないで、たゞ左の第三指に指輪を嵌めて居るだけだといふ事を指摘して、それは結婚の指輪であらうと說く人と、多分結婚の指輪ではあるまいと說く人とがあつた。

兎に角ウヰーンでもベルリンでも倫敦でも、彼女の良人らしい男、若しくは特別彼女と交渉あるらしい男を見かけたものがないといふ事も、人々には信ぜられて居るのだ。

要するに彼女が祕密の雰圍氣に包まれた存在であるといふ事が、いやが上にも社交人の好奇心を煽るのだ。彼女が個人の訪問を絕對に拒絕して居るといふ事も信ぜられた。倫敦では幾多の人が彼女を訪問して、一人も成功した人がないといふ事が噂に上つて居た。

彼女は今巴里郊外サン・クルーのK男爵の別莊を借受けてそこに落ちつき、コックと女中と年老いた從僕のみ置いて生活して居るので、その外に男氣は少しもないといふのだ。

信重が倶樂部で知り得た事は以上の取止めもない事に過ぎなかつた。が、それ等の點を綜合して、彼女が惠美子ではあるまいと思ふよりは、何だかます／＼惠美子らしく信ぜられて來るのだ。たゞそれにしても一人として彼女を純粹の日本人と觀破し得るもののないのは、その鳶色の髪の毛のために違ひなかつた。尤もその髪の色一ッで、信重も確かに惠美子だとまでは突止め得ないのだ。彼はどうしてもそれを突止めなければ得心が出來なかつた。それには、是非エリナ夫人に逢つて見る必要があつた。

が、どうすれば逢へる？　自分は一度既に拒絶されて居るのだ。尋常手段で彼女が逢つてくれない事は明らかである。先夜は自分の名刺を見て、故意に逢はなかつたのではないかと想像したが、倶樂部での話から推して見ると、誰にも逢はない女らしい。自分を特に拒絶したのでないとすると、或は惠美子ではないのかも知れぬが、併し自分の素性を祕しがくしにして居る惠美子なので、誰にも逢はないのだとも取れる。

いづれにしても面と向つて突止める事が第一だ。兎も角サン・クルーの家が分つて居るからは、そこへ訪問して見る事にしよう。どうせまた拒絶されるだらうが、何等かの手段を取る事は、その上の事だ。

彼はさう考へて、翌日三時過ぎ、用事を構へて大使館を出で、態と自家用の車でなく、タキシを拾つて、途中花屋に立ちより、温室ものの見事な花束を作らせた上、ボアを横ぎり、サン・クルーに來て見ると、K男爵の別莊はすぐ知れた。セーヌ川に沿ひ、遊園地を前に、樹木や花園に圍まれた、如何にも麗人の住むに相應しい瀟洒な住宅だつた。

自動車小舍に立派な自動車のあるところを見ると、エリナ夫人は在宅に違ひなかつた。玄關に立つて、呼鈴を押して見ると、小間使らしい感じのよい女が取次に出た。それが佛蘭西の女である事は一目で分つた。名刺を出して、夫人に面會したいと、花束と一緒に渡さうとすると、小間使は受取らずに躊躇しながら、誰にも逢はない事にして居るので、取次は出來ないと斷るのだ。

「いや、私は伯爵松尾で、夫人とは小さい時からの友達なのです。普通の訪問者とは違ひますから、兎に角取次いで見て下さい。お逢ひ出來なければ歸るまでです。」

さう云ひながら彼はポケットから十法の金貨を出して小間使の手に摑ませた。彼女は辭退したが結局それを受取つた。

金貨が物を云つたばかりでなく、佛蘭西では爵位がまた物をいふので、訪問者が伯爵である上に、寸分隙のない立派な風采の日本紳士である事が、彼女に好意を持たせたのだ。

「どなたに限らず、お斷りするやうに申付けられて居るのでございますが、それでは兎に角申上げて見ますから、お待ち下さいまし。」と、彼を玄關に待たした上、奥へ入つて行つたが、やがて花束と名刺を持つたまゝ、出て來ると氣の毒さうに、

「夫人は日本の方とはお知合がないとの事で、何かその事は申上げてある筈だと仰しやいます。やはりお目にかゝる事は出來ませんので、この花束も折角ながらお受取りいたしかねるとの事なんでございます。ほんとにお氣の毒でございますが、私にはいたし方がございません、それからこれもお返しいたします。」

小間使は件の金貨をも返さうとするのであ

る。信重は豫期しては居ながらも失望して、

『さうですか。それでは止むを得ません。金貨はあなたに差上げたものですから、遠慮なく私の好意を受けて置いて下さい。』と、強ひて受取らせた上、『併しお孃さん、御迷惑でもモ一度夫人に、私が人違ひから一度ならず、二度までも御面會を求めた無禮を、直接お詫をして歸りますので、玄關まで一寸御足勞は願はれまいかと、お尋ねして下さいませんか。』

小間使は金貨の手前もあるので、無下にこの要求を斷りかね、また引返して行つた。が、すぐ戻つて來ると、いよ〳〵氣の毒さうに、

『そんな事は何とも氣にかけていらつしやらないので、そのお心遣ひは御無用に遊ばす樣にとの事でございます。今日はそれにお頭痛もなさる樣に仰しやつていらつしやいますので……。』

信重は無論その上强ひてといふ事は出來なかつた。併し小間使の口上から新たな口實を見出して、

『さうですか。お頭痛がなさるので、御好意をお示し下さる事が出來ないと仰しやるんでございますね。それでは明日またお尋ねして見る事にいたしませう。どうぞお大事になさるやうに仰しやつて下さい。』

『いゝえ、明日またお出で下さいましては、私が迷惑をいたしますから、どうぞもう……。』

『あなたには決して御迷惑はかけません。その花束はあなたが勝手に處分して下さい。』

彼はそのまゝ大使館に引返し、殘務を見た上歸宅したが、その夜はまた妻の芙蓉子と共に『オペラ』に姿を見せた。今夜はエリナ夫人の十八番ものの中でも特に評判の高い『お蝶さん』が出る筈なので、芙蓉子もそれを待ちかねて居たのである。試演の夜の『ノルマ』と『お蝶さん』が交互に演ぜられるので、今夜は『お蝶さん』の第一夜であるところから、『オペラ』の殿堂は割れるばかりの大入だつた。

その夜のエリナ夫人のお蝶さんは、すつかり日本人のお蝶さんになりきつて居た。今まで演ぜられたどのお蝶さんよりも、人を動かす不思議の力があつた事は、翌日の新聞紙が皆指摘したところであつた。それは血と涙と情熱の結晶であるお蝶さんが、そこに表はれたといふだけではない。何か惻々として人の肺腑を穿つ、非常に深いものがあつて、並居る女客のハンケチを絞らした事は、これまでのお蝶さんに全く見られない光景であつた。

第三幕に至つていよ〳〵その高潮に達し、わが子に對する愛着、裏切られた良人に對する怨み――それが綿々として歌はれる時、全く人を泣かせ、怒らせ、悲しませずには措かない、驚くべき藝術の力があつた。いな、それは藝術といふよりは、ヨリ以上の何ものかで、女優の演技ではなくて、お蝶夫人その人が舞臺に表はれて、聽衆の前に愬へて居るといふ感じであつた。

芙蓉子も涙を浮べ、深い感激と共に、見とれ聞きとれずには居られなかつたのである。信重がピンカートンその人のやうな自責の念に驅られ、正面に舞臺を見るに堪へなかつた事は想像に難くあるまい。彼は今夜こゝへ來た事をさへ悔いる位で、エリナ夫人の眼が一度ならず二度までも彼の上に落ちた時、彼はすぐ眼を反らすので、怨みに燃ゆるお蝶さんの顏を正視する氣力は全くなかつたのだ。幸ひに今夜は芙蓉子があまりに舞臺に熱中して居たので、良人の苦悶の表情にも、またエリナ夫人の視線が良人に向けられた事にも、更に氣づかずに居たのである。

歸りの自動車の中では、彼は試演の夜ほどの事はなく、氣力を恢復して居た。併し全然芙蓉子の注意を惹かぬ程度ではなかつた。

「あなたは今夜もどうかしていらつしやるわよ。何か考へ事でもしていらつしやるんぢやアない？」

『そんな事はない。やつぱり今日も少し頭痛がしてね。どうもエリナ夫人は私の鬼門かも知れない。』と、彼は笑つたが、それは歪んだ笑ひだつた。

『それはいけませんわね。』と、芙蓉子は素直に云つたが、彼女は今夜良人が何か鬱いで居るらしいのは、今までは忘れて居た例の伊太利で結婚した惠美子の事を、お蝶夫人が思ひ出さしたのではないかと、聰明な彼女の頭に思ひ浮べたのだつた。それだけに彼女はこの問題には觸れぬ方が賢い方法だと、口を噤んで了つたのだ。

## 惠美子

信重は昨夜の『お蝶さん』を聞いてから、エリナ夫人はやはり惠美子に違ひない事を信ずるやうになつた。昨夜は、オペラの全聽衆を相手にして歌つたのではなくて、只一人の自分を相手にして歌つたもののやうにさへ思はれるのだ。

彼女をあれほど眞劍にさせ、熱狂的にさしたのは、自分の姿を彼女がそこに發見したからに違ひないもののやうに思へるのだ。

この上は最早如何なる價を拂つても、エリナ夫人の正體を突止めずには措かないと、固く彼は誓ふのだつた。

翌日彼は再びサン・クルーにエリナ夫人の訪問に出かけた。昨日にも優る美しい花束が用意され、それを抱へた上で、彼は別莊の玄關に立つた。何度でも夫人が逢ふまでは訪問をつゞける覺悟で、どうしても逢はないとなれば、その上で非常手段を取る事にしようと決心したのである。

呼鈴に答へて表はれたのは、昨日の小間使である。彼女の顏に忽ち當惑の色の浮んだ事はいふまでもない。信重は鄭重に、

『昨日はお加減が惡いといふので引取りましたが、今日お逢ひ下されるかどうか、尋ねて見て下さいませんか。たゞ一言だけお詫を云はして頂ければそれでいゝのです。お逢ひ下さるまでは幾日でもお訪ねします。あなたは御迷惑でせうが、モ一度取次いで下さい。』

さう云つて彼は、手にした花束を渡さうとした。小間使は迷惑と氣の毒とを綯ひまぜた表情をして、

『でも、どなたにもお逢ひにならないのでございますから、申上げても迚も無駄でございます。お取次をいたしますと、私が叱られますから……。』

『お孃さん、あなたの御迷惑を償ふだけの事はまたいたします。兎に角厚かましいやうですが、モ一度お取次下さい。』

信重の言葉には拒み難い何ものかがあつた。で、彼女は當惑しながらも、花束を受取つて、奧へ行つたが、暫くすると、また花束を持つて引返して來て、

『やはり駄目でございました。幾日お運び下さいましても、お逢ひする事は出來ないとの事でございます。夫人が一度云ひ出したら、決して後へお退きになりませんので、もうこれからはおいで下さいませんやうに、私からもお願ひ申上げます。』と、彼女の方が懇願するやうに云ふのである。

信重は尋常の手段でこの女に逢ふ事は出來ないと、明らかに知つたのだ。

『それでは致方がありません。併し私は夫人と根比べをするかも知れません。今日はこれで引取ります。花束はあなたが取捨てて下さい。』

信重は飽くまで鄭重な、紳士的な態度で、か

う云つて別莊を辭し去つた。併し彼は自動車を森のところで歸し、暫く森を逍遙した上、再び別莊の方へ取つて返して來た。そして表門の方には向はず、裏手の方に足を運ばせ、靜かに別莊の樣子を觀察し始めたのである。

可なり廣い敷地で、五尺ほどの高さの手をかければ飛越えられるほどの煉瓦塀と、一部分生墻で圍まれてあるので、その隙から內部を瞥見する事が出來る。生墻の內部は一面の平らな、長方形の芝生になつて居て、多分テニス・コートに使用されて居るであらうと思はれ、それに隣つて灌木の茂みや、薔薇園などがあり、今は冬枯で花はないが、たゞ芝生だけが、日本と違ひ、一面に青々として居る。そして多くは曇り勝の巴里の冬空も、今日は珍らしく晴れて日の目を見せ、風の少ない土地柄とて、室內の煖爐の傍よりは、戶外の空氣のわけても親しまれる日和である。こんな日にはエリナ夫人もひよつとこの芝生の上に姿を見せるかも知れないと期待しながら、なほ生墻に添うて、步みを運んで見ると、今まで木立に遮られて見えなかつた四阿か、テニス・コートと薔薇園の間に立つて居るのが目に入つた。

途端に丁度その四阿から母屋の方に出て行く女の影があつて、それは傑の小間使である事がすぐ知れた。四阿の中にはなほ一人の女が腰をおろして居るらしいので、それはエリナ夫人に相違あるまいと思ふと、信重の胸は動悸を打ち始めた。

生墻の一部に簡單な片開きの扉のついた裏木戸があるので、試みにそれを押して見ると苦もなく開いた。多分園丁か番人が閉め忘れて居たのでもあらう。これ幸ひと、信重は突と中に入つて、靜かに扉を舊の通りに閉した。

株立の大きな薔薇がところ／＼にあつて、丁度その陰に身を隱す事が出來た。だん／＼四阿の方に近づいて見ると、それはたしかにエリナ夫人に相違なく、作りつけの卓の上に雜誌や新聞が積まれてあり、夫人はそれに目を通して居るのだ。多分新聞の昨夜の批評記事を拾ひ讀みして居るであらう事が想像された。

彼女が一心に新聞記事をあさつて居る事は、信重には好都合だつた。

彼はそろり／＼と夫人の後の方に廻つて行くのだ。近よるにつれて、明るい日光に照し出された素顏の夫人の橫顏は、豫期した通り、紛れもない、惠美子の輪郭そのまゝである。最早惠美子である事に何の疑ひもない。

彼は注意深く四阿の外まで忍びよつたところで、だしぬけに、

「惠美さん！」

驚いて見返つたエリナ夫人が信重を認めると

「アッ！」と輕い叫びを立てて立上つたが、手にした新聞がハラリと落ち、戰慄が彼女の全身を通じて走つた。その瞬間信重を見つめた彼女の眼は、憤怒と勝利の奇妙な對照に、爛々として燃えるのだつた。

「あなたが！……誰の許しを得て、こゝへいらつしやつたのです。」

「あゝ、惠美さん！　惠美さんだ！」

「惠美子はもう此世に生きて居ません。こゝに居るのはエリナ夫人です。お歸りなさい！　お歸り下さい！　お歸りにならなければ人を呼びます。」

暫時の狼狽から立直つた彼女は、女王のやうな犯し難い威嚴を以て、かう叫んだのである。それは伊太利語でも佛蘭西語でもない、日本語でであつた。

「惠美さん、私はとう／＼あなたを發見しました。あなたを發見するまで、此四五日の私の慘さはどんなだつたと思ひます。人を呼ぶ前に一言私に云はして下さい。」

『いゝえ、あなたから何を伺ふ必要もございません。死んだ惠美子から生れ變つたエリナ夫人は、あなたとは何の交渉も持つては居ません。あなたが立去らなければ私が立去ります。』

信重はいきなり惠美子の前に身を投出して、跪きながら彼女の手を取ると、

『惠美さん、たゞ一言……一言でいゝのです。私はおめ／＼あなたの前に立つ事の出來ない男である事は、誰よりも自分がよく知つて居ます。破廉恥漢、人非人、卑怯もの――あらゆる言葉で呼ばれ、呪はれても辯解の言葉を何一ツ持たない私です。今更あなたに許して貰へない事は分つて居ます。だからあなたの許しを得ようと思つて來たのではありません。あなたに罰せられるために來たのです。』

『それなら永久に私の前をお立去り下さい。それであなたの目的は達せられます。それが惠美子の罰ですから……。』

『それが罰なら永久に立去りもしませう。併し惠美さん、罰を受ける前に自白させて下さい。如何なる罪人も自白なしには罰せられません。』

惠美子は飽くまでも冷たく、

『御無用です。エリナ夫人があなたの自白を伺つて何になります。たゞ惠美子の身體を借りて居るに過ぎないこのエリナはあなたとは縁もゆかりもない赤の他人なのです。』

『縁もゆかりもない赤の他人？ さうですか――あなたが長崎に殘して來た可愛い信子の父親があなたには縁もゆかりもない他人なのですか。信子の名は誰の名を取つてつけたのです。』

惠美子はよろ／＼とよろめいた。子供の事を云はれる事は意外だつた。わが子の名を信重が知つて居ようとも思ひ設けぬ事だつた。あくまで冷たさを保たうとして居た彼女の心が、忽ち混亂に陷つた。そのまゝ倒れるやうに背後の榻に腰を落して、默つて俯いて居たが、果は堪へ得ぬやうに顏を蔽うて了つた。

信重は自分の言葉が意外の效果を齎した事に滿足しながら、靜かに惠美子の傍に腰をおろして、

『ね、惠美さん、信子の名によつて、私の懺悔を聞いて下さい。』

惠美子が默つて居るので、彼はそのまゝにつづけた。――自分が大馬鹿ものだつたので、日本から來た中傷の手紙を眞に受け、自暴自棄の生活に陷つて居た事、今の妻芙蓉子と退引ならぬ關係を生じて了つたところで、伊太利での結婚無效の書類を見せられ、芙蓉子との結婚を餘儀なくされて了つた事を、かいつまんで語つた上、

『これが私の辯解にならない事は知つて居ます。たとひどんな事情があらうとも、私さへしつかとしてさへ居れは、あくまであなたを信じてさへ居れば、こんな事になる筈はなかつたのです。すべては私の罪で、自ら責めるより外に、誰を怨むところもないのです。只私は中傷を信じたがために、どんなに惱みぬいたか、一方にまた芙蓉子との結婚から逃れる事が出來なくてどんなに二重の苦しみにもがいたか、それを知つて頂きたいのです。私はたゞ非人情にあなたを捨てたのではないといふ事を――。』

惠美子は驚くべき努力をもつて、絶えず冷靜な態度を保ちながら、身動きもせずに聞いて居たが、やがて青ざめた顏をあげると、靜かに尋ねた。

『それでもあなたはそれが中傷だといふ事を、どうして御存知になつたのです。』

## 愛の楔

惠美子の問に答へて、

『それはどうしてといふ事はありません。自然にさう感ずるやうになつたまでで、畢竟私の本

心が目覺めたのです。併しその時はもう遲かつたのです。馬鹿ものが本心に目覺めるのは、いつでもそれが遲くなつた時です。」と、信重は苦笑した。

「どういふ手からその中傷が出たか、あなたはそれを御存知ですか。」

「分りません。」と、彼は愕然として、「それが私には今でも分らないのです。あなたは御存知なのですか。」

「知つて居ます。あなたは富といふ女中を御存知でせう。」

『私が立つ少し前に來た？』

「さうです、すべてはあの富の仕事なのです。」

信重は信じかねるやうに、

「女學校を出たとかいふ、あの氣の利いた親切さうな女中が！　併しどうしてあの女中が、そんな恐ろしい事を……。」

「あれは私に出來るだけの親切を盡して、その償ひをしようとしました。最後にとう／＼病氣で死んだのですが、その時に懺悔の長い手紙を私に殘したのです。その手紙は今も私の手に保存されてあります。あなたにどんな中傷をしたかといふ事が、一々私には分つて居ります。」

信重は呆れながら、

「併し富が何のために中傷をしたのです。誰かに使はれたといふのですか。」

「富はあなたのお母樣の間者だつたのです。」

「えッ！」と、信重の顏は土氣色に變つて了つた。

鐵槌が自分の頭に下つたやうな氣がした。まさかと思ふ事が事實だと知ると、彼は憤怒と慚愧に、熱湯を呑む思ひをしながら、頭を抱へて了つた。

『さうですか。……あゝ、知らなかつた、知らなかつた！……そんな、そんな卑劣な手段をまで取る母であらうとは！……あゝ、濟まない、惠美さんに濟まない！』と、呻きながら、物狂はしげに髮の毛を搔挘るのであつた。

『巴里であなたが、自由にお母樣に操縱されていらつしやる光景を、私はよく想像する事が出來ます。あなたはがんじがらみにからんで來る繼母の網から、逃れる事が出來なかつたのです。」

「さうです。よく云つて下すつた。私は自分をどうする事も出來ない、憐れな犧牲だつたのです。その點で惠美さんが同情して下されば、幾分でも罪の重荷が輕くなる氣がします。……惠美さん、なぜその時に私に知らして來てくれなかつたのです。」

「信重さん、私からの手紙は、一切讀まずに破棄して了ふと云つて來たのは誰方なのです。」と、惠美子の目は咎めるやうに光つた。

信重は恥ぢて目を落した。彼がこんなに悔恨に責められる事はなかつた。

「その上それはもう遲かつたのです。富の手紙を受取つたのは、信子が生れて二三ヶ月の後でした。あなたはとうに結婚していらつしやつたし私にはどうする手段もなかつたのです。』

「惠美さん、許して下さい。惠美さんがそれまでどんなに苦しんだかと思ふと、八ツ裂にされても尚ほ足りないでせう。どんなにでも私を怨んで下さい。腹の癒えるまで罰して下さい。……今の生活を破棄して了へと、あなたがいふならば、私はすぐにも破棄して見せます。」

彼女は信重の心を讀まうとするやうに、

「信重さん、あなたは私に不信であつたやうに、今の奧さんにも不信であらうとなさるのですか。そんなあなたなのですか。」

「惠美さん、それならどうすれば私の罪は償はれるのです。」

「それは私といふものの存在を、永遠にお忘れ

になる事です。」
『そんな事は今になつて、斷じて……斷じて出來ません。私は……私はあなたの奴隷……奴隷です。』と、彼は途切れ〳〵に喘ぎながら云つた。
「私はそんな男を輕蔑します。……奥さんの許へお歸りなさい。……あなたは奥さんを愛していらつしやるのでせう。」
『妻を愛して居ないと云へば、卑怯に當ります。それは愛して居ます。また愛するに値する女でもあります。それは否定しません。併しそれは普通の良人が妻を愛するといふ程度で、如何なる場合にも、妻に對して、嘗てあなたに對したやうな愛を覺えた事はありません。それは僞らぬ事實です。』
「奥さんはお母樣の共謀者だつたのですか、さうではなかつたのですか。包まず仰しやつて下さい。」
『妻が共謀者であつたことは信ぜられない事です。斷じてそんな事はないと云へると私は思ひます。今考へて見ると母と妻の母とは、多分同一目的のために策謀した事が察せられます。併し妻はたゞ二人の母親達の傀儡だつたに過ぎないのです。妻は明るい、無邪氣な性質の、策略などを弄する女では決してないのです。』と、彼は力をこめて云つた。
『さうですか。それを伺つてあなたの爲に祝福します。あなたは二度と過失をお繰返しになつてはいけません。……それから伺ひますが、お母樣はその中また巴里へお引返しになるのでございませうね。」
彼女の斯う尋ねる眼には、異樣の光が點ぜられた。信重は何か不安を感じながら、
『來月は多分歸つて來ませう。あなたは倫敦で母にお逢ひになつた筈です。
「お目にかゝりました。幸ひに私の姿は變つて居ましたし、それに染めた髮のせゐで、少しも私といふ事には、お氣づきになりませんでした。お母樣からお便りがあつたとすると、まさか私を發見したといふ事ではなかつたのでございませうね。」
『母はエリナ夫人を少しも疑つては居ないやうです。私はあなたが母にさへ少しも日本人と悟らせない變裝と、注意深さに全く敬服します。それにしても惠美さん、どうしてこんなに有名な歌手になつたのです。この丸々三年間の生活の裏には、並々ならぬ苦勞と修練が積まれた事と思ひますが……。』
『それは簡單です。私はあなたに捨てられた時死んで居た筈ですが、或目的のために、また生れる子のために、生きなければならないと、やつと思ひ返しました。それで子供が生れると、間もなく伊太利へ出てまゐつたのです。伊太利ではミラノで、血の出るやうな修業を積みました。一流の歌手になるまではと、生命を投出した覺悟が、やつと酬いられて、この秋初めてスキャラ座で公衆の前に立つたのが、私の復活と成功の第一歩でした。それからは御存知の通りでございます。併し華やかな舞臺に立つ今日までの私の生活が、血と涙で彩られて居る事を、聽衆の一人だつて知つては居ないのです。」
『いや、さうでしたか。あなたのお話の一々が、私の心臓を貫く刃のやうな氣がします。あなたの決心と覺悟が今日の成功を贏得た事は當然です。併しよくあなたは思ひきつて伊太利へ立つて來ましたね、それも信子を日本に殘したまゝ……。』
「信子の事は云はないで下さい。……さア、信重さん、あなたから伺ふ事も伺ひ、私から申上げる事も申上げました。こんな筈ではなかつたのです。どうぞお歸り下さい。これからは決してお尋ね下さらないやうに……。もう決し

てお目にかゝりません。』

『そんな殘酷な事は云はないで下さい。お互ひが了解した以上、友達として殘る事が出來るでは有りませんか。それだけを許していたゞきたいのです。』

惠美子はきつぱりと、

『それは無益な事です。それは私を苦しめるだけではなく、あなた自身が苦しむ事になります。』

『あなたのために苦しむならば、どんな苦しみも厭ひません。もしあなたが許して下さらないとなれば、それ以上の苦しみに私はさいなまれます。』

『それがあなたの當然の罰ならば、致し方がないではありませんか。私は最早時間がありません。この上こゝに止まる事は、お許しする事が出來ません。』

彼女は舊の冷たさに歸つて、力強く云ひ放つた。

『さうですか。』と、信重は悄然として、『それならば今日は引取ります。併しこれだけを知らして下さい。信子は健全に生立つて居ますか、どうですか。』

わが子の事を云はれると、惠美子の心はいつでも亂れるのだ。

『達者で居ります。』と、手短かに答へたが、彼女の目には涙が浮んだ。

『數へ年の四ッになりますね、どんなにか可愛いでせう。あなたは多分寫眞をお持ちでせうね。』

『持つて居ます。こゝに小肖像もあります。』と彼女は眞珠の頸掛の眞中に垂れた中心飾をまさぐつた。

信重の眸子は輝いて、

『ではお願ひですから、それを見せて下さい。』

惠美子は躊躇したが、信重の熱心な眼光を見ると、無下に拒絶しかねた。そして女心母心に可愛いわが子を、捨てられた男に見せびらかしたくもあつた。で、頸掛から中心飾を取外すと、蓋を開いて信重に手渡したのである。

信重は流石に躍る胸を制へながら、受取つて見ると、それは擴大鏡のほしいほどの小さなものでありながら、ハッキリと顏だけが寫つて居るのだ。何といふ可愛い、丸々と太つた子なのだらう。それは實にこんな愛くるしい、器量よしの兒が、またと二人はあるまいと、思はれるやうな女の子なのだ。

信重は飽かずそれに見とれて居る中に、大きな涙をぽろ／＼とこぼし始めて、

『あなたにそつくりですね。』と、鼻をつまらせていふと、

『いゝえ、あなたに生寫しなのです。』

その瞬間惠美子に一切を忘れさせたやうに見えた。

『惠美さん！』と、信重は思はず惠美子の手を取ると、今まで張りつめて居た彼女も、刹那の感動に抵抗しかねて、突然彼の膝に泣伏して了つたのである。

## 淋しき微笑

刹那の感動のため、彼の膝に泣伏して了つた惠美子を見ると、信重は同じやうな感激と滿足に震へながら、彼女の背を愛撫して、その發作の靜まるを待つて居た。その時眞白な彼女の美しい頸脚に烈しい魅惑を感じたので、再び三たび熱い接吻を加へた。

と、惠美子は突然反撥されたやうに身を起すと、

『信重さん、子供の爲に思はず不覺の涙をお見せしました。どうぞもうお歸り下さい。そして二度とお訪ね下さいませんやうに……』

彼女はすつかり冷靜を恢復して居た。信重

は靜かに、
「さうです。子供の寫眞を見せて頂いたのですから、この上私の止まる理由はありません。併し子供の爲に私を許すと一言言つて下さい。それを土産に私は勇んで歸ります。」
「それはあなたが森の木の葉を讀む時、濱邊の砂を數へる時、私はお許しする事が出來るでせう。私はあなたのため永久に消す事の出來ない烙印を胸に印されて居るのです。あなたがそれを償ふ事の出來る日は、最早永遠にありません。」
「それはないかも知れません。私はあなたに八ツ裂にされても、なほ罪を償ふ事の出來ないことをよく知つて居ます。たゞこの上はあなたの許しを得るためには、あなたの命ずるどんな事でもします。若しあなたの許しが得られなければ、私はこの上迚も平和な生活を送る事は出來ないでせう。たゞ信子のために私を許すと一言云つて下さい。』
彼は悄然と首垂れて、聲涙共に下るのであつた。惠美子は自分を制へようとして制へる事が出來なくなつたかのやうに、
『おゝ信子！ 信子！ お前、母樣に敎へておくれ、どうしたらいゝだらうね。』と、眞珠の首飾をまさぐつた。
彼女は再び弱い女に歸つたらしい。信重はそこにまたつけ入る隙を見出して、
「あゝ、信子こそ父親の許される事を希望して居るでせう。惠美さん！ 私を許して下さい。」
『あなたを許すといふ事は私の誓を破るといふ事になります。……ですけれどもこの上あなたを拒む力は私には有りません。』と、彼女は顏を蔽うた。
「それでは私を許して下さるのですね。」
彼の顏は輝いて、狂喜しながら、彼女の手を取ると力強く握りしめ、その上に熱い接吻を雨ふらした。
惠美子は氣も張りもぬけて了つたやうに榻の上にぐつたりとなつた。
「惠美さん、難有う！ これで私は救はれたのです。これからは生れ變つたやうな氣持になる事が出來ます。あゝ、惠美さん、この喜びを察して下さい。』
惠美子は淋しく笑んで信重を見返した。彼女の笑顏が信重を更に大膽にした。
『ねえ、惠美さん、今度は私の訪問を許してくれるでせう。許してくれますね。あゝ、私の惠美さん！』と、彼は同棲當時きまりで呼びかけた愛の言葉をつい囁いて了つたのである。
惠美子は顏を擧げると、詰るやうに彼を見つめて、腹立しげに、
「あなたはどこまで貪慾なのです。それでは次から次へと際限なしぢやァありませんか。この上あなたの望むものを與へて行つたら、あなたは最後に何をお求めになるのです。」
「惠美さん！」
愛慾に燃えて、自分の脣を求める彼の目を見ると、惠美子は許すまじき顏色を見せ、更に聲を勵まして、
「信重さん、私はあなたの妻ではありません。またあなたの寡婦でもありません。あなたの情婦では猶更ありません。その私をどうなさらうと仰しやるのです。』
信重は態度を改めて、
『いや、たゞ友達になつて頂きたいのです。私達はいつだつて敵同士ではなかつたのです。お互ひに了解し合ふ事が出來た以上、お互ひの友情がまだ殘つて居る事を發見して、いゝ筈ではありませんか。」
惠美子は揶揄するやうに、
『あなたは友情だけに滿足する事が出來ると思つていらつしやいますの？』

『滿足する外ありません。それが私のあなたに求める最後のものです。私は依然としてあなたを愛して居ます。併しその愛は純潔なプラトニック・ラブでなければなりません。私は決してそれ以上に出でない事を誓ひます。私達は友愛に生きるとして、最早過去の事は一切語らない事にすればいゝのです。それを避ければ、却つて話題は豐富になります。二人は文藝を語り、音樂を語り、生活を語り、そして社會を語りませう。それはどんなに私達の生活を豐富にするでせう。眞の友情に活きるといふ事は、世にも賴母しい愉快な事に相違ないと思ふのです。』

『あなたは小説を語つていらつしやいますのね。何つて居ると迚も愉快さうですわ。そして子供のことも話し合ふのでせう。そして過去を一切忘れて了ふ！ 人間て調法なものですわね。』

『惠美さん！ 眞面目に聞いて下さい。小説ではありません。それは子供の事も語り合ふでせう。併し私が或程度以上の節制をなし得ない男だと思つて居るんですか。私達はもう戀人ぢやアないんです。』

『私はあなたを信じませんわ。あなたのお眼を信ずる事は出來ませんわ。』と、笑つて、『あなたは一人の女に不忠實だつたのですから、この上二人の女に不忠實であつてはいけません。お望み通りあなたを許してあげたのですから、早く奥さんの許へお歸り遊ばせ。』

『それは歸ります。併しこの次訪問しても、最早拒絶しては下さらないでせうね。』

『それはどうとも分りません。』と云つて後を佛蘭西語で、『左樣なら、伯爵樣、たゞエリナ夫人の祕密をお守り下さいませ。』

『それは友達としての交際を許して下さる條件の下に……。』

『私もそれなら條件をつけます。それはあなたの奥さんをその中是非紹介して下さるといふ事です。』

『機會さへあれば無論喜んで……併し惠美さんの前では太陽の前の月のやうな女でせう。』

『いゝえ、東洋の寶石といふ評判のお噂を伺つて居ります。それほどに美しい方なら、あなたの愛を得る事に、何の疑ひもありませんわ。』

『惠美さん、それはあなたの皮肉ですか。私はどんな女にだつて、惠美さんに感じたやうな戀愛を一度だつて感じた事はないと、云つたではありませんか。私は今でも――。』

『信重さん！』と、咎めるやうに遮つて、『私はいつでもあなたを拒絶する權利を持つて居る事を知つて居て下さい。それはあなたの態度一ツの問題なのです。』

『いや、きつと愼みます。ではこれで歸らなければならないのですか。』

惠美子は打解けて、

『何のおもてなしも出來なかつた事をお許し遊ばせ。私がお送りいたします。あなたは盗人のやうに垣を越えて入つてらしつたのですね。』

『垣を越えて來はしません。裏木戸の鍵がかゝつてなかつたのです。誰にも見られずに濟んだ事は幸ひでした。』

『いゝえ、女中が見て居ました。先刻こゝへ來ようとして、あなたのお姿を見て、遠慮して引返して行つたのです。』

信重は驚き顏に、

『さうですか。どんなところを見られたのでせう。あなたは迷惑ぢやアなかつたのですか。』

『女中は祕密をよく守る女です。御心配には及びません。』

惠美子は手を與へて、裏口から信重を送り出した上、引返して來て、四阿の椅子に腰を落すと、淋しく微笑んだ。彼女は滿足だつたのであ

る。
すべては豫期した通りに進んで行くと云つてもよかつた。たゞ彼女はあんまり早く、そして飽氣なく信重を許して了つた事を、輕い後悔の氣持で顧みた。
『やつぱり私は負けたのかしら。……でもあの方をそんなに苦しめる事は、私には出來ない。どうしても忘れられないあの方なのだ。……戀人、と云つたたけでは言葉が足りない。私に取つては永遠の戀人なのだ。……だけども松尾家から與へられた怨みを忘れる事がどうして出來よう。私の誓ひを、復讐を。……それは刻々に近づきつゝあるのだ。あの伯爵未亡人に。……それからあの新伯爵夫人に。……併し新夫人は共謀者ではなかつたらしいのだ、彼女に何の罪もなかつたとしたら?……が、私はすべてに盲目でなければならぬ。戰ひは程なく開かれるのだ。伯爵未亡人が近く巴里に歸る日までに、すべての準備を進めなければならぬ。そのためには今日あの人を許して了つた事も、早計ではなかつたかも知れない。……私の力の試される時は來た。あの人の上にも伯爵未亡人の上にも……。凱歌は私に擧げられなければならぬ。……あゝ、戰鬪……凱歌……。』
彼女は心に呟きながら身を顫はした。それは彼女の心に極度の緊張を感じた事を示すものだつた。彼女は如何に戰はうとするのであらうか。如何に復讐しようとするのであらうか。
それは彼女の外に知るものは素より無かつた。

## 夜會の前

信重は一度惠美子のエリナ夫人に許されてからは、全く有頂天の有樣になつて居た。それは熱烈な戀をしかけた戀人を手に入れたやうな狂喜の感情だつた。
事實また、それが新たに生れた熱烈な戀でないと誰が云へよう。決して戀でないと、彼自身自ら否定するに拘はらず、その後の彼は物に取りつかれたやうに、仕事も何も手につかなかつた。晝は終日彼に取つて少しも落ちつかぬ日が次ぎ、夜は彼女の出番である限り、オペラに走らなければ、ぢつとして居られない衝動に驅られるのだ。それは全く夢魔に襲はれて居る人のやうに、魂はすつかりエリナ夫人に捕はれて了つて居た。彼の生活は彼女なしには、全く堪へられないやうな氣がし始めた。
――己は母の詭計と陰謀にかゝつて、子供まで生んで居る惠美子を捨てたとすれば、惠美子を取返す權利は自分にある筈だ。併し己には今は芙蓉子といふ妻がある。妻には何の罪もないのだ。今更妻を捨てる事は出來ない。社交界の人氣の焦點となつて居ると云つてもよい妻を捨てるといふ事は、自分の名譽を捨て、地位を捨て、世間を捨てるといふ事だ。それも惠美子が希望するならば、一切を捨ててもいゝ。……が、惠美子のいふ通り、己は二人の女に不忠實であつてはならない。惠美子に對しては友愛關係以上に出る事は出來ないのだ。二人はプラトニック・ラブにだけ活きて行く外はないのだ。お互ひの不幸を、己は惠美子によつて慰められもし、また惠美子を慰めもしよう。賴母しい友達同士となつて行く事は、誰に對しても恥ぢる事ではない。それでいゝのだ。さうする事が望みなのだ』
彼は自ら道理づけるのである。が、彼の心は平和な幸福な家庭から次第に離れて居た。芙蓉子から次第に離れて居た。大使館から次第に離れて居た。そして一意オペラの殿堂にあこがれるのである。そして口實を設け、暇を作つては、私かにサン・クルーの別莊を訪問した。

惠美子は最早信重を拒絶しなかつた。二人は戀を語らないが、戀人のやうな態度で語り合つた。惠美子の魅惑は一回毎に一回よりも加はつて行つた。

が、彼女は常に或程度の間隔を置いて、それ以上に信重を近づけない事が、信重に取つて焦躁の種だつた。それはまた信重の心をひたもえに燃えさせる結果にもなつた。

良人にこのごろ祕密の行動の多くなつた事は或點にまで芙蓉子の猜疑心を喚起せずには置かなかつた。それは心の底から良人を愛し、慕つて居る妻としては、寧ろ當然過ぎる事でもあつた。

二人がこれまで通り連立つて外出する機會が少なくなり、今まで行先を告げずに他出する事のない良人が、行先を曖昧にして出て了つたり、電話で斷つて、晩餐を共にしない日などが加はつて行くにつけ、二人の間にどうしても面白くない空氣が釀し出されずには居られなかつた。それで今まではどうやらかうやら彌縫して行く事が出來たのである。

併しそれはいつまで破綻を見ずに居る事が出來るであらうかは、疑問と云はなければならなかつた。

丁度毎年交際季節に、一度づつ催される慣例になつて居る、巴里社交界年中行事の一、ペリエー伯爵夫人の大夜會が、このごろに催される事になつて居た。

歐洲大戰に戰功のあつたペリエー元帥の夫人で、富豪としても有名であるだけに、この夜會は巴里生粹の、最も選擇された華やかな夜會の一ツであつた。

ペリエー夫人は藝術家でもあるので、文藝、音樂、演劇等に係り、優れた藝術家や詩人達が、この夜會で見られるといふ事もその特色をなして居た。

華美好きな夫人としては、今度の自分の夜會に、今巴里中の人氣を一人で獨占して居るかに見えるエリナ夫人を逸する事は出來なかつた。彼女が出席するか否かによつて、この夜會の成功と否とが決せられるのだと、元帥夫人は考へるのだつた。

併しエリナ夫人は多くの招待をみな拒絶して居ると、いふ評判でもあり、現に前週巴里で豪奢な生活をして居る亞米利加の千萬長者の夫人から招待され、それをにべもなく拒絶したといふ事が噂話に上つて居る位なので、彼女を招待者の第一人に加へるといふ事には、可なりの外交手腕を要する事を、元帥夫人はよく承知して居た。

彼女はエリナ夫人のみならず、當時社交界や藝術界に聲名の高い美人を、悉く一堂の中に網羅して見たいと考へた。そして彼女の頭の中に、第一番に來たのは、エリナ夫人と同じやうに東洋の寶石として通つて居る、日本大使館書記官松尾伯爵夫人だつた。それから曰く何、曰く何、元帥夫人の數へた美人は、七指を屈するほどあつた。この七人は是非とも自分の夜會を飾る花でなければならない。

夫人の考が極ると、まづオペラの日割を繰つて見て、エリナ夫人の出番のない來週の金曜日を擇ぶ事とし、第一番にまづエリナ夫人の訪問に出かけたのである。二人は既に紹介された間柄であつたのだ。

彼女は佛蘭西で社會的に最高の地位を有し、門閥と傳統の優れた背景を持つ自分が、素より亞米利加の成上りものなどとは、斷然同じ水準に並ぶべきでない事を自認して居るので、亞米利加の千萬長者夫人を拒絶したと、いふ事が、何も自分を拒絶する理由にならない事を、よく承知して居た。

それにも拘らず、果してエリナ夫人が自分

の懇請を承諾してくれるかどうかについては、非常に不安だつた。
　彼女はエリナ夫人に逢ふと、まづ自分がますます彼女の崇拝者として惹きつけられて居る事を、彼女の評判がいやが上にも加はつて行く事を口を極めて讃へた上、今度の自分の夜會には特に彼女の出番でない日を撰んで極めたので、是非出席して光彩を添へてほしいと、慇懃を極めて懇請したのである。無論その夜會の優れた特質を説明するにもぬかりがなく、また伯爵夫人自身が懇請に出かける如き事は、全く異例である旨をもそれとなく仄めかしたのだ。併しそれにも拘はらず、エリナ夫人は婉曲にそれを拒絶しようとしたのである。
　そこで元帥夫人は方略を新たにした上、この夜會の出席者が、如何なる人々であるかを説明し、相手の好奇心を煽らうとした。佛蘭西第一流の男女の藝術家や、女流詩人などの名を擧げた上、
「あなたは日本大使館の松尾伯爵夫人を御存知でいらつしやいますか。あの方も必らずおいでになる筈でございますが……。」
　さう云はれた時に、惠美子のエリナ夫人の眼は、初めて異様の光を帯びた。
「お名だけは伺つて居りますが、まだお目にかかつた事はございません。」
　餌にくひついたと認めた元帥夫人は、こゝぞとばかり、
「これは東洋の寶玉と評判されて居る大變美しい雅やかな方で、巴里の社交界の花でいらつしやいます。そしてこのごろでは世間があなたと並べて評判して居りますのは、あなたが東洋の方のやうなお顏色を持つていらつしやるからなんでございます。あなたが御自分と併せて評判されて居る松尾伯爵夫人に對して、少しでも好奇心をお持ちになるなら、あなたに伯爵夫人を御紹介する光榮を、是非私に持たして頂きたいのでございます。」
　惠美子の心は松尾伯爵夫人の名によつて、すつかり惹きつけられて了つた。自分の戀敵である伯爵夫人が、どんな女であるかを知つて置く事は、彼女の秘めたる計畫の實行のためにも、極めて必要だつたのである。
　そこで彼女は元帥夫人の勸め上手口說き上手に乗せられて退引ならぬ場合になつた體にして、承諾を與へて了つたのである。いづれにしてもまさしく餌にくひついたのであつた。
　元帥夫人は鬼の首でも取つたやうな喜びで、辭し去つた事はいふまでもない。
　彼女はその足で松尾伯爵夫人を訪れた。美希子に逢つて、来週金曜日に夜會を催すについて、その夜會の花である彼女に、是非出席を願ひたい旨語り出したところ、
「實は今その事でエリナ夫人に逢つて參りましたが、都合よく出席してくれる事になりました。それであなたにも是非御出席下さいますやうに……。エリナ夫人にあなたのお噂をいたしましたところ、かねて御承知になつていらつしつて、是非あなたに紹介してほしいとの事なんでございますよ。」
　彼女の名がエリナ夫人を誘惑したやうに、エリナ夫人の名も忽ち美希子を魅して了つた。ただ無邪氣な彼女は、エリナ夫人に對しては、何の疑惑も持つて居ないばかりか、憧憬に近い崇拜の感情を、ずつと持ちつゞけて居るのであつた。
「あら、ほんとにエリナさんがお見えになりますの。でもあの方は雨のやうに降る招待をみな斷つていらつしやると聞いて居ましたが……。」
「それは最初はお斷りになつたのですが、併しあなたのお噂を申上げたので、それではあなたにお目にかゝるのに、こんないゝ機會はな

いからと、それで承諾なすつたんでございますの。』

『まア、奥様、ほんとでせうか。でも私がどうしてそんなにエリナさんの注意を惹くのでございませう。』と、感激に似たものを感じながら云つた。

『ほゝ、それはあなたが東洋の寶玉でいらつしやいますし、あの方も東洋の型でいらつしやいますから、それであなたに好奇心を持つていらつしやるのですわ。』

『まア、いやな奥様、私はあの方の足元へもよれはいたしませんわ。』

彼女は何故エリナ夫人が自分に好奇心を持つかについては、それ以上深く疑つても見なかつた。

『それではお忙しくださいますわね。招待狀はこれから至急印刷にかゝらせるのでございますが……。』

『はい、喜んでさういふ事にいたします。エリナさんに逢ふ事に、どんなに樂しみでございませう。』

權瑞夫人は二重の勝利を滿喫して歸つて行つた。夫人の歸つた後で、芙蓉子は何かそはそはした氣持になつて居た。エリナ夫人が自分の噂を聞き、自分に逢ひたいと望んで居るといふ事は、單にそれだけで彼女の誇りを滿足させるに十分だつたのである。

### 芙蓉子と惠美子

芙蓉子は良人の歸宅を待受けた上、すぐ夜會の話を切出した。

『今日ペリエー元帥の奥さんが、來週の金曜日に夜會をなさるさうで、その御案内にいらつしやいました。』

信重は格別氣のなささうに、

『あゝ、さうかね。併しペリエー夫人が、自身夜會の案内に出かけて來るなんて、あんたもえらい人氣ものになつたものだね。』

『いゝえ、それがね、あなた、奥さんは私の方へお尋ねになる前に、あのエリナ夫人を訪問していらつしつたんですとさ。あの方を是非とも夜會にお呼びしたいお考で、お頼みにいらつしつたのですつて、併しあの方は招待を一切斷つていらつしやる評判の方なんでせう。で、やつぱりいけなかつたんださうですけれども、私の噂が出ると、是非私に紹介して頂きたいから、それでは出席しようといふ事だつたさうでございますの。ですから是非私に出席して貰はなければ困るつて仰しやるんですわ。その事でいらつしやいましたのよ。』

この話の間に信重の顏色は變つたが、併しやつと平靜を回復しながら、

『はゝア、妙な話があるもんだね。……それほどにあんたは有名になつてるんだね。……それであんたは行く事に極めた。無論斷る理由はないが……。では夜會であの女に紹介されようといふんで……。』

芙蓉子は良人の容子が少し變で、言葉の調子も妙に嗄れて居るのに氣づいた。が、併しエリナ夫人が當の相手であらうとは疑ふ由もないので、別に怪しむ樣子はなかつた。

『私だつてどんなにかあの方に逢つて見たいでせう。何だか外國人のやうな氣がしないんですもの……。あの方に逢つたら、二人の母樣に自慢をしてやりますわ。』

何のわだかまりもない、善良な妻の顏を、彼は正視するに堪へなかつた。彼の心は重く、そしてどんなに罪深く、妻の前に感じた事であらう。

『あゝ、己はこの女を裏切る事は出來ない。』と、彼は心に呟くのである。

芙蓉子は頻りにエリナ夫人の事を話し出すの

であるが、彼は心苦しさにいゝ加減にあしらつた上、用事を構へて、自分の書齋に閉籠つて了つた。

いよ〳〵妻と惠美子が會見するのかと思ふと、彼は何とも知れぬ懸念に襲はれるのだ。惠美子の方で芙蓉子に逢つて見たい好奇心に驅られて居る事は、彼もよく知つて居た。現に彼を許す時の彼女の條件にも、芙蓉子を紹介するといふ事があつた位だつた。併しそれは單なる好奇心に過ぎないので、烈しい憎惡をまだ見ぬ芙蓉子に感じて居るためであらうとは、彼には解釋出來なかつた。

併し憎惡は感じないまでも、彼女の地位と名を奪つた女に、決して好感の持てる筈のない事は明らかなので、この會見が表面どんなに美しく見えても、決して愉快なものでない事は想像されるのである。その上敏感な妻が、エリナ夫人の正體は兎も角、日本人である事を看破するやうな結果にならぬとも限らぬので、そこにも彼の懸念は潜むのである。

そしてその夜會に彼自身が二人の挨拶の場に立會ふ事は、どうしても心が咎めるので、夜會に連なる事は止むを得ないとしても、會見の場だけは免れる工夫をしなければならぬと考へるのだつた。

大夜會の幕はいよ〳〵切つて落された。

それが信重に取つて不安であつたやうに、惠美子のエリナ夫人に取つても、何とも知れぬ氣がかりの種ではあつた。

彼女は遠目に舞臺から、觀客席の一隅に陣取つた芙蓉子を、瞥見せぬではなかつたが、併しそれは朧げに顏の輪郭を認めた位で、途中で出逢つたところで、彼女を認識し得る程度のものではなかつた。

惠美子はいよ〳〵今夜こそ人間の法律と、地上の因習と、或人々の陰謀とが、彼女の當然占むべき地位と愛とを奪つて、彼女の代りに置換へた女――松尾伯爵夫人と對面するのである。それは理窟から云へば、憎んでも憎み足りない女でなければならなかつた。けれども彼女は不思議に芙蓉子に對して、憎惡といふほどのものを持つては居なかつた。たゞ自分の戀敵であるとの意識だけが、彼女に働きかけるに過ぎなかつたので、自分の足下に踏みにじるに値する女であるなどとは決して考へなかつた。

が、それにも拘はらず、一度芙蓉子を見、彼女を知らうとする慾望、或は好奇心がひた押しに彼女をこの夜會にまで驅つたのであつた。

今日は服裝も、彼女は注意の上に注意をして撰んだ。普通に女優のやうなと云はれる、けばけばしい服裝と化粧は、彼女の最も嫌ふところなので、いつでも貴婦人の上品なたしなみを忘れぬ彼女だつたのだ。淡いクリーム色のデコルテを身に纏ひ、髮にも一輪大きな同じ色の、夜咲く睡蓮の花をつけ、見事な光輝を放つダイヤのピンを置いた。

彼女の僞の赤い髮はやゝ不自然の感を與へるけれども、彼女の服飾と、素晴らしい美しさが、その不自然を巧みに消して居るのだ。頸筋から兩の腕にかけての驚くべき曲線美と、その優美な身のこなし、半ば情熱的に、半ば悲劇的に輝くその東洋的の神秘な眼光、熟しきつた甘美さを持つ唇――それは全く舞臺で見るよりは、なほ近優りする彼女の美しさが、如何なる寶石よりも、白色燈の下に、燦爛として光を放つのであつた。

彼女の來着はやゝ遅れて居る方だつた。彼女は宮殿のやうな莊麗さを持つ大應接室に導かれると、最早大分來着して居る男女の客に、挨拶をして居る元帥夫人を見出し、その方に進みながらも、忙はしく周圍を見廻した。もしやそ

こに髪の黒い松尾伯爵を見出せば、芙蓉子も一緒に居るだらうと考へたからである。

併しそこには髪の黒い日本人の姿は一人も見えなかつた。

待設けたエリナ夫人の姿を認めると、元帥夫人は大急ぎで彼女を迎へ、まづ感謝とお世辭の雨をふらせた。すぐ彼女は崇拜者の群に取りまかれて了つたのである。

忙はしく人々と挨拶をかはして居る中、突然彼女は群集の間に、微妙な波動の傳はるのを感じた。「東洋の寶玉」と誰かが囁く聲が耳に入つた。

さては芙蓉子が！　と、人々の眼の注がれた方を見ると、それはたしかに目指す芙蓉子に相違ない女が只一人、主人の元帥夫人と挨拶をかはして居るのであるが、その傍に信重は居なかつたのである。

芙蓉子は純白のデコルテをつけ、漆黑のウエーブした髪に一輪、大きな同じ純白の薔薇を插したのが、この上もなく映りよく、胸にも同じ色の薔薇をつけて居り、さながらお伽噺の王女がそこに出現したかの如き純潔そのものと見える雰圍氣を彼女の周圍に漂はして居るのである。丈もすらりと高く、肉づきも豐かに、佛蘭西の女に比べて、惠美子同樣少しも小柄な事はなく、姿の圓熟した美しさは、惠美子とさして見劣りがなかつた。そして二人の間には當然日本人としての共通の、どこか歐羅巴人と違つた何ものかがあつた。

惠美子のエリナ夫人は、彼女を認めた瞬間、己れを忘れて恍惚と芙蓉子の美しい氣品のある姿に見とれた。それは彼女の胸を波打たせ、名狀し難い感覺を起させたけれども、さりとて決して憎惡ではなく、また嫉妬に近いものですらなかつた。

彼女は輕い溜息を漏らして芙蓉子の姿を凝視した。惠美子の傍に立つて居た若いチモル男爵は彼女に向つて、

「奥さん、あなたはあの方を御存知でせうね。」

『いゝえ、どなたなんでございますの。日本人ぢやアありませんの。まア、ほんとにお美しい方でございますね。』

『さうです。日本大使館の松尾伯爵夫人です。東洋の寶玉と呼ばれて居る名花です。』

「あ、あの方が！」と、エリナ夫人は初めて知つたやうにその場を繕つた。

サロンの中は群集で右往左往に亂れ始めた。

惠美子はわれとわが心を制しようとするに拘はらず、心の沈着を得る事が出來なかつた。

自分は彼女に對してどんな態度を取るべきであらうか。どういふ話をすればいゝのであらうか。ひよつと自分を裏切るやうな事がありはしないだらうか。——自分はモ少し心を鎭める必要がある、と考へて、相手を避け、茫然と佇んで居る時、突然自分の前に立つて笑みかける元帥夫人を見出した。夫人の傍には當の芙蓉子が慎ましやかに並んで居るのである。

「エリナさん、あなたの崇拜者、日本の松尾伯爵夫人を御紹介いたします。」

不思議な運命の絡み合つて居るこの二人の女は、かくして相對して立つた。

芙蓉子の美しい顏を、鼻の先に見た時に、突然惠美子は嫉妬の發作に近いものを初めて感じた。その甘美な脣は信重の接吻に濡れて居るではないか。その豐滿な雙の腕は、信重の抱擁に飽いて居るではないか。そしてそれはみんな自分のものであつたのだ。——彼女は輕い眩暈をさへ感じたが、幸ひに嫉妬と眩暈の發作も、瞬間に過去つた。

相手の心にどんな烈しい動搖を起さして居るとも知らぬ芙蓉子は、心からの美しい笑顏を惠美子に向けて、

「私、あなたをどんなに崇拜して居る事でございませう。一度あなたにお逢ひして見たいと思ふ心が山々だつたので、今夜がほんとに待遠しかつたのでございます。お目にかゝれて、こんな嬉しい事はございません。」

「御好意は私に取つても、どんなに嬉しうございませう。私もあなたのお噂はこの國へまゐりまして、度々伺つて居りますので、私こそお目にかゝるのを樂しみにしてまゐつたのでございますよ。」

二人とも流暢な佛蘭西語で自由に話し合ふのであつた。それは聞いて居て、少しも外國人の佛語らしく感じない程度の巧みさであつた。

「それではお二人とも同じ事でございますね。お紹介した私に取つても、どんなに滿足でございませう。」と、元帥夫人がさも滿足らしく口を挾んだ。

「あの奥樣。」と、芙蓉子は元帥夫人に向つて、

「私、暫くエリナさんとお話したいと思ひますのよ。十分間ばかり……。ようございませうね。」

「さア〳〵、それではお二人ともこちらの方へおいで遊ばせ。その間誰もお紹介しない事にいたしますから……。」

元帥夫人は二人を片隅に導いて椅子を與へた。惠美子はなすまゝに任して居たのである。まさかに芙蓉子が自分の素性を突留めたためではあるまいと思ふのであつた。

## 綠室へ

芙蓉子は惠美子のエリナ夫人と二人きりになると、誰でも惹きつけられずには居られぬやうな笑顔を作つて、

「私、舞臺の上のあなたは、好きで〳〵仕方がなかつたので、是非舞臺を離れたあなたを拜見したいと、望んで居たんでございますの。その望みは今夜果されたのですから、こんな滿足はございませんわ。」

惠美子は同じやうな、やゝ淋しい笑顔を返して、

「それであなたは御失望なさいませんでしたの、舞臺を離れた私を御覽遊ばして？」

「いゝえ、舞臺の上よりも、もつと〳〵好きになる事が出來ましたわ。それであなたとたつた二人暫くでも、お話する機會を作つていたゞいたのは、外でも御座いませんの、來週の金曜日に宅で、氣の知れ合つた方だけの、ほんの小さな夜會を催したいと思つて居りますのですが、あなたにお越しを願へたら、こんな嬉しい事はないと存じまして……。それはあなたが一般の招待を拒絶していらつしやる事は、よく承知して居りますから、御無理な、また御迷惑な御願ひではございますけれども、誰よりもあなたを崇拜して居りますこの日本の、小さな女の望みを叶へて下さる事は、出來ないものでございませうか。」

惠美子は意外なこの芙蓉子の申出に、何と答へていゝかを知らず、驚愕に打たれた顏を、別にどんな深い意味があるとも知らぬ芙蓉子は云ひつゞけた。

「只今倫敦に居ります私の姑も二三日内に巴里へ引返してまゐりますので、私の夜會へあなたが御出席下さると知つたら、私にはどんなに自慢の種になるかも知れないのでございますのよ。いつぞや母の手紙に——母は倫敦の日本大使夫人でございますが、その母の手紙に、母や姑は一度あちらの夜會で、あなたにお逢ひしたと云つて、私に自慢を云つて來た位なんでございます、その事はあなたの御記憶には留つて居ないかも知れませんが……。」

惠美子は心の慌しさを强ひて制しながら、何氣ない風を粧つて、

「おや、あなたのお母様は英吉利の日本大使夫人でいらつしやいますの。いゝえ、覺えて居りますわ。あなたのお姑さんにもその席でお目にかゝりました、これで私の記憶はなか〳〵いゝんでございますから、おほゝゝ。」と、惠美子は微笑に紛らすほどの餘裕を回復して居た。

芙蓉子はエリナ夫人が母達を記憶して居てくれる事に、何とも知れぬ感謝の氣持をさへ浮べながら、

「まア、お覺えになつて居てくだすつて嬉しうございますわ。姑は隣の家であなたにまたお目にかゝる事が出來たら、どんなに喜ぶ事でございませう。ねえ、エリナ様、この日本の女の願ひをどうぞお叶へ遊ばして下さいませ。」

再び伯爵未亡人を見ようとする慾望が惠美子を驅つた。復讐の炎がまたむら〳〵と燃え立つのを、どうする事も出來なかつた。彼女は異様な光を點ぜられた自分の眼と、感情の發作を隱すために俯向いた、さながら諾否の決定について思案にあぐむかのやうに。

芙蓉子は何の疑惑をはさむ様子もなく、

「エリナ様、御無理な事によ、承知して居りますわ。でも御承諾下さらなかつたら、私、どんなに失望する事でございませう。」

實際芙蓉子の失望がどんなに大きいであらうかは、惠美子によく分つた。

芙蓉子が自分の素性について、何の疑ひも持つて居ない事はいよ〳〵明らかで、その點は安心であるが、たゞ伯爵未亡人が第二回の會見で、御自分を看破し得ないであらうかについては、確信が持てなかつた。この[illegible]子夫人に看破される事は、非常の不利益であるが、併し危險な慾望を制へる事が出來ないのだ。のみならず信重と芙蓉子の作つて居る家庭に立入つて見たいといふ願ひもそれに讓らなかつた。

で、彼女は承諾を與へようと略自分の考を纏めたが、直ちに返事する事を控へようと思案した。やがて平靜を取戻した顏を擧げると、

「奥様、そんなに仰しやられると、あなたを拒絶する力はなくなりさうでございますわ。併し後程までお返事を保留さして下さいませんか。お[illegible]までにきつとお返事申上げますから……」

芙蓉子は惠美子の決して拒絶するのではないらしい顏色を見て取つて半ば滿足しながら、

「それは私に希望を持てとのお言葉なのでございませうね。では後程どうぞ私を滿足さして下さいますやうに……。どうもあなたを引留して濟みませんでした。皆様がお待ちかねでございませう。」

二人が立上つたところへ後れて入つて來たのは信重だつた。彼は用事をこしらへ、態と後れて來たのである。二人の女は、自分達の良人であり、また良人であつた男を同時に認めた。

信重が二人の、睦しげに連立つた姿を認めたのも同時だつた。豫期して來た事ではありながら、その瞬間に彼の顏色は變つた。ちつとも變化を見せなかつたのは惠美子の方である。

芙蓉子は良人を迎へて、

「あなた、私の滿足を察して下さいませ。エリナ様に紹介していたゞいて、もうお友達になつて了ひましたわ。」

信重は何とも知れぬ罪深い面ざしで、惠美子の方を見た。

「エリナ様、御紹介申上げます。良人の伯爵松平信重でございます。あなた、エリナ様でございますのよ。」

信重は無器用に頭を下げて、何やら口の中で呟いた。

「私、マダム・エリナでございます。……おや、どこかでお目にかゝつたやうでございますわね。」と、彼女はいたづら氣分で、皮肉をこつ

て見た。
信重は狼狽しながら、
『さうですかしら、どこででございませう。』
『さア、思ひ出せませんが……。それとも私の思ひ違ひですかしら。何たか日本の方を見ると、私にはまだ區別がハッキリいたしませんから、人違ひかも知れませんでございますわ。』
と、澄し拂つて云つた。
信重は救はれたやうに、
『さうでせう。どうも舞臺以外にお目にかゝつた記憶はありませんから……。』
芙蓉子は良人の顏に、モ一ツ感激の樣子の足りないのを氣にしながら、
『あなた、エリナ樣は倫敦で、お母樣達にお逢ひになつた事を覺えて居て下さいますのよ。そしてどんなに私に親切でいらつしやるでせう。私、何だか十年もお近づきになつて居たやうで、外國の方のやうな氣がしない位でございますわ。』
惠美子も信重もぎくりとしたが、芙蓉子が意味もなく云つた事は明らかなので、惠美子は安心しながら、さり氣なく信重に向つて、
『私も何となく奧樣がお懐かしく思はれるのでございますわ。』
丁度その時、元帥夫人が近づいて來て、信重と挨拶をかはした後、芙蓉子に向つて、
「お話がお濟みになりましたら、一寸お顏を貸して下さいませ。是非あなたに紹介してと仰しやるマダムがございますから……。」
芙蓉子が拉し去られたので、後には信重と惠美子が殘ると、惠美子は聲を落して、
「伯爵樣、あなたにお話し申上げたい事がございますの。どこか人目のないところでお逢ひしたいと思ひますわ。」
『それでは綠室がいゝでせう。この室から行かれる事になつて居ます。』
『では先へいらつしつて下さい、私、すぐ人目を避けてまゐりますから……。』
信重は惠美子に別れると、綠室の方へ急いだ。綠室はサロンの一端から通ずるやうになつて居て、可なり廣い面積を持ち、椰子屬の植物が大きな葉をひろげ、芭蕉が青い果々とした實を結び、ブーゲンビレア、ポインセチヤのやうな熱帶植物が妍を競つて居る。その間ところどころに白大理石の影像が立ち、適宜のところに籐椅子が配置され、電燈が輝いて、美しい葉影をタイル張の床の上に投げて居る。こゝには一人の人影もなかつた。信重は椰子の葉蔭を選んでそこに立ち、萬一の危險を顧慮しながら、注意深く惠美子を待つて居た。暫くすると絹ずれの音が聞えて、靴音も忍びやかに惠美子が近づいて來た。
『こゝは誰も來ませんかしら……。』と、彼女は小さく日本語で囁いた。
「大丈夫です。おかけなさい。私は立つて居ます。」と、彼も日本語で答へるのだつた。誰に聞かれてもその方が安全だつたのである。

## 人影

惠美子は籐椅子に腰をおろして、
「あなたの奧樣が、それは迚も私を好いていらつしやるのよ。」
「誰だつてあなたを好く事を、私は疑ひませんよ。」
『でも不思議ですわね。……奧樣どんなに美しい、純情の方でせう。あなたはお仕合せね……』
『それはあなたの皮肉ですか。……さうです、私は仕合せだつたのです、再びあなたを發見するまでは……。』
『私は虐げられた女で、何の罪惡も犯しては居ないでせう、それで居てあなたの奧樣の前に立つと、何か罪を犯した女のやうに氣が引けるの

ですわ。芙蓉子さん――と仰しやいましたね、芙蓉子さんは私達の過去をほんとに御存知ないでせうか。知らして下さい。』

『朧げに知つてるだけで詳しい經緯は何にも知りません。無論あなたの名など知つては居ません。そして今は何もかも忘れて居るのです。』

『さうですか。それならいゝのです。それであなたにお話したいと申上げたのは、至急お打合せしたい事があるからなんです。實は來週の金曜日に、お宅で夜會をなさるといふので、芙蓉子さんから御招待を受けたのです。お斷りするにも退引ならぬやうな場合になつて了つたので、後程までにお返事をしませうと申上げて置いたのです。あなたのお母樣も二三日中に倫敦からお歸りなさるさうでございますね。私、やはりお斷りしたものでせうか。それともお受けしていゝでせうか。あなたの御意見を聞かして下さい。』

信重はハタと當惑して考へ込んだが、

『それは……それはあなたがお宅へ來て下されば、こんな滿足はありませんが、何かしら心配ですね。心配といふばかりでなく、それはあなたに苦痛を與へるといふ事ではないでせうか。私にしても自分の宅であなたを見るのは、あまりいゝ氣持もしなからうと思ひます。』

『ではあなたは私があなたの家庭にお立入する事をお好みにならない？』と、彼女はいや味らしく云つた。

『いゝえ、決してそんな意味ではありません。あなたと私とは、お互ひに純な友情に活きるお約束ですから、あなたと私と宅で逢つたところで、事實何の疚しい事もないのです。寧ろそれは喜びでなければならない筈です。私はあなたと逢ふ機會の出來る事は、どんな事情の下にでも滿足です。あなたのために多少の危懼を抱きましたけれども、あなたが私の宅へいらつしやる事を、不愉快になさらぬならば、それは自ら別問題です。』

『私、あなたのお母樣にお目にかゝつても、大丈夫だといふ自信がありますわ。あなたはその點を心配していらつしやるのですわね。』

『まア、そんな事ですが……。』

『では金曜日の御招待をお受けする事にいたしますわ。』

『隨分氣をつけていらつしつて下さい。』

『それはあなたこそですわ。私は自分の擧動や言葉で、過去を疑はれるやうな事は決していたしません。もしお母樣や奧樣のお疑ひを惹くやうな事が出來るとすれば、それはあなたの責任ですわ。それだけを御忠告して置きます。……では人目にかゝつてはいけません。あちらへいらつしつて下さい。私、暫くしてからまゐります。』

信重は誰の注目をも惹かずに濟んだ事に滿足しながら、綠室を出ると、大舞踏室の方へ歩みを移した。が、この會見は決して安全ではなかつたのである。なぜなら、おしやれで評判の高い、そしてエリナ夫人に思ひを寄せて居るドーダン男爵が、綠室に入つて來て、二人の會見の現場をちらと見て取つて了つたからである。彼はそのまゝ引返した上、信重と入違ひにまた椰子の葉蔭へ入つて來て、

『夫人、松尾伯爵が今こゝを出て行かれたやうでございましたね。』

『さうですか、私、ちつとも存じませんが……私がこゝに休息して居たので、お引返しになつたのでせう。』と、惠美子は少しも慌てずに澄し拂つて云つたが、惡い相手が來たと思つた。

『さうでしたか。では夫人、十分御休息が出來ましたら、次のワルツにお相手をさして下さいませんか。』

彼はエリナ夫人が自分に鼻藥を與へるに違ひ

ない事を察して切出したのである。
彼女は無言に頷を與へた。そして舞踏室に導かれた。
信軍夫妻の歸りの自動車の中で、待ちかねたやうに芙蓉子が口を切つた。
『あなたに吃驚させる事がありますわ。その中催す筈の私の家の夜會ね。今度の金曜日にする事に極めましたわ。そしてエリナさんが來て下さる約束を、ちやんとなすつて下すつたわよ。』
と、彼女は大自慢をいふのだつた。
『さうか、それはえらいお手柄だね。……あんた、エリナ夫人がそんなに好きになつたのかね。』
『えゝ、ほんとに好きになりましたわ。エリナさんも私を好いていらつしやるに違ひないのよ。でもあなたは冷淡ね。今度家へいらつしやつたら、あなたが第一番に歡待して下さらないと困りますわ。』
『さうかね、冷淡といふ事はない筈だが……それは家へ來れば、無論大いに歡待する事にしようよ。』
から云ひながらも、彼は妻の顔を正視するに堪へなかつた。
惠美子は金曜日の松尾邸の夜會が、心待せらるゝと共に、不安の種でもあつた。
彼女は眞に伯爵未亡人のために看破されゝば、どう局面が展開するかは知らないが、彼女の目的は單に松尾家に乘込んで見る事を冀つたに過ぎないのである。いづれにしてもそれが彼女自身に取つて、愉快な行動でない事は餘りにも明白だつた。
彼女は自分が主婦である筈であつた家に、お客として入込むのである。自分の地位を奪つて居る女の許に、招かれて行くのである。苦痛なしに、嫉妬なしに、どうしてその試練に堪へられるであらうか。自分の胸に熱湯を注込んだ女、自分の運命を轉覆して了つた女――伯爵未亡人に、どうして笑顔を見せる事が出來るであらうか。けれども堪へなければならぬ。疑はれてはならぬ。そのためには舞臺上のあらゆる技巧を實地に役立てねばならぬ。自分は無事に芝居を仕終せなければならぬ……。
たゞ新伯爵夫人、芙蓉子に對して、自分は結局どんな態度を取ればいゝのだ。彼女は實際自分を好いて居る事に、何の疑ひをはさむ餘地もない。彼女が純な感情の持主である事を、誰が疑ひ得よう。彼女には罪がない、彼女は單に伯爵未亡人の陰謀の傀儡になつたまでに過ぎぬのであらう。
若し違つた運命の下にあつたならば、自分と彼女とは姉妹のやうに親しい友情で結びつけられる間柄であつたかも知れない。
それだからと云つて、彼女の友情を受入れる事が、どうして自分に出來よう。結局は彼女をも敵にしなければならないのだ。彼女と親しんで行く事、交際に深入する事、それは第一に避けなければならぬ事であるかも知れない。
自分の目的をもし蹉躓させるものがあるとすれば、それは彼女であるかも知れないのだ……。
それにも拘はらず、自分の心も彼女同樣、彼女に惹きつけられて行くのはどうした事だ。彼女のやうな友を欲しい。自分の友として、彼女のやうな女が一人でもあるであらうか……が、自分は氷のやうな心を持たなければならぬ。自分の目的のためには、一切を犧牲にする覺悟がなくてはならぬ。
芙蓉子はたとひ自ら企てた事ではないとしても、自分の地位を奪つた女である事に變りはないではないか。どこに容赦する理由があるであらう。自分は完全に目をつむらなければならぬ……。
その夜彼女はどうしても青ざめ勝な顔色を紛

らすため、平常より厚化粧をこらし、いつも舞臺で見せて居る目の下の付ぼくろも念入にし、髪も完全に染上げたところで、衣裳も選びに選んだデコルテをつけ、その朝信重から送り屆けられた鈴蘭の小さな花束を胸に止め、自動車をパッシーの松尾邸に驅つたが、彼女の胸は強い動悸を打つて居た。

それは彼女が帝王の前で演奏する時にすら覺えた事のないものだつた。

松尾邸は旣記した通り、セイヌの川沿トロカデロに隣接した、樹木の多いこの界隈の一軒建で、洒落た車寄があつて、自動車が自由に出入の出來るやうになつて居り、サロンと接して小さいながら舞踏室まで備へた、體裁のよい貴族的の住宅だつた。

これが自分の住んで居る筈の邸宅なのだ、と思ふだけでも、惠美子の心は穩やかでなかつた。サロンに通されると、そこには最早十組ばかりの來客があり、芙蓉子が接客に忙殺されて居るのを見るにつけ、惠美子は刹那の亢奮に驅られるのだつた。『そこお退きなさい！ それは私の地位です！』と、女王のやうな威壓をもつて叫びかける劇的光景が、幻のやうに彼女の頭を過ぎた。彼女はぐら〳〵と倒れるやうな氣持にさへなつた。辛うじて彼女が現實に歸つた時、彼女を認めた芙蓉子が、滿面に笑みかたむけて、溢るゝばかりの喜びを見せながら近づいて來た。

惡魔のやうな考へが、この純な笑顏を見た時に、朝日を受けた霜のやうに消え失せて了つた。惠美子はどうやら彼女自身を取戻す事が出來たのだ。

『まア、エリナ樣、よくおいで下さいました。みな樣があなたのお噂で持切でございました。今夜は後程あなたとゆつくりお話する機會を作りたいと存じて居ります。』

こゝでもエリナ夫人に對する好奇と好意の視線が、彼女に集注された事はいふまでもなかつた。見渡した來客の中に彼女の旣に相知る人々も二三に止まらなかつた。その中にド・ノーダン男爵の居なかつた事は幸ひだつた。

一通りの挨拶が終つたところで芙蓉子は姑を求めた。伯爵未亡人賴子は外の客と應對して居たが、それと見て此方へ近づいて來た。

## 信子人形

芙蓉子が聲をかけて、

『お母樣、エリナ樣ですわ。』

無論佛蘭西語で云つたのである。賴子夫人も多年の外國生活中佛語を最も得意として居たので、それは流暢に話せるのだつた。彼女は如才のない愛想作りをして、

『おゝ、お懷かしいマダム・エリナ。わが子の家でまたお目にかゝらうとは思ひもよらぬ喜びでございます。併しあなたはお忘れになつていらつしやるかも知れませんが……。』

『いゝえ、伯爵夫人、ランカシーヤ侯爵の夜會でお目にかゝりました事をよく記憶して居ります。併し松尾伯爵夫人があなたの義女でいらつしやることは、思ひ設けぬ事でございました。』

『義女には大變御好意をお示し下さいまして、此女はどんなにそれを誇りとして居る事でございませう。それは私とても同じ事なのでございます。どうか巴里にはまた一人あなたの熱心な崇拜者の殖えた事を、御記憶下さいませ。』

賴子夫人は少しでも惠美子を疑つて居る氣色はないのだ。丸三年以前一度逢つただけの女で、それが巧みに變裝し、姿形もすつかり變つて居る以上、彼女を認める事の出來ないのは寧ろ當然とも云へるが、併し彼女を日本人であらうとさへ看破し得ぬ理由は外にもある。日本

の女は假令多年外國にあつても、どこか日本婦人特有の物ごし態度を失ふ事の出來ないものである。

日本婦人はどうしても歐米の婦人になりきる事が出來ない。それが多くの場合に、日本婦人である事を裏切る。ところが惠美子は幼い時から、外人のその間で、日本人に少しも接觸せずに育つたので、一寸した態度の末まで、すつかり歐羅巴の女になりきつて居る。歐羅巴人の折に觸れて表はすさま〳〵の仕草や表情が、自然にそのまゝ彼女のものとなつて居るのだ。その上に髮の毛まで赤いのであり、眼色から顏立まで、よく見受ける伊太利人のタイプに或類似點を持つて居るので、日本の女の顏立ではありながら、日本人が見てさへ、看破することが出來ないので、頼子夫人は歐羅巴の女をよく了解して居るだけそれだけ、却つて惠美子を疑ふ心が起らないのである。

恐らく彼女を看破する日は、最後の破綻の折でなければなるまい。從つて當分惠美子は彼女の前に安全であらうと思はれる。

さて惠美子は頼子夫人に適當の挨拶を述べた上、導かれて舞踏室に入ると、眞先に彼女を迎へた信重が天下晴れた笑顏を作つて、

『奥さん、よく來て下さいました。どんなに案じてお待ちしたかも知れません。』

信重は彼女に腕を與へて、舞踏室から綠室に出た。それはペリエー元帥邸とは比較にもならぬ借宅であるにしても、小さく完備した氣の利いた瀟洒な構へだつた。惠美子はまづ讃美の言葉を述べようとしたが、それは咽喉から出なかつた。何かしら胸一杯にこみ上げて來るものがあるのだ。

『奥さん、ふさいでいらつしやるぢやアありませんか。』と、信重は囁いた。

『私の心持を察して下さい。あちらへまゐりませう。』

『私はあなたを苦しめる考は少しもありません。……母に逢つたでせうね、どうでした。』

『大丈夫でございますわ。もうすつかり安心して居ります。』

『母はどんなにあなたをお招き出來た事を誇りとして居るかも知れないのです。とてもあなたを崇拜して居るのですよ。』

『でもそれは遲うございますわ。』

『遲いは遲いにしても、それは既に「何物か」です。』

彼女は頼子夫人の話を避けて、

『奥樣はほんとにいゝ方ですわ。』

『そんな話よしませう。あなた、私と最初のワルツを踊つて下さい。』

『いゝえ、お斷りしますわ。』

『なぜです。』

『私は自分を信じられませんから……。』と、囁くやうに云つた。

『ぢやカドリールならいゝでせう。』

彼女は點頭いて彼女の席に導かれた。

やがて奏樂と共に華やかな舞踏の幕が切つて落されたのである。彼女は二三番の舞踏を人々のために餘儀なくされた。

何とも知れぬ倦怠が彼女を襲つて來たので、離れて一休みして居るところへ、芙蓉子が近づいて來て、

『エリナ樣、日本のいろ〳〵の玩具をお目にかけませうか。……ですけれどもあなたを暫くでも、この席からお連れ出し申す事は、皆樣にお氣の毒でございますね。あなたも若し舞踏の方をお擇びになるなら、どちらでもお心任せにいたしますわ。』

『いゝえ、私、日本のものを拜見いたしたうございますわ。ではどうぞすぐに……。』と、彼女は淋しく笑んで立上つた。

取散らした私の居室ですけれども……御案内いたしますわ。』

　恵美子は芙蓉子に導かれながら、悩ましい胸騒ぎをつとめて鎮めようとして居た。彼女は今悲劇の尖端に立つ女である自分を見出した事を自覺して居る。當然自分が占めたであらうところの、そして良人以外には極めて親密の同性の女ほか入れる事のない私室に、芙蓉子は恵美子を通さうとするのである。

　彼女はよくそれに堪へられるであらうか。けれどもそれは堪へなければならぬ。あらゆる感情を殺して自分を制しなければならぬ……。

　芙蓉子の居室は、自分が薔薇の室と稱へて居る通り、カーテンも絨毯もすべて薔薇色で、薔薇が織出されてあり、すべてがローズであるところの、如何にも明るい、女らしさの溢れる部屋であつた。そしてローズの仄かなる香が漂つて居るのである。

　調度や裝飾の小道具に日本のものが多く、多分に東洋的な色彩を持つ事が、この部屋の特色を形づくつて居る。殊にすぐ人目を惹くのは、日本の人形のコレクションを飾つた棚であつた。

　芙蓉子が日本の玩具を見せようと云つたのはこれだつたのだ。嵯峨人形、木目込人形、京雛、犬張子のやうなものから、大きな市松人形まで、さまざまの可愛い人形が、ところ狹きまで並べられてあるのである。この人形の作る雰圍氣だけでも、日本の匂ひが、室中にひろがつて居ると云つてよかつた。

　まざまざとこゝで日本の姿を見せられた恵美子の胸は、張り裂くばかり一杯になつて了つた。けれども怺へなければならぬ、少しでも感情の破綻を見せてはならぬと、彼女は懸命に努力しながら、目がしらに滲み出る涙を隱して、

『まア、可愛いお人形ですこと！　これ、みんな日本のものですの。』

『えゝ、日本の人形ばかりですの。みんな昔のですけれども、この市松人形は新らしいんですの。』と、棚の中から二尺ほどの、友禪を着飾らせた、お下髮の可愛いのを取出して、『これは日本の今の風俗そのまゝですわ。可愛いでせう。』

　さう云ひながら人形を恵美子の手に持たせた。

　恵美子はこれを受取らない譯にはいかなかつた。彼女はこの市松人形を見るにつけて、日本に殘して來た信子を思ひ出して居たのである。信子は最早こんな人形と遊んで居るほどになつて居るに違ひないと思ふと、またしてもにじんで來る涙を隱す事が出來なかつた。

『まア、可愛い……』と、彼女は人形を抱きしめると共に、ほろりと一雫の熱い涙を落した。が、すぐそれを笑つて拭つて、『あら、私、泣いたり何かして……あんまり可愛いと思つたのでつい……。』

　その時芙蓉子は恵美子の過去に何かありさうだと、何となしに感じたのだつた。が、深くは心にもかけずに、

『あなた、そんなにお氣に召したら、そのお人形を今日いらつしつて下すつた記念に差上げますわ。どうぞお歸りに持つていらつしつて下さいませ。』

　恵美子はハタと當惑しながらも、

『でもあなた、こんなお大事のものを……。』

『いゝえ、いくらでも日本から取りよせますわ。ね、持つていらつしつて下さいね。』

　こゝで疑はれてはならないと思ふので、

『では頂いてもようございますの。まア、何と云つてお禮を申上げたらいゝでせう。あなたの記念に大事に保存いたしますわ。まア、ほんとに可愛らしい！』と、彼女は俯いて人形をひしと抱きしめながら、二たびも三たび接吻を[illegible]へ、

るのだつた。その間に彼女はそつと自分を取戻したのだ。

『エリナ樣、そのお人形には名がありますのよ。』

『お名が……？』と、不審さうに彼女は芙蓉子の顏を見た。

『え〻、良人がつけてくれましたの。信子といふんですわ。』

『え、信子！』と、微かに呻いたと見ると、惠美子の顏色はさッと變つた。彼女はそこに倒れようとさへしたのを、僅かに支へると、今が大事の場合と、やつと何氣なく粧つて、『信子？ 何だかい〻お名のやうでございますわね。』

『良人が自分の名の一字を取つてつけたんでございますの。……あら、あなた、どう遊ばして、お顏色がおわるいやうですわ。』

『いえ、何でもありませんの。さつきから少し眩暈がして居たんですが、……私、時々貧血の發作があるもんですから。……そしてどうかすると何でもない事に泣いたり、笑つたり、ひどくヒステリックになる事があるんでございますの。今夜もついそんな發作をお見せして了ひましたわ。』

『まア、いけませんわね。それでは暫くこ〻にお横になつていらつしつたら……？』

『い〻え、もうほんとに何でもありませんわ。もうい〻んです。あなたとお話して居れば、何もかも忘れて了ひますわ。』

「エリナ樣、それはお世辭ではございませんの？」

「私、人樣に心にもないお世辭を申上げた事はございませんわ。」

『それを伺つてどんなに嬉しいでせう。エリナ樣、私、どういふものですか、すつかりあなたに惹きつけられて居りますのよ。それは友情と云つてい〻か、どうか分りませんが、併し友情以上のものであるやうな氣がするんでございますの。不思議ですわね。何だか目に見えない絲で、結びつけられて居ると云うたやうな感じですわ。私、日本のどんなお友達にだつて、こんな感じを持つた事はありませんわ。お國の違つて居るあなたに、どうしてこんなかと思ふと、自分がちつとも分らないんでございますの。』

『そんなに思つて頂くつて、ほんとに不思議な御縁でございますわね。』と、彼女も彼女自身に拘はらず、芙蓉子に惹きつけられて行くのを、どうする事も出來ずに、「それは私にも同じ事が云へるかも知れません。でもあなたは暖かな家庭の方でいらつしやるし、私は家のない、舞臺生活の女で、この先末長く御交際をつゞける機會がありさうにも思はれない事が、氣がかりでございますわ。』

「エリナ樣、あなたはいつまでも舞臺生活を續けるお考でいらつしやいますの。」

『え〻、私、二度と家庭の人とならうとは考へません。私、自身悲劇の主人公なのですから……。』

『え、あなたが？ あなたのやうに姿も心もお美しい方に、悲劇などといふ事が、あり得る事でございませうか。』

「私も初めは幸福だつたんでございます。併し悲劇と喜劇は隣同士だといふ諺があるではございませんか。それはたゞ一歩の違ひだけでございますわ。』

『それではあなたは御主人とお別れになつていらつしやるのでございますか。』

『もう、そんな事はお聞き下さいますな。私は獨りものでございます。奥樣、あなたは幸福な家庭生活をお味ひになつていらつしやる事でございませうね。』

『え〻、少なくも今までは。……でも只今仰し

やつたお言葉が氣になりますわ。悲劇と喜劇と隣同士……ひよつと私の家庭にも悲劇が……何だか急にそんな氣がし出しましたわ。エリナ様、どうしませう。」

「おほゝ、そんな事がございますものですか。私のヒステリーが一寸あなたに感染したといふだけですわ。」

「ほゝ、さうでせうか。」と、芙蓉子はにつこりした。

## 惠美子の計畫

信重邸の夜會は、幸ひにして何等の不慮の事件も起らず、無事に終りを告げた。といふのは惠美子のエリナ夫人が、結局人の疑ひを招かずに、切上げる事が出來たといふ事である。

併し信子といふ名の人形の出現は、全く彼女に取つて意外だつたので、その瞬間に破綻の暴露が危く起りさうだつた。惠美子は今後大いに警戒しなければならない事を、その時ほど痛切に教へられた事はなかつた。それ以來彼女が芙蓉子との交際に、細心の注意を拂ひ出した事はいふまでもない。そして皮肉にも二人の交際は、ます〳〵親密の度を加へつゝあるかのやうに見えた。

一方に又信重は、いよ〳〵惠美子に引摺られて行くばかりだつた。彼が單純な友情のみに滿足出來ないであらう事は、初めから餘りに明白な事だつた。畢竟彼は惠美子の手で、自由自在に操縱される操人形に過ぎなかつた。彼女はさうしてます〳〵男を深みへ誘つて行つたのである。それは彼女の目的を果すために、何よりも必要な事だつたのだ。が、彼女とても今は信重なしに活きて行く事の出來ない彼女自身を、見出しつゝあるのであつた。

信重の家庭は最早昨日までの幸福な家庭では有り得なかつた。信重に祕密の行動が多くなるにつれ、いつも適當の口實のみを作る事は出來ないし、またそれが口實であるために、眞實性を缺き、素直に受入れられる場合もだん〳〵に少なくなつた。夫妻の間に不信の空氣が、濃厚に醸し出され、時には云ひ爭ふ聲の漏れる事も、決して少なくなかつたのである。

芙蓉子は良人のこの祕密の行動の底にはきつと三角關係が潛んで居るに違ひあるまいと推測しながらも、流石に惠美子のエリナ夫人が、その主動力であらうとは、想像も及ばずに居たのである。

今日の日曜日も、信重は午前中から言葉を曖昧にして出て行つたのだ。夫妻の間には日曜日の快樂は、もうとうに失はれて了つて居たのだ。信重の訪問先は云はずと知れたサン・クルーであつた。彼は惠美子の私宅を訪問する場合もあれば、豫め密會の場所を極めて、そこで落合ふ事もあつた。

今日はその私宅を訪れたのであつたが、この私宅には時々不慮の訪問者があるので、二人のその言葉を、何人にも妨げられずに語り台ふためには、決して適當の場所ではなかつた。そこで今日はボートにしようと、惠美子が氣紛れに云ひ出したのである。

それは小春日和と云ひたいやうな、まだ冬ながら、なごやかな、風のない温かな日だつた。

ボートは信重が昔取つた杵づかなので、一も二もなく同意し、多少の食料と飲料を用意した上、別莊の下からボートを出させて、只二人セーヌを降つて行つたのである。

セーヌの川下には隨分景色のいゝところが多いので、春先などになると、隨分舟遊びをする人で賑ふのであるが、今は冬枯時とて、流石にボートを操つて居るのは、學生位のものに過ぎなかつた。誰にも見られたり、邪魔されたりする心配がないといふのが、二人の附目だつた

のである。
二人は可なり下流まで下つて見るつもりで、或時は漕ぎ、或時は流れに任し、或時は島々の蔭にボートを横たへ、若い熱烈な戀人同士のやうな享樂に耽るのだつた。併し惠美子に取つては、それが單なる享樂のために、ボートを擇んだ譯では決してなかつた。今日こそ自分の力を試さなければならない、同時にどれだけ信重に信頼出來るかをも試さなければならないと、固く心に誓つたのである。
『あなた、いよ〳〵お別れしなければならない日が、近づいて來ましたわね。』
『それはあなたが亞米利加と契約が出來たため、三週間後に佛蘭西を立つといふ事なのでせう。』
『えゝ、さらですわ。さうすればこれがお別れよ、永久に……。』
『亞米利加でも、どんな世界の果でも、あなたの後を追つて行くと、云つてるぢやアありませんか。』
『口先ではね。』と、惠美子は笑つて居る。
『それは心外だ。惠美さんは私の心持を十分了解して居てくれる筈だと思ふ。』
『あなたのお心持は分つて居ますわ。でも口先や心持だけでは何にもならない事よ。その上あなたにそんな事させたら、私はどうなります、奧樣に對してだつて、私の立瀬がありませんわ。』
『自分自身を捨てゝかゝつて居るものが、妻を捨てる位何です。私には惠美子さん以外には、もう何ものもないんだ。地位も爵位も名譽も、そんなものはもう何でもないんです。』と、彼は眞劍にいふのである。
實際信重は惠美子を再び完全に、自分の手に取戻すためには、如何なる値を拂つても、辭するところではないと、最近になつて固く決心して居るのだ。
『それぢや、あなたはほんとに私と一緒に亞米利加へ行つて下さる？』
『喜んで……。あなたが一切を私に許して下さるといふ條件の下に……。』
『でも大使館から休暇を取る事がお出來になつて？』と、ぢッと彼の顏を見つめた。
『惠美さん、あなたは眞面目にそれを聞くんですか。まさか本氣ぢやアないでせう。大使館から休暇を取つて、あなたの後を追つて行く？ そんな子供じみた質問はよして下さい。』
『それではどうして私と一緒に行かうと仰つやるの？』
『何もかも一切を棄てて行くのです。地位も名譽も家庭も。』
『ほゝ、それぢやア私と駈落をなさらうつて仰しやるのね。』
『駈落！……さうです、その言葉は素的ですね。駈落といふのは、何と誘惑のある言葉ぢやアありませんか。さうですとも、私はあなたと駈落をするんですよ。』
『あなた、私と駈落をなすつたら、巴里の新聞はどんな騷ぎをすると思つて？』
『巴里の新聞はおろか、世界中の新聞の社會面を賑はすでせうよ。』
惠美子は會心の微笑を、その美しい脣に漂はして、
『その時の結果を、あなたは眞面目にお考へにならない？』
『そんな事はもう考へたくないんです。駈落といふ事が、私に取つては何よりも眞面目な事なんですからね。』
流石に彼の額には悲壯に近い色を見せて居た。
『そんな事なさるとあなたの名譽、あなたの信用、あなたの地位、それからあなたの爵位ま

でも、ほんたうにもうあなたのものではなくなるのですよ。それを考へないのは馬鹿ものですわ。』

『馬鹿もの結構です。そんなものは惠美子さんの前では、三文の値打もないんです。たゞそんな世俗的なものをすべて失つた私を、あなたが拾つてくれるかどうかといふ事が問題なのです。それは私の問題でなくて、惠美子さんの問題なんです。』

さう云つた信重の顔は、凄く血走つてさへも見える位だつた。

『あなた、それはよく/\考へぬいての事？』

『考へぬいた上の事ですとも。それより以上に私と惠美子さんの活きる道はないと考へたんです。一切を捨てるつもりなら、これほど強い事はありませんからね。』

『でも、私、まだあなたを信ずる事は出來ませんわ。それはあなたはさう考へてはいらつしやるでせうけれども、考へる事と實行する事とは、別ものですからね。』

『考へた事を實行出來ない男だと思はれるなら、私は心外だ。私は斷然そんな男ぢやアないんです。』と、彼は決心を見せようと悶える風だつた。

『あなたは私を裏切つた事を、忘れていらつしやるのね。』

『それを云はれると一言もないが、それは私が大馬鹿ものだつたために、うつかり中傷に乘つて了つたのです。その中傷もどんなに巧みに私の胸に食入つたか、まだどんなに巧みに機會が利用されたか、あなたは御存知の筈だ。併し辯解はしないが、今度はさういふものの入る餘裕がないんです。苦い經驗は馬鹿ものを怜悧にします。私は勇敢に自分の意志を斷行して見せるまでです。』

『それではあなたは最後までお母様に反抗なすつても？　どこに落度のない、貞淑な奥様を犠牲になすつても？……私、そんな事は信じられない氣がしますわ。』

『それなら信じて頂かうとはしません。實行して御覽に入れる分の事です。』

惠美子は次第に滿足を感じながら、

『併し信重さん、私はあなたと駈落するにしても、違つた行方をしたいと思ひますのよ。駈落といふものは、そつと內緒で落人になるといふ事でせう。ですけれども私の駈落はあなたをほんとに愛して居る人達から、公然奪つて行かうといふのよ。お分りになつて？』

『といふと？』

『それはあなたのお母様、そしてまた奥様――芙蓉子さんと私の間に、生命がけの戰鬪が開かれるといふ事ですわ。芙蓉子さんにはお氣の毒ですけれども、仕方がありませんわ。私はそのために今日まで生きて居たんです！』

惠美子の眼は嘗て知らぬ凄味を帶んで輝いたが、またこんなに美しさの加はつた彼女の眼を見た事も、信重は嘗てないと思つた。その眼光こそ憤怒と怨恨と復讐に全生命を燃やして居る噴火口の火であつた。彼はその瞬間に惠美子の計畫の一切を了解したのである。

『さうですか。……ウ、ム……。』と、彼は呻いた。

### 橋の上と橋の下

惠美子は信重の心の底まで讀むやうに、鋭く見つめて、

『信重さん、芙蓉子さんの許にお歸りになるか、私と一緒に亞米利加へいらつしやるか、あなたが最後の決心をお極めになるのは今ですわ。』

『私の決心は極つてます。』と、彼は決然として、『私は斷然亞米利加へ行きますよ。』

『ではあなたのお身内――お母様や芙蓉子さん

と私との戰闘に、最後まで私の味方をして下さる？ どんな妨害や迫害が、思はぬ方面から來ても、敢然として抵抗して下さる？ でなければ、私は飛んだ恥をかゝなければならないのですから‥‥。』

『素よりです、私は決してあなたを見殺しにはしません。死なば諸共です。』

『さう、難有う！』と、惠美子の眼は涙に光つて、『さうすれば私は永久にあなたのものですを。私を勝たして下さい、私の復讐を遂げさして下さい。』

『それを復讐と呼ぶなら、あなたの勝手です。私はわれ〳〵二人の爲に、母を裏切りませう、妻を裏切りませう。裏切るといふ事は、私達の本來の地位を恢復するといふ事ですからね。』

『私としては當然の權利ですわ。でもね、あなた、御自分から荒立てるには及ばない事よ。機會を待つて下さい。最後の五分間、それが大事なのよ。』

『私は最後まで隱忍はするつもりですよ。』

暫くしてから、惠美子が、

『たゞ芙蓉子さんにはお氣の毒ね。私、芙蓉子さんの事を考へると、何度躊躇したか、知れないのですよ。ましてあなたに取つて見れば‥‥。』

『そんな事はもう云はないで下さい。芙蓉子はまだ子供もなし、若いんだから、別に幸福の道を見出す事が出來ますよ。』

『えゝ、さうですわ。お子さんのない事が仕合せですわ。さう思つて私、心を鬼にしてよ。‥‥それもこれもみんな信子のためですわ。あなた、信子の事を考へて、どんな場合にも私の味方になつて下さい。』

彼女はさめ〴〵と涙ぐむのである。そこには弱い彼女の一面があつた。

舟は今穩やかなセーヌの上を漂ひ流れて居る。知らぬ間にそこはもうセン・ドニであつた。丁度セン・ドニ島にかけ渡された同じ名の橋の下をボートが通る時に、例の機會ある毎にエリナ夫人の惠美子に云寄らうとして失敗して居るい、い、い、しやれもののド・ノーダン男爵と、巴里社交界の花と歌はれる一人であるT夫人が、忍び遊びにこゝへ來たらしく、橋の欄干によつて下を見おろして居たのである。二人は不義の逢引を、巴里を離れたこのセン・ドニに試みたものに違ひなかつた。

橋の上で小さな叫び聲を聞いたと思つて、何心なく惠美子が顏を擧げた時、橋の上の二人と端なく顏を合はして了つたのである。惠美子はハッと思ひながら、パラソルをさッと開いて、姿を隱して了ふと共に、疾口に、

『あなた、急いでこゝをぬけて下さい、惡いものに見られたのです、橋の上を御覽にならないやうに‥‥。』

云はれるまゝに信重は、オール持つ手に力をこめて橋下を漕ぎぬけて了つた。

『誰に見られたのです、こんなところで‥‥。』

と、信重は色を失つて囁いた。

『御存知のド・ノーダン男爵とT夫人ですわ。』

『そいつアいけない。‥‥どうすればいゝでせう。』

『もうかうなつたら構はないぢやないの。‥‥ド・ノーダン男爵にはあなたと、ポリニー夫人の綠室で逢つたところを見られて居るのよ、それを種に私に云ひ寄らうとして居るんです。今度こそおしやべりのT夫人も一緒ですから、きつとそこら中に云ひ觸らして歩くでせうよ。』

信重は溜息を吐いた。

『もういゝ加減人の噂に上つて居る事を、あなたは御存知ない？ 芙蓉子さんのお耳にだつて、もう入つてもいゝところですわ。あなた、それはあなたに取つて恐ろしい事？』

『それを恐れる位なら、初めからあなたを取戻

さうなどと、大膽な望みは起しませんよ。もう槍でも鐵砲でも來いです。どんな噂が妻の耳に入らうとも、びくともする男ぢやアないんです。』

『急に強くなつたのね。』と笑つて、『ぢや、あなたのお心は盤石です。』

『よかれ、惡しかれ、覺悟をすれば人間は強いもんですよ。……私は急に何だか力が充ちて來たやうな氣がするんです。不思議な力が私に加はつて居るといふ事を、あなたは信じて下さい。』

『私の魂があなたに乘移つたのかも知れない……。』

『さうすれば二人は渾然一體になつたのでせう。あゝ、私の惠美さん！ 今こそこの言葉を許して下さい。』

返事の代りに、惠美子は唇を與へた。……熱烈な抱擁……溶け合ふやうな幸福が、その瞬間に二人を包んだ。

伊太利大使館の晩餐會に招待されたエリナ夫人との噂は、最近ぼつ〳〵巴里の社交界の人達の耳に入り始めて居た。芙蓉子だけは全くそれを知らなかつたのである。前日ボートの上の二人を見たド・ノーダン男爵とT夫人が更にその噂を蒔き始めた事はいふまでもない。それは矢の如く巴里の社交界に傳はつたのだ。

丁度その話をT夫人から直接聞いた芙蓉子の親友M夫人が、今の中に松尾夫人を警戒させなければならないと眞面目に考へたところで、芙蓉子を訪問した上、T夫人に聞いた通りの事を話して歸つたのである。

それが芙蓉子にどんな衝動を與へたかは、想像に難くあるまい。M夫人が歸つてからも、芙蓉子は何だかそれを信ずる事が出來なかつた。外の女なら兎に角、相手が自分の不思議に惹きつけられて居り、そして信頼しきつて居るエリナ夫人である事は、全く有り得べき事とは思はれぬのだ。

併しT夫人が自ら目撃したといふ事實には、疑ふ餘地がないらしく、またM夫人の話して行つたところによると、良人とエリナ夫人の噂は、それより以前に、可なり社交界の一部に傳へられて居たらしいのである。果して良人とエリナ夫人との間に、さうした不義の關係が成立つて居るであらうか。

自分の贅澤な費用を得るために、資産のある男を誘惑する女優は多いに違ひない。が、エリナ夫人に限つて、そんな事がある筈はないと、彼女の理性は打消すのである。良人とエリナ夫人が深い關係まで立入つて居るであらうとは、どう考へて見ても有りさうに思はれないのだ。良人は多分滿足な說明を與へてくれるだらう、T夫人が目撃したといふのも、人違ひであるかも知れないのだ。――さう考へて強ひて憂鬱の心を紛らさうとしたけれども、彼女は自分が突然不幸の谷底に突落された事を感ぜずには居られなかつた。彼女の心はすつかり眞黑なものに包まれて了つて、そこにもう何等の光明のない自分を見出した悲しみと悶えに鎖されるのだ。

信重は夜遲く歸つて來ると、芙蓉子は待迎へて、

「あなた、お歸りをお待ちして居ました。お話し申したい事がございます。」

改まつた妻の口上と、青ざめて氣色ばんだその顏色から、信重は妻が何を云ひ出すかを、略察する事が出來た。

「話と云つて、遲いぢやアないか。明日聞かうよ。」

「いゝえ、明日までお待ちしては居られません。」

『明日まで待てない？　そんな火急な用事かい。』

『私、妙な事を聞込んで、今まで苦しみ悶えて居たのでございます。あなたにほんとの事を仰しやつて頂きたうございます。』

『フム、妙な事？　一體どんな事かね。』と、彼は平靜を粧つて尋ねた。

『ほんとに妙な事で、私はそんな事はないと云ひ張つたのです。今でも云ひ張るつもりで居ります。ですけれどもあなたが否定して下されば、それほど確かな、安心の出來る事はございませんから……。』

『その話をして見るがいゝぢやアないか。』

やつぱりエリナ夫人の問題なのだと思ふと、彼の心は流石に騷ぎ出した。

『先日の日曜に、あなたがエリナさんとたゞお二人きりで、セン・ドニの橋の下を、ボートを漕いでいらつしやつたのを、見たものがあるといふのです。それを見たといふ人はT夫人なのです。よもやほんとの事ではございますまいね。』と、妻の聲は震へを帶んで居る。

『T夫人が！　あのおしやべりの金棒引が……。自分とド・ノーダン男爵と密會して居る事を棚にあげて……よく云へた事だ。』

『ではあなた、譃だと仰しやつてくださいますの？』

信重はためらつた。こゝで譃だと云つて了へば、一時妻の手前を瞞着する事は出來る。妻も安心をするだらう。けれどもそれは一時の瞞着に過ぎない。彼は元來僞りをいふ事に慣れない男である。その上それを卑怯だとも思つて居る。またT夫人に見られてから大膽にもなつて居る。どうせ妻に知れる日は來るのだ、それは覺悟の前ではないか。で、彼は無造作に、

『それは併し事實さ。』

『え、事實ですつて？』と、芙蓉子はすつかり蒼白になつて、『エリナさんと一日舟遊びをなすつて、あの人達に見られたのが事實ですつて？……いゝえ、私、信じませんわ。』

『私は事實は決して否定しない。』

『おゝ、あなた！　そのお言葉は私の胸を突刺す劍でございます！』

彼女は絶望のあまり、空を仰いで、ひしと胸を抱いた。

## 傷けられた女王と女王

信重は妻の受けた打撃を見るに忍びなかつた。妻にはどんなに氣の毒であらうと思ふと、覺悟した身にも、恐ろしい罪惡が感ぜられるのだ。が、この場合妻にひかされてはならないと思ふので、素氣なく、

『何もそんなに意味のあるやうに取る事はないぢやアないか。』

芙蓉子は涙一杯ためた怨みの眼で、良人を見つめると、

『これがどうして意味のない事に取れるのでございます。若し意味のない事なら、なぜ私にそれを隱しておいでになつたのでございます。』

『エリナ夫人が一日舟遊びをしたいといふからボートに乘せてあげただけの事さ。そんな事を一々あんたに報告する必要もないと思つたからね。そんな事は男は誰だつてする事だよ。』

『あなたは私に隱していらつしやるのが惡いのです。私の知らない方ぢやアなし、私の崇拜して居るエリナさんと舟遊びをなさるなら、私を連れていらつしやるか、少なくともそのお話をなさるのが當然ぢやアありませんか。世間では何かまたいろ／＼噂をして居るさうでございます。それだのに、私はあなたがエリナさんと交際していらつしやる事さへも、ちつとも知らずに居たのです。それは一言もあなたがそんな事を匂はせもなさらないからで、それを

無意味な事だとどうして仰しやるのでございます。」

「私は自分の行爲の主人公だよ。私の行爲の一々を、あんたに報告する義務はない。意味のあるやうに取るのは、あんたの嫉妬からだ。私は嫉妬する女と爭ふ事が、何より嫌ひなんだ。』

芙蓉子は聲を絞つて、

『これが嫉妬でございますの。私はあなたと議論はいたしませんが、それをお聞き申す事は嫉妬ではなくて、妻としての當然の要求ではございませんか。あなたは私一人の良人なのでございます。私にお話しなさらずに、外の女をお連出しになる權利はございますまい。』

『そんなナンセンスはよしたらどうだ。良人が眞實の意味の友を異性に求めるのに、一々妻の承認を求める法がどこにある。それは妻の方にだつて云へる事なんだ。あんたが異性の友を作つたところで、私にも彼是いふ權利はないのだからね。』

『それは違ひます。眞實の友であるならばお互ひに打明け合ふのが當然です。私はこれまで一度だつて嫉妬がましい事は申上げませんのに、なぜエリナさんとの交際をお隱しなさつたのです。エリナさんだつて、あんまり間違つた事をなさると思ひますわ。そんな事だとは、今の今まで信じませんでした。』

『エリナ夫人を彼是いふのはよくない事だ。エリナ夫人には何の罪もない、人から非難を受けるやうな性行の女では決してないのだ。』

『一人の良人と交際を偸む女が、どうして正しい人なのでせう。』

『私はエリナ夫人については、最早あんたとは議論しない。その話はもう止してくれ。』

芙蓉子は涙を隱して、俯いて居たが、

『あなた、どうぞ私に正當な辯解を聞かして下さい。そして私を安心さして下さい。あなたとエリナさんと、どんな關係をもつていらつしやるのでございます。正直に打明けて下さる事をお願ひ申します。』

『たゞ友愛關係以上には何もありやアしないよ。この外に私の辯解はない。』と、信重は冷たく突放したが、彼の胸も恐ろしい苦痛に惱まされて居るのだ。

『そのお言葉だけであなたを信ずる事がどうして出來ます。』

『それならそれまでさ。もうこの問題については、斷然あんたとは口を利かん。』

彼は固く口を噤んで了つた。制へ難い嫉妬と怒りが、芙蓉子の心臟を破裂させるばかりとなつた。

『それなら最早伺ひません。私自身が眞相を確かめる事にいたします。』

彼女は辛くも云ひ終つて、自分の居室に戻るなり、長椅子の上に泣崩れて了つた。

表面事なく過ぎた一週間の後、この巴里の交際界時節中、殆んど毎夜の如く行はるゝ夜會の中でも、行事の一ツに數へらるゝ、交際家として、また文藝家として著聞なマンゲリート夫人の、最も選抜された夜會に、偶然惠美子のエリナ夫人と、松尾伯爵夫人芙蓉子とが顏を合はせ、そこに一場の劇的光景を展開させた事實があつた。

この夜會に二人とも互ひに顏を合はせる事を、少しも豫期して居なかつたのである。惠美子は兎に角として、芙蓉子の方は、今夜エリナ夫人も出席すると知つたら、たしかに參會を見合はしたに違ひなかつたのだ。なぜなら彼女は最早エリナ夫人の顏も見まいと覺悟して居たからである。

二人はその夜舞踏室に導く、次の控への間で

顔を合はしたのである。それは全く敵味方の女王同士の對面と云つてよかつた。瞬間芙蓉子の顔は怒りに燃え立つに引きかへ、エリナ夫人の顔は、その反對に青くなつた。彼女にもそれは全く意外だつたのである。彼女はそのまゝ進みよつて、いつもの通り手を差出したが、芙蓉子は斷然その手を拒絶したのである。

二人は無言に見合つたが、惠美子の方が冷靜に聲を落して、

『奥樣、私何か御機嫌を損じたのでせうか。』

『はい、仰しやる通りでございます。』と、芙蓉子は冷たく云放つた。

『それで私の手をお取りにならない？』

『はい、あなたのお手に觸れる事を拒みます。いゝえ、私にお話しかけになる事までも拒絶いたします。』と、彼女は亢奮しながらも、力強く誇りをもつて云つた。

惠美子は信重夫妻の間に、自分に關していきさつのあつた事は、現に信重を通じて知つて居たのである。從つて彼女は決して狼狽はしなかつた。

『なぜでございませう。その譯をお聞かせ下さいませんか。』と彼女は言葉を穩やかにして云ふのである。

芙蓉子は激して顔を赤くすると、美しい眼には險しい色が浮んだ。

『お尋ねになるなら申上げます。あなたは私の眼を掠めて、良人と交際していらつしやいます。前週の日曜日にボートで良人と一日をお遊しになつた事も存じて居ります。そして良人は一切を秘密にして居るのでございます。私は妻として良人とあなたの行動を認める事は出來ません。私はあなたを崇拜し、最も親密な友の一人にさへも、あなたを數へて居りました。友を裏切り、人の良人の愛を偸むやうな、如何な女も私は許す事は出來ないのでございます。』

惠美子はぢツと芙蓉子の顔を見返した。それは惠美子の方からも云へる事だつた。どんな文句でも彼女の方にはあつた。が、場所柄を考へて、素直に、

『奥樣、あなたは思ひ違ひをしていらつしやるのぢやアございませんか。私と御主人との間には、眞實の友愛があるばかりでございます。私は誰の前にもそれを恥ぢはいたしません。』

芙蓉子は嘲るやうに、

『良人もさう申して居ります。眞實の友愛といふものには、秘密はない筈でございます。私は良人を信ずる事が出來ないやうに、あなたを信ずる事も絶對に出來ません。よく世間で申しますが、女優といふものは、どんなに名高い、女優でも決して家庭に近づけるものではないと、私は今度といふ今度ほどよく敎へられた事はありません。最早あなたとは絶交いたします。

これからは赤の他人でございます。』

それは面と向つた甚しい侮辱の言葉でなければならなかつた。けれどもエリナ夫人は沈着拂つて、

『それでは私からは望まぬ事ながら、お言葉通り赤の他人になる外ございません。併しあなたはほんとの私を御存知ないのです。私はそんな女ではございません。いつかほんとにお分りになつた時に判斷なすつて下さい、假令運命が今後私をあなたの敵にさせませうとも……。』

この言葉が何を意味するか、芙蓉子にはその時は分らなかつた。

『私にはこの上あなたを知る必要はございません。』

さう云つて昂然と立上らうとした芙蓉子を、惠美子は再びよびとめて、囁くやうに云つた。

『奥樣、頂戴したお人形は、あれはお返しい

たしませうか。」
芙蓉子は腹立しげに、
「あのお人形はあなたに差上げるのではございませんでした。併し一度あなたのお手に觸れた汚れた人形は、お受取り出來ませんでございます。捨てるなり、打碎くなり、どうなり御勝手に遊ばして下さい。」
「さうですか。難有うございます。それでは大事に保存いたします。大事に……大事に……。」
この言葉を殆んど耳にも入れず、芙蓉子は勝誇つた女王のやうに舞踏室に歩みを運んだ。
が、さうした勝利が、實際彼女に何を持來したであらうか。またそれを勝利――刹那の勝利とさへ云う得るであらうか。何だか勝つたのは、侮辱を與へたのは、自分の方ではなくて、エリナ夫人の方であるやうな氣さへするのだ。洒々落々として少しも平靜を取亂して居ないエリナ夫人、十分に恥かしめられ、侮辱を與へられても、その恥を恥とし侮辱を侮辱としない態度は、何と解釋していゝだらうか、それはただ厚顏無恥とのみ云捨てて了へる性質のものとは、何だか考へられないのだ。彼女には何かしら、自信があるやうなのだ。全體どうした女なのだらう。謎のやうな云ひ廻し、人形を大事に保存すると云つた奇異な言葉、それ等の實際や、云ひ廻しの端々が、妙に芙蓉子の頭を混亂させて了ふのである。彼女は殆んど舞踏の席にも居たゝまれない氣がするのであつた。
後れて舞踏室に入つて來たエリナ夫人はと見ると、もう何もかもすつかり忘れて了つたやうに、人々と談笑もし、また愉快さうに舞踏の相手ともなつて居るのだ。それほど大膽にあばずれた女なのであらうか。芙蓉子はすつかり敗けて了つたやうに、何とも云へぬ口惜さに驅られるのだつた。

## 芙蓉子の覺悟

芙蓉子は家に歸ると、家庭生活の破滅を痛感するにつけ、その夜床に入つても、口惜し涙のみ先に立ち、轉輾反側して一夜を過した。
彼女は先の日エリナ夫人の事で、良人と云ひ合つて以來、自分から眞相を探りあてようと決心し、いろ／＼の方面を探つて居たのである。その結果はいよ／＼自分の疑ひが裏書されるばかりであつた事はいふまでもない。そして何かしら恐ろしい危險が、眼前に迫りつゝあるやうな豫感に、居ても立つても居られない氣がするのだ。更にこの場合に彼女の心細さを一層深めた事は、良人の上押へである大使夫妻が、親の喪のために賜暇歸朝の留守中である事と、折も折萬國婦人矯風會の大會が倫敦に開かれて、日本矯風會筆頭の幹事である姑の頼子未亡人が、約一週間の豫定で、數日前倫敦に立つた事だ。彼女は今全く孤獨で誰に愬ふるものも相談するものもないのだ。
頼子夫人は信重夫妻の家庭生活が近來圓滿を缺いて居る事に、素より盲目ではあり得なかつた。併し芙蓉子が勉めてそれを隱さうとして居たのも事實だつた。彼女の誇りから、また自分の仕向の悪いため、そんな事にもなつたのだと見られる事がいやさに、姑の前では強ひて圓滿ぶりを見せようと努めて來たのだ。それだけに頼子夫人も事件がそれほどに切迫して居るとまでは考へる事が出來なかつたのである。で、彼女は痛心はしながらも、大した結果がそれから生れるものとも思はずに、倫敦へ立つたのだつた。
煉獄の日は夜に次いだ。
芙蓉子は、併し、最早妻としての誇りも、姑への手前も、考へて居られない場合に直面したのだ。事態がそれほどに切迫したやうに感ぜられるところへ、彼女は良人が數日中に亞米利

加へ立つらしい事を知つたのである、しかもそれがエリナ夫人と一緒に。

尤も良人が何か旅裝を整へるらしい事は感づいて居た。旅行用品がルーブルの店から屆いたのも最近の事である。併し亞米利加へとまでは思ひもよらなかつたのであるが、どこから出たともなく、信重がエリナ夫人と共に渡米するのだとの噂が、彼女の耳を掠めたのである。

エリナ夫人が紐育との契約が出來て、來週巴里を立つであらう事は、一般に知れ渡つて居た事實だつた。

まさかと思ふ芙蓉子を更に驚かしたのは、良人が祕密に旅券の裏書を米國大使館に依賴した事實が、確かな筋から傳はつて來た事である。彼女は最早ぢッとしては居られなかつた。まづ良人が果してエリナ夫人と共に、同一汽船で渡米する計畫であるかどうかを確かめなければならぬ。

それにはエリナ夫人のアーブルから乘込む船の名が、既に新聞に報ぜられて居るので、船會社の巴里代理店へ出かけ、豫約された一等船客の名簿を見せて貰ふのが捷徑だと考へたので、早速代理店へ駈けつけて名簿を見せて貰ふ事にした。ところが果して松尾信重の名が本名そのまゝに載つて居るのである。

彼女は人目がなくば店先に卒倒したでもあらうところを、辛くも怺へてパッシーの自宅へ歸つて來た。泣くにも泣かれず、また泣いて居る場合でもなかつた。それは自分の破滅といふだけの問題ではない。自分の破滅であると同時に良人の破滅なのだ。どんな事をしても良人を救はなければならないと、彼女は健氣にも覺悟したのである。

たゞこの際彼女の縋らうとする大使夫妻の不在が、彼女に絕望に近いものを味はせた。大使代理を勤めて居る參事官夫人とは氣が合はないので、縋つて行けない。今は唯一の賴りが姑のみであると思ふので、彼女は直ちに倫敦にあて、急電を發して、その歸りを促したのである。姑が歸れば良人の出立を中止させるだけの事は、或は出來ようと考へるのである。

二時間ほどして姑から返電があり、明日立つと云つて來たので、彼女は初めて救はれたやうにほつとした。この上は良人のどんな忌諱に觸れても、誠心誠意を披瀝して、渡米を中止させなければならないと考へて、懊惱して居る中に、やつと良人が歸つて來た。

彼と彼女との間に、次のやうな會話のかはされたのは、それから數分後であつた。

「あなた、正直に仰しやつて下さい。あなたは亞米利加へ御旅行なさるのでございますか。」

信重は一切妻に知れたかと思ふと、もう覺悟を極めて了つた。

「行くかも知れない。誰からそんな事を聞いた？」

自分には最後の瞬間まで隱さうとするだらうと思ふに引きかへ、良人が承認の態度に出た事は、寧ろ意外だつた。

「良人の身の上にかゝる一大事の場合でございます。私、自身いろ〳〵探りました。エリナ夫人と御一緒においでになるのでございませう。」

信重は少しも慌てず、澄し拂つて、

「一緒に行つたら、それがどうなんだね。」

「私、決して嫉妬で申上げるのではございませんが、あなたはその結果をお考へになつた事が、お有りになるのでございますか。」と、彼女の聲は震へた。

「格別考へても見ないがね、……考へずともそれは分つて居るさ。」

「そんなに無造作に仰しやいますけれども、あ

なたのお身分なり、地位なり、爵位なりに關係する重大な事ではございませんか。』

『まさにその通り……。』

芙蓉子は呆れて良人の顔を眺めて居たが、やがてはら〳〵と涙をおとして、

『あなた、それでよろしいのでございますか。私、自分の事は申しません。自分などはどうなつてもよろしうございます。また萬一あなたが地位をお失ひになつても、それは致し方がないとして、たゞあなたが世界中の新聞を賑はすやうな醜聞の種をお蒔きになつて、そのため爵位までお失ひになるやうな事があつたとしたら、それで松尾家の御祖先にお申譯があるのでございますか。私、伺ひたうございます。』

『はゝア、あんたは何だかお母さんの口吻を眞似るやうだね。母はよくそんな事を說法したよ。併し松尾家の祖先などは現代人の私には關係がないさ。世間は世間、自分は自分だよ。』

と、彼は捨鉢をいふのである。

『まア、何といふお情ない事を仰しやるのでございませう。あなたはそれほどまでエリナ夫人に執着していらつしやりながら、それでも純潔な愛だと仰しやるのでございますか。』

『私は强ひて辯護はしない。あんたにも知れる時がある。』

『私、自分の身體はどんなになりましても、あなたの亞米利加行は、是非思ひ止つて頂きたうございます。』と、彼女は懸命に云つた。

『私は自分自身の主人公なのだ。自分の行動は斷然誰の束縛も受けない。』

彼の決心の動きさうもない事は、彼女の眼にあまりにも明白だつた。

『あなたがどうしても亞米利加へおいでになると仰しやるなら、私もお連れになつて頂きます。』と、彼女はまた思ひ込んで云ふのである。今の場合それは彼女の切札でもあつた。

『それがお前の嫉妬でないと云へるのかい。』

『いゝえ、嫉妬ではございません。私がお伴をすればあなたの名譽は救はれます。その上で私は亞米利加でどうなつても厭ひません。』

妻が自分の身を捨ててかゝつて居る事は彼にも分つた。が、彼はそのために態度をかへようとは考へなかつた。

『フム、大變な貞女振だね。……併しそんな必要はない。その上私が米國へ行くかどうか、まだ未定の問題なのだ。』

折角思ひ込んで云つた事も、輕く云ひ流されて了つて、彼女はどう取りつく島もなくなつて了つた。

『いゝえ、あなたは船まで豫約していらつしやいます。』

『豫約などはいつでも取消せば濟む。豫約したからと云つて、必らず行くとは極らない。』

『さうでございます。ですから取消して頂きたいのでございます。』

彼は口を噤んで了つた。

『大使館の方は、どういふ手續をお取りになるお考だつたのでございます。』

『何も手續は取らんよ。』

『ではあなた、無斷で亞米利加へ。……まア、そんなお考だつたんでございますか。』

信重は再び無言。暫く二人の間に沈默のあつた後、

『お母様が明日お歸りになります。』と、彼女は思ひ餘つたやうに呟いた。

『なに、母が明日歸る？』と、きツと妻を見つめて咎めるやうに、『電報を打つたな。』

『はい、この場合お母様をお呼び申すのが、當然ではございませんか。この上はお母様とともどもお諫め申す覺悟でございます、私の力には迚も及びませんから……。』

『それでは話はもうこれでいゝんだらう。』
彼女は云ひ知れぬ悲しみと無念の涙を湛へて良人の顔を見たが、堪へられなくて、そこに泣伏してしまつた。

## 危機に面して

急據英吉利から佛蘭西へ歸つて來た頼子夫人は、汽車が北・・驛へついても、芙蓉子の姿が見えず、家僕だけが出迎へに來て居ただけなのに不審を打つたが、それは芙蓉子が氣分の優れないためである事が知れた。
家僕からは芙蓉子の容態についても、あまり要領を得られないので、懸念しながら迎ひの自動車でパッシーへ歸つて來た。
旅裝を解く間もなく、芙蓉子の居間に迎へられたが、芙蓉子は姑と二人相對して了ふと、言葉より先にそこに泣伏して了つたのである。それほどに彼女の感情は亢奮して居た。
頼子は何の事やら分らぬながら、事の重大性を察して、
『芙蓉さん、全體どうしたといふのです。心配をしながら歸つて來たのですが、何事が起つたのです。さア、早く云つて下さい。』
『お母樣、私は良人に捨てられて了ひました！』
頼子は呆氣に取られて、
『この子は何をいふのです。あなたは信重といさかひをしたのですね。どんないさかひをしたのです。そんな馬鹿なことがあるものですか。さう云へばこのごろあなた方の間が少し變だとは思つて居たのですが・・・。』
『お母樣、それはたゞいさかひをしたといふやうな事で、濟される事柄ではございません。それは私が足らない女であるために相違ありませんが、良人の愛はもう完全に私を去つて了つたのでございます。』
『それはあなたの思ひ違ひです。思ひ違ひにきまつてます。男といふものは、よく一時の氣紛れ遊びをするもので、それを一々氣にして居ては際限のない事です。それとも信重の愛が、誰ぞ外の女に移つたとでもお云ひなのですか。』
『はい、それはあの御承知のエリナ夫人でございます。良人とエリナ夫人の評判は、もう巴里では誰知らぬものもない位でございますわ。』
頼子夫人は開いた口も塞がらぬやうに、
『あのエリナ夫人が！ あなたや私達があんなに崇拜して居た・・・。いゝえ、そんな筈はありません。きつと何かの間違ひでせう。』
『いえ、もう、決して間違ひではございません。先達などは人目を忍んで、二人で一日舟遊びをして居ました。併しお母樣、私はたゞそれだけの事で、お母樣をお呼迎へしたのではございません。エリナ夫人は二三日の中に、亞米利加へ立つのですが、良人もエリナ夫人と一緒に亞米利加へ行くため、もう船まで約束してあるのでございます。そしてそれも大使館へは何の斷りもなしに・・・、つまり駈落のやうなものなんでございますわ。良人は自分の地位も名譽も捨ててかゝつて居るのでございます。私がどんなに諫めましても、斷念しようとは申しません。爵位までも捨てて了ふつもりで、亞米利加へ行くのだと云張つて居るのでございます。私の力ではもうどうする事も出來ませんのでお母樣をお呼びしたのでございます。』
頼子は殆んど信ずる事が出來ない樣子で、併し恐ろしい懸念に襲はれながら、
『それは狂氣の沙汰で・・・併し信重がそんなに本心を失はうとは思ひもよらぬ事です。私からよく聞糺して見ますが、それにしても人格までが呼物になつて居たあのエリナ夫人が、あなたを裏切つて、そんな惡辣な事をする女とは思

はれませんがね。これには何ぞ……。」

「いゝえ、猫を被つて居た女優の本性を表はしたのです。それは私にも腑に落ちない事はありますけれども、良人をすつかり籠絡して了つた事だけは、間違ひはありません。良人はもう少しも私のいふ事などは用ゐません。良人の愛はすつかりあの女に奪はれて了つたのでございます。こんな事なら私はいつそ死んで了つたがましで、もう生きて居る望みも何にもございません。」

彼女はまたさめ〲と泣きくづれるのだつた。頼子は途方に暮れながら、

「芙蓉さん、私にはまだどうも腑に入りません。どう考へてもそんな信重ではない筈です。自分の名譽も地位も爵位も、エリナ夫人のために捨ててかゝつて居るといふやうな事は、有らう筈がありません。それでは松尾家はどうなるのです。いゝえ、決してそんな筈はありません。あなたは信重にたゞ脅かされて居るのです。」

「そんな事はございません。私はエリナ夫人にも絶交しました。そして絶交してまゐりました。この女は一言の辯解も出來ないのです。」

頼子には芙蓉子がたゞ事實を誇張して居るものとばかりも思へなかつた。

「それでは二人はたしかに同じ船で亞米利加へ行く手筈を極めて居るといふのですね。」

「はい。……たしかに二人は亞米利加へまゐるに相違ありません。良人は旅行の支度までちやんと整へて居ります。……もし良人が亞米利加へ行くやうになれば、もう私、二度と良人の顏は見ない覺悟でございます。」

「私はあなたが少し事實を重大視過ぎて居るのぢやアないかと思ひますが、萬一信重がそんな決心をして居るとすれば、私に取つてはなほなほ重大事ですから、篤と信重を糺して見ます。そして私の力できつと信重を本心に立返らせる事にします。あなたはあまり心配おしでないやうに……。」

「私のお縋りするのはお母様お一人きりでございます。生憎と大使も夫人もお留守でいらつしやいますから、ほんとにこんな心細い事はございません。どうぞこの上はお母様のお力で、亞米利加行をとめて下さいますやう……。」

「それは心得て居ます。どんな事をしても、私が歸つて來たからは、そんな馬鹿な事はさせません。」

彼女はなほかにかくと芙蓉子を慰め勵ました上、信重の歸宅を待つ事とした。彼女には何もかも五里霧中で、譯が分らぬながら、芙蓉子の語つた事が、事實でないとはどうしても思へなかつた。信重はたしかに魔がさしたに違ひないのだ、自分のいふ事を果して用ゐてくれるかどうか、甚しい不安を感じながらも、しかし自分のわが子の上に對する力を、過信して居る彼女は、決してわが子を思ひ止らせる事が不可能であらうとは考へなかつた。

その中信重が歸つて來ると、母と二人の間に次の對話がかはされた。

「お母さん、お歸りになつたのですか。大變お早かつたですね、ちつとも存じませんから、お迎ひにも出ませんでしたが……。」

「私は早く歸つて來なければならなかつたのです、あなたの亞米利加行をとめるために……。」

「はゝア、芙蓉子があなたをお呼びよせした譯ですね。」

「それは芙蓉子にして見れば當然の話です。併しあなたの亞米利加行といふ話は、私には信ぜられない事です、第一芙蓉子とあなたがそんな水くさい夫婦仲になつて居るといふ事が、私には思ひもよらぬ事なのです。」

信重は宛ら他人事でもあるかのやうな調子で、

「それは私の罪ではありませんよ。と云つて、芙蓉子の罪でも無論ないので、私共の結婚の當然の歸結なんです。」

「それはどんな意味でいふのです。これがどうしてあなたの罪でないと云へるのです。芙蓉子がどんなにあなたを愛して居るか、そしてあなたのために、どれほど盡して居るか、あなたにもよくお分りでせう。その上聰明な性質で、あの子の內助の功の大きい事も、十分認めていゝと思ひます。內助の功ばかりか、交際社會に出ては、明星の一人に數へられて居るほどで、外交官夫人として、あなたも私も望んで居た通りの立派な女になつてくれたのです。それをあなたはどこに不足があつて、外の女に見かへようといふのです。あなたは今芙蓉子がどんなに不幸な女になつて居るか、分らぬ事はないでせう。私はまさかこんなとは思はずに歸つて來て、びつくりして居るのです。芙蓉子の胸の中を察すると、私は居ても立つても居られません。全體あなたはどうしたといふのです。芙蓉子のどこが氣に入らないで、外の女に見かへなければならないのです。』

信重は靜かに、

『今も云つて居るぢやアありませんか。芙蓉子には罪がない、併し結婚が間違つて居たのだと……。そりやア芙蓉子は全く立派な女ですよ。たゞ嫉妬をする事がいけないだけです。エリナ夫人と私との間には、現在單なる友情の享樂以外何ものもないといふ事を承知しないのです。」

「それは私だつて承知する事は出來ません。あなたがほんとに芙蓉子を愛するならば、エリナ夫人との關係を、斷然斷つのが當然ではありませんか。それはあなたの母として、私からも要求しなければなりません。」

「お母さん、あなたはこの以前私の手からあらゆる幸福を取上げて了ふことに成功なさいました。併し私は最早三年前の信重ではありません。二度とお母さんの自由にはならないのです。お母さんは今その結果を收穫されるのです。これだけを申上げて置きます。」と、謎めいた言葉を投げた。

「全體エリナ夫人はあなたに何なのです。」と、賴子は淺ましさに堪へぬ風情で、鋭くわが子の顏を見つめた。

『差當り何でもないと申上げる外ありません。』

と、彼は輕く外した。

「その何でもない人のために、何で亞米利加までついて行かうとするのです。」

「それはお母さんに關係のない事です。人間には氣紛れといふものがありますからね、私もその氣紛れを實行するまでですよ。そんな事は聞かないで下さい。」と、至つて無造作な調子である。

こんな筈ではないと、腹立しげに、

「何で私に關係のない事です。松尾家の浮沈にかゝる重大な事柄ではありませんか、もしあなたが大使館へも無斷に、エリナ夫人と亞米利加に行くと云ふ事が事實ならば。」

「そんなに重大ですかね。私は社會の因習や、傳統といふものには、あき〳〵しました。そんなもののない世界へ行つて見たいのです。」

賴子は呆れながら、つめよつて、

「それではあなたは實際あの女優の後を追つて亞米利加へ行く氣なのですね。」

『後を追はうが、追ふまいが、それは私の自由意志ですよ。』

「まア、あなたといふ人は、どうしてそんな恥知らずになつたのです。この母の前でよくそんな事が云へたものですね。まるで人が違つたやうです。それでは、芙蓉子は、私は、松尾家は、どうなつてもいゝといふのですか。……信重、

まさかそれは本心ではないでせうね。あなたが母を捨て、妻を捨て、家名を捨てて、世の物笑ひとなるやうな、そんな卑怯未練の性根を持つ筈はありません。信重、どうぞ私を安心さして下さい、亜米利加へは行かないと――。」

「お母さん、私は斷然亜米利加へ行きますよ。」

「えッ！」と、眼を瞠つた母の耳元へ、

「お母さん、私は三年前こそその卑怯未練の性根の持主だつたのです。そしてお母さんに屈服したのです。その卑怯未練の性根を今こそ斷然截つたのです。私は自分の意志の主人公だといふ事を、お母さんにちやんと申上げます。」

さう云ひ捨てて、彼はプイと自分の居室へ引込んで了つた。

## 舊の黒髪に

賴子夫人は全く狼狽しきつて了つた。今こそ自分の力の、全く恃みにならぬ事を初めて思ひ知つたのだ。併しわが子は救はなければならぬ、

松尾家の家名には、如何なる價を拂つても、安泰なものとしなければならぬ。が、芙蓉子にも自分にもその力がない以上、どうすればいゝのか。大使夫妻が許せば、それに縋る途もあるが、生憎と歸朝中で、今は信重の頭を押へるものは誰一人居ないのだ。とすれば信重はその狂的發作のまゝに無斷渡米を、エリナ夫人との駈落を實行するかも知れないのだ。賴子夫人の頭も狂ひさうになつた。

彼女はこの際信重を左右する力のあるものは、當のエリナ夫人以外に何人もない事を、明らかに知つた。エリナ夫人に縋つて見るより外はない！　が、エリナ夫人が親しい芙蓉子をさへ敵にし、信重を自分の犠牲にする覺悟で居るとすれば、果して自分の依賴を聞いてくれるものとは考へられない。と云つて、併しエリナ夫人に縋るより外はないのだ。自分はどんな屈辱を見ないとも限らぬ。それは忍び難い事であるけれども、松尾家の名譽にはかへられない。涙を吞んでどんな屈辱をも忍ばなければならぬ。そしてエリナ夫人にこの膝を幾重にも折るとしよう。まさかにエリナ夫人が、それほどまでの冷酷無情の女であるやうには思へぬ。

さうだ、その外に取るべき途はない、と彼女は覺悟を極めたのである。

覺悟が極ると、最早一刻も猶豫はして居られなかつた。併し夜も既に更けて居るので、明日まで待つ外はなかつた。

翌日午前、時間を計つて、エリナ夫人に電話をかけて見た。幸ひにエリナ夫人からは、面會を承諾して來たのである。

一方惠美子のエリナ夫人に取つて、賴子から來訪の電話のかゝつて來た事は思ふ壺だつた。そこで彼女は、今外出の支度中ではあるが、來訪せらるゝならば三十分ほどの時間を割愛しようと云つて、電話を切つたのだ。

今こそ待ちに待つた復讐の機會が來たのだ。彼女は激しい緊張のため、身體が震へるほどだつた。今日はエリナ夫人として賴子夫人に逢ふのではない。虐げられた惠美子として逢ふのだ。

エリナ夫人の假面をかなぐり捨てるためには不自然に染めて居た髪の毛を、舊の黒髪に返さなければならない。そこで彼女は慌しく化粧部屋に入り、驚き呆れて居る女中を手傳はしてすつかり赤くなつて居る髪の色を落しにかゝつた。それ等に使用する藥品も豫て用意されてあつたのである。この操作は甚しく困難ではなかつた。髪に塗られた染料は次第に溶け始めて徐々に舊の生地が表はれ出した。が、染料に荒されたために、容易に舊の漆黑の色には返らな

かつた。それは或期間の經過と操作を繰返さなければ、完全に恢復する事は望めぬものではあつたが、完全の恢復でなくてそれでいゝのだ、日本人の本來の髪の毛になりさへすればいいのだ。

實際自然の艶が失はれ、褐色を帶びた黑髪にしかならなかつたけれども、それでも水油を塗ると光澤も出て、誰が目にも日本人の髪とだけは點頭けるのだ。假髮を被つたやうだつた不自然の赤毛が、この通り本來の色に返つて見ると、不思議に顏立さへも、紛れのない日本人らしさを加へ、彼女の姿は一段と立優つた美しさに輝くのであつた。

彼女は鏡に向つて、滿足の微笑を投げた上、手早く顏の化粧に取りかゝつたが、それも終つたところで、華やかな外出着に着かへた。着換も馴れたもので、手廻しよく順序よく運んだ。その上で室内帽に似たトーク形の、別仕立の帽子をすぽりと被り、手際よく髪をすつかり隱して了つたところでピンで止めた。それで彼女の髪の色の變化は人目につかなくなつたのである。

彼女は何も外出の必要は少しもなかつたのである。たゞ暫時賴子夫人に髪の毛を隱して置く用意のため、この別仕立の帽子を被つて居る必要があるので、外出間際の面會といふ事に取繕ふ手段に過ぎなかつたのである。

丁度支度がほゞ出來上つたところへ、賴子夫人の名刺が通ぜられた。

賴子夫人は假住居ながら贅澤な應接室へ通された。彼女は自分の使命の重大な事に鑑みて、恐ろしい不安と、壓迫されるやうな氣持を感じながら、待つ間程なく、扉が靜かに開かれ、盛裝したエリナ夫人の他所行の姿が表はれた。

賴子は、と見ると立上つて笑み傾けながら、愛想よい物馴れた口調で、

『どうもお出かけのところを、飛んだお邪魔をいたします。ほんとに御迷惑でございませうのによくこそ……。』

『いゝえ、まだゆつくりお話を伺ふだけの時間がございます。よくお訪ね下さいました。さア、どうぞおかけ遊ばして……。』と、惠美子もまた鄭重に答へたが、その眼には異常の光が點ぜられて居た。

仇敵同士の女は相對して席についたのである。惠美子は何氣ない風に、

『そしてお尋ねの御光榮を得ました御用件は？』

彼女には賴子が何のために來たかは、問ふを要せぬまで明らかだつたのではある。

『はい、實は私は婦人矯風會の倫敦の總會にまゐつて居りまして、昨日歸つたばかりなのでございますが、何だかその間に嫁の芙蓉子とあなたとの仲に、妙な行違ひがありましたやうで、ほんとに心配して居るのでございます。あれほどお親しくした間柄が、絕交のやうな事になつて居ると申す事で……。』

賴子夫人は話を間接に運んで行つた。

『あれは伯爵夫人の御希望なので、私の望んだ事ではございませんから、いたし方がございません。その事についておいでになつたと仰しやるのでございますか。』

『はい、それもお仲直りが出來たら、この上もないことと存じますが、それよりも先決問題とでも申しませうか、彼女の良人信重の事について——あなた方の爭ひの原因について、折入つて御相談やらお願ひを申上げたいと、かう存じまして……。』

『私の方からは何も爭つて居ると申す次第ではございませんが……。』

『はい、それはさうでもございませうが、芙蓉子にして見ますと、自分の良人の一身上に關す

る大事の場合でございますから、あなたに釋明を求めるといふ態度に出ました事も、大目に見てやつて、お心をなほして頂きたいと存じますが……。」

「それで御相談と仰しやいますのは……？」と、恵美子は冷たく事務的の態度で促すのであつた。

こんなに冷たいエリナ夫人に接することは意外だつた。彼女は自分の困難の地位を痛感しながら、飽くまでも下手に出て、

「今度亞米利加へおいでになるについて、信重があなたと御一緒にまゐるお約束になつて居るとか申すことですが、事實なのでございませうか。」

「その事ならば私にお尋ねになるよりも、直接伯爵にお尋ねになるのが近道ではございませんか。」と、恵美子は口のあたりに薄笑ひを浮べた。

あゝ、やつぱり何て厚顔な女なのだらう、見損つたのだ、と内心少なからぬ憤懣を感じながら、

「信重に決してそれを否定しては居ないのでございます。」

「さうですか。併し奥さん、伯爵が私と同じ船で亞米利加へいらつしやつたところで、それが何なのでございませう。」

「たゞ同じ船で亞米利加へまゐるだけといふならば、仰しやる通り格別問題はございません。併し信重は妻を捨て、母を捨て、家庭を捨てて、なほその上に自分の地位も、爵位も、何もかも捨てて、あなたと御一緒にまゐらうとするのでございます。大使館にも何の手續もしては居りません。無斷で秘密に亞米利加へ渡らうとして居るのです。一言で申上げれば、信重が今度亞米利加へ渡るといふ事は、身の破滅といふばかりではなく、松尾一家の破滅なのでございます。それをあなたに考へて頂きたいと存じますので、多分あなたは一度でもそんな點を、お思ひ浮べになつた事は、お有りになるまいと存じます。」

これだけの事を云へば、何かの效果があるだらうと、きツと相手の顏色を窺ふと、

「私はそのやうなことは、一度も考へて見た事はございません。併しもしそんな重大な結果が生れるものとすれば、それをあなたの生のお子である伯爵に仰しやらずに、私に仰しやるのは、ちと筋道が違つて居りはいたしますまいか。」と、恵美子はどこまでも事務的な態度を持續して、額の筋一ツ弛めなかつた。

賴子はがつかりしながら、

「はい、それは違つて居るかも知れません。併し信重は私のいふ事も、妻の申す事も、少しも聞入れませんので、……信重に感化を與へる事の出來る唯一人の人は、あなたの外にないと存じまして、それでお願ひに出ましたのでございます。」と、血の出るやうな思ひで云つた。

「それでは奥さん、あなたのお力には及ばぬから、この私から伯爵に思ひ止まるやうに諭してくれと、から仰しやるんでございますか。」

「はい、その通りでございます。」と、自ら恥ぢて俯いた。

## 燃ゆる花

恵美子は嘲るやうに賴子夫人を見て、

「私はかね／″＼あなたが松尾家の上に、絶大の威力を持つ女王でいらつしやるといふ事を伺つて居りました。それで伯爵はあなたの御命令には、何事でも反く事の出來ない傀儡のやうなものだと、信じて居たのでございますが、そのあなたが伯爵を御自由になさる事が、出來ないと、さう仰しやるんでございますね。私には全く初耳でございます。」

この言葉に驚いて、頼子はきツと惠美子を見直した。何かしらそれは頼子の胸をハツとさせたのである。こんな思ひもよらぬ言葉を自分に投げるこの女は、そも何ものであらうと、彼女には初めて疑ひが兆したのである。が、考へを運んで見る餘裕も何もないので、

『はい、そんな信重ではなかつたのですが、今度ばかりは私の力には迚も及ばない事を悟つたのでございます。只今も申上げた通り、松尾家の浮沈みと、信重の名譽に關する一大事の場合でございますから、どうぞ不憫な母の私に同情をお持ち遊ばして、何とかあなたのお口から信重に思ひ止らせるやう、御盡力をお願ひ申したいと存じます。私はあなたの御人格を信じてお縋り申すのでございます。』

『それでは奥さん、あなたは今日になつて私の人格をお認めになると仰しやるのでございますね。』

『え？』

『そしてこの私に同情を……さうでございますか。併し奥さん、あなたはそれならば一番最後の人に、無駄な詞をお投げになつていらつしやるのでございます。あなたはどんな女を相手にしていらつしやるか、まだ御存知ないのでございますか。』

さう云つて彼女は鋭くきツと頼子夫人を凝視した。

『あなたは――。』と、頼子は激しい不安の眼光で、相手を見入つた。

頼子夫人は最初から、どこかで見た女だと思つて居ながらも、つひぞ今までそれが惠美子であらうと疑つて見た事はなかつたのである。それは彼女が外國人の通りの言葉を話し、一擧一動外國人の通りであり、その上に髪の毛まで赤いため、日本人と想像して見る餘裕がなかつたためである。が、今は違つて居た。この女そも何ものであらうと、恐怖に似た感情で、ぢツと彼女に見入る時、

『お分りにならなければ、私、帽子を取りませう。』

惠美子は初めて髪をすぽりと包んで居た件の帽子を脱去つた。そして勝利の微笑と共に、

『お分りになりまして？』と、この一語を鮮やかな日本語で云つた。

今こそ誰が日本の女でないと、疑へるだらう。

若し居つて居たのなら、たしかによろめき倒れたであらう頼子夫人は、僅に椅子の肘づきに雙手を支へて、眼を睜つた。彼女は今こそハツキリと、相手を認めたのである。

『あなたは！　あなたは！』

『惠美子です！　あなたに虐げられた惠美子です！』

頼子はぐわんと腦天に、鐵槌の一撃を加へられたのだ。その瞬間茫然として惠美子を見つめたが、すぐ頭がハッキリして來ると、彼女は恐ろしい敵と相對して居る事を知ると共に、激しい絶望に似た感じが彼女を戰慄させた。今は何もかも明らかとなつたのだ。信重はあらゆるものを捨ててかゝつたのも、それが惠美子だつたからだ。それは惠美子の復讐なのだ。最早助からない、と觀念しながらも、併しどんなに自分が恥を忍んでも、信重と松尾家を救ふ手段を取らなければならないと、咄嗟に思案を極めた。

『まア、惠美子さんでしたか！　私はすつかり盲目になつて居たのですね。でもお商賣柄、何て變装がお上手なのでせう。……いや、それよりもあなたの大きな御成功、まづそれをお祝ひ申上げます。』と、流石は社交界の牝獅子とて、徐々に沈着を恢復しながら、まづ餘裕を作るため、話を外してお世辭を云つた。その上

日本語で話せる事が彼女を力づけた。

惠美子は苦々しげに、

『あなたにお祝ひを云つて頂く筋合のものではございますまい。』

『併しあなたの御成功の原因に、私がなかつたとどうして云へるでせう。その點ではあなたの感謝を受けてもいゝ筈だと存じます。』

『それはあなたの御親切からだと仰しやるのではございますまい。』

『併し私は初めからあなたの敵ではなかつたのです。そしてあの時假にあなたの要求をお容れして居つたら、あなたは永久に舞臺に立つ機會がなく、この世界的の名聲と、現在のあなたの幸福は、得られなかつた筈ではございませんか。あなたに無情を非難された私は、一面にあなたの恩人であつた事實を、枉げる事は出來ないと存じます。無論私はあなたに恩を賣らうと申すのではありません。物の道理がそんなものではないかと申すのでございます、さうして見ると、小さな感情を捨てゝ大局から御覽になれば、何もあなたと私と仇敵同士であるといふ――』

惠美子は鋭く遮つて、

『お默り下さい。あなたに私の成功と幸福にお答へになる權利はございません！　今こそ私達の地位はお互ひに明白になつたのです。私が何を企て、何を考へて居た女であるか、御存知になつた筈です。私がまる三年前に申上げた私の決意を、翻す道理がどこにあるのでせう。』

『併しそのための今日の成功、今日の幸福が、あなたの最初の決意をお變へになるのに、まだ不十分だと仰しやるのでございますか。あなたに取つて、今日ほど幸福と榮譽の御境遇はあるまいと存じますが……。』

『私の成功……それは或は認めてよいかも知れません。併し表面の境遇から、どうして人間の幸不幸が判斷されるのでございます。それでは伺ひますが、あなたの御令息の信重さんは、現在幸福でいらつしやるのでございますか。』

頼子夫人は首垂れた。惠美子の心を柔らげる手段は最早無ささうである。今日は彼女と爭ふために來たのではない。――さう思ふと頼子の心は重く沈んだ。それは傲慢な彼女の嘗て經驗した事のない痛棒であり、屈辱である。が、如何なる屈辱も忍ばなければならぬ。

『信重は幸福でした、少なくも最近までは……。』

『さうです。現在信重さんは少しも幸福ではいらつしやいません。それがあなたにお分りになつたのです。あの人の顏を御覽なさい。あの疲れきつた眼光を、あの漂泊人のやうな沈着のない姿を、あの自暴自棄の生活を……それはまるで不幸そのものの影法師ではございませんか。あの人のこの生活はそのまゝ長く續きませう、若し救つてあげるものがなければ……。』

頼子夫人は顏さへも擧げ得なかつた。惠美子は重ねて、

『あなたは御自分の冷酷と無情から、完全に二人の人間の幸福を破壞してお了ひになつたのです。あなたは當然その責任に答へなければなりません。』

『私はわが子の愛の爲に取計らつた事で、少しもあなたを敵とする考はなかつたのです。併しそれがあなたのためには殘酷に當つた事はほんとに申譯もなかつた事で、改めてお詫をいたします。それはどんなにお詫しても足らないかも知れません。たゞあなたの寛大な、貴いお心にお訴へするばかりでございます。』

彼女は隱忍して詫を入れるのである。この謝罪の一語の出る事は、彼女に取つてそれがどんなに堪へ難い事であつたか知れないのだ。

惠美子は冷たく、
「私の寬大な、貴い心! よくそんな事を今ごろ仰しやれますね。その心を、三年前の純眞無垢だつた心を、塵か芥のやうに、蹂躙なすつたのはどなたです。よもお忘れにならないでございませうね。』

『それでございますから、幾重にもおわびを申すのではございませんか。』

「あなたはその時、よるべない、纖弱い娘の、血の涙の懇願を、辯解を、芥子粒ほどの慈悲も情もなく一蹴なさいました。そして御自分の都合のよい時には、たゞ一言の辯解で、過去の殘虐の一切が、綺麗に取消されるとお考へになるのですか。あなたは神の前で立派に結婚した私の良人を、恐ろしい手段で奪つて了ひました。私の一生に一度の愛、何ものにも換へる事の出來ない愛を、私の靈魂を、蹈みにじつて了ひました。私はあなたのために地獄の底に突落されて了つたのです。一度あなたに破られた私の心は、永遠に癒ゆる機會はまゐりません。胸に刻まれた恐ろしい烙印は、年と共に大きさを增して、その三年の間の苦しみは、一日だつて柔らげられた事はないのです。この女優生活の華やかな一皮下には、血みどろの身體が包まれて居るのです。あなたの心臟の血を、一滴殘さず、すべて私にお與へになつても、私の受けた苦痛を贖ふ事は斷じて出來ないのです。私にはたゞ一ツの生命ほかありません。その生命はあなたのため致命傷を受けて了ひました。私にはたゞ一ツの愛ほかありません。その愛はあなたの殘忍冷酷な足下に、花片のやうに蹈みにじられて了つたのです。私にはあなたに對する敵意以外何ものも殘つて居はしません。それはたゞ一言のお詫で、私の心を、はゝゝは、それは燃えさかる薪の上に、一滴の水を落すよりも、無駄な努力です。はい、あなたと私とは仇敵同士なのです。墓場に入るまで仇敵同士なのです!』

火のやうな言葉で云ひ放つた惠美子の怨みの閃光は、爛々と灼熱して、賴子の心臟をぐさと突刺すのであつた。

## 復讐の完成

賴子夫人は戰慄しながら、
「どんなにお詫しても、あなたのお怨みが解けないとすれば致し方もありません。併しそれもこれもみんなわが子に對する母の愛がさせた事なのですから……。」

『それが何の辯解になるのです。あなたはいつでもわが子の愛といふものを、あなたの虛榮と野心の辯解になさいます。そしてその實少しもあなたの子供を愛しては居ないのです。あなたは信重さんが私を生命ほどに愛して居るのを知りながら、あなたの虛榮と野心のために、信重さんを私から引裂いて了ひました。その結果が今覿面にお分りになつたのです。私から申せば、あなたは母の愛を語る資格のお持合せがないのです。あなたは歐羅巴の大戰にこの佛蘭西の母が、子に對して表はした愛を御存知ですか。……御存知なければお話しいたしませう。最初の大砲の音に青ざめたわが子に對して、彼女は何と云つて勵ましたとお思ひです。――「死は一瞬間で終るが、名譽は不死だ!」――これがわが子に對する母のほんとの愛といふものです。正義のために、眞實であるために死をさへも恐れぬ事をわが子に教ふるのが、眞の母の愛といふのではございませんか。不忠實、不眞實、そして自分のためには他人のどんな貴いものでも犧牲にする事を、あなたはわが子にお求めになりました。それがあなたの愛なのです。あなたの母の愛だつたのです。』

傲慢な賴子の頭は自然とまた下つて了つた。

それは今までどんな力の前にも屈服した事のない頭であつた。彼女は赤くなり、また青くなつた。嘗て知らぬ汚辱と輕侮の言葉を浴せかけられながら、自分ではそれをやり返す力もないのだ！

彼女は打挫がれながら、喘ぐやうに、

『私の愛は正しい愛でなかつたかも知れません。併し子の愛に溺れるのは、母として有り勝の事で……、モ一度あなたの寛容な同情にお縋り申します。どんなに私をお憎しみになりましても、信重を愛して居て下さるならば、共同の目的のために私達が働く事が、なぜ出來ないのでございませう。』

『それはどういふ意味ですか。』

『信重をほんとに愛して下さるならば、信重を救つていたゞきたいのです。私のためとは申しません。また芙蓉子のためとも申しません。信重自身のために、破滅の境遇から救つていただきたいのです。』

惠美子は輕蔑と憤怒の眼で、再び賴子を見つめると、力強い言葉で、

『お斷りいたします、きつぱりとお斷りいたします。三年以前、私が無邪氣な、單純な娘であつた時、私は泣いてあなたのお慈悲に縋らうとしました。私がどんなに[illegible]いられたか、その時の記憶はまだ目の前に活々と殘つて居ります。あなたはあらん限りの冷酷の態度で、私を拒絶なさいました。その上にあらゆる侮辱の言葉を私にお加へになりました。私の胸をずたずたに引裂いたばかりでなく、私の誇りをこなごなに蹈碎いてお了ひになりました。そして私の涙を冷笑の眼で心地よげに見ておいでになつたのです。その時私はあなたに復讐を誓つてお別れした事を、まだ御記憶になつていらつしやるでせう。今待ちに待つたその時が來たのです。私は決してこの機會を見のがさうとはいたしません。信重さんは私が亞米利加へお連れします。そして三年前あなたのために私がすべてを失つた通りに、芙蓉子さんも、家庭も、地位も、爵位も、私のために失はれるでせう。その代り私は信重さんにほんとの幸福を與へます。ほんとの意味で信重さんをお救ひします。私達の舊の地位が完全に回復されるのです。あなたに取つては、因果應報といふ事を、適切にお味ひになる時が今來たのです。私は神樣が私に復讐の機會をお與へになつた事を感謝しなければなりません。』

惠美子は云ひ棄つて自ら激しながら、すつくと立上つた。それは全く復讐に飢えた美しい魔女の姿そのまゝと云つてもよかつた。

賴子はすべてが絶望である事を、この時ほどよく知つた事はなかつた。けれどもなほ最後の努力を試みようとして、

『あなたは私を誤解していらつしやるのです。繰返して申しますが、私は少しもあなたを[illegible]としては居なかつたのです。結果はどうなりましたにしても、それは私の本心ではありません。併しあなたが私に復讐なさる事は、假に致し方がないとしたところで、妻の芙蓉子には何の罪があるのでございます。あなたは何の怨みもない芙蓉子を、どんなに不幸に陷れても、いゝと仰しやるのでございますか。』

『私は芙蓉子さんには仰しやる通り、何の怨みもございません。この事さへなければ、芙蓉子さんと私は親しいお友達になれたに違ひないのです。芙蓉子さんが私を好いていらつしやつたやうに、私も芙蓉子さんを好いて居りました。たからと云つてこれは好ききらひを超越した問題でございます。併しあなたが信重さんを芙蓉子さんとの結婚に導いた手段は、決してお許しする事が出來ないのです。信重さんと芙蓉子さんはあなたの不正な手段、許す事の出來ぬ

罪惡の犧牲になつたのです。もしそのために芙蓉子さんが不幸になるといふなら、それはあなたの責任なのです。私の關係した事ではありません。」

「信重と芙蓉子の結婚が、どうして正當な結婚でないと仰しやるのです。まして罪惡の犧牲などとは思ひもよらぬ事で…。」

激しい憤怒と憎惡が爆發した。

「私は結婚式が不正のものだと申上げたのではございません。結婚に導くまでの手段が、不正と罪惡のあなたの記錄だと申上げるのです。私が信重さんの不在中に、不義の生活に耽つて居たと、信重さんに中傷したのは誰なのですか。私が不義の子を宿したと讒誣したのは誰なのですか。信重さんが私を棄てて芙蓉子さんと結婚なすつたのはそのためなのです。」

賴子は驚きながらも、多寡を括つて、極めて冷靜に、

「誰がそんな中傷などをするものですか。そんな邪推をなさると、あなたの人格に拘はるではございませんか。」

「奥さん、私はあなたに他人の人格を語る資格があらうとは考へて居りません。あなたは虛榮と陰險そのものの權化です。あなたの假面を今剝いでお目にかけます。私に對するあらゆる中傷は、女中の富の手で行はれたのです。そして富はあなたの間諜でした！」

「私の間諜？まア、あなたは飛んでもない云ひがかりをなさいます。」

「云ひがかりですつて？肝腎の富が死んで了つたので、云ひがかりだと仰しやるのでせう。富はたしかに死にました。併し死際に私に一切の懺悔を書殘したのです。その手紙をお望みならばあなたにお目にかけませう。」

さう云つて惠美子は恐怖に打たれた賴子を尻目にかけ、自分の居室に引返すと、富の手紙を取出して來て、

「これを御覽遊ばせ。それでも卑怯にあなたの中傷でないと仰しやるのですか。」

賴子は眞靑になつて、

「私はそんなものを拜見する必要はありません。富などといふ女はもと〳〵少しも知らない女です。多分その女は精神病者か、妄想狂かだつたらうと思ひます。」

惠美子は嘲るやうに、

「精神病者の書いたものかどうかは、御覽になれば分る事です。私はいつでもその手紙を日本で公表する準備がございます。それを公表した時、あなたの假面は完全に剝がれるのです。併し公表する前にまづ芙蓉子さんに御覽に入れませう。芙蓉子さんはその時どんなお姑さんをお持ちだつたかを、ハッキリ御存知になるのです。」

賴子夫人は完全に自分が打ちのめされて了つた事を知つた。その通りに惠美子は、自分の勝利の完全だつた事を知つたのである。

「私はあなたの陰謀のために失はれた良人を取返すまでです。可愛い私の娘――信子に正當な父を與へるまでです。」と、惠美子は勝誇つて云つた。

賴子夫人は何か云はうとしても、口が硬ばつて云ふ事が出來なかつた。血の氣を失つた彼女の肉體は、激しい痙攣に木の葉のやうに顫いた。

「あなたの出口はそちらです。お歸りなさい。…でなければ女中を呼びます。」

昂然として惠美子は戶口を指さし示した、それは三年前賴子が彼女にした通りに。

賴子夫人は完膚なきまで誇りを傷けられ、腸を寸斷され、絕望の谷底に蹴落されつゝ、急に十ばかりも老けたやうに首垂れて、すご〳〵こゝを立去らなければならなかつた。

## 芙蓉子の姙娠

頼子夫人がエリナ夫人の訪問に出向いた後だつた、芙蓉子は積る苦勞と絶望のため、ヒステリー性發作の卒倒を起し、一時正氣を失つて倒れたまゝで居た。醫者が來た時には氣がついて居たが、彼女はもう此世が味氣ないやうな、このまゝ死んで了ひたいやうな氣分に閉されて居た。

來てくれた醫者は豫て知合の婦人科醫であつた。最早診て貰ふ必要はないと芙蓉子は考へながらも、このごろ兎角身體の異常が、積る苦勞といふ事以外に感ぜられるところから、診察を受ける事にすると、醫者は丁寧に腹部の診察をした上、微笑を含みながら云つた。

「いや、少しも御心配はありません。たゞ一時的の發作で、別にお藥を召上る必要もございますまい。お身體は極めて御壯健の方で、內臟の諸器官はどこにも故障はございません。お身體の最近の御異常は、姙娠でいらつしやるからです。」

それを聞くと、芙蓉子の青ざめた顏には、さツと紅が上つて、

「先生、それはほんとでございますの?」

「たしかに御姙娠で、凡そ三ヶ月ほどでございませう。食慾などのお變りになつたのも、そのためでございます。」

「あの三月に！　まア、さうでございますか。難有うございます。」と、彼女の聲は喜びに震へるのであつた。

醫者は姙娠中の注意を與へて歸つて行つた。

芙蓉子は何とも知れぬ喜びは感じながらも、その喜びにはすぐ雲がかゝつて了つた。自分は果して喜んでいゝのだらうか。それはエリナ夫人の事件でさへなければ、自分の姙娠は無上の歡喜でなければならなかつた。良人もかねがねそれを望んで居たし、自分もどんなに待設けたかも知れないのだ、また姑も孫の顏が見られぬのではないかと悲觀し始めてさへ居たのである。これが夫婦の間に何のわだかまりもない昨日であつたならば、自分の喜びは云ふまでもなく、一家には春のやうな歡聲が擧がる筈なのだ。

けれども今は事情がすつかり違つて了つた。良人の愛が他に移り、永久に自分から失はれようとして居る際、今やつと姙娠したのでは遲過ぎる。それは喜びではなくて、悲しみなのだ。自分は何といふ因果な身の上なのだらうと、彼女は喜びを悲しみに引きかへて泣かなければならなかつた。

けれども彼女の混亂した頭に、ふとまた光明のやうなものがさし始めるのだ、自分の姙娠によつて、良人が救はれぬであらうか？

自分の姙娠を知つたら、良人も自分を振捨ててエリナ夫人の許に走る事を躊躇するのではあるまいか。それを機緣に失はれた愛が、再び自分の戻つて來はしないであらうか。彼女はかく考へて見る事によつて、新たに勇氣づけられた。何だか良人を救つて下さる神樣の攝理で、自分が姙娠したのではあるまいかといふやうな氣さへする。同時に彼女は自分の姙娠といふ事は、良人ばかりでなく、エリナ夫人をも動かす大きな力になりはしないだらうかと考へて見た。

一時の激昂からエリナ夫人と絕交して了つたけれども、またエリナ夫人が憎くてたまらないやうにも一時思つたけれども、いろ／＼考へ直して見ると、エリナ夫人がどうもそんな血も淚もない、平氣で人の良人を橫取するやうな型の女と思はれない氣がするのだ。何かしら彼女に對する愛着のやうなものが心の底に殘つて居る。彼女の自分に投げた謎のやうな言葉は何を

語るのだらう。自分の方からこそ彼女に激語を放つて別れたけれども、彼女の方からは少しでも自分に挑戰しては居なかつたのだ。自分が初めに激昂せず、友達としての氣持な持續して、胸の思ひを諄々と愬へて見たら、よく自分を理解してくれたのではなかつたらうか。

ましで自分が姙娠した事を聞いたなら良人を屑く斷念してくれるかも知れないのだ。姑は今日の訪問に多分成功しては歸つて來ないだらう。姑が成功しないからと云つて、それが自分の成功しない理由にはならない。自分は良人を動かす前に、まづ肝腎のエリナ夫人を動かして見よう。——さう考を纏める事によつて、芙蓉子は不安の裡にも希望の微光を認めるやうな氣がした。

彼女のこの考が極つてから間もなく、頼子夫人が生涯に初めて經驗した打擊を受けて、見る影もない喪家の犬のやうな、絕望そのものの姿で歸つて來たのである。芙蓉子は姑がこんなに沮喪して歸つて來た姿を見たのは初めてだつた。

頼子は多くを語らなかつた。また語る事は出來なかつたのでもある。彼女はたゞ絕望の怒りを漏すのみであつた。そして芙蓉子が兎も角自分に考があるから、エリナ夫人を訪問して見ると云出したのに對して、その全然無效である事を說いて、極力反對するのであつた。姑が反對する理由は、彼女には少しも分らなかつた。芙蓉子が押して行かうとすると、常識では判斷し難いまでに亢奮するので、訪問を斷念すると告げて、姑の亢奮を鎭め、或時間の經過の後、私かに家を出てサン・クルーに向つたのである。

一方惠美子は頼子夫人が、殆んど步く氣力もないかの如く完全に打ちのめされて、立去り行く後姿を見送つた時に、力一杯笑つて見たいやうな衝動に驅られた。

彼女は豫期通りの凱歌を擧げて、自分の誓ひを果す事の出來た滿足に醉ふのだつた。三年にあまる苦心は今こそ初めて酬いられたのだ。三年前頼子夫人に宣言した通り、夫人を自分の足下に跪かせ、その誇りをこな〲に踏みにじつたのだ、丁度自分が彼女に加へられた通りの侮辱を、彼女に返す事が出來たのだ。

なほ燃えさかる自分の感情を鎭めんとするかのやうに、惠美子は室内を步き廻つた。そしてやがて疲れ果てたやうに長椅子の上に埋もれて了つた。亢奮した心が次第に鎭まつて來ると、不思議に勝利の悲哀とい、ふやうなものが、徐々に彼女の胸に食ひ入り始めるのを感じた。それは何故であらうか。

彼女は今まで復讐のために活きて居たのだ。彼女の歌姬としての驚くべき成功も、復讐を果すための一段階に過ぎなかつたのだ。それが仕遂げられた時は、張りつめた氣の弛みと共に、疲勞が彼女を襲つて來た事は寧ろ當然だとも云へる。彼女は今がつかりしたやうな、恐ろしい倦怠にその身を委ねて居るので、その倦怠は優勝の後に來るスポーツマンの快い倦怠でなければならないのに、それとも違つて居た。なぜ彼女はそこに悲哀を感ずるのであらう？

今日の勝利はたしかに完全だつた。併し事實復讐はまだ完成されたとは云へない。それは信重を亞米利加へ拉し去つた上で初めて云へる事だつた。惠美子は素よりそれを知つて居る。が信重は最早完全に自分のものなのだ。信重がこの上變心するものとは信じられない。從つて彼に對する危惧の念は少しもない。信重が自分と共に亞米利加へ行く運命の下にある事に、一點の疑ひも持たぬのだ。それは彼女に取つては最後の勝利が、確實に掴まれたも同じ事だつた。

それにも拘はらず、勝利の滿足が、彼女になほ心の平和を與へないのは何故であらうか。一意頼子夫人に對する復讐の念のみに驅られて、殆んど他を顧みるの餘裕さへなかつた、また强ひて顧みまいともして居た彼女の面前に、自分の望みの遂げられてほッとした今、新たな對象として、大きな存在を示して出現する幻影があらうとは、深く考へては居なかつたのだ。幻影は芙蓉子であつた。

今までとても無論芙蓉子の上を考へない事はなかつた。自分の大きな目的のためには、芙蓉子を犠牲にする事は、止むを得ぬとして目をつぶつて來たのである。然るに今彼女は芙蓉子を自分の復讐の卷添へにする事が、自分に取つて甚だ愉快なものでない事を、明らかに感じ始めたのである。芙蓉子が頼子夫人の共謀者であつたならば、少しも悔いるところはないが、信重を彼女の良人に持つた事が、何等の非難を受くべき筋合のものでなかつたとしたら、彼女から正當に得たその愛する良人を奪ふ事は、自分の良人を頼子夫人が奪つて了つた場合と少しも違はぬではないか。

その上芙蓉子は、少しも憎む事の出來ない女だ、何か不思議の絲で結びつけられたやうに自分を慕ひ、且つ崇拜して居た女だ。二人の間は姉妹に近いほどの友愛關係が結ばれてさへ居たのだ。その關係を芙蓉子自ら斷つて了つたけれども、それを斷つた事に、少しも芙蓉子を咎める理由はない。自分は今まで彼女に友愛を感じて居る。彼女を敵とする氣にはどうしてもなれない。と云つて、彼女と友達になれる筈の自分ではないのだ。頼子に復讐する事は本である。芙蓉子を憐れむ事は末である。今更本末を轉倒する事がどうして出來よう。自分はやはり目をつむらなければならないのだ。信重も云つたやうに、芙蓉子は若くて美しく、その上一番いゝ事にはまだ母親になつて居ないのだ、信重と離別したところで、第二の幸福を見出す事が出來るであらう。信子といふ可愛い子まである自分とは比較にならない……。

芙蓉子の事は思ふまい、自分は自分の思ふ通りの幸福を築いて行けばいゝのだ、自分は失はれたものを恢復するに過ぎない。そしてそれは許され得る事でなければならない。芙蓉子だつて事實を知つたら、決して自分を惡まうとはしないだらう。それは自分の罪ではなくて、すべては頼子夫人の責任なのだ……。

今更彼女に取つて、信重を亞米利加に奪つて行く計畫を中止させる、どんな力のないことも明らかだつた。彼女は決行しなければならない。――

## 雙手の間に

芙蓉子はどんなに疑懼の念を抱いてサン・クルーに尋ねて來た事であつたらう。電話をかけて拒絶される事が恐ろしさに、何の豫告もなしに出拔けに尋ねて來たのである。たゞ留守であるかどうかが氣がかりである上に、居ても逢つてくれるかどうかが、一層また氣がかりだつた。拒絶され、侮辱されても、逢はずには歸らぬ決心で來た以上、結局は逢つてくれる事を餘儀なくする事が出來ようとも考へるのだ。萬一留守であつたなら、留守でなくても拒絶されるなら、何時間でも玄關に待つて見ようと、それほどまでに悲壯な考を抱いて來た彼女なのである。

玄關に立つて臆病らしくベルを鳴らすと、小間使が現はれた。數回訪問して來て居るので、小間使はよく芙蓉子を知つて居る。エリナ夫人の在否を尋ねると、氣を許した小間使が、居ると答へたのでほッとした。併し逢つてくれるかどうかはまだ疑問である。小間使は二人の間に

どんないいきさつがあつたかも知らないから、無心に奥へ通じに行つた。何とも知れぬ懸念で待つて居る中、小間使が出て來て、こなたへと應接室へ通されたので、逢へる事だけは確實となつたので、心配の中にも嬉しく思つた。

惠美子の方は芙蓉子の訪問を傳へられた時にぎよつとした。芙蓉子が訪ねて來ようとは考へても居なかつたのである。今芙蓉子に逢ふ事は都合のわるいばかりでなく、それからどんな意外な結果が生れないとも云へぬのだ。と云つて面會を謝絶する事は卑怯であり、逢つて見たいやうな氣さへもする。彼女は暫く思案して見たが、なるやうになる外ないと覺悟して、芙蓉子に逢ふ肚を極めた。そして兎も角應接室へ通させるやう命じたのである。

惠美子に取つて、芙蓉子の訪問の意味は明らかである。疑問はたゞ賴子が自分の素性を發見した事を、芙蓉子に語つて居るかどうかである。從つて芙蓉子がそれを知つて來たかどうかは分らない。が、賴子は或は語つて居ないかも知れない。それを語り聞かせるには自分の陰謀を或程度まで打明けなければなるまい、と云つて、中傷の次第は飽くまで包まうとするだらう。どの道自分が惠美子である事を芙蓉子に打明ける事には、不測の危險が潛む事を知つて居る賴子は、芙蓉子には何も知らさずに居ると見ていゝかも知れぬ。芙蓉子がほんとの事を知つたら、その時こそ多分自分を許してくれる時なのだ。が、今はその時機ではない。賴子夫人が話して居ないとすれば、自分も飽くまで素性を包んで居なければならない、そして差當り芙蓉子の前に無情の女となりきらう。

併し彼女にはいろ／＼矛盾した考が、同時に働きかけるのだ。自分はたゞ今日が最後の會見である筈の、彼女との別れに、冷たく彼女を取扱ふ事だけは避けようと考へた。もし出來得るならば、友達として別れる——そんな殆んど兩立し得ないやうな事を考へるのだ。そして芙蓉子とは應接室で逢はずに、これまで親しい間に逢つて居た時のやうに、自分の居室で逢はうと決心したのだ。彼女は黑髮に變つた自分の頭をどうしようと思案したが、結局隱さずに、そのまゝの姿で逢ふ事にした。黑髮の故に芙蓉子に自分を發見される氣がかりは、少しもないと考へたから。

數分間待たせられて、心配をして居た芙蓉子が、居室の方へと、小間使に傳へられた時に、どんなに心が休まつた事だらう。何だかもう自分が成功したやうな氣さへするのだ。でも案内された居室の前へ來ると怖氣づきながら、靜かにノックすると、わざ／＼立つて彼女を迎へたのは、エリナ夫人自身だつた。そして淋しく笑んでその手をさし出すのである。それは友情の間違ひもない表示だつたので、それを握りしめた時に、芙蓉子の目頭は自然に熱くなつた。

『エリナ様、私、二度とあなたをお尋ね申せた義理ではございませんが、それにも拘はらずかうしてお逢ひ下さいまして……お詫やらお禮を何と申上げてよいか、ほんとに言葉もないのでございます。』

『いゝえ、私はいつでも喜んであなたをお迎へいたします。それでは此間のお言葉をお取消になるお考へなのでございませうね。』

『はい、あなたさへお許し下さるならば……。私はあなたと自分との間に、友愛以外の事を考へる事は、出來なくなつたのでございます。』

『それで私も滿足でございます。さア、どうぞおかけ下さいまし、御一緒にかけませう。』と、長椅子の上に招じて、並んで腰をおろしたのである。この親愛の態度が、どんなにまた芙蓉子を力づけた事であらう。

惠美子と相對した瞬間から、芙蓉子は惠美子の髪の色の變化に心づいて居た。併し外國の女がいろ〳〵の色に髪を染める事は必らずしも不思議ではないから、芙蓉子もエリナ夫人がその本來の赤色を黑く染めたのであらうと想像したのだ。が、その黑髪がどんなにエリナ夫人に似合つて居る事かと思つて見ると、思ひなしか、その黑髪のために日本人の姿そのまゝとなつた事が、芙蓉子を驚かせずにおかないのであつた。驚異の眼を瞬つた芙蓉子を、惠美子はすぐ注意して、

「あなた、私の髪の色が變つたので、びつくりしていらつしやるのでございませうね。」と、何氣なく笑つて云つて見た。

『はい。ほんとにびつくりいたしました。でも黑くつていらつしやる方が、どんなにかお似合ひなさるやうに思ひますわ。その通りの髪におなり遊ばすと、何だか日本人でいらつしやるやうな氣がいたすのでございますよ。そしてお懷かしさも一しほでございますわ。』

芙蓉子には別段疑つて居る樣子は見えない。

『さう仰しやられるとどんなに嬉しいでせう。今朝までは赤かつたのでございます。そしてあなた、お姑さんから何もお聞きにはなりませんでしたの。』さう云つてまたつけ加へた。『私の髪について・・・。』

『いゝえ、何にも・・・。』

惠美子は賴子夫人が自分の素性を少しも芙蓉子に話して居ない事を、その場の樣子から確かめる事が出來た。

『お姑さんからはどんなお話がございました。』

「姑の申出を、あなたが全部拒絶なさいましたといふ事だけを・・・。』

「お姑さんの申出を、全部私が拒絶いたしますには、私としての十分の理由のあつた事を、あなたにお話しにはなりませんでしたらうね。』

彼女は心許した友に對するやうな調子で尋ねるのである。

『姑の話はその反對でございました。』

「それであなたは御自分のお考でこゝへおいでになつた? お姑さんのお勸めでいらつしつたのではございませんわね。』

『いゝえ、自分の一存でまゐりましたので、姑は私のまゐる事に極力反對いたしました。それで私は姑に隱れて出てまゐつたのでございます。』

惠美子はさもこそと首肯いて、

「あなたはそれをなぜだと思召します。』

「私にはそれが分らないのでございます。』

『お姑さんにはお姑さんの理由がおありになるからです。それはやがてあなたにもお分りになる日があるかも知れません。』

芙蓉子は解しかねたが、

「では姑が歸つて私に申した事は、違つて居るのでございませうか。』

「いゝえ、違つて居るとは申しません。私がお姑さんの御要求を全部拒絶した事は、事實でございますから・・・。』

『では私も姑と同樣、悲しい思ひをして、歸らなければならないのでございませうか。』と、彼女の聲は震へを帶んだ。

惠美子は物柔しく、憐れむやうな調子で、

『私はあなたが何のためにおいでになつたか、お察しする事が出來ます。私はあなたに御滿足をお與へする事が出來ようとは、決して考へて居りません。けれども私はあなたに同情を持つて居ります。あなたのお心にある事を包まず仰しやつて下さい。どんなお怨みでも伺はしていたゞきます。私はあなたをおせき立てはしません。これがあなたにお目にかゝる最後だ

と思ひますから、ゆつくりとしんみりと伺ひませう。それがあなたに對する私の友情の印なのです。』
さう云つて彼女は、自分の手を芙蓉子の手の上に置いた。
惠美子のかうした態度と哀れの籠つた優しい調子が、芙蓉子の心を引立てた。それは彼女を涙ぐませさへもした。彼女は今は少しもエリナ夫人を怨んでは居ない。親身の姉に悩みを愬へる妹のやうな氣分さへ、湧いて來て居るのである。
『エリナ様、ではお言葉に甘えさして頂きます。私はあなたのお情深いお言葉を伺つて、急にお姉様か何かのやうに思はれて、わがまゝを申上げて見たい氣になつたのでございます、事實は私の方が姉かも知れませんけれども、ほゝ。』と、淋しく笑ふと、自分の上に添へられた惠美子の手を取上げて接吻した。
『私がきつと姉でございますわ。それならどうぞ妹のつもりで、どんなわがまゝでも仰しやつて下さい。私、とつくりとお伺ひいたします。ね、かうして居りませう。さうするとあなたはどんな事でも仰しやれるでせう。』と、芙蓉子の手を雙手の間に愛撫して、自分の膝の上へ置いたのである。
と、それがどんなに芙蓉子の心を動かしたのだらう、すつかり涙ぐんで了つて、
『エリナ様、私、胸が一杯になつて了ひました。何を申上げてよいか、分らなくなつたやうな氣がいたします。』
『急いで仰しやるには及びませんわ。暫くお心をお鎭めなさいまし。』

## 信子の寫眞

『はい。』と、芙蓉子は俯いて暫く默つて居たが、いつか啜り泣いて了つて、『私、どんなに良人を愛して居るでせう。』
さう鼻聲で云つて了つて、それがエリナ夫人に愬へる自分の最初の言葉なのかと、自ら驚くのであつた。
初心な女の純眞さには、繕はずに人を動かす力がある。
『あなた、そんなに信重さんをお愛しになつていらつしやる？』
『はい、今まで良人の愛によつて生きて居たといふ事が、今ハッキリ分つて來たのでございます。そして良人の愛なしに、これから生きて居られるかどうか分らないのでございます、それはこれから知ることが出來るのでせうけれども……。』
『それでは信重さんの愛は、全くあなたを離れて了つた……と、さう仰しやるんでございますの。』
『はい、それはあなたの方がよく御存知でいらつしやるかも知れません。良人は今少しも私を愛しては居りません。良人の心に、今一杯になつて居るのは、たゞあなたの事ばかりなのでございます。』
『それは私も存じて居ります、あなたにはどんなにお氣の毒か知れませんけれども……。』
『エリナ様、あなたは良人をお心から愛していらつしやるのでございますか。』と、臆病らしく惠美子を見上げた。
『芙蓉子さん、私は僞りのない告白をあなたに申上げなければなりません。それはどんなに深く信重さんを愛して居ます事か、迚も口では申されないほどでございますわ。それは私、一生に一度の戀だと申上げて間違ひはないと存じます。』
芙蓉子の顏は眞青になつた。
『あなた、そんなに信重を愛していらつしやいますの。』

「えゝ、靈魂の底からと申上げても、なほ言葉が足りないほどでございますわ。』

『まア難儀でございますことね。二人の女が、姉妹のやうな親しい間柄の女が、一人の男を眞實に愛して居るといふ事は、何といふ悲しい事でございませう。そんなにお心から良人をお愛しになつていらつしやるなら、私、あなたを深くお咎めする事は出來ませんわ。』

『芙蓉子さん、そのお言葉は私に取つてどんなに嬉しいでせう。でも私にはどうしても信重さんを愛さずには居られないのでございます。許して下さいましね。』

暫くして芙蓉子は溜息と共に、

『では解決の道は、二人の中一人が斷念しなければならないといふ事でございますね。私、それをあなたに極めていたゞきたいのでございます。』と、聲を震はせた。

『私が信重さんを亞米利加へお連れしたら、あなたはどうなるのでございませうね。』

『自分にはどうなるか分りません。エリナ様、私、良人があなたのお手元へまゐりましても、さら／＼お怨みには存じません。自分の淋しい運命とあきらめて了へば、それまででございます。』と、淋しく云つて首垂れた。

『あなた、そんなにまでおあきらめになつていらつしやる？』

「えゝ、ですけれどたゞあなたのお耳にまで入れて置きたい事がございます。』

『どんな事でございますの。』と、優しく芙蓉子を促した。

芙蓉子は暫く躊躇して居たが、

『私、只今姙娠中なのでございます。』

さう云つて、彼女はさめ／＼と泣出したのである。

「えツ！」と、今度は惠美子の顏が蒼白になつた。

それは彼女の耳に、晴天の霹靂だつたのである。芙蓉子が姙娠して居ようとは、彼女の夢にも思はなかつたところなので、それを聞くと、自分のすべてのプランの根柢が、覆つて了つたやうな、心の狼狽をどうする事も出來ないのであつた。

『そしてそれは信重さんも御存知なのですか。』と、啞れた聲で尋ねた。

「いゝえ、誰も存じません。今朝姑がこちらへお尋ねした留守中、初めて醫者の診察を受けて分つたばかりでございます。醫者はたしかに姙娠三ヶ月だと申す事で……。』

『まア、あなたが御姙娠！』

破れたやうな調子が芙蓉子の耳についた。がそれを注意する餘裕もなく、

『私、自分の爲とは申しません。生れる子のために父が欲しいと思ふのでございます。後楯が欲しいと思ふのでございます。それをあなたは私の無理な願ひとは、お考へにならないでございませうね。』

さう云つて初めて見上げた時に、惠美子の顏が紙のやうに白くなつて、わな／＼と全身を震はして居る事が、芙蓉子を驚かした。

惠美子の心は慌しかつた。今は自分の考を變へなければならない。自分が可愛い信子のために父を得たい、後楯を欲しいと願ふ心は、すべての母に共通した親心でなければならぬ。信子が可愛いだけそれだけ、芙蓉子の心持も察する事が出來る。芙蓉子は信重を自分が愛して居る通りに愛して居るのだ。信重に芙蓉子を捨て、生れる子を捨てさせる事は、嘗て賴子が自分にした通りの事を、自分がまた芙蓉子にするのだ、それは出來ない！　自分には出來ない！　賴子に復讐するため、罪も酬いもない芙蓉子に、そんな殘虐を加へてい丶道理はない。私は芙蓉子を救はなければならない、芙蓉子に生れる子

を救つてやらなければならない。……
激しい心の破綻と混亂に、惠美子は言葉さへも失つて居た。

芙蓉子はやはり彼女を動かす事は出來ないのであらうかと、恐ろしい懸念に襲はれながら、

『エリナ様、私、このまゝお暇を申上げなければならないのでございませうか。』

『いゝえ、お歸りになるには及びません。芙蓉子さん、私、あなたをお救ひします。あなたのお腹のお子さんをお救ひしてあげます。』

『えッ！それはほんたうでございますか。』と、惠美子の膝に縋ると、身體をずらして、ハラ〳〵と涙のふりかゝる顏で、彼女を見上げた。

惠美子はいきなりのしかゝるやうに芙蓉子を抱へて、自分の顏を芙蓉子の肩に埋めて了つたのである。芙蓉子は惠美子の全身の顫動と嗚咽を感ずる事が出來た。

やがて惠美子は不覺の涙を收めると、

『芙蓉子さん、私、この上あなたをお苦しめする事がどうして出來るでせう。ましてお腹にお小さいのまでお出來になつたと知つては…。あなたの惱みは一度私の體驗した惱みでございますもの、どうしてあなたをお救ひせずに居られるでせう。』

『ではエリナ様、あなたも私と同じやうな惱みを…？でもあなたにお小さいのは…？』

『いゝえ、もうそれは忘れて了つたことなんでございます。もうそれを思ひ出さして下さいますな。…信重さんの愛はすぐあなたに返りませう。亞米利加へは私一人が淋しくまゐります。もう二度と信重さんにはお目にかゝらぬ事をお誓ひいたします。』

『それではあなたの深い愛を犧牲に遊ばして…？』

『どんなに深い愛でも私が斷念すると申上げたら、必らず斷念いたします、この先どんな淋しい思ひをいたしましても。』

『おゝ、エリナ様、あなたはどんなにお情深いお心でいらつしやるでせう。私、あんまり身勝手のやうで、何だか心苦しうございますわ。』

『もうその事はお案じ遊ばしますな。私には藝術といふ良人がございます、いくらでもそれに氣を紛らす事が出來るのですから…。』

『私、何だか生れ變つたやうな嬉しさで、胸がわく〳〵いたして居りますわ。何とお禮を申してよろしいでせう。』

『そのお禮には及びませんから、その代り今日はゆつくりしていらつしつて下さい。お別れの晩餐を御一緒にいたしませう。その前にまづお茶を入れさせますからね。』

惠美子は小間使を呼んで、お茶の支度を命じたのである。

芙蓉子は惠美子に對する滿足と感謝の念で、涙がひつきりなしに湧いて來るばかりだつた。たゞこんな酸いも甘いも嚙分けて、俠氣に富んだ、深い情の所有者である彼女が、どうして自分の良人を、亞米利加へまで奪つて行からとしたのか、それればかりがどうしても腑に落ちないのだ。

やがてお茶や菓子が運ばれて、二人は姉妹のやうな親しさでそれを取つた。

氣が落ちついて來ると、芙蓉子には室の中のいろ〳〵の裝飾品などが目について來た。

『まア、あの信子が！』

自分の與へた人形の信子が、首飾りの眞珠などを新たにかけられて、一番目につくいゝ場所に飾られてあるのが、目について叫んだのだ。この叫びの中には、エリナ夫人の寛大な心に、自己を恥づる心が多分に含まれて居た。

『信子』の一語はハッと惠美子の顏色を變へさしたけれども、芙蓉子は氣づかなかつた。

『よく大事にして居て下さいましたわねえ。』

『でもあなたのお記念なのですもの。』と、自分の感情を紛らした。
芙蓉子はその人形をモ一度手にして愛撫したいやうな衝動に駆られて、立上つて人形の傍に行つたが、ふと飾り棚の中の、小さな寫眞立が目に留つた。幼兒の寫眞が入つて居るのである。
『おや、お可愛らしいお寫眞が……。』
『あら、そんなもの、いけませんわ。』と、惠美子が慌しく立つてそれを取隱さうとする前に、芙蓉子がそれを手にして了つた。
『あら、日本のお子さんぢやアありませんの。』と、芙蓉子の驚いたのは無理もなかつた。それは友禪の衣服を着た、日本の娘の兒に相違なかつたから……。
『日本の方に頂いたのです。あんまり可愛いものですから……。』と、惠美子は紛らすやうに云つたが、その聲は妙に震へて居た。
芙蓉子は何かしら騒ぐ心でその寫眞を見つめたが、それはエリナ夫人の顔立にそつくりなばかりか、良人の幼顔の寫眞にも生寫しなのである！
『エリナ様、これ、あなたのお子さんぢやアございませんか？』
『いゝえ。』と、答へた惠美子の眼には、どう隱す事も出來ない一滴の涙が光つた。
『おゝ、エリナ様、あなた、日本人でいらつしやいますわね！　私、今までなぜそれを發見する事が出來なかつたのでせう。いゝえ、日本人でいらつしやいます。そしてこのお子のお母様でいらつしやいます！　ひよつとしたらあなたは……あなたは……。』
さういふ中にも芙蓉子の胸は早鐘をつくやうに鼓動し始めるのである。
『いゝえ、私は日本人ではございません、またその子の母親でも――。』
『あなたは惠美子さんです！　きつと惠美子さんです！』と、芙蓉子は彼女に取縋つた。
『あなた、その名を覺えていらつしやいます？』
『おゝ、やつぱり惠美子さん！……惠美子さんと仰しやつて下さい。』
二人はひしと抱合つて了つた。惠美子にはその上自分を僞る事は出來なかつたのである。

## 最後の解決

二人は抱合つたまゝ泣いて居たが、芙蓉子がまづ、
『惠美子さん、私の想像して居た惠美子さんとあなたは、何て違つていらつしやるでせう。』
『それはお姑さんを通じて、私を御存知になつていらつしつたからでございませう。』
『はい、姑から以外に、良人からは一言もあなたのお話を伺つて居りませんから……。』
『それでお姑さんが今日あなたを私に逢はせまいとなすつた理由がお分りでございませう。』
惠美子は自分の素性の知れた以上、過去の一切を包む必要はなかつた。芙蓉子の望むまゝにその説明を與へたのは當然の成行である。頼子夫人の陰謀についても、今日の復讐を仕終せた事についても漏すところはなかつた。
芙蓉子は完全に自分が頼子夫人の傀儡の役目を果したものである事を知つた。が、それを知つた事はまた何といふ悲しい事であらう。自分は何にも知らずに惠美子の地位を奪つて了つたのだ。正當の結婚を濟ませ、信子といふ可愛い子まである惠美子を、絶望の地獄に突落して了つたのだ。その上惠美子の犠牲を要求し得る自分ではなかつた。
『惠美子さん、許して下さい。私、何にも知らなかつたので、身勝手な事ばかりを申して居ました。女は相見互ひと申します。私、この

上はあなたの御好意をお受けする事は出來ません。私の地位をあなたにお返しいたします。この上はどうぞ良人を亞米利加へお連れ下さいまし。』と、彼女は一杯の涙をためて懸命に云つた。

『何を仰しやるのです、芙蓉子さん、あなたにそんなお考を起させるために、申上げたのではありません。たゞ私の過去をほんとに知つて頂けば、それで私の本望なのです。私は今は心に何のわだかまりもございません。日本晴のやうな心持なんでございます。二度と私の心を亂すやうな事を仰しやつて下さいますな。』

『でも私、自分一人の幸福を築くために、あなたの幸福を犧牲にする事は出來ません。可愛い信子さんに父親を欲しいとは思召しにならないのですか。』

『え丶、それだけは欲しうございますわ。それであなたにお願ひがあるのでございます。』

『え？ それでお願ひと仰しやるのは……？』

『信子をあなたの子にして、育てていたゞきたいのでございます。さうすれば信子にも父親が出來るではございませんか。』

芙蓉子は何とも知れぬ感激の思ひに浸されながら、

『お丶、そんな事は何でもございませんし、また私もどんなに喜んで信子さんを、お育てしたい事と思ふか知れませんけども、そんな事であなたの地位を永久に奪つて了ひます事は私の心がどうしても許しませんから、あなたのお申出をお受けします事は……。』

『そんな事を仰しやつてもいけません。私の心は極りました。信子をあなたの子にして下さるならば、何の心殘りもございません。芙蓉子さん、それで最後にモ一ツお願ひがあります。』

『何でございませう。』

『私と姉妹になつて下さいません？』

『それは願つてもない事でございますわ。お姉樣！』

二人は抱合つてまた接吻の雨を降らした。

『それでは私達は姉妹よ。私が姉なら、姉のいふ事決して反かないと仰しやつて下さい。』

『でも……。』

『姉妹になつたばかりで、姉に反抗するなら、姉妹のお約束も取消す外ありませんわ。』

『何でもお姉樣のお言葉には反きませんけれども……。』

『そのけれどもがいけないのよ。あなたはいつまでも伯爵夫人でいらつしやらなければいけません。それが姉の命令なのです。』

芙蓉子は何とも云へぬ感激に充ちた身體を、殆んど無我夢中でパッシーへ歸つて來たけれども、併し一切が明らかにされると、惠美子を犧牲にして了ふ事は、何としても忍び得ないのである。此上は良人を動かす外ないと覺悟して、良人の歸りを待つたが、その夜は可なり遲く信重が歸つて來た。

『先程からどんなにお歸りをお待ちしたでせう。祕密にお話したい事がございます。』

信重はまたかといふ顏をしたが、何か妻の樣子が變つて居り、活々としたところがあるので、しぶ〜書齋に妻を導いた。

『あなた、今日はまだエリナさんにお逢ひにならないでせうね。それとも今夜……。』

『逢はんよ、そんな事を聞いてどうする。』

『それなら是非今からいらつしつて、お逢ひになつて頂きたいのです。』

『何を云つてるんだ、こんなに遲くなつてるのに、何で逢はなければならないんだね。』

『でもこれはあなたにエリナさんを救つてあげていたゞきたいからでございます。』

妻の氣がどうかしたのではないかと、信重は憐れむやうに、

『あんたは自分のいふ事は分らないのだらう。』

『いゝえ、よく分つて居ります。私、今日は半日ほどエリナさんと御一緒に過して來たのでございます。私達は姉妹のお約束までいたしました。そしてエリナさんはもう二度とあなたにお目にかゝらないとお誓ひになるのです。私、そんな事になつてはエリナさんに濟みませんから、どうしてもあなたをエリナさんにお返ししなければ……。』

信重は驚き顏に、

『エリナ夫人に私を返すとは……?』

『惠美子さんにでございます。私、何もかも知つて了ひました。知らぬ事とは云ひながら、お母樣の傀儡になつて、私はあの方の地位を奪つて了つたのでございます。でも惠美子さんはどうしてもお返ししようとするものを、受取らうと仰しやつて下さいません。却つて可愛い信子さんを、私の子にして育ててくれと仰しやつて、あなたとはもう二度とお目にかゝらないと……。ですから、あなた、すぐ惠美子さんにお逢ひ下さつて、あなたのお力で惠美子さんのお心をかへさして下さいまし。私、あなたが惠美子さんと亞米利加へいらつしつて下されば、本望でございます。』

信重に取つては、それは天地が覆るやうな驚きだつた。

『芙蓉さん、あんたはどうしてエリナ夫人が惠美子だと知つたのだね。惠美子が自分から打明けた譯ではあるまいと思ふが……。そしてまたどこで惠美子と逢つたといふのだね。』

『はい、私がサン・クルーにお尋ねして、いろいろお話をいたして居る中、信子さんのお寫眞が目について、それが惠美子さんにもあなたの幼顏のお寫眞にも生寫しだつたところから、惠美子さんだと悟つたのでございます。その上今日は赤い髪の色もすつかり落して、黒い生地になつていらつしやいました。それはお母樣にお逢ひになるため、お落しになつたのでございます。』

『なに、母に逢ふため?』

『お母樣は今朝惠美子さんをお訪ねになつたのです。その時のお話をお母樣は少しもなさいませんでした。けれども、惠美子さんから伺ひましたから、後で申上げます。一言で申上げれば惠美子さんはお母樣に復讐を遂ばしたのです。お母樣はエリナさんが惠美子さんだつたとは私に仰しやらず、また私がエリナさんをお訪ねしようとするのに、極力反對なさいますので、私は隱れてお訪ねしたのでございました。』

『ウーム。』と、信重はいよ〳〵驚きながら、『惠美子が母に復讐した……いや、それは私にも分る、併し惠美子が母に復讐したのなら、どうしてまた容易くあんたに、心が折れたのだらう、それが私には分らない。』

『それはお分りにならない筈でございます。まだ肝腎な點を申上げませんから……。』

『肝腎な點とは?』

『あの、私、妊娠したのでございます。』

『えッ!』と信重の顏はさツと變つて、『あんたが妊娠した! なぜ、それを私に云はなかつたので……?』

『それは今日醫者から初めて云ひ聞かされたのでございますから……。惠美子さんのお心が、なぜお折れになつたか、それでお分りでございませう。』

信重は無量の思ひに打たれて、頭を抱へて居たが、

『あゝ、濟まん、芙蓉さん、許してくれ、私には惠美子の心持が今こそハッキリ分る。』

『だからすぐいらつしつて下さい。惠美子さんのお考を變へさせる力のあるものは、あなたの外にございません。』
『あんたの意志を傳へたら、惠美子も嘸滿足するだらう。私は何か夢を見て居るやうだ。私が今何を考へてるか、それをいふ暇はない、兎に角惠美子に逢つて來よう。』
『さうして下さい、急いでね。』
　この時、時計は一時にならうとして居た。何とも知れぬ慌しさで、信重は自動車をサン・クルーに飛ばした。
　それから約一時間を經て居る。芙蓉子は萬感胸に迫りながら、良人の歸りを待つて居ると、やがて引返して來た自動車の音が聞えて信重が悄然と歸つて來たのである。
『どうなさいました、お逢ひになりまして？』
『もう疲れて寢んで居るからと云つて、どうしても逢つてくれないのだ、そして明朝の十一時に來てくれといふのだ。』
『それでそのまゝお歸りになりましたの。』
『その外に方法がなかつたからね。』
　二人は長いこと寢臺に入らずに、惠美子の身の上について語り合つた。それは不思議にしんみりとした打解けた光景であつた。

　翌日午前十一時に信重がサン・クルーを訪問した時、意外なニュースが彼を待構へて居た。
　その朝十時に巴里の郊外を出發する事になつて居た大西洋横斷の飛行船で、惠美子のエリナ夫人は亞米利加へ立つて了つたのである、信重芙蓉子にあてた二通の遺書を殘して。

# 三千代

## 一

私が米國から歸つて來たのは、年の瀬の押しつまつた十二月の末だつた。私はロスアンゼルスの附近に、果樹園藝を營んで、相當の成功を收め、まづは彼地で幸福な家庭を作つて居る、とくに初老を過ぎた男である。今度鄕里の廣島に歸つて來たのは十年ぶりで、一月末にはまたあちらへ歸る豫定であるが、今度の歸國は久々で亡父母の法要を營まうとするのと、モ一ツ大事な用向をかゝへて居た。それは二十年前私と一緒に亞米利加へ渡り、さん〴〵苦勞をした擧句、百萬長者の夢を見かけて、異國の土となつた友の遺産を携へて、日本に居るたつた一人の娘に手渡しするためであつた。

その友は山田眞藏と云つて、極めて冒險好きの男だつた。全體私の青年時代に二人の仲のよい友達があつて、それはこの山田の外に、山田と從兄弟同士の杉浦與一といふ男なのだ。山田は早く兩親を失ひ、神戸の杉浦の家に厄介になつて居たので、素より財産とては何一ツなかつた。三人は同じ關西學院を出たので、學時生代から兄弟のやうに交つて居たが、杉浦が一番の年輩で、その次は山田、私が一番若かつた。學校を出ると、杉浦はそのころ亡なつた父の商賣を繼ぎ、山田は神戸で、私が大阪で職業を求めたが、いづれも香ばしい事はなく、その中杉浦が早く結婚したところから、山田は從兄の家に居づらくなつたのだ。それは杉浦と感情の疏隔を來した譯では少しもなかつたが、杉浦の新妻が山田を厄介者視して、冷遇を加へるところから、面白くなくなつたのである。

丁度そのころ亞米利加行といふ事が、貧乏な青年の間に一種の魅力を持つて居た折なので、私と山田の間にも、をり〳〵その話が出、一ツ渡米して成金にならうではないかといふやうな事を話し合つて居たのだが、何しろ冒險熱に燃えて居る血氣の山田なので、從兄の家に居るのが面白くなくなると、亞米利加へ行きたくて、矢も楯もたまらなくなつたのだ。で、私も素より異存はなかつたので、やつと旅費位を調達した上で、どうやら旅券も手に入れ、二人相携へて、米國の土を踏んだのであつた。

それから二人はちり〳〵になつて働いたが、五六年といふもの、お互ひに日本で夢を見て來たやうな、思ふ目は何一ツ出なかつた。尤も生活に困るやうな事はなかつたので、山田も私も多少の貯金位は出來、獨身で居るよりは却つて勵みにもなるからと、二人前後して彼地で結婚したのである。またそのころから二人は共同して、園藝を營み始めたのだが、最初の三四年は不馴でもあり、また競爭者もあつて、思ふやうな成績も擧らぬので、山田は頻りにいらち出して居る中、不仕合せにも山田の妻が、たつた一人の娘の子を殘して死んで了つたのだ。その當座山田は氣をくさ〳〵さして居たが、例の冒險好きの男なので、妻の死んだ事が却つて彼を刺戟し、そのころアラスカの金鑛熱が盛んだつたので、一攫千金を夢みて、アラスカへ出かけると云出したのだ。

私はその無謀を諫め、園藝業の方も漸く曙光が見え出したのだから、今から五六年もすればきつと成功するに違ひない、それまで辛抱するやうにと說いて見たけれども、一旦思ひ立つ

た彼は、友人の勸告などにはもう耳を傾けないのだ。で、私は止むなく彼の心任せにする事とし、旅費を與へて單身アラスカへ立たせたのである。彼が成功しなければアラスカの土になると云つて、勇ましく立つて行つたのは、今から十三年の昔になる。

山田の一人子は三千代と云つた。色の白い、目鼻立の整つた、實に何とも云へない愛くるしい子だつたので、私が無論引受けて面倒を見てやるつもりで居たところ、どうも娘の子を亞米利加で育てたくない、是非とも日本へやつて教育させると云出し、從兄の杉浦與一の許へ手紙を出し、頼んで見たところが、杉浦から快く引受ける、妻も同意だからと云つて來たので、その時六ツだつた三千代を、日本へ歸る知人夫婦に託して、神戸の杉浦の許へ送り屆けたのであつた。

さてアラスカへ出かけた山田はどうなつたかといふと、私の想像した通り、一向面白くなかつたやうだが、それでも成功しなければ、アラスカの土になると云つて出かけた手前、歸る事もならずにそこに止まつて居たのだ。一時は金鑛の方も斷念して、外の勞働などにも從事したらしいのだつた。身體の頑丈に出來て居た彼の事とて、兎に角勞働さへすれば、どこへ行つても食べはぐりはあるまいからと、私はあまり彼の事を心配もせずに居たのである。尤も樣子が分らないので、氣になるにはなつて居たが、何しろ山田は非常に筆無精の男で、手紙も一年に一二度來るか來ないかなのだし、また來ても簡單な事ほか書いて來ないので、その短い手紙から、どうも面白くないのだと察する位の事だつた。が、彼はいつも樂天家なので、どんなに困るにしても、泣事などを云つて來る事は只の一度もなかつた。また金鑛に手を出したと云つて來たのは、この四五年前で、一年ほどすると大分目鼻のつきさうな事を云つて來たが、それから一二年消息が絶えたので、萬一病氣でもして居るのではないかと案じて居ると、さうでもなかつたと見え、また來た手紙には大分樂天的な事が書いてあつた。彼は窮境にある時でも、泣事を云はぬ代りに、いゝ目が出ても一向人に吹聽せぬ方なのに、可なり工合のよささうな事を書いて來たのだから、よつぽど調子がいいのかも知れぬと思つた。どうか巧くやつてくれゝばいゝがと思ひながら、その後忘れるともなく、彼の事を忘れて居たのである。

すると最近この十一月に、突然山田のところから、病氣で迚も六かしいから來てくれと云つて來たのだ。私は驚きながら、丁度果樹の方も冬の季節に入つて、暇になつた際なので、捨てては置けず、ほんとの友と云つては、この廣い亞米利加に自分一人ほかないのに、瀕死の病床を見舞つてやらなければ、嘸友達甲斐もないと怨むだらうとも思つたので、都合をつけてすぐアラスカまで出かけて行つたのだ。

その俄町の殺風景な中に、山田の住んで居たのは、飾り氣も何もないアパートメントの一室で、寢室と二間ほどになつて居たが、その貧弱な室内の樣子から見ても、やはり成功はして居なかつたのだと、私はまづ察したのである。そして寢臺に横はつて居る實際瀕死の彼の姿を見た時、私の眼には思はず熱い涙が浮んだ。山田は全體感傷的な男ではなかつたが、その時だけは涙をひツ切りなしに流して、熱ツぽい手で私に握手するのであつた。どうしたのだと聞くと、鑛内で脾腹を打つたのがもとで、肋膜炎を起し、迚も助からないと、醫者から宣告を受けたといふのだ。アラスカ下りまで來て、こんな死樣をするとは情ない事だ、自分とあの時から續いて闇藝をやつて居たら、一ぱしの財産が出來たものをと、友を憐れむ心が油然と起つ

た事はいふ迄もないが、看護婦を斥けたところで、だん〳〵彼から話を聞いて見ると、驚いた事には、彼は大いに成功しかけて居たので、いや既に成功したと云つてもいゝのだつた。

こんな見すぼらしいアパート住ひをして居るものゝ、彼は三年前に鑛脈を探りあて、或亞米利加人を出資者として、仕事を經營し出したので、それが着々として緒につき、彼自身既に十萬弗の貯蓄をさへして居たのである。彼は服裝にも何にも構はず、身を粉にくだいて働いて居たので、近く五十萬弗の金が出來たら日本へ引きあげる事に極め、それまでは人にも知らさずこつ〳〵とやつて來たものを、中途で病魔のため倒れるのは、これのみが如何にも殘念だと、無念の涙を絞るのである。全くその話を聞いて見ると、もし彼に四五年の壽命を貸したならば、たしかに五十萬弗の財產を作り上げる事になりさうにも思はれるのだつた。十萬弗と云へば、亞米利加では大した金ではないが、日本へ持つて歸れば二十萬圓で、一廉の大きな身代である。併し女のために祝福さるゝ日は、女を永遠に離るゝ日であらうとは、何といふ悲しむべき事であつたらう。

さて山田が私を呼びよせた目的は、死際に唯一の友に逢はうとする本能的の要求ばかりではなく、十萬弗の遺產を私に託するためだつた。その十萬弗を私の手を通じて、妻の忘記念であり、やがてまた自分の忘記念でもあるところの、最後の娘三千代に、無事に送り屆けて貰はうとするのであつた。

## 二

山田の話によると、最初三千代を從兄の杉浦に託する時、三千代の養育料は時々送金する約束であつた。杉浦からの手紙には、さういふものは要らぬが、妻の手前を繕ふために、最小限度の金だけを時々送つて來るやうに、併し決して不自由はさせず、わが子と思つて養育すると云つて來たさうである。それ以來山田は杉浦へあてて送金にして居たのだが、何分筆無精の山田の事なので、送金は兎角後れ〳〵になり、時には忘れて居る事さへあつた。それは杉浦がもともと相當の資產家であつた上、今は神戶でも聞えた實業家になり濟して居る事を知つて居るので、山田の送金などあてにして居ない筈だと思つて居たせゐもあつた。殊にこの最近一年間は全く音信不通で暮したといふのである。

山田はその話を私にした上で、なほいふ事には、金山であてた話はまだ杉浦に知らしてないので、杉浦は相變らず、自分が落魄して居るものと思ひ込んで居るに違ひないのだ、娘の三千代からは時々手紙があつて、杉浦の子供達と同じやうにして育てられ、幸福に暮して居ると言つて來てあるのだが、ほんとに幸福に暮して居るのかどうか、たしかな事には疑がある、杉浦は愛してくれて居るに違ひないけれども、杉浦の妻がどうも親切にしてくれて居さうには思へないので、娘の手紙にも杉浦の妻の事にはいつも觸れて居ないので、そこにいつでも不安の種がある、全體杉浦は好人物の性質で、いつも女房の尻に敷かれて居る男なので、今もあの細君が一家の事を切りまくつて居るに違ひなく、あの細君にはちつとも信用を置けぬから、さういふところへ十萬弗を送金する事は、不安にも思はれるので、娘の樣子を見屆けかたがた、私に日本へ歸つて貰つて、その金を直接娘に手渡し、杉浦とも相談の上、保管の途を絕對安全につけて來て貰ひたいといふのであつた。

山田の私を見込んでの依賴は、いさゝか惑迷ではあつたけれども、友の末期の願ではあり、私もその中一度日本へ歸つて、兩親の法要を

營まねばならぬと思つて居た際なので、快く承諾し、三千代に逢ふまでは、大金を持つて歸るといふ事は、杉浦にも祕して置かうといふ事に話をきめ、何くれの手順の打合せも濟んだので、山田は初めて安心した樣子だつた。

山田が息を引取つたのは、それから二日の後の事で、私は葬式萬端、すべての後片附をも濟した上、娘に渡す山田の遺骨を身につけ、ロスアンゼルスに歸つて來たが、十年ぶりで日本へ歸るには、相當の準備もいるので、彼是二十日あまりを過した後、日本へ立つたので、前いふ通り、十二月も押迫つて、横濱へついたのである。

私は神戸は素通りし、一先づ鄕里の廣島へ歸つた上、初めて杉浦へ手紙を出し、アラスカで山田眞藏の死際に立合ひ、後の整理にもたづさはつたので、その問題で御相談かた〴〵、日本へ歸つて來たのだが、久々でゆつくり逢つて昔話にも興じて見たい、いつ出かけたら都合がいゝか、と問合はしたところが、新年はずツと垂水の別莊の方に居るから、新年早々四五日泊りがけのつもりで遊びに來て貰ひたいと、さも懷かしさうに云つて來たのである。この手紙が私に滿足を與へた事はいふ迄もない。

杉浦は羅紗の直輸入を營んで成功し、神戸の店は大分手びろく取引の手をひろげ、神戸では押しも押されもせぬ第一流の店となつて居るのであつた。垂水の別莊といふのは、前にはなかつたもので、私は知る筈もないが、何でも七八年前地所を買つて新築した立派な別莊なのである。尤もこの節では別莊として時折使用して居るといふのではなく、家族をそこに住ませ、自分もそこから店に通つて居るらしいのである。

杉浦の妻といふのは、大阪の或資產家から迎へたものであるが、自分の里を鼻にかける風の女で、山田を冷遇した事も前に云つた通りであり、私も無論逢つては居るが、この女に決していゝ感じを持てなかつた記憶がある。併し杉浦に取つて見ると、杉浦の今日の成功は妻方の財產に負ふところが多いといふことなので、妻に頭が擧らないといふのも事實だつた。男は年を取ればだん〳〵圭角が取れるものだが、女はどうもその反對に行くらしいので、私は何年ぶりかで逢ふ舊友の家に、四五日逗留するといふ事は、樂しい期待を持ちながらも、そこには彼の細君が居ると思ふ事が、いさゝか私を不安にするのであつた。

舊友に逢ふといふことばかりでなく、取つて二十になつた筈の山田の娘三千代が、どんな娘になつて居るだらう、早く逢つて見たいものだ、父の遺產を渡したら、どんなに驚喜するだらうと、想像して見る事も、私の垂水行を待遠しいものにさせた。幼顏の何とも知れぬ可愛い子だつた事から推測して、嚥美しい娘になつて居る事であらうとも思はれ、同じ渡すにしても、それを受取る價値のある立派な性質を持つた娘であり、その上に可愛く人懷こい、美しい娘であつてくれたら、どんなに張合がある事だらうとも考へたのだつた。併し三千代は果して幸福に、氣兼なしにのび〳〵と無邪氣に育つて來たであらうか、杉浦にも三四人の子がある筈で、男の子は一人だとか云つたから、定めて二三人の女の子の中には、三千代と同じ年頃の娘もあるだらう、杉浦の子供達は、三千代をほんとの姉妹のやうにして、分隔てない親しみを見せて居る事だらうか、それとも子供達からも母親からも繼兒のやうな待遇を受けて、ひがんで育つて來てゐるではあるまいか、などと私はいろ〳〵に臆測を逞くして見るのだつたが、山田の死際の話の、娘からはいつも幸福だとは

云つて來てゐるが、杉浦の妻の事を考へると、それは父に心配をかけまいとするためらしく思はれ、何だか不安であると云つた言葉が、暗示的に働いて、私の心をも少なからず、不安にするのであつた。

私がいよ〳〵廣島を立つたのは三日の朝だつたが、岡山で一寸下車したので、二時間近く後れ、途中で日はとつぷりと暮れ、舞子で降りた時は、もう七時を廻つて居た。杉浦の別荘は垂水には屬してゐるものの、舞子と垂水の中間の山手にあつて、どちらで降りても大差はないが、垂水で降りた方が分り易いと、手紙に云つて來てあるので、垂水までの切符は買つて來たのだが、明石の邊から八日方の月が顔を出して居り、何とも云へぬ景色に見惚れて來たので、舞子へ來ると、急にその懷かしい月下の松原を歩いて見たくなり、そこで降りて了つたのである。

外は身にしみるやうな寒さであつたが、幸ひ風がなく苦になるほどの寒さでは素よりなかつた。で、外套の襟を立て、小さな手鞄一ッさげて、若年時代には何度も來たところながら、日本を離れて以來一度も尋ねた事のない、舞子の土地を二十年ぶりで踏んだのである。曾遊時代の思出は、お互ひに關西學院の學生だつた折、山田と杉浦と三人こゝに泳いで、泳ぎにかけても冒險だつた山田が、一番遠く沖へ出たところ、鱶に追はれた事など、ふと何年にも忘れて居た記憶を蘇生らせるのであつた。その山田は今一つまみの遺髮となつて、この手鞄の中に入つて居るのだと思ふと、荒涼としたアラスカの客舍のベッドで、私を待ちかねて居た瀕死の山田の面影が目の前に浮ぶ、貧乏くじを引いて死んだ山田が迚も可哀想に思はれて、覺えず涙ぐまれるのであつた。

月を浴びた大きな松が、幹の方には光が及ばず、虬龍のやうに、そこにもこゝにも眞黑く蟠つて居る姿は、亞米利加のすく〳〵と生立つた樹木のみを見馴れて來た目には、何とも知れぬグロテスクなものに見えた。そこらあたりに人ッ子一人居なくて、松籟の響とても絶え、折柄潮が滿ちて來るらしく、ゆるやかに岸を洗ふ波の音のみが、靜かに聞えて、何とも知れぬ淋しみを添へた。

私は松林の間を垂水の方に歩きながら、やがて、とある松の根株に腰をおろして見た。海の方を見渡すと、月の光に淡路島が淡く照し出されて、夢のやうに眠つて居る。すべては死の如き靜けさである。私は何とも知れぬ哀愁を誘はれて、思ひは自然山田の娘の三千代に移つて行く時、ふとどこからか、咽び聲のやうなものが私の耳に入つた。それは忍び音に泣く女の咽び聲らしく、餘り遠くもないところから起つたのである。併し人ッ子一人居ない、冬の夜の松原に、女の咽び聲の聞える筈はない。耳の迷ひかも知れぬと、再び耳を澄して見たが、一分二分しても、最早咽び聲は聞えなかつた。やつぱり耳の迷ひだつたのだ、と思ひ直して立上らうとする時、つい四五間先の木の間から、黑い影が木立を縫うて、海岸の方に動いて行くのを見た。

やつぱり誰か居たのだ、さうすれば咽び聲もほんとに聞えたに違ひない、若しや無分別でも起すのではと、私は足音を忍んで、その後を慕ひ出した。

黑い影が木立を離れると、月光に映し出されたので、私は若い女らしい後姿を見ることが出來た。すんなりとしたその立姿が、何とも云へぬいゝ形に見えた。女は思案して居るらしく、俯き勝に、一足歩いては立ちどまり、二足行つては佇むやうにして、歩みを運ぶのである。立留るたびに女の溜息さへ聞えるやうに

私は思つた。
と、する／＼と女の肩掛が、肩をすべつて、それが地に落ちた。併し女はそれに氣のつかぬやうに歩いて行くのだ。私はそれをしほに女を呼びとめようかと思つたが、なほ樣子を見屆けるために、默つて後から行つて、その肩掛を拾ひあげた。肩掛は手編かと思はれる純白の毛絲のものだつた。
私はそれを腕にかけて、女の後をつけた。女は背後を振返つても見ないので、人につけられて居る事は氣づかずに居るらしい。間が近づいたので、今度はやゝハッキリ女の姿を見る事が出來た。髪は耳かくしにして居るらしく、帶はきちんとお太鼓に結んで居て、大きな花模樣のぼんやり浮立つて見えるところから、またお召でもあるらしい衣服の着こなしから、それが若夫人か、また良家の令孃でもあるらしい事が察せられた。
やがて私の懸念して居た通り、女は海際へ來て立つた。折ふし月が雲に隱れたので、女の姿は朧にぼかされて了つたが、海をぢツと見つめて居るらしい女の口から、今度こそは間違ひのない咽び聲が漏れた。女はきつと海へ飛込むつもりに違ひないのだ。

## 三

私は最早猶豫しては居られなかつた。併しうつかり聲をかけて、矢庭に海へ飛びこまれても困ると思ふので、無言のまゝ突と走りよつて、女と海との間に立つて了つた。
不意の事に、女はアッと叫んで、後じさりしながら、驚き顏に私の方を見つめると、
『あなたは誰？ どなたです』と、物に襲はれたやうな、おびえた聲で云つた。
海へ飛込まれなくてよかつたと、私は安心しながら女を見つめた。月と海を背にしたので、相手を見るによい位置に立つたが、生憎月が隱れて居るので、ハッキリとは分らぬながら、眞白な女の顏の、如何にも娘らしい、美しさうな輪郭が、何とは知れず、妙に私の心を騷がせた。
『私は通りかゝりの旅のものですが、あなたを今見かけたので、お救ひするため、こゝへ飛込んで來たのです。あなたは投身をなさる危いところではなかつたのですか』
親切な中老人の言葉が、娘に安心を與へたらしく、同時に娘はよゝと泣出して了つたのである。私は俯いたまゝ泣いて居る娘の肩に、優しく手を置いて、
『どうしたのです。譯を仰しやい。力の及ぶ事なら、私がきつとあなたの味方にたつてあげます』
娘はなほ俯いたまゝ、
『いゝえ、お話し申上げる事は出來ません』と、小さい聲で云つたのが、深い決心を持つて居るかの如く私に思はせた。
『それは定めてよく／＼の事情のある事でせう。私は强ひてそれを伺はうとするのではありません。併し今日は日本中の人が、皆一樣に幸福に過して居る三ケ日ではありませんか、ましてあなたは青春の希望に輝く筈のお孃さんとお見受けします。早まつて投身をなさらなどとは飛んでもない事です。定めて御兩親もおありでせう。あなたが無分別の事をなすつたら、御兩親初め御家族の嘆きはどんなだと思ひます。あなた御自身の事だけをお考へになつてはいけません』
女はまた咽びながら、
『いゝえ、私には兩親も家族もございません。世の中に誰一人私を構つてくれるものもない孤兒でございます。私が死んでも涙を流してくれる人はたつた一人――いゝえ、たゞの一人だ

つてありません。私が死ねば却つて、外の人が仕合せになれるんでございます』

娘の捨鉢の言葉がまた私を驚かした。私はまた妙に胸騒ぎを新たにしながら、

『御両親も御家族もない？　それではあなたはどうしていらつしやるんです』

『だん／＼の續き合ひになるものの別莊に、厄介になつて居るんでございます』と、娘はそこでまたしく／＼と泣いた。

まさか山田の娘ではあるまい。

『お孃さん、あなたのお名は何と仰しやいます。顏を擧げて下さい』

さう云はれて娘が顏を擧げた時、雲間を洩れた月が、正面に娘の顏を照し出した。それは現代式といふには、やゝ細すぎる顏立ではあつたが、濃い眉、切の長い、涙一杯ためた大きな眼、形の整つた鼻、小さな口元、何とも云へぬ美しい、可愛らしい娘なのである。定めて心持も優しいに相違ないと思はれる、この美しい娘が、身を投げようと企てるまでには、よくよくの事情があるだらう。それは罪は娘になくて、きつと周圍にあるのだと、すぐ娘に同情すると共に、この娘がやはり山田の娘の三千代らしく思はれ出したのである。兩親も家族もない孤兒で、緣つゞきのものの別莊に厄介になつて居るといふのも、三千代の境遇に必適するやうに思はれるのだ。

私はなほしげ／＼と娘の顏を覗き込んだ。心覺えの幼顏が、どうやら似通つて居るやうに思はれるばかりでなく、男振のよかつた山田の眼元や口元に、この女の眼元や口元がよく似て居るのだ。やつぱり三千代に相違ないと、私の心は躍つた。

『私の名を申上げて、それが何になります。私は死を撰ぶより外に途のない女でございます』

『いゝえ、私はあなたのお父さんの名で、それを差止めます』と、私は儼然として云つた。

私の調子に、眞劍な、變つたところがあつたに違ひなく、また父の名で差止めると云つた意外の言葉が、女の耳に異樣に響いたのであらう、娘は驚き顏に、

『私の父は最早この世の人ではございません。孤兒だと申上げたではありませんか』

『さうです、あなたのお父さんは二ケ月前、アラスカでお亡なりになりました。』

この言葉がどんなにまた娘を驚かしたかは、娘の素振で察する事が出來た。

突と、私に近づいて、私を見上げると、

『あなたはどうしてそれを御存知なのです、通りかゝりの方だと仰しやるのに……』

『あゝ、それではあなたは三千代さんだ、やつぱり三千代さんだ！』

私の心を突いて出た喜びの叫び聲を聞いて、娘はいよ／＼合點が行かぬやうに、

『私の名まで御存知！……あなたはどなたなんでございます』

『三千代さん、私はあなたのお父さん――山田君の親友で、瀧口務といふものです。アラスカであなたのお父さんを最後に看護した、たつた一人の日本人は私です、私はあなたにお渡しするため、お父さんの遺髮を、わざ／＼亞米利加から持つて歸つて來たのです。いや、それよりももつと大事なものもお渡ししなければなりません。私が亞米利加から歸つて來たのは、全くあなたに逢ふためだと云つてもいゝのです』

娘の涙の顏は初めて輝き渡つて、

『まア！　あなたが父樣のお記念を！　では父樣のお友達でいらつしつたのですか』

『さうです。お父樣と兄弟のやうにして居た唯一の親友です。ほんとにいゝところでお目にかゝりました。一足違つたらどうなるところだ

つたでせう。三千代さん、私にもう死なないと仰しやつて下さい』
『はい、父樣のお記念をいたゞいたり、父樣のお話を伺つたりする事が出來るなら、今すぐ死ぬところではないと思ひますわ』
『さうですとも、その上私はあなたの幸福の鍵を持つて來て居ます。これからは魔術の杖があなたに觸れたやうに、あなたの幸福が開けるのです』
『ほんたうでございますの？……いゝえ、私はどうしても幸福になる途はございません』
『私をお信じなさい。きつとあなたの幸福は開けます。私はあなたのお父さんの唯一の親友であつたやうに、あなたの唯一の友です。若しあなたに一人の友もないと仰しやるなら。……三千代さん、さア、事情は違ひました。あなたが死を擇ばうとなすつた譯を聞かして下さい』
『はい、申上げます』
『併し、お寒いでせう、隨分冷えます。これはあなたが落していらつしつた肩掛です』と、背後からそれを着せかけた上、『あの松の根へ腰をかけて伺ひませう』
再び木立の中へ引返して、三千代に腰を下さした。

## 四

松の根に腰をおろしたところで、
『さア、三千代さん、あなたの不幸の原因を私に話して下さい』
『えゝ、それは申上げます……』と、云ひさしてまた逡巡ひながら、『申上げますけれども、まア何と申上げたらいゝでせう』
最後の言葉は自ら呟くやうに云つた。
『詳しい事はいづれゆつくり伺ふとして、大體の筋途だけを話していたゞきませう』
『あの、あなたは』と、臆病らしく私を見上げて、『杉浦さんの事は何にも御存知ないのでございませうね』
私は三千代の意味をハッキリ掴めなかつたので、
『杉浦に何事かあつたのですか』
『いゝえ、杉浦さんを御存知になつていらつしやるかと、お伺ひしたんでございます』
『あゝ、その事ですか』と、私は點頭いて、『ではあなたは杉浦から私の事について、何にもお聞きになつてはいらつしやらないのですね』
『いゝえ、何にも伺つては居りません』
『さうですか。杉浦與一ならば、私はよく知つて居ます。知つて居るどころか、あなたのお父さんと、杉浦と私の三人は、同じ關西學院の生徒で、青年時代には義兄弟のやうな、特別に親しい間柄だつたのです。それで今度も、杉浦に手紙を出して、久々で亞米利加から歸つて來たが、死んだ山田君の記念も持つて來て居るし、また山田君の後に殘した問題についての御相談もしたいから、いつ出たらいゝかと云つてよこしたところが、それなら新年は皆が垂水の別莊で遊んで居るから、ゆつくり逗留するつもりで遊びに來い、是非待つて居るといふ返事を受取つて、それで實は今朝郷里の廣島を立つて、今舞子に着いたところなのです』
三千代は私と杉浦とそんな關係にあるといふ事を意外に思つたらしく、同時にまた安心をも得た樣子で、
『まア、さうでございますの。では暫く杉浦さんに御逗留遊ばしますの』
『少なくて三四日、都合では一週間、或はそれ以上逗留する事になるかも知れません。杉浦は私の來る事をあなたにお知らせしさうなものでしたがね。……いや、杉浦にはそれをあなたにお知らせしないで置く方がいゝと思つた理由があるかも知れません。それともお知らせする

ほどの必要もないと考へたか……』

「ほんとに杉浦の小父さんは、なぜ知らせて下さらなかつたのでせうかしら……」

「それは無論故意にお知らせしなかつた譯ではないでせう。全體杉浦はあなたに分隔てをする性質の男ではないと思ひますが……』

『はい、杉浦の小父さんはいゝ方でございます。ちつとも分隔てなどはなさらずに、私を可愛がつて下さいます。私は父とも思つてゐますので……

「さうでせう。さうなければならない筈だと思ひます。さうするとあなたの不幸の原因は、外にある譯ですね」

三千代は直ちにそれには答へずに、

『あなたは杉浦の小母さんも御存知でいらつしやいますか』

『深くは知りませんが、或程度まで知つて居ます。杉浦が結婚して一二年たつてから山田君と私は一緒に亞米利加へ出かけたのですから……山田君が杉浦の家に居にくゝなつた事情は、その細君にあつたのです。あなたの不幸の原因も多分その邊にあるだらうと思ひますが……」

『えゝ……』と、躊躇しながら、『でも私、何だか小母さんの事は申上げにくくなりましたわ』

『併しそれを仰しやらなければ、あなたのせつぱ詰つた事情は分らないではありませんか』

『はい、でも小父さんが』と、懐かしく私を呼びかけて、『暫く御逗留遊ばすなら、私が申上げなくてもお分りになる事なんでございます。私今申上げない方がいゝかも知れませんわ、申上げるにしてもそれから後の事に……」

「なるほど、さうすると私にもほゞ想像がつきます。あの細君が昔のまゝならば、あなたに親切であらうとは思はれません。それでは伺ひますが、杉浦には娘が二三人ある筈でしたね』

『はい、二人ございます。尤も三人あつたのですが、一番上の姉さんが十三の時に亡なりましたから……』

『さうですか、ではその次があなたと同年輩位ですか』

『はい、私より一ツ年上の方と、二ツ下の方とでございます』

「一人男は達者で居るでせうね。私達が日本を去るころはまだ乳呑兒でしたが」

三千代は一寸赧らめた顏を隱すやうに俯いて、

『はい、今京大の法科にいらつしやいます』

『さうですか、もう二十四五になる筈ですね。いつ卒業するのです』

『今年卒業なさいます』

『今は冬休みで歸つて來て居るでせうね』

『はい』

『なほ伺ひますが、杉浦の娘達もあなたに不親切なのですか』

『いゝえ、そんなではありませんけれども……』

『併しあなたは先刻、あなたが死んでも、誰一人涙を流して呉れる人はないと云ひましたね。杉浦の娘達が、あなたのほんとの友達なら、あなたの口からその言葉は出ない筈だと思ひます。……娘達は娘達として、杉浦の息子もあなたに同情はないのですか』

『いゝえ、準一さんだけは違ひます。でもあの方のためには、私が生きて居ない方がいゝんでございます』と、娘はまた俯いて、躊躇しながら云つた。

『それはどういふ譯ですか』

三千代の口からは答へがなかつた。私は多少家庭の内情が想像つきかけたので、

『いや、强ひて今伺はなくてもいゝです。私にも大凡の見當はついたやうな氣がします。準一といふのが杉浦の息子ですね、何でもそんな名だつたやうに記憶して居ます。ぢや少なくも

その準一君だけはあなたの同情者と見ていゝ譯で……』

娘は首肯くのである。

『杉浦と準一君を除いてはあなたはまづ敵地に居るも同樣なのだ。さうでせう』

娘はまた默つて首肯く。

『なるほど、それなら女の身として、隨分辛い事が重なつたでせう。……それは無理もありません。併し死ぬなどとそんな短氣を起してはいけませんよ。先程も云つた通り、私はあなたの幸福の鍵を持つて來て居るんです。幸福になつたあなたを見ない中はいつまでも杉浦の家に滯在して居ますから安心していらつしやい。それがまた私の山田君に對する義務なんですから……』

三千代は喜びながらも、私の言葉には猶半信半疑で、

『でも、私のやうな人の厄介になつて生きて居るものが、仕合せの身になれようとは思はれませんわ。私は一生不仕合せで暮す運命に生れついて來て居るのだと思ひますわ』と、淋しく云つた。

私はこゝでどんなに三千代が大きな財産の持主で、決して人の厄介ものではない事を話さうと思つたかも知れなかつた。併し家庭の內情をほんとに摑むまでは、うつかり話して了ふ事は出來ない、殊に偶然三千代に逢つて、いろ／＼聞込んだことを、家人に氣取られてはならぬ、杉浦一家の人達に逢ふまでは、三千代に逢はない事にして置かねばならぬ、そのためにも今夜は三千代をほんとに喜ばして了はない方がいい、と思つたので、口まで出かゝつたのをぢツと怺へて、

『それは今あなたが試練を受けて居るだけです。私はきつとあなたを幸福にして見せます。私を信じてこれからは大船に乘つた氣でいらつしやい。……そこで三千代さん、お父さんの臨終の事や何かもこゝでお話ししたいんですけれども、誰かあなたが家を明けたことに氣がついて、探しに來ないとも限りません。見つかつてはお互ひに都合のわるい事です。私達はこゝで逢つた事も誰にも祕密にして置かなければなりません。お父さんの事は明日にも機會を見てゆつくりお話しする事として、差當りこゝでお別れしませう。あなたはこれからそツと自分の室へ歸つていらつしやい』

『はい、ではさういたします。併し小父さんは杉浦さんの別莊がお分りにならないでせう。大丈夫人に見られないでせうから、私が御案內しませうか』

『それには及びません。私は少し後れて見え隱れにあなたの後を慕つて行きます』

『さうでございますか。それでは一足おさきへ……』

會釋して以前に變る輕い足取で立去る娘を見送つて、私も松の根方を離れた。

## 五

三千代の後をつけて行つたので、杉浦の別莊は容易に見出す事が出來た。大抵想像をして來たやうな、樹木の多い傾斜地を利用した、立派な邸宅で、いかめしい石門と石垣をめぐらした大きな一構へであつた。門を入ると兩側が可なり大きな樹木の植込になつて居り、暫く爪先上りの道を上ると、月を浴びた洋風の大きな建物と日本館が見える、大分自慢の建築らしい事は、そのエレヴエーションの有樣からも想像されるのだつた。

玄關から呼鈴を押して刺を通ずると、すぐ樣杉浦自身が表はれて來て、歡迎ぶりを見せながら、

『おう、よく來てくれた。實は時刻が分らない

ので、驛に迎ひを出すにも出せないで困つて居たのだ、今ごろ漸く汽車があつたかね』
『なアに、三四十分前についたのさ。君からは垂水で降りろといふ事だつたが、あまり月がいいので、急に昔馴染の舞子で降りて見たくなり、暫く松原の中をぶらつきながらやつて來たので遲くなつたのだ。大いに懷舊の情を催して來たといふ譯さ。あはゝゝゝ』
『あゝ、さうだつたかね、併し寒かつたらう。さア兎に角こちらへ……』
『なに、風がないのでちつとも寒くなかつた。外國から歸つて來て見ると、やつぱり舞子はいゝね、あんなところは金の草鞋で探してもない』
　こんな事をいひながら杉浦に案内されて私は應接室に通つた、そこへ入ると暖房裝置の温氣で、寒いところから入つて來たため、俄かにむつとのぼせるやうだつた。こゝで一別以來の挨拶をかはした上、めいめいが安樂椅子についたところで、杉浦は私に向ひ、
『ところで早速だが君は松の内が濟むまでは少なくも逗留してくれるだらうね、まづそれを聞いて置きたいので……』
『それはそのつもりで來たのだが、なぜかね』
『いや、たゞ念のために聞いて置くだけだが、松の内だけはお互ひに愉快な呑氣な氣分に浸つて居たいと思ふのでね、厭な問題や、複雜な事件などにはなるべく觸れたくないと思ふのだ。それで君から云つて來てある山田の後始末といふやうな話も、松の内が濟んでからの事にして貰ひたいものだがそれでいゝだらうね』
『君がそれを希望するなら、それでも結構だが、併し君はどうしてそれをいやな話だと極めて了ふのだね』
『いや、何もそれをいやな話だといふ譯ではないがね、併しどうせ暗い話には相違あるまいぢやアないか。山田の事を話し合ふといふその事が既に暗いことなんだからね』
『まア、それはさうだが、……では兎も角君の希望通り、松の内は山田の問題には觸れない事にして置かう。なに、その方が私にも都合がいいのだ』
　私は杉浦が直ちに山田の問題に入る事を避けるのは、どうせ碌な事ではないと速斷して居るために違ひないと察した。例の遺産の事を話せば、それは暗い話どころではなく、一遍に明るくなつて了ふ事だと思つたが、さてその遺産などの道杉浦に保管を賴む事になるのだとしても、そこに杉浦の細君といふものがある以上、うつかり話して了つては、どんな事になるかも知れないのだし、かたがたも少し家庭の事情を硏究して見てからの方が、萬全の道だと考へたので、杉浦の言葉を幸ひにして、遺產の話は暫く見合はせて置く事に腹を極めたのである。
『併し何にしても山田は氣の毒な男だつた。どんな死樣をしたのかね』
『それを話すと君の嫌ひな暗い話になるが、全く貧弱なアパートメントの飾りも何にもない室で淋しく死んだよ、たゞ三千代さんの事を思ひつゞけながら……』
『さうだらう、そんな事だらうとは察して居た、あの男に取つては、何しろ亞米利加へ出かけたのがわるかつたのだ』
『ところで三千代さんは無事に成人して居るのだらうね、君には非常な御厄介だつたが……』
『僕が世話をするのは當然の事さ。幸ひに三千代は病氣もせずに達者で成人して居る。女學校も去年卒業したので、娘達といろいろの稽古もさせて居るが、美しい娘になつて居る。山田の忘記念だと思ふと、全く他人のやうな氣はしない、尤も僕とは淡いながら血もかゝつて居る間柄だが……』

「君が分隔てなく三千代さんを可愛がつて居る事は、僕にもよく分つて居る。山田もその點は安心して死んだのだが……それでは三千代さんも君の家庭で幸福に暮して居る譯だね」
『さア、それはね、幸福に暮して居る筈だが……』と、暗い顔になつて、『御承知の通り、何分妻があの通りの女なのでね』
「さうかね、奥さんには二十二三年來お目にかゝらないが……それはどうせ三千代さんに對しても、君のやうな譯には行くまいからね』
『いくら僕が隱したところで、いづれ君の滯在中には分る事だから、却つてよく君に了解して居て貰つた方がいゝと思ふが、どうも妻の頭には三千代が厄介ものだといふ考が退かないで居るので困りぬいて居るのだ。僕はこれで妻と三千代の間に立つて、どれほどいらぬ氣苦勞をして居るかも知れないのだよ』
『ウム、そんな事もあらうとはお察しする。奥さんはやつぱりそんな風かね』
『何分現金主義でね、山田が死んでからは誠にいけないのだ。いよ／＼三千代を背負ひ込まなければならない上、山田はきつと負債を殘して死んだに相違ないが、その尻拭ひなどを持ちこまれては眞平だといふのでね』
何だか杉浦が豫防線を張るらしくも想像されたが、併しそれは細君の意志を語つただけの事に相違あるまいとも推測しながら、
『併し奥さんはどうして山田が負債を殘して死んだものと極めて了つたのかね』
『全體山田があまりに無頓着なのがいけないのだ。妻は山田の性質を知らないから、約束の送金が後れ／＼になつたり、とう／＼來なかつたり、それがこの一二年殊にひどかつたので、山田はよく／＼窮迫して居るものと早合點をして了つたのだ。僕にして見れば山田の送金などを素よりあてにもして居ないし、またそれが無ければ三千代の世話に事缺くといふ身分でもないから、そんなものは一切三千代の小遣ひにしてやりたい考では居ても、どうもそれがさういふ譯にいかんのでね。三千代の問題では、屢々家庭の平和が破れるので、僕も當惑しきつて居るのだ。いや、こんな内情を君を迎へた早々、お耳に入れるのは赤面の至りだが……』
『いや、それは打明けて貰つた方が結構だ。それでは可哀想に三千代さんも大分苦勞をして居るね』
『案外氣の勝つた娘だから、いぢけてばかりは居ないけれども、氣苦勞は隨分して居る様子だ』
『三千代さんには僕の來る事を知らしてあるだらうか』と、私は何にも知らぬ顔をしながら聞いた。
『それも知らした方がいゝかとも思つたが、どうせ悲しい事なんだし、いゝたよりが聞ける譯でもないと思つたので、却つて心配させるよりは、君が來てからの事にしてもよからうと、まだ知らしてはないのだ』
『あゝ、さうかね、だしぬけに逢つて、山田の記念を渡すといふ事もよからう』
話が一寸途切れたところで、
『杉浦君、君の息子さんは大きくなつたらうね』
『準一かね、もう取つて二十五になる。大學を今年出る筈だが……丁度歸つて來て居るから後に逢つてやつて貰はう』
『二十五になるかね、早いものだが、さうだらう、われ／＼はまだ若いつもりで居るが、それだけ老人になつたのだね、山田と僕が國を飛出す時はまだ乳吞兒だつたが、あれから二十三年になるから、二十五にもなる譯だ。それはお樂しみでいゝな。君も立派な後繼者があつて仕合せといふものだ。するともう程なく結婚問題だね。』

『いや、それだ、實はその事でも頭を惱まして居るのだ』

私はだん／＼問題の核心に觸れて行くやうな氣がしながら、

『ウム、その事で頭を惱まして居るとは？』

『倅が卒業間際になつたので、妻はもう嫁探しをして居るのだが、妻にはもう極めてゐる娘があるのだ。話も自分だけで大分進めて居るらしいのだが……』

『なるほど、併しそれは準一さんも承知なのかね』

『問題はそこにもある、大分こんがらかつて居るので、その娘を準一は嫌つて居るのだ。實は今夜も來て居るのだが、後程君にも見て置いて貰はう。大阪の資産家の娘で、大分新しい女の部類だ』

『君はどうなのかね』

『僕も實は不贊成なので……』

『フム、君も不贊成、準一さんも不承知といふなら、もう問題はないぢやアないか』

『そこに保枝といふもののある事を忘れてはいかん。何分一家の女王なのだからね、その女王ぶりは近年ます／＼猛烈になるばかりで、僕は手も足も出ないといふ慘めな有樣だよ』と、彼は苦笑した。

『併し結婚問題は要するに準一君次第のものぢやアないか、いくらお母さんが頑張つて見たところで……』

『それはさうだ、結局さうなる外ないとは思つて居るが、妻の方ではもし倅が承知しなければ、廢嫡して、娘に後を取らせるとまで云張つて居る始末なのだ』

『準一君には別に意中の人でもある譯かね』と私は何氣ない顏をして聞いた。

『それがね、君だから云ふが、實は三千代と二人は戀に落ちて居るのだ』

さてこそ推測通りと、私は心の中に微笑を禁じ得ないのを押隱して、

『なるほど、ありさうな事だ。僕はまだ二人を知らないのだから、良縁とも惡縁とも判斷しかねるが、何だか二人がさうなるのは、定められた二人の宿命でもあるやうな氣が僕にはするね』

『僕も實はさうしてやりたいと思つては居るのだ。ところがそれでは到底家庭の平和が維持されない。もし二人が一緒になるやうな事なら、結局準一は手放さなければならぬ事にもなるだらう』

『奧さんはそれを知つてるのかね』

『それを知つたから問題が大きくなつた譯で、それ以來三千代は一層可哀想な地位に置かれる事になつて居る』

三千代が身を投げようとまでした直接の原因は、そこから來たのだと、私はほゞ察する事が出來た。

『大凡の事情はそれで僕にものみこめたが、併しもし三千代さんが地位を代へて、假に財産家の娘であるとしたら、奧さんの考はまた變るといふものだらうね』

『それは無論の事さ。不幸の一切の原因は、三千代がこの家の厄介もので、無一物だといふところから來て居るので、何分現金主義で、黃金萬能の女だからね』

『ところで準一君はしつかとした考を持つて居るだらうか、お母さんの意志でぐらつき出すといふやうな風でも困るが……』

『いや、君の前だが、準一は僕と違つて意志の強い男なのだ、その點は母親に似たとでもいふのかね。その問題ではまだ一度も倅と話し合つた事はないが、倅はこの家の財産と離れても、三千代と一緒になる考で居るらしい、財産の事などは少しも眼中に置いて居ないのだか

ら……』
『それでは二人は眞劍に愛し合つて居るのだね』
『それは眞劍だ。僕はとうから感づいて居たがちつともそれを妨げようとはしなかつたのだ。春枝からは僕の監督がわるいからだと責められて居るが、そのためにはわれ／＼二人の間が大分氣まづくなつて居るので、結婚問題には當分一切口を出さずに居る譯なのだ』
『いや、よく腹藏なく話してくれて難有う。君がもて餘して居るなら、及ばずながら僕も此問題に斡旋する事にしよう。僕には相當自信もあるから……』
杉浦は物悲しさうに頭を振つて、
『君は妻をよく知らないから、そんな無造作な事をいふが、誰だつて妻には手を燒くに極つて居る。まア、そんな事は問題にせずに、すつかりこの話を忘れて、快く松の内をこゝで送つて貰はう』
『それはどうとも云へんが、まア兎も角奥さんにもしみ／＼逢つて樣子を見るとしよう』
『今夜は娘の友達や何かがよつて、大廣間でカルタ會をして居る。今話した娘もそれで來て居るのだ。春枝は何でも讀役か何かをして居る筈だ。で、まだ君の來た事を知らずに居る、それを幸ひ、君と長話をした譯だが……』
『それでは三千代さんもその席に居るだらうね』
『多分居るだらう、僕は一人仲間外れになつて居たのだが……』
『どうだらう、奥さんは僕の逗留を喜ばないのではなからうか』
『いや、それほどの女ではない。なか／＼見え坊なのだから、まづ自分達の生活を君に見せびらかしたいのだ。君が貧乏人で無心にでも亞米利加から來たのなら別問題だが、金のあるものにはいつでも好意を見せる女なのだ。三千代の問題を除外しては、君を歡迎する事は請合つて置く。あれで交際家を以て自任して居るのだから、その點は心配する必要は少しもない』
『さうかね、それならいゝが……』
『妻を一ツこゝへ呼ばう』
『いや、それには及ばんよ。今カルタの最中ならお邪魔をしてもいけない。何ならその席へ案內して貰はうぢやアないか』
『君が迷惑でなければ、さうして貰ふ方が僕の方にも都合がいゝ、問題の娘もそこで見て貰へる。ところで君、荷物のやうなものは？』
『手荷物が垂水まで預けたまゝになつて居る。こゝにチェッキがあるから、取りにやつて置いて貰はう』
『それではすぐ取りにやらう』と、彼は女中を呼んで、下男に荷物を取りにやるやうに命じた上で、私を客間に案內するのであつた。

## 六

客室の大廣間は隨分廣い、美々しく裝飾された室で、シャンデリアの輝いて居る下に、椅子や卓子を片よせ、絨毯の上に若い男女大方十人近くの人達が、東西に分れて今カルタの一勝負ついたばかりらしいところだつた。室の裝飾が美しいのと、女達の晴衣がけば／＼しいので、絢爛眼を射るばかりの華やかな光景を目擊するにつけても、その席にも加はらぬのか、加へられぬのか、こゝを遁れて、舞子の海に死を急がうとした三千代の上を思ふと、何といふ對照だらうと驚かずには居られなかつた。
扉を開けて私達が第一歩を踏入れた時、一同の視線は私達の方に向けられたが、私達老人の姿は、一向若人達の感興を惹く何ものもなかつたので、すぐ路傍の人のやうな態度に歸つて了つた。が、杉浦の妻はすぐ私と知つたら

しく立上つて來た。

「依枝」と、杉浦は妻の名を呼んで、「瀧口君が見えたのだ」

「まア、お久しい！　よくまア、いらつしつて下さいましたわね」と、昔の面影の殘つて居る高慢な冷たい顏に、取つてつけたやうな笑ひを浮べて、調子だけは愛想よく、「今日おいでになる事は存じて居ながら、お着きの時間が分らないものですから、お迎ひも差上げませんで。でもすぐお分りになつたんでございませうね。ほんとにお久しぶりでございますわ。二十何年かぶりなのですもの。さア、まアどうぞおかけ遊ばして……」

そこで私は丁寧に會釋して、久濶を敍し、今度數日間厄介になる事を述べると、

「いえ、あなた、いつまで御逗留下すつてもいゝんでございますよ。宅は廣うございますし、人手もあまるほどありますから、どうぞ少しも御遠慮などなさらないやうに、御ゆつくりと……まア、あなたも隨分お老けになりましたわね。私などはもうこんなお婆さんになつて了ひまして……」

「いや、私こそ老人になりましたが、奧さんはいつまでもお若くつていらつしやいます」

「あら、あなた、そんなお世辭を仰しやつてはいけません。こんな年寄になつては、どんなお世辭を伺つても、もう自分といふものが、ハッキリ分つて居りますから、駄目でございますよ」

さう云ふ彼女は、一向自分の事が分つて居ないらしく、若いと云はれて滿足の樣子が隱れもないのだつた。顏に白いものまで刷き、年よりは派手作りをして居ても、額の皺は隱すにも隱されないのが、老女の化粧で悲慘であつた。

「母樣、始めませうよ」と、老人の不時の闖入をさも不滿足らしく、杉浦の娘らしいのが、母を呼びかけた。

「今お待ちよ。亞米利加からはるばるおいでになつたお客樣ですよ。お前達、一寸こゝへおいで」

娘は膨れた顏をしながら立上つて母の傍へ來た。

「岸子もこゝへおいでなさい」

二人の娘が私の前へ立つた。

「お父樣の舊いお友達の瀧口さんですよ。姉が岸子で、妹が繁子と申します。わがまゝものですけれども、どうぞお心易く……」

二人とも母によく似た、そして母の高慢と冷たさをうけついで居るやうな娘達だつた。二人とも世間並の器量ではあるが、迚も三千代の足下へもよれなかつた。

妹の繁子はこんなお客樣に用はないといふやうな顏をして、只默つて頭を下げた。それでも姉は姉だけに、

「どうもよくこそおいで遊ばしました」と、笑顏を見せて、それだけを云つた。

「ね、母樣、始めませうよ」と、妹娘はまた無遠慮に母にせがんだ。

「お前達、先へお始め……高田さんに讀役になつてお貰ひなさい」

「高田さんはだめよ」

その時一座の中から、一人の青年が立上つて來た。

「お父さん、瀧口さんですか」

「さうだ、瀧口さんがおつきになつたのだ。瀧口君、これが倅の準一です」と、彼は誇りを以てわが子を紹介した。

それは杉浦が誇るには、十分な青年と見受けられた。準一は父に似て、體格もよく、品位もあつて、見るから快濶らしい、感じのいゝ好青年だつた。

「私が瀧口です。あなたが赤ン坊の時に亞米利加へ立つたので、ほんとに大きくなりました

ね』と、私は心からの滿足を以て彼に對した。

『あなたの事は父からもよく伺つて居ります。今日は私がお出迎ひに行かうとしたのを、時間が分らなかつたものですから失禮しました。今度は暫く御逗留下さいますさうで、實は心待して居つた次第でございます、いろ／＼あちらのお話も伺ひたいと存じまして……』

いふ事も娘達とは違つて、心持も定めてフランクな青年に違ひないと、私は直覺しながら、

『私もあなたにお目にかゝれて滿足です。今大學においでださうで、休暇でお歸りになつたのですね』

『はい、十日ごろまではこちらに居るつもりです、あなたもそのころまでは、無論御逗留下さるのでせう』

『そのつもりで居ります』

『母樣てば』と、娘はまた催促した。

『さア、奧さん、どうぞお始めになつて下さい。お邪魔をしては恐縮ですから……私は只拜見さして頂きます。老人になると、若い人達の面白さうな遊戲でも見るのが樂しみなものですから……』

『ではさうさして頂きませう』

『兄樣もいらつしやい』

『僕は一度ぬけるよ』

『いやよ、兄樣がぬけてはいやよ、組が出來ないぢやアないの』と、繁子は迫つた。

『さア、あなたもおやりなさい。いつでもお話は出來ます』と、私も準一を促した。

一座を見廻して居た杉浦が、

『春枝、三千代が居ないぢやアないか。どうしたのだ』

春枝の眼は三千代の一語に險しくなつたが、眉をよせると、

『ほんとにあの娘にも困つちまふんです。大方室にでも居るのでせう。どうせ仲間には入りませんよ』

## 七

母の言葉が準一の顏を曇らした事を私は見免さなかつた。彼は顏を反けたが、溜息さへ漏れたと私は思つた。杉浦は困つたものだといふ顏をしながら、

『併し三ケ日の事だ。皆が陽氣に遊んで居るのだから、誰か呼びにやつて見たらいゝではないか』

『呼びにやつても來ないことは分つてますよ。私も仲間入をするやうにと、云つて見たのですけれども、頭痛がするからと云つて、自分の室へ退つて了つたのですもの、先刻も行つて見れば、室に自分から錠を下して居るんです。大方もう寢てでも居るんでせう』

『ねえ、兄さんも母樣も早くいらつしやいよう』と、妹娘はまた無遠慮に母と兄を呼びかけた。

準一は母や私達の前に居づらく思つたのだらう、それを機に一座の中に歸つて行つた。

杉浦は澁面作りながら、

『それなら仕方がないが、折角瀧口君が見えて、それも三千代に山田の記念を渡すため、わざわざ歸つて來たやうなものだからね』

『それは明日逢つていたゞいたらようございますわ。ねえ、瀧口さん、まだゆつくり御逗留下さるんですから、お急ぎになる必要はございませんわね。明日ゆつくりあの娘にお逢ひになつていたゞきませう』

『えゝ、結構です』と、私は答へる外なかつた。もう既に逢つて居るのだから、この席で逢ふよりは、明日ゆつくり逢ふ方が、寧ろ望みでもあつた。

『ほんとにあの娘の片意地にも困つて了ふ』と、

春枝は呟くやうに云ふのである。
『さア、奥さん、どうぞ私達にお構ひなく……。こゝで拜見さして頂きます』
『では子供達が八釜しうございますから……』
と、春枝もカルタの席に歸つて行くので、杉浦と私は手近の肱掛椅子に腰をおろした。
『どうもあれだから困るので……』と、杉浦は呟いて、『では仕方がない、三千代には明日逢つて貰ふといふ事に……』
『いや、それでいゝ、全く急ぐ必要はないのだから、たゞこつちは六ッの時別れたばかりの三千代さんが、どんな娘になつて居るか、早く顏を見たい位のもので……』と、私は胡麻化して云つた。
『それはほんとにいゝ娘になつて居る。高田の娘などは』と、小聲に云つて、『足下へもよりつけない』
『高田の娘といふと――?』
『靜かにし給へ』と、今勝負にかゝり始めて居るかるたの人々の方に氣をかねて、同じ小聲をつゞけながら、『高田の娘といふのは、先刻話した例の問題の娘で、君に今夜來て居ると云つたらう、あれだ、姉が須磨に縁づいて居るので、姉のところへ泊りがけに來て居るので、今夜は姉と一緒に來て居る譯さ。そら、あの、洋裝のそれだ、準一の隣りに丸髷に結つて居るのが姉で……』
私はその洋裝の娘には、この室へ入つた時から氣がついて居たのだ。派手な女優にも紛ふやうな服裝をして、髮を斷髮にまでして居るハイカラさである。顏は一寸現代式の、萬更わるい器量でもないが、高調子で喋舌つて居る、お茶ッぴいらしい娘である。なるほどこれでは三千代とは問題にならないと思つた。その娘の父が株式の成金で、妾を置いて、それにも子があり、甚だ面白くない家庭である事も、杉浦の話で知つた。斷髮娘が準一の妻としては、論外である事いふ迄もない。

約一時間の後、私は自分の部屋にあてられた階下の寢室に退いたが、すぐ寢る氣にもなれないので、安樂椅子にもたれて、煙草をふかしながら、杉浦一家の家庭の内情と、それからそれへと想像して居る時、カルタ客の歸りらしく、賑はしい足音やら笑ひ聲が、丁度横手の植込越しに聞取れるのである。好奇心といふほどの事ではなく、月も冴えて居る事だらうとふと考へて、カーテンを引き、ブラインドを少しあげて見た。先刻海岸で三千代の顏を照してくれたその同じ月は、折柄隈もなく照り輝いて、早くも霜を置いた寂寞とした大地に、冷たい刃のやうな光を投げて居る。男女の一群の去つた後から、程なくまた一組の男女が出て行つたが、それは例の洋裝の娘とその姉と準一とであつた。足音は門外に消えても、準一の引返して來る姿はなかつたので、私は準一が二人を送つて行つたのだらうと察すると、何だか私にはそれが不快だつた。準一はその娘にも心を惹かれて居るのではあるまいか、まさしくそれは約婚の女を送つて行く態度だ、とも思つたが、併しそれは多分母親の命令で、いや〳〵行くのかも知れないとすぐ思ひ返して見た。さう云へば今夜のカルタ會にも、準一が一向氣乘のして居ない樣子などが、思ひ合はされるのだつた。
程なく私は寢臺の上の人となつた。
私は平生早起の習慣があるので、人の家の客となつても、やはり翌朝の六時半には床を離れた。寢室の入込のところが、洗面所になつて居るので、すつかり朝の身仕舞をそこで濟す事が出來た。さて電燈を消し、窓々のカーテンを絞り、ブラインドをあげて見ると、昨夜寒じが

ひどかつただけ、今朝は日本晴の日和らしく、東の窓から暖かな朝日がさしこむのが、此上もなく氣分を爽かにした。丁度その窓際に立つて庭を見下した時、ひよつこりその庭先へ出て來た準一が、私の姿を見るなりにこやかに一禮して窓際に近づいて來た。私は窓をあけて、

『準一さん、お早う……。ほんとに早いですね、昨夜は隨分遲くなつたやうでしたが……』

『え丶、僕は家中で誰より朝起なんです。併しあなたこそお疲れのところを、大變お早いお目覺ぢやありませんか』

『私も早起の習慣があるので、夜どんなに遲くても、また疲れて居ても、起きる時間に變りはないのです。どうです、お入りになりませんか』

『ではお邪魔さしていたゞきませう』と、準一はホールの方へ廻つて入つて來た。

『僕の室はあなたのお隣りなんです。如何ですおやすみになれましたか』と、彼は私の與へた椅子について、人懷こく云ふのである。

私は昨夜來この青年が好きになつて居た事は事實だつた。

『よくやすめましたよ。カルタは隨分長くはずんだやうでしたね。あの、高田さんとか云ひましたかね、洋裝のお孃さん方を、あなたが送つて出られる姿を、こゝから見て居ましたよ』と、私は、準一の氣を引くため云つて見た。

『あゝ、さうでしたか』と、彼は曇つた顏をして、『姉さんの方が板宿に方に居るので、甚だ迷惑でしたが、母の命令で、止むを得ず、送つつたのです』

私は推測通りだつたので、準一の說明に滿足しながら、

『さうでしたか、あのお孃さんは、なか〳〵活潑な面白さうな娘さんでしたな』

『私はあんな女は嫌ひです。あなたはお好きですか』

『さア』と、私は笑ひながら、彼の問には答へずに、『併しお母さんはあなたの爲に、あのお孃さんをお擇びになつたといふぢやアありませんか』

それを聞くと準一は明らかな反感を見せて、

『そんな事をお聞きになつたのですか。假令母が何と云つたところで、私は決してあんな娘とは結婚しません』

『それはあなたが三千代さんを擇んだからですね』

準一は驚いて私を見たが、同時に眼の縁をほんのりとさせて、

『父から何もかもお聞きになつたのですね。さうです。あなたはまだ三千代さんを御存知ありませんが、後程お逢ひになれば、私がなぜ高田の娘を取らずに、三千代さんを擇んだかは、一目ですぐにお分りになります』と、誇り顏に云つて、『三千代さんは女らしい女です。女の中の女です。あなたもきつと三千代さんをお愛しになります。私が三千代さんを擇んだのは、決して選擇を過つたのでないと、あなたもきつとお認めになるでせう。父だつて內心では認めてくれて居るのです』

『さうですか』と私は會心の微笑を浮べて、『私も五ツか六ツの三千代さんを知つて居るだけですが、さうした娘らしい娘になつて居る事を希望しながら、はる〴〵亞米利加から尋ねて來たのです。それでは私もわざ〳〵來た甲斐があるといふものです。併しあなたの選擇が間違つて居るか居ないかを判斷するのは、いづれ三千代さんに逢つてからの事です』

『さうです。私はあなたの判斷を强ふる考は少しもありません。併しそれを正しい、誤りのない選擇だとお認めになつて下すつた上では、私の同情者となつていたゞきたいのです。い

や、私と云はずに三千代さんの味方になつていたゞきたいのです。三千代さんはたゞ一人の味方もない、一人ぼつちの氣の毒な娘なのです」と、彼は眼に涙をさへ宿して云つた。

　私はそのフランクな青年の心に動かされて、

「私が亞米利加からわざ〳〵來たのも、三千代さんの味方になるためなのです、三千代さんを幸福にするためなんです」

「私はきつと三千代さんを幸福にする事を誓ひます。私と三千代さんとの、最大の幸福は二人が結婚するといふ事なんです」と、彼は大膽に云つてのけた。

『併しお母さんがどうしてもそれを許さなかつたらどうします」

『私はこの家を出るばかりです。母は私を廢嫡する決心を極めるでせう。私は財産などには何一ツ望みはありません。財産がなくともこの春には大學を出ますから、どうやらかうやら自活は出來ると思ひます。三千代さんはどんな苦しい生活をしても、物質上の苦痛なら、厭はない覺悟を持つて居る筈です」

『あなた方はそれほどの決心で、愛し合つて居るのですか』

『はい、私だけは少なくもその決心で居ます。三千代さんの口からは、聞いては居ませんけれども、私は三千代さんが必らず妻になつてくれる事を信じて居ます。それだけで私には十分なんです」

「それではあなたには最後の決心はついて居るのですね」

「私はどんな障害を排しても、必らず三千代さんを妻にします」と、強い意志を表示して云つた。準一の燃ゆるやうな眼光と、その力の籠つた言葉は、必らずそれを實行するに違ひない事を思はせた。

「あなた方がそれほど愛し合つて居るなら、別に圓滿に解決する途があらうと思ひます」

　準一は悲しさうに頭を振つて、

『母の意志は他人の言葉などでは決して動きません。結局私はこの家を去る外ないでせう。それも問題は迫つて來て居ます。現に昨日などは……」と、云ひさして彼は口を噤んだ。

　私は三千代が投身をまで覺悟した事情は、そこにあるのだと察して、

『昨日どんな事があつたのです』

「たゞ一言で云へば母と衝突したのです。私は母の事を申上げたくはありません、たゞお察し下さればいゝんです」

「その席には三千代さんも居つたのですか」

「昨日は二度衝突したので、最後の時には三千代さんもそこに居合はせました。私はその事で三千代さんに逢ひたいのですが、母が監視して居るので逢ふ事が出來ません」と、彼は正直に告白した。

「さうですか。三千代さんが昨夜カルタの席に見えなかつたのはそのためですね」

「はい」

『それでは三千代さんは、室に籠つて居たので……？」

「さうです、監禁されたやうなものなんです」

「お母さんは三千代さんが室に自分から鍵をかけて居たと云はれましたよ」

『それは多分外からかけたのでせう』

　この點では彼の推測は誤つて居た。若し外から鍵をかけてあつたのなら、三千代は室をぬけ出す事は出來なかつただらう。私は準一が、もし私といふものが來合はさずば、永遠に三千代を失ふところであつた事を、少しも氣づかずに居る事を知ると共に、もし事實を知つたなら、どんなに私に感謝するだらうと考へた。

「そんな風ですと、問題は可なり迫つて居ますね」

『さうです、あなたの御逗留中に、どんな事になるかも知れません』

『また私としては、この問題の決着を見てから、日本を去りたいと思ひます。またさうするのが、私の舊友の忘記念に對する義務でもあります』

『さう願へればどんなに心強いかも知れません。あなたはいつごろまで日本に御滯在の御豫定なのでございます』

『豫定は一ケ月程です。併しその中には必らず解決がつくことゝ私は信じます。いや、ひよつとしたら私がこちらに御厄介になつて居る中に……』

『それは御逗留中に何事か起るにしても、それでその問題が解決されようとは思はれません。私が家を出る外には全く解決の途はないのです。私は家を出る事を少しも恐れません。たゞ私の恐れるのは、その場合に母が三千代さんをどうするかといふ點です。もし三千代さんを放逐するなら、三千代さんは私の手で拘取りますが、母はさうはさせないでせう。却つて三千代さんを監禁しはしないかと思ひます。さうなれば私は三千代さんを救ふ手段がありません』と、彼は絶望らしい調子で呻いた。

『三千代さんの事なら心配せずともいゝです。私はきつと三千代さんを救ひます。その點は安心していらつしやい』

私が無造作にいふので、却つて不安を持つらしく、

『あなたは母をよく御存じないのです』

『私をお信じなさい。私には呪符があるのです』と、笑つた。

丁度その時ノックの音がしたので、私達は話を打切つた。入つて來たのは父の杉浦與一だつた。

## 八

私は準一とその父と三人で朝の食事を濟ませた。

それから一時間後であつた。私が喫煙室で、杉浦から三千代を引合はされたのは。私達は無論初對面を粧つて挨拶した。杉浦は暫く一緒に話した上、この室には誰も來ないし、また來させぬやうにもするからと、云殘して立去つた。

三千代は今朝は銘仙の綿入に、同じ柄の羽織を着流し、きちんとした姿をして居たが、思ひなしか、昨夜に引きかへ、晴やかな色さへ顏に見えるのだつた。月の光で見たよりは一層引立つて美しく、女らしい優しさの中に、勝氣なところも見え、準一の言葉通り、全く女らしい女と云つてよかつた。

杉浦が出ると三千代は急に打解けた態度になつて、美しく笑み傾けながら、

『昨夜はどうしてあんな氣になつたのかと一晩後悔して居ましたのよ。小父樣には何とお禮を申上げたらよいでせう』

『私は今朝あなたの顏色を見て、全く安心しました。私があなたをお助けしたのも、みんな亡なつたお父さんの引合はせだつたのです。それでなくてあの時刻に、私がわざ／＼舞子で降りる筈もなければ、あなたにめぐり合ふ筈もないのです。山田君は草葉の蔭から、あなたを保護して居るのだと私は信じます』

『えゝ、私もさうだと思ひますわ』と、三千代は涙のにじみ出した目頭を押へた。

私はわが子のやうな溫かさを三千代に感じて、

『あなたはお父さんの顏に見覺えがありますか』

『たゞぼんやりとですけれども、父の顏が心の底に刻みつけられて居ます。今ひよつこり父に

逢つても、きつと父だと認める事が出來るに相違ないやうな氣がいたしますわ』

『私はお父さんの臨終の模樣をあなたにお話ししなければなりません。それは悲しい物語ですけれども、あなたはそれに堪へられますか』

『はい。どんなに悲しい事でも、怺へて伺ひます』と、三千代は居住居を正した。

私はそこで亞米利加の話に戻り、山田のアラスカに行つた事から說起し、その後暫く消息の絕えて居る中、突然電報で呼ばれ、出かけて行つて見た事と、もうその時は絕望であつた事、それから臨終の模樣、後始末の事などを、遺產の事だけを除いて、委しく語り聞かせたのであつた。

三千代は流石に淚の中に、それでもよく怺へて聞いて居たが、やがて聞き終ると、

『父は何といふ不幸の人だつたんでございませう。それから思ふと私などはまだ〳〵……』

『さうです。山田君はたしかに不幸な人です。併し或意味からいふと、あなたといふものを、此世に殘す事の出來たのは、山田君に取つて、何よりも幸福だつたのです。山田君はあなたの前途を祝福し、それを唯一の希望として、何の雜念もなしに此世を去りました。それは淸らかな、惠まれた死目だと云つてもよかつたのです』

『さうでせうか、でも私の前途だつて、父に祝福して貰ふやうな望みの光は、何一ツ殘つては居ませんわ』

『いゝえ、山田君はたしかに幸福の鍵をあなたに殘して居るのです』

『幸福の鍵つて何でございますの、それは昨夜も伺ひましたけれども……』

幸福の鍵は二十萬圓の遺產である事を、私はどんなに云つて了ひたかつたか知れないのを、ぢッと怺へて、笑ひに紛らし、

『たゞ私をお信じなさい。その鍵がどんなものであるかは、申上げる時が來なければ申上げられないのです。併しその日は明日にも來るかも知れません。少なくも私の滯在中には來る事なんです。それまで辛抱して居て下さい。すべてはそれまでの辛抱です』

三千代は好奇心を動かされたやうに見えたが强ひて此上尋ねようとはしなかつた。

『三千代さん、私は昨夜暫くカルタ會の見物をして居る中に、いろ〳〵の事を知る事が出來ました』

『まア、その席においでになりましたの』

『私は杉浦の娘達もその席で知り、高田といふ娘も知りました。あゝいふ席上では隱さない自分が表はれるものですから、若い娘などを知るには最もいゝ機會です』

『あら』と、眼を睜つた三千代の可愛いその眼には、いろ〳〵の意味が讀まれた。

『無論準一君にもその席で逢ひましたが、今朝はまた食事前長い間準一君と話をしました』

『さうでございますか』と、娘は何氣なく云つて、私の顏を讀むやうに見上げた。

私は笑ひかけて、

『準一君は一切を私に告白しましたよ』

娘は思はずサッと顏を染めて、

『あら!』

『それに昨夜海岸であなたのお話を伺つた時から略推測して居た事です。まして昨夜は杉浦からも、そのために問題が起つて居る事まで聞いてゐるのです』

『さうでございましたか』と、三千代は俯いて溜息を漏らした。

『あなた方はいつごろから愛し合つたのですか』

三千代は恥かしさうに、

『いつごろといふ事は有りませんわ。小兒の時

から準一さんは、いつでも私の味方でした。私が岸子さんや紫子さんたち、また小母さんから除けもの扱ひにされながら、それでも暖かな心を失はずに、今日まで生きて居られたのは、準一さんがあつたからなんでございます』

『なるほど、あなた方の愛が、深い根ざしを持つて居るといふ事はよく分ります。準一君はこの家を出ても、あなたと結婚するといふ強い意志を持つて居るやうです。準一君は必らずそれを實行する人だと私は思ひます』

『はい、併し私の場合は違ひます』

『どう違ふのですか』

『私も昨日までは準一さんと結婚する考で居りました。併し昨夜いろ〱思案して見た上、その考を捨てたのでございます』

『準一君とは結婚しない――とですか』

『はい』

『それはなぜです』

『私と結婚するためには、準一さんはどうしてもお家を捨てなければなりません。親にも反かなければなりません。それは餘り大きな犠牲です。私が今日まで育つて來たのは、小母さんの云種ばかりではなく、全く杉浦家の恩義ですのに、その恩を仇で返す事は屑くございませんし、準一さんをそんな不幸な境遇に置きたくないからでございます』

『併し準一君は飽くまであなたと結婚する意志を捨てないでせう』

『ですから私は覺悟を極めたのでございます』

『覺悟を極めたといふのは、どう覺悟を極めたのです』

『それは小父様にお縋りしなければならない事なんですけれども、杉浦さんの家を、私が出て了はうと思ふんでございます』

『ほゝう、準一君でなくて、あなたがこの家を出る？……家を出てどうします？』

『私は將來どうしても自活をしたい考なんでございますの』

『自活？それはあなたが夢を見て居るにはいいことでせう。併し夢と實際とは違ひますよ。またよしんばあなたが杉浦の家を出たにしても準一君がそれであなたを忘れるものと、どうして考へられます。あなたが杉浦の家を出れば、準一君のためには、その方が却つて都合がいゝ事になるかも知れません』

『いゝえ、小父様、私は準一さんがどうしても斷念めて下さらなければならない、遠いところへまゐりたいと思つて居るんでございますの、小父様さへ許して下さるなら……』

『遠いところと云つてどこですか』

『私、その事で今日は小父様にお願ひしようと、決心を極めて居たんでございます。小父様、どうぞ私の願ひを聞届けてね……』と、愬へるやうにいふのである。

私は不安と好奇心とを綯ひまぜて、

『どういふ事なのです。少しも遠慮する事はありません。云つて御覽なさい』

『それはね、小父様、私、小父様に亞米利加へ連れてつて頂きたいんでございます。そしてあちらで何でも修業していたゞいたら、自活の途を立てることが出來ますから……それはよくよく考へた上のお願ひなんでございます。私が亞米利加へ行つて了ひさへすれば、準一さんだつて、斷念めて下さるでせう。亞米利加まで追つてはいらつしやらないでせう』

三千代の全く思ひ込んだやうな顔色を見ると私はまた動かされて、

『えらい決心をしましたね。私はあなたを亞米利加へ連れて歸る位何でもありません。少しでも私の手であなたのお世話が出來るなら、それは死んだ舊友に對する、せめてもの心盡しになる譯ですから……』

『ではどうぞね……』と、三千代はその氣になるらしいので、

『ま、待つて下さい。それはいつでもあなたを連れて歸りますが、それは最後の問題です。また假にあなたを連れて歸つたとしても、それで準一君から逃れる事が出來ると思つたら間違ひですよ。準一君はあなたを追つて、亞米利加へ來るでせう』

『さうでせうか』と、三千代は驚き顔に云つた。

『亞米利加へ行く事位何でもない事です。併し二人が氣兼なしに結婚するには、その方がいいかも知れません』

『あら！』と、三千代はまた顔をあかめた。

『兎に角あなたを亞米利加へ連れて行く事は、今いふ通り最後の問題で、それまでに圓滿に解決が出來ればいゝのでせう』

『決して圓滿には解決出來ませんわ。昨日の事を考へただけでも、私――』と、彼女は身を震はすのであつた。

『昨日の事といふと……？』

『はい……申上げませうか』

『聞かして下さい』

『實はね、小父樣、昨日の朝小母さんは準一さんをお呼びになつて、高田さんのお孃さんとの結婚を承諾させようとなすつたんです。準一さんはその時きつぱりとお斷りになつて、私とでなければ誰とも結婚しないと、云切つておしまひになつたんです。それから小母さんと準一さんの間に激論があつて、小母さんはもし準一さんが高田のお孃さんと結婚しなければ、廢嫡すると仰しやつて、また廢嫡される位は覺悟の前だと準一さんが仰しやつたんださうです。詳しくはまだよくお伺ひする間がないんですが、何でもその事でまた小父さんと小母さんの間に、大分ごた／＼があつたらしいのでございます。おひる過に私もまた小母さんに呼ばれたので、こは／＼行つて見ると、小母さんはその時は案外優しい顔をなすつて、三千代、折入つてお前に賴みがある、實は高田の娘を準一に貰ふ事になつて、親々の間で約束まで取りかはして了つたのに、準一がお前と約束してあるからと云つて、どうしても承知しないのだ、承知しないばかりか、家を出てお前と結婚すると云つて居る、またさうなれば、自分達も許して置く事は出來ないから、斷然準一を廢嫡する外はない、もしそんな事になつた時の、杉浦家の慘めな有樣を想像して見てくれるがいゝ、自分達は悲しみのために死んで了ふかも知れない、それもこれもみんなお前から起つた事だ、併し今更お前を責めようとするのではない、私はこれまでお前を實の子のやうに思つて、分隔てなく育てて來て居る、お前の父からは養育料と云つても、お前のお小遣ひにも足らぬ位の送金ほか今までになかつたので、みんな私の家でして、お前をこんなに大きくしたのだ、お前も杉浦家の恩を知るなら、準一と結婚する事は思ひ止まつてくれ、お前さへ結婚を斷つてくれゝば、準一はまたその氣になるのだからと仰しやるんです』

一寸言葉の切れたところで、

『ウム、なか／＼巧い論法だ。それであなたは何と答へたのです』

『私、困つちまひましたけれども、小父さんや小母さんの御承諾なしに、準一さんと結婚する考はありませんから、それだけは安心して下さいと申上げたんです』

『それでどうなりました』

『自分達は決してそれを認めないのだから、それではお前は、決して準一とは夫婦にならないと、きつぱり自分の前で云つてくれと仰しやいますから、それなら結婚しませんと申上げて了つたんです。どうせ私は準一さんと結婚

は出來ないものと、諦める氣になつて居ましたから……』

『準一君を諦めて、どうする考だつたのです』

『私、一生獨身で暮すつもりなんでございます』

『はゝア、それで、春枝さんは得心した譯ですか』

『はい。その時はそれで濟んだんですが……』

『準一君は昨日お母さんと、二度衝突して、二度目の時はあなたも居合はせたやうに云つて居ましたが……』

『はい』と三千代は妙に恥かしさうにして、『私、小母さんに準一さんと結婚しないと申上げてから、どうしても、モ一度その事で準一さんに逢はなければならないと思つて居ましたの、また準一さんも私に逢はうとしてらつしやるんですけれども、岸子さんと繁子さんが、私を監視して居ますから、私もどうする事も出來ず、準一さんも私に近づく事が出來なくつて居たんでございます。その中夕方の御飯をいただいてから、私一人がお室へ歸らうとすると、廊下の、電燈が消えて暗い蔭になつて居るところに、誰かが立つて居るらしいんです。私は何となく準一さんがどこかで私を待つて居る氣がして居たので、すぐそれを準一さんだと直覺したんです。そこには幸ひ誰も居なかつたもんですから、準一さんは私を呼びとめて「三千代さん、どんなに逢ひたかつたかも知れない」と仰しやるので、「私も同じ事ですわ」とつい申上げて了ふと、準一さんはいきなり私を引きよせて、熱い接吻をなさるんです』と、顔を染めながら、『それは最初の接吻だつたのです。私達はその刹那に何もかも忘れて居ました。それがわるかつたんです。その途端に、廊下のスキッチを押したものがあるのです。私達の上の電燈がパッと點ると、そこには小母さんが鬼のやうな恐ろしい顔をなすつて、私達を睨めていらつしやるんです。私は冷水でも浴せれたやうに、ぞつとすくんで了ひました』

『はゝア、大變なところを見つかりましたね』

『えゝ、ほんとに大變な事になつちまつたのですわ』

『それでどうなりました』と私は後を促した。

## 九

三千代は私に促されて、

『それは迚もその時のお話は出來ませんけれども……』と、冒頭を置いて、『小母さんが全く鬼のやうな恐い顔をなすつて、私達を見つめていらつしやるんです。もう見られて了つたんですから、どうする事も出來ませんわ。準一さんはその時狼狽も周章もなさらずに、私を却つて強く抱へて、お母さんから保護するやうになさるんです。私も今更もがいて準一さんの抱擁から逃れたところで駄目だと思つたので、ただそのまゝ震へて居たんです。すると小母さんは眞青になつて、「準一、お前達は何といふ恥知らずなのだ、私の前で！……早くその女をお放しなさい！」つて仰しやるんです。でも準一さんは「いゝえ、放しません。私の妻と定めた女を抱擁して、何でそれが恥知らずです」と、仰しやるので、私はあるにもあられないやうな氣で、「あなた、どうぞ放して……」と、さゝやくやうに愬へると、準一さんはやつと私を放して下さいました。それはその時岸子さん達が出て來たからでもあつたのですが、小母さんは「準一、私の室へおいでなさい！」と命令するやうに仰しやつた上、私に向つては「三千代、お前は私の行くまで、自分の室に退つて居るのです」と、恐い眼で仰しやつたまゝ、お室の方へずん〳〵いらつしやるんです。準一さんは勇

敢にお母さんについていらつしやいましたが、それから小母さんと準一さんの間に、どんな爭ひがあつたか、それはまだ少しも存じません。私はどうなる事かと、自分の室で、小さくなつて待つて居ますと、三十分もしてから、小母さんが入つていらつしやいました』

　三千代の物語は、その場の光景を私に想像させるに十分だつた。彼女は言葉を次いで、

『私はその時小母さんが、どんなひどい事を仰しやつたか、迚も口で申上げる事は出來ませんわ。お前は私の前で準一とは決して結婚しないと誓つた口の下から、あの有樣は何といふ事だ、お前は私を欺かうとするのだ、お前のいふ事はもう何一ツ信用する事が出來ないと、初めに仰しやるものですから、私はそのつもりで準一さんにお斷りする考で居たところが、まだその機會がない中に、準一さんと廊下で行逢ふと、突然準一さんが私を抱擁なさつたので、あんな破目になつて了つたのだと、辯解しましたけれども、そんな事は聞入れも何にもなさらないんです。そしてお前のいふ事はその通り、口先で私を胡麻化さうとばかりして居るのだ、お前が今までした事はみんな分つて居る、お前は長い間準一を誘惑にかゝつて居たのだ、準一を誘惑するために、私に隠れて爪を研いで居たのだ、今度の事はみんなお前の方から仕かけた事だ、準一のやうな世間知らずの、坊ちやん育ちで初心な男は、お前が誘惑するには一番いゝ相手だつたのだ、お前は畜生にも劣つた恩知らずだ、飼犬に手を噛まれたといふのは全くこの事だ、お前が立派な教育を受けて、何不自由なく、人並に育つたのは誰のお蔭だと思ふ、お前はもと〳〵乞食の子も同然なのだ、お前には一文の財産だつてない、お前の父は碌でなしの放浪者で、今度死んだのでも、乞食同樣に死んだに違ひないのだ、この杉浦の家がなかつたら、お前はとうに乞食になつて居たのだ、また今日からでも家で世話をしないとすれば、明日は乞食になる外ないのだ、その乞食同樣の分際で、準一に戀をしかけるとは何といふ身の程知らずだ、それも實のところ、お前は準一に戀をして居るのではなくて、この杉浦の財産に戀をして居るので、この財産が欲しいばかりに、準一に戀をしかけて、世間知らずの初心な伜を、まんまと誘惑して了つたのだ、お前は年にも顏にも似合はない、何といふ恐ろしい女だ、お前は毒婦だ、婬婦だ……』

かう云ひさして三千代は、さも口惜しさうに聲を呑むのである。私は春枝は實にひどい女だと、呆れながら、三千代のこの時の心持に同情して、

『どうも實にひどい女ですね。併しあの女ならその位の事は云ひかねないでせう。が、あゝいふ女だと思つて、氣にかけずに何とでも云はして置けばいゝのですよ』

『ですけれどもいくら何でもあんまりですわ』と、三千代は大きい眼に涙を一杯ためて、『私の事ばかりなら兎も角、お父さんの事まで、碌でなしの放浪者で、乞食同樣に死んだのだなんて……』

『云ひがかりでそんな事を云つたのでせう。併し春枝さんもその中に、あなたのお父さんが決して碌でなしの放浪者でなくて、立派な人格者だつたと知る日が來るでせう』

　三千代は俯いたまゝ、暫く默つて居たが、

『でもお父さんが放浪生活をして居たといふ事は、事實に違ひありませんわね』

『それは或時代には放浪もして居ました。併し放浪して居たといふ事は、人格とは何の關係もない事です』と、私は三千代の父の事については、なるべく深入することを避けて、それだけを答へた。

三千代は多分父のことはあきらめて居るらしく、このまゝ深入して尋ねようとはせずに、すぐ話を前に戻した。

『それから小父さん、小母さんはまだ〳〵ひどい事を仰しやるのです。お前がこの上準一をどんなに誘惑しようとしても駄目だ、準一は立派に親が保護して見せる、お前のやうな恩知らず、義理知らずはもう杉浦の家に置く事は出來ないから、いづれ松の内でも濟めば、きつとお前の處分をつける、もう養つては置けないから、乞食にでも何にでもなつて落ちぶれて了ふがいゝ、全體お前などは海へ身でも投げて、鱶の餌食になつて了ふ方がましなのだ、恥を知るならこちらから追出されない中、早く自分で始末をつけて了ふがいゝ――小父さん、小母さんはそんなひどい事を仰しやつて、私の申上げようとする事などは、ちつともお聞きにならずに、出て行つてお了ひになつたのです』

三千代は身を震はして、さも悔しさうに涙を流すのである。私も流石に憤慨しながら、

『あなたに死んで了へとまで云つたんですか。いふ事に事を缺いて、實に呆れた女だ。……そんなに云はれたので、あなたは身を投げようとしたのですか』

『はい、私は頭がもう逆上せて了ひましたし、悔しさと悲しさでたゞ胸が一杯でしたから……私は小母さんが出ていらつしつた後で、暫くお室に泣倒れて居ましたが、小母さんはきつと私を追出して了ふに違ひないと思ふと、急に悲しくなつて、明日から活きて行く道を知らない私は、やつぱり小母さんのいふ通り、死んで了ふ方がいゝのだ、それが小母さんに對する復讐でもあると思つたもんですから、もう一途にその氣になつて了つて、只一言準一さんに書殘したものをお室へ置いた上、丁度その刻限にはカルタが始まつて居て、誰も私を監視して居ないのを幸ひ、そつと拔出して海岸へ行つたんでございますの。もうあの時十分小父さんが後れていらつしやつたなら、私はきつと身を投げて居たに違ひありませんわ』

『いや、實に危いところでしたね。併しあなたが一途に身を投げようとなすつたのも、お話を伺つて見ると、滿更無理もありませんね。あなたでなくともさうした場合、前後を忘れて不覺の衝動に驅られて了ふでせう。そこへ私が來合はせたといふのは、何度もいふやうですが、やつぱりお父さんの引合はせなんです。併しこれであなたの試練は濟んだのです』

『はい、もう死ぬやうな氣は決して起しません。……でもね、小父さん、小母さんは私を處分すると仰しやるのですから、きつとその通りになさると思ひますわ。それより先に私が出て了へば、三方四方圓滿に納まるでせう、ですからどうぞね、私を亞米利加へ連れて行つて下すつて――』

『併しそれは今もいふ通り最後の問題です。私はきつとあなた方の滿足するやうに解決して見せます。安心していらつしやい』

三千代は私の安請合を信じかねる樣子で、

『でも私、どうしても圓滿に解決されようとは思はれませんわ。その時にはきつと亞米利加へ連れてつて下さるでせうね』

『その場合にはきつと連れてつてあげます』

『それなら私、こんな嬉しい事はございませんわ』

『併し三千代さん、あなたは何も準一さんを斷念するには及ばないのです。あなた方二人はそれほど眞劍に愛し合つて居る以上、私はあなた方をきつと握手させてあげますから、それも私を信じていらつしやい』

『あら、小父さん、それはもう私、ちやんとあきらめて居る事なんですから……』

「あきらめるには及ばないことですよ。圓滿に準一さんと結婚が出來たら、それが何よりあなたの幸福なのでせう」

「でも小父さん、私が折角あきらめて了つたばかしのところへ、そんなこと仰しやつていたゞいては、ほんとに困つちまひますわ」

娘が羞を帶んで當惑して居る姿を見ると、私にはたまらないほど三千代が可憐に思はれるのだつた。

「何もそんなに困らずともいゝですよ。私は呪符を持つて來て居るのです」と、私は笑つて云つた。

三千代は半信半疑で私を見たものの、いつも私がそんな謎の言葉を用ゐる時に、それが深い自信の發露であるらしい樣子を、次第に見て取つたらしく、私に縋らうとする心の深められて行く樣子は爭へなかつた。

「小父さん、それはほんたうですの」

「ほんたうですとも、私はあなたに後で失望を與へるやうな、輕率な事は決して云ひません。だから小母さんにどんなに脅されても、準一さんを斷念するなどと、そんな事は云はずに、たゞ曖昧に言葉を濁して居ればいゝのです。私はきつとあなたと準一さんを救ひます。丁度瀧岸であなたを救つたやうに。……私はたゞ機會を待つて居るのです」

「もしそんな事になつたら、私、どんなに小父さんに感謝していゝか分りませんわ」

「きつとさうなるのです。……併し三千代さん、隨分長話になりました。小母さんに何とか思はれてもいけません。あなたはもう室へお歸りなさい。室へ歸つても決して心配するのではありませんよ。大船に乘つた氣でいらつしやい」

「はい」と、三千代は嬉しさうに答へて、座を立つた。

## 一〇

その日の午後杉浦は外出し、私も一緒に出る筈だつたが、少し疲れても居たし、頭も重いやうな氣がしたので家に殘り、暖かなサンルームへ來て休息を取つた。あまり日が射すので、壁際へ搖椅子を引きつけて、それに身を橫たへ、所在なさに煙草をくゆらしながら、準一と三千代を手際よく救ひ出さうとする自分のトリックを考へて居た。このサンルームはホールの方からと、杉浦の書齋から入れるやうになつて居て、私は杉浦の室の扉の傍の方の位置に、椅子を置いて居たのだ。

私が春枝の鼻をあかす最後の光景を思ひ浮べて、獨り笑壺に入つて居る時、突然書齋の扉の開く音がして春枝の聲が聞えるのである。サンルームに面した書齋の行違ひ玻璃戸が、少しあいて居たので、聲はそこからよく聞えて來るのであつた。

「こゝなら誰も來ません、主人が先刻瀧口さんと出かけましたから、誰も居ないのです」

春枝の前で杉浦と一緒に出る約束をしたので私も居ないものと思ひ込んで居ると知つて、私は身動きも出來なくなつた。丁度壁に隱れて、書齋からは私の姿は見えないのである。煙草の煙や臭ひが春枝の注意を惹いてはならぬと思つたので、急ぎ煙草を消して了つたが、それにしても春枝が連れて來たのは誰だらうと、私は半分好奇心をそゝられて、耳を欹てた。

「さア、おかけなさい」と、椅子を與へたらしく、「ね、浪江さん、何にも泣く事はありません。準一はどんな場合にも、決してあなた以外の女とは結婚させませんから……」

私はすぐそれが昨夜の、例の斷髮洋裝の高田の娘である事を知つた。

「ですけれども準一さんは、私を愛していらつしやいません。準一さんは三千代さんを愛

していらつしやるんです。私、今日といふ今日はハッキリそれが分りました」と、娘は泣聲でいふのである。

私は歪んだ破目になつて了つたと思つたけれども、今更立去る事も出來なくなつたので、すつかり聞いてやれと腹を極めて了つた。なだめるやうな、また機嫌を取るやうな春枝の聲が聞える。

『そんな事はありません。それは三千代がたゞ準一を誘惑して居るだけです。今までだつて準一は少しもあなたを嫌つては居ないのですもの……』

『でも私を妹のやうに愛する事は出來るが、それ以上に私を愛する事は出來ないと仰しやいました』と、娘は小さくすゝり上げるらしかつた。

『私はどんな事をしても、あなたを準一の妻にして見せます。準一も自分の口から、あなたを妹のやうに愛するといふ位ですから、あなたを嫌つて居ない事は、それだけでもたしかでせう。ですからそこに三千代といふものが居て、誘惑しなかつたら、一も二もなくあなたと結婚するのです』

『三千代さんはあんなに美しい方ですもの、私などは迚も比べものにはなりませんわ。三千代さんがいらつしやる限り、私なんか……』

『三千代が美しいつて何です。私はあの娘の顏を見ても、胸がわるくなります。三千代のやうな美しさは、ちつとも現代式の美しさではありません。今の若い方は三千代のやうなものより、あなたを擇ぶに極つてます。それに三千代は身分が違つた、私の家の厄介もので、私の家がなかつたら、とうに女工か、女給にでも落ちぶれて居る貧乏人の娘なのです。そんなものを準一の妻にする事がどうして出來ます。よしんばまたあの娘にどんな財産がころがり込んで來るやうな事があつても、私の見るも厭なあの娘を、杉浦の嫁とすることは出來ません。私はどんな場合でも、三千代を準一の妻にしないのですから、これほど確かな事はないでせう。結局準一は眼を覺して、あなたを妻にするより外なくなるに極つてます』

『小母さんがそのお心でいらつしやつても、準一さんが――』

『浪江さん』と、春枝はそれを遮るやうにして、『私は顏を見るさへいやな三千代を、死んでも準一の妻にはしないのです。準一は孝行ものですから、私が死ぬと云へば假令どんなに三千代を思つて居たところで、あきらめてくれるに違ひありません。私を信じて下さい。ね、浪江さん、私は死んでも三千代を嫁にはしないのですよ』と、春枝は當座の口實だけではなく、心からさう決心して居るに違ひない樣子を、その語氣に見せて繰返しいふのであつた。

『私、それなら安心ですけれども……併し三千代さんがいらつしやる限り、何だか、やつぱり……』

『浪江さん、それからモ一ツあなたを安心さしてあげませう。私はもう三千代を永遠に、準一から遠ざけて了ふ覺悟を極めて居るのです』

『え？ 小母さん、それはどうしてですの？』

『三千代をどうかして了はなければとは、前から考へて居た事ですけれども、家のない兒なので、つい不憫をかけて、いつまでも私の手許に置いてやつたのが手落なのです。私がも少し氣强くさへなつて居たら、飼犬に手を噛まれるやうな事はなくても濟んだのです。ほんとにあんな恩も知らず義理も知らぬ娘といふのはありません。蟲も殺さぬやうな顏をして居ながら、小兒の時から、私に反抗ばかりして居たのですからね、私の生の子と同樣に、面倒を見てやつて居るのに、どこまでも繼兒氣質で、片意地

で、つむじ曲りで、ひがみ根性と云つたらないのです。岸子や繁子同樣、藝事でも何でも習はせて居るのに、難有いとも思はず、私に禮一ツ云つた事もないのですものね。若い娘には恐ろしいほど惡智慧があつて、準一を誘惑したのだつても、みんなこの家の財産に目をかけての事なんです。それを準一は少しも氣がつかないで居るのですから、私はほんとに齒痒くつてならないのです』

『だつて小母さん、三千代さんてそんな方？』と、高田の娘の案外無邪氣さうな驚きの聲がきこえる。

『えゝ〳〵、さうですとも、私は主人の血統の繋がつて居るものの娘と思へばこそ、今まで我慢に我慢をして居たのですが、もう迚も辛抱が出來なくなりました。もう一刻でもあの娘と一緒に居るのはいやです。それで今度はいよ〳〵三千代を、私達の世界と違つた、遠いところへやつて了ふ事にきめたのです』

『遠いところと仰しやつてどこへですの？』

『たゞ家から追出して了つたばかりでは、どこからでもまた準一を誘惑にかゝるでせう。却つてそれをいゝ事にしないとも限らないのですからね、もう準一の手の屆かないところへやつて了ふのです』

『準一さんの手の屆かないところと仰しやつて？』

『亞米利加ですよ』

『あら、亞米利加！』と、娘が頓狂聲を出して驚いたよりも、私はなほ驚いて目を丸くしたのである。

耳を澄して居ると、

『浪江さん、昨夜カルタの席へ主人に連れられて入つて來た方があるでせう。瀧口さんと仰しやるんですが、主人や三千代の父と、昔から仲のよいお友達なのです。それで今度も日本へ歸つてらつしやる序に、三千代の父の記念をあの娘に持つて來たのですが、あちらでは立派に成功していらつしやる方なんです。三千代の父とは兄弟同樣にして居た人なのですから、三千代を引取つて世話をしてくれと云へば、決していやとは云へない人なのです。却つて喜んで連れて歸るに違ひないのですよ。それで私は瀧口さんに、あの娘を賴んで了ふ事に肚をきめて居るのです』

そんな事だらうと私は思つた。なるほど巧い事を考へついたものだと、私は三嘆せずには居られなかつた。一ツの石で二ツの鳥を打つといふのは全くこの事だ。三千代を準一から遠ざけて了ふだけではなく、これからの食扶持を遁れる事も出來る。それにしても、春枝と三千代が、それ〳〵目的は違ひながらも、同時に同じ事を考へついて居たといふ事は、何たる奇異の契合であらうと私は驚いた。

と、浪江の初めて晴やかに、引立つやうな聲が聞える。

『小母さん、ほんとにさうして下さいますの？』

『さうしますとも、主人だつて異存の云へた義理ではないのですもの、どこからも苦情の出る筈はありません。きつと實行して見せますから、大船に乘つた氣でいらつしやいよ』

私はひとりでほくそ笑んだ。私が三千代を慰めた通りの言葉を春枝も使つて居るのだ。併し同じ大船でもそれが土船である事を、程なく知るに違ひない浪江は、可哀想な女だとも思へた。

『えゝ、私、それならどんなに嬉しいでせう』と、彼女はにつこり笑つたらしく、『でも瀧口さんて方、三千代さんを連れてつて下さるでせうか』

『大丈夫よ。瀧口さんはお人好なんですから、私に賴むと云はれゝば、厭とは云はれない人な

のよ』
　私は開いた口が塞がらなかつた。自分がお人好扱ひをされたのは今度が初めてらしい。よし、それなら春枝はお人好がどんなものかを今に知るだらう。
『ですからもう涙は禁物です』と、春枝の聲がつゞいて、『さア、これから機嫌よく、岸子や繁子とお遊びなさい』
　二人の立上る氣配がしたので、私はひよつとこのサンルームに出られてはと驚いて、急ぎ狸寢入を始めた。併し幸ひに二人はサンルームへは出ずに、元の扉から出て行つて了つたので、初めてほつとした。
　十分ほど後に、誰にも氣づかれないのを見濟し、私はサンルームを去つて庭へ出た上、自分の室へ歸つて來た。

## 二

　それから一時間ほどすると、室にノックの音がするので、應と答へると、入つて來たのは意外にも女中でなくて、春枝だつたので、來たなと思ひながら、何氣なく立上つて迎へると、
『瀧口さん、私はあなたが主人と一緒にお出かけになつた事とばかり思つて居たのですが、あなたはお出かけにならなかつたのだと、女中が申すものですから、それでお訪ねして見たのでございます。あの、たゞ今お差支はございませんですか』
『いゝえ、少しも……。さア、どうぞ』と、春枝を招じ入れて、『實は御主人と一緒に出かける筈で居ましたが、少し疲れても居ましたので、今日は一日休息してやれと、御免を被つた次第です』
『さうでしたか、昨夜はお床が變つて、お寢みにくうございましたらうから……』
『いや、それはよく寢めたのです。却つてあまりよく寛げたので、亞米利加からの旅の疲れが、一時に出て了つたのかも知れないのです』と、笑つて、『併し大變にお住ひ心地のいゝ結構なお宅でございますね』
『お氣に召しましたら、どうぞいつまでも御緩り御滯在遊ばしまして。亞米利加のやうなところにお住ひなれになつては、何かと不十分な設備で、嘸御不自由がちだらうとは存じますけれども……』
『どういたしまして、われ〳〵の住宅は亞米利加住ひといふ名ばかりで、殊に勞働者なのですから、全く原始的生活に近いやうな有樣で暮して居るのです。こんな立派な、便利に出來て居る住宅といふものは、なか〳〵亞米利加にだつて、ざらにあるものではありません』
　お世辭を云はれて、春枝は滿足さうに、
『どんな事でございますか、便利で愉快に暮せるやうにと、そのための設備には隨分苦心したつもりなのですけれども、なか〳〵思ふやうにまゐりませんで……』と、調子に乘出したが、肝腎の用向があるのだと思ひ返したらしく、『いづれ勝手元の方から、いろ〳〵の設備を見て頂いた上、御批評を願ひたいと存じますが、それは後の事としまして、あの、今朝ほどは三千代にお逢ひ下すつたさうでございますね』
『はい、父親の記念も渡した上、臨終の模樣などを、詳細にお聞かせしました』
『さうでしたか、三千代を御覽遊ばしてどう思召します。美しい娘になりましてございませう』と、なか〳〵如才がない。
『大變美しい、いゝ娘になつて居るには驚きました。私に取つてもこの上もない滿足です』と、明らさまに春枝の言葉を利用して、賞めてかゝつた。
『ほんとに美しい娘でございます。岸子や繁子などは迚も叶ひません』と、いくらか厭味も

交へながら厭な顔もせずに云つた。

『いや、三千代さんをあれだけになさつたあなたのお丹誠は大抵ではなかつたらうと、死んだ女のために感謝に堪へません』と、私も大いに皮肉つたつもりで云つた。

『それは並大抵ではありませんでしたわ。お察し下さいまし。それにあなたの前ですけれど、あの娘はどこか片意地なところがあつて、こちらでは生の娘達と、少しも分隔てをせずに育ててやつて居るのに、ちつとも私には親しみを見せてくれないのです。併しそんな内輪話をあなたの前で申上げるには及びませんが、たゞあの娘の事について、差當り當惑しきつて居る問題が起つて居るのでございます。主人から筋道だけはお聞きになつていらつしやる事かとも存じますが……』

『はア、それは準一さんの結婚問題に關聯した事ですか』

『さうでございますよ。實は準一には親々の間で約束を纏めて了つた娘があるのでございます。昨夜も來て居りましたし、今日も來て居りますから、御目に留つた事かとも存じますが、高田と申す大阪で立派な資產家の娘で、準一には丁度似合の全く云分のない緣談なのでございますよ。準一とも仲のよい間柄なので、またその事は準一もうす〳〵承知の筈で、異存のない事が分つて居たものですから、それで親々の間に話を進めて了つた譯ですが、このごろになつて、準一には魔がさして了ひまして、俄かに三千代でなければ結婚しないと云出したのでございます。それもこれもみんな三千代から仕向けた事だとは分つてますが、そんな事をされては、高田の親に申譯がなくなるばかりか、主人の信用も全く落ちて了ひます。それで杉浦家の浮沈みにもかゝはるやうな大事になるものですから、私達は假令どんな事があらうとも、三千代を準一の妻にする事は出來ないのでございます。それだのに準一は全く三千代に心を奪はれて了つて、この家を出ても、三千代と結婚するなどと云張つて居ります。また私共にしましても、三千代と一緒にさせる位なら、準一を廢嫡して了はなければならないのです。そんな事にでもなると、杉浦の家は滅茶々々になりますから、どうかそれをあなたに救つていたゞきたいと思ふのでございますが……』

『はゝア、さうですか。併し準一さんがそれほど三千代さんを愛して居られるなら、もともとこれは準一さん本位の問題だと思ふのですから、いつそ二人を結婚さしてあげたらどんなものですか。高田さんとやらの方は、まだ〳〵どんなにでも話の仕様があるでせう。子のために親が犧牲になるといふ事は有り勝の事ですが、子を親の犧牲にするといふ事は、時代錯誤でもあるやうに思はれますからね』

春枝はむつとした樣子だつたが、こゝは腹を立てるところではないと、辛抱したらしく、

『この場合そんな事を仰しやられては困りますわ。全く私達の立場は無くなつて了ふのですもの、それに瀧口さん、考へても御覽下さい。一方は百萬長者の娘ですのに、三千代と云つたら乞食同樣の娘ではありませんか。假にも杉浦の嫁に乞食の娘を入れるといふ事は出來ませんのですからねえ』と、彼女は平氣で現金主義をさらけ出すのであつた。

『さうすると三千代さんは財產がないから、準一さんの嫁に出來ぬと仰しやるのですな』

『いえ、なに、さういふ譯ではありませんけれども』と、流石に氣が咎めるか、云直して、『兎に角三千代と私とは性が合ひませんから、私の居る限り、準一の嫁にする事は出來ないのでございます』

『なるほど、性が合はぬと仰しやると、妥協の餘地はありませんからな。そして私に救つてくれと仰しやるのは？』
『それでございますが、なにしろ準一が夢中になつて居りますので、あれの目を覺させるには、三千代をあれの力の及ばないところへ遠ざけて了ふ外ないと思ふのでございます。それで是非あなたにお願ひして、御迷惑でせうけれども、三千代を亞米利加へ連れて行つて頂きたいと存じますので……それも決して長い間とは申しません。準一の身が極りさへすれば、すぐまたこちらへ引取りましてよろしいのでございますから……』と、如何にも無造作に隣りへでも連れてつて貰ふらしく云ふのである。
『どうもそれは思ひがけない御依頼ですな』と、私は驚きの表情をして見せて、『これは一寸即答に苦しみますが……』
春枝は私の顏色を見た上で
『尤も旅費やら、旅行免狀の手續やら、そんなものはみんなこちらで致します。格別御迷惑はおかけしないつもりでございますから……』
これほど迷惑な事はあるまい、蟲のいゝにも程があると云返してやりたいのを怺へて、
『そんなものは何も問題ではありませんよ。三千代さんを連れて歸る位、何でもない事ですが、併し奥さん、これはお斷りしませう』と、私はわざときつぱり云放つた。
『おや、なぜでございますの？』と、春枝の顏色が變つた。そんな筈ではなかつたがと、慌てた色さへ見えるのである。
『私は準一さんと三千代さんを結婚させてあげるのが、一番いゝ事ぢやアないかと思つて居るのです。そこで私は二人の味方をするためにお斷りするのです。あなたの御相談に乘つて、三千代さんを遠ざける――そんな事は自分からしたくないのです。併し奥さん』と、言葉を改めて、意味ありげに微笑しながら、『あなたが勝手に三千代さんを放逐なさるやうな事でもあれば、その時は別問題ですよ。その場合には快く三千代さんを拾つて、亞米利加へ連れて歸ります』
私の言葉を謎と思つたのだらう、春枝は暫く考へて居たが、
『それでは私が三千代を放逐すれば、あなたは亞米利加へ連れて歸つて下さると仰しやるのでございますね』
『それは好んで願ふ事ではありませんが、萬一さういふ事にでもなればといふのです。さうです、その時は止むを得ません。三千代さんはきつとお貰ひして歸ります』
『ほんとにさうして下さいますか』
『その代りあなたにも決して苦情を云はせませんがいゝですか。それを改めて念を押して置きます』
『そんな事は御念には及びませんわ。いつ三千代を亞米利加へお連れになつても、お禮こそ申せ、決して苦情などは申上げません』
春枝はわが事なれりといふやうな晴やかな顏をするのであつた。

## 一二

その日は實にいろ〳〵の事の起る日だつた。それは最後のカタストローフに導くに相應しい前景の連續であつた。午後私は亞米利加から持つて來た書類の整理をして居るところへ、ノックの音がするので、應と答へると、入つて來たのは準一だつた。何か興奮したやうな樣子をして居るので、何事かあつたのかと思ひながら席を與へると、
『お邪魔ではないでせうか』
『いゝえ、少しも……』と、準一の顏を注視しながら、『どうしました？』

『少々伺ひたい事があるんですが……』と、躊躇して居るので、

『はア、どんな事です』

『突然ですが、あなたは三千代さんを亞米利加へ連れていらつしやるお約束を母になすつたんでせうか。どうか包まず仰しやつて頂きたいんです』

私は信枝が自分の口から、それを漏したのだらうかと、驚きながら、

『お母さんが君にその話をしたのですか』

『いゝえ、さうぢやアありませんが……併しそれはやはり事實なのですか』と、準一の顏色は變つた。

『フム、お母さんでないとすると、そんな事が君の耳に入る筈はないと思ひますが、それでは三千代さんから、何か聞いたのですね』

『いゝえ、三千代さんには、あれからまだ逢ひません。母が逢はせないやうにして居ますし、三千代さんも、私を避けて居るやうですから、強いて逢はうともしないで居るのです。また僕『三千代さんが、そんな事を知つて居る筈はないと思ひます』

『お母さんからも聞かず、三千代さんにも逢はないとすると、どうしてさういふ事が耳に入つたのです』

『それは妹が口を滑らしたのです。妹を責めて見ても、何にも云はないのですが、妹はきつと母から聞いたに違ひないのです。私は非常に心配です。全くそんなお約束を母になすつたのでせうか』

準一の心配に滿ちた樣子を見ると、流石に氣の毒になつて、

『何もそんな事は心配せんでもいゝです。私が三千代さんを亞米利加へ連れて行くといふやうな事は、實際上不可能の問題です。私はあなたのお母さんに、そんな約束などはして居ませんよ』

さう云はれて、準一はほつとしたやうに、溜息一ツ吐いて、

『さうですか。それで安心しました。……併し母からさういふ話を持出したといふ事は、有り得べき事のやうに思はれますが……』

『實はね、準一さん、君からその話が出たから話すのですが、お母さんから話のあつたことだけは事實です』

『さうですか。そしてそれはお斷りに下すつたのですか』

『勿論ですよ』と、笑つて、『お母さんはその時から云つて居ました。――君と僕の高田の娘とはもと／＼好き合つて居る中で、決して異存のある筈がないと見たので、親々の方で話を進めて了つたのだが、準一もうす／＼それを承知の筈なのに、このごろになつて、俄かに不承知を唱へ出したのは、全く三千代といふ魔がさしたためで、もし高田の娘と結婚せずに、三千代とそのやうな事にでもなれば、もう世間にも披露して了つてあるやうなものだし、高田に對してばかりでなく、世間に對しても、杉浦家の信用が地に墜ちて了ふ、全く杉浦家は立行かれなくもなるほどの大問題だから、萬一準一がどうしても三千代と結婚するといふなら、準一を廢嫡して、杉浦家の面目を立てる外途がない、そんな事になれば杉浦家の破滅なのだ、で、さういふ急場を救つて貰つて、準一に斷然三千代を斷念めさせるには、三千代を準一の手の屆かぬところへ遠ざける外はないが、それにはあなたが三千代のために、はる／＼亞米利加から來た位だから、いつそ今度歸る時に三千代を連れて歸つて貰ひたい、旅費や旅券の調達はみんなこちらでして、迷惑はかけないからといふ、大分蟲のいゝ話なのです。それで私はお母さんに向つて、飛んでもない御相談だ、私は準一さ

んと三千代さんの二人が、それほど深く愛し合つて居るといふなら、二人を結婚させるのが、最善の道だと考へて居る、私は二人の味方なのだから、その御相談に乘る事が出來ないと、きつぱりお斷りした次第なのです』

準一は私の說明を聞くと、感激の淚をさへ浮べて、

『さうでしたか。よくさう仰しやつて下さいました。僕もあなたが三千代さんを僕から奪つて亞米利加へお連れ歸りになる筈はないと思ひました。それで母はどうしました？』

『私は少し外交上の手段を弄したのです。お母さんに向つて、併し私はあなたの御相談には乘れないが、萬一あなたが三千代さんを放逐なさるやうな事でもあれば、その場合には止むを得ぬから、快く三千代さんの身體を拾つて亞米利加へ歸らうと申上げたのです』

準一の顏はまた曇つて、

『それでは母はきつと三千代さんを放逐します。その位の事はやりかねない母です』

『大丈夫です。お母さんは三千代さんを放逐し得ない理由があります』と、私が意味ありげにいふと、

『どういふ理由ですか。そんな筈はないと思ひますが……』

『それはあるのです。私はその鍵を持つて來て居るのです。今說明は出來かねるが、その點は私を信じていらつしやい』

『さうですか。それならお信じしますが……』と、不安さうに云つて、『それではあなたが三千代さんを亞米利加へお連れになるといふやうな事は、決してないと仰しやるんでございますね』

『まづありません。併し假に私が三千代さんを亞米利加へ連れて行つたとしたら、君はそれで三千代さんを斷念出來ますか』

『斷念は出來ません。僕は三千代さんの後を追つて、亞米利加へ行くでせう』と、決心の色を見せるのだつた。

『君がその決心を持つて居るならば、三千代さんが亞米利加へ行くといふ事も、大して問題ではないでせう。新天地は却つて君達を待設けて居るかも知れません』

『さうです。私は三千代さんが亞米利加へ行くといふ事になれば、その覺悟をします』

『まア、そんな事にもなりますまいよ。ところで準一さん、君は昨夜以來まだ三千代さんに逢はんのなら、三千代さんからは何も聞く筈はありませんが、また三千代さんがあなたに打明けるだらうとも思はない事ですが、實はお母さんから、三千代さんを連れ歸つてくれとのお話があつた前に、三千代さん自身が私に向つて、亞米利加へ連れて行つてくれと、申出でて居るのです』

準一はアッと驚いて、

『そんなことがあるのですか』

私は首肯いて、

『三千代さんは昨夜中に、その覺悟を極めて居たのです』

『さうですか』と、準一は吐息と共に、『それなら母の壓迫に堪へられない爲です』

『勿論それに違ひない事です。併し君に取つてはまだ〳〵驚くべき事件があります』

『それはどういふ事件ですか』と、準一は不安と懸念の眉をよせるのである。

『それは三千代さんが昨夜危く身を投げるところだつたのです。

準一は自分の耳を信じ得ないほどに驚いて、

『三千代さんが投身を？ そんな事が有り得るでせうか。それとも投身の決心をした事を、あの人があなたに打明けたのでせうか』

『たゞ決心を打明けたといふやうな、そんな生

ぬるい事ではないのです』

『えッ？』

『危く舞子の濱へ身を投げようとする刹那に、私が助けてあげたのです』

準一は眼を丸くしたが、それでもなほ信じ得ぬ樣子で、

『それはいつの事なのです、昨夜カルタの客が皆歸つてから後の事ですか。私にはどうも合點が參りませんが……』

『いや、まだ宵の口です』と、私は準一のじれるのを承知で云つた。

『宵の口？　宵の口と云へば、あなたがお着きになつたところではありませんか』

『さうです。丁度その刻限です』

『僕には何だか信じられない氣がしますが……』

と、準一はせき込んで來た。

『お聞きなさい。君にも君の御兩親にも、私は今朝初めて三千代さんに紹介されて逢つた事になつて居ますが、實は昨夜私がこちらへ來る前に、三千代さんに逢つて居るので、こちらへは三千代さんに案内して貰つて來たのですよ』と、準一の驚き顏に、さもこそと頷きながら、『とばかりでは合點が行きますまいが、私が昨夜こちらへ着く時、垂水で降りずに、氣まぐれに舞子で降りて了つたのです。それは別に意味のある事でもなく、たゞ舞子の月の景色に心を惹かれて、降りて見たまでなのですが、二十年前の思出に浸りながら、松原の間を歩いて居る中、ふと女のすゝり泣く聲を聞きつけたのです。どうも怪しいと思つて注意して見ると、若い女の影が海岸を目指して進んで行くので、もしもの事があつてはと、そッと後をつけて行つて見たのです。さうすると果して、その女が海岸から身を投げようとするところなので、急いで引止めたのが、三千代さんだつたのです』

私の物語の中に、準一は次第に興奮の極みに達した樣子で、聲を震はせながら、

『さうですか、そんなことがあつたのですか。それではその時あなたのおいでがなければ、三千代さんを殺して了ふところでした。それだのに、あゝ、僕は何にも知らずに居ました。面白さうにカルタの相手をさへして居ました。あゝ、濟まない！　三千代さんに濟まない事をした！……』

『私はその時、三千代さんの口から、あなた方の家庭の輪郭を、略知る事が出來たのです』

『實に何ともお恥かしい次第で……』

『尤も三千代さんから、詳しい説明は、今朝改めてお逢ひするまでは聞かなかつたのです。今朝の三千代さんの、腹藏のない説明によつて、昨夜君のお母さんから、實にひどいことを云はれた上、お前のやうなものは身でも投げて死んで了つた方がいゝのだと云はれて、取りのぼせた娘心から、ふとその氣になつて了つたのです。自分が死んで了へば、全く恩を受けた杉浦一家の平和も得られる譯だと、覺悟を極めて、君にだけ書置を殘した上、そつと家をぬけ出して死にに行く途中、幸ひに私に救はれた次第なのです』

『さうですか』と、深い溜息と共に、『母がそんなひどい事を云つたのですか。私でさへ堪へられない事があるのですから、三千代さんが一途に死を決したといふ事も、決して無理とは思はれません。それを知らずに居た僕は、全く三千代さんに申譯のない事をしました』

『準一さん、さういふ譯でね、三千代さんは今朝私に逢ふと、死ぬ事は斷然思ひ止まつたけれども、その代り亞米利加へ連れて歸つて貰ひたい、それが杉浦家の平和のためで、君もあきらめてくれるだらうからといふのです。それは隨分深い決心をして居るらしいので、私も三千代さんに向つて、それはいよ／＼の時には、き

つと連れて歸つてあげる、併しそれまでに圓滿な解決の途がつくと思ふから、すべては私に任して安心して居るがいゝと、納得させてあるのです』

『さうですか。私は何もかも一切知らずに居たのです。あなたには全く感謝の言葉もございません。この上ともに、どうか僕達のために御盡力を願ひます』

『私も乘りかゝつた船です。きつと圓滿な解決をつけてあげるつもりで居ます』

『併し母が母ですから、私は圓滿な解決は到底……』

『圓滿な解決が出來なければ、出來ないでいゝでせう。その時には三千代さんを預つて歸るまでで、三千代さんは君以外のものと結婚する考は持つて居ないやうですから、君の決心さへ固ければ、三千代さんを君にお渡しする日は、いづれ來るのです』

『僕は亞米利加へでも、どこへでも行きます。そのためには鐵のやうな決心を持つて居ます。三千代さんが僕のために死を決したとするなら僕だつてどんな決心でもします。……併し僕は急に不安に襲はれ出しました。母はこの間にまた何か、三千代さんに對して、一層殘酷な手段を弄しないとも限りません。三千代さんがそのために、再び無分別を起すといふやうな事はないでせうか。何だか心配です。僕はぢッとしては居られないやうな氣がします』

『それは大丈夫です。三千代さんはもうお母さんのどんな迫害にも堪へられるまで、心の平和を得て居る筈です。三千代さんの身邊には何の心配もいりません。君はこの際事件に火をつけるやうな輕擧はせんがいゝです。お母さんの監視を掠めて、强ひて三千代さんに逢ふといふやうな事は、却つて惡い結果を來します。三千代さんはいつでも君のものですから、たゞ靜かに時機をお待ちなさい。それだけを私は忠告して置きます』

『いや、難有う……自分から火をつけるやうな輕擧は必らず愼しみます。併し……』と、彼は躊躇した。

『何です』

『僕はあなたのお話を伺つて、一刻も三千代さんに逢はずに居られないやうな氣がします。僕のために身を投げるところだつたと知つて、そのまゝ知らない顏をして居るのは苦痛です。逢つてはいけないでせうか』

『無理をして逢ふ事はいけません。それは事を構へるやうなものです。私が機會を作つてあげるまでお待ちなさい』

『さうですか。……では機會を待ちませう』と、元氣なく答へたが、私は準一が迚も三千代に逢はずには居られないほど逸つて居る氣持に同情すると、次足して云つた。

『明日は私が巧く機會を作つてあげませう』

『ではどうぞ……』と、滿足らしく云つたが、それで彼の逸つた心が、果して納得したかどうかは疑問だつた。

## 一三

事件は急轉直下した。

その日の夕近く、私は歸つて來た杉浦と共に、喫煙室でいろ〳〵の親密な、心置ない友達同士の物語をして居たが、この談話の間に私の知り得た事は、トン〳〵拍子で、成功して居た杉浦が、近ごろ財界の不況のために、意外な傷手を受けて居て、そのため從前通りの門戸を構へて行くには、なか〳〵困難な內情の下にあるのだといふ事だつた。それは杉浦自身に取つて、無論苦痛の種には相違なかつたが、それよりも虛榮一點張の妻の春枝が、どれほどそれを氣に病み出したかは、容易に推測し得る事だ

つた。春枝が巨萬の富を擁して居るといふ高田家の娘を、是非とも準一に押しつけようとする魂膽も、大方それで讀む事が出來たのである。

杉浦の僞りのない打明話をして居る時、慌しく三千代思ひの女中が入つて來て、

『旦那樣、一寸三千代お孃樣のお室へいらつしつてあげていたゞきます。今奧樣がお越しになつたものですから、大變にお腹立になつて……』

杉浦はいつものことかといふやうに眉をよせて、

『三千代の室へ春枝が出かけて、何か小言を云つて居るといふのか。それだけか』

『いえ、あの若旦那樣がお孃樣のお室へいらつしつたところへ、奧樣がお越しになつたものですから……』

私の忠告に拘はらず、若氣な準一はとう／＼堪へ切れなくて、三千代に逢はうとしたのだらうと、私はすぐ察しながら杉浦に向つて、

『君、行つてやつたらよからう、何なら僕も一緒に行く』

『君も來てくれるか。それなら大助かりだ、是非一緒に行つて貰はう。あれで實に困るのだ』

いよ／＼クライシスが來たのだなと、私は心に首肯きながら、杉浦について二階に昇つて行つた。三千代の室は廊下の突當りの一方にあつて、その丁度眞向ひと、筋向ひの二室が、娘達二人の室になつて居るので、三千代の室の動靜は、二人の娘には最もよく分り、從つて三千代を監視するためには、二人の室は最も適切な位置に置かれてあると云つてよかつた。この姉妹の室の前を通過して、三千代の室に尋ねて行つた準一は、全く無謀な事をしたに違ひないけれども、彼の心持は最早二人の妹の監視を問題にして居られぬほど、せつぱ詰つた狀態にあつたのだらう。私達の上つて行つた時、二人の娘の室の扉は、いづれも開いて居たばかりか、三千代の室の扉も、開放されて居る前に、岸子や繁子の外に、例の高田の娘浪江まで雜つて、中の樣子を覗いて居たのである。が、今上つて來た杉浦と私の姿を見ると、娘達も流石に恥を感じたのだらう、隱れるやうに、三千代の室のすぐ前の、岸子の室へ姿を潛めて了つた。それで大方の樣子は讀めたのであるが、思ひあまつた準一が大膽にも三千代の室へ出かけて行つた姿を、妹達が容易く發見したところから、すぐさま母親に密告したものらしく、そこで春枝が取るものも取りあへず、驅けつけて來たといふ順序で、娘達は意地わるい興味を以て、扉の外から成行を窺つて居たところなのだ。

廊下の中で、もう荒ぶつた春枝の聲と、三千代の咽び泣く聲が、私達の耳に聞えて來た。

杉浦について私が扉から、一歩三千代の室に踏入つた時の劇的光景を私は忘れる事が出來ない。

準一は眞青になつて、三千代を抱へるやうにして立つて居た。三千代は準一の抱擁に身を委せながら、風にも堪へないやうに泣崩れて居り、これに對して春枝も怒つた牝獅子のやうに眞蒼になつて激怒しながら、身體を震はして立つて居るのである。

『春枝、どうしたといふのだ』と、杉浦が靜かに聲をかけると、私達の不意の闖入に、更に怒りを增すかと思ひの外、却つて機會を捕へた事を喜ぶかのやうに、昂然として、

『あなた方はいゝところへ來て下すつた。あなた方もよく私の意志を知つて下さい。私はこの杉浦の家の主婦なのです。家庭の一切の責任は皆私が持つて居ます。杉浦の家庭では、私の命令は絕對なものです。その私はどんな場合に

も、三千代を準一の妻にする事は出來ないのです。準一は三千代に逢つてはいけないと固く云渡してあるのに、私の命令を守りません。三千代もその通りです。三千代にも同じ事を云渡してあるのに、この通り自分の居間へ準一を引入れて居るのです。若い娘が若い男を自分の居間へ引入れる、何といふ事でせう。準一も準一です。若い娘一人の室へ入るといふ、さういふ無作法な、卑しい眞似をする恥知らずには、私は育てなかつた筈です。私はもう此有樣のつゞく事を許す事は決して出來ません。さア、準一！ 私の前でそれは何といふ事です。早く三千代をお放しなさい！ 瀧口さんやお父さんの前を、何と思つてゐるのです』

『私は誰の前にも恥ぢません。私が支へなかつたら、三千代さんは倒れて了ひます。三千代さんを支へるためには、私は三本も四本もの腕がほしいとさへ思つて居ます。お母さん、あなたはなぜそんなに三千代さんに殘酷なのです。私が三千代さんの室に入つたのは惡い事かも知れません。併しお母さんは昨夜三千代さんが死を決した事も御存知ないのです。それを初めて知つた私は、三千代さんに一度逢はなければ居られなかつたのです。今だつて三千代さんが私と知つて、室へ入れまいとするのを、殆んど腕力で無理に入つて了つたのです。三千代さんが私を引入れたのでは決してありません。それだけは三千代さんの爲に辯明します』

『お前はその通り、何かといふとすぐ三千代をかばふけれども、私は何もかも見ぬいて居ます。それもこれもみんな三千代の仕業で、三千代がどんなにお前を誘惑して居るか、私は盲目ではありません』

『私は斷言します。三千代さんは私を誘惑するなどと決してそんな女ではありません。お母さんこそどうして、三千代さんの心の美しさに對して、そんなに盲目なのです。つまりお母さんは三千代さんに、一文の財産もないところから、そんなに冷酷になさるのです。財産が何です。三千代さんには、如何なる財産にも、また如何なる寶にも換へる事の出來ない、精神上の貴い財産を持つて居る事を、お母さんは御承知ないのです。三千代さんの持つて居る寶は、人間として誇る事の出來る最上のものです。……三千代さん、三千代さん、泣くには及びません。私は世界でどんなものを失つても、あなたを失ふ事は出來ないのです。あなたは私の唯一の財産です、寶玉です』

『いゝえ、準一さん、私はあなたを杉浦家から奪つて、あなたの前途を暗黒に導く事は出來ません。放して下さい。私を潔く杉浦家から立去らして下さい』

『いゝえ、いけません！ あなたが杉浦家を去るならば、私も一緒に去ります。私とあなたは一身同體です。あなたも私も別々には存在しません。二人は離れる事の出來ない、精神上の只一個の個體なのです』と、強い情熱を以て、彼はいやが上にも、三千代を抱擁した。彼の前には最早何ものもない烈しい意氣があつた。

私は心の中で『ブラボー！』を叫んだ。私達は開かれた扉から入つたまゝ、後を閉さなかつたので、三人の娘達は、また隱れた室を出て來て、扉の蔭から、聞耳を濟して居るらしい氣勢を私は感じた。

杉浦も私も口を插む機會を見出しかねて、只默々として、この劇的光景の推移に、眼をみはつた。

『準一、お前は何といふ恥知らずなのです。親の前で公然不義密通を遂げようといふのですね。そんな事は、私が死んでも許す事は出來ません。さア、早く三千代をお放しなさい！』

準一の方は今では冷靜になつて居て、

「お母さんこそ言葉をお愼しみ下さい。私達が何で不義密通です。私も三千代さんも少しも汚れては居ません。二人はたゞ純潔な愛を胸に抱いて居るだけです。私には私自身妻を擇ぶ權利があります。三千代さんは私の擇んだ妻です。三千代さんを妻にする事が許せぬと仰しやるなら、私が杉浦家を去るまでです』

『準一さん！　準一さん！』と、三千代は愬へるやうにして縋つた。

『いゝえ、あなたは默つていらつしやい。お母さん、私はたつた今からでもこの家を去ります』と、彼は母親を威嚇するのである。

春枝は狂氣のやうになつて、

『準一、お前は何といふ、呆れた不孝ものなのです。それでは杉浦の家を潰して了ふとお云ひなのかえ。そんな事がお前に出來るものならして御覧』と、叫んだが、彼女は全く手古摺つて了つたらしく、良人を見返ると、『準一をこんなにしたのは、みんなあなたが惡いからです。三千代のやうな恩知らずを、今まで大事に養つて居たのは、あなたへの義理を思へばこそではありませんか。それにあなたはいゝ氣になつて、準一と三千代の間を、あるがまゝに放任して置いたのです。みんなあなたが、そんなに仕向けていらつしやつたために、こんな事にもなつて了つたのです。何もかもあなたの責任です。準一を早く三千代の手から取返して下さい』

『今更そんな事を云つても仕方がない。それは何も私のせゐぢやアない。お前にこそ責任があるといふものだ』

『何ですつて？』と、春枝は恐ろしい權幕を見せて、良人に突きかゝらうとした。

私はいよ／＼自分の出る幕になつた事を感じた。

## 一四

『奥さん』と、その時私は一歩春枝の方に進んで、『私は御當家の問題には、素より門外漢ですが、三千代さんの關係者として、少し口を入れさして下さい。奥さんが三千代さんを、準一さんの妻に出來ぬと仰しやる第一の理由は、三千代さんに財産がないといふためでせうか』

春枝は苦りきつた顔をして、

『それも重なる理由の一ツだといふ事を、率直に申上げます、決してそればかりではありませんけれども……』

私はいよ／＼鹿爪らしく、

『なほ伺ひますが、奥さんはどうして三千代さんに、一文の財産もついて居ないと斷定なさるのでせうか

春枝は呆れるやうに、私の顔を見つめて、

『瀧口さん、これほど明らかな事はないではございませんか。三千代の父からは、三千代の養育料さへ送る／＼とばかりで、三千代の小遣ひにも足りない目腐金ほどのものほか送つて來て居ない位です。三千代は私が手鹽にかけてやらなかつたら、とうに乞食にでもなつて居る筈なのです。可愛い娘の養育料さへ送れなかつたものが、三千代に財産を殘す筈がどうしてございます。また山田さんが今度死ぬのでも、乞食のやうな死樣をしたのではありませんか』

『はゝア、奥さんはどうして山田が、乞食のやうな死樣をしたとお考へになるのでせうか』

『貧しいアパートメントで悲慘な死樣をしたとあなたも主人に仰しやつた事ではございませんか。今度あなたがいらつしやつたのでも、きつと殘した負債の後始末なのでございませう。その御相談なら、私の方は今までとても三千代にさん／＼つぎ込んだ上の事ですから、きつぱりとお斷りいたします。それは前以て申上げて

置きます』

『さうですか』と、私は冷たく笑つて、『どうも奥さんは大變な勘違ひをしていらつしやいます』

『何が勘違ひでございますの？』

私はそれには答へずに、

『奥さん、念のためなほ伺つて置きますが、もし山田が負債の代りに、却つて三千代さんに遺產を殘したといふやうな事があつた場合にも、準一さんとの結婚には、御不同意なのでせうか』

『それは不同意でございます。第一三千代のやうな嫁と、一日でも一緒に暮すことは出來ません』

『さうですか。それでは止むを得ません』と、私は首肯いて見せて、今度は杉浦に向ひ、『杉浦君、山田の後始末の事については、松の內以後にしてくれとのお話なので、差控へて居たのですが、どうも今こゝで持出さなければならん破目になつたやうだ。幸ひ三千代さんも居るから、聞いて貰ふことにしませう』

『瀧口君、一寸待つてくれ給へ、それはやはり松の內が濟んでからにしてはどうかね。何もこの席で持出さんでも……』

『いや、もうそれまで待つ譯にいかん。君は今僕の口から、それを聞いた事を決して後悔しないだらう。實は山田は可なり大きな遺產を殘して死んだのだ』

『えッ！』と、叫びは杉浦夫婦の口から漏れたが、併し春枝の口元には、遺產と云つても、多寡の知れたものだらうといふやうな輕侮の笑がすぐに漂ふのだつた。

準一と三千代は身體中を耳のやうにして、眼を瞠つた。

『そんな事はあるまい』と、やゝ間を置いて云つたのは杉浦である。

『正しく事實だ。山田はアラスカで大成功の緒につきかけて死んだのだ。それでも十萬弗――二十萬圓の遺產を三千代さんに殘して居る』

呻きに似たやうなざわめきが室の中に起つた。

『二十萬圓！』と、春枝は信じられないやうな表情をしたが、彼女の眼には火が點ぜられた。

『それはほんたうかね』と、流石に杉浦もせき込んだ。

『ほんたうとも。僕はそれを正金銀行の小切手にして、持つて來て居る。僕の使命はたゞ記念の髮の毛だけを、三千代さんに渡さうためではなかつたのだ』

『さうか』と、杉浦は太い息を吐いて、『あゝ、それで僕は救はれた』

救はれたのは決して杉浦一人のみではなかつた。準一は感激の極みに達したやうに、改めて力強く三千代を抱擁した。

三千代の顏はいふまでもなく、興奮と感謝に輝き渡つて、何とも云へぬ美しさを添へた。

扉の外で聞いて居た娘達は、一歩々々、眼に見えぬ力に引きずられるやうに、扉の中へ入つて來た。今は誰一人それに注意を惹かれるものがないほど、めい〳〵が興奮しきつて居た。

『二十萬圓！』

それは誰もの心を躍らせるに十分だつた。

『併し瀧口君、君はなぜ早速それを云つてくれなかつたのだ』と、杉浦が沈默を破つた。

『それは尤もだ。併し僕が早速それを云はずに居たのは、單に君から松の內以後にしてくれと云はれたためばかりではない。實は山田の臨終の言葉に、遺產を娘に渡す前、よく杉浦家の事情も見極めた上、最善の方法で娘に渡してくれと云はれたからだ』と、一寸掛引を云つて、『さういふ譯で、早速お知らせする事も出來なかつたのだが、さてこれをいよ〳〵三千代

さんにお渡しするには、死んだ山田を安心させるだけの保管方法が講ぜられた上でなければならぬ。それについてはいづれ篤と御相談の必要があると思ふが……』
『なるほど山田の注意は當然の事だ。それは君と確實な保管方法を講究する事にしよう。僕としては素より三千代の財産に、一文も手を觸れる考はない』
『この問題については、一切他人の容喙を許さぬつもりで居るから、その點は豫め了解して置いて貰はう』と、暗に春枝に對して、釘を打込んだのである。
『無論の事だ』と、杉浦は答へた。
『三千代さん』と、私は三千代に向つて、『今お聞きのやうな譯で、私は一刻も早くこの事をあなたにお知らせしたかつたのですが、お父さんのいまはの御注意もあり、旁々、よく杉浦家の事情を知るまではと、控へて居たのです。併しあなたに向つて、幸福の鍵を持つて來て居るからと、謎のやうな事を云つて居たのは、この事だつたのです。あなたは決して乞食の子でなかつた事がお分りでせう。立志傳中の立派な人物である山田君が、あなたのお父さんなのです。またあなたは杉浦家の厄介ものだと云つて、少しも肩身を狭くする理由はないのです』
　三千代は準一の腕を離れて、私の前へ來ると、
『小父様、私、何だかもう夢のやうでございます。そんな澤山なお金をどうしませう』と、彼女の大きな眼には、さま／＼の意味の感激の涙が湛へられて、それが頬に傳はり落ちるのである。
　續いて準一も、三千代と並んで私の前へ立つて、
『瀧口さん、僕は何と云つてあなたにお禮を申していゝか分りません。私の一家を救つて下すつたのはあなたです。私や三千代さんを救つて下さると仰しやつたお言葉が、今初めて明白となりました。私は財産には何の執着もありませんけれども、三千代さんが莫大の遺産を得られたといふ事に對しては、この上の滿足はありません。三千代さんの喜びを察するだけでも、私の感激が、どんなに大きいか、お察しを願ひます。母の感情もこの上はきつと柔ぐだらうと思ひます』と、母の方を一瞥して云つた。
　これ等の對話の間、あまりの興奮に、言葉を失つて居た春枝は、次第に彼女自身に歸ると共に、顔の形まで丸で崩れて來て、
『準一、よく云つておくれです。私は初めから、お前達に冷酷にあたる考はなかつたのです。三千代、お前はまア何といふ幸福ものだらう。私もお前のお父さんは冒險心の強い方だから、そんなことでもあればと、かね／＼成功を祈つて居たのです。私の祈りも叶つたのですから、私に取つてもこんな嬉しいことはありません』と、手の掌を返すやうな事を云出した。
　三千代は何とも挨拶をしかねて居ると、春枝は委細頓着なく、云ひつゞけた。
『三千代』と、調子まですつかり變つて了つて、『私はお前にどう思はれて居るか知らないけれども、岸子や繁子よりも、お前が可愛かつたのです。二人の實の娘達には、ひがみを起させまいとして、娘達の手前お前に辛く當るやうな事を見せないではなかつたけれども、私に取つては、大切な預り娘ではあるし、お前がどんなに大事だつたのでせう。お前には教育でも藝事でも、娘達以上に仕込んであります。お前をこんなに仕込んだ事は、誰の前でも誇るつもりです。去年お前が流感から肺炎になりかけた時などは、二人の娘達の中で、代つてくれたらと、心ではそんなに思つて居た位なのです』

『あら〳〵、お母さん、ひどいわ』と、叫んだのは、もうおほびらで室の中へ入り込んで了つて居た妹娘の繁子だつた。

『お前達、何です。あちらへ出ておいで。何よりもまづ三千代におあやまりなさい。お前達ではないかえ、いつも三千代の告口をお母さんにしておいでだつたのは……』

『あら〳〵、ひどいわ、お母さんてば……』

妹娘がぷり〳〵するに引きかへて、姉の岸子は姉だけに、すぐ打算的に變つて了つて、

『だつて私達もほんとにわるかつたのだわ。そんな氣ぢやアなかつたんだけれども……三千代さん、堪忍してね』と、三千代にお追從を云ひ始めるのである。

『ね、許して頂戴ね』と、母の豹變を體得して居る妹娘も、今ふくれた口の下から、すぐ姉を見習ふのだつた。

二人の娘が三千代を取卷いたので、浪江だけが、一人ぼつちに取殘されて了つた。

妻の、あまりにも淺ましい態度を、苦々しげに眺めた杉浦は『あれだ』と云はぬばかりに私の顏を見て、苦笑の目くばせをした。

『お母さん』と、準一は母に向つて、『それでは私と三千代さんに對するあなたのお考は、全くお變りになつた事かと思ひますが……』

『いゝえ、準一、お前はこれまで私を誤解して居たのです。私はたゞお前達を試して居ただけです。お前達がどんな障害にも打勝つほどの覺悟をお持ちの事が、私にも今ハッキリ分つた以上、私にどうする事が出來ます、それは快く許してやりますとも』

『まア、ひどいわ、小母さん！』と、泣出したのは浪江である。

浪江の泣聲に、初めて浪江の存在に氣のついた春枝は、流石にいゝ氣持はしなかつたのだらう、浪江の傍へ近づくと、すかすやうに肩に手をかけて、

『浪江さん、二人は私が許さないと云つたら、家を出て了ふでせう。私にはもうあなたにどうしてあげる事も出來ないのですからね。無い緣だと諦めて下さいね』と、猫撫聲で云つた。

浪江は涙にうるんだ怨みの顏を擧げると、

『私、今朝小母さんの仰しやつた事、みんな覺えて居ますよ。あんまりですわ。あんまりですわ。小母さんはそれで良心にお咎めにならないんですか。私、今更準一さんと結婚しようとは思ひませんわ。またちつとも準一さんや、三千代さんを怨みはいたしませんわ。ですけれど小母さんを怨みます。それだけを覺えていらつしやつて下さい。私、歸ります。もう小母さんにはお目にかゝりません！』

さう云放つと、春枝が引止めて辯解しようとするのもきかず、室を出て行つて了つた。誰の心にもこの娘に對する同情が湧いたに違ひなかつた。見るに見かねて、準一は浪江の後を追つて出て行つた。少女の傷けられた心は、幾分準一によつて慰められた事を、私は疑はない。

浪江に良心の存在を問はれて、少しく悄げて居る春枝に、私は言葉をかけた。

『奧さん、どうです。私は三千代さんを亞米利加へ連れて歸りませうか。あなたは一言も異論を仰しやらない筈でしたから……』と、油を絞ると、流石に穴へも入りたい樣子で、

『あなたまでそんなことを仰しやらないで下さい。でもあなたはお人がわるうございますわ。初めからそれを仰しやつて下されば、あんな事は申さない筈なんでございます』と、手もなくそれだけで片づけて了はうとした。

『假令三千代さんに財産があつても、三千代さんを嫁となすつては、一日も一緒に暮す事は出來ないと仰しやつた事も、お取消しですか』

『私、そんな事を申しましたかしら……つい心にもない事を云つて了ふ私の性分なものですから……』と、春枝はいよ〳〵窮した。私はこの上恥辱を與へる必要もないと思ふので、

『併し三千代さんに對するあなたのお考が、奇蹟的に一變したのは何より幸です。いや、杉浦家のためにお喜びします。山田の遺産の保管問題については、いづれ杉浦君とも相談して案を立てます。それに對してあなたが口をお入れになつては困りますから、その點は豫め御承知を願ひます』

『それはさうでございますとも、私どもは三千代の財産に手をつけようといふやうな考は、毛頭ございませんから……』と、頗る綺麗な事を云つた。

『まづ目出度く納まつて、これほど結構なことはない』と、杉浦は心よりの感謝の言葉を吐いて、三千代の肩に手を置くと、『お前も随分苦労をしたの、これからはお前の幸ひが開けるのだ』

『はい』と、杉浦を見上げた三千代の幸福にうるんだ眼は、美しく輝いた。

『今夜は家内中でお祝をすることとしよう』と、主人の發議に、人々の顔はみな一様に悦めき渡るのである。

それから後の事は、くだ〳〵しく記す必要はあるまい。この春準一の卒業を待つて、三千代と結婚する事も極れば、遺産の適當な管理方法も講ぜられたところで、私は何の思ひ残すところもなく杉浦家に暇を告げ、やがてまた亞米利加への旅に向つたのである。

（昭和元年作）

# 年譜に代へて

私は明治二十四年「大毎」に入社以來小說に筆を取り、今日やがて四十年に垂んとする文壇生活をして來たので、もし私の書いたあらゆる作品を年譜に書上げるなら、迚も尨大なものが出來上つて了ふだらう。けれども苦心してそんなものを作つて見たところで、愚にもつかぬ事だし、自分にだつて難有いものでもないから、大ざつぱなものを次々に拾ひ書して見よう。

一、明治三年十月、水戸の貧乏士族の家に生る。家貧なりしが故學歴は水戸中學卒業に止まる。卒業後小學教員奉職。

一、明治二十四年、大阪毎日新聞入社。

一、明治二十五年、新聞小說としての處女作『光子の秘密』を發表す。

一、明治二十六年より三十一年までの間に『白百合』『春日野若子』『みをつくし』『二人娘』『結ばぬ縁』等の長篇小說を、いづれも「大毎」紙上に、また「新聞賣子」及びハッガードものの『大探檢』『二人女王』等を譯載。

一、明治三十二年、『己が罪』を出す。

一、明治三十三年より五年までの間に、『若き妻』『七日間』(譯)『白衣婦人』(譯)等を出す。

一、明治三十六年、『乳姉妹』を出す。

一、明治三十七年に『夏子』を、同三十八年に『筆子』と『妙な男』を出す。

一、明治三十九年、『花賣娘』(譯)と『月魄』を、同四十年、『寒潮』を出す。

一、明治四十一年一月、佛蘭西留學、同四十三年、歸朝。

一、明治四十四年、『家なき兒』(譯)を出す。

一、大正二年『百合子』、大正四年『小雪』、大正五年『毒草』、大正七年『女の生命』、大正九年『女の行方』(譯)、大正十二年『彼女の運命』、大正十五年『小夜子』を出した。

以上記載の小說はいづれも「大毎」紙上、或は「大毎」「東日」兩紙上に同時連載したもののみである。

右の外大正三年以降、「婦人畫報」、「キング」、「現代」等に揭載したものに「お夏文代」(大正三年—五年)、『須磨子』(大正六年—七年)、「忘記念」(大正八年)、「戀を裏切る女」(大正九年 十年)、『妻の秘密』(大正十四年)、「三千代」(昭和二年)、「妖美人物語」(昭和三年、四年)、「井の底の人魚」(昭和三年)、「緋薔薇」(昭和四年)、「燃ゆる花」(昭和五年—六年)等がある。

短篇、隨筆その他については、一切省略する。

菊池幽芳記

昭和六年九月十五日印刷
昭和六年九月二十日發行

現代日本文學全集　第五十四篇

著者　長谷川如是閑　石橋思案　江見水蔭　小波
（著者　巖谷小波　江見水蔭　石橋思案　菊池幽芳）

發行者　山本實彦
東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地

印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市ケ谷加賀町一ノ一二

發兌
東京市芝區愛宕下町四丁目四〇番地
改造社
振替東京八四〇二番
電話芝(43) [illegible]

株式會社秀英舍印刷